岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第523集

六日市場・細田・接待館遺跡発掘調査報告書

一関遊水地事業衣川左岸築堤工事関連遺跡発掘調査

2008

国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

六日市場・細田・接待館
遺跡発掘調査報告書

一関遊水地事業衣川左岸築堤工事関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、一関遊水地事業衣川左岸築堤工事に関連して平成16、17年に発掘調査された奥州市衣川区六日市場遺跡、細田遺跡、接待館遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、奥州藤原氏の時代の遺物が各遺跡から出土し、衣川北岸地区において、12世紀平泉に関連する遺跡が存在することが明らかになりました。そして、接待館遺跡では、大規模な堀で囲まれた施設が検出され、かわらけが多数出土し、12世紀平泉における都市構造研究に関して新たな知見を得ることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、旧衣川村教育委員会、奥州市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成20年３月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長　武　田　牧　雄

例　　言

1　本報告書は、岩手県奥州市衣川区大字下衣川に所在する六日市場遺跡、細田遺跡、接待館遺跡の発掘調査成果を収録したものである。

2　各遺跡の所在地、岩手県遺跡台帳の遺跡番号、遺跡略号は以下のとおりである。

遺跡名	所在地	遺跡番号	遺跡略号
六日市場遺跡	岩手県奥州市衣川区大字下衣川字六日市場	NE65-2346	MKI-05
細田遺跡	岩手県奥州市衣川区大字下衣川字六日市場	NE65-2334	H T-05
接待館遺跡	岩手県奥州市衣川区大字下衣川字七日市場	NE65-2343	STK-04・05

3　本遺跡の調査は一関遊水地事業衣川左岸築堤工事に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。

4　各遺跡の野外調査面積及び調査期間、室内整理期間は以下の通りである。

遺跡名	野外調査面積	野外調査期間	室内整理期間
六日市場遺跡	5,500㎡	平成17年4月11日～9月29日	平成17年11月1日～18年3月31日
細田遺跡	5,400㎡	平成17年4月11日～9月29日	平成17年11月1日～18年3月31日
接待館遺跡	10,600㎡	平成16年10月1日～11月11日 平成17年6月1日～11月16日	平成16年11月12日～17年3月31日 平成17年11月1日～18年3月31日

5　野外調査、室内整理担当者は以下のとおりである。

遺跡名	野外調査担当者	室内整理担当者
六日市場遺跡	川又　晋・水上明博・木戸口俊子	川又　晋
細田遺跡	島原弘征・羽柴直人	島原弘征・羽柴直人
接待館遺跡 (平成16年度)	羽柴直人・鈴木博明・西澤正晴・川又　晋	鈴木博明・羽柴直人
接待館遺跡 (平成17年度)	羽柴直人・島原弘征 川又　晋・水上明博・横井猛志	羽柴直人・島原弘征

6　各種鑑定・分析は以下の機関に委託した。

石材鑑定……花崗岩研究会
炭化材の放射性炭素年代測定……株式会社加速器分析研究所
基準点測量……株式会社一測設計・㈱総合土木コンサルタンツ
出土鉄製品保存処理……岩手県立博物館
遺構デジタル調整図化、編集……株式会社セビアス
航空写真撮影……東邦航空株式会社

7　本報告書の執筆は「Ⅰ　発掘調査に至る経過」については国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所に原稿を依頼した。その他は羽柴、島原、川又が各担当部分を分担して執筆した。

8　野外調査及び、本報告書の執筆にあたり、次の方々からご指導・ご助言を賜った。（順不同、敬称略、所属平成17年度現在）

千田孝信（中尊寺貫首）、佐々木邦世、菅野成寛（中尊寺）、千葉啓一（衣川村教育長）、高橋厚（衣川村役場）、及川真紀（前沢町教委）、鹿野里絵（衣川村教委）、本澤慎輔（平泉町善阿弥）、及川司、菅原計二、鈴木江利子（平泉町教委）、斉藤邦雄、八重樫忠郎（平泉町世界遺産推進室）、中村紀顕（岩手日報）、宮本升平（胆江日々新聞）、大石直正（東北学院大学）、熊谷常正（盛岡大学）、菅野文夫（岩手大学）、入間田宣夫（東北芸術工科大学）、斉藤利男（弘前大学）、坂井秀弥（文化庁）、中井淳史（大手門大学）、稲野彰子（いろは写房）、岡陽一郎（青山学院大学）、田中哲雄（東北芸術工科大学）、玉井哲雄（千葉大学）、鳥山愛子（千葉大学大学院）、岡田茂弘（国立歴史民俗博物館）、瀬川司男（東和町ふるさと歴史館）、本堂寿一（北上市博物館館長）、大平聡（宮城学院女子大学）、小野正敏（国立歴史民俗博物館）、工藤雅樹（東北歴史博物館館長）、沼山源喜治（岩手考古学会）、井上雅孝（滝沢村埋文）　室野秀文（盛岡市遺跡の学び館）、西野修（矢巾町教育委員会）、吉井宏（東北福祉大）、岡田清一（東北福祉大）、桜井芳彦（紫波町教委）、山口博之（山形県埋文）、仁木宏（大阪市立大）、伊藤博幸（水沢市埋文）、吉田歓（米沢女子短大）、八木光則（盛岡中央公民館）、杉本宏（宇治市歴史資料館）、平川南（国立歴史民俗博物館）、宮本長二郎（東北芸術工科大学）、鈴木多聞（岩手日報）、村田晃一（宮城県教委）、大関真人（岩手県教委）、佐久間豊（水沢市教委）、高橋千晶（水沢市教委）、山口了紀（岩手県文化財保護指導員）、畠山篤雄（一関市教委）、藤澤良祐（愛知学院大学）、五味文彦（放送大学）、飯村均（福島県文化振興事業団）、大澤伸啓（足利市教委）、冨島義幸（滋賀県立大学）、前川佳代（京都造形芸術大学）河原純之（平泉遺跡群指導委員会）清水擴（東京工芸大学）　清水真一（東京文化財研究所）　牛川善幸（京都橘大学）、本中眞（文化庁）、国生尚（盛岡市）、稲野祐介、杉本良、小田嶋知世、岩田貴之、君島武史（北上市埋文）、竹下將男（宮古市教育委員会）、千葉信胤（平泉郷土館）、百瀬正恒（京都精華女子大学）、柳原敏昭（東北大学）、斉木秀雄（鎌倉考古学研究所）、樋口智志（岩手大学）

9　本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　遺跡の位置と環境……1
1　遺跡の位置と立地……1
2　周辺の遺跡……2

Ⅲ　調査の概要と整理方法……4
1　調査の経過……4
2　野外調査の方法……9
3　室内整理の方法……10
4　基本土層……10

Ⅳ　六日市場遺跡……13
1　検出された遺構……13
（1）調査区概観……13
（2）掘立柱建物跡……13
（3）溝　　跡……16
（4）波板状遺構……22
（5）土　　坑……22
六日市場遺跡柱穴観察表……26

2　出土遺物……29
（1）弥生土器……29
（2）石　　器……30
（3）土師器・須恵器……32
（4）12世紀のかわらけ……32
（5）12世紀の国産陶器……34
（6）12世紀の中国産磁器……36
（7）鉄製品……36
（8）その他の遺物……39
六日市場遺跡遺物観察表……39

Ⅴ　細田遺跡……41
1　検出された遺構……43
（1）調査区概観……43
（2）掘立柱建物跡……43
（3）土　　坑……93
（4）溝……108

（5）波板状遺構 …… 114
細田遺跡柱穴観察表 …… 117

2　出土遺物 …… 123
（1）縄文土器・石器 …… 123
（2）12世紀のかわらけ …… 124
（3）12世紀の国産陶器 …… 125
（4）12世紀の中国産磁器 …… 127
（5）中世の陶磁器 …… 127
（6）近世の陶磁器 …… 128
（7）金属製品 …… 135
（8）石製品 …… 137
（9）墓石 …… 143
細田遺跡遺物観察表 …… 143

Ⅵ　接待館遺跡 …… 146
1　検出された遺構 …… 146
（1）調査区概観 …… 146
（2）掘立柱建物跡 …… 149
（3）土坑 …… 219
（4）堀・溝 …… 229
（5）竪穴住居跡 …… 238
接待館遺跡柱穴観察表 …… 239

2　出土遺物 …… 248
（1）縄文土器・石器 …… 248
（2）土師器・須恵器・灰釉陶器 …… 248
（3）12世紀のかわらけ …… 250
（4）12世紀の国産陶器 …… 267
（5）12世紀の中国産磁器 …… 270
（6）中世、近世の陶磁器 …… 270
（7）金属製品 …… 273
（8）土製品 …… 275
（9）その他の遺物 …… 275
接待館遺跡遺物観察表 …… 276

Ⅶ　まとめ …… 282
1　六日市場、細田、接待館遺跡の変遷 …… 282
2　六日市場遺跡出土の黒曜石製石器について …… 283
3　近世六日市場屋敷について …… 284
4　「接待館」・「六日市場」の伝承について …… 287
5　六日市場、細田、接待館遺跡出土かわらけの年代観 …… 290
6　12世紀の接待館遺跡について …… 293
報告書抄録 …… 296

図版目次

第１図　遺跡位置図
第２図　周辺の遺跡……５
第３図　周辺の地形……７

六日市場遺跡

第４図六日市場遺跡遺構配置図……11
第５図　SB１……14
第６図　SB２……15
第７図　SB３……17
第８図　SD１（断面）……20
第９図　SD２（断面）、SD３、SD４……21
第10図　SX１、SX２……23
第11図　SK１～SK５……25
第12図　SD１、SD２・基本土層……27
第13図　弥生時代の土器（１～５）……29
第14図　石器（６～11）……31
第15図　土師器、須恵器（12～25）……33
第16図　12世紀のかわらけ（26～48）……35
第17図　12世紀の国産陶器（49～61）、中国産白磁（62）…37
第18図　鉄製品（63～74）……38

細田遺跡

第19図　細田遺跡遺構配置図……41
第20図　SB１、SB２……44
第21図　SB３……46
第22図　SB４……47
第23図　SB５……49
第24図　SB６……50
第25図　SB７……52
第26図　SB８……53
第27図　SB９……54
第28図　SB10……55
第29図　SB11……57
第30図　SB12……59
第31図　SB13……60
第32図　SB14……61
第33図　SB15……62
第34図　SB16……63
第35図　SB17、SB18……65
第36図　SB19……66
第37図　SB20……68
第38図　SB21……69
第39図　SB22……70
第40図　SB23……71
第41図　SB24……73
第42図　SB25……74
第43図　SB26……75
第44図　SB27……77
第45図　SB28、SB29……78
第46図　SB30……79
第47図　SB31……80
第48図　SB32（１）……82
第49図　SB32（２）……83
第50図　SB33……84
第51図　SB34……85
第52図　SB35……86
第53図　SB36……87
第54図　SB37……89
第55図　SB38、SB39……90
第56図　SB40……91
第57図　SB41……92
第58図　SK１……94
第59図　SK２～SK８……95
第60図　SK９～SK16……99
第61図　SK17～SK26……104
第62図　SK27～SK29……106
第63図　SD１……109
第64図　SD２、SD３、SD４、SD５……110
第65図　SD６、SD７、SD８……112
第66図　SX１、SX２……115
第67図　細田遺跡基本土層……116
第68図　縄文時代の土器、石器（１～７）……123
第69図　12世紀のかわらけ（８～19）……124
第70図　12世紀の国産陶磁器（20～40）……126
第71図　中国産磁器・中世の国産陶磁器（41～47）……127
第72図　近世の陶器①（48～71）……130
第73図　近世の陶器②（72～86）……131
第74図　近世の陶器③（87～91）……132
第75図　近世の磁器①（92～109）……133
第76図　近世の磁器②（110～126）……134
第77図　金属製品（127～144）……136
第78図　石製品（145～150）……137
第79図　近世の墓石①……138
第80図　近世の墓石②……139
第81図　近世の墓石③……140
第82図　近世の墓石④……141
第83図　近世の墓石⑤……142

接待館遺跡

第84図　接待館遺跡遺構配置図……147
第85図　SB１……149
第86図　SB２……150
第87図　SB３……152
第88図　SB４……154
第89図　SB５……155
第90図　SB６……157
第91図　SB７……158
第92図　SB８……159
第93図　SB９……160
第94図　SB10……161
第95図　SB11……162
第96図　SB12……164
第97図　SB13（１）……165
第98図　SB13（２）……166
第99図　SB14……167
第100図　SB15……168
第101図　SB16……169
第102図　SB17（１）……172

第103図　SB17（２）…… 173
第104図　SB18、19…… 174
第105図　SB20（１）…… 176
第106図　SB20（２）…… 177
第107図　SB21…… 179
第108図　SB22（１）…… 180
第109図　SB22（２）…… 181
第110図　SB24…… 182
第111図　SB25…… 184
第112図　SB26…… 185
第113図　SB27…… 186
第114図　SB28（１）…… 187
第115図　SB28（２）、SB29（１）…… 188
第116図　SB29（２）…… 189
第117図　SB30…… 191
第118図　SB31…… 192
第119図　SB32…… 193
第120図　SB33…… 195
第121図　SB34…… 196
第122図　SB35…… 197
第123図　SB36…… 198
第124図　SB37…… 199
第125図　SB38…… 200
第126図　SB39…… 201
第127図　SB40…… 202
第128図　SB41…… 203
第129図　SB43…… 204
第130図　SB44…… 205
第131図　SB45（１）…… 206
第132図　SB45（２）…… 207
第133図　SB46…… 209
第134図　SB47…… 210
第135図　SB48…… 211
第136図　SB49…… 212
第137図　SB50…… 213
第138図　SB51…… 214
第139図　SB52、SB53…… 216
第140図　SB54、SB55…… 217
第141図　SK１～SK４…… 219
第142図　SK５～SK13…… 224
第143図　SK15～SK22…… 225
第144図　SD１（１）…… 231
第145図　SD１（２）…… 232
第146図　SD２…… 234
第147図　SD３…… 236
第148図　SD４、SD６…… 237
第149図　縄文時代の土器、石器（１、２）…… 248
第150図　土師器、須恵器、灰釉陶器（101～117）…… 249
第151図　12世紀のかわらけ①（1001～1020）…… 252
第152図　12世紀のかわらけ②（1021～1037）…… 253
第153図　12世紀のかわらけ③（1038～1047）…… 254
第154図　12世紀のかわらけ④（1048～1078）…… 255
第155図　12世紀のかわらけ⑤（1079～1098）…… 256
第156図　12世紀のかわらけ⑥（1099～1116）…… 257
第157図　12世紀のかわらけ⑦（1117～1131）…… 259
第158図　12世紀のかわらけ⑧（1132～1146）…… 260
第159図　12世紀のかわらけ⑨（1147～1154）…… 261
第160図　12世紀のかわらけ⑩（1155～1180）…… 262
第161図　12世紀のかわらけ⑪（1181～1201）…… 263
第162図　12世紀のかわらけ⑫（1202～1220）…… 264
第163図　12世紀のかわらけ⑬（1221～1243）…… 265
第164図　12世紀のかわらけ⑭（1244～1250）…… 266
第165図　12世紀の国産陶器（常滑）（2001～2028）…… 268
第166図　12世紀の国産陶器（渥美・須恵器系）
（2029～2046）…… 269
第167図　12世紀の中国産器（3001～3009）…… 270
第168図　中世、近世の陶磁器（4001～4013）…… 271
第169図　鉄製品①（5001～5014）…… 272
第170図　鉄製品②（5015～5023）…… 273
第171図　銭貨・銅製品・土製品（6001～6011）…… 274

付図１　六日市場遺跡全体図
付図２　細田遺跡全体図
付図３　接待館遺跡全体図

写真図版目次

写真図版１　航空写真（衣川地区）…… 299
写真図版２　航空写真（衣川地区・接待館）…… 300
写真図版３　航空写真（接待館遺跡・細田・六日市場遺跡）
…… 301
写真図版４　接待館遺跡SD３かわらけ出土状況…… 302

六日市場遺跡

写真図版５　SB１～３平面…… 303
写真図版６　SK１～４…… 304
写真図版７　SD１（１）・２（１）…… 305
写真図版８　SD１（２）…… 306
写真図版９　SD１（３）・２（２）…… 307
写真図版10　SD２（３）・３…… 308
写真図版11　SD４・SX１・２…… 309
写真図版12　SB１・２柱穴…… 310
写真図版13　SB３柱穴・基本土層…… 311
写真図版14　調査区全景等…… 312
写真図版15　弥生土器（１～５）・石器（６～11）…… 313
写真図版16　土師器・須恵器（12～25）、かわらけ①（26～32）
…… 314
写真図版17　かわらけ②（33～44）…… 315
写真図版18　かわらけ③（45～48）、国産陶器（49～60）316
写真図版19　中国産磁器（61）、鉄製品（62～73）…… 317
写真図版20　馬骨・歯…… 318

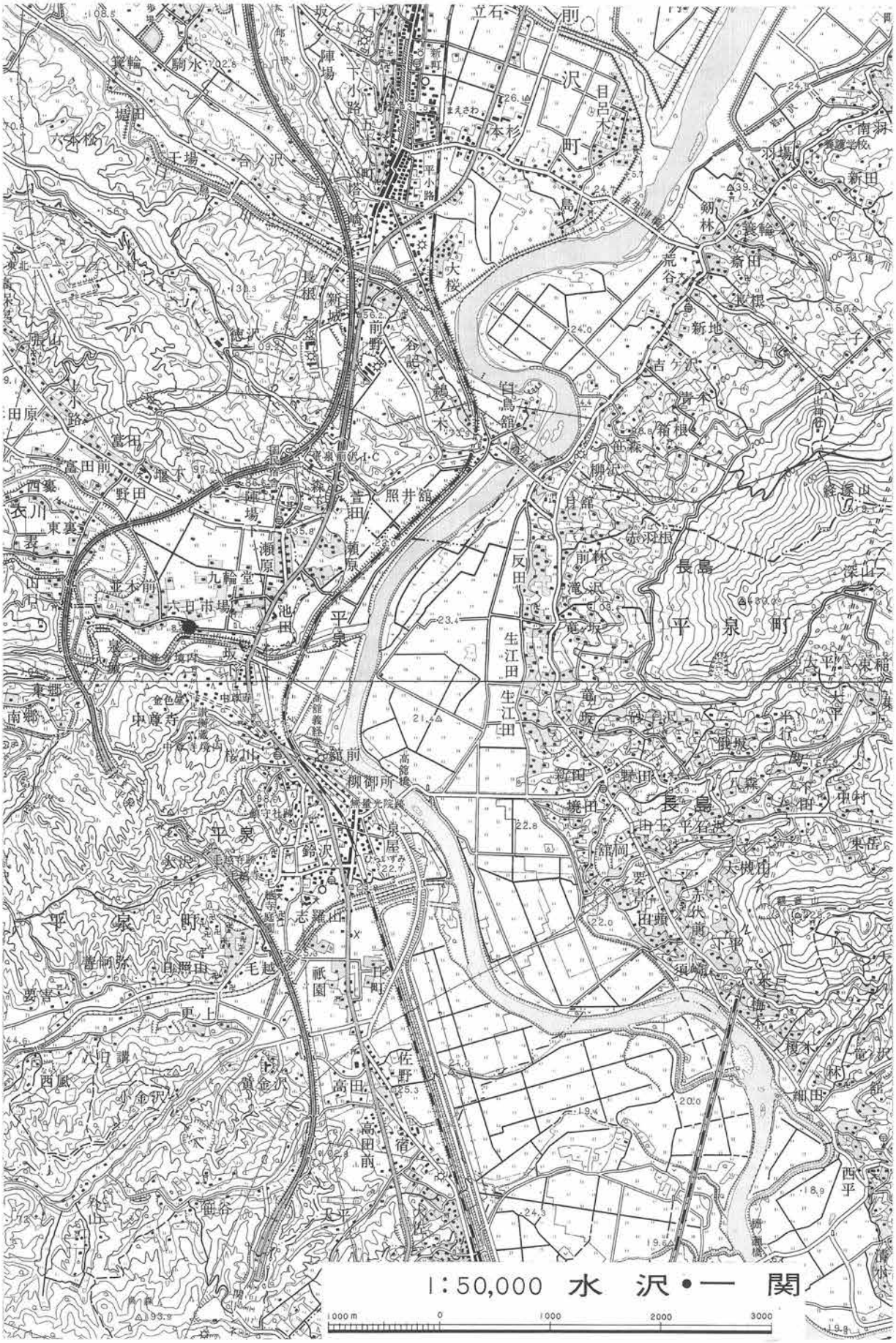
細田遺跡

写真図版21　SB１・２・４平面…… 319
写真図版22　SB５・６・８平面…… 320
写真図版23　SB９～11平面…… 321
写真図版24　SB12・13平面…… 322
写真図版25　SB14～16平面…… 323
写真図版26　SB17～19平面…… 324

写真図版27　SB20・22・23平面 …… 325
写真図版28　SB24～26平面 …… 326
写真図版29　SB27～29平面 …… 327
写真図版30　SB30～32平面 …… 328
写真図版31　SB33～35平面 …… 329
写真図版32　SB36～38平面 …… 330
写真図版33　SB39～41平面 …… 331
写真図版34　掘立柱建物平面（1）…… 332
写真図版35　掘立柱建物平面（2）…… 333
写真図版36　掘立柱建物平面（3）…… 334
写真図版37　掘立柱建物平面（4）…… 335
写真図版38　掘立柱建物平面（5）…… 336
写真図版39　土坑（1）…… 337
写真図版40　土坑（2）…… 338
写真図版41　土坑（3）…… 339
写真図版42　土坑（4）…… 340
写真図版43　土坑（5）…… 341
写真図版44　土坑（6）…… 342
写真図版45　溝跡（1）…… 343
写真図版46　溝跡（2）…… 344
写真図版47　溝跡（3）…… 345
写真図版48　SX1・2平面 …… 346
写真図版49　SX1・2、村道北平面、基本土層 …… 347
写真図版50　SB1～4柱穴 …… 348
写真図版51　SB5柱穴 …… 349
写真図版52　SB6・7柱穴 …… 350
写真図版53　SB8・9柱穴 …… 351
写真図版54　SB9・11柱穴 …… 352
写真図版55　SB12柱穴 …… 353
写真図版56　SB12・13柱穴 …… 354
写真図版57　SB14～16柱穴 …… 355
写真図版58　SB16～18柱穴 …… 356
写真図版59　SB19～21柱穴 …… 357
写真図版60　SB22～26柱穴 …… 358
写真図版61　調査前風景・現地説明会…… 359
写真図版62　縄文土器・石器（1～7）、かわらけ（8～19）…… 360
写真図版63　12世紀・中世の陶磁器（20～47）、近世陶器①（48～54）…… 361
写真図版64　近世陶器②（55～82）…… 362
写真図版65　近世陶器③（83～92）、近世磁器①（93～98）…… 363
写真図版66　近世磁器②（99～127）…… 364
写真図版67　金属製品（128～145）…… 365
写真図版68　石製品（146～151）…… 366

接待館遺跡

写真図版69　SB35～37平面 …… 367
写真図版70　SB38・39・41平面 …… 368
写真図版71　掘立柱建物平面（1）…… 369
写真図版72　土坑（1）…… 370
写真図版73　SB1～3平面 …… 371
写真図版74　SB4～6平面 …… 372
写真図版75　SB9～11平面 …… 373
写真図版76　SB12～14平面 …… 374
写真図版77　SB15・17・18 …… 375
写真図版78　SB19～21平面 …… 376
写真図版79　SB22・24・26平面 …… 377
写真図版80　SB27・29・30平面 …… 378
写真図版81　SB31～33平面 …… 379
写真図版82　SB34・現地説明会 …… 380
写真図版83　掘立柱建物平面（2）…… 381
写真図版84　掘立柱建物平面（3）…… 382
写真図版85　掘立柱建物平面（4）…… 383
写真図版86　掘立柱建物平面（5）…… 384
写真図版87　土坑（2）…… 385
写真図版88　土坑（3）…… 386
写真図版89　土坑（4）…… 387
写真図版90　土坑（5）…… 388
写真図版91　SD1（1）・3（1）…… 389
写真図版92　SD1（2）…… 390
写真図版93　SD1（3）…… 391
写真図版94　SD1（4）・2 …… 392
写真図版95　SD3（2）…… 393
写真図版96　SD4・6（1）…… 394
写真図版97　SD6（2）…… 395
写真図版98　SB34柱穴他 …… 396
写真図版99　縄文土器・石器（1、2）、土師器・須恵器（101～117）…… 397
写真図版100　12世紀のかわらけ①（1001～1029）…… 398
写真図版101　12世紀のかわらけ②（1030～1042）…… 399
写真図版102　12世紀のかわらけ③（1043～1064）…… 400
写真図版103　12世紀のかわらけ④（1065～1084）…… 401
写真図版104　12世紀のかわらけ⑤（1085～1097）…… 402
写真図版105　12世紀のかわらけ⑥（1098～1109）…… 403
写真図版106　12世紀のかわらけ⑦（1110～1124）…… 404
写真図版107　12世紀のかわらけ⑧（1125～1139）…… 405
写真図版108　12世紀のかわらけ⑨（1140～1151）…… 406
写真図版109　12世紀のかわらけ⑩（1152～1166）…… 407
写真図版110　12世紀のかわらけ⑪（1167～1180）…… 408
写真図版111　12世紀のかわらけ⑫（1181～1191）…… 409
写真図版112　12世紀のかわらけ⑬（1192～1203）…… 410
写真図版113　12世紀のかわらけ⑭（1204～1215）…… 411
写真図版114　12世紀のかわらけ⑮（1216～1228）…… 412
写真図版115　12世紀のかわらけ⑯（1229～1242）…… 413
写真図版116　12世紀のかわらけ⑰（1243～1250）…… 414
写真図版117　12世紀の国産陶器①（2001～2035）…… 415
写真図版118　12世紀の国産陶器②（2036～2046）、12世紀の中国産磁器（3001～3009）…… 416
写真図版119　中、近世の陶磁器（4001～4013）…… 417
写真図版120　鉄製品（5001～5023）…… 418
写真図版121　金属製品（6001～6008）、土製品（6009～6011）…… 419
写真図版122　SD1西出土人の歯 …… 420
写真図版123　SD1西出土馬歯、骨 …… 421


1:50,000 水沢・一関
1000m
0
1000
2000
3000
平泉町
長島
平泉
大桜
白鳥舘
照井舘
瀬原
池田
六日市場
九輪堂
中尊寺
桜川
鎧前
柳御所
泉屋
鉛沢
志羅山
祇園
高田
佐野
宿
高田前
大平
生江田
二反田
前林
滝沢
竜坂
赤羽根
長根
新地
吉ケ沢
青木
箱根
柳沢
目舘
荒谷
剣林
新田
羽場
南羽
長島
平泉町
平泉
平泉町
大平
中村
東岳
大槻田
赤伏前
須崎
西平
細田
榎木
竜沢

第1図　遺跡位置図

Ⅰ　調査に至る経過

六日市場遺跡、細田遺跡、接待館遺跡は、北上川上流改修一関遊水地事業・衣川左岸上流地区の事業区域内に位置しているため、当該事業の施行にともない、発掘調査を実施することとなったものである。

一関遊水地事業・衣川左岸上流地区は、奥州市衣川区大字下衣川の延長約1.4kmの築堤工事等行うこととし、平成15年度に用地取得を始めとし、事業着手しており、周辺地域を洪水から守るため堤防整備を進めていくこととしている。

当該事業区域の埋蔵文化財包蔵地については、当該事業の施行主体である岩手県河川国道事務所の依頼を受け、平成15・16年度に岩手県教育委員会が試掘調査を実施しており、その結果を踏まえ岩手県教育委員会事務局との協議により平成16年度・17年度財団法人岩手県文化振興事業団に調査を委託することとなったものである。　（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と立地

六日市場遺跡、細田遺跡、接待館遺跡（以下３遺跡と称する）は岩手県奥州市衣川区大字下衣川に隣接して所在する。平成16・17年度の野外調査時は胆沢郡衣川村に属していたが、平成18年２月に水沢市、江刺市、胆沢町、前沢町との市町村合併により、奥州市衣川区に区分されることとなった。奥州市衣川区は奥州市の南端に位置し、西側と北側の大部分は奥州市胆沢区、東側と北側の一部は奥州市前沢区、南側は西磐井郡平泉町に接している。衣川区の東部には国道４号線と東北自動車道が南北に縦貫し、交通の要衝をなす地域である。

衣川区は衣川上流部の上衣川地区と下流の下衣川地区に大きく分けられる。３遺跡は下衣川地区に属する。３遺跡は東から六日市場遺跡、細田遺跡、接待館遺跡の順に連続して並ぶ。六日市場遺跡の東端から接待館遺跡の西端までは約480mの距離がある。中央に所在する細田遺跡は、旧衣川村役場から南東約５km、衣川区の最東端に近い場所に位置する。各遺跡の調査区は衣川の北岸に接し、調査前の標高は六日市場遺跡が約24.0m、細田遺跡と接待館遺跡が約24.5mを図る。調査区に接する衣川の水面は標高約18.0mで、比高差は６.0～6.5m程である。調査前の状況はいずれの遺跡も概ね平坦な地形で、宅地、畑地、水田として利用されていた。細田遺跡の調査区西部のグリッド杭ⅥＮ０ａ（Ｘ＝－110200.00m　Ｙ＝23150.000m）の緯度は、北緯39°00′25″、経度は東経141°06′02″（世界測地系）である。

３遺跡は衣川北岸の同一の河岸段丘面に立地する。六日市場遺跡の東端は氾濫平野に接する段丘崖となっている。また接待館遺跡の南側は衣川の近年の浸食により急峻な崖になっており、衣川に直接面する。平成14年７月の台風６号に伴う洪水では、六日市場遺跡東約400mに位置する衣川に架かる衣川橋、国道４号線が冠水し通行が遮断されている。３遺跡の調査区内の大半は辛うじて冠水を免れており、冠水した遺跡周辺の氾濫平野と、遺跡の立地する河川段丘の地形区分の違いが現れた結果となっている。

2　周 辺 の 遺 跡

奥州市衣川区は11世紀の奥六郡の豪族安倍氏、12世紀の平泉文化を築いた奥州藤原氏に関する伝承が多数存在する地域である。六日市場、細田、接待館遺跡が位置する下衣川地区は、安倍氏、奥州藤原氏の伝承が衣川区の中でも特に濃密に分布する地域である。これらの伝承地のほとんどは、実際に当概期の遺跡であるか否か不明であるが、12世紀の居館と伝承される接待館遺跡では12世紀のかわらけが出土しており、伝承の信憑性の高さを示唆している。ここでは３遺跡が所在する下衣川地区の伝承地を含めた遺跡について記載する。掲載した遺跡地図（第２図）は、昭和63年刊行の「下衣川地区遺跡詳細分布調査報告書」（衣川村教育委員会1988　岩手県衣川村文化財報告書第３集）に掲載の地図に加筆したものである。また遺跡の内容もこの分布調査報告書を参照した部分が多い。この遺跡分布調査は、遺物、遺構が確認されていない伝承地についても取り上げており、下衣川地区における伝承を知る上で良好な資料である。本文中の遺跡番号はこの分布調査報告書の遺跡番号をそのまま用いている。またこの分布調査報告書に掲載されず、近年遺跡登録され、発掘調査がおこなわれた「渕端遺跡」、「細田遺跡」「押切遺跡」についてそれぞれＡ、Ｂ、Ｃの記号を付し地図上に示した。

番号	遺跡名	種　別	時　代	伝承など
9	向舘	館跡？	不明	安倍頼時の一族の居館
10	湯葉	湯場	近世～昭和初期	鉱泉の湧水場所　昭和初期まで営業
11	八日市場	市場跡？	不明	(奥州)藤原氏全盛の頃の市場跡
15	上西谷坊屋敷	屋敷跡	不明	中尊寺の属寺である上西谷坊が所在したとされる。
16	石倉・東裏	散布地	縄文時代晩期	縄文時代晩期の遺物を包含する遺跡。東北道自動車建設で発掘調査がおこなわれる。岩手県教育委員会1980「東北自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅵ」
17	姥神	祠跡	不明	義経が平泉に下向の時、北の方が出産した若君を育てた乳母(姥)を祭った社と伝承。石祠、破損した石鳥居がある。
18	北館	集落、散布地	縄文時代・古代・近世	東北道自動車道建設で発掘調査がおこなわれる。岩手県教育委員会1980「東北自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ」
19	大手門	大手門？	不明	衣川柵に安倍頼時が居住した時の大手(門)と伝承
20	横道下	散布地	縄文時代	縄文土器、石器が表採される。
21	舘(山口舘)	居館跡	不明	安倍頼時の居館と伝承される。昭和62年に衣川村教育委員会により発掘調査、柱穴、溝と縄文土器が出土
22	小松舘(小松柵)	居館跡	不明	安倍貞任の叔父官照の居館とされる。
23	衣川関	関跡？	不明	東北道自動車建設で発掘したが、遺構、遺物は検出されず。報告書では「何故本遺跡の名称がかくの如きものになったか不明である。」としている。岩手県教育委員会1980「東北自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ」
24	松下	散布地	縄文時代	開墾の際に多量の縄文土器が出土したとされる。
25	経塚(南蘇塚)	経塚	不明	塚が所在し、「南蘇坊」という行脚僧が納経した経塚とされる。五大種子が刻まれる碑が立っている。
26	琵琶柵	柵跡？	不明	安倍貞任の庶兄成道の居城とされる。
27	桜瀬	伝承地	不明	安倍頼時が衣川岸に桜樹を植樹した場所とされる。
28	衣川柵	居館跡	不明	並木屋敷遺跡とも称される。安倍氏累代の居城とされる。北東に土塁が残存している。
29	大手	大手門？	不明	衣川柵に安倍頼時が居住した時の大手(門)と伝承
30	轡森	伝承地	不明	安倍貞任が轡を埋めた所、あるいは藤原秀衡が轡を置いた所と伝承される。
31	御蔵場	御蔵場	近世	年貢米を集積、出荷する近世下衣川村の御蔵場
32	渡船場	渡船場	不明	衣川岸～水中に柱脚を打ち込んだ桟橋跡がある。時期は不詳。昭和49年に岩手大学により調査　衣川村教育委員会1974「衣川渡船場跡―岩手県胆沢郡衣川村所在―」

番号	遺跡名	種　別	時　代	伝承など
33	長者ヶ原廃寺	寺院跡	古代	礎石跡が残存する。伝承では金売り吉次の「吉次屋敷」とされる。昭和33以来の発掘調査で寺院跡と確認されつつある。平成17年に国指定史跡　衣川村教育委員会2004「長者ヶ原廃寺跡発掘調査報告書―第６次調査―」ほか
34	宿遺跡（上宿）	宿場跡	不明	安倍氏全盛の頃道路を挟んで宿場を設け、それぞれ上宿、下宿と称したとされる。
35	七日市場	市場跡	不明	安倍氏時代の上宿、下宿が(奥州)藤原氏の時代になって、六日市場、七日市場、八日市場と変化したとされる。
36	衣の関道	関遺跡	12世紀	安倍氏、奥州藤原氏の時代の交通路と伝承される。平成17年度に㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターで調査
37	接待館	居館跡	12世紀	藤原秀衡の母の居館と伝承　12世紀のかわらけが採集されている。平成16、17年度に㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターで調査　本報告書で報告
38	下宿	宿場跡	不明	安倍氏全盛の頃道路を挟んで宿場を設け、それぞれ上宿、下宿と称したとされる。
39	六日市場	市場跡	12世紀	安倍氏時代の上宿、下宿が(奥州)藤原氏の時代になって、六日市場、七日市場、八日市場と変化したとされる。平成17年度に㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターで調査　本報告書で報告
40	室の樹	伝承地	不明	奥州藤原氏の時代、樹木を植栽し、庭園にしたと伝承される
41	池の辺坊屋敷	屋敷跡	不明	中尊寺の属寺「池の辺坊」が所在した場所とされる
42	九輪塔	墳墓	不明	藤原清衡が建立した塔の跡、又は安倍頼時の墓所と伝承される
43	枡形森	鐘楼跡か	不明	藤原秀衡の時代に設置された鐘楼跡とされる。平成14年度に大谷女子大学博物館による発掘調査がおこなわれたが、時期、性格を特定することはできなかった。大谷女子大学博物館　2003「衣川・枡形森遺跡―発掘調査報告書―」
44	陣場山	陣場跡？	不明	前九年合戦の際に源頼義が陣所にした場所とされる。
45	鉄砲場	鉄砲場跡	近世	瀬原足軽の武術の練習場である。また前九年合戦の際の源頼義の陣場との伝承もある。
46	木戸側擬定地	厩舎跡？	不明	平泉全盛の頃、乗馬数百頭を繋いだ厩跡とされる。
47	足軽屋敷	屋敷跡	近世	明暦２年(1656)、奥州街道沿いに短冊状に屋敷割された足軽組37人の屋敷跡

※１～８、12～14は今回掲載の地図範囲外にあり、省略

A	渕端	集落	縄文中期	平成17年度に衣川村教育委員会で発掘調査
B	細田	集落	12世紀、近世	平成17年度に㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターで調査　本報告書で報告
C	押切	集落	12世紀、近代	平成16年度に㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターで調査　現地表下4.5mで12世紀のかわらけ出土　近代の鍛冶跡検出 ㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2007「押切遺跡発掘調査報告書」第494集

Ⅲ　調査の概要と整理方法

1　調 査 の 経 過

平成16年度接待館遺跡

平成16年９月下旬に接待館遺跡の調査地の確認、プレハブ用地の選定をおこなっている。10月１日（金）に押切遺跡の発掘調査事務所から発掘調査機材を積み込みし、接待館遺跡事務所に機材を搬入した（担当、鈴木、羽柴)。同日より重機による表土掘削を開始した（10月27日（水）まで)。10月７日より遺構検出を開始し、10月13日（水）調査区西側において大規模なＳＤ１を検出する。10月18日（月）より西澤、川又調査員、水沢市杉の堂遺跡より接待館遺跡に合流する。10月22日（金）より、規模・時代を探るためＳＤ１にトレンチを設置し掘り下げを開始する。同日、文化庁記念物課坂井秀弥主任調査官来跡。10月28日（木)、平泉遺跡群調査指導委員会視察。10月29日（金）までにＳＤ１トレンチの掘り下げ、断面実測終了。11月４日（木）より次年度調査再開に向けて、現場の養生を開始する。11月10日（水）までに養生作業を終了し、11月11日（木）機材を撤収し、16年度の野外作業を終了した。

平成17年度六日市場遺跡

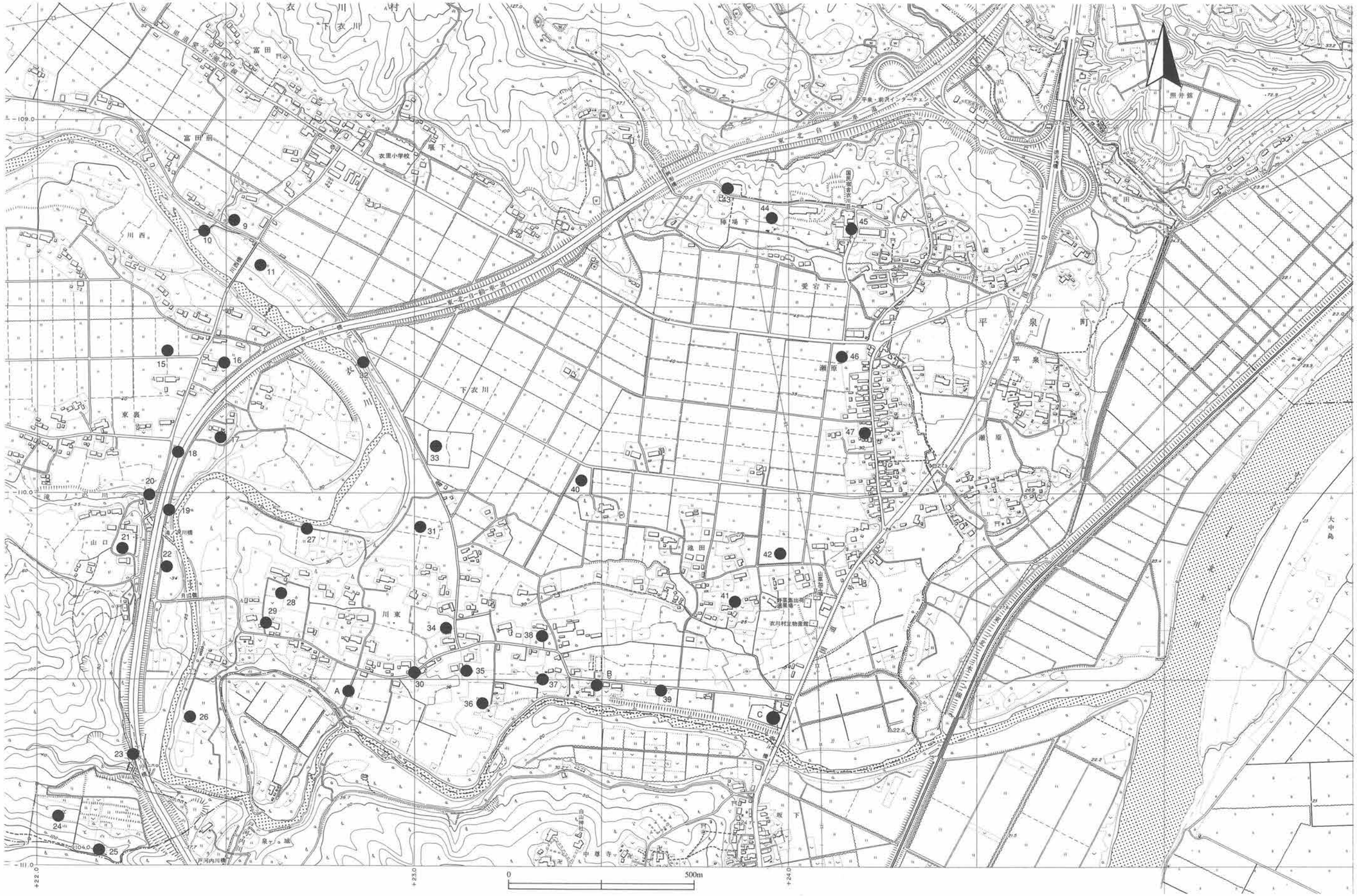
平成17年４月11日(月)、埋蔵文化財センターより機材を調査事務所に搬入する。担当は川又・水上・木戸口である。４月12日（火）より調査区内の雑物撤去をおこなう。４月18日（月）より重機による表土掘削を開始する（５月13日（金）まで)。４月26日（火）より、人力による遺構検出、精査を開始する。６月30日（木）で村道南側の調査範囲を終了した。調査中断を挟み、９月12日（月）より六日市場の村道北側調査区に着手し、９月29日（木）に終了した。

平成17年度細田遺跡

平成17年４月11日（月)、埋蔵文化財センターより機材を調査事務所に搬入する。細田遺跡担当は島原・羽柴である。４月12日（火）より調査区内の雑物撤去をおこなう。４月18日（月）より重機による表土掘削を開始する（５月13日（金）まで)。４月26日（火）より、人力による遺構検出、精査を開始する。８月11日（木)、細田遺跡村道南側分野外調査終了。調査中断を挟み、９月12日（月）より細田遺跡の村道北側調査区着手し、９月29日（木）に終了。これで、村道部分を除く細田遺跡の調査対象範囲の野外調査は終了した。

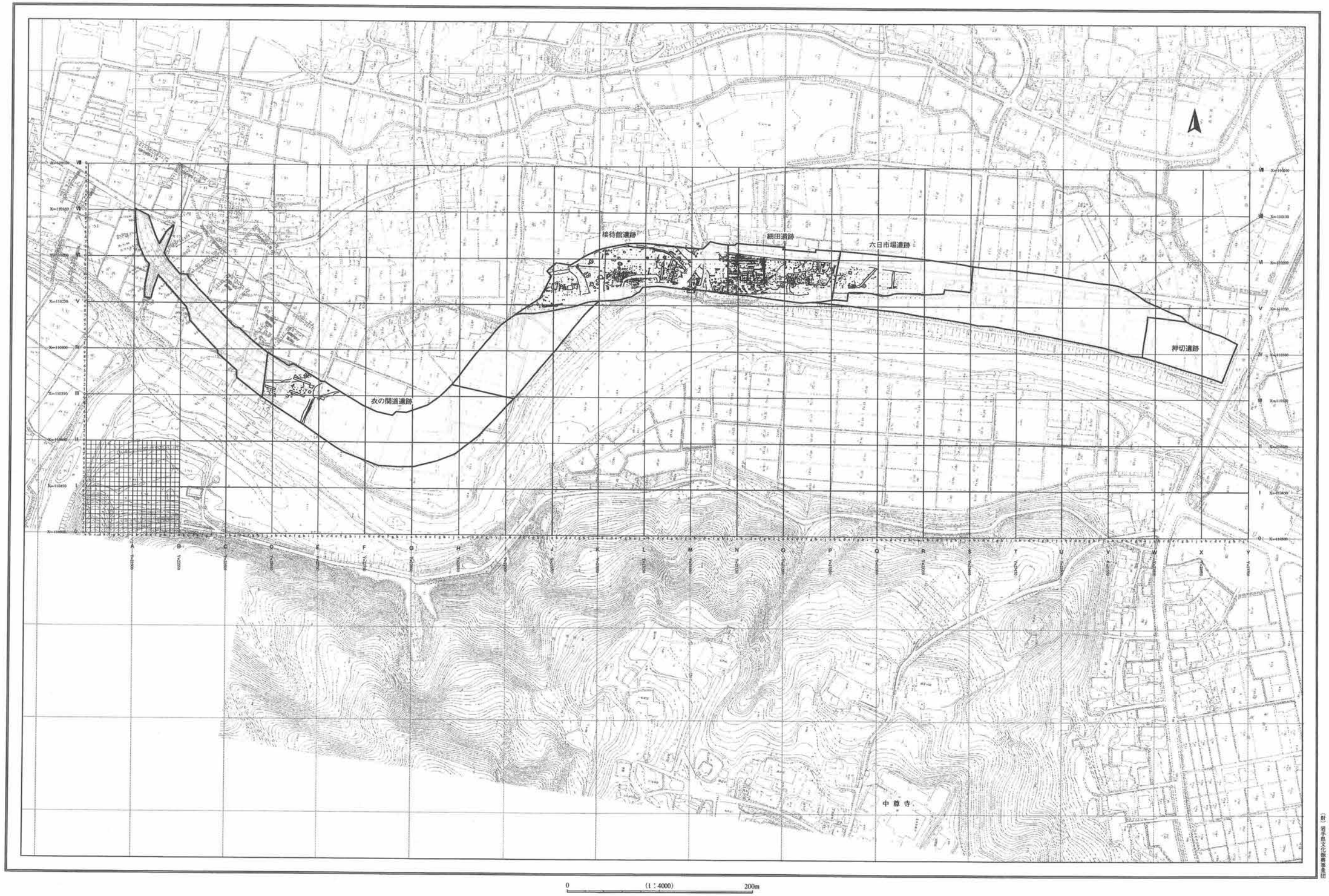
平成17年度接待館遺跡

平成17年６月１日（水)、六日市場、細田遺跡遺構精査と並行して、接待館遺跡の重機による表土剥ぎを開始する（６月17日（金）まで)。６月20日（月）から、人力による検出作業を開始する。同日、横井期限付職員合流。６月22日（水）より遺構精査開始。７月８日（金）平泉遺跡群調査指導委員会視察。９月15日（木）よりキャリアダンプ通路の表土剥ぎ作業を、重機でおこなう（９月28日（水）まで)。10月13日（木）航空写真撮影をおこなう。10月14日（金）平泉遺跡群調査指導委員会視察。10月15日（土)、六日市場、細田遺跡も対象に含めた現地説明会を開催する。参加者330人。10月31日（月）より次年度以降調査継続を前提に調査区内の養生作業を開始（11月15日（火）まで)。11月16日（水）機材の撤収作業をおこない、17年度の接待館遺跡の野外作業を終了した。接待館遺跡の調査時には見学者が多く、現地説明会参加者を除き、延べ1,122名の方が来跡している。



第２図　周辺の遺跡

衣川遺跡群全体図



第３図　周辺の地形

2　野外調査の方法

グリッドの設定

グリッドは平面直角座標のＸ系（世界測地系）に沿って設定した。大グリッドは一辺50mとしている。東西ラインは西から東に向かってＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆ・・・・とアルファベットの大文字を50m毎に付し、南北ラインは北から南へ向かって０、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ・・・・とローマ数字を50m毎に付している。大グリッドの呼称は南北ラインのローマ数字と東西ラインのアルファベットの大文字との組み合わせで「ⅡＢ」、「ⅣＤ」というように表す。大グリッドはさらに内部を一辺５mの小グリッドに細分している。小グリッドは西から東に向かってａ、ｂ、ｃ、ｄ、ｅ、ｆ、ｇ、ｈ、ｉ、ｊとアルファベットの小文字で付し、南から北に０、１、２、３、４、５、６、７、８、９、０とアラビア数字を付す。グリッドの呼称は大グリッドと小グリッドの組み合わせで「ＩＡ３ｃ」「ⅣＤ７ａ」とういうように示す。グリッドの南西隅がそのグッリドの名称を示す。本調査で設置した基準点は以下の通りである。

遺跡名・杭	グリッド	Ｘ（世界測地系）	Ｙ（世界測地系）	Ｈ（標高）
六日市場遺跡Ｐ１	ＶＰ４ｇ	－110230.00m	23280.000m	23.798m
細田遺跡　　Ｐ２	ＶＯ４ｅ	－110230.00m	23220.000m	23.368m
接待館遺跡　Ｐ１	ⅥＫ１ｅ	－110195.00m	23020.000m	24.992m
接待館遺跡　Ｐ２	ＶＫ４ｅ	－110230.00m	23020.000m	25.387m

基点である０Ａ０ａの座標値はＸ＝－110500.00m　Ｙ＝22500.000m（世界測地系）である。

このように広範囲を対象とするグリッドを設定したのは、長さ1200mに及ぶ衣川左岸築堤工事に関わる遺跡発掘調査区全体を対象とする目的からである。

遺構の名称

遺構の名称は以下の略号を用いた。ＳＢ（掘立柱建物）、Ｐ（柱穴）、ＳＩ（竪穴住居）、ＳＤ（堀・溝）、ＳＫ（土坑）、ＳＸ（その他の遺構）

これらの略号の後ろに検出順に数字を付し、「ＳＢ30」というように、遺構名を付した。遺構を示す数字は、遺跡毎に付しており、同一の遺構名が遺跡毎に存在する場合もある。

粗掘り・遺構検出

雑物撤去後にトレンチを設定し、遺物の包含状況、遺構の確認面を把握した。その後、遺構確認面まで重機を用いて表土を除去した。遺物を多く包含する層に関しては人力によって表土の除去をした。遺構の確認は表土を除去した面をジョレン、両刃鎌で平滑にし、プランを確認するようにした。

遺構の精査

検出した遺構は、土層を観察するベルトを設定して掘り下げることを基本とした。

遺物の取り上げ

遺構外の遺物はグリッド毎に取り上げた。遺構内の遺物は必要と思われる場合、地点とレベルを記録した。またそれ以外では可能な限り埋土の層位ごとに取り上げるように努めた。

実測・写真撮影

平面実測は遺構デジタル調整図化、編集を株式会社セビアスに委託しておこなった。それに並行して、簡易遣り方測量で、５mグリッドを１mに細分したメッシュを用いてた測量を補足的におこなった。原則として１/20の縮尺を用い、必用に応じて任意の縮尺を用いた。

写真撮影は35㎜モノクロームとカラースライドを主に使用した。撮影は埋土堆積状態や遺物の出土状況、遺構の完掘状況などについて行った。

3　室内整理の方法

出土遺物は水洗注記を行い、必用なものは接合、復元作業を実施した。これらの作業終了後、報告書掲載遺物を選び出し、登録をおこなった。

遺物実測は原則として実寸で行った。野外調査で作成した遺構実測図は、必要なものについては第２原図を作成した。その後、これらの遺構，遺物実測図のトレースを行い、種別ごとに観察表と図版を作成した。

撮影したフィルムはネガアルバムにベタ焼きの写真と一組にして収納した。カラースライドはスライドファイルに撮影順に収納した。また報告書掲載分の遺物の撮影を行い、写真図版を作成した。これらの作業の終了後、原稿の執筆を行い、報告書を編集した。

4　基　本　土　層

六日市場遺跡の村道南面（ａ～ａ’）及び､北面（ｂ～ｂ’）の層位は以下の通りである（第12図)。

Ⅰ　10ＹＲ３/４暗褐色土　砂質シルト　粘性弱い　しまり有り　層厚30～100㎝
　東側に行くほど厚さを増す

Ⅱ　10ＹＲ３/４暗褐色土　しまり有り　粘性なし　層厚０～30㎝

Ⅲ　10ＹＲ２/３黒褐色シルトと10ＹＲ４/６褐色粘土質シルトの混合土　人為的な整地層？
　層厚０～40㎝　南面には存在しない。

Ⅳ　10ＹＲ２/２黒褐色シルト　粘性やや有り　上面で遺構検出可能　層厚10～40㎝

Ⅵ　10ＹＲ４/６褐色粘土質シルト　粘性強い　しまり強い　地山層　層厚不明

細田遺跡の村道南面（３）及び、北面（１)、（２）の層位は以下の通りである（第67図)。

Ⅰ　10ＹＲ３/４暗褐色土　砂質シルト　粘性弱い　しまり有り　層厚30～50㎝

Ⅱ　10ＹＲ３/４暗褐色土　しまり有り　粘性なし　層厚０～40㎝　南面には存在しない。

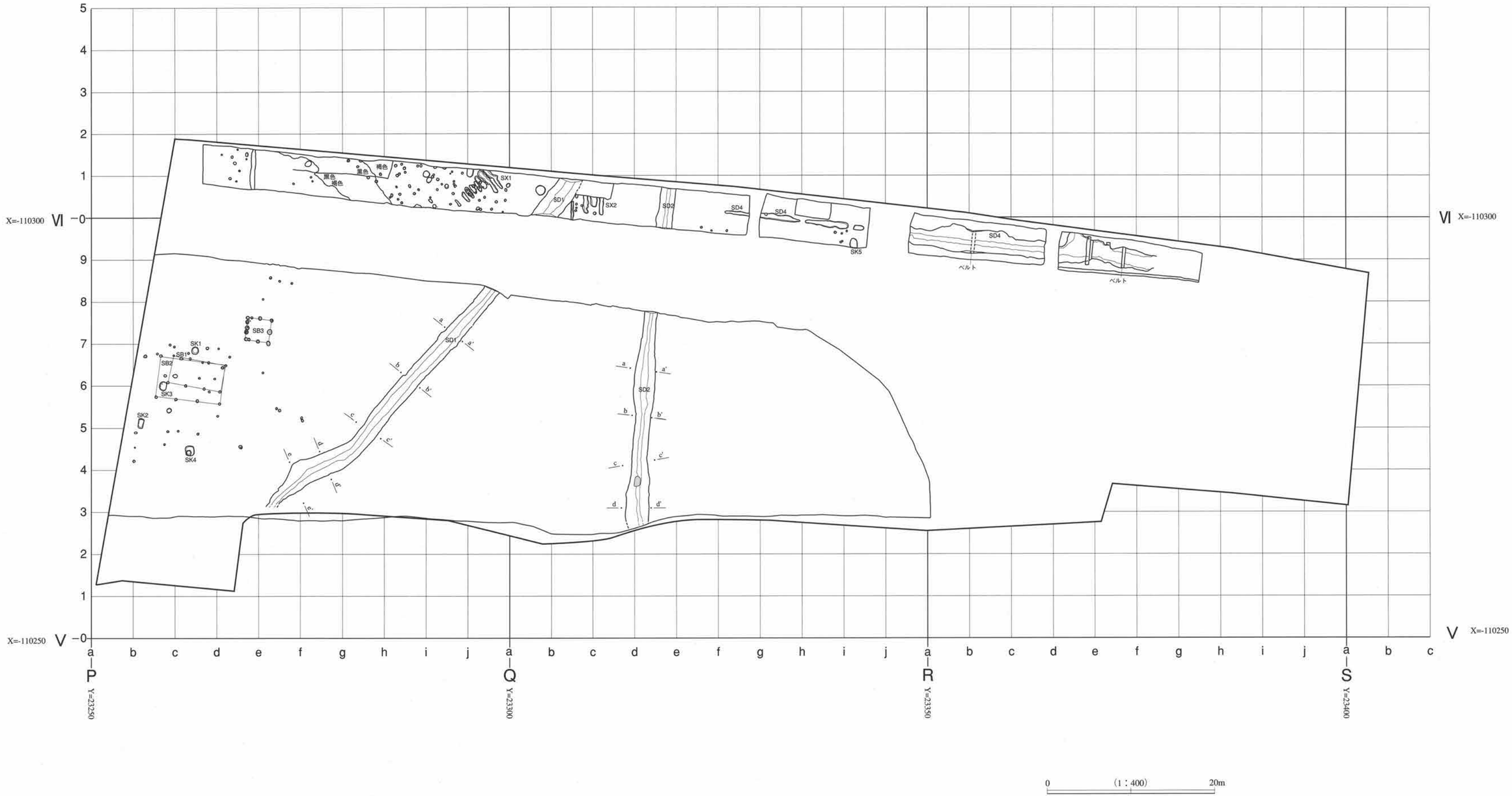
Ⅲ　10ＹＲ２/３黒褐色シルトと10ＹＲ４/６褐色粘土質シルトの混合土　人為的な整地層？
　層厚０～30㎝　北面には欠損する部分もある。

Ⅳ　10ＹＲ２/２黒褐色シルト　粘性やや有り　上面で遺構検出可能　層厚0～30㎝　南側には存在しない

Ⅴ　10ＹＲ２/３黒褐色シルト　自然流路？　北側の一部にのみ存在

Ⅵ　10ＹＲ４/６褐色粘土質シルト　粘性強い　しまり強い　地山層　層厚不明

接待館遺跡の基本土層は細田遺跡村道南面とほぼ共通する。



第４図　六日市場遺跡遺構全体図

Ⅳ　六日市場遺跡

1　検出された遺構

（1）調査区概観

六日市場遺跡は、衣川村役場の南東約4.5kmに位置し、衣川によって形成された河岸段丘低位面に立地する。平成17年度に調査した遺跡群（六日市場遺跡・細田遺跡・接待館遺跡・衣の関道遺跡）の中では最東端に位置する。調査区は東西方向に細長い範囲であり、調査前は宅地・畑地であった。調査区内は東側に向かって緩やかな下り勾配で傾斜しており、遺構検出面の標高は23.000～24.000mである。なお、調査区北側を横断する村道部分は未調査である。

基本層序は「Ⅲ調査経過と整理方法」に記したとおりである。Ⅰ～Ⅴ層に分けられる。Ⅰ・Ⅱ層は、水田耕作土や宅地造成時の盛土で、近～現代に形成された層と考えられる。Ⅲ層・Ⅲ′層はブロック状の褐色土が主体で、場所により炭化物を含み、人為的に整地（盛土）された層と考えられる。Ⅲ層は、村道部分の北側でのみ確認された。それ以下のⅣ層は黒褐色土、Ⅴ層は褐色土で自然堆積層である。遺構検出は、村道の北側ではⅢ層上面、村道の南側ではⅣ・Ⅴ層上面で行なった。Ⅳ層上面での標高が低い場所ほどⅢ層の堆積が厚く、Ⅲ層上面は概ね平坦となる。調査区東端付付近では傾斜が急になり、遺構・遺物ともに全く確認されなかったが、重機により一部深掘りを行ったところ、褐色土と暗褐色土が薄く交互に堆積している状況が確認された

今回の調査で確認した遺構数は、掘立柱建物跡３棟（略号ＳＢ１～３）、溝跡４条（ＳＤ１～４）、土坑５基（ＳＫ１～５）、柱穴状ピット148個（Ｐ１～160、うち12個は欠番）、波板状遺構２箇所（ＳＸ１・２）である。

調査区より南側は急斜面で、すぐ南側に衣川が流れることから、遺構が存在する可能性は低いとみられる。一方、調査区北側は柱穴状ピットの密度が濃く、ＳＤ１・２は調査区より北側にも続くことから、調査区より北側にはまだ多くの遺構が分布することが予想される。

（2）掘立柱建物跡（ＳＢ）

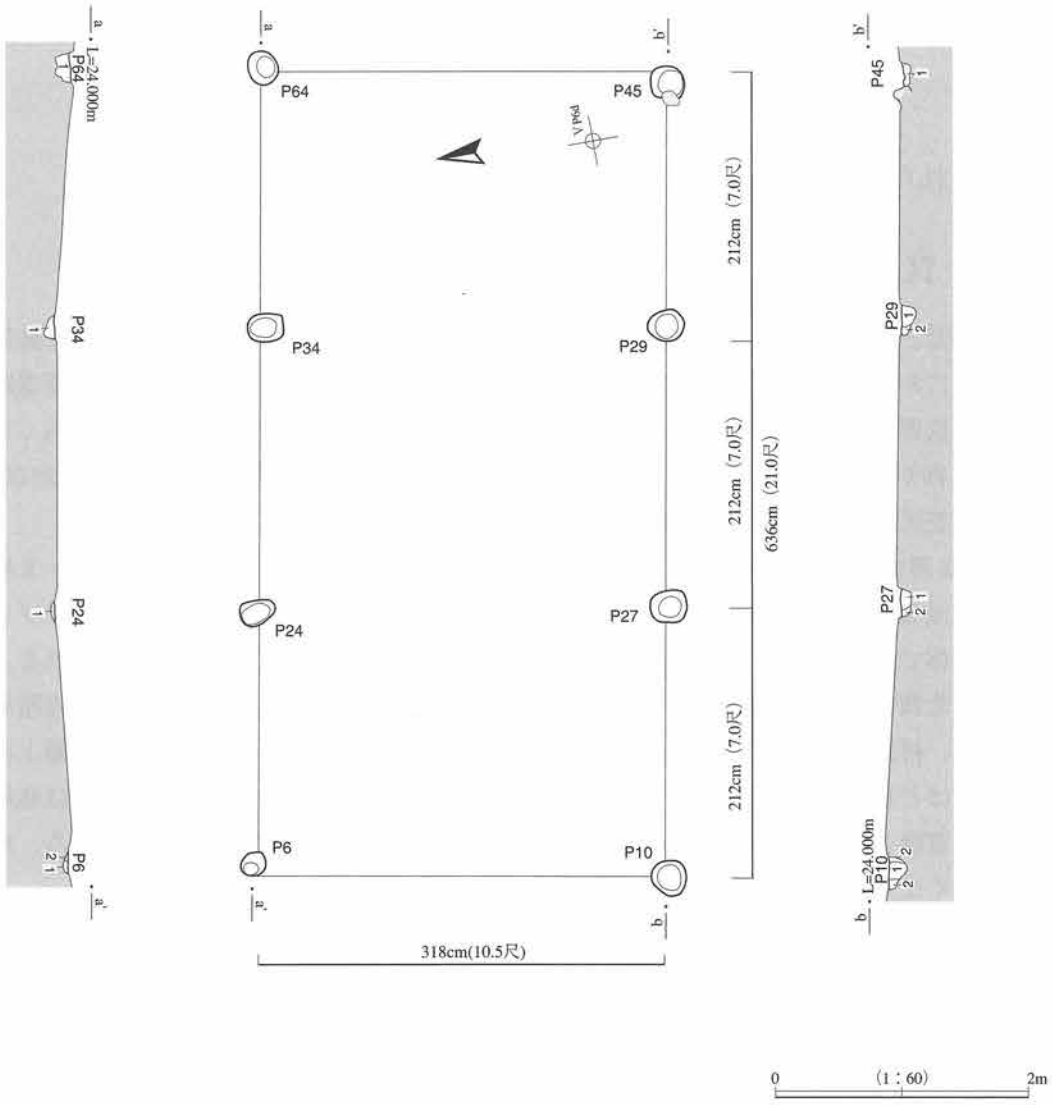
柱穴は調査区内で計148個を確認した。分布域は主にＳＤ１の西側であり、東側にあるのはごく少数である。また北側ほど密度が濃いようだが、村道部分を除いた細長い範囲しか調査できなかったため、配置の検討は断念した。調査区外の北側に分布する可能性は高いとみられる。南側の24個については掘立柱建物（ＳＢ１～３）の配列を確認できたが、その他については配置に規則性は見出せなかった。埋土は、黒褐色土～暗褐色土主体で、特筆すべき点はみられない。148個の柱穴状ピットはいずれからも遺物は出土しておらず、構築時期の特定は困難である。

ＳＢ１掘立柱建物跡（第５図、写真図版５）

〔位置〕ＶＰ６ｃグリッドに位置する。

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ６・10・24・27・29・34・64・45）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕ＳＢ２とプランが重複するが、直接切り合う柱穴がなく、新旧関係は不明である。



SB1

P6
1　10YR3/4　暗褐色シルト　黄褐色ブロック含
2　10YR4/6　褐色シルト　粘性やや有

P24
1　10YR2/2　黒褐色シルト　しまりやや有

P34
1　10YR2/2　黒褐色シルト　焼土粒・炭化物粒微量含

P64
1　10YR2/2　黒褐色シルト

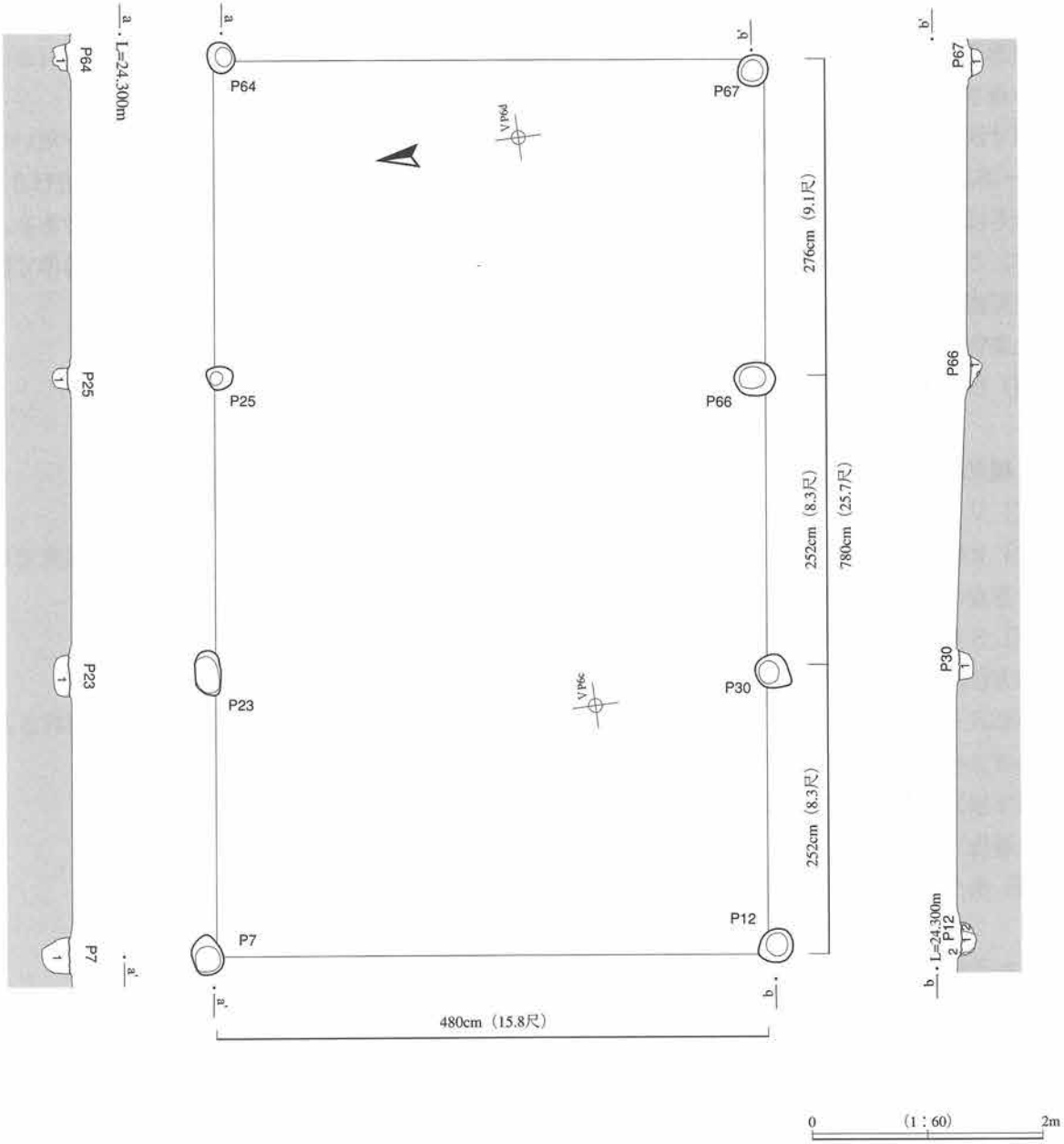
P10
1　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色ブロック含
2　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色ブロック多量

P27
1　10YR2/2　黒褐色シルト　焼土粒・炭化物粒微量含
2　10YR4/6　褐色シルト　粘性やや有

P29
1　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色ブロック含
2　10YR4/6　褐色シルト　粘性やや有

P45
1　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色ブロック含

第５図　六日市場遺跡　SB１



SB2

P7
1　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色ブロック含

P23
1　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色ブロック含

P25
1　10YR2/1　黒色シルト　炭化物粒含

P64
1　10YR2/2　黒褐色シルト

P12
1　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色ブロック含
2　10YR3/3　暗褐色シルト　黄褐色ブロック含

P30
1　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色ブロック含

P66
1　10YR2/2　黒褐色シルト

P67
1　10YR2/2　黒褐色シルト

第6図　六日市場遺跡　SB2

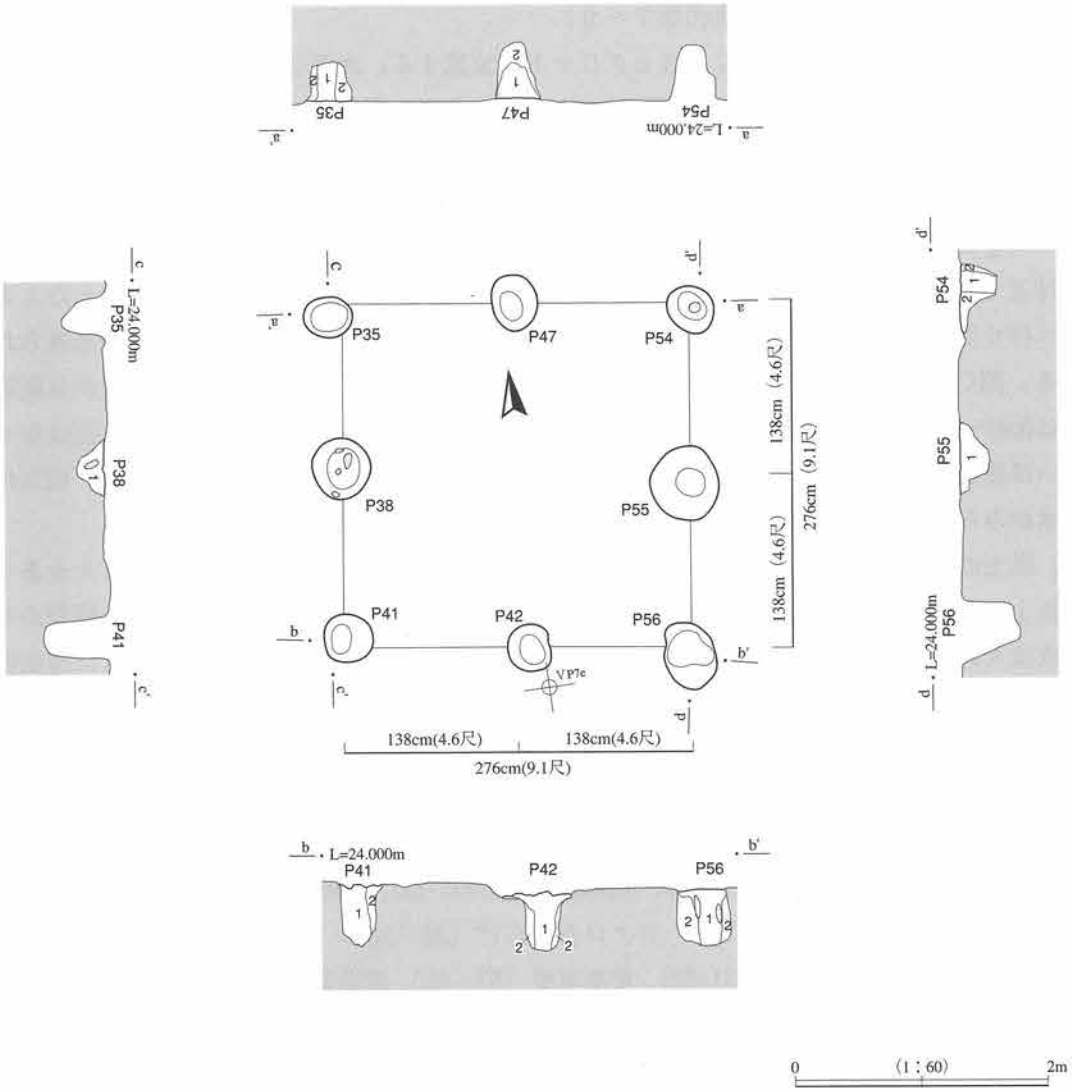
〔建物方位〕桁行きの軸方向は、N－100°－Eである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き636cm（21.0尺）、梁間318cm（10.5尺）で、桁行きと梁間の長さの比は２：１である。面積は20.22㎡（6.11坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて212cm（7.0尺）である。212cmを６で割った35.3cmを用いて１尺′＝35.3cmとすると、212cmは６尺′で、桁行きの636cmは18尺′梁間の318cmは９尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。また、1間′＝６尺′とすれば、桁行きは３間′、梁間は1.5間′である。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な１尺＝30.3cmを用いず、１尺′＝35.3cmを基準寸法とした可能性が考えられる。
〔出土遺物〕なし。
〔時期〕出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

ＳＢ２掘立柱建物跡（第６図、写真図版５）
〔位置〕ＶＰ６ｃグリッドに位置する。
〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ７・23・25・64・67・66・30・12）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも確認できなかった。礎盤なども確認できなかった。
〔重複〕ＳＢ１とプランが重複するが、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方向は、N－97°－Eである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き780cm（25.7尺）、梁間480cm（15.8尺）で、桁行きと梁間の長さの比は13：８である。面積は37.44㎡（11.34坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、252cm（8.3尺）・276cm（9.1尺）の２種類である。
〔出土遺物〕なし。
〔時期〕出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

ＳＢ３掘立柱建物跡（第７図、写真図版５）
〔位置〕ＶＰ７ｄ・ＶＰ７ｅグリッドに位置する。
〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ35・47・54・55・56・42・41・38）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ38がＰ39、Ｐ41がＰ40を切る。
〔建物方位〕桁行きの軸方向は、N－98°－Eである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き・梁間ともに276cm（9.1尺）で、桁行きと梁間の長さの比は１：１である。面積は7.62㎡（2.30坪）である。
〔柱間寸法〕桁行き・梁間ともに柱間寸法はすべて138cm（4.6尺）である。138cmを４で割った34.5cmを用いて、１尺′＝34.5cmと定めると、138cm＝４尺′で、276cmは８尺′となり、桁行き・梁間とも切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な１尺′（30.3cm）を用いず、1尺′＝34.5cm基準寸法とした可能性が考えられる。
〔出土遺物〕なし。
〔時期〕出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

（３）溝　　跡（ＳＤ）

４条の溝が検出されている。この内、ＳＤ１・ＳＤ２は規模の大きい遺構である。



SB3

P35
1　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土粒少量含
2　1より黄褐色土粒多い

P47
1　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土粒少量含
2　1より黄褐色土粒多い

P55
1　P35の2と同じ

P56
1　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土粒少量含
2　10YR4/4　褐色粘質シルト　粘性強　しまり強

P38
1　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土粒多量含

P54
1　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土粒少量含
2　10YR4/4　褐色粘質シルト　粘性強　しまり強

P41
1　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土粒少量含
2　1より黄褐色土粒多い

P42
1　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土粒少量含
2　1より黄褐色土粒多い

第７図　六日市場遺跡　SB３

ＳＤ１溝跡（第４・８・12図、写真図版７～９）

〔位置〕北端はⅥＱ０ｂ、南端はＶＰ３ｅグリッドに位置する。北側はさらに調査区外へ続く。ＶＱ８ａ・９ａグリッド付近は旧道で調査範囲外であるが、北側・南側と連続していると思われる。

〔重複〕なし。

〔形状・規模〕主体部分は北東から南西方向へほぼ直線的に伸び、軸方向はＮ－42°－Ｅである。ＶＰ４ｆ・４ｇグリッド境界付近で屈曲し、その以南ではＮ－65°－Ｅへと軸方向が変わる。南端は調査区境付近で途切れる。調査区内で確認できた全長は53mである。断面形は薬研状であったと考えられ、底へ行くほど窄まっていくが、壁の崩落や水流によって掘削時の状態から変形したとみられる箇所もある。開口部の幅は1.8～2.9mであり、中央に比べ北側と南側がやや広い。確認面から底面までの深さは0.90～1.60mで、南側が浅くなる。ただし底部標高は22.150～22.400mと大きな差はなく、深さの違いは確認面の標高差によるとみられる。掘り込みはⅤ層地山層下の礫層まで達し、底面付近からは湧水がみられた。

〔埋土〕埋土の上～中位は暗褐～黒褐色土で、下位～底面にかけては、黄褐色土ブロックを多く含む土と黒色土が互層となっている。遺物の出土は、埋土の上～中位が大半である。断面の観察から、底面～下位は人為的に埋め戻され、中位～上位は自然に堆積し、完全に埋没する前の窪みに廃棄物が一括して投げ込まれたものと推測される。Ｃ断面によると、黒色土が東側から入り込んだ状況が窺える。Ｅ断面では、最上位に黄褐色土・炭化物粒を多量に含む層があり、その直下が炭化物粒を含む黒褐色土の層である。

〔出土遺物〕弥生土器深鉢（3・5）、黒曜石製スクレイパー（6～8）、剥片（9）、石錐（10）、石鏃（11）、土師器坏（13～15）、土師器高台付坏（16）、土師器長胴甕（17・18）、土師器甕（19）、土師器球胴甕（21）、土師器堝（22）、須恵器大甕（23・24）、ロクロかわらけ（26～36）、手づくねかわらけ（37～47）、常滑産片口鉢（49）、常滑産広口壺（51・52）、常滑産甕（53～60）、渥美産甕（61）、中国産白磁碗（62）、短刀（63）、はさみ（64）、釘（65・66・70・73・74）、釘？（67・68）、刀子（69）、不明鉄製品（71・72）を掲載した。遺物の出土地点は、中央部のＶＰ５ｇ・５ｈ・６ｈ・６ｉ付近と南側のＶＰ３ｅ・３ｆ・４ｆ付近の２箇所に集中し、その他の地点では遺物の出土は少ない。また、検出時点からプラン内には多くのかわらけ片を確認していたが、遺物の出土層位は埋土の上～中位に限られ、下位～底面では殆ど出土しなかった。63・64はＶＰ６ｈグリッドで出土した。ＶＰ３ｆグリッドの埋土中位から、馬の歯が出土している。

〔時期〕複数の時期の遺物が出土しているが、かわらけ・陶磁器類など12世紀頃のものと考えられる遺物が主体であり、12世紀には開口していたと考えられる。

〔性格〕ＳＤ２の項にまとめて記載する。

ＳＤ２溝跡（第４・９・12図、写真図版10）

〔位置〕北端はⅥＱ０ｄ、南端はＶＱ２ｄグリッドに位置する。北側は調査区外へ続き、南端は調査区境付近で途切れる。ＶＱ８ｄ・９ｄグリッド付近は村道下で未調査である。

〔形状・規模〕ほぼ直線的に南北に伸びる。ただし北側と南側では軸方向が僅かに異なり、南端付近でＮ－３°－Ｅ、北端付近でＮ－８°－Ｅである。調査区内で確認できた長さは25.5mである。開口部の幅は1.8～2.8mで、ＶＱ６ｄ付近と南端のＶＱ３ｄ付近で最大となる。確認面から底面までの深さは0.78～1.08m、底部標高は21.860～22.200mであり、断面形は薬研状である。

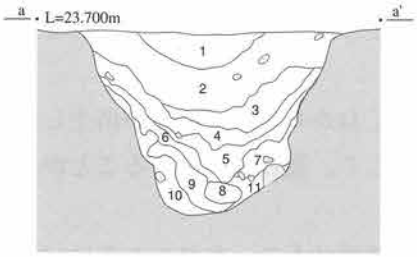
〔重複〕なし。

〔埋土〕下～中位は黒褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈する。一方、上位は黄褐色土ブロックや礫を大量に含む。南側部分では特に礫が多く、底面には径50cm以上の巨礫も確認された。ある程度埋没した段階の窪みが人為的に埋め戻されたものとみられる。
〔出土遺物〕弥生土器深鉢（１・２・４）、土師器坏？（12）、手づくねかわらけ（48）が出土した。
〔時期〕ＳＤ１に比べ遺物の出土が少ないものの、掘り込み面が等しく、規模も類似することから、12世紀の遺構である可能性が高いと考えられる。
〔性格〕ＳＤ１、ＳＤ２は大規模な溝跡で、本調査区の主体となる遺構である。ＳＤ１からは12世紀のかわらけや陶磁器類が出土し、12世紀には開口し機能していたことが想定される。ＳＤ２も遺物の出土が少ないものの、同時期である可能性が高いとみられる。２つの溝跡は、掘り込み面が等しく、上幅・深さなどの規模や底面標高にそれほど大きな差はない。ただし軸方向が異なるため、北側へ行くほど両溝間の間隔は狭くなり、調査区南辺付近で42m、調査区北辺付近では9.5mである。そのままの方向で北側に延長すれば、調査区外において重複することになる訳だが、重複した場合新旧関係はどうなるのか、或いは交わらないよう方向を変えるのか、興味深いところであるが、判明するには今後の調査機会を待たねばならない。12世紀における遺跡の中心が西側にある細田・接待館側であるとすれば、２つの溝跡が遺跡群の東端を区画する施設であり、外側にあるＳＤ２における遺物の出土量が少ない点についても納得できる。実際、ＳＤ１とＳＤ２の間、およびＳＤ２より東側では、時期不明の少数のものを除き遺構は確認されていない。詳細な性格・位置づけについては、今後の調査結果や、細田・接待館遺跡との関連を踏まえた上で慎重に検討していかなければならない。

ＳＤ３溝跡（第９図、写真図版10）
〔位置〕ⅥＱ０ｂグリッドに位置する。西側にＳＤ１、東側にＳＸ２が隣接する。
〔重複〕なし。
〔形状・規模〕南北方向にほぼ直線的に伸び、軸方向はＮ－２°－Ｅである。全長2.2mで、開口部の幅は0.25～0.32m、深さは0.10m程度である。
〔埋土〕暗褐色土の単層である。
〔出土遺物〕なし。
〔時期・性格〕隣接するＳＸ２と平行し、規模・埋土に大差がないことから、一連の遺構であった可能性も考えられる。詳細は不明である。

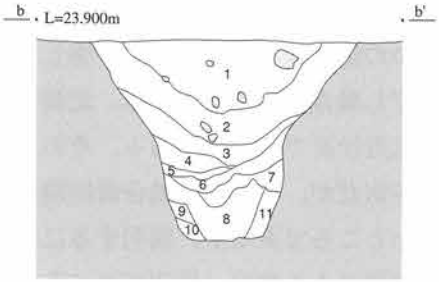
ＳＤ４溝跡（第９図、写真図版11）
〔位置〕西端はⅥＱ０ｆ、東端はＶＲ８ｆグリッドに位置する。
〔重複〕なし。
〔形状・規模〕東西方向にほぼ直線状に伸び、軸方向はＮ－93°－Ｗである。途切れる箇所が一部にあるものの、上面が削平された可能性もあり、本来は連続していたものと推測される。東端は調査区内で途切れる。西端から東端まで、確認できた全長は52mである。横幅は西端付近で30cm程度であるが、東へ行くにつれ広くなり、最も広い部分では3.3mを測る。東側へ行くほど形状が不整になり、掘り込みも不明瞭となる。ＶＲ９ｄ付近では、直交する北方向へ分岐するが、調査区外へ続くため先は不明である。断面形は浅い皿状で、壁の傾斜は緩く、底面と壁の境界が明瞭ではない。
〔埋土〕暗褐色土の単層である。
〔出土遺物〕なし。

SD1



SD1 a-a'

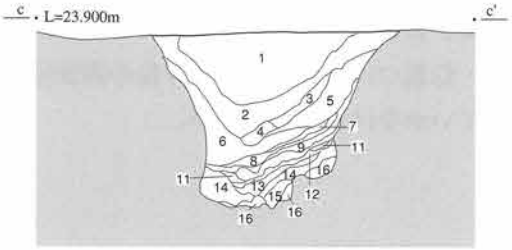
1　10YR2/2黒褐色土　粘性中　しまり強　黄褐色土粒多量含
2　10YR3/3暗褐色土　粘性中　しまり強　礫多く含　下位はグライ化
3　10YR4/4褐色シルト　粘性やや有　しまり強
4　10YR3/2黒褐色シルト　粘性中　しまり強　黄褐色土粒　多量含
5　10YR2/1黒色シルト　粘性有　しまりやや弱
6　基本的に4と同じ　4より黄褐色ブロック多い
7　10YR3/2黒褐色シルト　粘性有　しまり強　黄褐色砂ブロック含
8　10YR4/6褐色　砂質シルト　粘性有　しまり中
9　10YR2/1黒色シルト　粘性有　しまりやや弱
10　10YR4/6褐色　砂質シルト　粘性有　しまり中
11　10YR3/2黒褐色　粘性有　しまりやや弱　礫層



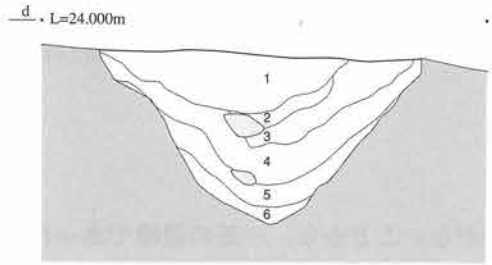
SD1 b-b'

1　10YR4/3にぶい黄褐色土　粘性中　しまり強　下位に礫多く含
2　10YR3/3暗褐色土粘性中　しまり強　礫含　下位はグライ化
3　10YR3/2黒褐色シルト　粘性中　しまり強　黄褐色土粒　多量含
4　10YR2/1黒色シルト　粘性有　しまりやや弱
5　10YR4/6褐色　砂質シルト　粘性有　しまり中
6　10YR2/1黒色シルト　粘性有　しまりやや弱
7　10YR4/6褐色　砂質シルト　粘性有　しまり中
8　10YR3/2黒褐色シルト　粘性中　しまり強　黄褐色土粒　多量含
9　10YR3/1黒褐色土　粘性強　しまり強
10　10YR4/6褐色　砂質シルト　粘性有　しまり中
11　10YR3/2黒褐色　粘性有　しまりやや弱　礫層

SD1 c-c'

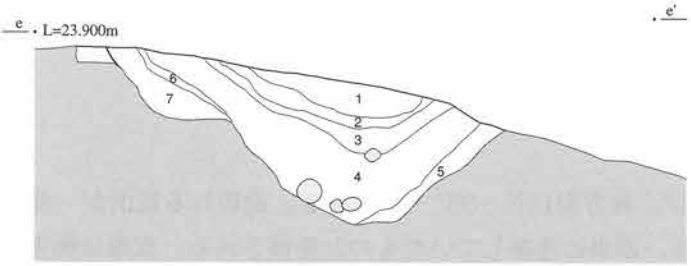


1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや有　しまり強　下位はグライ化　礫含
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性有　しまり強　グライ化部分多い　下位に炭化物含
3　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや有　しまり強　炭化物含
4　炭化物層
5　10YR4/6にぶい褐色シルト　粘性強　しまり強
6　10YR2/3黒褐色シルト　粘性有　しまり強　地山粒・黒色土粒多く含
7　10YR4/6にぶい褐色シルト　粘性強　しまり強
8　10YR2/3黒褐色シルト　粘性有　しまり強　黒色土含
9　10YR4/6にぶい褐色シルト　粘性強　しまり強
10　10YR2/3黒褐色シルト　粘性有　しまり強　黒色土含
11　10YR2/2黒褐色　粘性有　しまり強
12　10YR3/3暗褐色　粘性有　しまり中
13　10YR2/2黒褐色　黄褐色ブロック　下位に少量
14　10YR2/3黒褐色シルト　粘性有　しまり強　黒色土含
15　10YR2/2黒褐色　黄褐色ブロック　下位に少量
16　10YR5/6黄褐色シルト　粘性強　しまり強



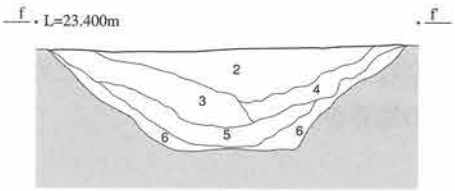
SD1 d-d'

1　10YR2/3黒褐色土　粘性中　しまり強　黄褐色土粒多量　炭化物粒含
2　10YR2/3黒褐色土　粘性中　しまり強　礫含
3　10YR2/2黒褐色土　粘性中　しまり強　黄褐色ブロック多量　礫含
4　10YR3/3黒褐色土　粘性中　しまり強　礫含
5　3と基本的同じ　3より黄褐色ブロックの割合少ない
6　10YR4/6砂　粘性無　締まりやや弱　黒褐色土ブロック　礫多量



SD1 e-e'

1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性中　締まり強
　黄褐色土粒多量　炭化物粒少量
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締まり強
　炭化物粒多量
3　基本的に1と同じ　黄褐色ブロックやや少ない
4　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締まり強
　下位に礫多量
5　基本的に1と同じ　黄褐色ブロックやや少ない
6　3と同じ　黄褐色ブロック多量
7　基本的に1と同じ　黄褐色ブロックやや少ない



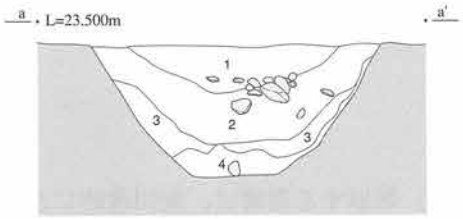
SD1 f-f'

2　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト　粘性有　しまり強
3　10YR3/3　黄褐色土粒多量　黒色土ブロック少量　粘性有　しまり強
4　10YR3/3　黄褐色土粒多量　黒色土ブロック少量　粘性有　しまり強
5　10YR3/3　暗褐色粘土　粘性強　しまり強
6　10YR3/3　地山ブロック少量

0　(1：60)　2m

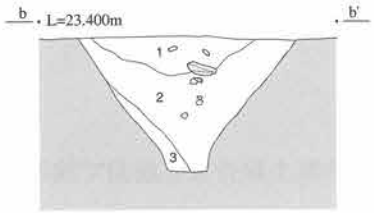
第８図　六日市場遺跡　SD１（断面）

SD2



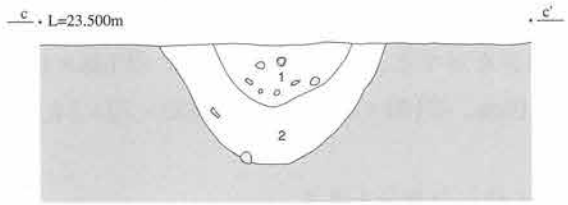
SD2 a-a'

1　10YR2/3　黒褐色シルト　粘性中　しまり強　褐色ブロック　礫多量含
2　10YR2/3　黒褐色シルト　粘性中　しまり強　礫多量含
3　10YR4/4　褐色砂質シルト
4　10YR2/3　黒褐色シルト　粘性やや有　しまり有



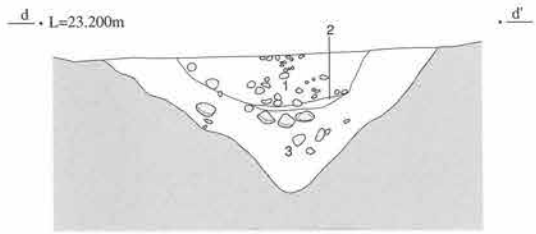
SD2 b-b'

1　10YR2/3　黒褐色シルト　粘性中　しまり強　褐色ブロック　礫多量含
2　10YR2/3　黒褐色シルト　粘性中　しまり強　礫多量含
3　10YR2/1　黒褐色シルト　粘性やや有　しまり強　黄褐色ブロック含



SD2 c-c'

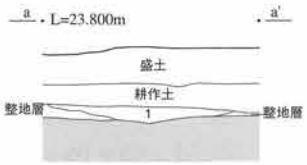
1　10YR2/2黒褐色土　粘質中　しまり中　礫多量に含
2　10YR2/2黒褐色土　粘質中　しまり中　礫含



SD2 d-d'

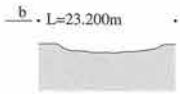
1　10YR2/2　黒褐色土　粘質中　しまり中　礫多量に含
2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土　粘質強　しまり中
3　10YR2/2　黒褐色土　粘質中　しまり中　礫多量に含

SD4

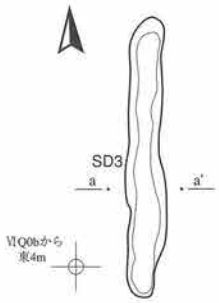


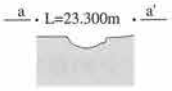
SD4

1　10YR3/3　暗褐色シルト　粘性やや有　しまりやや有



SD3





0　(1：60)　2m

第９図　六日市場遺跡　SD２（断面）・SD３・SD４（断面）

〔時期・性格〕整地層を掘り込んで構築されている。出土遺物がないため詳細は不明だが、比較的新しい時期（近代・現代）に構築された可能性も高い。掘り込みが明瞭ではないため、自然の流路である可能性も否定できない。

（4）波板状遺構（ＳＸ）

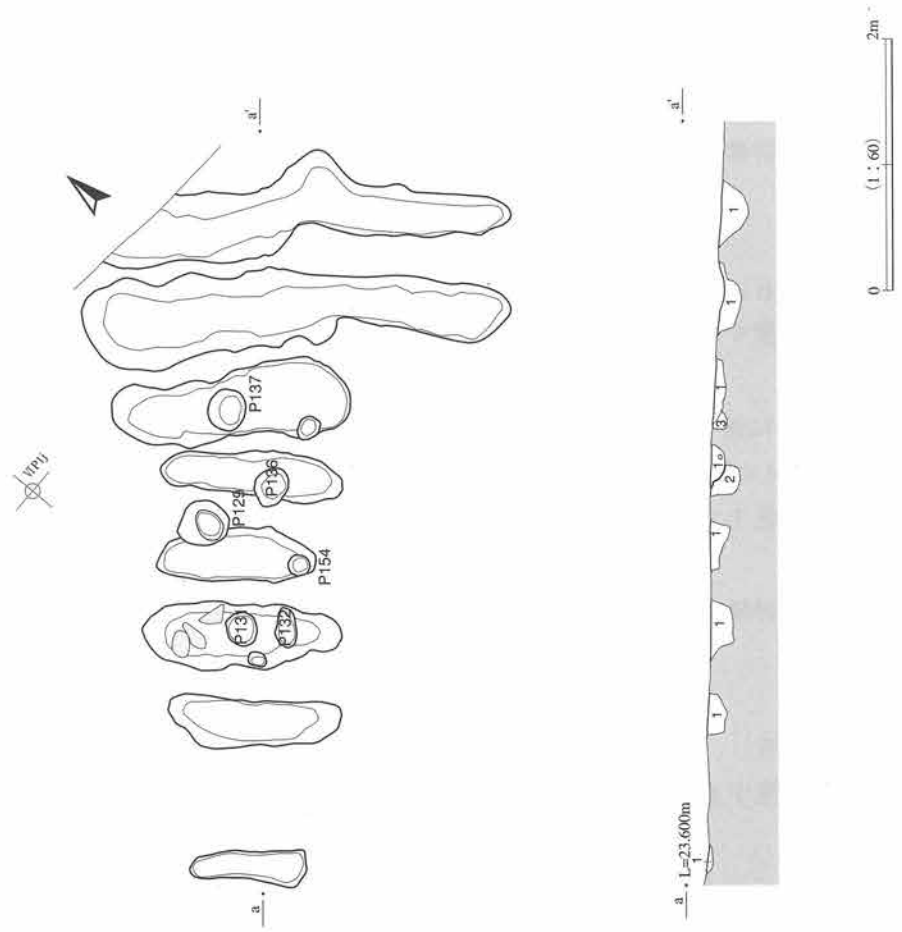
いわゆる「波板状圧痕」に類似する遺構が２基検出されている。類似する遺構は、細田遺跡においても検出しているが、性格は不明である。

ＳＸ１波板状遺構（第10図、写真図版11）
〔位置〕ⅥＰ０ｊグリッドに位置する。
〔重複〕Ｐ129・131・132・136・137・154と重複する。いずれもＳＸ１の埋土除去後に底面で検出したもので、ＳＸ１はこれらより新しいと考えられる。
〔形状・規模〕溝状の掘り込み８条が平行に近接して並ぶ。軸方向はいずれもＮ－45°－Ｗである。西側にあるものから順に①～⑧とし、全長×最大幅×深さを示すと、①92×30×５㎝、②138×40×14㎝、③158×54×18㎝、④126×41×16㎝、⑤143×38×10㎝、⑥190×58×９㎝、⑦339×72×14㎝、⑧320以上（調査区外へ続く）×58×21㎝である。
〔埋土〕暗灰黄色の粘土質土で、堅く締まる。一部グライ化した部分もある。
〔出土遺物〕なし。
〔構築時期〕出土遺物がなく、詳細は不明である。
〔性格〕不明。

ＳＸ２波板状遺構（第10図、写真図版11）
〔位置〕ⅥＱ０ｂ・０ｃグリッドに位置する。西側にＳＤ１・ＳＤ３が隣接する。
〔重複〕重複する遺構はない。北側は撹乱に削平されているため不明であるが、ＳＤ１と重複していた可能性は高いと考えられる。
〔形状・規模〕溝状の掘り込み４条が平行に近接して並ぶ。いずれも北側が削平されているため、全容は不明である。軸方向はいずれもＮ－０°－Ｅである。４条を西から①・②・③・④とし、長さ×最大幅×深さを示すと、①42×26×10㎝、②212×61×８㎝、③118×71×８㎝、④204×50×10㎝（いずれも長さは残存値）となる。
〔埋土〕暗褐色土の単層で、堅く締まる。
〔出土遺物〕なし。
〔構築時期〕出土遺物がなく、詳細は不明である。
〔性格〕不明。

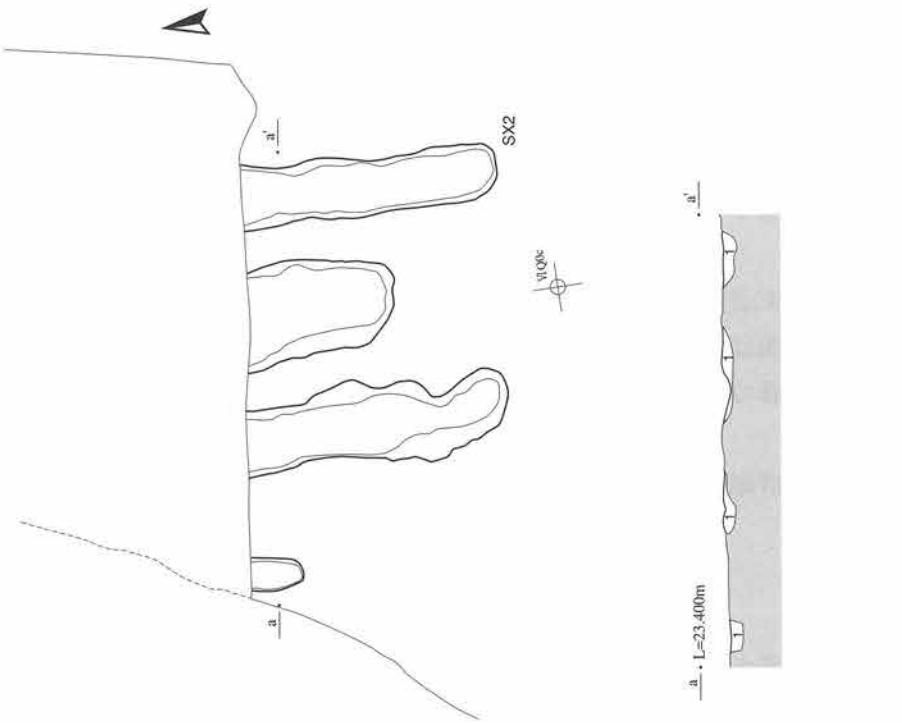
（5）土　　坑（ＳＫ）

５基検出された。いずれも出土遺物がなく、時期を判別することができない。
ＳＫ１土坑（第11図、写真図版６）
〔位置〕ＶＰ６ｃグリッドに位置する。
〔重複〕なし。
〔形状・規模〕平面形は円形に近く、長軸方向はＮ－２°－Ｅである。断面形は皿状で、底面は平坦



SX1

1　2.5Y4/2　暗灰黄粘土質土　粘性有　しまり強　グライ化　水酸化鉄合　下位に白色粘土含
2　10YR3/3　暗褐白色粘土　粘性有　しまり強　10YR5/8地山ブロック多量　柱穴埋土　粘性有　しまり強
3　10YR3/3　暗褐色　粘性有　しまり強　柱穴状埋土



SX2

1　10YR3/3暗褐色シルト　しまり強　粘性やや有　黄褐色土粒微量含

第10図　六日市場遺跡　SX1・SX2

である。規模は、開口部径88×79cm、深さ20cmである。
〔埋土〕黒褐色土主体で、黄褐色土ブロックや炭化物粒を少量含む。
〔出土遺物〕なし。
〔構築時期〕出土遺物がなく、詳細は不明である。
〔性格〕不明。

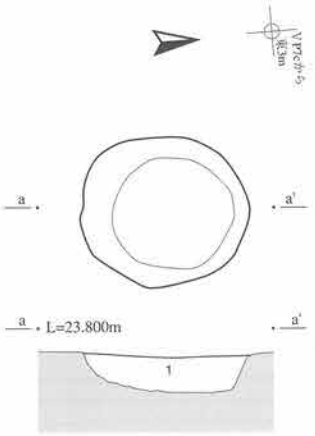
ＳＫ２土坑（第11図、写真図版６）
〔位置〕ＶＰ５ｂグリッドに位置する。
〔重複〕なし。
〔形状・規模〕平面形は長方形に近く、長軸方向はＮ－８°－Ｅである。断面形は皿状で、底面は平坦である。規模は、開口部径114×62cm、深さ24cmである。
〔埋土〕黒褐色土主体で、黄褐色土ブロックや炭化物粒を少量含む。
〔出土遺物〕なし。
〔構築時期〕出土遺物がなく、詳細は不明である。
〔性格〕不明。

ＳＫ３土坑（第11図、写真図版６）
〔位置〕ＶＰ６ｂグリッドに位置する。
〔重複〕なし。
〔形状・規模〕平面形は楕円形に近く、長軸方向はＮ－11°－Ｅである。断面形は浅い皿状で、底面は平坦である。規模は、開口部径105×81cm、深さは７cmである。
〔埋土〕黒褐色土主体で、黄褐色土ブロックや炭化物粒を少量含む。
〔出土遺物〕土師器甕底部（20）が出土した。底面に回転糸切り痕がある。
〔構築時期〕出土遺物から９～10世紀以降の構築と考えられるが、詳細は不明である。
〔性格〕不明。

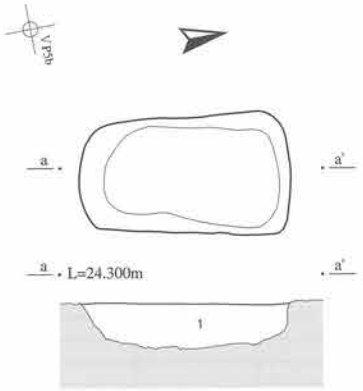
ＳＫ４土坑（第11図、写真図版６）
〔位置〕ＶＰ４ｃグリッドに位置する。
〔重複〕なし。
〔形状・規模〕平面形は正方形に近く、長軸方向はＮ－４°－Ｗである。底面は概ね平坦であるが、南西側に円形の窪みを持つ。規模は、開口部径117×101cm、深さは最深部で36cmである。
〔埋土〕締まりの弱い黒色土主体である。中位には黄褐色土粒を多く含む薄い層がある。
〔出土遺物〕なし。
〔構築時期〕出土遺物がなく、詳細は不明である。
〔性格〕不明。

ＳＫ５土坑（第11図）
〔位置〕ＶＱ９ｉグリッドに位置する。
〔重複〕なし。
〔形状・規模〕南側が調査区外にあり全容は不明であるが、平面形は楕円形に近いと推測される。底

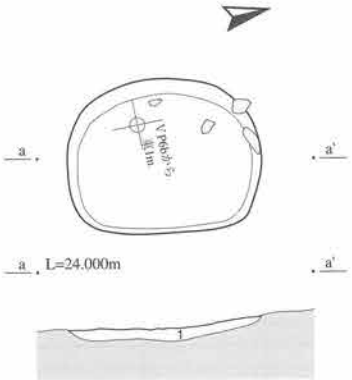
SK1



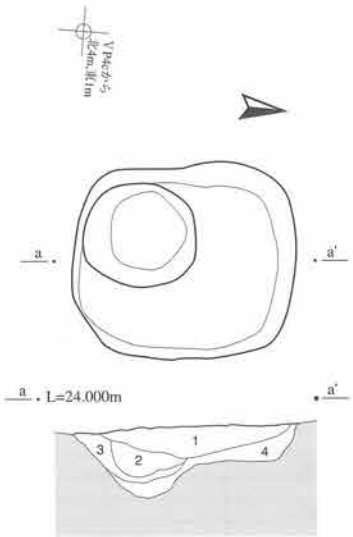
SK2



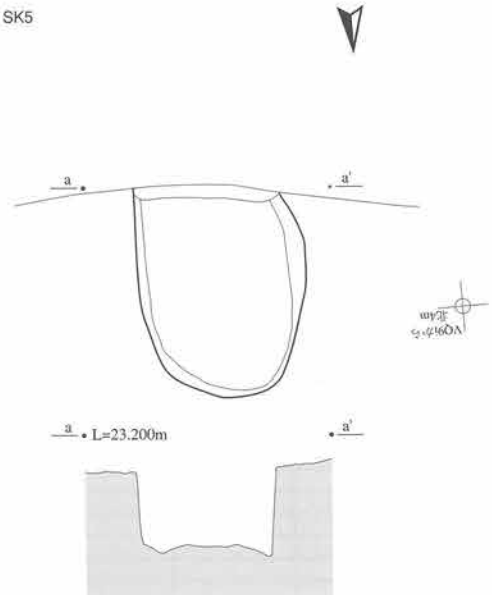
SK3



SK4



SK5



SK1

1　10YR2/3　黒褐色シルト　しまりやや有　黄褐色ブロック
炭化物粒少量含

SK2

1　10YR2/3　黒褐色シルト　しまりやや有　黄褐色ブロック
炭化物粒少量含

SK3

1　10YR2/3　黒褐色シルト　しまりやや有　黄褐色ブロック
炭化物粒少量含

SK4

1　10YR2/3　黒褐色シルト
2　10YR2/1　黒色シルト　粘性やや有
3　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土粒多く含
4　10YR2/1　黒色シルト　粘性やや有

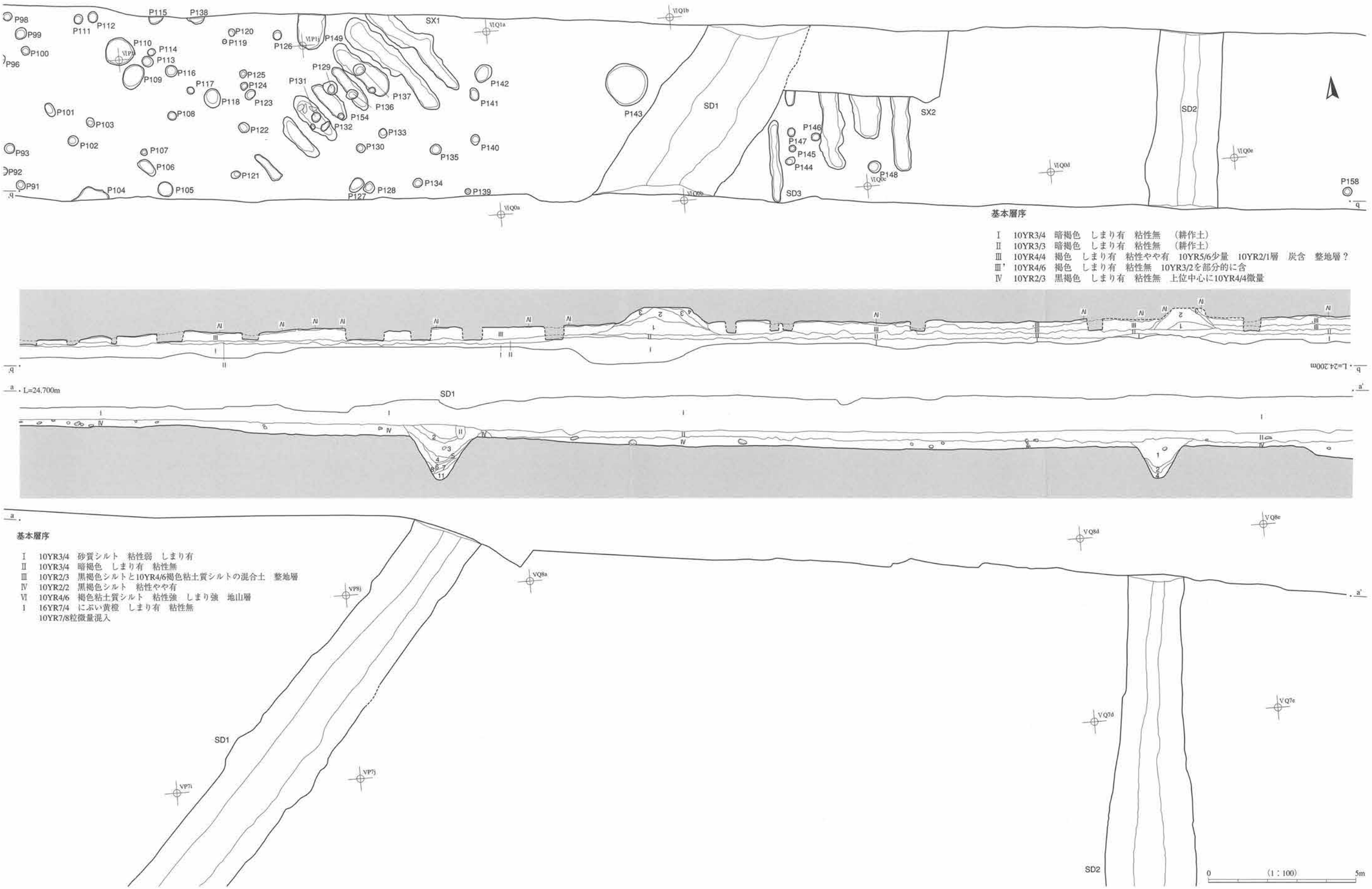
0　(1：40)　2m

第11図　六日市場遺跡　SK１～５

六日市場遺跡　柱穴観察表

NO	グリッド	掘立柱建物	新旧関係	遺物・その他
1	没			
2	没			
3	没			
4	VP6b			
5	VP6b			
6	VP6b	SB1		
7	VP6b	SB2		
8	VP6b			
9	VP6b			
10	VP6b	SB1		
11	VP6c			
12	VP5b	SB2		
13	VP5b			
14	VP4b			
15	VP4b			
16	VP4b			
17	VP4b			
18	VP4b			
19	VP6b			
20	没			
21	VP6c			
22	VP6c			
23	VP6c	SB2		
24	VP6c	SB1		
25	VP6c	SB2		
26	VP6c			
27	VP6c	SB1		
28	VP6c			
29	VP5c	SB1		
30	VP5c	SB2		
31	VP5c			
32	VP4c			
33	VP4c			
34	VP6c	SB1		
35	VP7d	SB3		
36	VP7d			
37	VP7d			
38	VP7d	SB3		
39	VP7d			
40	VP7d			
41	VP7d	SB3		
42	VP7d	SB3		
43	VP6d			
44	VP6d			
45	VP5d	SB1		
46	VP5d			
47	VP7e	SB3		
48	VP4d			
49	没			
50	VP8e			
51	VP8e			
52	VP8e			
53	VP8e			
54	VP7e	SB3		
55	VP7e	SB3		
56	VP7e	SB3		
57	VP6e			
58	VP5e			
59	VP5e			
60	VP5f			
61	VP5f			
62	没			
63	没			
64	VP6d	SB1・SB2		
65	VP6d			
66	VP5c	SB2		
67	VP5d	SB2		
68	没			
69	没			
70	VIP0d			
71	VIP0d			
72	VIP1d			
73	VIP1d			
74	VIP1d			
75	VIP1d			
76	VIP1d			
77	VIP1d			
78	VIP1d			
79	VIP0e			
80	VIP1f			

NO	グリッド	掘立柱建物	新旧関係	遺物・その他
81	VIP0f			
82	VIP0f			
83	VIP1g			
84	VIP1g			
85	VIP1g			
86	VIP0g			
87	VIP0g			
88	VIP1g			
89	VIP0h			
90	VIP0h			
91	VIP0h			
92	VIP0h			
93	VIP0h			
94	VIP0h			
95	VIP1h・0h			
96	VIP1h			
97	VIP1h			
98	VIP1h			
99	VIP1h			
100	VIP1h			
101	VIP0h			
102	VIP0h			
103	VIP0h			
104	VIP0h			
105	VIP0i			
106	VIP0i			
107	VIP0i			
108	VIP0i			
109	VIP0i			
110	VIP1h・0i VIP0h・0i			
111	VIP1h			
112	VIP1h			
113	VIP0i			
114	VIP1i			
115	VIP1i			
116	VIP0i			
117	VIP0i			
118	VIP0i			
119	VIP1i			
120	VIP1i			
121	VIP0i			
122	VIP0i			
123	VIP0i			
124	VIP0i			
125	VIP0i			
126	VIP1i			
127	VIP0j			
128	VIP0j			
129	VIP0j			
130	VIP0j			
131	VIP0j			
132	VIP0j			
133	VIP0j			
134	VIP0j			
135	VIP0j			
136	VIP0j			
137	VIP0j			
138	VIP1i			
139	VIP0j			
140	VIP0j			
141	VIP0j			
142	VIP0j			
143	VIQ0a			
144	VIQ0b			
145	VIQ0b			
146	VIQ0b			
147	VIQ0b			
148	VIQ0c			
149	VIP1j			
150	VQ9h			
151	VQ9h			
152	VQ9h			
153	VQ9i			
154	没			
155	没			
156	VQ9h			
157	没			
158	VQ9e			
159	VQ9e			
160	VQ9f			



第12図　六日市場遺跡　SD１・SD２

面は、中央に比べ壁際が深く掘り込まれている。壁は直立する。規模は、開口部径114cm以上×88cm、深さ44cmである。

〔埋土〕暗褐色土による単層である。底面では湧水がみられた。

〔出土遺物〕なし。

〔構築時期〕出土遺物がなく、詳細は不明である。

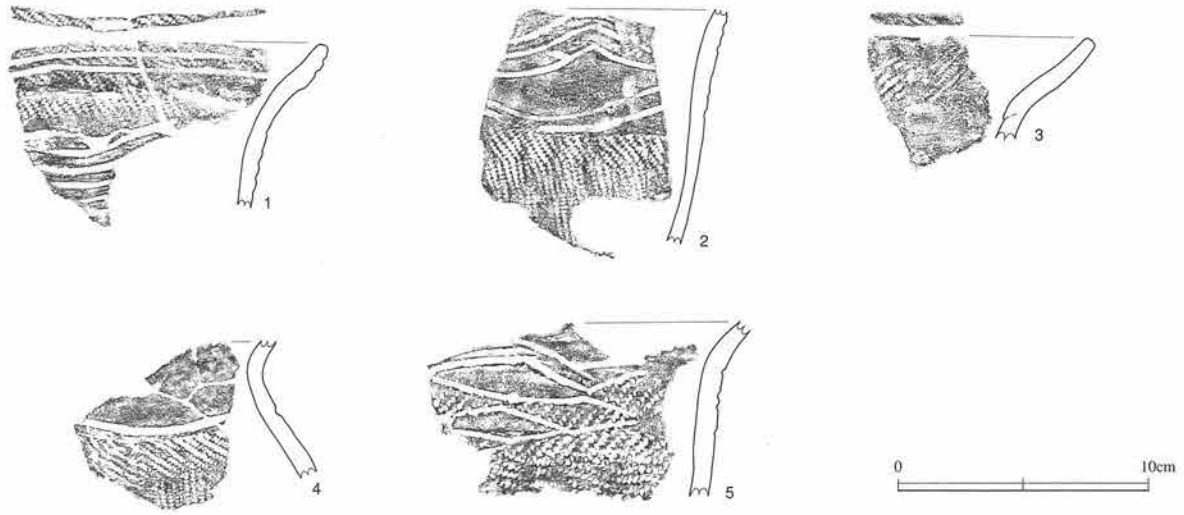
〔性格〕不明。

2　出　土　遺　物

（1）弥　生　土　器（第13図、写真図版15）

ＳＤ１、ＳＤ２の埋土を中心に、弥生時代中期の土器片が出土している。掲載したのは１～５の５片である。いずれも弥生時代中期の土器片と推測される。掲載した５片の重量は合計248.9gになる。他に不掲載の土器片がＳＤ１埋土から120g、SD２埋土から1,100g出土している。重量での掲載率は17％になる。不掲載片は殆どが体部片で、磨耗が著しいものも多く、弥生土器と断じきれないものもかなりある。SD１からは縄文時代の石器（64　石鏃）も出土しており、縄文時代の土器片を含む可能性も大きい。

１・２は同一個体の深鉢片である。１は口縁部片、２は頚部片である。口縁部は外反して開き、最大径が口縁部にある器形と推測される。口縁部は器壁が膨隆し、他の部位より厚くなっている。施文原体は単節ＲＬ縄文である。縄文は口縁部と口唇部、体部下半に施文されている。頚部には波状の沈線が施され、口縁部にも縄文施文の上に２条の平行沈線が施されている。２の体部外面には炭化物が付着し、煮沸に用いた土器と理解できる。胎土には海綿状骨針が混じり軟質な感じの焼成である。３は深鉢の口縁部破片である。やや内湾しながら開く口縁形態である。おそらく最大径は口縁部にある器形と推測される。施文原体は単節RL縄文である。口縁部上半と口唇部に縄文が施文されている。口縁部下半～頚部は無文である。無文部分には横位のナデが施されている。内面にも横位のナデが施されている。胎土には海綿状骨針が混入する。４は壺の口縁～肩部の破片である。口縁部と頚部の境界には沈線が１条施されている。施文原体は単節RL縄文で、頚部の沈線から下に施されている。沈線から上の口縁部は無文である。破片上端部にも僅かに縄文原体が認められ、欠損している口縁上半



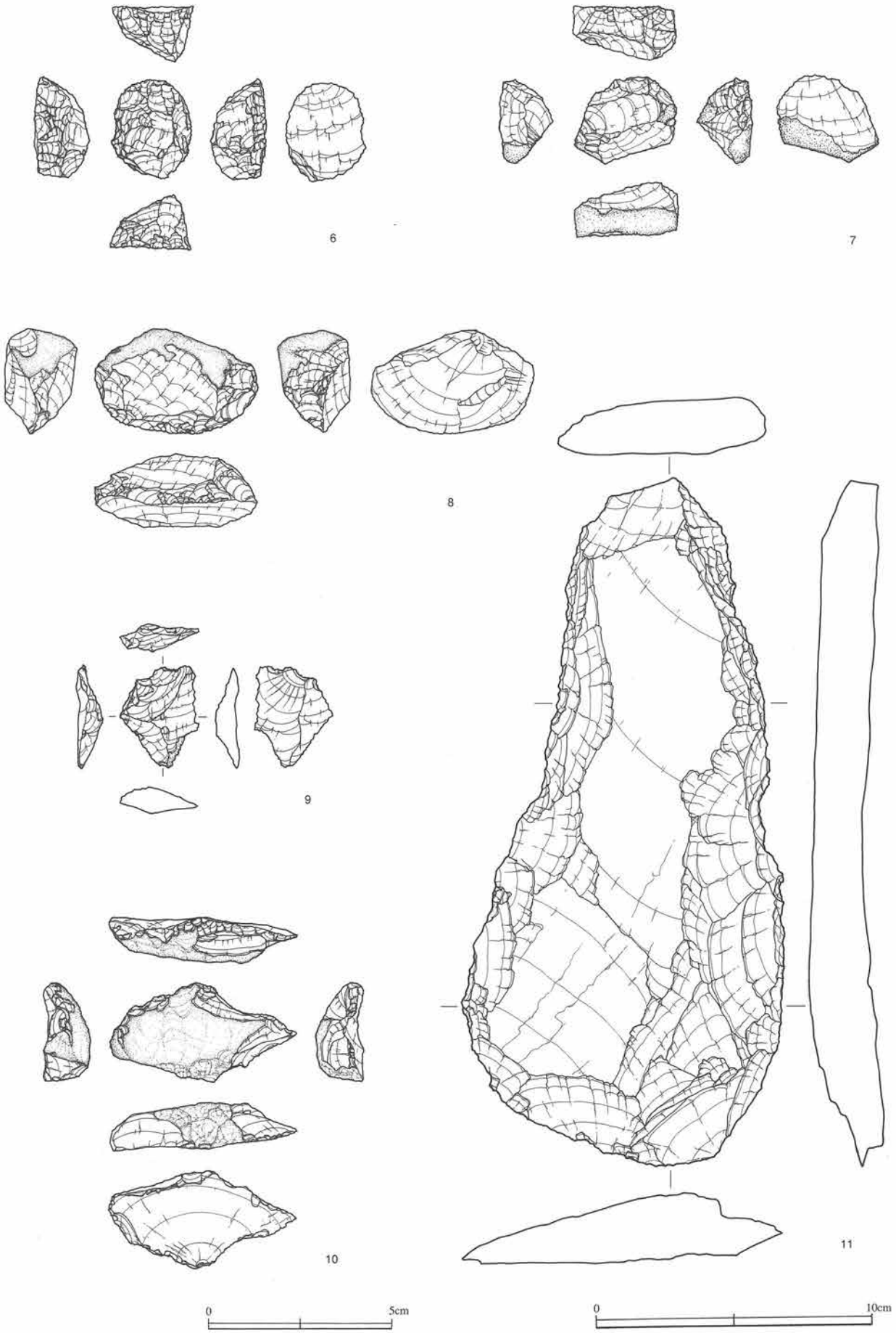
第13図　六日市場遺跡　弥生時代の土器

は縄文が施文されていると理解できる。胎土には海綿状骨針が混入する。５は深鉢の口縁～体部上半部の破片と推測される。施文原体はLR縄文で、外面全体に施文される。頸部には格子目状の沈線が施されている。胎土には海綿状骨針が見当たらず、他の4片に比べると硬い感じの焼成である。

これらの弥生土器片が出土したＳＤ１、ＳＤ２は12世紀に開口していた溝である。よって、この埋土中から出土した弥生土器片は原位置を保っておらず、二次的に溝内に混入した可能性が高い。しかしながら、出土した弥生土器片は複数以上の個体が存在し、時期的にもまとまりがみられる。よって、弥生土器が使用された場所は出土位置と大きく隔たっていないと考えられる。

（２）石　　器（第14図、写真図版15）

ＳＤ１埋土中からは６点の石器が出土している（６～11）。６～９は黒曜石製である。いずれも不透明で縞の入る石質で、宮城県湯ノ倉産と推定される。６～８はスクレイパーである。６は最大長2.6cm・最大厚1.5cmと小形・厚手で、断面はカマボコ形を呈する。側縁全周に裏面からの急斜度調整が施され、弧刃形の刃部が形成されている。素材剥片の形態は不明であるが、裏面がネガティブであることからその剥離方法は両極剥離による分割と判断される。７は最大長2.8cm・最大厚1.5cmと小形・厚手で、断面はカマボコ形を呈する。素材打点側から左側縁にかけて裏面からの急斜度調整が施され、弧刃形の刃部が形成されている。素材剥片の形態は不明であるが、その剥離方法は裏面が６と同様にネガティブであることから両極剥離による分割と判断される。また、この前段階の作業痕である表面の剥離は素材左側縁側を打面としており、約90度打面転移していることがわかる。同打面付近は自然面（角礫面）が残存し、打面形成は行われていない。自然面はこのほかに素材末端側と表面の一部にも残存しており、ここから素材礫は６cm程度と推定される。刃部の形成範囲については、既形成箇所以外の側縁との成す角度はすべて鈍角であり、これ以上の作出は困難である。８は資料中最も大きく、最大長4.4cm・最大厚2.0cmを測る。断面はカマボコ形を呈する。素材は横長で、その両側縁から末端部へかけての約半周に裏面からの急斜度調整が施され、弧刃形の刃部が形成されている。なお、右側縁は肉眼で摩滅が確認され、調整後のものであることから使用痕と推定される。素材打点側表面に自然面（角礫）が広く残存しており、打面も未調整である。裏面には極端なポジティブバルブが残存しており、両極剥離の所産と判断される。また、表面の剥離痕がこの打点とほぼ180°違っており、同じ方向での両極剥離が複数回行われていたことが想定される。刃部形成部位は可能範囲をすべて使っており、もし次に再生するとしたら素材分割するほかない。９は剥片である。平面形は逆三角形で、末端部に自然面（角礫）を残存する。裏面の剥離痕が２面あり、比較的大形の剥片をさらに分割した際に生じた剥片と判断される。10は玉髄製の錐である。６・７と同一地点で出土している。横長で５cm以下の素材礫を両極剥離し横長剥片を作出しており、その右側縁打点側に裏面からの急斜度調整を、同末端側に表面からの浅い緩斜度調整をそれぞれ抉入状に施し刃部を形成している。打点付近から左側縁にかけては裏面からの急斜度調整が錐刃部付近から続いており、スクレイパーエッジ状を呈する。表面の大半には自然面が残存する。11は打製の斧形石器で、いわゆる石鍬である。素材は、深く平たく剥がれる性質を持つ青灰色を呈する北上山地産の頁岩で、刃部側半分は片面調整、基部側半分は両面調整で整形される。刃部は直線的で、摩滅等は確認されない。



第14図　六日市場遺跡　石器（6～11）

（3）土師器・須恵器（第15図、写真図版16）

10世紀以前の土師器、須恵器は14片図示した。土師器11片、須恵器３片である。図示したものの重量の合計は790.9gである。他に図示していない土師器が3,285gある。重量での掲載率は19％である。不掲載土師器のほとんどはＳＤ１の埋土から出土している。観察表中の「残存率」は厳密なものではなく、目分量の感覚的なものである。また「色調」は器外面の面積の大きい色について、土色帳を用いて記載した。「調整」は表のスペースの関係で、全部の調整を記していない場合もある。不足の分は実測図から読み取っていただきたい。

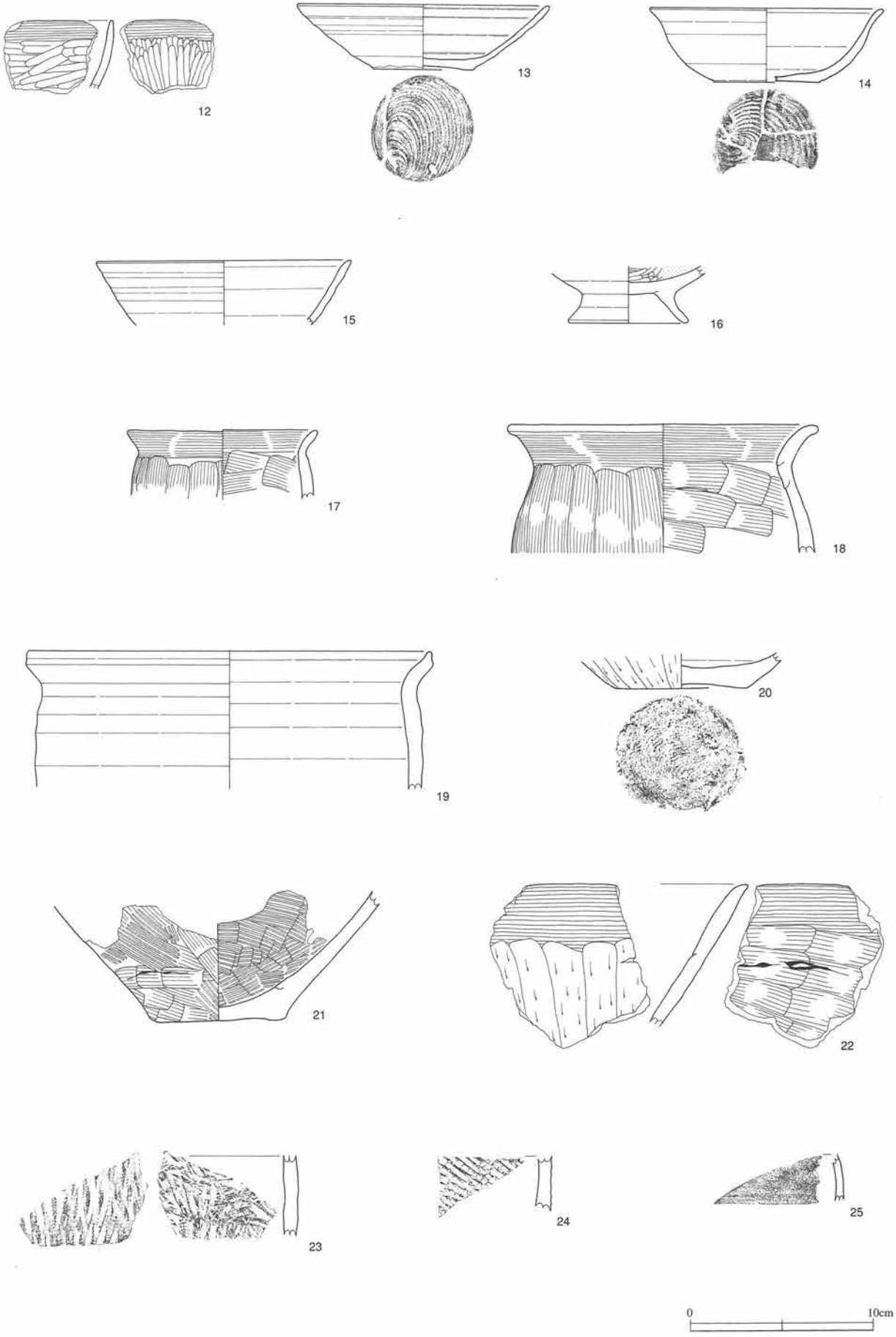
12は古墳時代（５～６世紀）の可能性がある坏形土器片である。内外面、破断面ともに明赤褐色を呈しており、石英の多い砂粒が混入する胎土である。内外面ともに口縁上端はヨコナデ、下半部にはヘラミガキが施される。時期について小破片であり、断定は難しいが、形状、色調から５世紀末～６世紀初頭のものである可能性が高いと思われる。SD１からは黒曜石製スクレイパーが出土（６～９）しているが、本土師器が時代的に伴い得る可能性が高い。13は内外面ロクロ調整のみの土師器坏である。内外面ロクロ調整のみであるが土師質の焼成であり便宜的に「土師器」の名称を用いている。皿型というほどではないが器高が低い個体である。胎土は橙色で堅緻な焼成である。15は内外面ロクロ調整のみの土師器坏である。口縁部が僅かに外反している。胎土は橙色で全体的に器面が磨耗している。15は内外面ロクロ調整のみの土師器坏である。底部が欠損している。16は高台付坏である。坏部はロクロ調整で高台は付け高台である。高台内には回転糸切の痕跡が認められる。内面はヘラミガキで黒色処理が施される。胎土は灰白色で海綿状骨針が混入している。17は小型のロクロ不使用土師器長胴甕である。口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデである。胎土には砂粒が多量に混入するが海綿状骨針は認められない。18は大型のロクロ不使用土師器長胴甕である。全体が磨耗しており、調整を読み取り難いが、口縁部はヨコナデ、体部はヘラナデと判断される。胎土は橙色で砂粒が多量に混入する。海綿状骨針の混入はみられない。19はロクロ使用の土師器長胴甕である。下半部は欠損しておりロクロ調整の部位のみである。ロクロ調整の下地は入念に観察したがタタキ目は存在していない。胎土は浅黄橙色で砂粒が多量に混入している。海綿状骨針はみられない。20はロクロ使用長胴甕の底部破片である。底面には回転糸切痕があるが、大型の長胴甕である。砂粒が多量に混じり、海綿状骨針を混入しない胎土である。21はロクロ不使用の土師器球胴甕と推測される。外面はハケメとヘラナデ、内面にはハケメ調整が施される。底面は磨耗してはっきりしないが、ヘラナデが施されていると推測される。22はロクロ不使用の土師器堝である。外面はヨコナデ、ヘラケズリ、内面はヨコナデ、ヘラナデの調整が施される。23・24は須恵器大甕である。23の内面にはアテ具痕があるが、24の内面にはアテ具痕がない。53は須恵器甕の体部上半の破片と思われる。褐灰色の精緻な胎土である。

これらの土師器・須恵器は同時代の一括性のある状態での出土ではない。よって、詳細な年代観を示すのは不可能である。個々の形態から年代の概略を示すと、12は上述のように古墳時代の可能性がある。21は形態から８世紀代の可能性。他のものは９～10世紀といった年代観が示される。

今回の六日市場遺跡の調査区内には土師器時代の住居跡は存在しなかった。出土したほとんどの土師器、須恵器は12世紀に開口していたＳＤ１・ＳＤ２からの出土であり、ＳＤ１・ＳＤ２の上流部に土師器集落の存在が予想される。

（4）12世紀のかわらけ（第16図、写真図版16～18）

今回図示した12世紀に属すると思われるかわらけは23個を図示した。ロクロかわらけ11個、手づく



第15図　六日市場遺跡　土師器、須恵器

ねかわらけは12個である。掲載したロクロかわらけの合計重量は950g、掲載した手づくねかわらけの合計重量は1,430gで総量2,380gである。掲載していない12世紀のかわらけは、ロクロかわらけが合計重量1,765g、手づくねかわらけの合計重量5,180gである。かわらけの総出土重量はロクロかわらけ2,715g、手づくねかわらけ6,610gで合計9,325gである。重量比での掲載率は26％になる。ロクロかわらけと手づくねかわらけの出土量は重量比で、１対2.43となる。

観察表の「種別」で「Ｄ３」等の記号が記してあるのは、手づくねかわらけの口縁部のナデ分類である。「種別」にこの記号が記してあるのは手づくねかわらけと読み取っていただきたい。口縁部分類記号は以下のとおりである。

Ｄ３・・・・口縁部１段なで、口唇部面取りなし
Ｄ４・・・・口縁部１段なで、口唇部面取りあり
Ｃ３・・・・口縁部２段なで、口唇部面取りなし
Ｃ４・・・・口縁部２段なで、口唇部面取りあり
内折・・・・コースター状のかわらけ（今回の出土はなし）

「残存率」は完形のものを100％とした百分率で示している。その基準として、柳之御所遺跡の完形のかわらけの重量を測定し、その平均値を求め、それとの重量比較で残存率を求めた。完形かわらけの重量測定は、ロクロ小型、ロクロ大型、手づくね小型、手づくね大型それぞれについて150個の完形品の測定を行い、平均値を求めた。その値は、ロクロ小型かわらけは70g、ロクロ大型かわらけは236g、手づくね小型63g、手づくねかわらけ176gである。しかしながら、この重量比率では100％を越える値になるものも発生する。これらの個体については、実物を肉眼で観察し感覚的に求めた残存率を記している。「色調」は器表面の面積の大きい色調を、土色帳を用いて観察した。

26は小型ロクロかわらけである。12世紀後半のかわらけと比較すると底径（5.0cm）が小さく、12世紀前半のかわらけと考えられる。胎土は橙色で海綿状骨針が多量に混入している。全体が磨耗している。底面にはすのこ痕が付く。27は大型のロクロかわらけで完存品である。器高が高く（4.2cm）、底径が小さい（5.2cm）器形で、12世紀初頭に位置付けられる。胎土は橙色で海綿状骨針が混入する。底面と底辺部にはすのこ痕がついている。28はロクロ大型かわらけである。底部を欠損するが、27と類似する器形と推定され、12世紀初頭の位置付けが可能である。

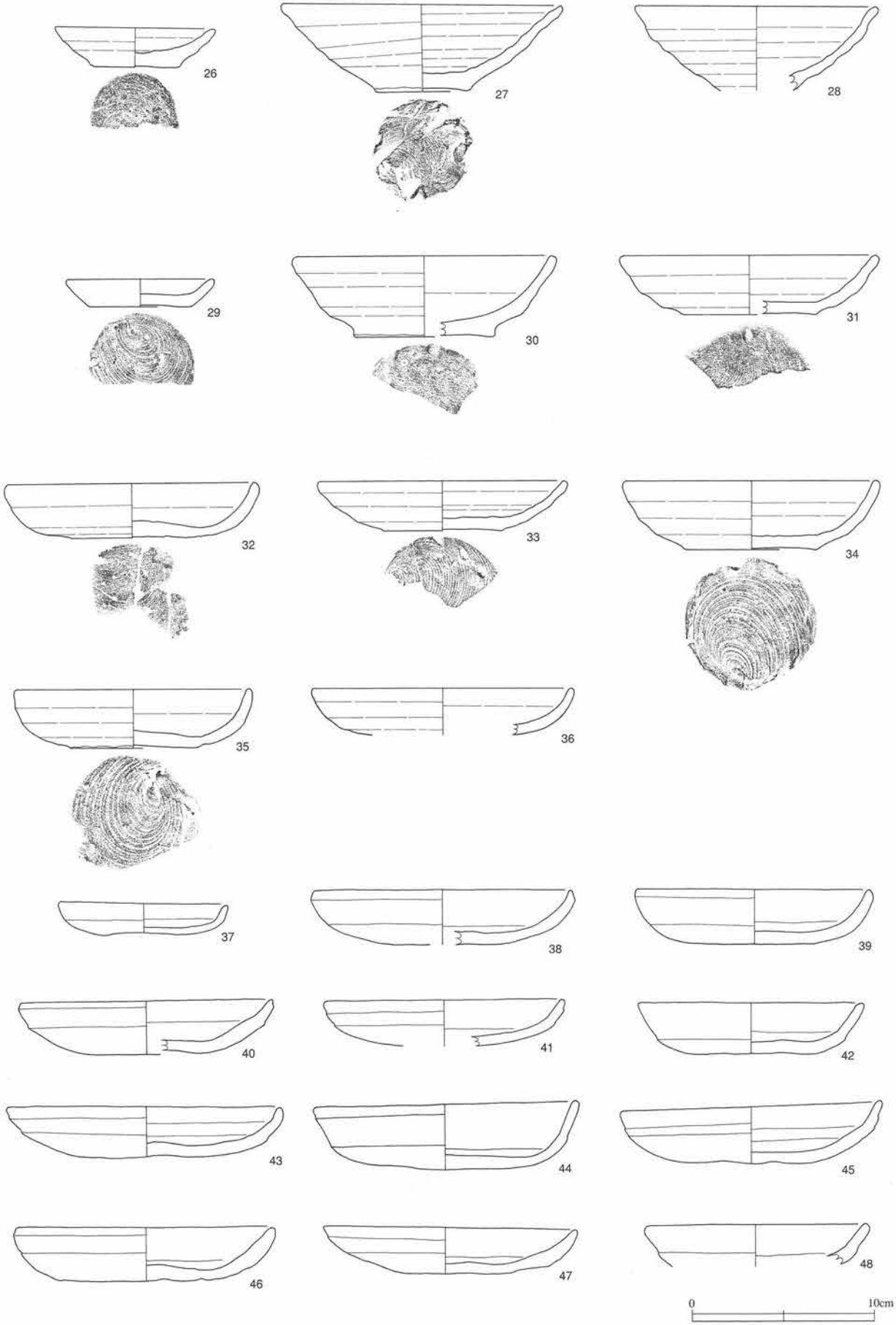
29～36はロクロかわらけである。器形からいずれも12世紀後半のものである。29は小型かわらけである。橙色の胎土で海綿状骨針が混入する。30～36は大型のかわらけである。30は口唇部内外面に油煙が付着する。33は内面のロクロ調整をハケメ状の工具でおこなっている。36は底部が欠損している。

37～48は手づくねかわらけである。37は小型かわらけ、他は大型かわらけである。37の胎土には僅かに海綿状骨針が混入する。40・43・45の内外面には油煙が付着する。42の内底面にはハケメ状の調整が顕著である。

今回の六日市場遺跡の出土のかわらけのほとんどは、SD１からの出土である。しかしSD１からは弥生土器や土師器も出土しており、かわらけについても、同時廃棄の一括性のあるものではない。

（５）12世紀の国産陶器（第17図、写真図版18）

12世紀に属する国産陶器は13点を図示した。出土した全点を掲載している。常滑産陶器は12点、合計重量1,064.7gが出土し、渥美産陶器は1点、重量52.8gが出土している。観察表中の「釉、色調」は外面の色調について土色帳を使用して観察している。また「分類・年代」については、小破片が多く、詳細な形式分類ができなかった。遺跡から出土したかわらけの年代観などから類推して、いずれの年



第16図　六日市場遺跡　12世紀のかわらけ

代も12世紀のものとしている。

49・50は常滑産陶器の片口鉢である。49は３破片（口縁部１片、底辺部２片）に分かれているが、同一個体と判断し、図上で器形を復元した。高台畳付以外は器形全体を復元できた。口縁部は僅かに外反し、体部下半にはロクロ回転のヘラケズリが施される。内面見込み付近には重ね焼きの際の、他個体の片口鉢の畳付端部が窯着している。この窯着が仕切りとなって、これを境に内面上部には自然釉が付着し、下半部は無釉になっている。内底面は使用により磨耗している。50は片口鉢の口縁部片である。口縁部は僅かに外反し、内面に自然釉が薄くかかる。

51・52は常滑産陶器の広口壺と推測される。51は口縁部破片で、内面口唇部には沈線状の窪みを有する。52は２破片の底部～底辺部片から図を合成した。内面には自然釉、外底面には砂粒が付着している。外面底辺部にはナデ調整が施される。

53～57は同一個体の常滑産甕片と推測される。53～54には同一の押印が認められる。部位はいずれも体部下半である。押印の下には縦位のナデ調整が施されている。58は常滑産甕の体部中央部の破片である。質感、外面の色調は53～57と類似し、同一個体の可能性も高いが、内面の色調が異なっており、同一個体か否か確定できない。破片の上端部に押印が僅かに認められる。59は常滑産甕の体部片である。破片には押印が無いが、厚み等から甕の破片と判断した。60は常滑産甕の肩部の破片である。胎土には粒子の大きい砂粒が混じり、硬い焼成で、常滑産と判断できる。

60は渥美産陶器の甕片である。外面は全面に灰が付着している。細田遺跡出土片（細田遺跡掲載番号38）と同一個体と推測される。

（６）12世紀の中国産磁器（第17図、写真図版19）

12世紀に属する中国産磁器は、白磁碗１点（62）のみの出土である。口縁部が玉縁で、化粧土はない。色調は灰白色を呈する。胎土は灰白色で黒い粒が混じる。小破片であるが、口径を推測（14.9cm）している。大宰府分類の碗Ⅳ類で、12世紀後半の年代である。

（７）鉄　製　品（第18図、写真図版19）

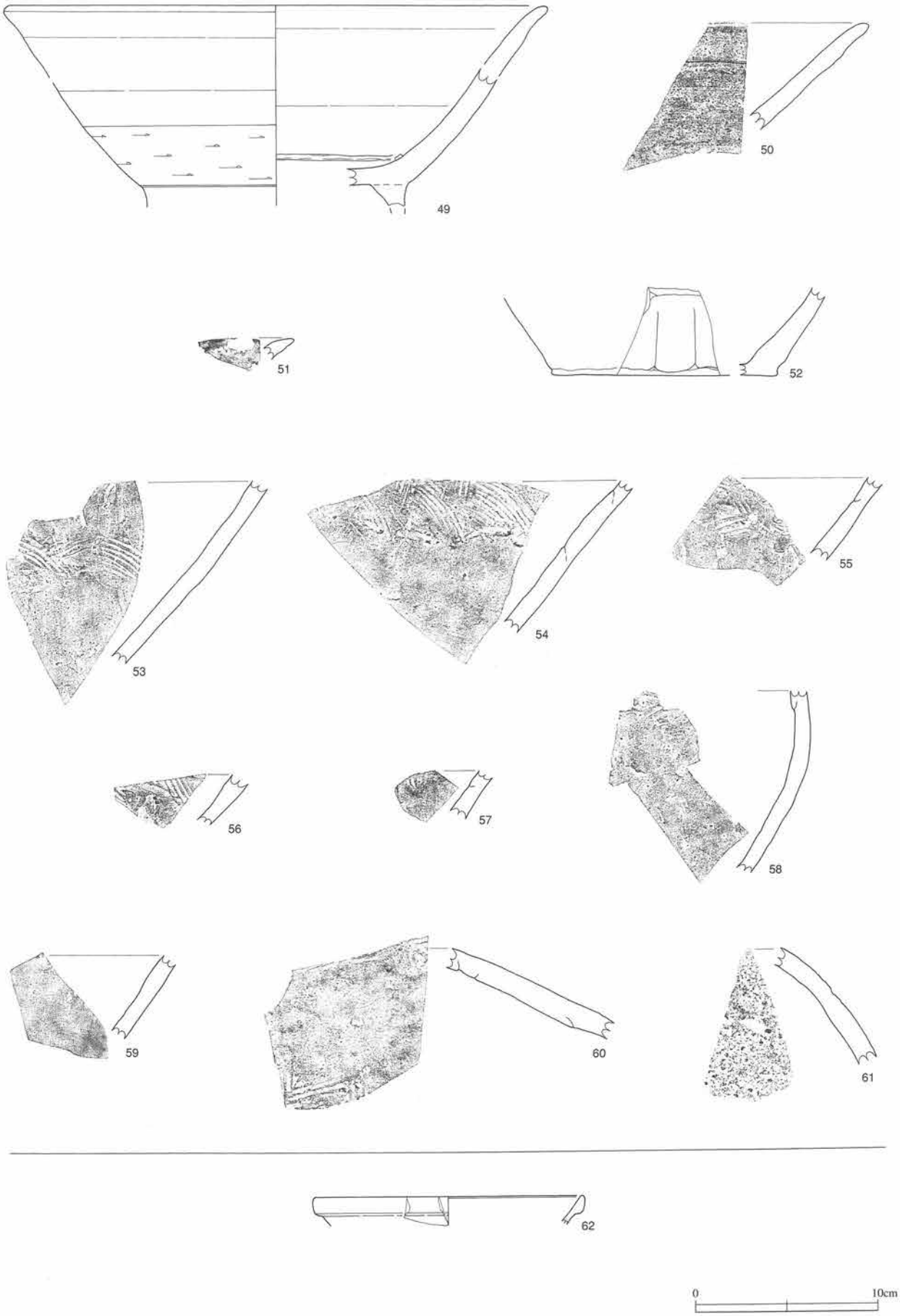
鉄製品は、短刀１振り、はさみ１点、釘７点（確定できないものも含む）、刀子１点、不明製品２点が出土している。出土した全品を図示している。観察表中の「保存処理No.」は保存処理に委託した際に付し番号である。保存処理は岩手県立博物館に委託した。

63は短刀である。柄部の端部が欠損する他は完存品である。残存長は30.2cmで、１尺の長さに造られていると理解できる。レントゲン写真の観察では柄部の「まち」寄りに目釘穴が認められる。また柄部には木質の痕跡が認められるが、刀身部には木質が観察できず、抜身であった可能性がある。この短刀の形態から時期を推測することは難しいが、出土した遺構SD１の年代観と、そこから出土しているかわらけ、国産陶磁器の年代観から、12世紀に属する可能性が想定される。

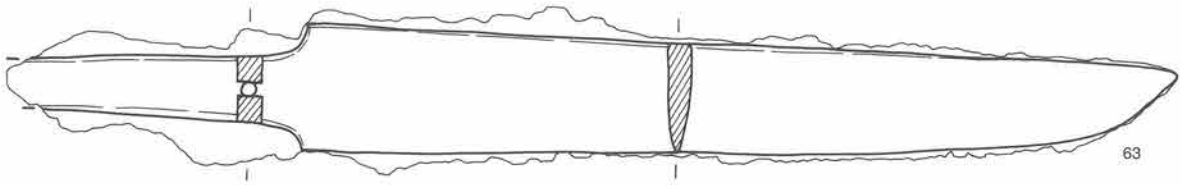
64ははさみである。握り部分の一部を欠損するが全体形を知ることができる。握り部分の断面は長方形である。刃部が細身であるのが特徴的である。形態から時期を求めるのは難しいが、出土遺構、供伴遺物から12世紀に属する可能性が想定される。

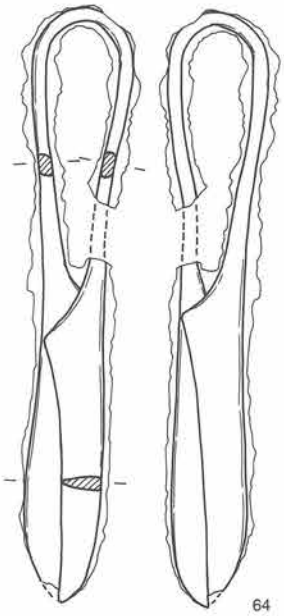
65・66は釘である。65は完存品で長さ10.6cmである。66は頭部を欠損し、残存部も曲がっている。時期は不明であるが、12世紀の可能性が考えられる。67・68は断面四角形の棒状製品で、釘の可能性があるが両端を欠損しており、製品を確定できない。両方とも鏃の可能性も考えられる。

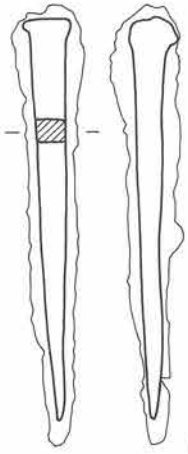
69は刀子である。刃部の先端部と柄部を欠損している。70は釘である。頭部を欠損し、残存部も曲

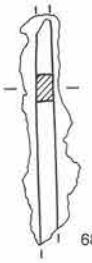


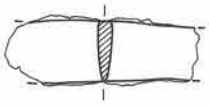
第17図　六日市場遺跡　12世紀の国産陶器、中国産白磁

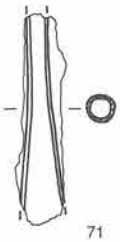


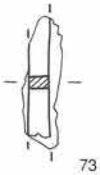












第18図　六日市場遺跡　鉄製品

がっている。71はソケット状の不明製品である。両端部が欠損している。72は断面が円形の棒状の不明製品である。両端が欠損している。73、74は断面が四角形で釘の可能性が考えられる。67～74の年代は、出土遺構と共伴遺物から12世紀の可能性が考えられる。

（8）その他の遺物（写真図版20）

実測図を作成、掲載しなかったが、鉄滓と馬の骨、歯が出土している。これらは写真のみを掲載している。

鉄滓は塊状のもの２点と、椀型のもの２点がＳＤ１埋土から出土している。いずれも錆色を呈し、鍛冶滓と判断される。時期は特定できないが、12世紀の可能性と、出土した土師器の年代観から、８～10世紀の可能性もある。

馬の歯、骨はＳＤ１の埋土中位から出土した。ＳＤ１のプランは南部で西側に曲がるが、溝の曲がりが西側に転じた付近（ＶＰ３ｆ）での出土である。野外調査時は、歯のみが並んで出土したと認識していたが、持ち帰ってクリーニングしたところ、歯に顎の骨が付着していることが確認できた。歯に比較すると、骨は腐食しやすく、大半が腐食した状態になったと判断できる。よって、この状況は歯が並ぶ顎の骨が埋もれていたと理解できる。しかし、出土した骨が下顎骨か頭蓋骨かは判断できていない。いずれにせよ、上顎か下顎か、どちらか片方分しかないことは判断できた。歯は奥歯の部分が左右の並びを保っているが、その歯と歯の間の幅は約10cmである。この馬の骨、歯の年代は確定が難しいが、出土したＳＤ１の年代観から12世紀に属する可能性が高い。

六日市場遺跡　弥生土器観察表

No.	種　別	出土位置	備　考	重量(g)
1	深鉢	SD2埋土(VQ5d)	高さ6.4cm　RL縄文　口唇部にも縄文施文　口縁部がわずかに膨隆　頸部に波状の沈線文	46.6
2	深鉢	SD2埋土下位(VQ5d)	高さ9.0cm　RL縄文　1と同一個体　頸部に波状の沈線文　外面炭化物付着	56.9
3	深鉢	SD1埋土(VP6i)	高さ4.2cm　RL縄文　口唇部にも縄文施文	21.6
4	壺	SD2埋土(VQ6d)	高さ5.1cm　RL縄文　頸部に1条の沈線　口唇部?にも縄文施文	33.3
5	深鉢	SD1埋土下位(VP6i)	高さ7.2cm　LR縄文　頸部に格子目状の沈線	90.5

六日市場遺跡　石器観察表

No.	出土位置	器　種	法量(cm)			重量(g)	石　質	備　考
			長さ	幅	厚さ			
6	SD1(VP5h)　埋土上位	スクレイパー	2.6	2.2	1.5	8.19	黒曜石・湯ノ倉	弧刃形(全周)　刃部角66-90°
7	SD1(VP5h)　埋土上位	スクレイパー	2.3	2.8	1.5	0.61	黒曜石・湯ノ倉	弧刃形(1/4)　刃部角66-75°
8	SD1　埋土上位	スクレイパー	2.3	4.4	2.0	21.59	黒曜石・湯ノ倉	弧刃形(1/2)　刃部角70-87°
9	SD1(VD4g)	剥片	2.7	2.1	0.6	2.39	黒曜石・湯ノ倉	
10	SD1(VP5h)　埋土上位	石錐	2.7	5.05	1.3	14.52	玉髄・奥羽山脈	
11	SD1　埋土	斧形石斧(石鍬)	25.1	11.7	2.4	834.30	頁岩・北上山地	

六日市場遺跡　土師器、須恵器観察表

No.	種　別	器　種	出土位置	法量(cm)			残存率	重量	調　整	色　調	備　考
				口径	器高	底径	(%)	(g)			
12	土師器	坏?	SD2埋土中位(VQ6d)	—	(3.6)	—	3	11.8	ヨコナデ　ヘラミガキ	明赤褐	内外面ヘラミガキ
13	土師器	坏	SD1埋土上位	13.7	3.5	5.5	50	67.2	ロクロ	橙	回転糸切
14	土師器	坏	SD1埋土上位	12.7	4.0	5.8	60	87.8	ロクロ	橙	回転糸切　内外面磨耗
15	土師器	坏	SD1埋土上～中位(VP4f～3f)	14.0	(3.5)	—	20	30.1	ロクロ	橙	内外面磨耗
16	土師器	高台付坏	SD1遺物集中埋土中位(VP5h)	—	(3.1)	6.4	40	70.0	ロクロ　ヘラミガキ	灰白	内面黒色処理　付け高台
17	土師器	長胴甕	SD1埋土(Cベルト)	10.2	(3.6)	—	5	21.7	ヘラナデ	明褐	小型の長胴甕
18	土師器	長胴甕	SD1埋土	16.9	(7.0)	—	3	67.2	ヘラナデ	橙	外面炭化物付着
19	土師器	甕	SD1埋土(VP6h～5h)	22.0	(7.5)	—	3	77.6	ロクロ	浅黄橙	ロクロ長胴甕　下地のタタキ目見えない
20	土師器	甕	SK3埋土	—	(1.5)	7.0	2	118.3	ヘラケズリ	にぶい褐	ロクロ長胴甕の底部　底面回転糸切
21	土師器	球胴甕	SD1埋土下位(VP4f)	—	(7.0)	7.6	3	125.0	ハケメ　ヘラナデ	橙	底面ナデ調整?
22	土師器	塝	SD1埋土	—	(7.7)	—	3	67.9	ヘラケズリ　ヘラナデ	橙	ロクロ不使用
23	須恵器	大甕	SD1埋土上位	—	(4.3)	—	1	28.0	タタキ目　アテ具	灰	格子目状タタキ目
24	須恵器	大甕	SD1埋土上位	—	(3.1)	—	1	10.4	タタキ目	灰褐	格子目状タタキ目
25	須恵器	大甕	T3検出面上面	—	(3.5)	—	1	7.9	ロクロ	褐灰	T3は調査区西側

六日市場遺跡　かわらけ観察表

No.	規格	種　別	出土位置	法量(cm)			残存率	重量	色　調	備　　考
				口径	器高	底径	(%)	(g)		
26	小	ロクロ	SD1埋土	8.8	2.1	5.0	47.6	33.3	橙	12世紀前半のかわらけか　底面にすのこ痕　全体に磨耗
27	大	ロクロ	SD1埋土	15.2	4.2	5.2	100.0	218.7	橙	12世紀前半のかわらけか　底面にすのこ痕　胎土に海綿状骨針多量混入
28	大	ロクロ	SD1埋土	13.2	(4.6)	—	9.3	21.9	橙	12世紀前半のかわらけか　底部欠損
29	大	ロクロ	SD1埋土上位	8.0	1.5	5.5	18.2	42.9	橙	底面にすのこ痕
30	大	ロクロ	SD1埋土(VP4f)	14.0	4.4	5.8	22.8	53.7	橙	口縁部上端内外面油煙付着　磨耗してる
31	大	ロクロ	SD1埋土	14.0	3.4	7.4	25.8	60.8	橙	底面にすのこ痕
32	大	ロクロ	SD1埋土上位	13.5	2.9	6.2	32.8	77.4	黄橙	底面にすのこ痕　磨耗著しい
33	大	ロクロ	SD1埋土(VP4i)	13.2	2.7	6.6	22.7	53.5	黄橙	底面にすのこ痕
34	大	ロクロ	SD1埋土上位(VP3f～4f)	13.7	3.8	7.2	49.8	117.6	浅黄橙	口縁部内面に油煙付着
35	大	ロクロ	SD1埋土上位	12.8	3.2	6.8	34.8	82.1	浅黄橙	底面にすのこ痕　磨耗著しい
36	大	ロクロ	SD1埋土上位(VP3e)	14.1	(2.6)	—	32.5	76.6	橙	底部欠損
37	小	D3	SD1埋土上位	9.2	1.8	—	90.0	53.8	灰黄褐	内外面磨耗
38	大	D4	SD1埋土上位(VP5g)	14.1	3.0	—	38.5	67.7	にぶい黄橙	内底面指によるなで
39	大	D4	SD1埋土上位(VP3e)	12.7	3.0	—	59.9	105.4	にぶい黄橙	内外面磨耗
40	大	D4	SD1埋土上位(VP3e)	13.8	2.9	—	37.1	65.3	にぶい黄橙	胎土に金雲母混入
41	大	C3	SD1埋土上位(VP3e)	13.0	(2.5)	—	26.6	46.8	にぶい黄橙	胎土に海綿状骨針わずかに混入
42	大	D3	SD1埋土上位(VP3f～4f)	12.2	2.8	—	41.6	73.2	浅黄橙	内底面ハケメ状工具によるなで
43	大	C3	SD1埋土上位(VP5g)	14.8	2.8	—	85.9	151.1	にぶい黄橙	内面に油煙付着
44	大	D4	SD1埋土上位(VP3e)	14.3	3.6	—	84.9	149.5	にぶい黄橙	内外面磨耗
45	大	C3	SD1埋土上位	14.2	3.2	—	100.0	211.5	にぶい黄橙	内底面ハケメ状工具によるなで
46	大	D4	SD1埋土上位	14.2	2.9	—	95.0	198.3	にぶい黄橙	内外面に黒斑がある
47	大	C3	SD1埋土上位	13.8	2.5	—	90.0	174.9	にぶい黄橙	内底面指によるなで
48	大	D3	SD2Dベルト埋土	9.9	(2.2)	—	8.6	15.2	にぶい黄橙	内外面磨耗

六日市場遺跡　国産陶器観察表

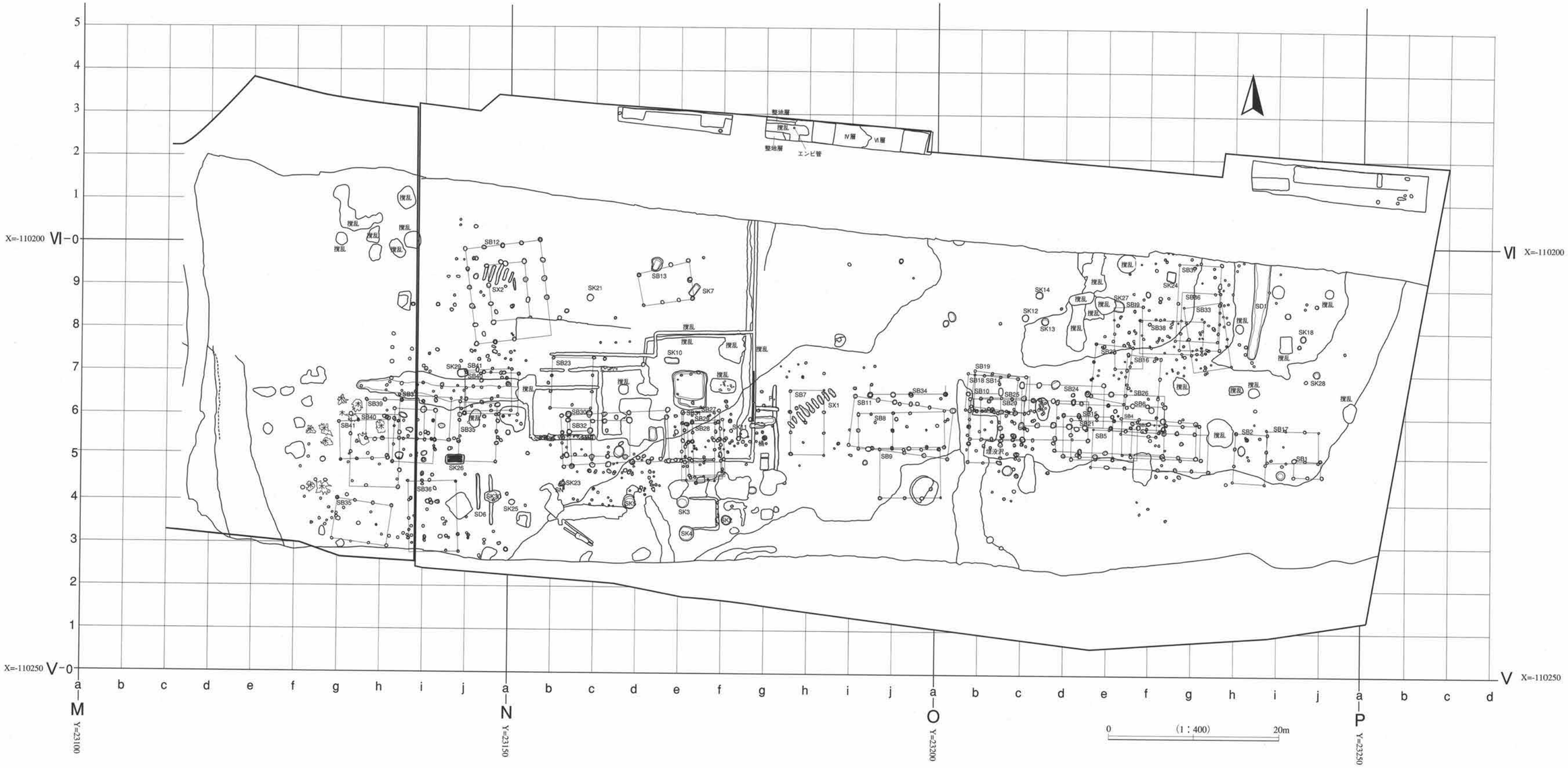
No.	種別	器　種	部　位	出土位置	釉・色調	分類・年代	重量(g)	備　　考
49	常滑	片口鉢	完形	SD1埋土上位(VK5h) VP2d検出時 SD1埋土上位(VP6h)	明青灰	12世紀 12世紀 12世紀	338.4	図は3破片から合成 内面自然釉付着 見込み使用により磨耗
50	常滑	片口鉢	口縁部	村道北側重機掘削時	灰	12世紀	50.3	内面自然釉
51	常滑	広口壺	口縁部	SD1埋土上位	暗褐	12世紀	4.1	内面自然釉
52	常滑	広口壺	底～体部下半	SD1埋土上～中位(VP3f～4f) SD1Eベルト埋土上位	にぶい褐	12世紀 12世紀	105.7	2破片から合成 外底面砂粒付着
53	常滑	甕	体部下半	SD1埋土上位	暗赤褐	12世紀	106.5	54～57同一個体
54	常滑	甕	体部下半	SD1埋土上位	暗赤褐	12世紀	141.6	破断面灰色
55	常滑	甕	体部下半	SD1埋土上位	褐灰	12世紀	41.9	
56	常滑	甕	体部下半	SD1埋土上位　Eベルト	褐灰	12世紀	14.1	
57	常滑	甕	体部下半	SD1埋土上位	暗赤褐	12世紀	10.3	
58	常滑	甕	体部中央	SD1埋土上～中位(VP3f～4f) SD1埋土上位(VP5h)	暗赤褐	12世紀 12世紀	62.1	2破片接合 上端部にわづかに押印あり
59	常滑	甕	体部下半	SD1埋土上位(VP3f村道北)	暗赤褐	12世紀	35.1	破断面灰色
60	常滑	甕	肩部	SD1埋土上位	にぶい暗褐	12世紀	154.6	胎土砂粒混じる
61	渥美	甕	体部上半	SD1埋土上位	にぶい黄	12世紀	52.8	外面灰かぶり

六日市場遺跡　中国産磁器観察表

No.	種　別	器　種	部位	出土位置	分類・年代	備　　考
62	白磁	碗	口縁部	SD1埋土(VP3e　Eベルト南側)	大宰府分類Ⅳ類　12世紀後半	

六日市場遺跡　鉄製品観察表

No.	種　別	出土位置	法量(cm)			重量(g)	備　　考	保存処理No.
			長さ	幅	厚さ			
63	短刀	SD1　Bベルト南埋土上位	(30.2)	3.8	0.8	243.9	柄端部欠損	1
64	はさみ	SD1　Cベルト北側埋土上位	15.7	2.8	0.7	55.9	和はさみ　にぎり部断面長方形	2
65	釘	SD1埋土上位	10.6	0.8	0.6	43.5	完存品	3
66	釘	SD1埋土上位	4.0	0.8	0.5	11.8	頭部欠損　曲がっている	4
67	釘？	SD1埋土上位	(3.0)	0.4	0.4	2.0	両端欠損　鏃の可能性もあるか	5
68	釘？	SD1埋土上位	5.9	0.5	0.7	11.3	両端欠損　鏃の可能性もあるか	6
69	刀子	SD1　Cベルト埋土上位	(5.1)	1.1	0.4	10.7	刃部の破片	7
70	釘	SD1　Bベルト埋土上位	3.6	0.6	0.5	7.6	頭部欠損　曲がっている	8
71	不明	SD2埋土上位(VQ3d)	(5.6)	1.1	0.1	11.7	ソケット状の製品	9
72	不明	SD1埋土上位	(3.6)	0.5	0.6	1.7	断面形丸い	10
73	釘	SD1埋土上位	(3.2)	0.5	0.3	1.7	両端欠損	11
74	釘	SD1埋土上位	(3.5)	0.5	0.6	1.7	両端欠損	12



第19図　細田・接待館遺跡東遺構全体図

Ⅴ 細 田 遺 跡

1 検出された遺構

(1) 調 査 区 概 観

細田遺跡の調査範囲は面積5,400㎡で幅（南北）約55m、長さ（東西）110mの範囲である。この内、調査区北側には幅約９mの村道が走り、調査範囲を南北に隔てている。村道の北側の調査区は幅（南北）２～４mの狭い範囲になり、村道南側の調査区は幅（南北）40mの広さになっている。

調査範囲の遺構検出面の標高24m前後で概ね平坦な地形を呈する。調査前は畑、宅地として使用されていた。調査区中央を斜めに走る幅８～12m黒色のプランが走るが、これは遺構構築以前の埋没沢の痕跡と推測される。いずれの検出遺構よりも古いもので掘り下げはおこなわなかった。

検出された遺構は、柱穴1006個、掘立柱建物41棟、土坑30基、溝８条、波板状遺構２基である。遺構の年代は確定できないものが多いが、確実なものとして、12世紀と近世に属するものがある。

(2) 掘立柱建物跡（ＳＢ）

細田遺跡では、柱穴状のプランにＰ１からＰ1148までの番号を付した。番号を付したものについて、掘り下げ、埋土の観察、検討をおこなったところ、これらの内、142個が柱穴ではないと判断された。よって、今回の細田遺跡の調査範囲内では1006個の柱穴が存在したことになる。柱穴でないと判断したものについてＰ番号は欠番のままとしている。柱穴については観察表にまとめている。これらの柱穴から41棟の掘立柱建物を把握した。

ＳＢ１掘立柱建物跡（第20図、写真図版21・34・50）

〔位置〕ＶＯ４ｉグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕６個の柱穴（Ｐ21・12・18、Ｐ13・16・17）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ18がＳＢ17のＰ622を切っており、ＳＢ17より新しい。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－92°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き320cm（10.6尺）、梁間192cm（6.3尺）で、面積は6.14㎡（1.86坪）である。桁行きと梁間の長さの比は５：３である。

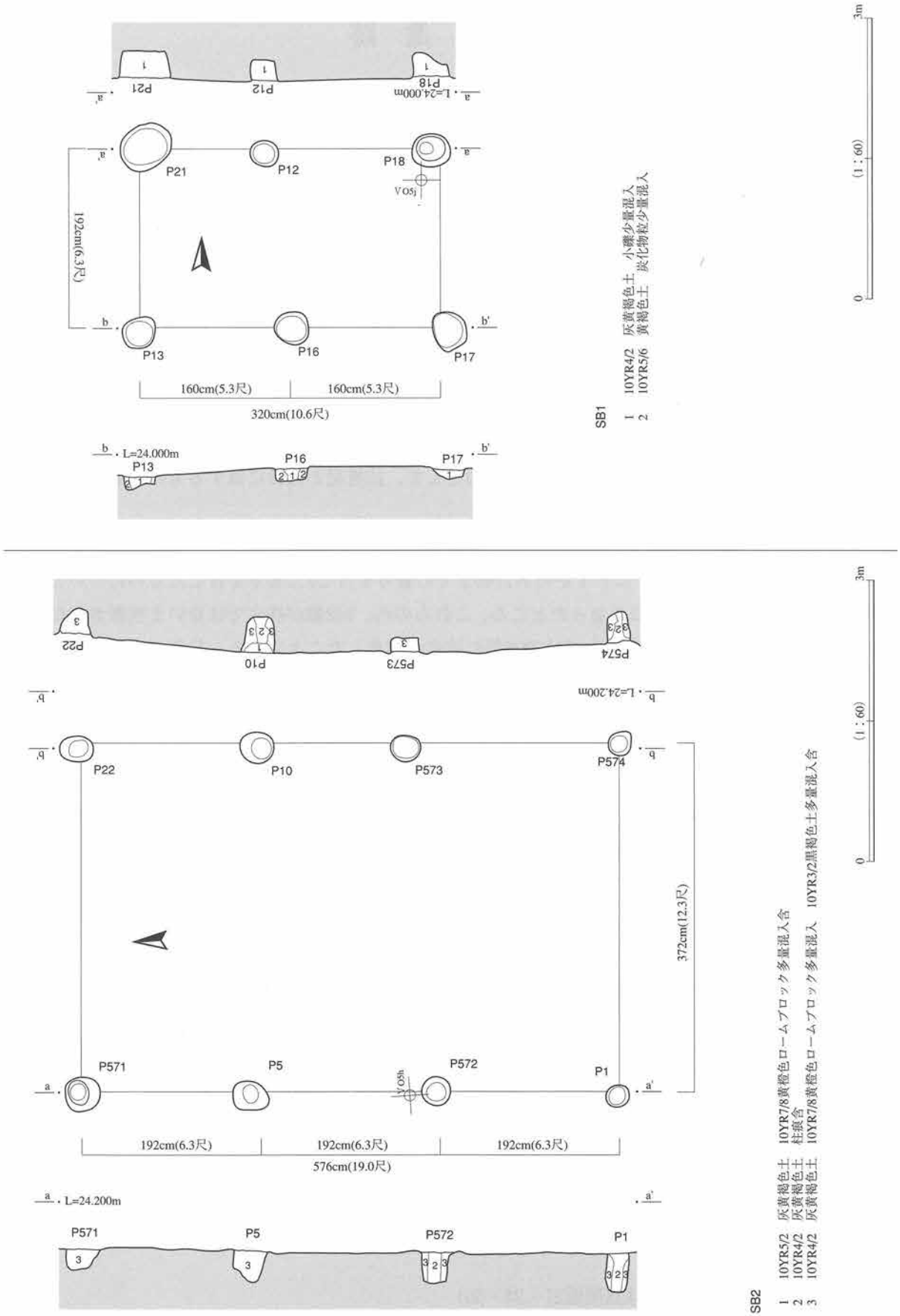
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて160cm（5.3尺）である。160cmを５で割った32cmを用いて１尺′＝32cmと定めると、160cm＝５尺′で、桁行きの320cm＝10尺′、梁間の192cm＝６尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な１尺（30.3cm）を用いず、1尺′＝32cmを基準寸法とした可能性が考えられる。

〔出土遺物〕なし。

〔時期・性格〕建物の規模から付属屋と考えられる。出土遺物がなく、時期は不明である。

ＳＢ２掘立柱建物跡（第20図、写真図版21・34・50）

〔位置・重複〕ＶＯ５ｈグリッド付近に位置する。

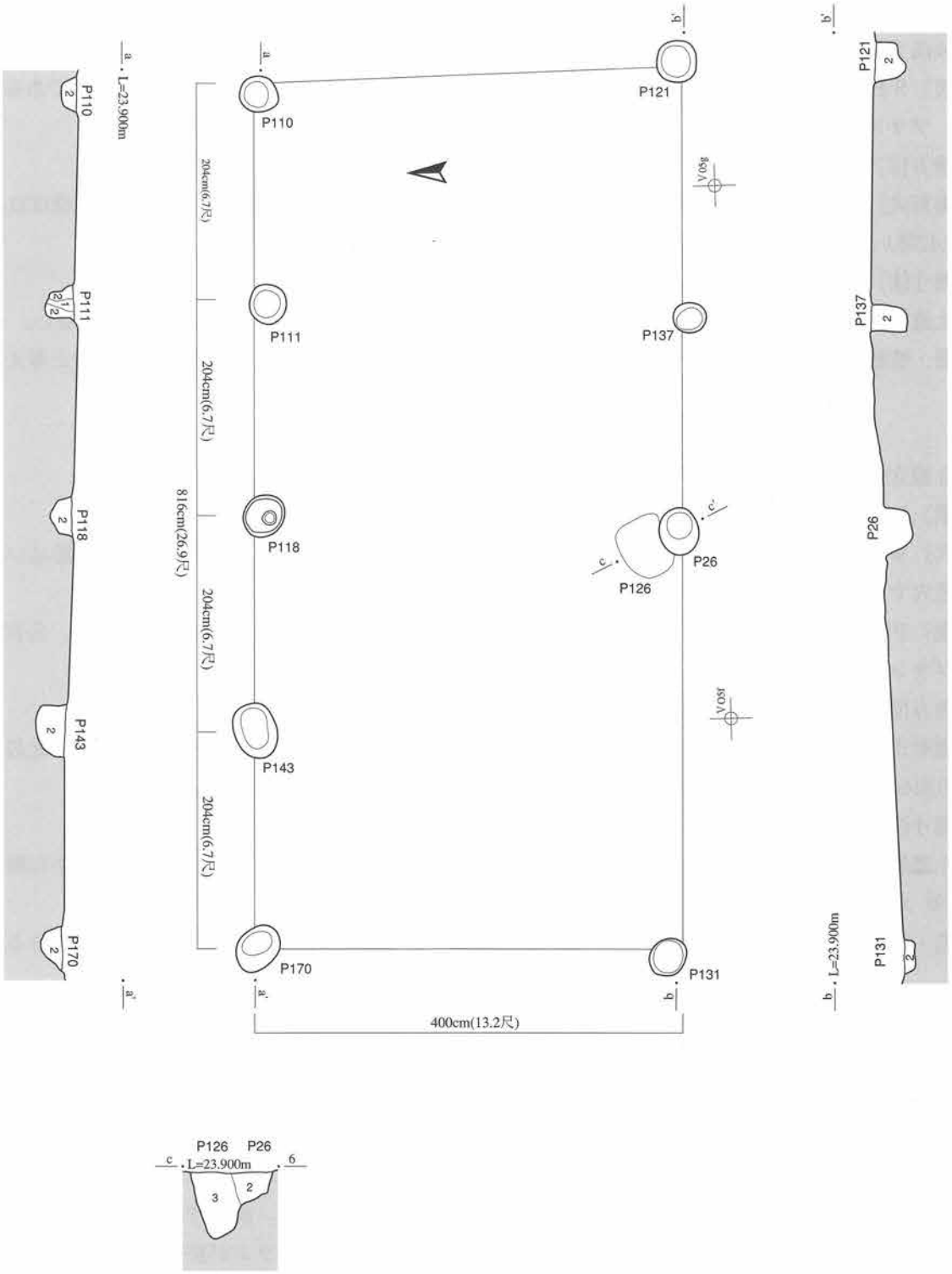


第20図　細田遺跡　SB１・SB２

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ22・10・573・574、571・５・572・１）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕ＳＢ17とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。また、プラン内にＳＫ19が位置する。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－５°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き576cm（19.0尺）、梁間372cm（12.3尺）で、面積は21.43㎡（6.47坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて192cm（6.3尺）である。
〔出土遺物〕Ｐ５から、手づくねかわらけ１片（0.7g）が出土した。小片のため図化していない。
〔時期・性格〕建物の規模から付属屋と考えられる。出土遺物から、時期は12世紀後半以降と考えられる。

ＳＢ３掘立柱建物跡（第21図、写真図版34・50）
〔位置〕ＶＯ５ｆグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕９個の柱穴（Ｐ170・143・118・111・110、131・26・137・121）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ26はＳＢ４のＰ126を切っており、ＳＢ４よりも新しい。ＳＢ５、ＳＢ16、ＳＢ21、ＳＢ26とはプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－92°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。北辺と南辺で長さが異なり、プランは台形である。規模は、北辺が桁行き816cm（26.9尺）、梁間400cm（13.2尺）で、面積は32.64㎡（9.86坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて204cm（6.7尺）である。
〔出土遺物〕Ｐ111から手づくねかわらけ４片（3.7g）・ロクロかわらけ３片（6.4g）、Ｐ118から陶器鉢（79）が出土した。79は、18世紀前半の肥前産と考えられる。
〔時期・性格〕建物の規模から付属屋と考えられる。出土遺物から、時期は18世紀以降と考えられる。

ＳＢ４掘立柱建物跡（第22図、写真図版21・34・50）
〔位置〕ＶＯ５ｆグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕９個の柱穴（Ｐ216・140・114・1139・138、Ｐ576・126・124・122）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ126はＳＢ３のＰ26に切られており、ＳＢ３よりも古い。Ｐ126はＳＢ６でも使用しているが、本来ＳＢ４かＳＢ６のいずれか新しい方に属する柱穴と考えられる。調査時にその判別ができなかったため、両方に掲載した。ＳＢ５・ＳＢ16・ＳＢ21・ＳＢ26とはプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－93°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。北辺と南辺で長さが異なり、プランは台形である。規模は、北辺が桁行き884cm（29.2尺）、梁間408cm（13.5尺）で、面積は36.07㎡（10.90坪）である。桁行きと梁間の長さの比は13：６である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、204cm（6.7尺）・272cm（8.9尺）の２種類である。204cmを６で割った34cmを用いて１尺′＝34cmと定めると、204cm＝６尺′、272cm＝８尺′で、桁行きの884cm＝26尺′、

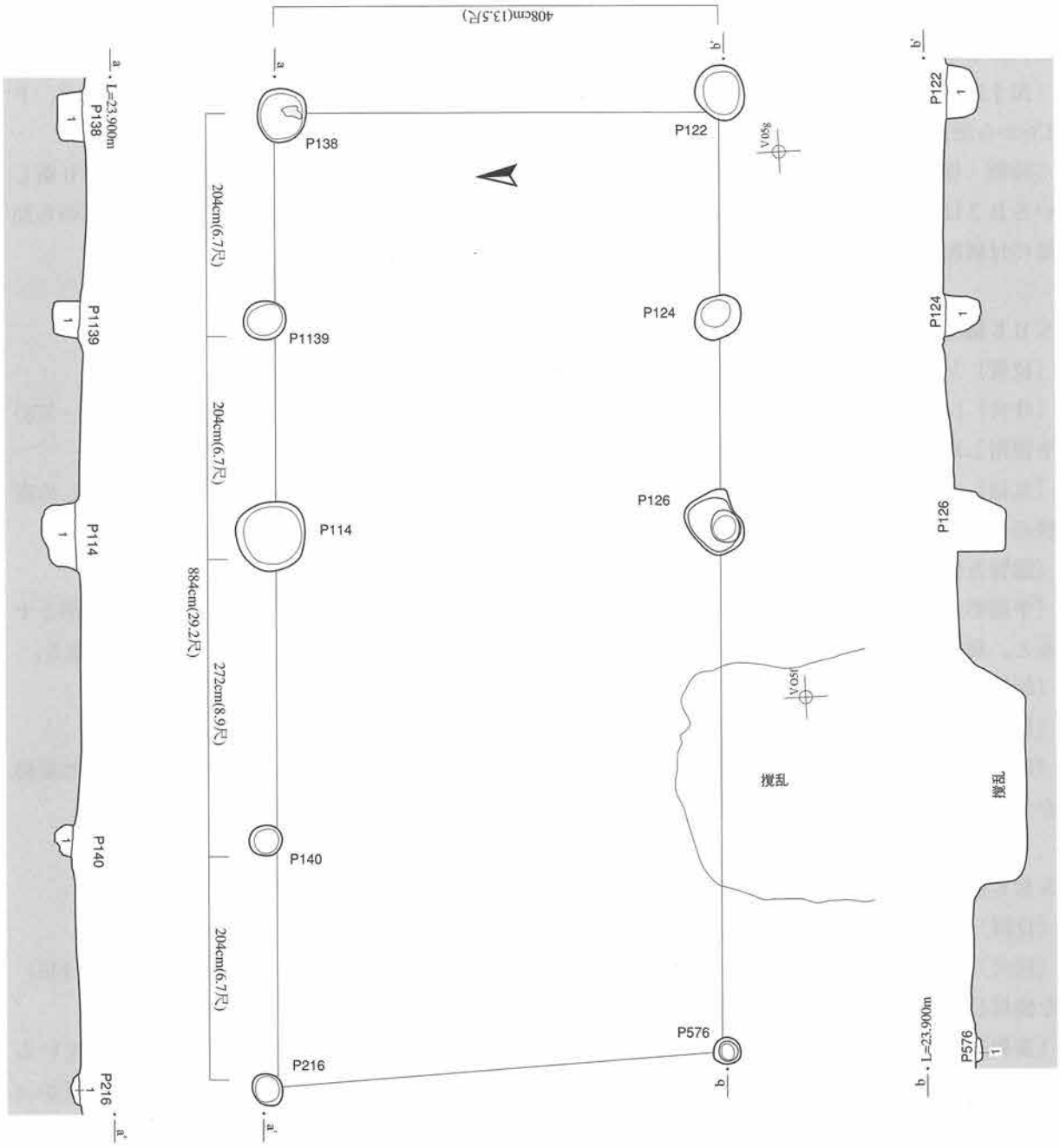


SB3

1　10YR5/2　灰黄褐色土　しまり無
2　10YR5/6　黄褐色土　10YR3/1　黒褐色土まだらに少量混入含
3　10YR7/6　明黄褐色土　10YR2/1まだらに多量混入

0　(1：60)　3m

第21図　細田遺跡　SB３



SB4

1　10YR7/6　明黄褐色土　10YR2/1まだらに多量混入

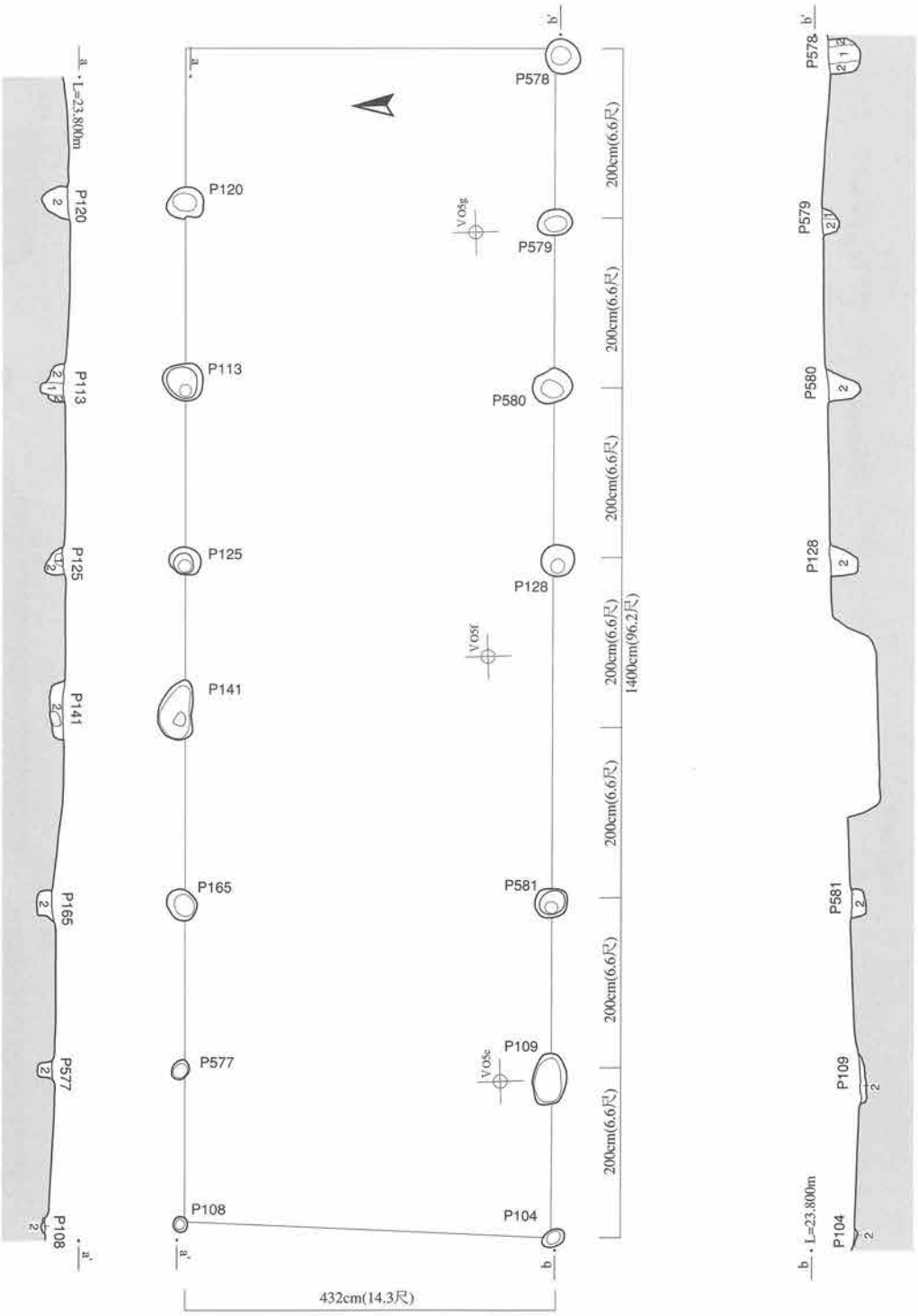
0　(1：60)　3m

第22図　細田遺跡　SB４

梁間の408cm＝12尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な1尺（30.3cm）を用いず、1尺′＝34cmを基準寸法とした可能性が考えられる。
〔出土遺物〕Ｐ114から手づくねかわらけ１片（11.9g）、Ｐ126から手づくねかわらけ１片（1.5g）、Ｐ138から肥前産磁器皿（110）が出土した。
〔時期・性格〕Ｐ138出土の肥前磁器皿の年代観から17世紀前半以降と考えられる。本建物より新しいＳＢ３は出土遺物から18世紀以降の建築が推測され、矛盾はない。性格は不明であるが規模から民家の付属屋と推測さる。

ＳＢ５掘立柱建物跡（第23図、写真図版22・34・51）
〔位置〕ＶＯ５ｅ・ＶＯ５ｆグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕14個の柱穴（Ｐ108・577・165・141・125・113・120、Ｐ104・109・581・128・580・579・578）を使用した。柱痕跡は幾つかの柱穴で確認された。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕ＳＢ３・ＳＢ４・ＳＢ６・ＳＢ15・ＳＢ16・ＳＢ21とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－92°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。北辺と南辺で長さが異なり、プランは台形となる。南辺を基準とすると、規模は、桁行き1400cm（46.2尺）、梁間432cm（14.3尺）で、面積は60.48㎡（18.27坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて200cm（6.6尺）である。
〔出土遺物〕Ｐ581から、陶器香炉（75）が出土した。
〔時期・性格〕Ｐ581出土の陶器香炉の年代観から19世紀前半以降と建物と判断される。建物の規模から付属屋と推測される。

ＳＢ６掘立柱建物跡（第24図、写真図版22・34・52）
〔位置〕ＶＯ５ｄ・ＶＯ５ｅグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕13個の柱穴（Ｐ207・205・583・187・190・582、Ｐ198・193・149・144・126、Ｐ585・146）を使用した。柱痕跡は幾つかの柱穴で確認された。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ126はＳＢ３のＰ26に切られており、ＳＢ３よりも古い。Ｐ126はＳＢ４でも使用しているが、ＳＢ４かＳＢ６のいずれか新しい方に属する柱穴と考えられる。調査時にその判別ができなかったため、両方に掲載した。ＳＢ５・ＳＢ15・ＳＢ16・ＳＢ20・ＳＢ21・ＳＢ24・ＳＢ26とはプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－92°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き1258cm（41.5尺）、梁間552cm（18.2尺）で、面積は69.44㎡（20.98坪）である。Ｐ585・146により３室に分かれていた可能性がある。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、194cm（6.4尺）・290cm（9.6尺）の２種類である。
〔出土遺物〕Ｐ126から手づくねかわらけ１片（1.5g）、Ｐ187から肥前産磁器碗（92）が出土した。
〔時期・性格〕Ｐ187出土の肥前産磁器碗は1630～1650年頃の生産である。よって本建物は17世紀前半以降の建築と判断される。本建物より新しいＳＢ３は18世紀以降の建築であり矛盾はない。建物の性格は規模が割合に大きく、部屋が分かれる間取りであることから、近世民家の母屋の可能性を指摘できる。

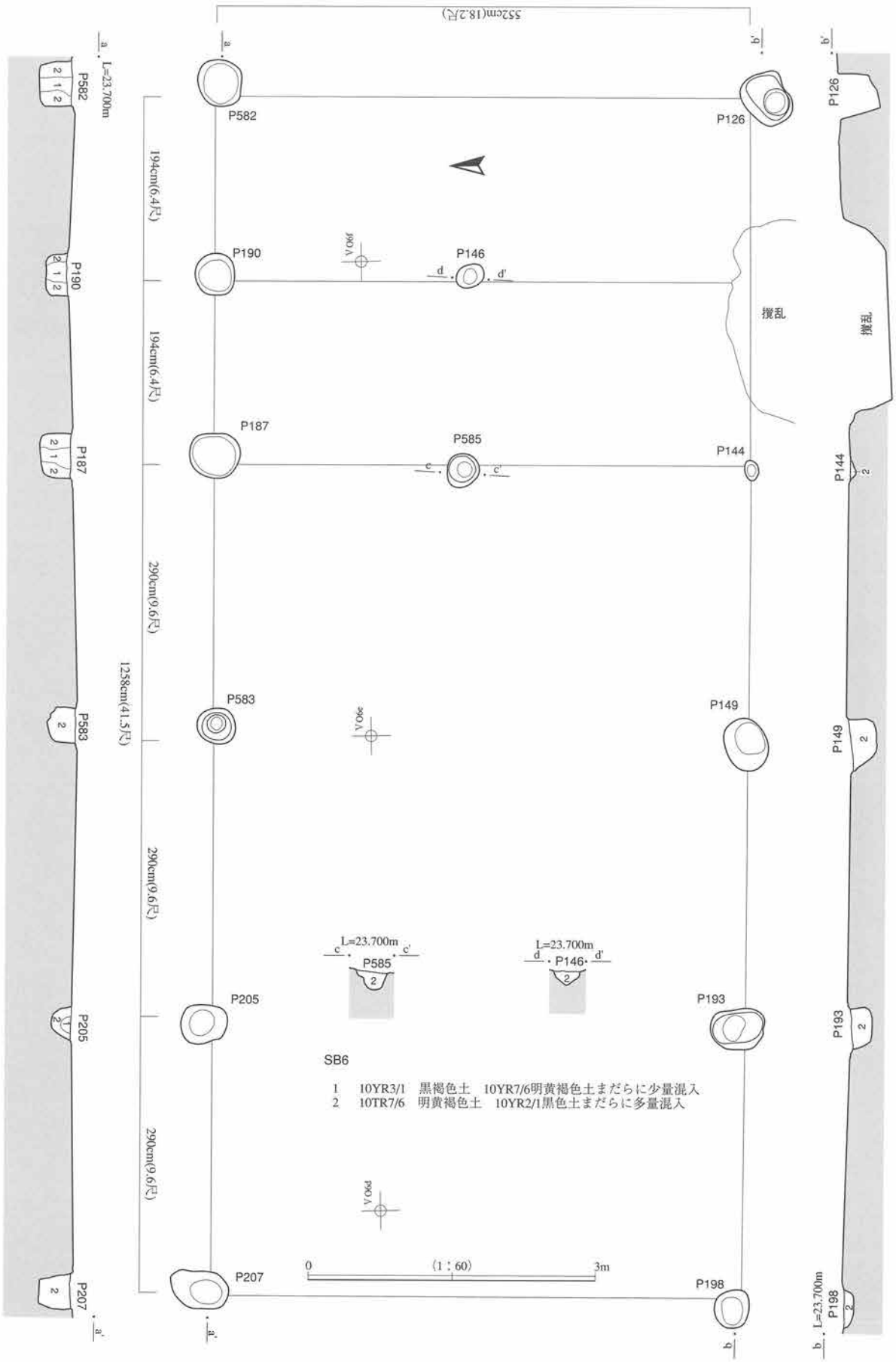


SB5

1　10YR4/3　にぶい黄褐色土　炭化物粒少量混入
2　10YR7/6　明黄褐色土　10YR2/1　まだらに多量混入

0　(1：80)　4m

第23図　細田遺跡　SB５



第24図　細田遺跡　SB6

ＳＢ７掘立柱建物跡（第25図、写真図版52）

〔位置〕ＶＮ５ｈ・ＶＮ６ｈグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ343・341・11・29、Ｐ324・586・325・587）を使用した。柱痕跡はＰ11で確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕ＳＸ１とプランが重複するが、前後関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－０°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き738cm（24.3尺）、梁間378cm（12.5尺）で、面積は27.90㎡（8.43坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて246cm（8.1尺）である。

〔出土遺物〕Ｐ11から手づくねかわらけ１片（2.7g）、Ｐ341から手づくねかわらけ１片（1.6g）・ロクロかわらけ１片（2.4g）、Ｐ586から手づくねかわらけ１片（0.9g）が出土した。

〔時期・性格〕出土遺物から12世紀後半以降の建物と判断されるが詳細な時期は不明である。性格は不明であるが、規模から付属屋と推測される。

ＳＢ８掘立柱建物跡（第26図、写真図版22・34・53）

〔位置〕ＶＮ５ｉ・ＶＮ５ｊグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕13個の柱穴（Ｐ314・590・252・254・589、Ｐ588・315・303・266・269、Ｐ321・305・591）を使用した。柱痕跡はＰ303などで確認されている。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ315がＳＢ11のＰ316を切っており、本建物はＳＢ11より新しい。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－88°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き1020cm（33.7尺）、梁間408cm（13.5尺）で、面積は41.62㎡（12.57坪）である。Ｐ305・591により、３室に分かれていた可能性がある。桁行きと梁間の長さの比は1020：408＝５：２である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、170cm（5.6尺）・204cm（6.7尺）・238cm（7.9尺）の３種類である。１尺′＝34cmと定めると、170cm＝５尺′、204cm＝６尺′、238cm＝７尺′で、桁行きの1020cm＝30尺′、梁間の408cm＝12尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な1尺（30.3cm）を用いず、１尺′＝34cmを基準寸法とした可能性が考えられる。

〔出土遺物〕Ｐ321から肥前産磁器碗（102）・手づくねかわらけ１片（0.5g）、Ｐ589から円盤状鉛製品（139）・手づくねかわらけ１片（0.8g）が出土した。

〔時期・性格〕Ｐ321出土の肥前産磁器碗は18世紀後半～19世紀初頭の生産であり、さらに焼き継ぎが施されていることから柱穴に入り込んだのは19世紀前半以降と判断される。よって本建物が建築されたのは、19世紀前半以降と推測される。

ＳＢ９掘立柱建物跡（第27図、写真図版23・34・53）

〔位置〕ＶＮ４ｊグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ307・302・299・267、Ｐ344・332・333・592）を使用した。柱痕跡はＰ344などで確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ302がＳＢ11のＰ301を切っており、本建物はＳＢ11よりも新しい。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－89°－Ｅである。

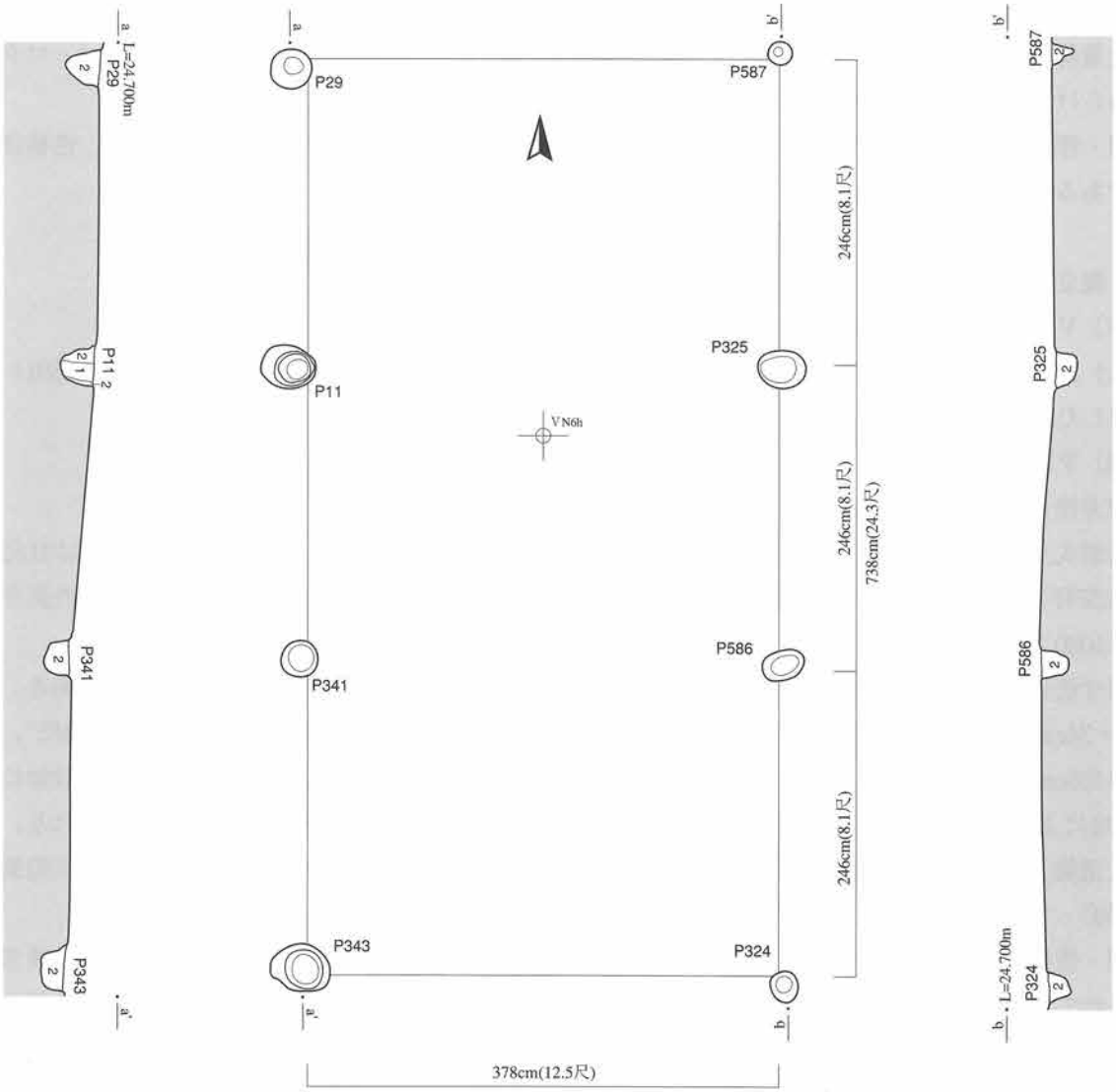
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き708cm（23.4尺）、梁間564cm（18.6尺）で、面積は39.93

㎡（12.06坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、213㎝（7.0尺）、282㎝（9.3尺）の２種類である。

〔出土遺物〕なし。

〔時期・性格〕本建物より古いＳＢ11の柱穴Ｐ255から16世紀末～17世紀初頭の煙管の雁首（134）が出土している。このことから、本建物の建築は16世紀末～17世紀初頭より新しいことになる。

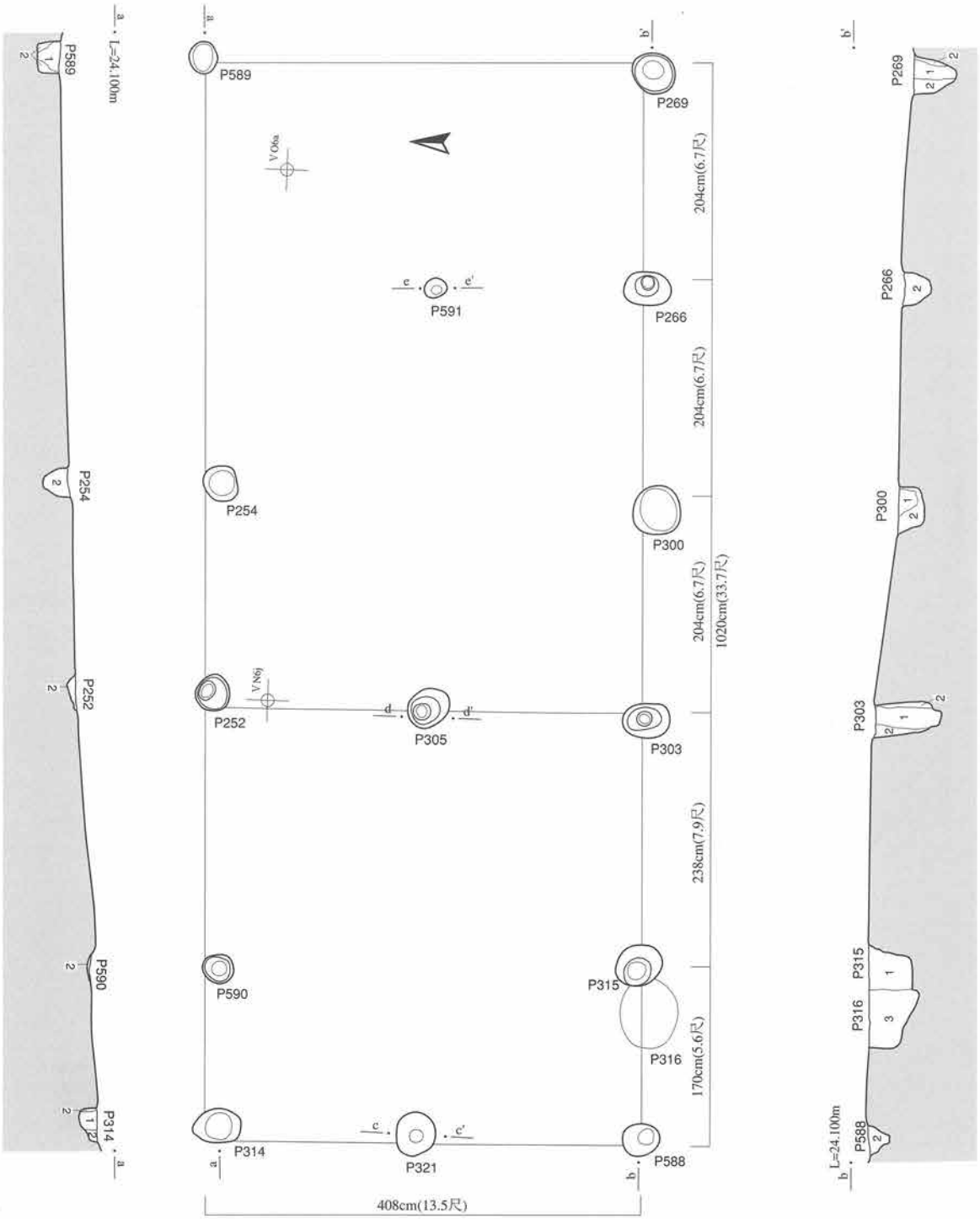


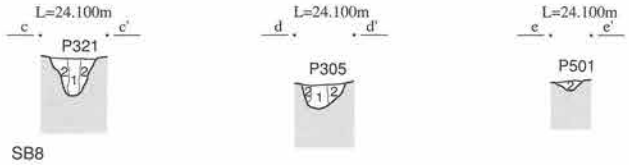
SB7

1　10YR5/6　黄褐色土　10YR3/1微量混入　柱痕
1　10YR5/6　黄褐色土　焼土粒・炭化物粒微量混入

0　(1：60)　3m

第25図　細田遺跡　SB７



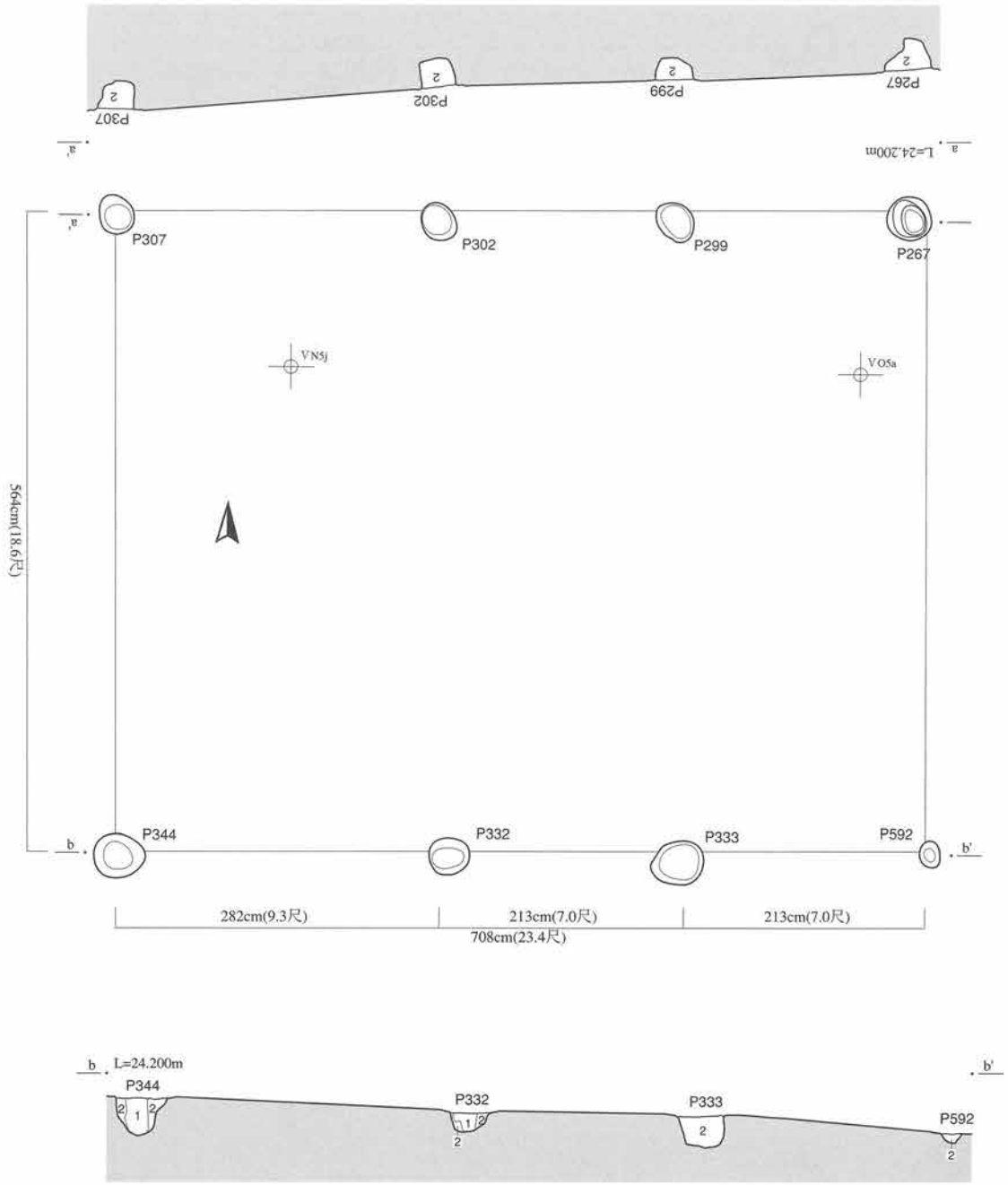


SB8

1　10YR5/2　灰黄褐色土　炭化物粒少量混入
2　10YR5/2　暗褐色土　10YR2/1少量混入
3　10YR4/3　にぶい黄褐色土

0　(1：60)　3m

第26図　細田遺跡　SB８

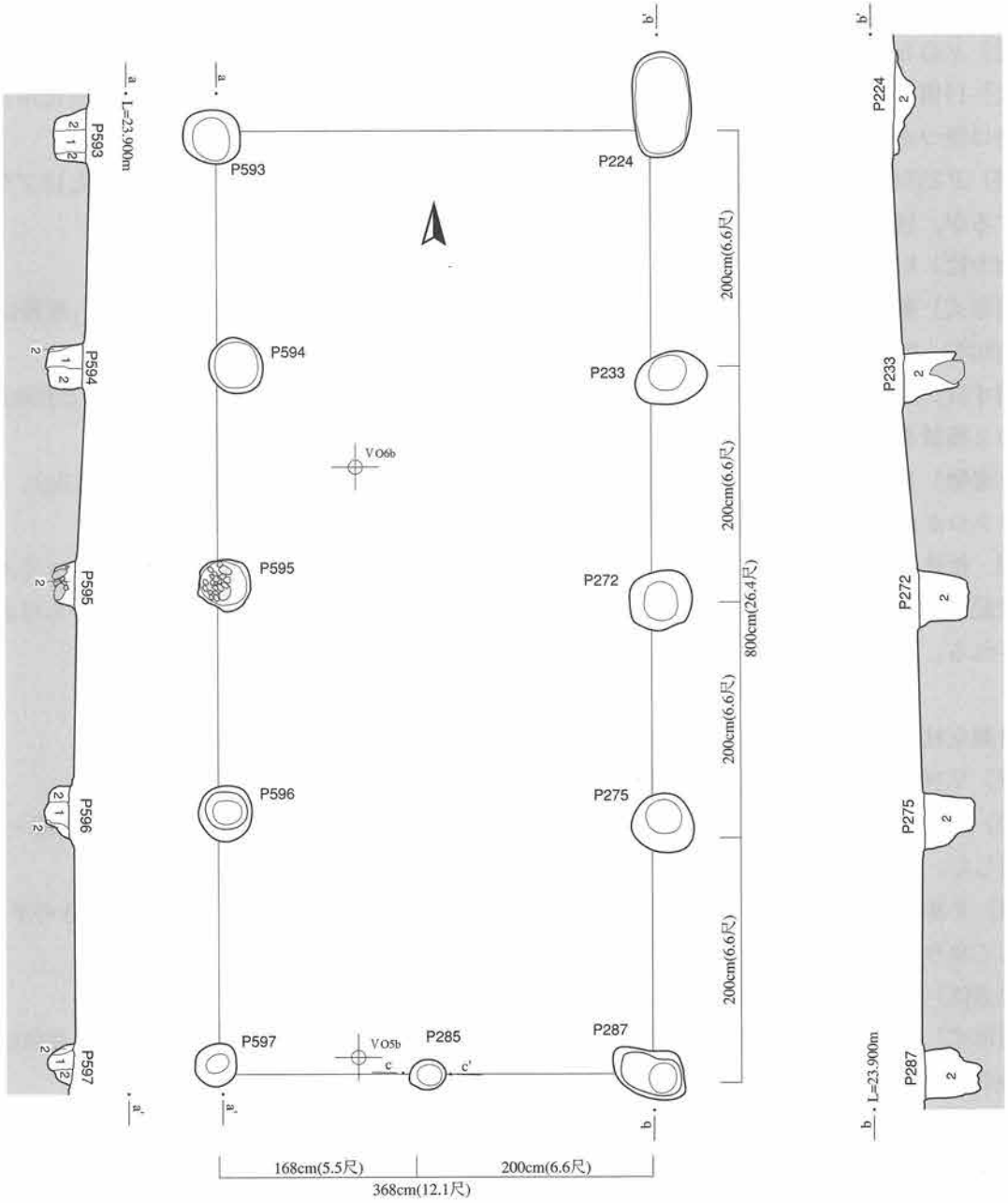


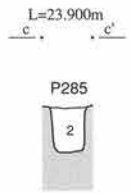
SB9

1　10YR5/4　にぶい黄褐色土　炭化物粒少量混入　ややしまり無　柱痕
2　10YR5/4　にぶい黄褐色土　10YR2/1黒色土まだらに多量混入

0　(1：60)　3m

第27図　細田遺跡　SB９





SB10

1　10YR4/2　灰黄褐色土　10YR2/1ブロック・10YR6/8ブロック少量混入
2　10YR4/3　にぶい黄褐色土　炭化物粒少量混入　ややしまり無

0　(1：60)　3m

第28図　細田遺跡　SB10

ＳＢ10掘立柱建物跡（第28図、写真図版23・35）

〔位置〕ＶＯ５ｂ・ＶＯ６ｂグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕11個の柱穴（Ｐ224・233・272・275・287、Ｐ593・594・595・596・597、Ｐ285）を使用した。柱痕跡は幾つかの柱穴で確認された。Ｐ565の底面には礫があり、礎盤の可能性がある。

〔重複〕Ｐ233がＳＢ14のＰ234を切っており、ＳＢ14より新しい。ＳＢ18・19・20・25とはプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－１°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き800cm（26.4尺）、梁間368cm（13.2尺）で、面積は29.44㎡（8.89坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて200cm（6.6尺）である。梁間では200cm（6.6尺）と168cm（5.5尺）の２種類を用いている。

〔出土遺物〕Ｐ224から手づくねかわらけ１片（4.6g）、Ｐ272からロクロかわらけ１片（1.5g）、Ｐ593からロクロかわらけ１片（1.0g）が出土した。

〔時期・性格〕本建物よりＳＢ14は出土遺物から17世紀前半以降の建築と推測される。よって本建物も17世紀後半以降、近世になってからの建物と判断される。性格は不明であるが、規模から付属屋と推測される。

ＳＢ11掘立柱建物跡（第29図、写真図版23・35・54）

〔位置〕ＶＮ５ｉ・ＶＮ５ｊグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕13個の柱穴（Ｐ313・309・249・255・257・260、Ｐ319・315・301・298・268、Ｐ308・304）を使用した。柱痕跡は幾つかの柱穴で確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ301がＳＢ９のＰ302に切られており、ＳＢ９よりも古い。また、Ｐ316がＳＢ８のＰ315に切られており、ＳＢ８よりも古い。

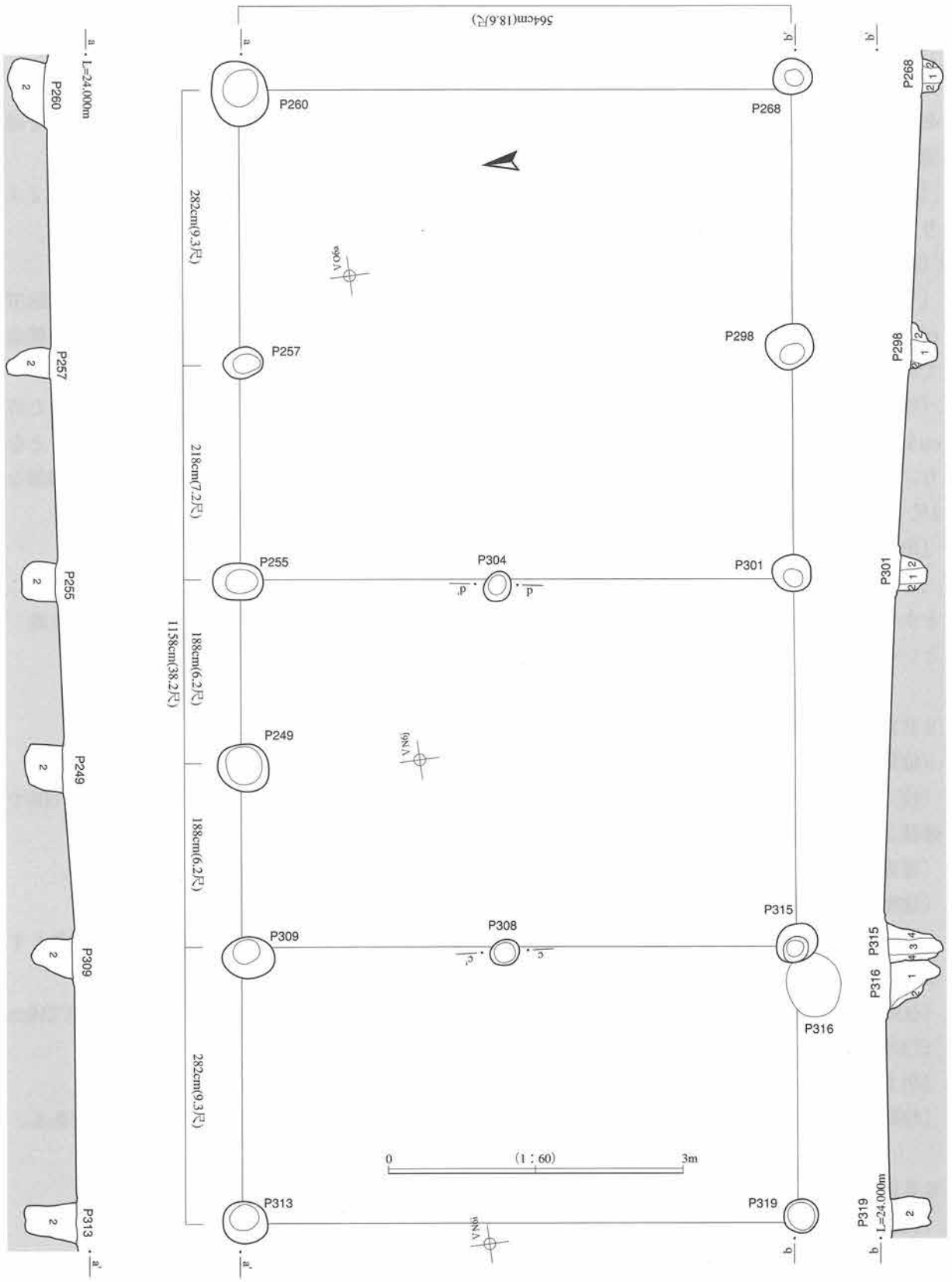
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－98°－Ｅである。

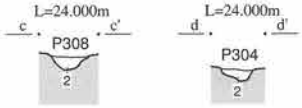
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き1158cm（38.2尺）、梁間564cm（18.6尺）で、面積は65.31㎡（19.73坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、188cm（6.2尺）・218cm（7.2尺）・282cm（9.3尺）の３種類である。

〔出土遺物〕Ｐ249から手づくねかわらけ２片（9.6g）、Ｐ255から煙管（134）、Ｐ260から手づくねかわらけ２片（5.8g）、Ｐ313から手づくねかわらけ１片（5.4g）・ロクロかわらけ２片（5.8g）、Ｐ316から手づくねかわらけ１片（1.1g）、Ｐ319から手づくねかわらけ１片（2.2g）が出土した。

〔時期・性格〕Ｐ255から出土した煙管の雁首は16世紀末～17世紀初頭のものであり、本建物の建築は16世紀末～17世紀初頭以降と判断される。建物の性格は規模が大きく、部屋が３室に分かれる間取りであることから、近世民家の母屋の可能性を指摘できる。





SB11

1　10YR4/2　灰黄褐色土　炭化物微量混入　柱痕
2　10YR5/4　にぶい黄褐色土　10YR2/1・10YR6/8ブロック少量混入　炭化物粒含
3　10YR5/2　灰黄褐色土　炭化物粒少量混入
4　10YR3/3　暗褐色土　10YR2/1黒色土少量混入

第29図　細田遺跡　SB11

ＳＢ12掘立柱建物跡（第30図、写真図版24・35・55・56）

〔位置〕ＶＭ８ｊ・ＶＮ８ａ・ＶＭ９ｊ・ＶＮ９ａグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕24個の柱穴（Ｐ493・1033・600・602・446・604・605・606・447・515・598・514・509・505・497、Ｐ1035・601・603・443・442・444・513・599・502）を使用した。南東隅は撹乱のため柱穴を確認できなかった。柱痕跡は幾つかの柱穴で確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ508がＰ509、Ｐ601がＰ1034を切る。またＰ601とＰ1035がＳＸ２を切っており、ＳＸ２よりも新しい。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－83°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き1110cm（36.6尺）、梁間888cm（29.3尺）で、面積は98.57㎡（29.78坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、1110：888＝５：４である。４面に庇を持つ構造である。

〔柱間寸法〕桁行き・梁間ともに、柱間寸法はすべて222cm（7.3尺）である。222cmを６で割った37cmを用いて１尺′＝37cmと定めると、222cmは６尺′で、桁行き1110cmは30尺′、梁間888cmは24尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な1尺（30.3cm）を用いず、１尺′＝37cmを基準寸法とした可能性が考えられる。

〔出土遺物〕Ｐ509から、手づくねかわらけ１片（3.8g）が出土した。

〔時期・性格〕形状から12世紀代の建物と推測される。Ｐ509から手づくねかわらけ片が出土したことから12世紀でも後半に属すると推測される。規模が大きく、形態が整っていることから、「主殿」といったような性格と推測される。

ＳＢ13掘立柱建物跡（第31図、写真図版24・35・56）

〔位置〕ＶＮ８ｄ・ＶＮ９ｄグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ609・610・611・613・608・388・387・607）を使用した。柱痕跡はＰ608で確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕ＳＫ６・７とプランが重複するが、直接切りあう柱穴はなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－82°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。東辺と西辺の長さが異なり、プランは台形となる。東辺を基準とすると、規模は、桁行き600cm（19.4尺）、梁間432cm（14.3尺）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、186cm（6.1尺）、228cm（7.5尺）の２種類である。梁間はすべて216cm（7.1尺）である。

〔出土遺物〕Ｐ388から、手づくねかわらけ２片（6.6g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけの出土から12世紀後半以降の建物と推測される。性格は不明である。

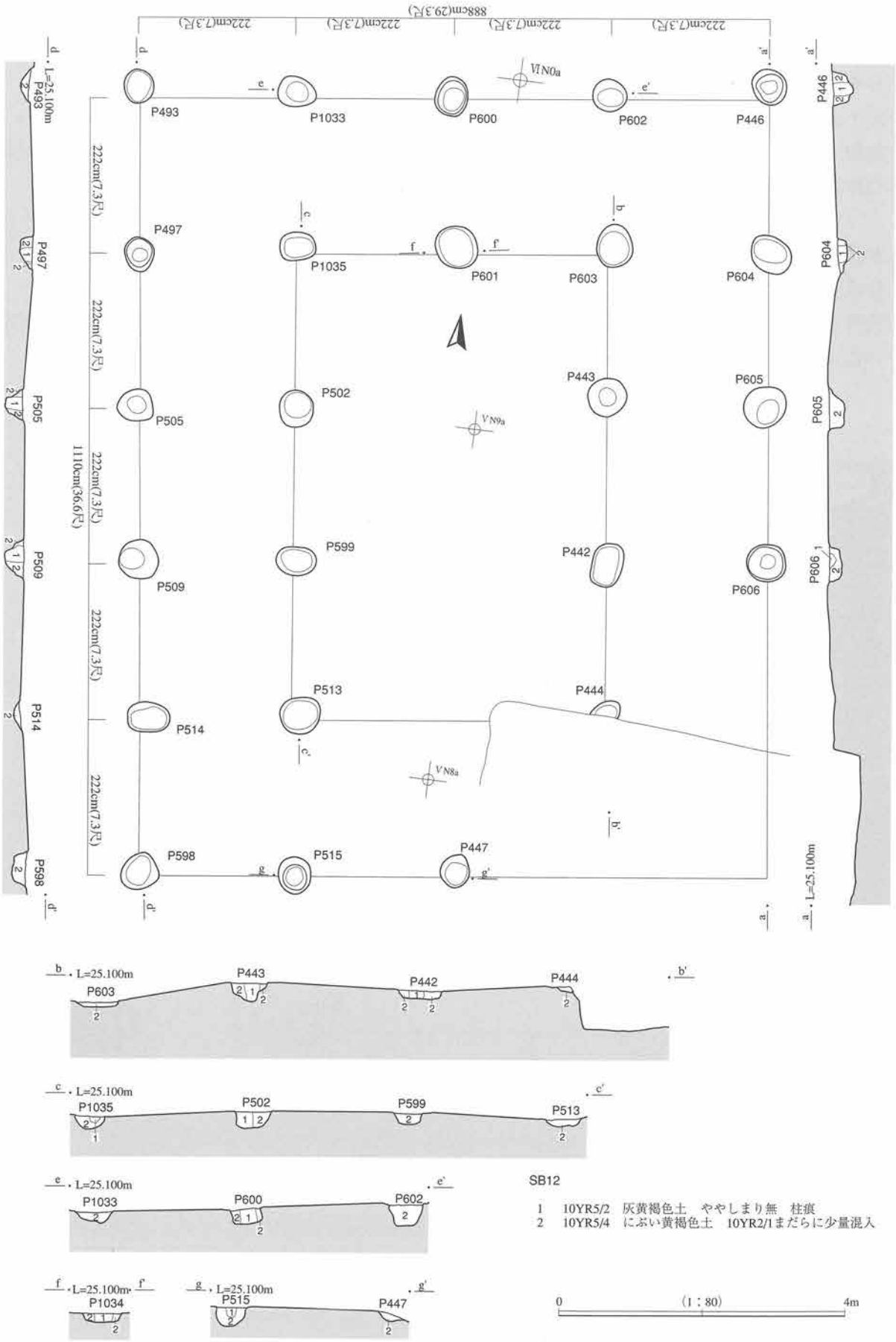
ＳＢ14掘立柱建物跡（第32図、写真図版25・57）

〔位置〕ＶＯ６ｂグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ246・615・226・223、Ｐ614・240・234・218）を使用した。柱痕跡はＰ218で確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ234がＳＢ10のＰ233に切られており、ＳＢ10よりも古い。ＳＢ18・19・20・25とはプランが重複するが、柱穴同士の直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

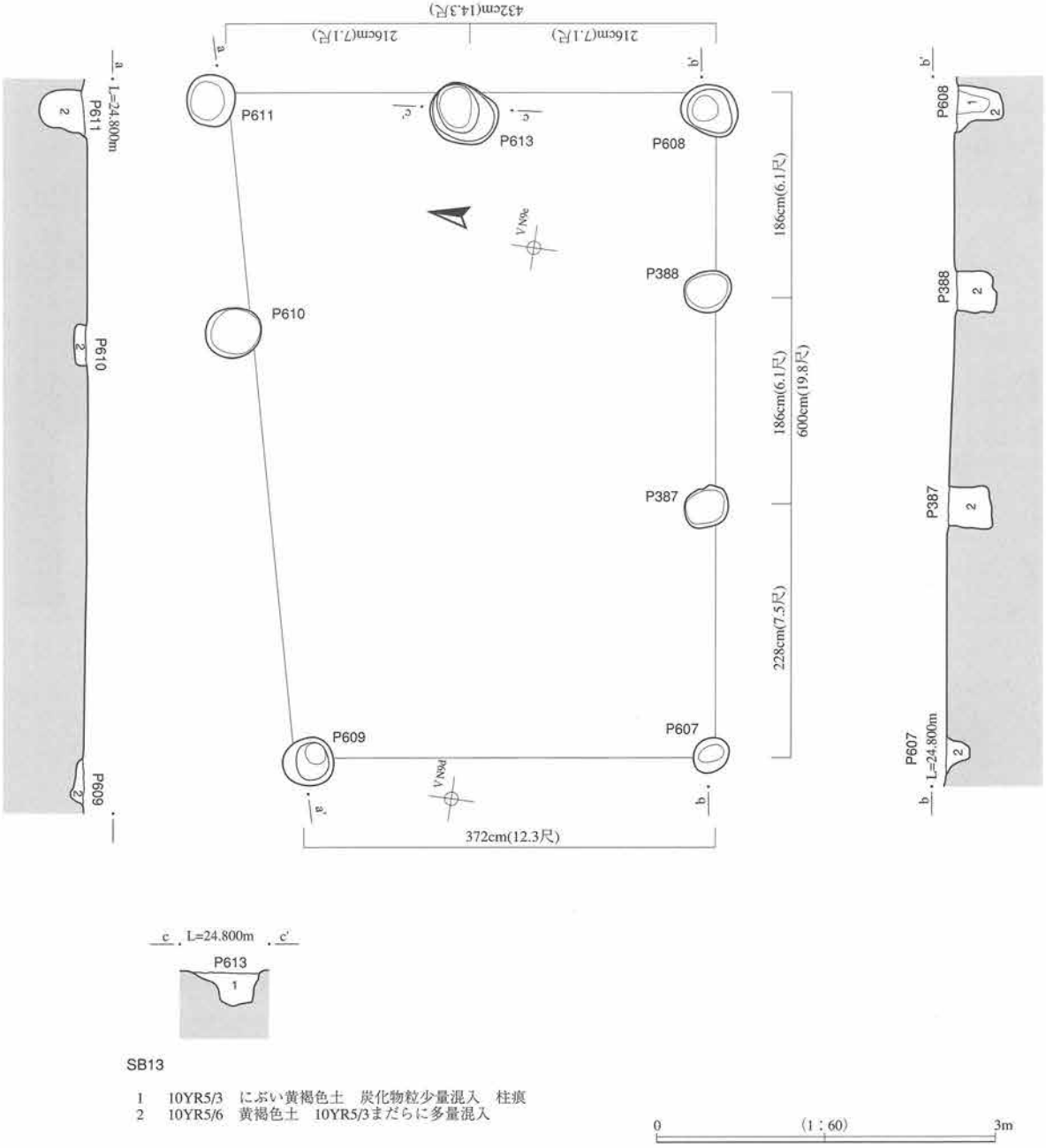
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－95°－Ｅである。



第30図　細田遺跡　SB12

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き600cm（19.8尺）、梁間414cm（13.7尺）で、面積は24.84㎡（7.50坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて200cm（6.6尺）である。
〔出土遺物〕Ｐ234から、磁器皿（114）が出土した。
〔時期・性格〕Ｐ234から出土した磁器皿は17世紀前半のものと考えられ、本建物の建築は17世紀前半以降と推測される。性格は不明であるが、規模から付属屋と推測される。

ＳＢ15掘立柱建物跡（第33図、写真図版25・35・57）
〔位置〕ＶＯ５ｄグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ208・616・203・617、Ｐ192・107・618・619）を使用した。柱痕跡はほとんどの柱穴で検出された。礎盤は確認されなかった。



第31図　細田遺跡　SB13

〔重複〕P618・619がそれぞれSB21のP632・633を切っており、SB21より新しい。また、P107がP1137、P616がP1135を切る。SB5・6・21・24・26とはプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

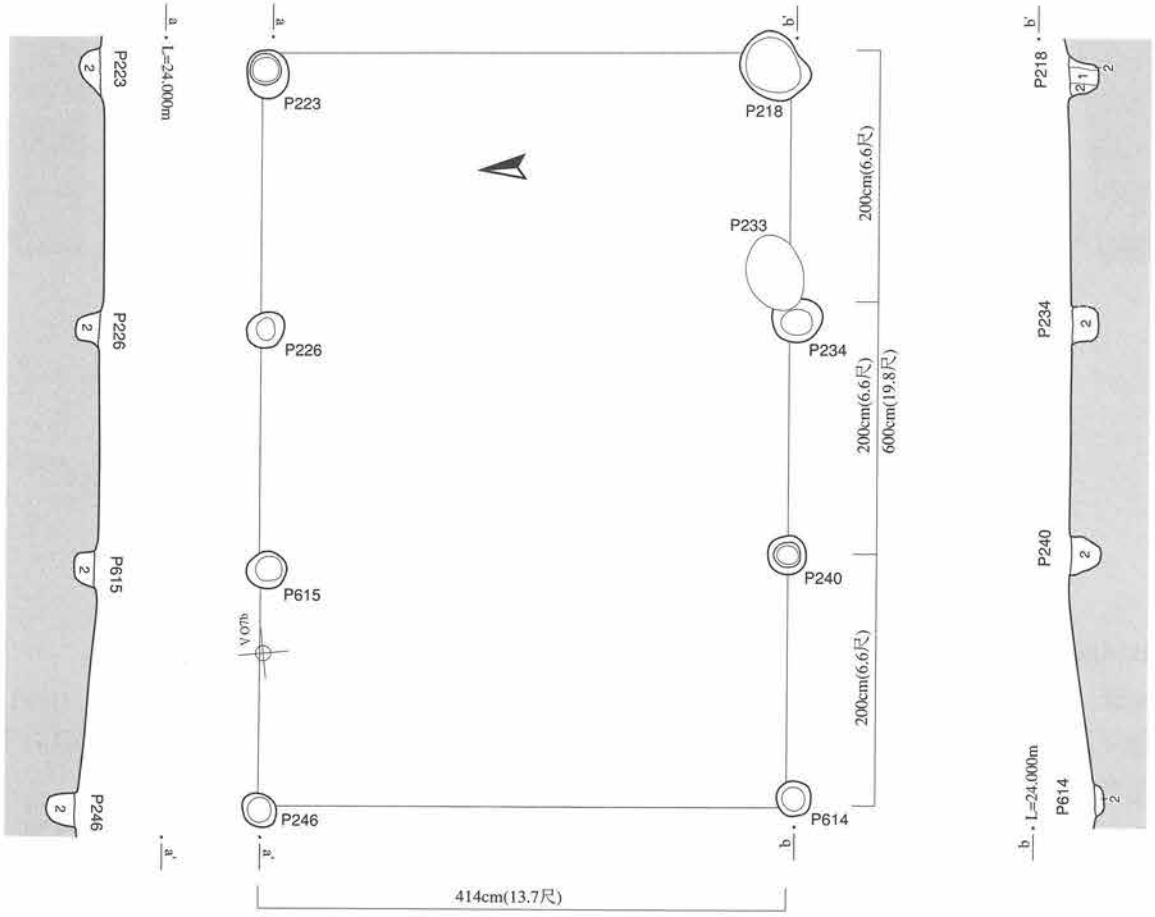
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、N－91°－Eである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き576cm（19.0尺）、梁間480cm（15.8尺）で、面積は27.65㎡（8.35坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、576：480＝6：5である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて192cm（6.3尺）である。1尺′＝32cmと定めると、192cm＝6尺′で、桁行きの576cm＝18尺′、梁間の480cm＝15尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な1尺（30.3cm）を用いず、1尺′＝32cmを基準寸法とした可能性が考えられる。

〔出土遺物〕なし。

〔時期・性格〕時期は不明である。性格も不明であるが、規模から付属屋と推測される。

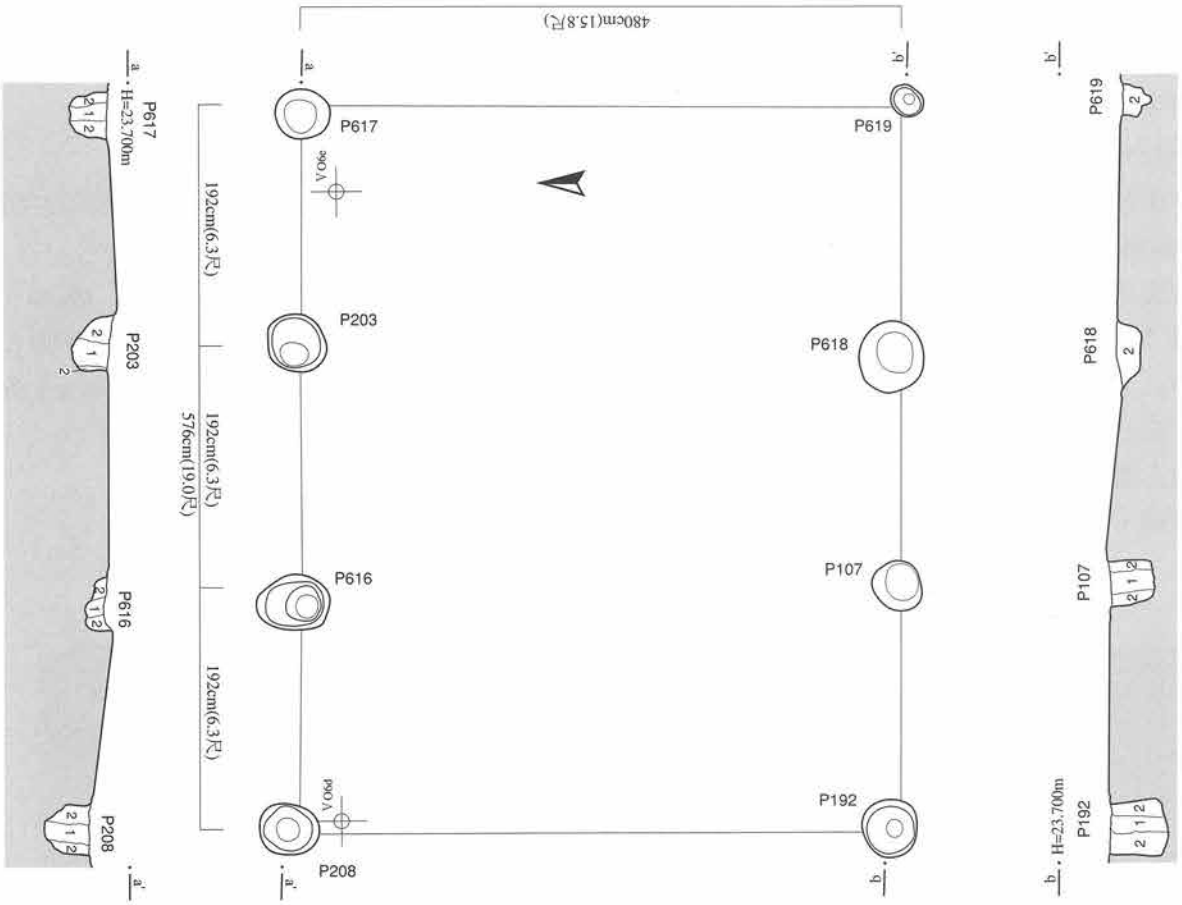


SB14

1　10YR5/4　にぶい黄褐色土　しまり無　柱痕
2　10YR5/4　にぶい黄褐色土　炭化物微量混入

0　(1：60)　3m

第32図　細田遺跡　SB14



第33図　細田遺跡　SB15

ＳＢ16掘立柱建物跡（第34図、写真図版25・35・58）

〔位置〕ＶＯ６ｅ・ＶＯ７ｅグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕９個の柱穴（Ｐ145・220・92・50、Ｐ129・171・70・69・68）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ70がＰ182に切られる。ＳＢ３・ＳＢ４・ＳＢ５・ＳＢ６・ＳＢ21・ＳＢ22・ＳＢ26・ＳＢ39とはプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

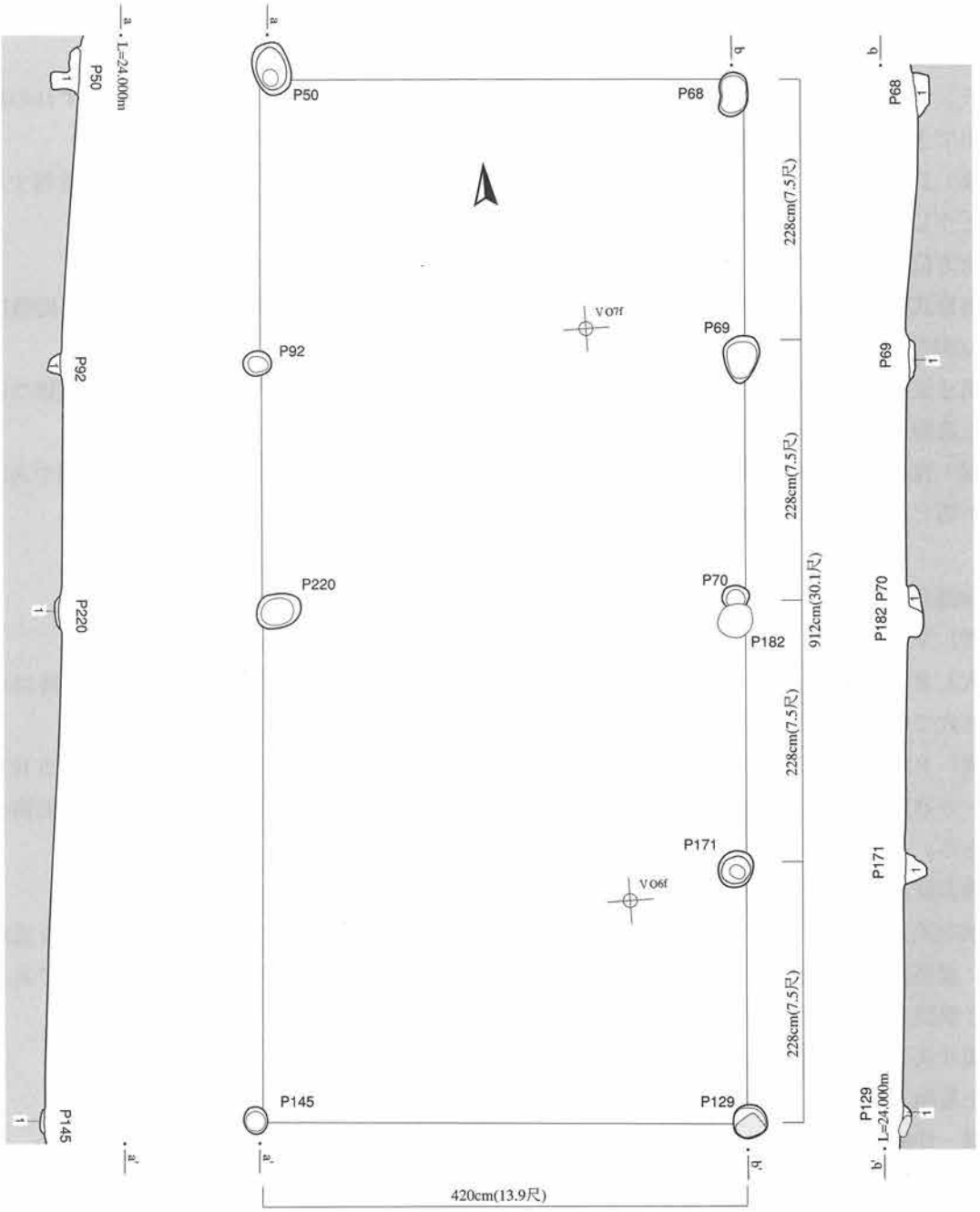
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－４°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き912cm（30.1尺）、梁間420cm（13.9尺）で、面積は38.30㎡（11.57坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて228cm（7.5尺）である。

〔出土遺物〕Ｐ50から、手づくねかわらけ３片（12.3g）・ロクロかわらけ１片（0.5g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけの出土から12世紀後半以降の建築と推測される。性格は不明であるが、規模から付属屋と推測される。



SB16

1　10YR6/8　明黄褐色土　10YR3/2まだらに少量混入

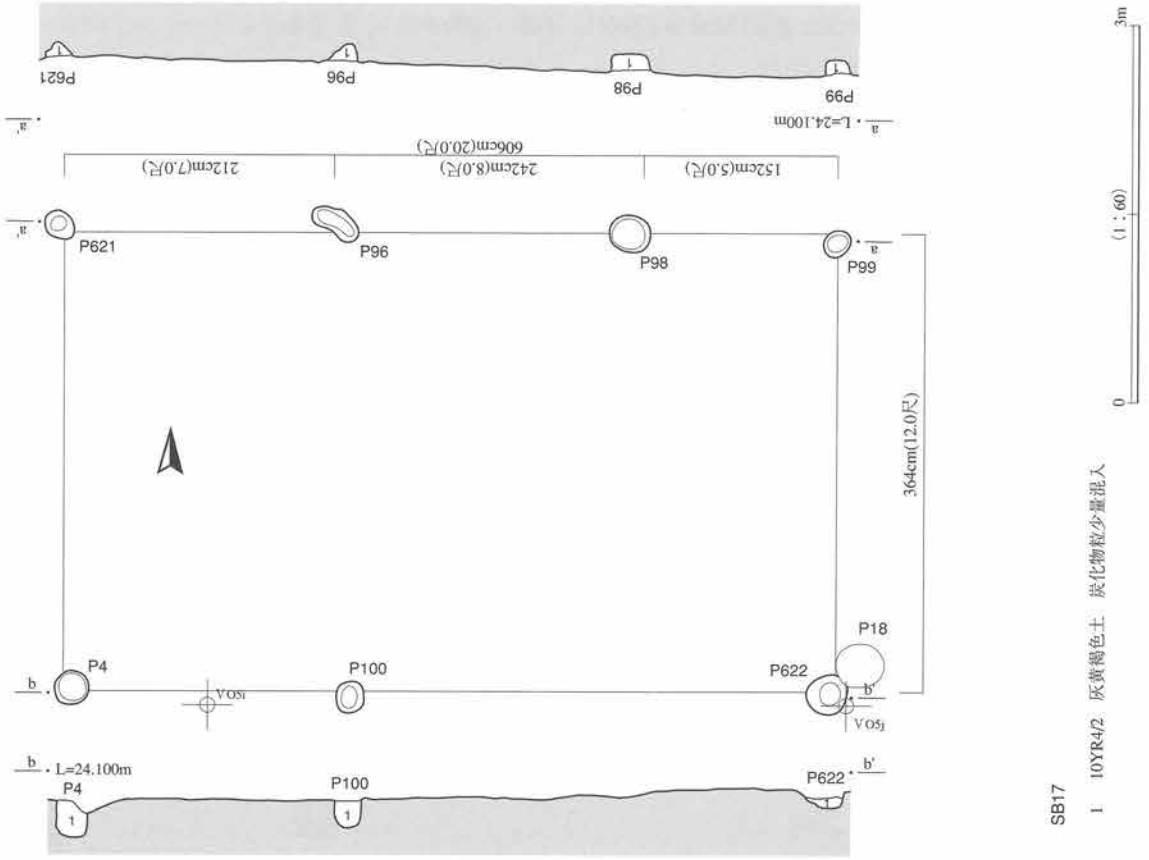
0　(1：60)　3m

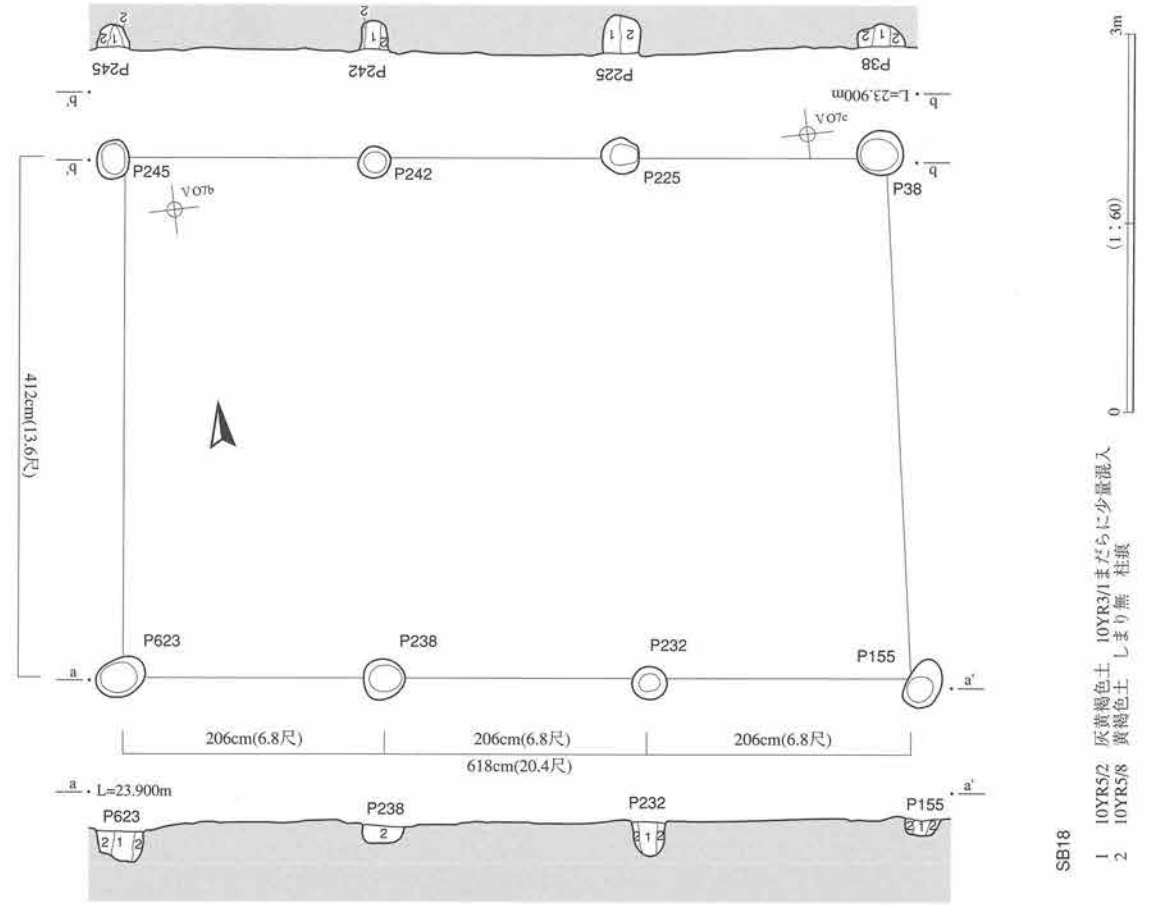
第34図　細田遺跡　SB16

ＳＢ17掘立柱建物跡（第35図、写真図版26・35・58）
〔位置〕ＶＯ５ｉグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ621・96・98・99、Ｐ４・100・622）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ622がＳＢ１のＰ18に切られており、ＳＢ１よりも古い。ＳＢ２とはプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－90°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き606cm（20.0尺）、梁間364cm（12.0尺）で、面積は22.06㎡（6.66坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、152cm（5.0尺）・212cm（7.0尺）・242cm（8.0尺）の３種類である。
〔出土遺物〕なし。
〔時期・性格〕出土遺物がなく時期は不明である。本建物より新しいＳＢ１の時期も不明である。性格も不明であるが、規模から付属屋と推測される。

ＳＢ18掘立柱建物跡（第35図、写真図版26・36・58）
〔位置〕ＶＯ６ｂグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ245・242・225・38、Ｐ623・238・232・155）を使用した。柱痕跡はほとんどの柱穴で確認された。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ242・225がそれぞれＳＢ19のＰ241・Ｐ624を切っており、ＳＢ19より新しい。ＳＢ10・ＳＢ14・ＳＢ20・ＳＢ25とはプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－97°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。北辺と南辺の長さが異なり、プランは台形となる。南辺を基準とすると、規模は、桁行き618cm（20.4尺）、梁間412cm（13.6尺）で、面積は25.46㎡（7.69坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、618：412＝３：２である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて206cm（6.8尺）である。
〔出土遺物〕Ｐ155から、鉄滓？（140）・手づくねかわらけ１片（2.5g）が出土した。
〔時期・性格〕出土遺物の鉄滓は時期を計りかね、建物の年代の推測する資料にはならない。また、本建物より新しいＳＢ19でも出土遺物がなく時期は不明である。性格も不明であるが、規模から付属屋と推測される。

ＳＢ19掘立柱建物跡（第36図、写真図版26・36・59）
〔位置〕ＶＯ６ｂグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ1079・241・624、Ｐ625・237・231・154）を使用した。柱痕跡は幾つかの柱穴で検出された。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ241・624がそれぞれＳＢ18のＰ242・225に切られており、ＳＢ18よりも古い。Ｐ237がＰ236に切られる。ＳＢ10・ＳＢ14・ＳＢ20・ＳＢ25とはプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－92°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き630cm（20.7尺）、梁間420cm（13.9尺）で、面積は26.46





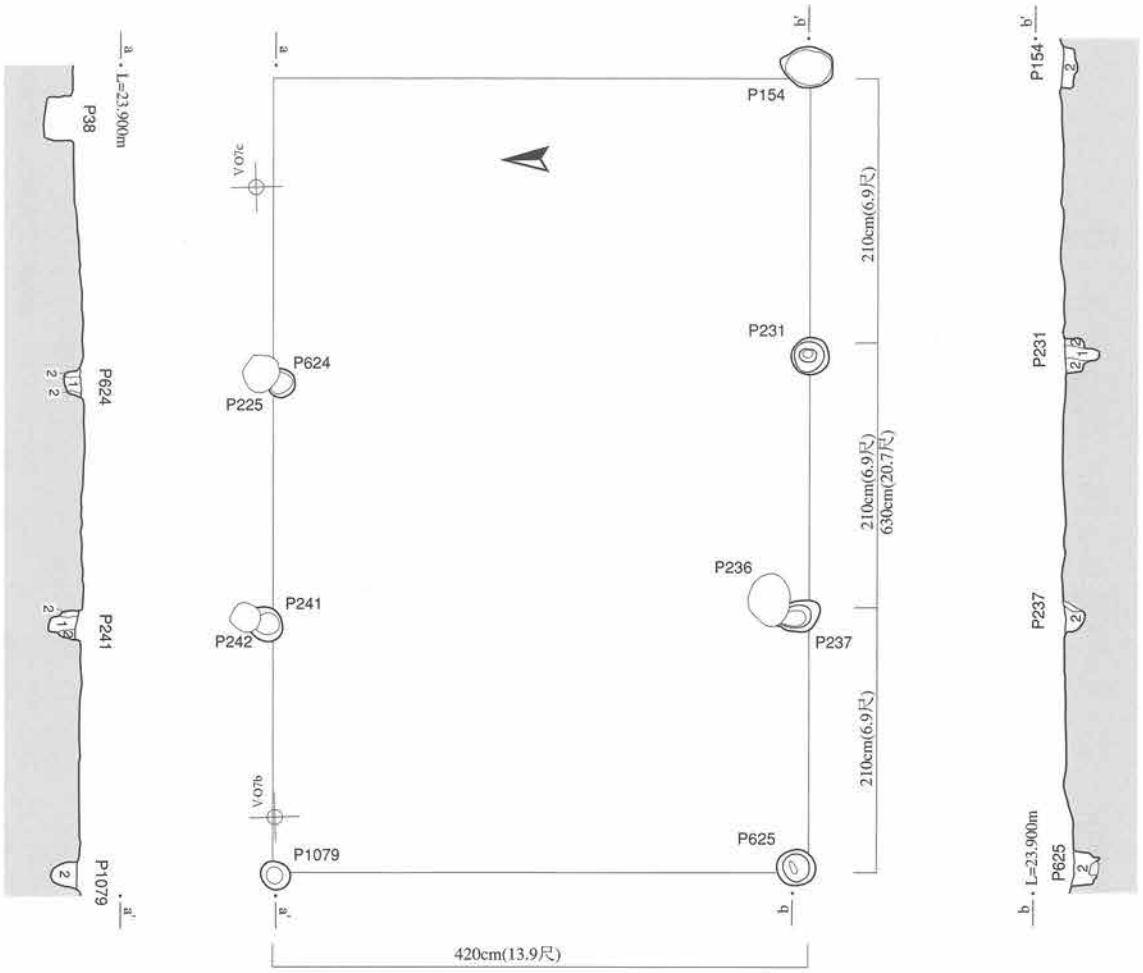
第35図　細田遺跡　SB17・SB18

㎡（7.99坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、630：420＝３：２である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて210cm（6.9尺）である。１尺′＝35cmと定めると、210cm＝６尺′で、桁行きの630cm＝18尺′、梁間の420cm＝12尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な１尺（30.3cm）を用いず、１尺′＝35cmを基準寸法とした可能性が考えられる。

〔出土遺物〕なし。

〔時期・性格〕出土遺物がなく建物の時期は不明である。また、本建物より古いＳＢ18も時期は不明である。また、性格も不明であるが、規模から付属屋と推測される。



SB19

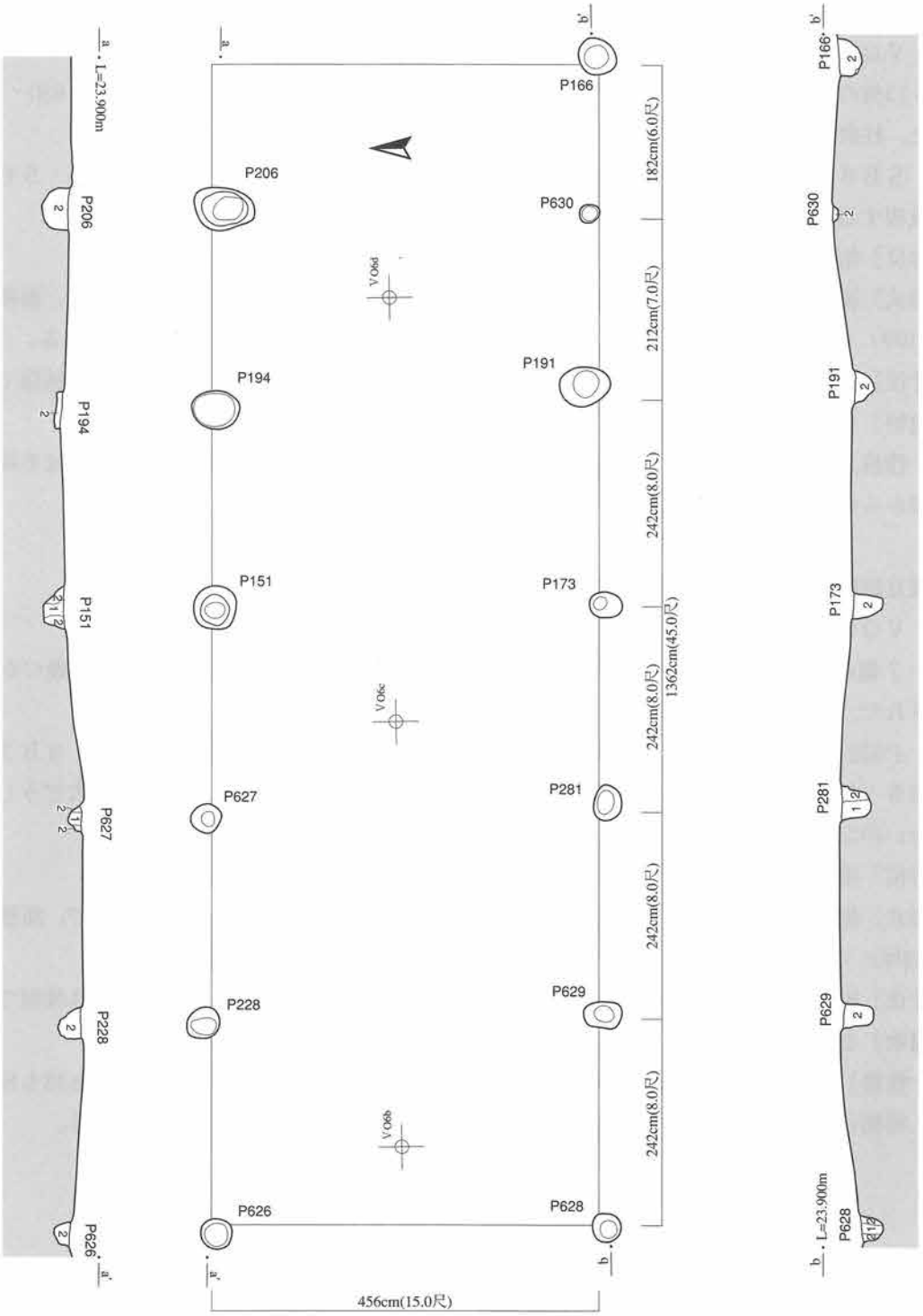
1　10YR3/2　黒褐色土　ややしまり無　柱痕
2　10YR5/4　にぶい黄褐色土　炭化物粒少量混入

0　(1：60)　3m

第36図　細田遺跡　SB19

ＳＢ20掘立柱建物跡（第37図、写真図版27・36・59）
〔位置〕ＶＯ５ｂ・ＶＯ５ｃグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕13個の柱穴（Ｐ626・228・627・151・194・206、Ｐ628・629・281・173・191・630・166）を使用した。柱痕跡は幾つかの柱穴で検出された。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕ＳＢ６・ＳＢ10・ＳＢ14・ＳＢ15・ＳＢ18・ＳＢ19・ＳＢ21・ＳＢ24・ＳＢ25・ＳＢ26とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－91°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き1362cm（45.0尺）、梁間456cm（15.0尺）で、面積は62.11㎡（18.76坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、1362：456≒1368：456＝３：１である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、242cm（8.0尺）・212cm（7.0尺）・182cm（6.0尺）の３種類である。
〔出土遺物〕Ｐ194から、手づくねかわらけ１片（2.7g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけの出土から12世紀後半以降の建築と推測される。性格は不明であるが、規模から付属屋と推測される。

ＳＢ21掘立柱建物跡（第38図、写真図版59）
〔位置〕ＶＯ５ｄ・ＶＯ５ｅグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ201・202・175・164・196・632・633）を使用した。柱痕跡は幾つかの柱穴で確認された。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ632・633がそれぞれＳＢ15のＰ618・619に切られており、ＳＢ15より古い。ＳＢ３・ＳＢ４・ＳＢ５・ＳＢ６・ＳＢ16・ＳＢ20・ＳＢ24・ＳＢ26とはプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－90°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き786cm（25.9尺）、梁間450cm（14.9尺）で、面積は35.37㎡（10.69坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、288cm（9.5尺）・198cm（6.5尺）・300cm（9.9尺）の３種類である。
〔出土遺物〕なし。
〔時期・性格〕出土遺物がなく建物の時期は不明である。また、本建物より新しいＳＢ18も出土遺物がなく、時期は不明である。また、性格も不明であるが、規模から付属屋と推測される。

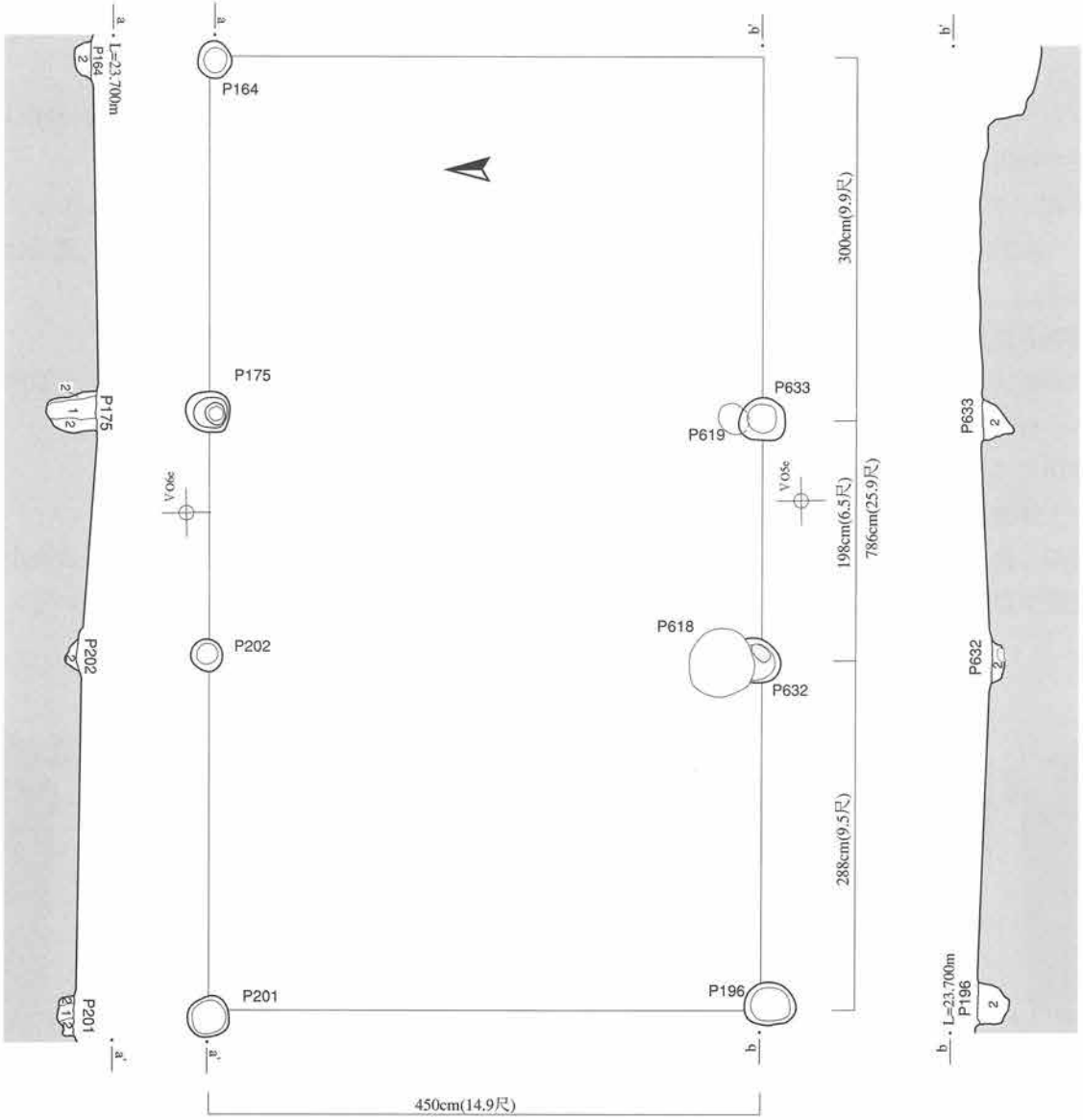


SB20

1　10YR4/2　灰黄褐色土　10YR3/2黒褐色土まだらに少量混入含
2　10YR4/1　褐灰色土　柱痕含

0　(1：80)　4m

第37図　細田遺跡　SB20



SB21

1　10YR5/2　灰黄褐色土　ややしまり無　柱痕
2　10YR5/6　黄褐色土　10YR3/2まだらに少量混入

0　(1：60)　3m

第38図　細田遺跡　SB21

ＳＢ22掘立柱建物跡（第39図、写真図版27・36・60）

〔位置〕ＶＯ７ｅグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ1088・101・635・634、Ｐ185・93・45・81）を使用した。柱痕跡は幾つかの柱穴で検出された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ1088はＳＢ26のＰ88に切られており、ＳＢ26より古い。Ｐ101がＰ41に切られる。ＳＢ16・ＳＢ24・ＳＢ39とはプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

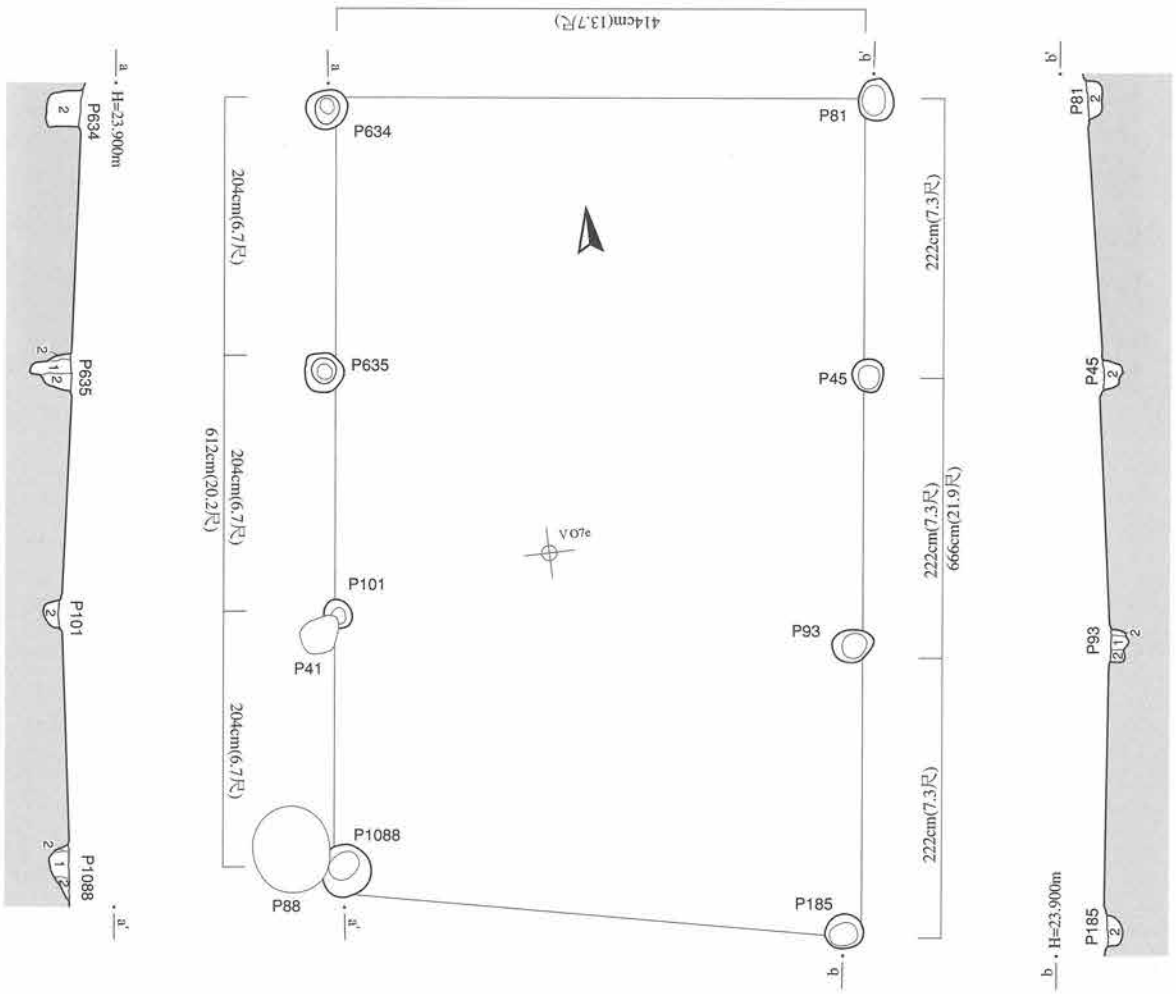
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－７°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。東辺と西辺の長さが異なり、プランは台形となる。東辺を基準とすると、桁行きは666cm（21.9尺）、梁間は414cm（13.7尺）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて222cm（7.3尺）である。

〔出土遺物〕なし。

〔時期・性格〕出土遺物がなく建物の時期は不明である。本建物より新しいＳＢ26は出土遺物から12世紀後半以降の建築と推測される。また、性格も不明であるが、規模から付属屋と推測される。



第39図　細田遺跡　SB22

ＳＢ23掘立柱建物跡（第40図、写真図版27・36・60）

〔位置〕ＶＮ６ｂグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ455・639・452・458、Ｐ457・460・638・637）を使用した。柱痕跡は幾つかの柱穴で確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕なし。

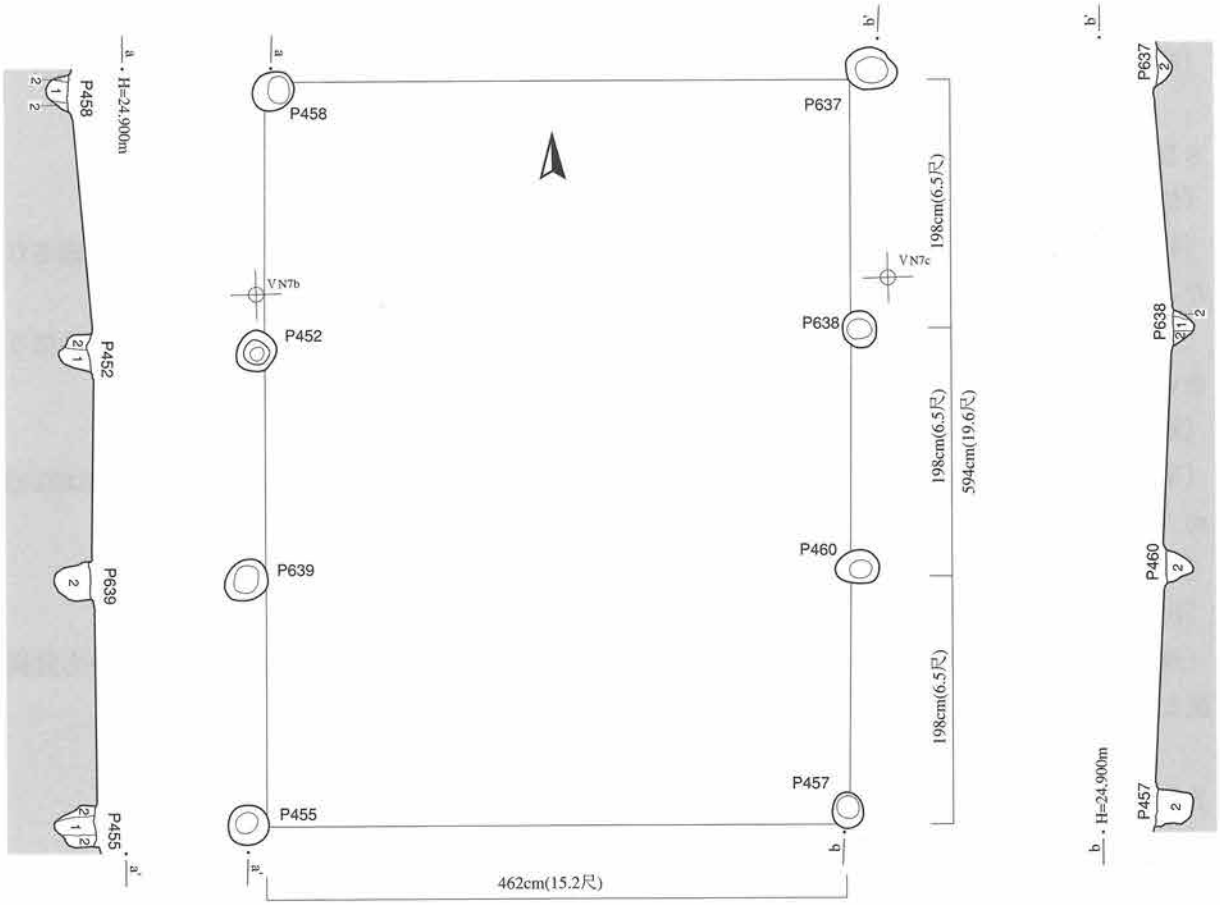
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－１°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き594cm（19.6尺）、梁間462cm（15.2尺）で、面積は27.44㎡（8.29坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、594：462＝９：７である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて198cm（6.5尺）である。１尺′＝33cmと定めると、198cm＝６尺′で、桁行きの594cm＝18尺′、梁間の462cm＝14尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な１尺（30.3cm）を用いず、１尺′＝33cmを基準寸法とした可能性が考えられる。

〔出土遺物〕Ｐ455から手づくねかわらけ１片（3.2g）、Ｐ638から手づくねかわらけ１片（2.2g）、Ｐ639から手づくねかわらけ１片（1.4g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけの出土から12世紀後半以降の建築と推測される。性格は不明であるが、規模から付属屋と推測される。



第40図　細田遺跡　SB23

ＳＢ24掘立柱建物跡（第41図、写真図版28・36・60）

〔位置〕ＶＯ６ｃ・ＶＯ６ｄグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕９個の柱穴（Ｐ222・102・90・40、Ｐ160・157・210・211・212）を使用した。柱痕跡はＰ102、Ｐ210で検出された。不整な形状の柱穴（Ｐ90）などがあり、抜き取りがおこなわれた柱穴もあると推測される。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ212がＰ213を切る。Ｐ212はＳＢ26でも使用しているが、ＳＢ24かＳＢ26のいずれか新しい方に属する柱穴と考えられる。調査時にその判別ができなかったため、両方に掲載した。ＳＢ６・15・ＳＢ20・ＳＢ21・ＳＢ22・ＳＢ26とはプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－91°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き960cm（31.7尺）、梁間480cm（15.7尺）で、面積は46.08㎡（13.92坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、960：480＝２：１である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて192cm（6.3尺）である。１尺′＝32cmと定めると、192cm＝６尺′で、桁行きの960cm＝30尺′、梁間の480cm＝15尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な１尺（30.3cm）を用いず、１尺′＝32cmを基準寸法とした可能性が考えられる。

〔出土遺物〕Ｐ102から釘（129･132）、Ｐ160から砥石（145）、Ｐ222から手づくねかわらけ１片（0.6g）・ロクロかわらけ１片（1.3g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけの出土から12世紀後半以降の建築と推測される。性格は不明である。

ＳＢ25掘立柱建物跡（第42図、写真図版28・36・60）

〔位置〕ＶＯ６ｂグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕６個の柱穴（Ｐ230・640・1081、Ｐ641・274・163）を使用した。Ｐ230で柱痕跡が確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕ＳＢ10・ＳＢ14・ＳＢ18・ＳＢ19・ＳＢ20とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－90°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き484cm（16.0尺）、梁間484cm（16.0尺）で、面積は23.43㎡（7.08坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、484：484＝１：１である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて242cm（8.0尺）である。

〔出土遺物〕なし。

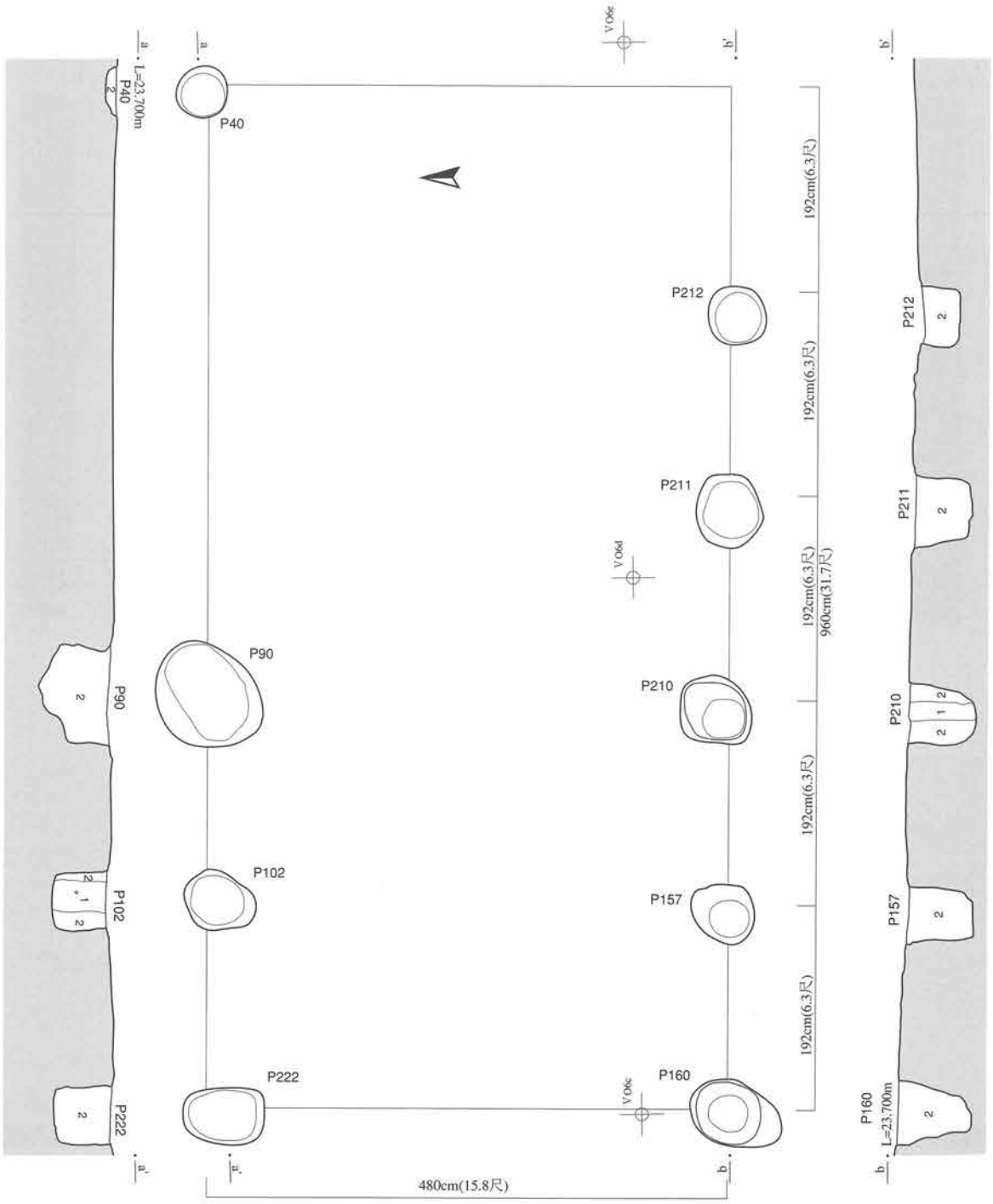
〔時期・性格〕出土遺物がなく建物の時期は不明である。また、性格も不明であるが、規模から付属屋と推測される。

ＳＢ26掘立柱建物跡（第43図、写真図版28・36・60）

〔位置〕ＶＯ６ｅグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕６個の柱穴（Ｐ88・217、Ｐ212・174・1138・116）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。柱穴の規模が大きく、柱の抜き取りがおこなわれた可能性が指摘できる。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ88はＳＢ22のＰ1088を切っており、ＳＢ22よりも新しい。Ｐ212はＰ213を切り、Ｐ116が

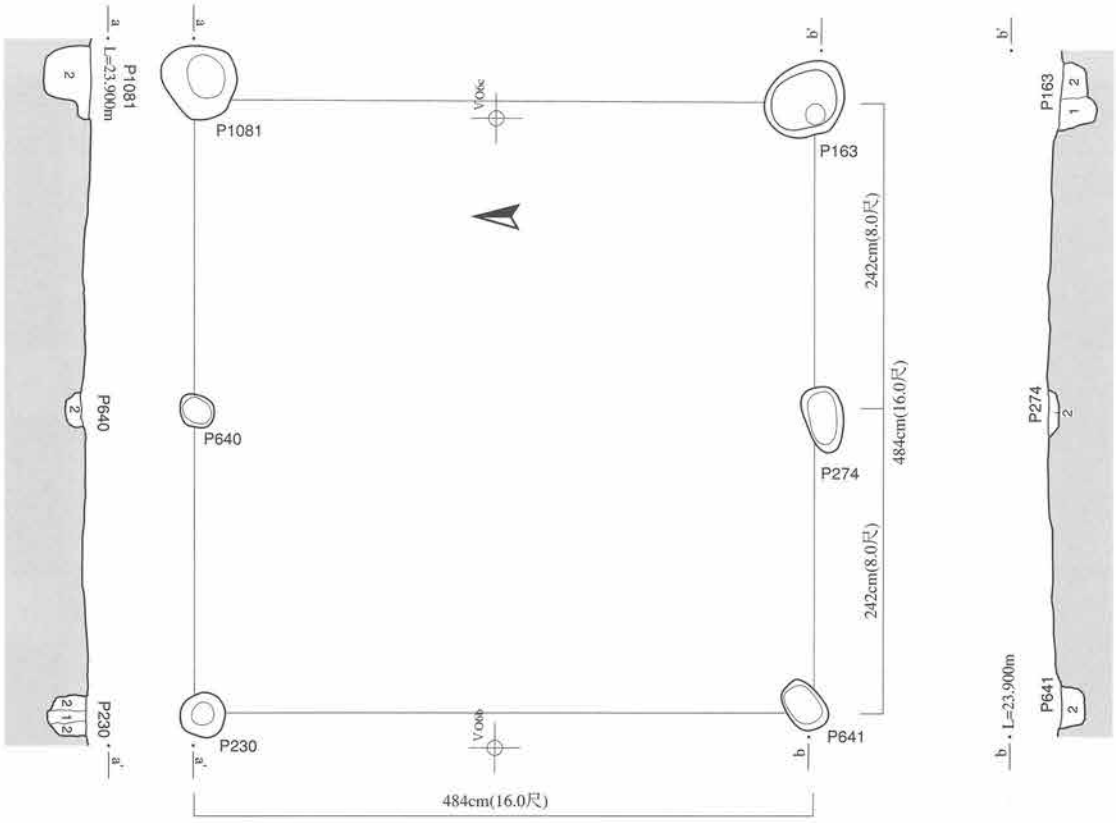


SB24

1　10YR5/2　灰黄褐色土　ややしまり無　柱痕
2　10YR6/8　黄褐色ローム　10YR3/1 黒褐色土まだらに多量含

0　(1：60)　3m

第41図　細田遺跡　SB24



第42図　細田遺跡　SB25

P117・119に切られる。P212はＳＢ24でも使用しているが、ＳＢ24かＳＢ26のいずれか新しい方に属する柱穴と考えられる。調査時にその判別ができなかったため、両方に掲載した。ＳＢ３・ＳＢ４・ＳＢ６・ＳＢ15・ＳＢ16・ＳＢ20・ＳＢ21・ＳＢ24とはプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

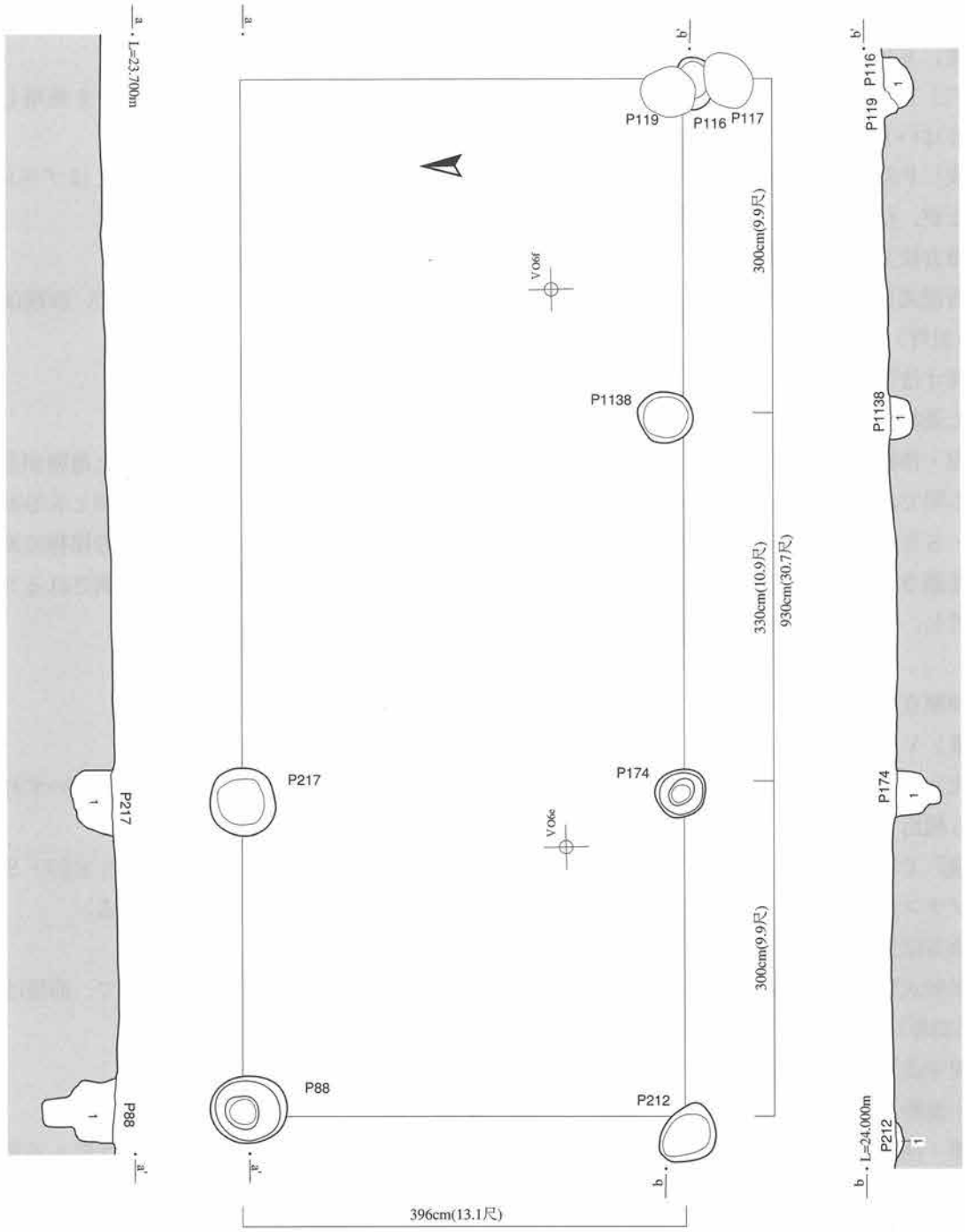
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－92°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き930cm（30.7尺）、梁間396cm（13.1尺）で、面積は36.83㎡（11.13坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、300cm（9.9尺）・330cm（10.9尺）の２種類である。

〔出土遺物〕P217から、手づくねかわらけ１片（4.3g）・ロクロかわらけ１片（3.2g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけの出土から12世紀後半以降の建築と推測される。また、本建物より古いＳＢ22は出土遺物がなく、その時期は不明である。また、本建物の性格は不明である。



SB26

1　10YR5/6　黄褐色土　10YR3/2黒褐色土まだらに多量混入　焼土粒微量混入

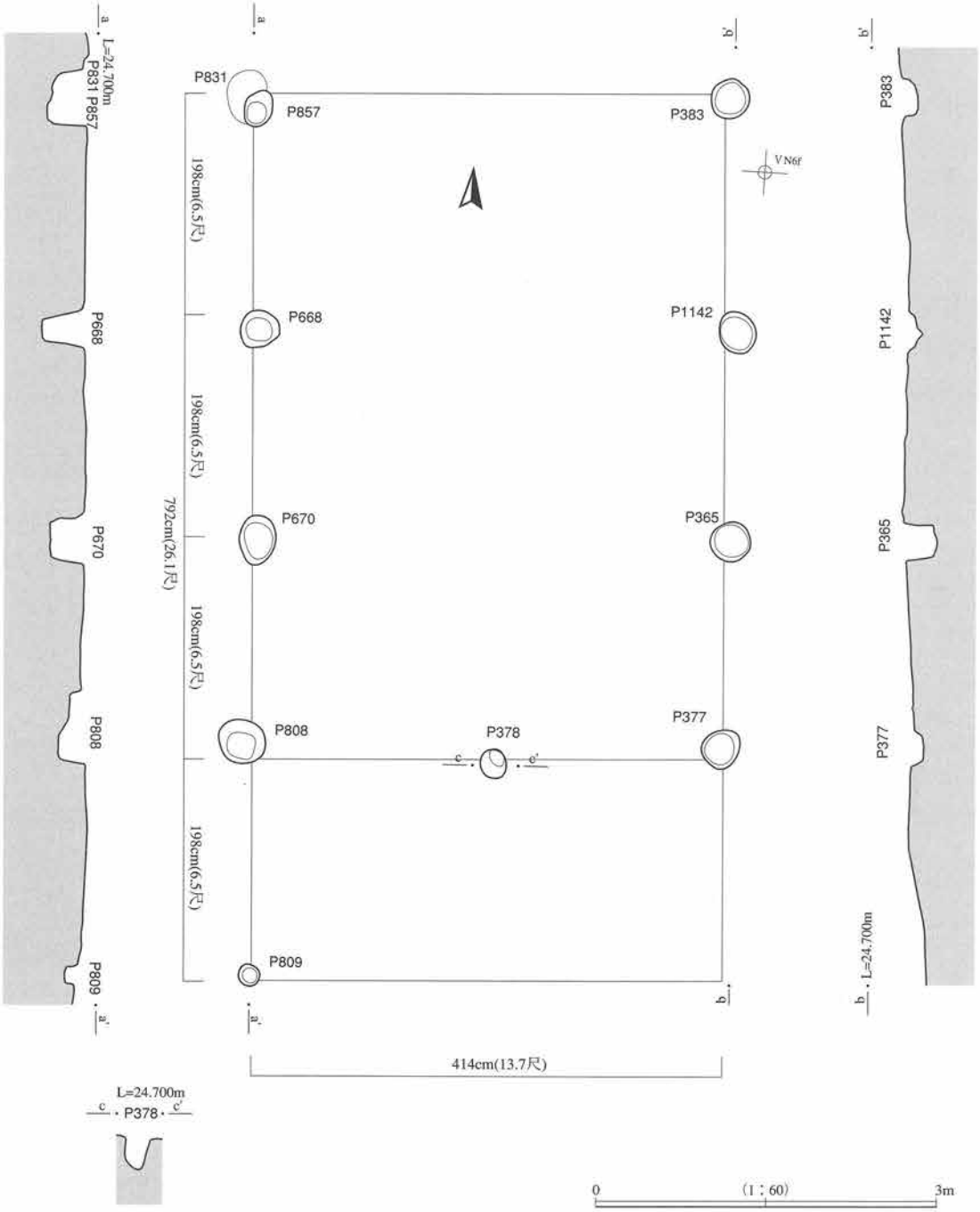
0　(1：60)　3m

第43図　細田遺跡　SB26

ＳＢ27掘立柱建物跡（第44図、写真図版29・37）
〔位置〕ＶＮ５ｅグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕10個の柱穴（Ｐ383・857・365・377、Ｐ1142・668・670・808・809、Ｐ378）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ857がＳＢ31のＰ831を切っており、ＳＢ31よりも新しい。ＳＢ28・ＳＢ29とはプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－177°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き792cm（26.1尺）、梁間414cm（13.7尺）で、面積は32.79㎡（9.91坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて198cm（6.5尺）である。
〔出土遺物〕なし。
〔時期・性格〕出土遺物がなく建物の時期は不明である。本建物より古いＳＢ31も出土遺物がなく時期は不明である。また、性格も確定できないが、規模から付属屋と推測される。本建物とＳＢ28・ＳＢ29・ＳＢ31は、ほぼ同じ規模の建物が棟方向を同じくして重複しており、同じ性格の建物の建て替えと推測される。これらの建物の西には、ほぼ軸方向が共通する近世民家の母屋と推測されるＳＢ32が位置し、本建物とＳＢ28・ＳＢ29・ＳＢ31はこの母屋に伴う付属屋と推測される。

ＳＢ28掘立柱建物跡（第45図、写真図版29・37）
〔位置〕ＶＮ５ｅグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ653・370・367、Ｐ376・374・1017・382）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。Ｐ370の底面には平らな礫が置かれ、礎盤と考えられる。
〔重複〕Ｐ367がＰ366、Ｐ374がＰ389を切る。Ｐ382がＰ1140に切られる。ＳＢ27・ＳＢ29・ＳＢ31とはプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－178°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き600cm（19.8尺）、梁間360cm（11.9尺）で、面積は21.60㎡（6.53坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、600：360＝５：３である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて200cm（6.6尺）である。
〔出土遺物〕Ｐ374から、粘板岩製の硯片？（148）が出土した。
〔時期・性格〕出土遺物の時代を推測することができず、時期は不明である。また、性格も不明であるが、規模から付属屋と推測される。本建物とＳＢ27、ＳＢ29、ＳＢ31は、ほぼ同じ規模の建物が棟方向を同じくして重複しており、同じ性格の建物の建て替えと推測される。これらの建物の西には、ほぼ軸方向が共通する近世民家の母屋と推測されるＳＢ32が位置し、本建物とＳＢ27、ＳＢ29、ＳＢ31はこの母屋に伴う付属屋と推測される。

ＳＢ29掘立柱建物跡（第45図、写真図版29・37）
〔位置〕ＶＮ５ｅグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕６個の柱穴（Ｐ829・664・662、Ｐ1122・644・654）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ644がＰ317を切る。ＳＢ27・ＳＢ28・ＳＢ31とはプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。



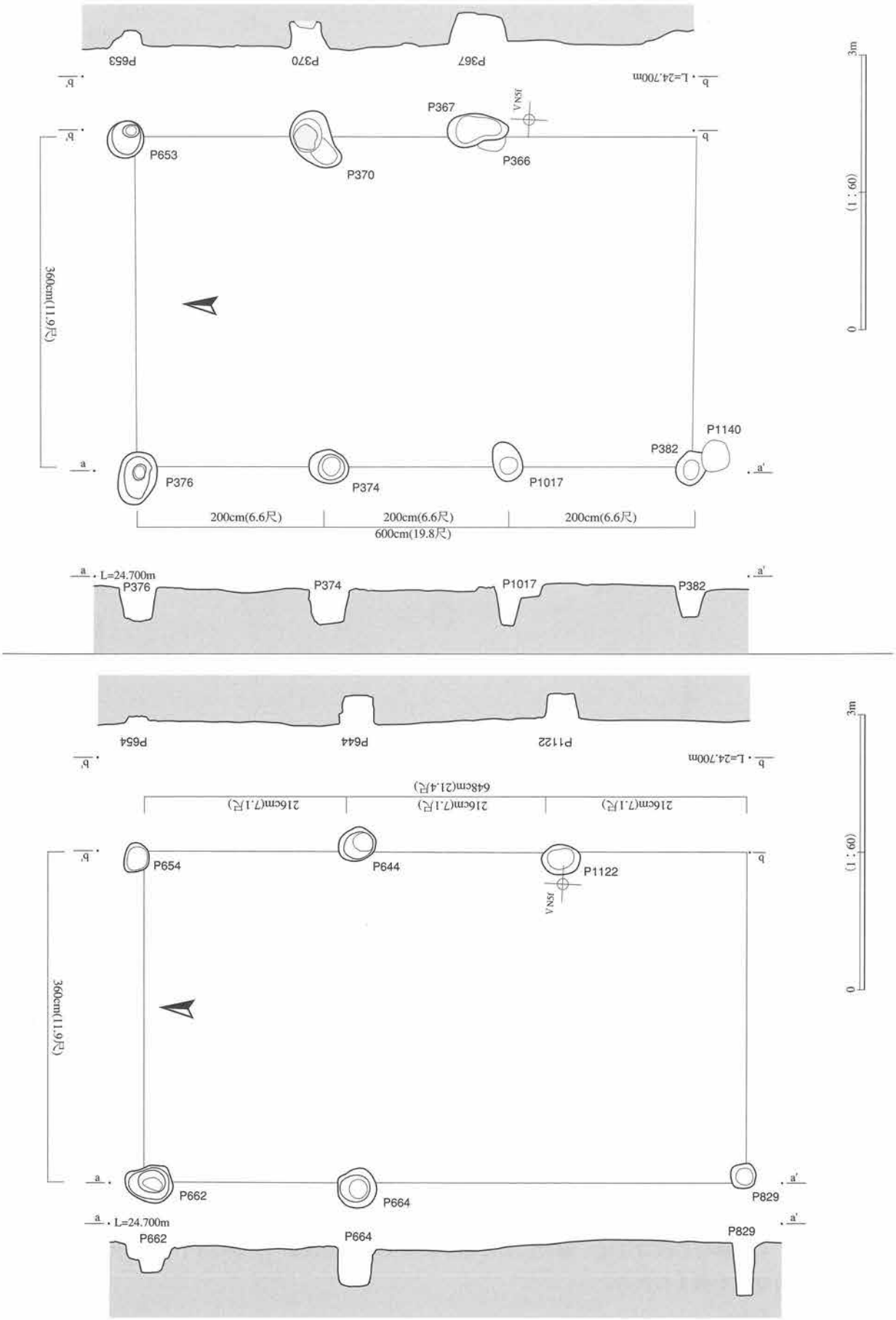
第44図　細田遺跡　SB27

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、N－177°－Eである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き648cm（21.4尺）、梁間360cm（11.9尺）で、面積は23.33㎡（7.05坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、648：360＝9：5である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて216cm（7.1尺）である。1尺′＝36cmと定めると、216cm＝6尺′で、桁行きの648cm＝18尺′、梁間の360cm＝10尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な1尺（30.3cm）を用いず、1尺′＝36cmを基準寸法とした可能性が考えられる。

〔出土遺物〕なし。



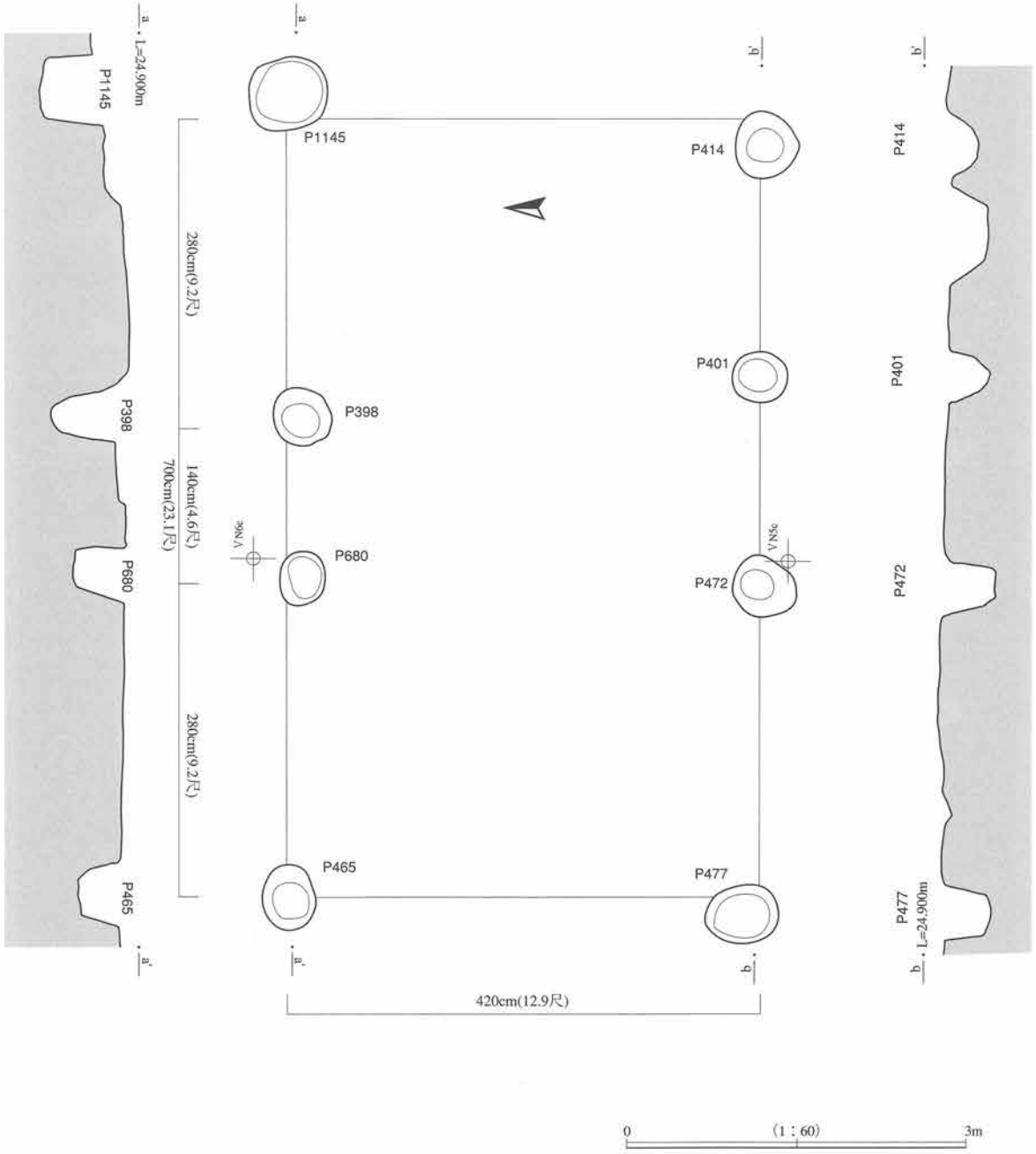
第45図　細田遺跡　SB28・SB29

〔時期・性格〕出土遺物がなく建物の時期は不明である。性格も不明であるが、規模から付属屋と推測される。本建物とＳＢ27、ＳＢ28、ＳＢ31は、ほぼ同じ規模の建物が棟方向を同じくして重複しており、同じ性格の建物の建て替えと推測される。これらの建物の西には、ほぼ軸方向が共通する近世民家の母屋と推測されるＳＢ32が位置し、本建物とＳＢ27・ＳＢ28・ＳＢ31はこの母屋に伴う付属屋と推測される。

ＳＢ30掘立柱建物跡（第46図、写真図版30・37）

〔位置〕ＶＮ５ｂ・ＶＮ５ｃグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ465・680・398・1145、Ｐ477・472・401・414）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。柱穴の形状が大きく、柱の抜き取り痕の可能性が考えられる。礎盤



第46図　細田遺跡　SB30

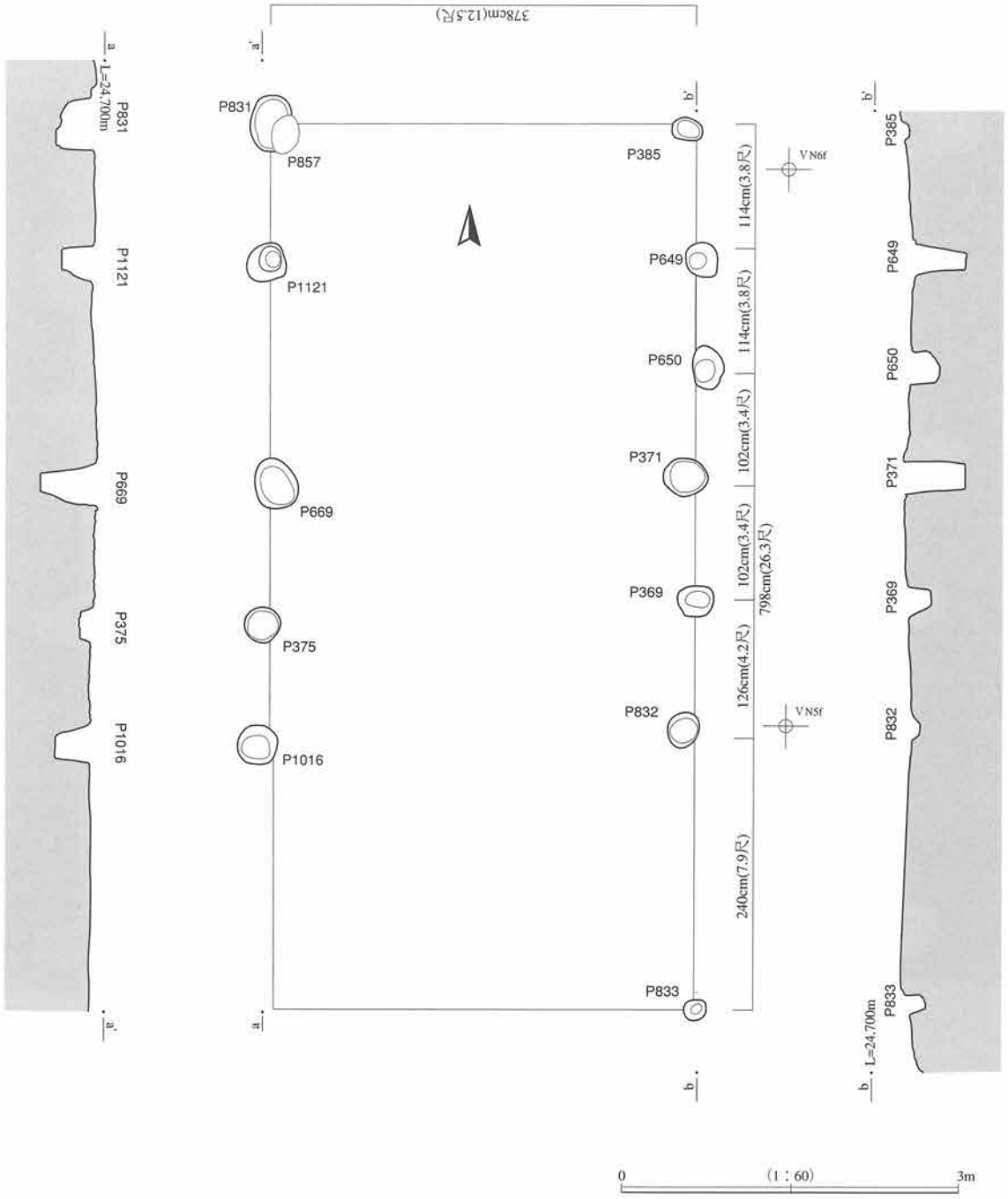
は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ472がＰ483を切る。ＳＢ32とはプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－89°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き700cm（23.1尺）、梁間420cm（12.9尺）で、面積は29.4㎡（8.88坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、700：420＝５：３である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、280cm（9.2尺）・140cm（4.6尺）の２種類である。１尺′＝35cmと定めると、280cm＝８尺′、140cm＝４尺′で、桁行きの700cm＝20尺′、梁間の420cm＝12尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な１尺（30.3cm）を用いず、１尺′＝35cmを基準寸法とした可能性が考えられる。

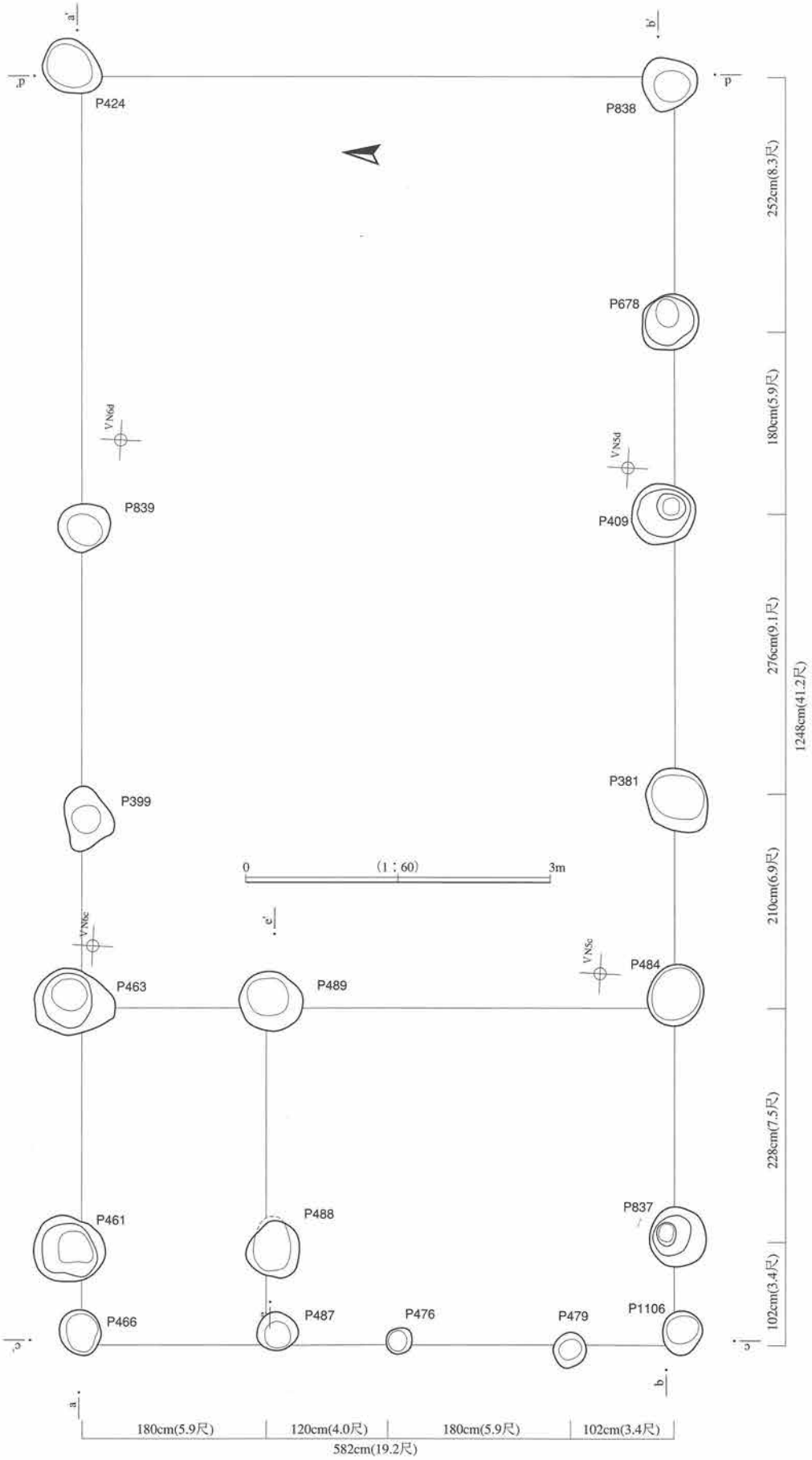


第47図　細田遺跡　SB31

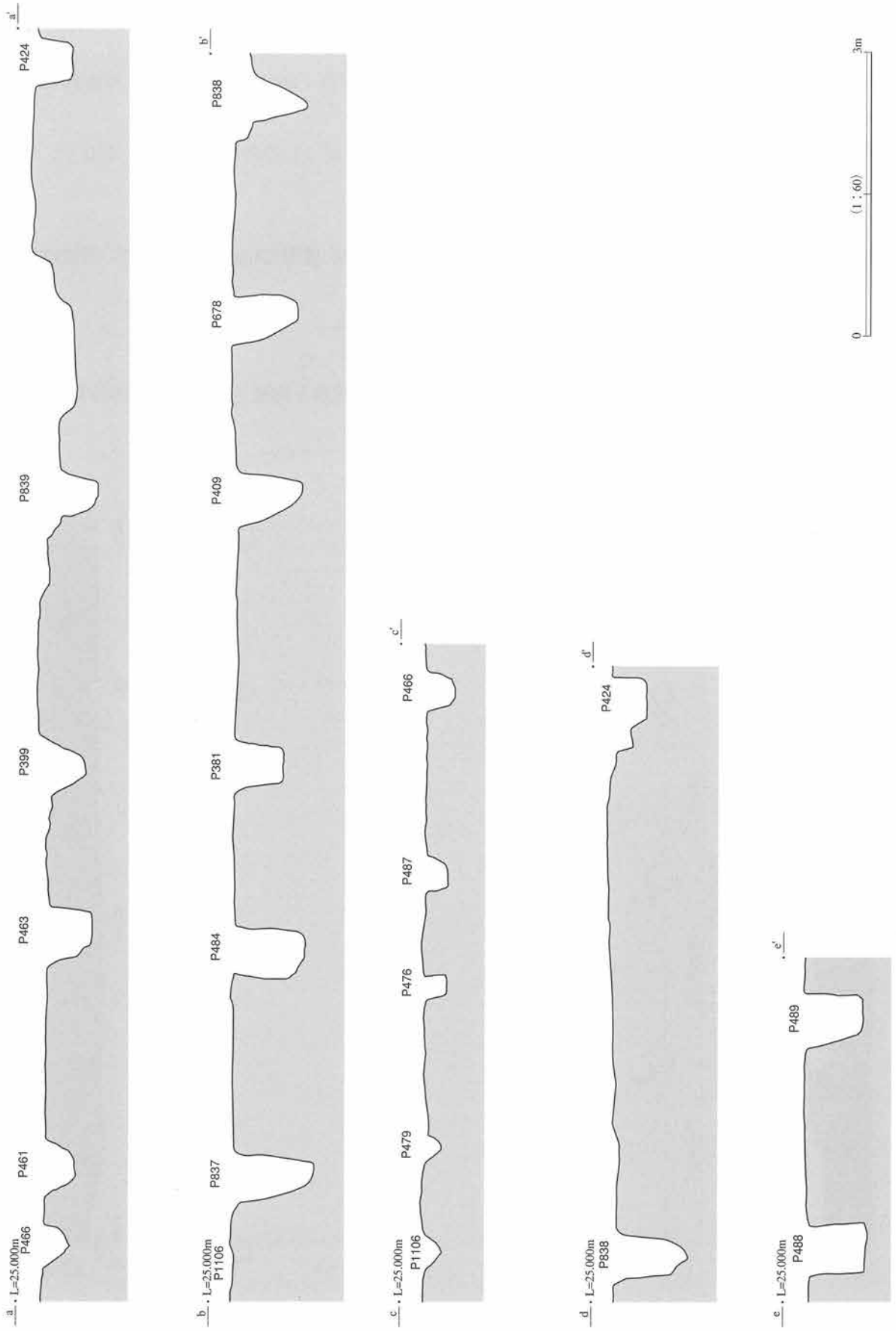
〔出土遺物〕Ｐ398から肥前磁器碗（98）、Ｐ472から肥前磁器碗（95）が出土した。
〔時期・性格〕出土した肥前時期碗はいずれも18世紀代のものである。しかし、本建物は柱の抜き取りが行われている可能性があり、これらの遺物の年代観が建築年代を反映していないことも考えられる。性格は不明である。

ＳＢ31掘立柱建物跡（第47図、写真図版30・37）
〔位置〕ＶＮ５ｅグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕12個の柱穴（Ｐ1016・375・669・1121・857、Ｐ833・832・369・371・650・649・385）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ831がＳＢ27のＰ857に切られており、ＳＢ27よりも古い。Ｐ371がＰ646を切る。ＳＢ28・ＳＢ29とはプランが重複するが、柱穴同士の直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－０°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き798cm（26.3尺）、梁間378cm（12.5尺）で、面積は30.16㎡（9.11坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、240cm（7.9尺）・126cm（4.2尺）・102cm（3.4尺）・114cm（3.8尺）の４種類である。
〔出土遺物〕なし。
〔時期・性格〕出土遺物がなく建物の時期は不明である。本建物より新しいＳＢ27も出土遺物がなく時期は不明である。また、性格も確定できないが、規模から付属屋と推測される。本建物とＳＢ27、ＳＢ28、ＳＢ29は、ほぼ同じ規模の建物が棟方向を同じくして重複しており、同じ性格の建物の建て替えと推測される。これらの建物の西には、ほぼ軸方向が共通する近世民家の母屋と推測されるＳＢ32が位置し、本建物とＳＢ27、ＳＢ28、ＳＢ29はこの母屋に伴う付属屋と推測される。

ＳＢ32掘立柱建物跡（第48・49図、写真図版30・37）
〔位置〕ＶＮ５ｃグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕18個の柱穴（Ｐ466・461・463・399・839・424、Ｐ1106・837・484・381・409・678・838、Ｐ487・488・489・476・479）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できず、柱の抜き取りをおこなった可能性がある。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕ＳＢ30とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－87°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き1248cm（41.2尺）、梁間582cm（19.2尺）で、面積は72.63㎡（21.94坪）である。Ｐ488・489により３室に仕切られていたと考えられる。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、102cm（3.4尺）・180cm（5.9尺）・210cm（6.9尺）・228cm（7.5尺）・252cm（8.3尺）・276cm（9.1尺）と一定ではない。梁間では102cm・120cm（4.0尺）・180cmを使用している。
〔出土遺物〕Ｐ424から、陶器蓋（82）が出土した。
〔時期・性格〕出土遺物の陶器蓋は在地産で19世紀前半のものである。本建物は柱の抜き取り行っている可能性があり、解体時に混入した遺物の可能性がある。性格は規模と内部を分室する間取りから近世民家の母屋と推測される。下屋柱の痕跡が失われている可能性が考えられる。



第48図　細田遺跡　SB32（1）



第49図　細田遺跡　SB32（2）

ＳＢ33掘立柱建物跡（第50図、写真図版31・37）

〔位置〕ＶＯ７ｇ・ＶＯ８ｇグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ1041・25・1089・699、Ｐ707・708・711・697）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕ＳＢ36・ＳＢ37・ＳＢ38とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

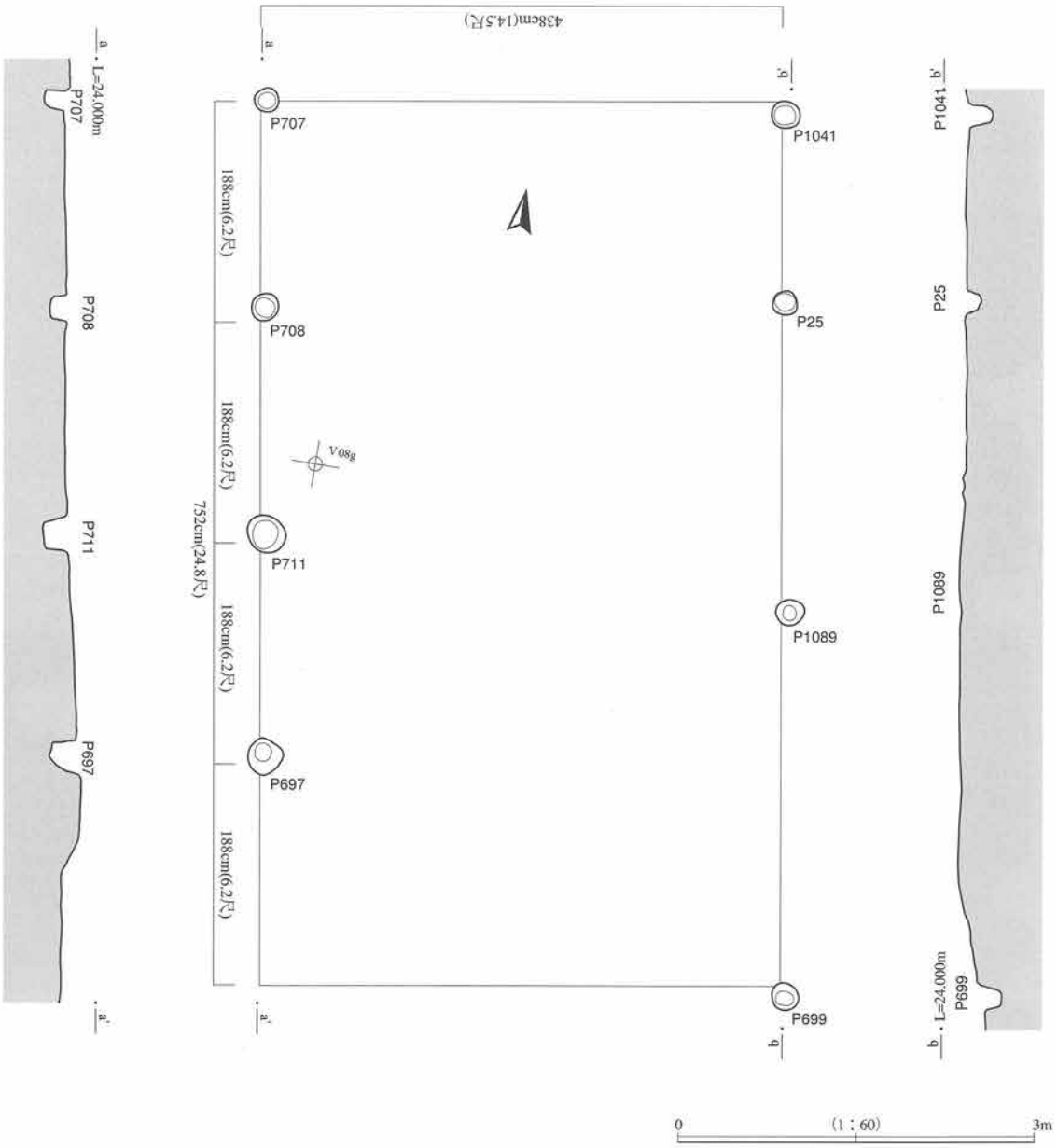
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－171°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き752cm（24.8尺）、梁間438cm（14.5尺）で、面積は32.94㎡（9.95坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて188cm（6.2尺）である。

〔出土遺物〕Ｐ699から、手づくねかわらけ１片（1.2g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけの出土から12世紀後半以降の建築と推測される。性格は不明である。



第50図　細田遺跡　SB33

ＳＢ34掘立柱建物跡（第51図、写真図版31・37）

〔位置〕ＶＮ６ｊグリッド付近に位置する。

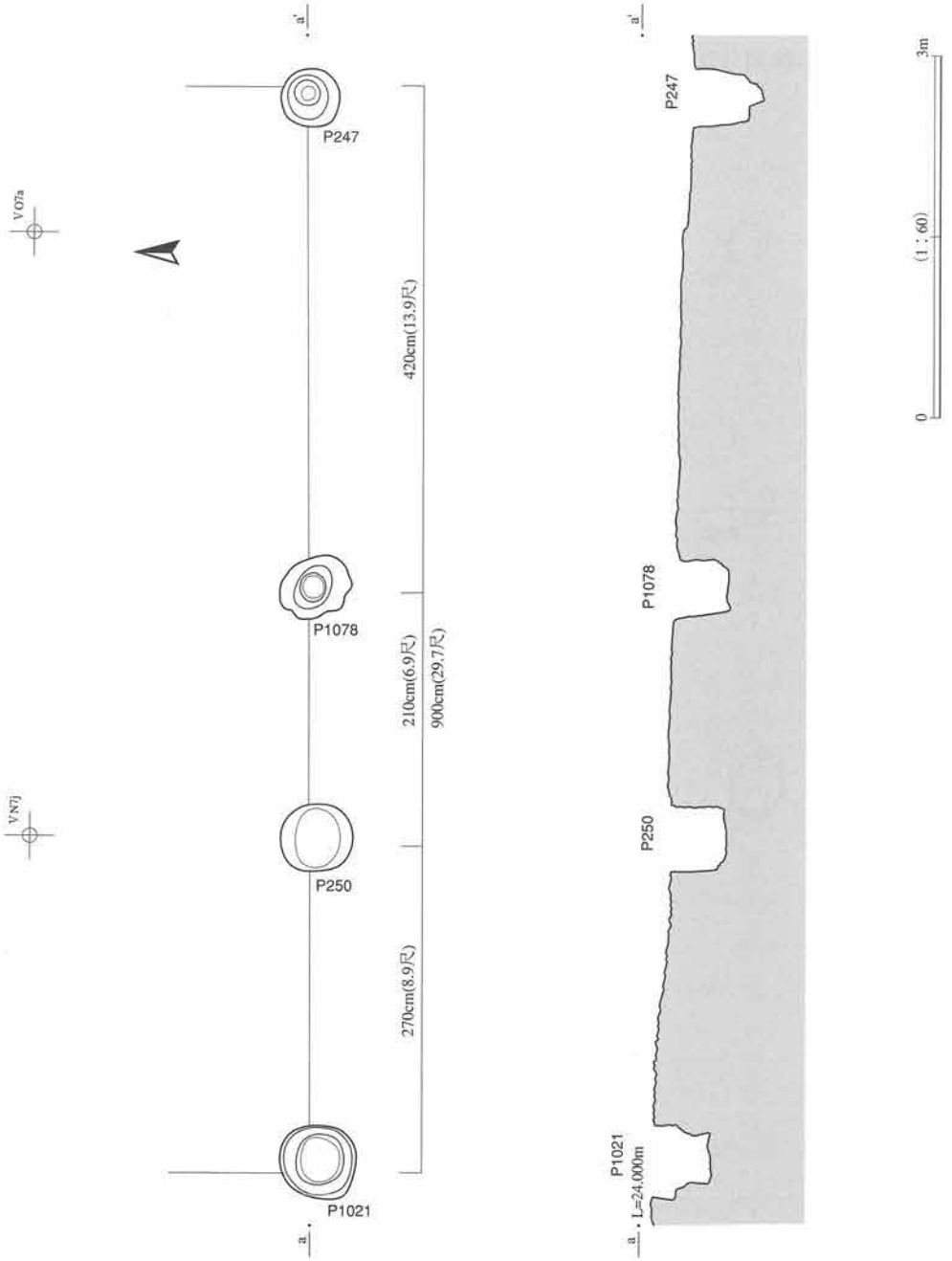
〔柱穴〕４個の柱穴（Ｐ1021・250・1078・247）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕なし。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－89°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。確認できたのは建物の南辺部分と考えられるが、対応する北辺の柱穴は見出せなかった。北辺側は検出された南辺側より標高がやや低く、柱穴が失われたと推測される。規模は、桁行き900cm（29.7尺）である。

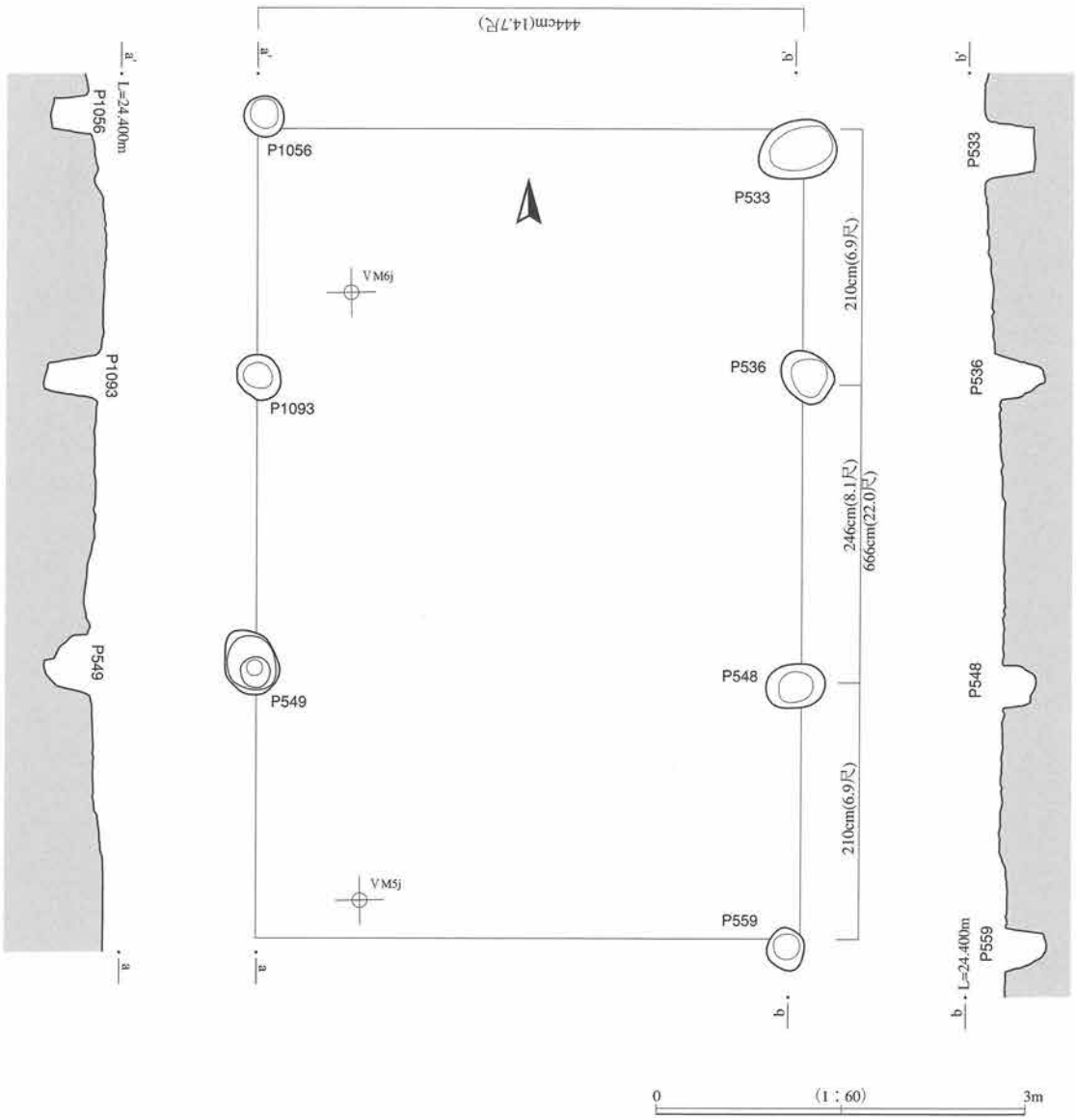
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、270cm（8.9尺）・210cm（6.9尺）・420cm（13.9尺）の３種類である。



第51図　細田遺跡　SB34

〔出土遺物〕なし。
〔時期・性格〕出土遺物がなく不明である。また、性格も不明である。

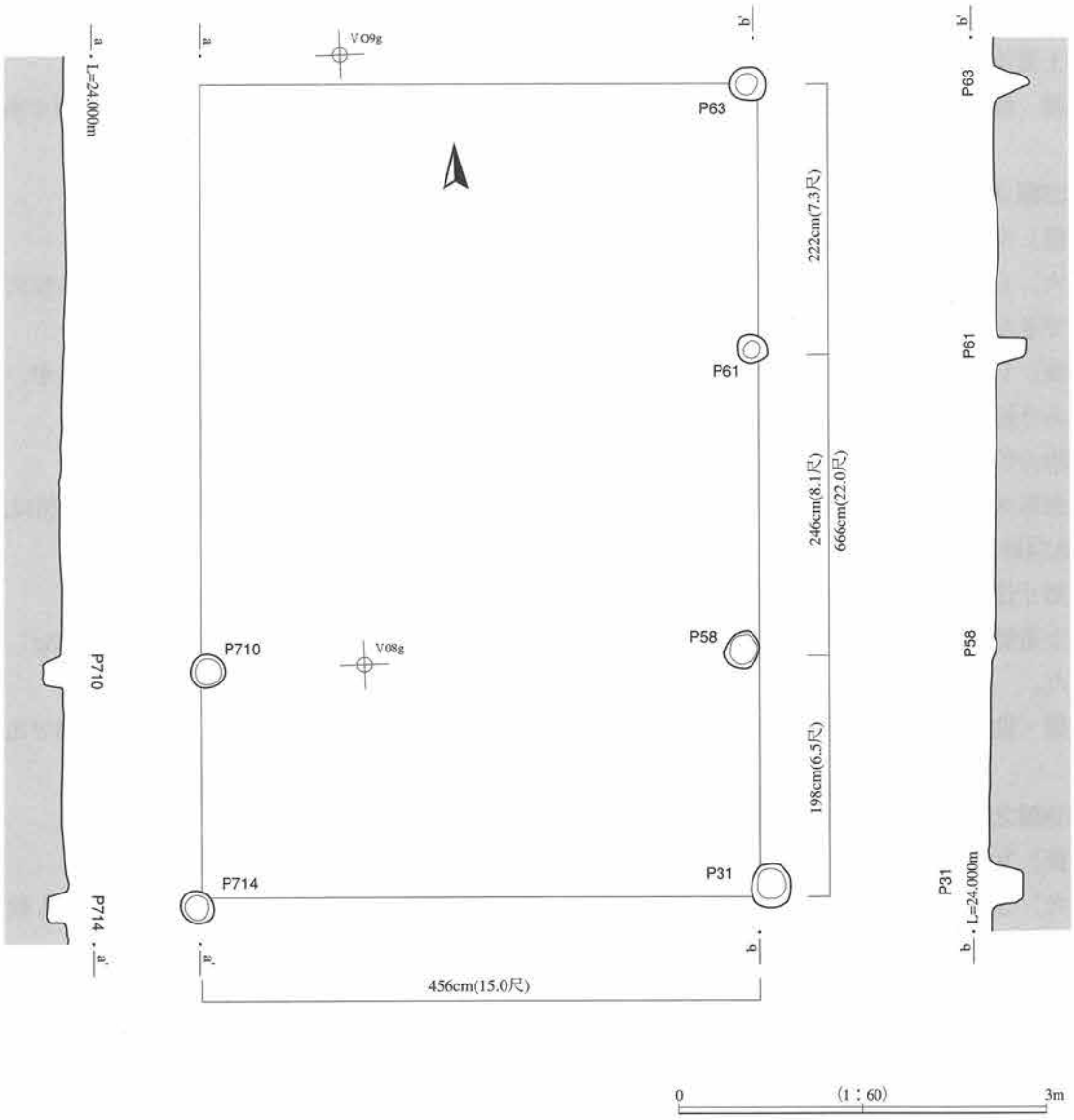
ＳＢ35掘立柱建物跡（第52図、写真図版31・38）
〔位置〕ＶＭ５ｊグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ549・1093・1056、Ｐ559・548・536・533）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕ＳＢ40・ＳＢ41とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－１°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き666cm（22.0尺）、梁間444cm（14.7尺）で、面積は29.57㎡（8.93坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、666：444＝３：２である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、210cm（6.9尺）・246cm（8.1尺）の２種類である。



第52図　細田遺跡　SB35

〔出土遺物〕P549から、石鏃（5）が出土した。
〔時期・性格〕出土遺物の石鏃は混入品と考えられ、建物の時期は不明である。また、性格も不明である。

ＳＢ36掘立柱建物跡（第53図、写真図版32・38）
〔位置〕ＶＯ８ｇグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕６個の柱穴（Ｐ714・710、Ｐ31・58・61・63）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕ＳＢ33・ＳＢ37・ＳＢ38とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－２°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き666cm（22.0尺）、梁間456cm（15.0尺）で、面積は30.37㎡（9.18坪）である。



第53図　細田遺跡　SB36

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、198cm（6.5尺）・246cm（8.1尺）・222cm（7.3尺）の３種類である。
〔出土遺物〕Ｐ61からロクロかわらけ２片（8.0g）、Ｐ63から手づくねかわらけ１片（2.0g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけの出土から12世紀後半以降の建築と推測される。性格は不明である。

ＳＢ37掘立柱建物跡（第54図、写真図版32・38）
〔位置〕ＶＯ８ｇグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕９個の柱穴（Ｐ726・1038・793、Ｐ781、Ｐ59・30・24・775・777）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕ＳＢ33・ＳＢ36・ＳＢ38とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－２°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き888cm（29.3尺）、梁間496cm（16.4尺）で、面積は44.22㎡（13.36坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて222cm（7.3尺）である。梁間では288cm（9.5尺）・210cm（6.9尺）を用いている。
〔出土遺物〕Ｐ30から、手づくねかわらけ１片（6.2g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけの出土から12世紀後半以降の建築と推測される。性格は不明である。

ＳＢ38掘立柱建物跡（第55図、写真図版32・38）
〔位置〕ＶＯ７ｆグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕６個の柱穴（Ｐ750・738・709・682、Ｐ715・693）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ750がＰ751に切られる。ＳＢ33・ＳＢ36・ＳＢ37・ＳＢ39とはプランが重複するが、直接切りあう柱穴がなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－91°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き752cm（24.8尺）、梁間376cm（12.4尺）で、面積は28.28㎡（8.54坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、752：376＝２：１である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、268cm（8.8尺）・242cm（8.0尺）の２種類である。
〔出土遺物〕Ｐ682から手づくねかわらけ１片（1.8g）、Ｐ738から手づくねかわらけ１片（4.3g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけの出土から12世紀後半以降の建築と推測される。性格は不明である。

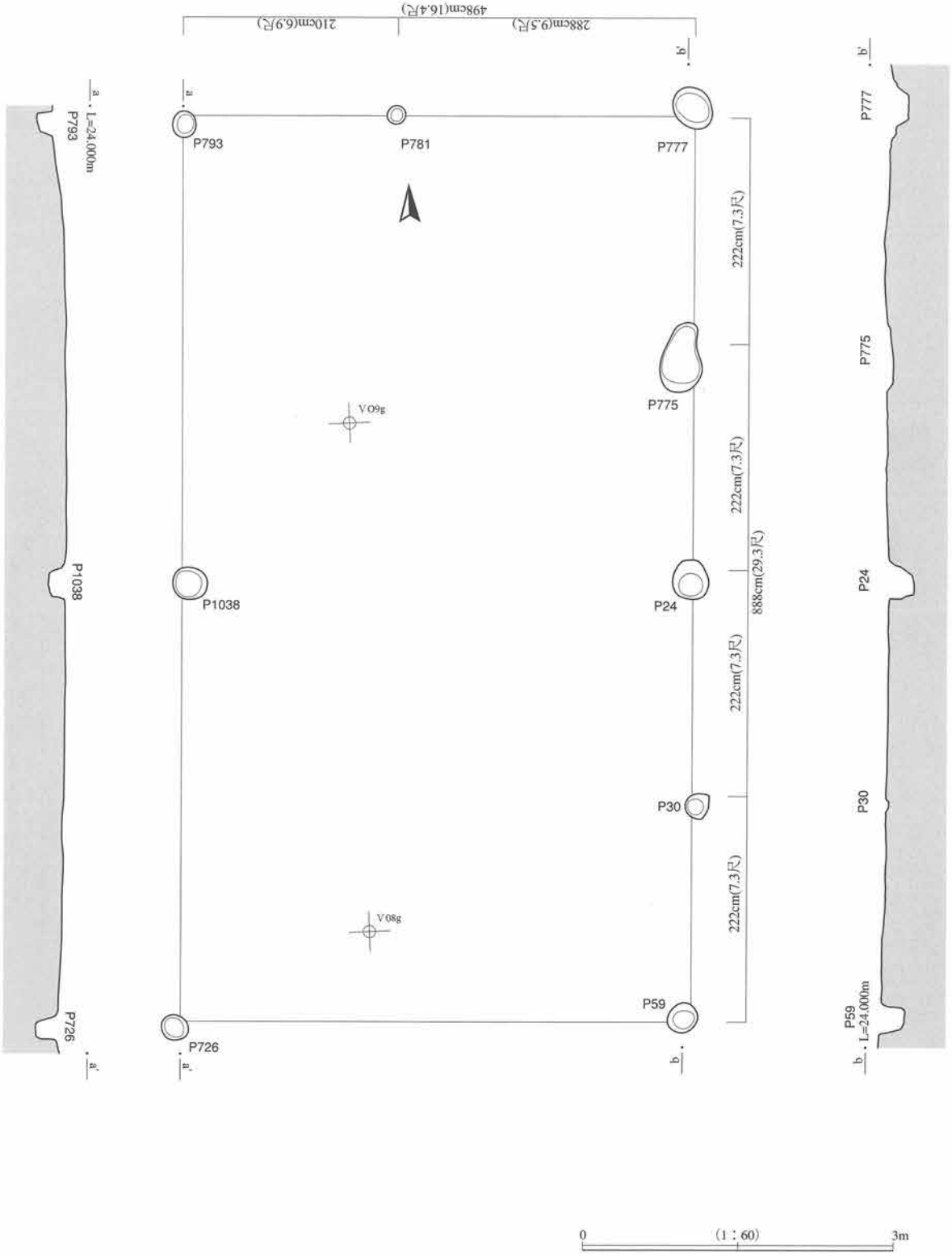
ＳＢ39掘立柱建物跡（第55図、写真図版33・38）
〔位置〕ＶＯ７ｅグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕５個の柱穴（Ｐ746、Ｐ768・766・764・46）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕ＳＢ16・ＳＢ22・ＳＢ38とプランが重複するが、柱穴同士の直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－178°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き720cm（23.8尺）、梁間354cm（11.7尺）で、面積は25.49

㎡（7.70坪）である。

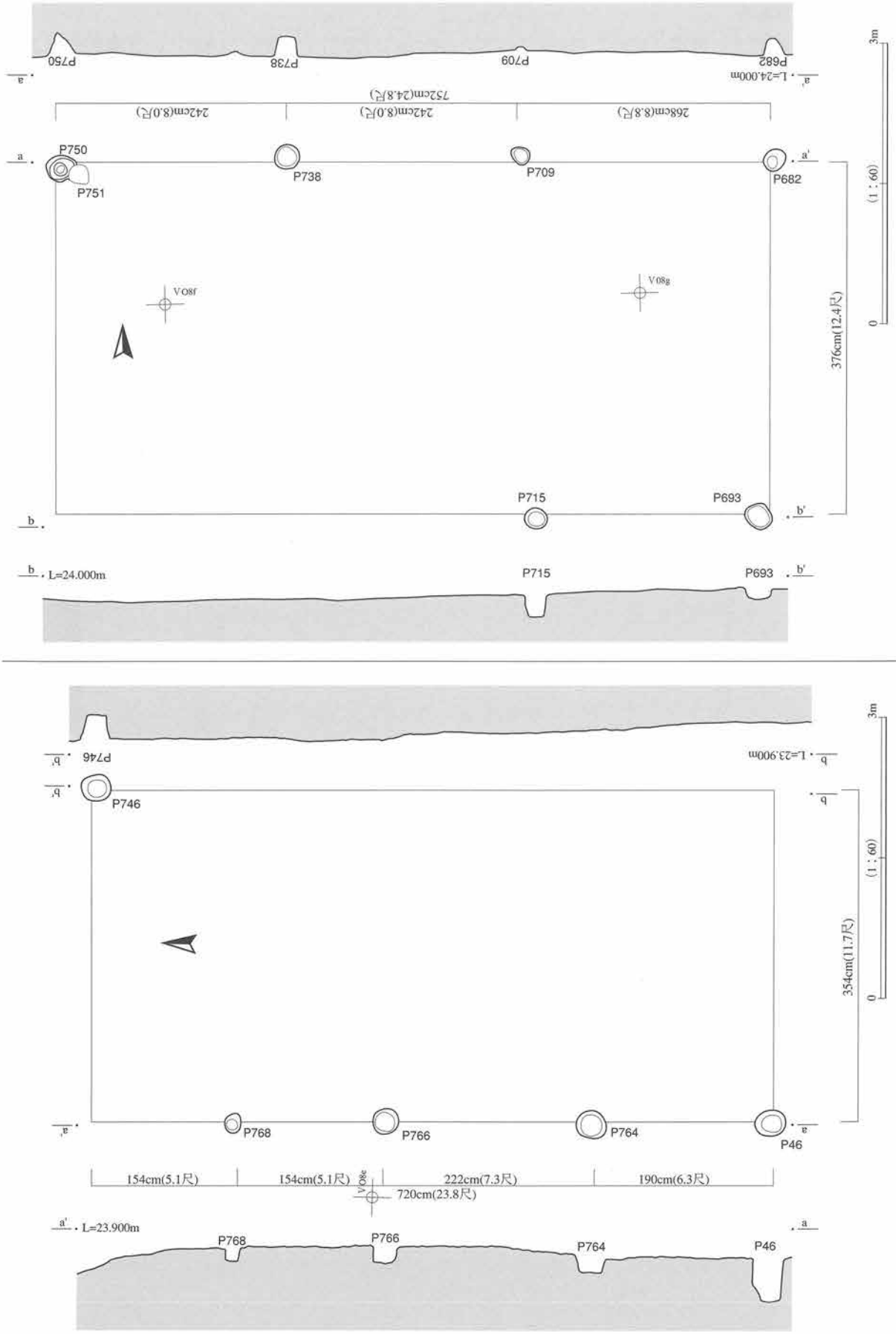
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、154cm（5.1尺）・222cm（7.3尺）・190cm（6.3尺）の３種類である。

〔出土遺物〕Ｐ46から手づくねかわらけ７片（39.9g）・ロクロかわらけ１片（4.6g）、Ｐ764から手づくねかわらけ１片（5.3g）・ロクロかわらけ１片（16.5g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけの出土から12世紀後半以降の建築と推測される。性格は不明である。



第54図　細田遺跡　SB37



第55図　細田遺跡　SB38・SB39

ＳＢ40掘立柱建物跡（第56図、写真図版33・38）

〔位置〕ＶＮ６ｊグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ1047・528・1060・468、Ｐ1057・1071・1073）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ517がＰ1060を切り、Ｐ1047がＳＫ29を切り、ＳＫ29より新しい。ＳＢ35・ＳＢ41とプランが重複するが、柱穴同士の直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

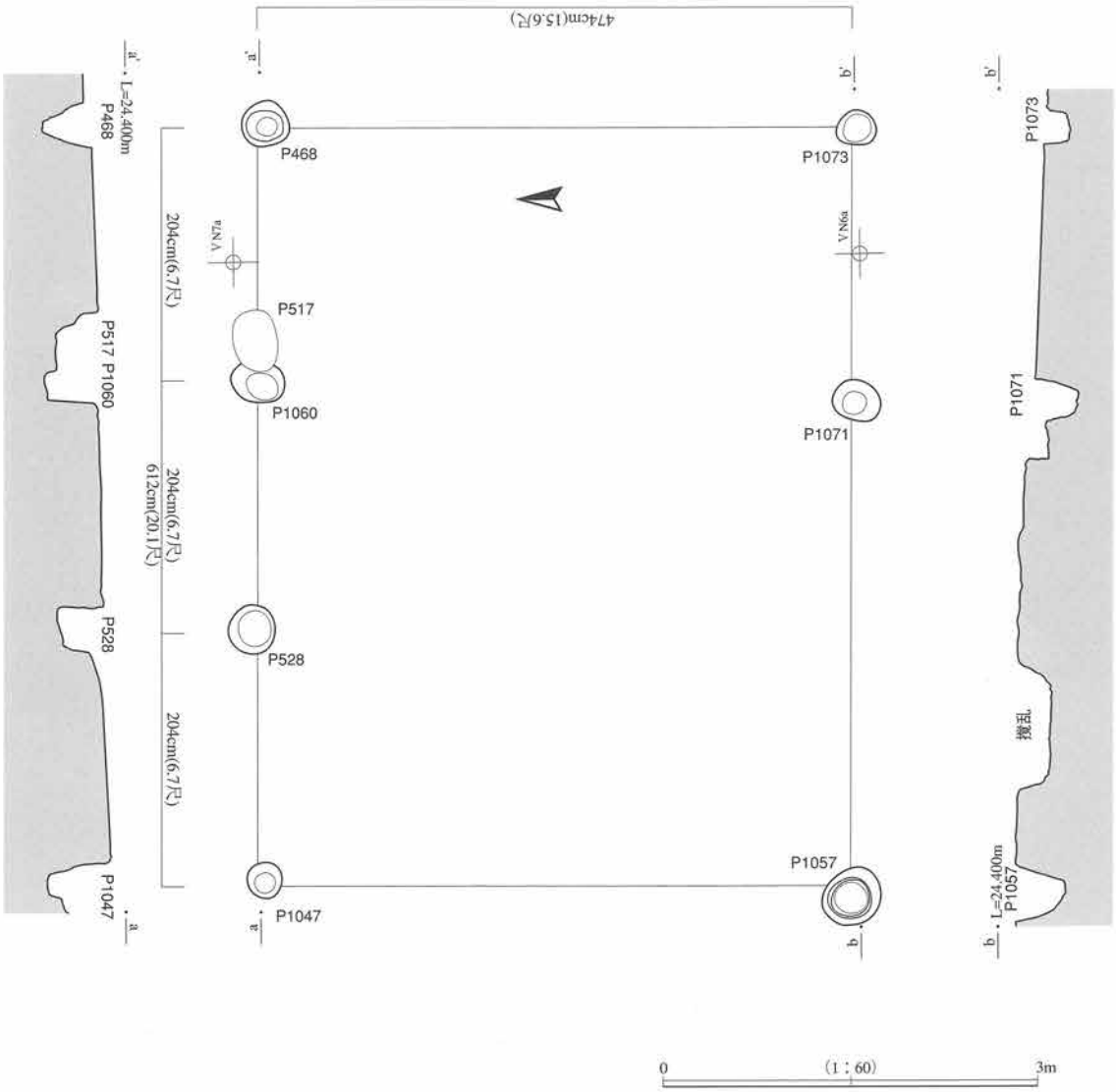
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－90°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き612cm（20.2尺）、梁間474cm（15.6尺）で、面積は29.01㎡（8.76坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて204cm（6.7尺）である。

〔出土遺物〕Ｐ1073から、手づくねかわらけ31片（52.1g）、ロクロかわらけ15片（27.0g）が出土した。

〔時期・性格〕本建物より古いＳＫ29からは14世紀代の青磁碗片が出土しており、本建物は14世紀代よりも新しいことになる。性格は不明である。



第56図　細田遺跡　SB40

ＳＢ41掘立柱建物跡（第57図、写真図版33・38）

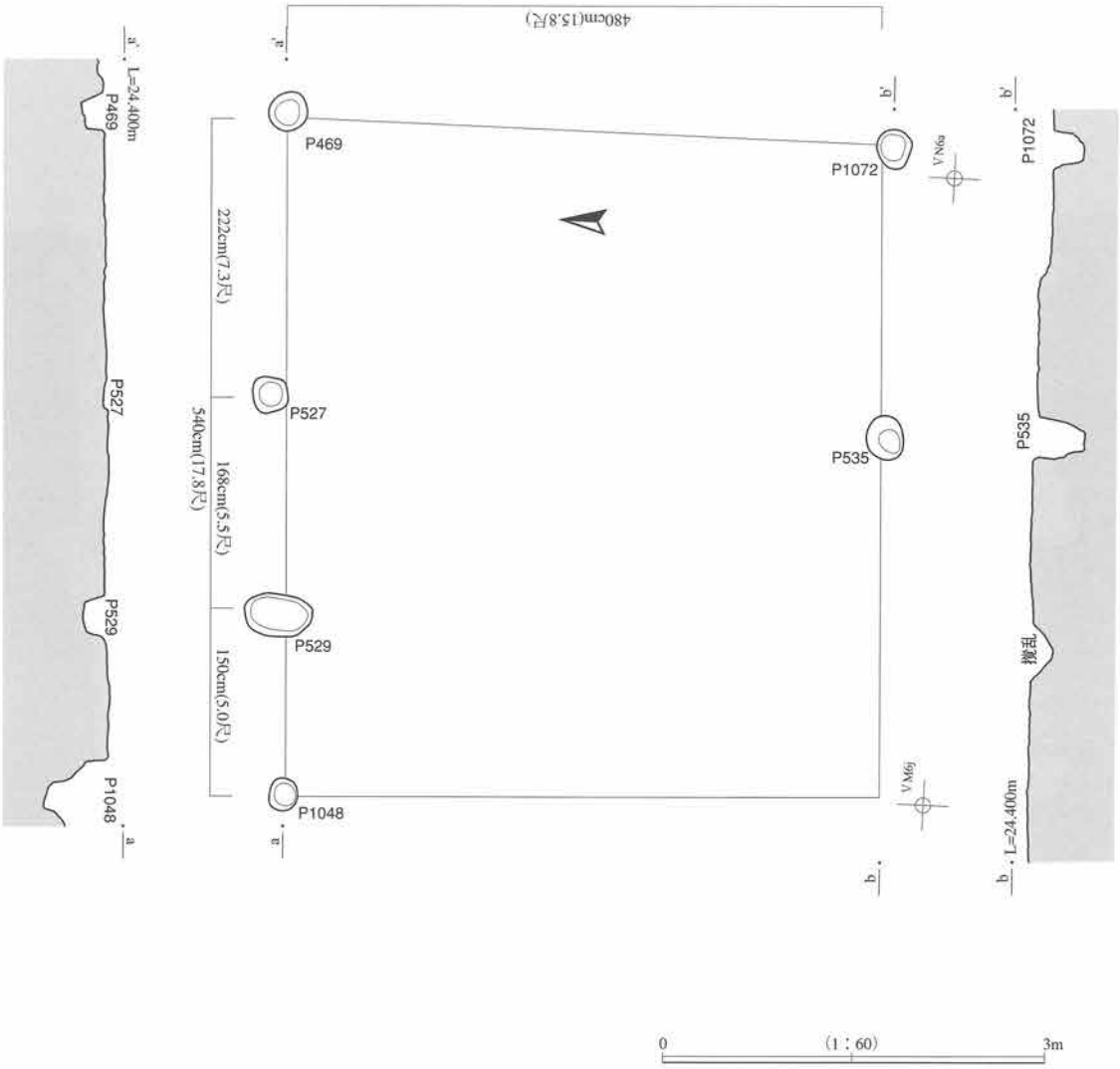
〔位置〕ＶＭ６ｊグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕６個の柱穴（Ｐ1048・529・527・469、Ｐ535・1072）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ1048がＳＫ29を切り、ＳＫ29より新しい。ＳＢ35・ＳＢ40とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－87°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。北辺と南辺の長さが異なり、プランは台形となる。北辺を基準とすると、規模は、桁行き540cm（18.0尺）、梁間480cm（15.8尺）で、面積は25.92㎡（7.83坪）である。桁行きと梁間の長さの比は540：480＝９：８である。



第57図　細田遺跡　SB41

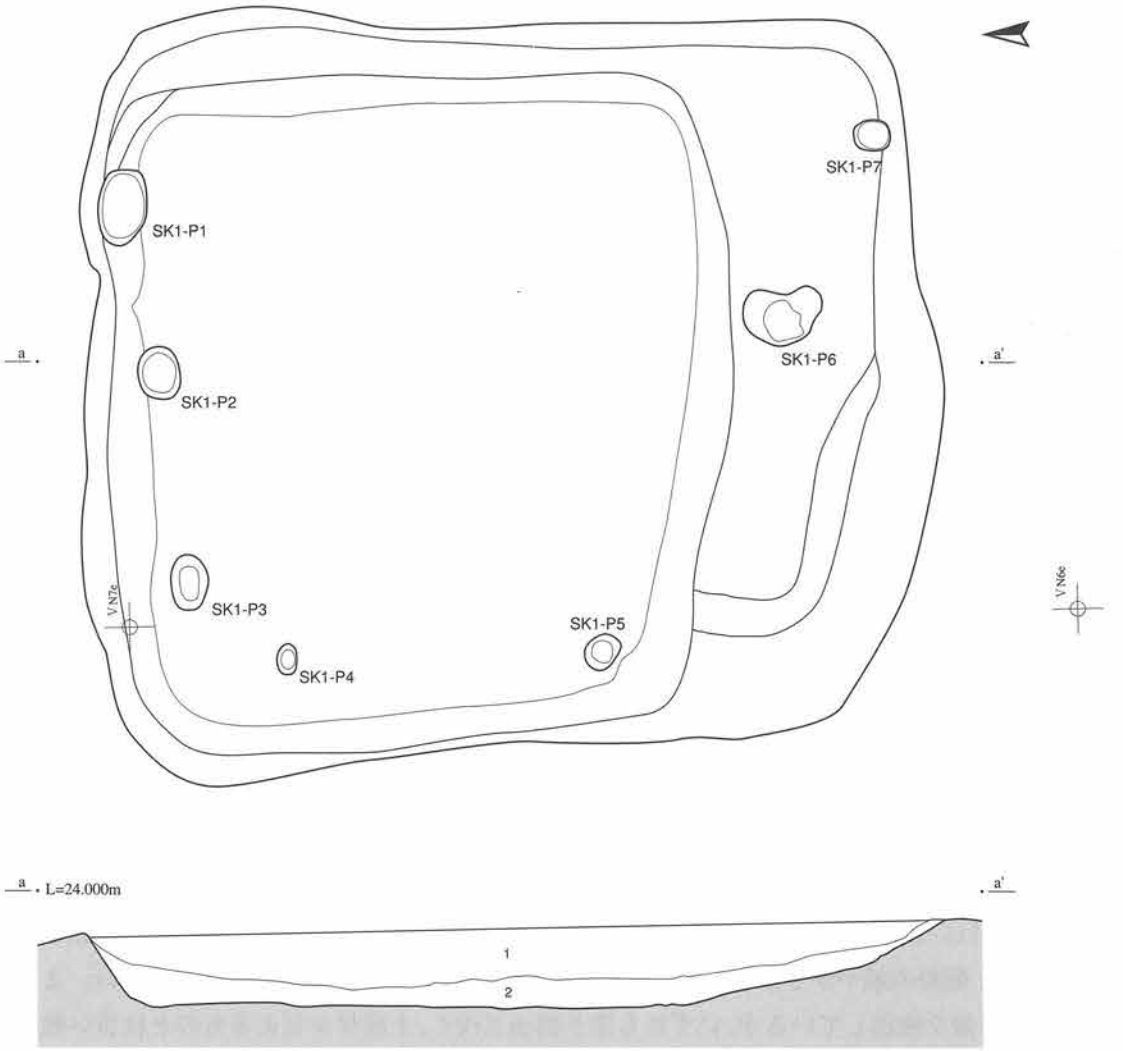
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、222cm（7.3尺）・168cm（5.5尺）・150cm（5.0尺）の３種類である。
〔出土遺物〕なし。
〔時期・性格〕本建物より古いＳＫ29からは14世紀代の青磁碗片が出土しており、本建物の14世紀代よりも新しいことになる。性格は不明である。

（3）土　　坑（ＳＫ）

土坑は30基検出した。調査区内各地から検出され、検出位置に傾向はない。所属時期が不明なものが大半を占めるが、調査区北側に位置するＳＫ12・ＳＫ13・ＳＫ14は堆積状況・出土遺物から12世紀代であると思われる。

ＳＫ１土坑（第58図、写真図版39）
〔位置〕ＶＮ６ｄ・６ｅグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.8～23.9mのⅣ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部4.53×4.06mの隅丸方形状を呈する。深さ26cmを測る（底面標高約23.4m）。断面形は逆台形状を呈する。底部3.84×3.20mを測る。
〔埋土〕２層に細分した。２層は藁が多量に混入し、非常に堅く締まった黒色土である。１層はⅤ層起源の暗緑灰色の自然堆積を呈する。２層は検出状況、堆積状況から踏み固められた人為的堆積土と推定される。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。南側１／５は13～25cm程底面より一段高く、テラス状まではいかないものの、壁面より傾斜は緩やかである。この範囲は東西方向2.92m、南北方向0.74mを測り、傾斜の緩やかさから、スロープ状を呈するといった方が適切かもしれない。また、底面からピット７個を検出しているが、いずれも深さ数cmと浅く、上屋材を支えるものとは言い難く、性格は不明としておく。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕形状と埋土下層に藁が多量に堆積していることから、近代以降の厩跡である可能性が高い。
〔年代〕近代以降。

ＳＫ２土坑（第59図、写真図版39）
〔位置〕ＶＮ３ｆグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.9～24.0mのⅣ層上面である。底面に向かうにつれてⅤ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径1.11×1.07mの円形状を呈する。深さ12cmを測る（底面標高約23.8m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径0.94×0.90mを測る。
〔埋土〕Ⅴ層起源の黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

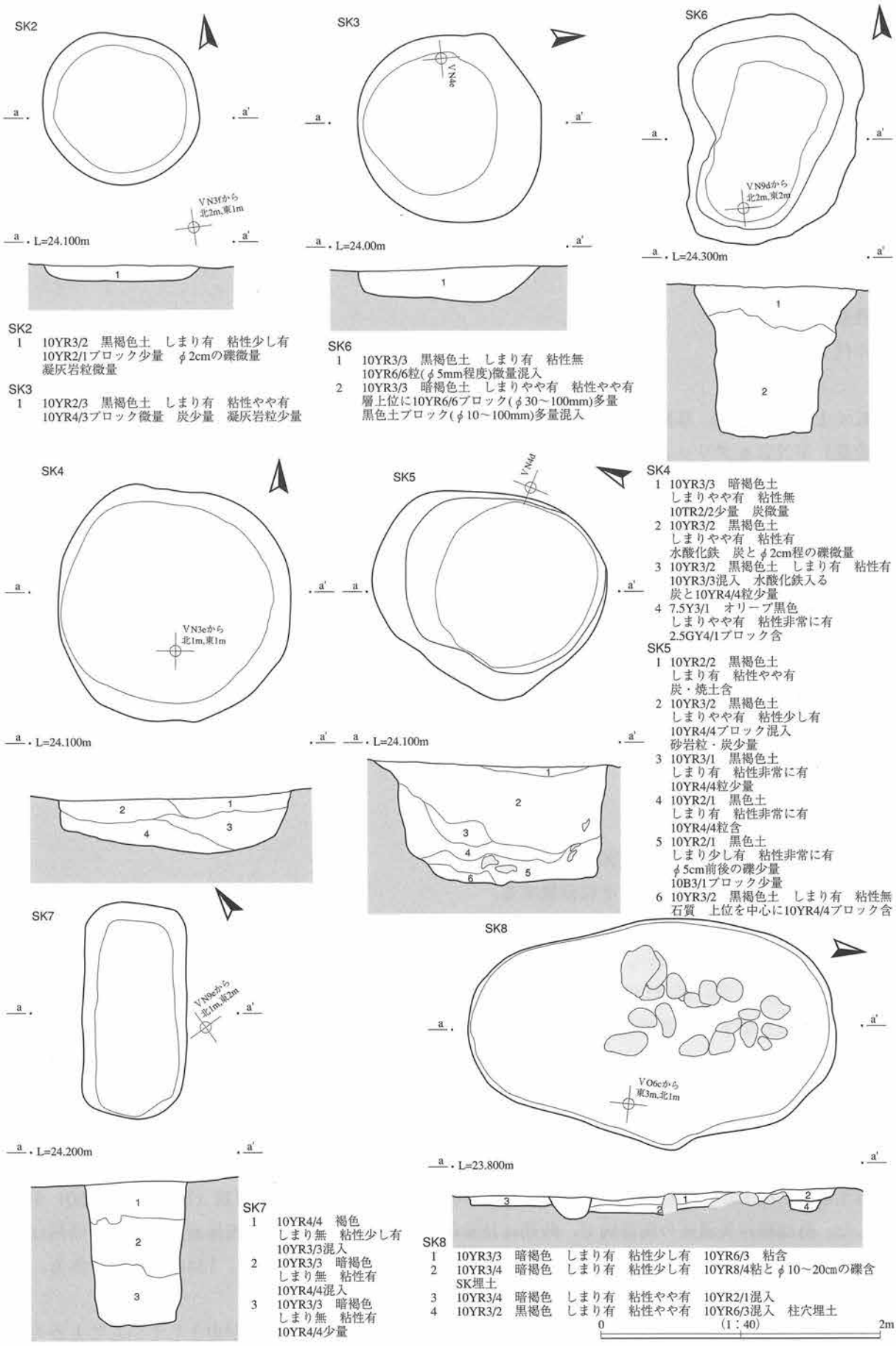


SK1

1　10G3/1　暗緑灰色　しまり有　粘性無　砂有
　中央付近の層界にφ20～30cmの礫が東西方向に並んで検出
　10YR3/3を中央付近で多く含
2　10YR2/1　黒色　しまり非常に有　粘性有
　10G3/1ブロックとワラ(層状に入る)混入

0　(1：40)　2m

第58図　細田遺跡　SK1



SK2
1　10YR3/2　黒褐色土　しまり有　粘性少し有
10YR2/1ブロック少量　φ2cmの礫微量
凝灰岩粒微量

SK3
1　10YR2/3　黒褐色土　しまり有　粘性やや有
10YR4/3ブロック微量　炭少量　凝灰岩粒少量

SK6
1　10YR3/3　黒褐色土　しまり有　粘性無
10YR6/6粒(φ5mm程度)微量混入
2　10YR3/3　暗褐色土　しまりやや有　粘性やや有
層上位に10YR6/6ブロック(φ30～100mm)多量
黒色土ブロック(φ10～100mm)多量混入

SK4
1　10YR3/3　暗褐色土
しまりやや有　粘性無
10TR2/2少量　炭微量
2　10YR3/2　黒褐色土
しまりやや有　粘性有
水酸化鉄　炭とφ2cm程の礫微量
3　10YR3/2　黒褐色土　しまり有　粘性有
10YR3/3混入　水酸化鉄入る
炭と10YR4/4粒少量
4　7.5Y3/1　オリーブ黒色
しまりやや有　粘性非常に有
2.5GY4/1ブロック含

SK5
1　10YR2/2　黒褐色土
しまり有　粘性やや有
炭・焼土含
2　10YR3/2　黒褐色土
しまりやや有　粘性少し有
10YR4/4ブロック混入
砂岩粒・炭少量
3　10YR3/1　黒褐色土
しまり有　粘性非常に有
10YR4/4粒少量
4　10YR2/1　黒色土
しまり有　粘性非常に有
10YR4/4粒含
5　10YR2/1　黒色土
しまり少し有　粘性非常に有
φ5cm前後の礫少量
10B3/1ブロック少量
6　10YR3/2　黒褐色土　しまり有　粘性無
石質　上位を中心に10YR4/4ブロック含

SK7
1　10YR4/4　褐色
しまり無　粘性少し有
10YR3/3混入
2　10YR3/3　暗褐色
しまり無　粘性有
10YR4/4混入
3　10YR3/3　暗褐色
しまり無　粘性有
10YR4/4少量

SK8
1　10YR3/3　暗褐色　しまり有　粘性少し有　10YR6/3　粘含
2　10YR3/4　暗褐色　しまり有　粘性少し有　10YR8/4粘とφ10～20cmの礫含
SK埋土
3　10YR3/4　暗褐色　しまり有　粘性やや有　10YR2/1混入
4　10YR3/2　黒褐色　しまり有　粘性やや有　10YR6/3混入　柱穴埋土

第59図　細田遺跡　SK２～８

ＳＫ３土坑（第59図、写真図版40）
〔位置〕ＶＮ３ｅ・４ｅグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.8～23.9mのⅣ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はないが、北側の一部を撹乱によって消失している。
〔平面形・規模〕開口部径1.34×1.31mの円形状を呈する。深さ25cmを測る（底面標高約23.6m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径1.01×0.95mを測る。
〔埋土〕黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅴ～Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ４土坑（第59図、写真図版39）
〔位置〕ＶＮ３ｅグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.8～23.9mのⅣ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径1.66×1.66mの円形を呈する。深さ39cmを測る（底面標高約23.3m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径1.50×1.39mを測る。
〔埋土〕４層に細分した。４層はⅤ層起源のオリーブ黒色土、１～３層はⅤ層起源の黒褐色土を主体としており、いずれもⅣ～Ⅴ層起源の黒色ブロックを含み人為的に埋め戻されている。
〔底面〕概ね平坦であるが、中央付近が若干窪んでいる。Ⅴ・Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ５土坑（第59図、写真図版39）
〔位置〕ＶＮ３ｃ・４ｃグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.0mのⅤ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径1.66×1.45mの楕円形状を呈する。深さ85cmを測る（底面標高約23.1m）。断面形は箱形を呈する。底部径1.16×1.11mを測る。
〔埋土〕６層に細分した。皆人為的に埋め戻されている。１～３層はⅤ層起源の黒褐色土で、１層は炭と焼土を含み、２層はⅥ層起源の褐色土混入、３層は褐色土を含んでいる。４～６層はⅤ層起源の黒色土で、４層は褐色粒、５層はφ５cmの礫、６層はⅥ層起源の褐色ブロックを含む。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕埋土から陶器碗（51）、陶器土瓶（78）、ほうろく（84）、磁器皿（124）、硯（150）が出土した。51は瀬戸美濃産の陶器碗で、時期は18世紀後半である。78は大堀相馬産の土瓶で、時期は19世紀前半代である。84は在地産のほうろくで、時期は19世紀代と思われる。124は白磁皿である。時期は19世紀前半。
〔性格〕埋土が人為堆積であること、埋土下位から19世紀前半代の陶磁器等が出土していることから、

近世末のゴミ穴である可能性が高い
〔年代〕19世紀前半代以降と推測される。

ＳＫ６土坑（第59図、写真図版39）
〔位置〕ＶＮ９ｄグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.1m前後のⅣ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径1.70×1.31mの楕円形状を呈する。深さ1.07mを測る（底面標高約23.0m）。断面形は深鍋状を呈する。底部径1.04×0.66mを測る。
〔埋土〕２層に細分した。１層はⅣ層起源の黒褐色土である。２層はⅤ層起源の暗褐色土で、Ⅳ層起源の黒色土ブロックとⅥ層起源の黄褐色ブロックが混入した人為堆積を呈する。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕２層から青磁碗（42）が出土した。12世紀代の竜泉窯産であるが、本遺構に伴うものではなく、流れ込みの遺物と思われる。
〔性格〕不明。
〔年代〕近代以降と推測される。

ＳＫ７土坑（第59図、写真図版40）
〔位置〕ＶＮ８ｅ・９ｅグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.0m前後のⅤ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径1.54×0.74mの隅丸長方形状を呈する。深さ1.03mを測る（底面標高約23.9～24.0m）。断面形は深鍋状を呈する。底部径1.40×0.57mを測る。
〔埋土〕３層に細分した。１層はⅥ層起源の褐色土、２・３層はⅣ層起源の暗褐色土である。いずれも人為堆積を呈し、１層はⅤ層起源の暗褐色土、２層にはⅣ層起源の褐色土を混入している。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕近代以降と推測される。

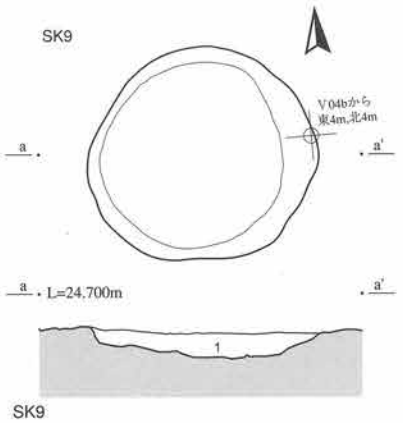
ＳＫ８土坑（第59図、写真図版40）
〔位置〕Ｖ０５ｃ・６ｃグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.6mのⅤ層上面である。底面に向かうにつれてⅤ層に移行する。
〔重複〕Ｐ1082・Ｐ1083・Ｐ1084・Ｐ1085・Ｐ1086を切っている。
〔平面形・規模〕開口部径2.62×1.55mの楕円形状を呈する。深さ10cmを測る（底面標高約23.4～23.5m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径2.64×1.59mを測る。
〔埋土〕３層に細分した。Ⅴ層起源の暗褐色土を主体とした自然堆積を呈し、φ10～20cmの礫を多く含む。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ９土坑（第60図、写真図版40）
〔位置〕ＶＯ４ｂグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.5m前後のⅢ層上面である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径1.22×1.12mの楕円形状を呈する。深さ12～13cmを測る（底面標高約24.3～24.4m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径0.98×0.96mを測る。
〔埋土〕Ⅳ層起源の鈍い黄褐色土を主体とした自然堆積を呈する。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅲ～Ⅳ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕埋土から磁器皿（115）が出土した。17世紀末～18世紀代の肥前産と思われる。
〔性格〕不明。
〔年代〕出土遺物から近世以降と思われる。

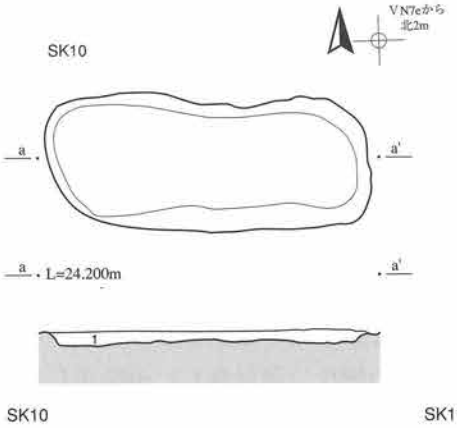
ＳＫ10土坑（第60図、写真図版40）
〔位置〕ＶＮ７ｄグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.9m前後のⅥ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径1.67×0.70mの楕円形状を呈する。深さ８cmを測る（底面標高約23.8m）。断面形は浅い逆台形状を呈する。底部径1.55×0.58mを測る。
〔埋土〕Ⅴ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈する。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ11土坑（第60図、写真図版40）
〔位置〕ＶＮ５ｆグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.9m前後のⅤ層上面である。底面に向かうにつれてⅤ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径99×96cmの円形を呈する。深さ８cmを測る（底面標高約23.8m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径98×93cmを測る。
〔埋土〕Ⅴ層起源の暗褐色土を主体とした自然堆積を呈する。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。



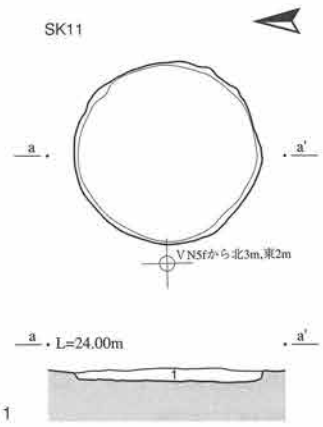
SK9

1　10YR4/3　にぶい黄褐色土
10YR5/3にぶい黄褐色　砂多量混入
炭化物粒少量混入



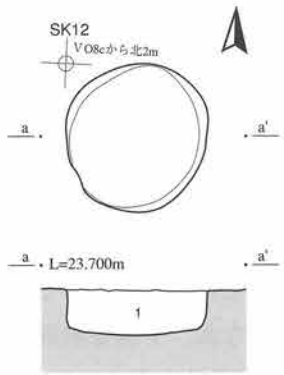
SK10

1　10YR2/2　黒褐色土　しまり有　粘性少し有
炭少量　水酸化鉄含



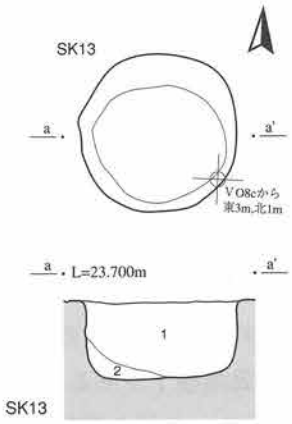
SK11

1　10YR3/3　暗褐色土　しまり有　粘性無
10YR4/4ブロック・炭少量



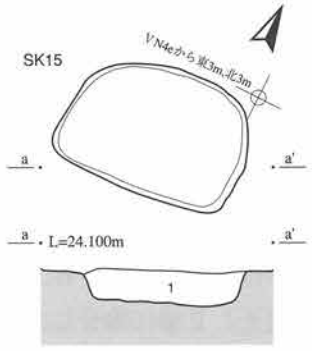
SK12

1　10YR4/6褐色土　しまり有　粘性少し有
10YR2/2混入　炭少量　人為堆積



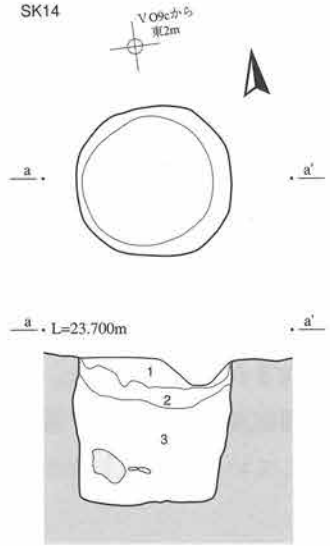
SK13

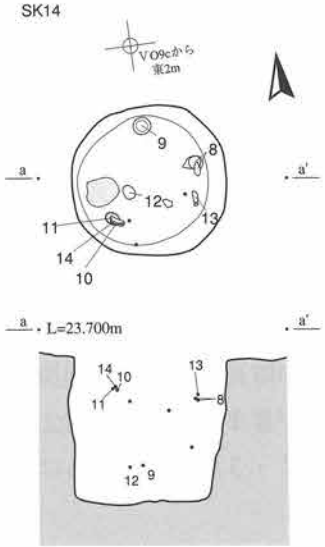
1　10YR4/4　褐色土　しまり有　粘性有
10YR3/3混入　炭含
2　10YR3/3　暗褐色土　しまり有　粘性有
炭含　10YR4/4ブロック少量　人為堆積



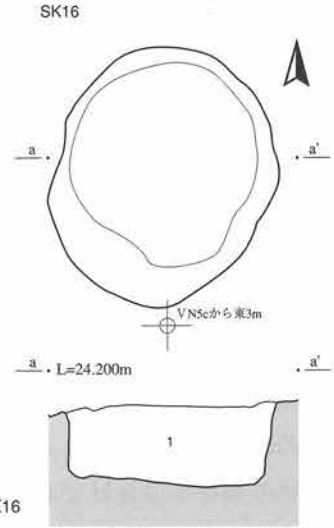
SK15

1　10YR2/2　黒褐色　しまり有　粘性やや有
10YR1.7/1・10YR7/8粒少量





SK14
1　10YR3/3　暗褐色しまり有　粘性有　炭化物微量
2　10YR4/4　褐色しまり有　粘性有　暗褐色土微量
3　10YR4/4　褐色しまり有　粘性有　10YR2/3・10YR2/1ブロック混入



SK16

1　10YR2/2　黒褐色　しまり有　粘性無
10YR10/1ブロック（φ10～40mm）混入
10YR5/6ブロック（φ15～40mm）混入
浮石（2.5Y7/8）（φ3mm）

0　(1：40)　2m

第60図　細田遺跡　SK９～16

ＳＫ12土坑（第60図、写真図版40）
〔位置〕ＶＯ８ｃグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.5～23.6m付近のＶ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径78×74cmの円形を呈する。深さ23cmを測る（底面標高約23.3～23.4m）。断面形は深鍋状を呈する。底部径73×66cmを測る。
〔埋土〕Ⅵ層起源の褐色土を主体とした人為堆積を呈する。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕手づくねかわらけの細片（図示なし）が出土した。
〔性格〕不明。
〔年代〕出土遺物と形状、埋土の堆積状況がＳＫ14に類似していることから12世紀代と推測される。

ＳＫ13土坑（第60図、写真図版41）
〔位置〕ＶＯ８ｃグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.5～23.6mのＶ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径83×83cmの円形を呈する。深さ39cmを測る（底面標高約23.1～23.2m）。断面形は深鍋状を呈する。底部径67×62cmを測る。
〔埋土〕２層に細分した。１層はⅥ層起源の褐色土にＶ層起源の暗褐色土が混入した人為堆積。２層はＶ層起源の暗褐色土にⅥ層起源の褐色ブロックが含まれた人為堆積を呈する。なお、１層はⅥ層起源としているが、（Ⅲ層自体がⅥ層起源の人為堆積土であるために）Ⅲ層起源の可能性もある。
〔底面〕若干の凹凸はあるが、概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕形状と埋土の堆積状況がＳＫ14に類似していることから12世紀代と推測される。

ＳＫ14土坑（第60図、写真図版41）
〔位置〕ＶＯ８ｃグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.5～23.6mのＶ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径82×79cmの円形を呈する。深さ76cmを測る（底面標高約22.8m）。断面形は深鍋状を呈する。底部径67×63cmを測る。
〔埋土〕３層に細分した。１層はＶ層起源の暗褐色土にⅥ層起源の褐色土が含まれた人為堆積土。２層はⅥ層起源の褐色土にＶ層起源の暗褐色が含まれた人為堆積土。３層はⅥ層起源の褐色土にＶ層起源の暗褐色が含まれた人為堆積土である。２・３層からかわらけが多く出土している。出土したかわらけの残存率は良好である。
〔底面〕若干凸凹はあるが、概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕埋土からロクロかわらけ小（８・９）、ロクロかわらけ大（10）、手づくねかわらけＤ３（11）、手づくねかわらけＣ３（12・13）が出土した。
〔性格〕不明。

〔年代〕埋土からかわらけがまとまって出土していることから、12世紀代の土坑と判断される。

ＳＫ15土坑（第60図、写真図版41）
〔位置〕ＶＮ４ｅグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.9～24.0mのⅣ層上面である。底面に向かうにつれてⅤ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径97×69cmの長楕円形を呈する。深さ17cmを測る（底面標高約23.7～23.8m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径91×63cmを測る。
〔埋土〕Ⅴ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈する。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ16土坑（第60図、写真図版41）
〔位置〕ＶＮ５ｃグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24m前後のⅤ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径1.37×1.13mの楕円形状を呈する。深さ42cmを測る（底面標高約23.7m）。断面形は深鍋状を呈する。底部径1.06×0.98mを測る。
〔埋土〕Ⅴ層起源の黒褐色土にⅣ層起源の黒色ブロック、Ⅵ層起源の褐色ブロックが混入した人為堆積を呈する。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕埋土から磁器碗（94・107）が出土した。94は17世紀末～18世紀代の肥前産、107は19世紀前半の瀬戸産と思われる。
〔性格〕不明。
〔年代〕出土遺物から、近世末以降と判断される。

ＳＫ17土坑（第61図、写真図版42）
〔位置〕ＶＮ５ｆ・５ｇグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.8～23.9mのⅣ層上面である。底面に向かうにつれてⅤ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径55×54cmの円形を呈する。深さ26cmを測る（底面標高約23.6m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径39×38cmを測る。
〔埋土〕調査時の不手際により、記録を取り損ねている。深くお詫び申し上げる次第である。Ⅴ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積だったと記憶している。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕埋設した桶の底板（図示なし）が残存していた。
〔性格〕桶を埋設した遺構である。規模と出土遺物がないことから墓壙ではないと思われる。
〔年代〕近世以降。

ＳＫ18土坑（第61図、写真図版42）
〔位置〕ＶＯ７ｉグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.8～23.9mのⅢ層上面である。底面に向かうにつれてⅤ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径77×66cmの楕円形を呈する。深さ41cmを測る（底面標高約23.4m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径56×49cmを測る。
〔埋土〕３層に細分した。１層はⅤ層起源の黒褐色土で、Ⅲ層起源の褐色土を混入している。２層はⅣ～Ⅴ層起源の暗褐色土である。３層は恐らくⅢ層起源の褐色砂質土である。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕他の土坑の状況から見て、近代以降の可能性が高い。

ＳＫ19土坑（第61図、写真図版42）
〔位置〕ＶＯ５ｈグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.7～23.8mのⅢ層上面である。底面に向かうにつれてⅤ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径1.16×0.82mの楕円形を呈する。深さ20cmを測る（底面標高約23.5m）。断面形は角のとれた逆台形状を呈する。底部径0.98×0.73mを測る。
〔埋土〕３層に細分した。いずれも人為堆積である。１層はⅣ層起源の黒褐色土にⅢ層起源の黄褐色土が混入している。２層もⅣ層起源の黒褐色土であるが、１層より黄褐色土の混入はない。３層はⅢ層起源の褐色砂である。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕12世紀のかわらけ片を包含するⅢ層面を掘り込んでいることから、12世紀以降と思われるが、他の土坑の状況から見て、近代以降の可能性が高い。

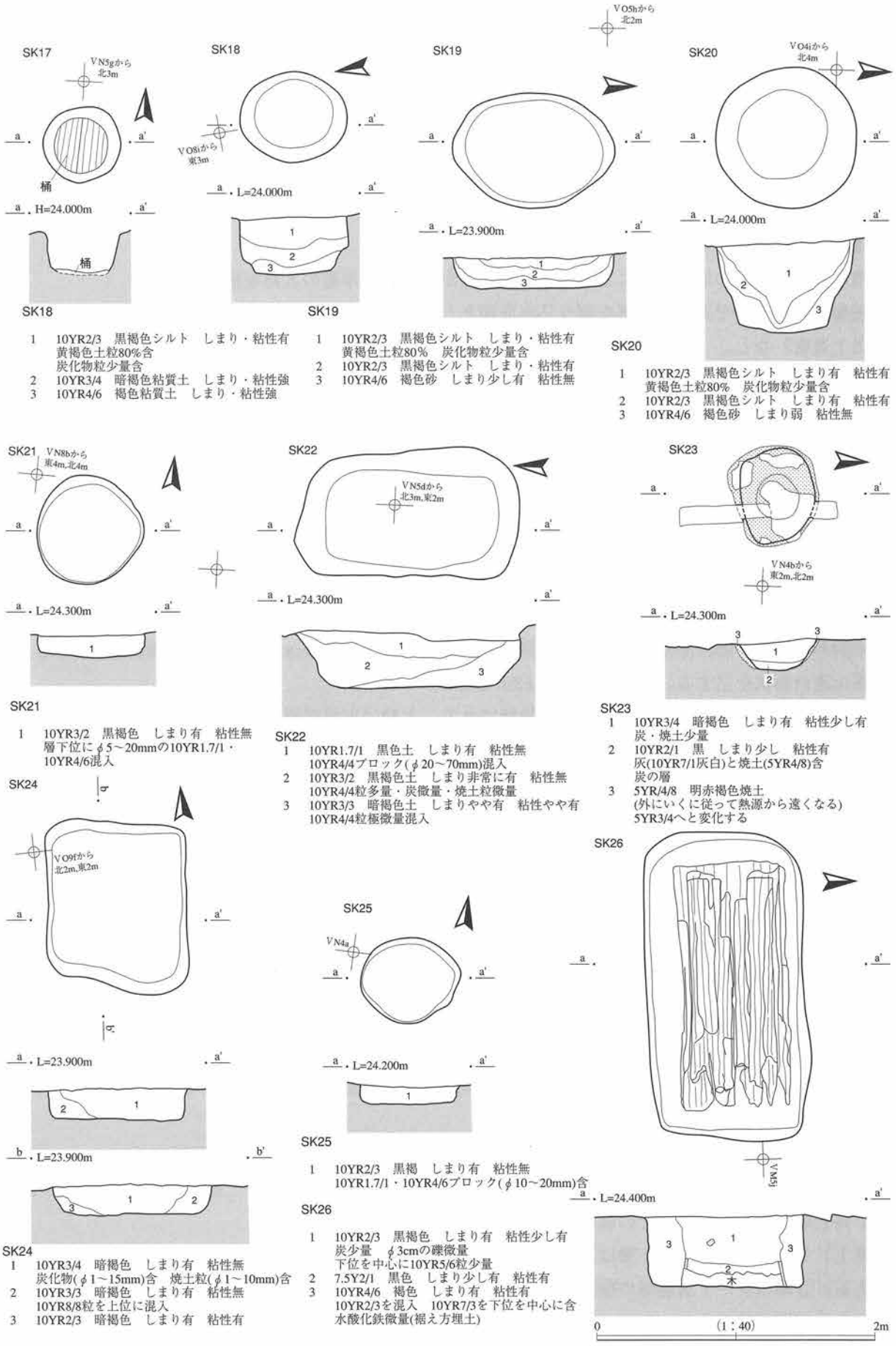
ＳＫ20土坑（第61図、写真図版42）
〔位置〕ＶＯ４ｉグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.8～23.9mのⅤ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径1.02×1.00mの円形を呈する。深さ48cmを測る（底面標高約24.4～24.5m）。断面形は半円状を呈する。底部径0.64×0.63mを測る。
〔埋土〕３層に細分した。いずれも人為堆積である。１層はⅣ層起源の黒褐色土にⅥ層起源の黄褐色土が混入している。２層もⅣ層起源の黒褐色土であるが、１層より黄褐色土の混入はない。３層はⅥ層起源の褐色砂である。
〔底面〕丸底を呈する。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。

〔年代〕不明。

ＳＫ21土坑（第61図、写真図版42）
〔位置〕ＶＮ８ｂグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.1～24.2mのⅢ層上面である。底面に向かうにつれてⅤ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径78×77cmの円形状を呈する。深さ13cmを測る（底面標高約24.0m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径72×70cmを測る。
〔埋土〕Ⅴ層起源の黒褐色土にⅢ層起源の褐色土が混入した単層の人為堆積を呈する。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明
〔年代〕12世紀のかわらけ片を含むⅢ層面を掘り込んでいることから、12世紀以降と思われるが、他の土坑の状況から見て、近代以降の可能性が高い。

ＳＫ22土坑（第61図、写真図版43）
〔位置〕ＶＮ５ｄグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.0～24.1mのⅤ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径1.60×0.95mの隅丸形状を呈する。深さ41cmを測る（底面標高約23.7m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径1.23×0.63mを測る。
〔埋土〕３層に細分した。いずれも人為堆積である。１層はⅣ層起源の黒褐色土にⅥ層起源の黄褐色ブロックが混入している。２層もⅣ層起源の黒褐色土に、Ⅵ層起源の褐色土が混入し、炭・焼土が微量含まれている。３層はⅤ層起源の暗褐色土である。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕埋土から煙管（135）が出土した。
〔性格〕人為堆積であることと、煙管が出土したことから墓の可能性もある。しかし、骨等が出土しているわけでないので確証はない。
〔年代〕近世以降。

ＳＫ23 土坑（第61図、写真図版43）
〔位置〕ＶＮ４ｄグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.1～24.2mのⅣ層上面である。底面に向かうにつれてⅤ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径67×52cmの楕円形を呈する。深さ20cmを測る（底面標高約23.9m）。断面形は半円状を呈する。底部径32×28cmを測る。Ⅳ～Ⅴ層を壁としているが、被熱したためほぼ全域が明赤褐色焼土化しており、その範囲を図示した。
〔埋土〕３層に細分した。１層はⅣ層起源の暗褐色土である。２層は底面直上のみに堆積した炭の層である。３層はⅣ～Ⅴ層起源の壁面が熱によって明赤褐色焼土化した層で、壁面から離れるにつれて漸移的にⅤ層に移行する。



SK18

1　10YR2/3　黒褐色シルト　しまり・粘性有
　　黄褐色土粒80%含
　　炭化物粒少量含
2　10YR3/4　暗褐色粘質土　しまり・粘性強
3　10YR4/6　褐色粘質土　しまり・粘性強

SK19

1　10YR2/3　黒褐色シルト　しまり・粘性有
　　黄褐色土粒80%　炭化物粒少量含
2　10YR2/3　黒褐色シルト　しまり・粘性有
3　10YR4/6　褐色砂　しまり少し有　粘性無

SK20

1　10YR2/3　黒褐色シルト　しまり有　粘性有
　　黄褐色土粒80%　炭化物粒少量含
2　10YR2/3　黒褐色シルト　しまり有　粘性有
3　10YR4/6　褐色砂　しまり弱　粘性無

SK21

1　10YR3/2　黒褐色　しまり有　粘性無
　　層下位にϕ5～20mmの10YR1.7/1・
　　10YR4/6混入

SK22

1　10YR1.7/1　黒色土　しまり有　粘性無
　　10YR4/4ブロック(ϕ20～70mm)混入
2　10YR3/2　黒褐色土　しまり非常に有　粘性無
　　10YR4/4粒多量・炭微量・焼土粒微量
3　10YR3/3　暗褐色土　しまりやや有　粘性やや有
　　10YR4/4粒極微量混入

SK23

1　10YR3/4　暗褐色　しまり有　粘性少し有
　　炭・焼土少量
2　10YR2/1　黒　しまり少し　粘性有
　　灰(10YR7/1灰白)と焼土(5YR4/8)含
　　炭の層
3　5YR/4/8　明赤褐色焼土
　　(外にいくに従って熱源から遠くなる)
　　5YR3/4へと変化する

SK24

1　10YR3/4　暗褐色　しまり有　粘性無
　　炭化物(ϕ1～15mm)含　焼土粒(ϕ1～10mm)含
2　10YR3/3　暗褐色　しまり有　粘性無
　　10YR8/8粒を上位に混入
3　10YR2/3　暗褐色　しまり有　粘性有

SK25

1　10YR2/3　黒褐　しまり有　粘性無
　　10YR1.7/1・10YR4/6ブロック(ϕ10～20mm)含

SK26

1　10YR2/3　黒褐色　しまり有　粘性少し有
　　炭少量　ϕ3cmの礫微量
　　下位を中心に10YR5/6粒少量
2　7.5Y2/1　黒色　しまり少し有　粘性有
3　10YR4/6　褐色　しまり有　粘性有
　　10YR2/3を混入　10YR7/3を下位を中心に含
　　水酸化鉄微量(裾え方埋土)

第61図　細田遺跡　SK17～26

〔底面〕概ね平坦である。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕煙道が無いことから、屋外カマドの可能性は低く、鍛造剥片等の鍛冶関連遺物も出土していないことから、鉄生産関連炉の可能性も低い。現時点では掘り込みのある炉跡としておく。
〔年代〕出土遺物がないため不明。

ＳＫ24土坑（第61図、写真図版43）
〔位置〕ＶＯ９ｆグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.7m前後のⅢ層上面である。底面に向かうにつれてⅤ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部1.22×0.99mの隅丸長方形を呈する。深さ23cmを測る（底面標高約23.5m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径1.07×0.93mを測る。
〔埋土〕３層に細分した。１層はⅤ層起源の暗褐色土である。２層はⅤ層起源の暗褐色土で、Ⅲ層起源の褐色土を混入している。３層はⅤ層起源の暗褐色土である。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕埋土からてづくねかわらけＤ３（16）が出土した。しかし、かわらけは遺構に伴うものではなく、流れ込みの遺物と判断される
〔性格〕不明
〔年代〕かわらけが出土したことから、12世紀以降の土坑である。おそらくは近世以降の土坑と思われる

ＳＫ25土坑（第61図、写真図版43）
〔位置〕ＶＮ３ａ・４ａグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.1～24.2mのⅤ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径71×60cmの楕円形を呈する。深さ14cmを測る（底面標高約23.9m）。断面形は逆台形を呈する。底部径67×56cmを測る。
〔埋土〕Ⅴ層起源の黒褐色土に、Ⅳ層起源の黒色土、Ⅵ層起源の褐色土が含まれた土を主体とした自然堆積を呈する。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ26土坑（第61図、写真図版44）
〔位置〕ＶＭ４ｉ・４ｊグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.3m前後のⅤ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部2.73×1.12mの隅丸方形状を呈する。深さ50cmを測る（底面標高約23.8m）。断面形は長方形状を呈する。底部2.08×1.04mを測る。

〔埋土〕３層に細分した。１層はⅤ層起源の黒褐色土にⅥ層起源の黄褐色土が少量含まれる。２層はⅤ層起源の黒色土である。３層はⅥ層起源の褐色土に、Ⅴ層起源の黒褐色土が含まれている。３層は長軸1.75m、短軸0.75mの大きさの箱を土坑中央に据えた際に生じた掘方埋土である。

〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。底面には箱の底板部分かが出土している。底板の範囲は長軸1.75m、短軸0.75mを測る。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕室的な性格が想定される。

〔年代〕出土遺物が無く不明だが、箱の木材の残存状況から近世末～近代の可能性が高い。

ＳＫ27土坑（第62図、写真図版44）

〔位置〕ＶＯ８ｅグリッドに位置する。

〔検出状況〕検出面は標高23.7～23.8mのⅢ層上面である。

〔重複〕重複する遺構はないが、西側を撹乱に切られている。

〔平面形・規模〕西側を撹乱によって消失し、詳細は判然としない。開口部は南北方向1.25m、東西方向0.91mの方形状を呈する。深さ９㎝を測る（底面標高約23.6～23.7m）。断面形は逆台形状を呈する。底部は南北方向1.00m、東西方向0.84mを測る。

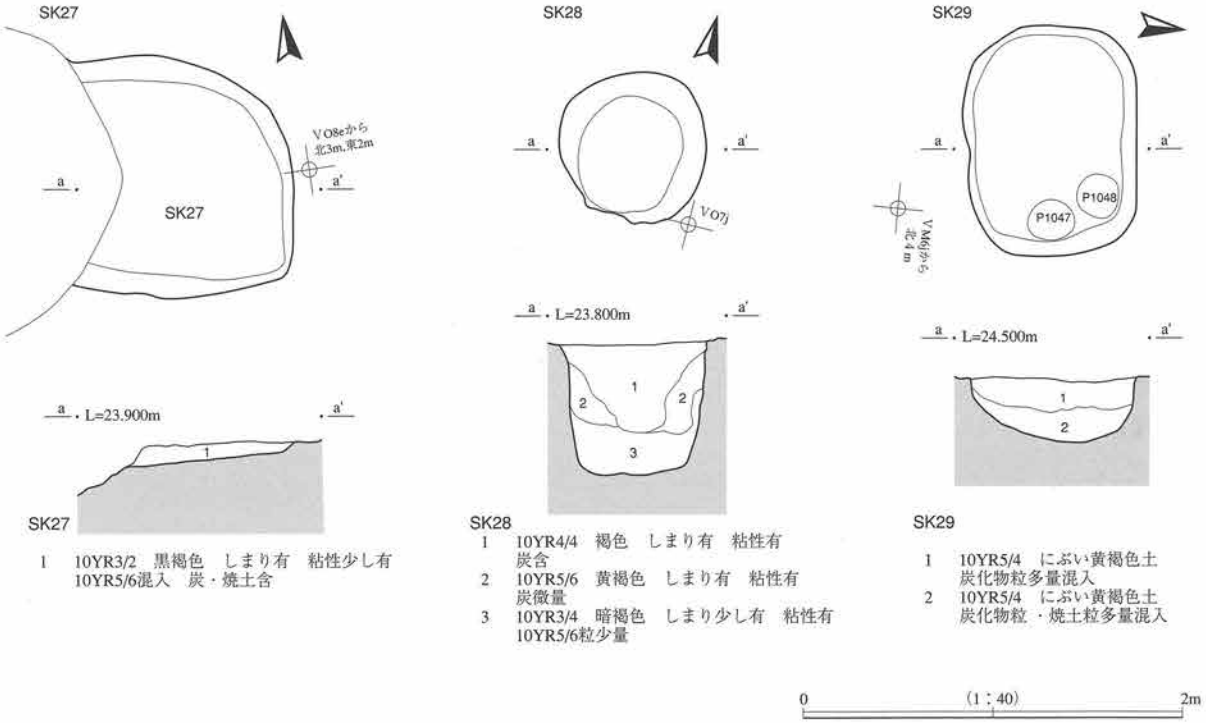
〔埋土〕Ⅳ層起源の黒褐色土にⅢ層起源の黄褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

〔底面〕西に向かうにつれて標高が低くなる。Ⅲ層を掘り込み底面としている。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明。

〔年代〕不明。



第62図　細田遺跡　SK27～29

ＳＫ28土坑（第62図、写真図版44）
〔位置〕ＶＯ７ｉグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.6～23.7mのⅤ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径80×78cmの円形を呈する。深さ78cmを測る（底面標高約22.9～23.0m）。断面形は深鍋状を呈する。底部径58×55cmを測る。
〔埋土〕３層に細分した。全て人為堆積である。１層はⅥ層起源の褐色土で、炭を含む。２層はⅥ層起源の黄褐色土である。３層はⅤ層起源の暗褐色土である。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。湧水が著しい。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ29土坑（第62図、写真図版44）
〔位置〕ＶＭ６ｉ・７ｉグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.3mのⅢ層上面である。底面に向かうにつれてⅤ層に移行する。
〔重複〕Ｐ1047・1048を切っている。
〔平面形・規模〕開口部1.22×0.90mの隅丸方形を呈する。深さ32cmを測る（底面標高約23.9～24.0m）。断面形は半円状を呈する。底部1.09×0.79mを測る。
〔埋土〕２層に細分した。Ⅲ層起源のにぶい黄褐色土を主体とした人為堆積を呈し、焼土・炭を多く含んでいる。
〔底面〕丸底である。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕埋土から青磁小碗（43）、鉄釘？（132）が出土した。43は中国産青磁小碗である。時期は14世紀代。
〔性格〕不明。
〔年代〕出土遺物から少なくとも14世紀以降である。近世以降の可能性が高い。

ＳＫ30土坑（第62図、写真図版44・47）
〔位置〕ＶＭ４ｊグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.1～24.2mのⅤ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕ＳＤ７、Ｐ1101を切っており、本遺構が新しい。
〔平面形・規模〕開口部1.89×1.36mの隅丸方形状を呈する。深さ21cmを測る（底面標高約23.9～24.0m）。断面形は半円状を呈する。底部1.22×1.03mを測る。
〔埋土〕Ⅴ層起源の黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。
〔底面〕丸底である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

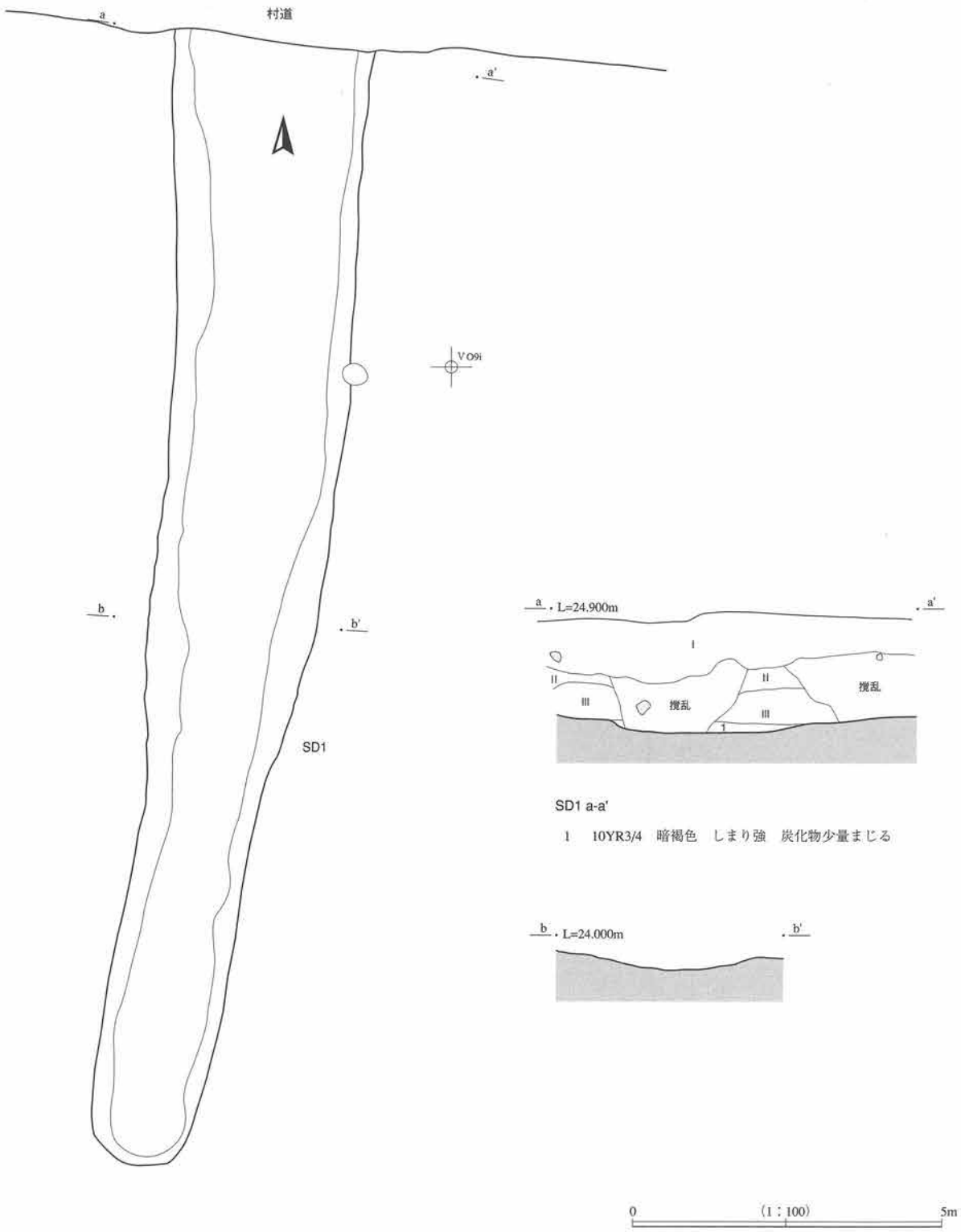
（4）溝（ＳＤ）

溝は８条検出した。調査区内各地から検出され、検出位置に傾向はない。所属時期が不明なものが大半を占めるが、調査区中央に位置するＳＤ４は堆積状況と出土遺物から12世紀代であると思われる。

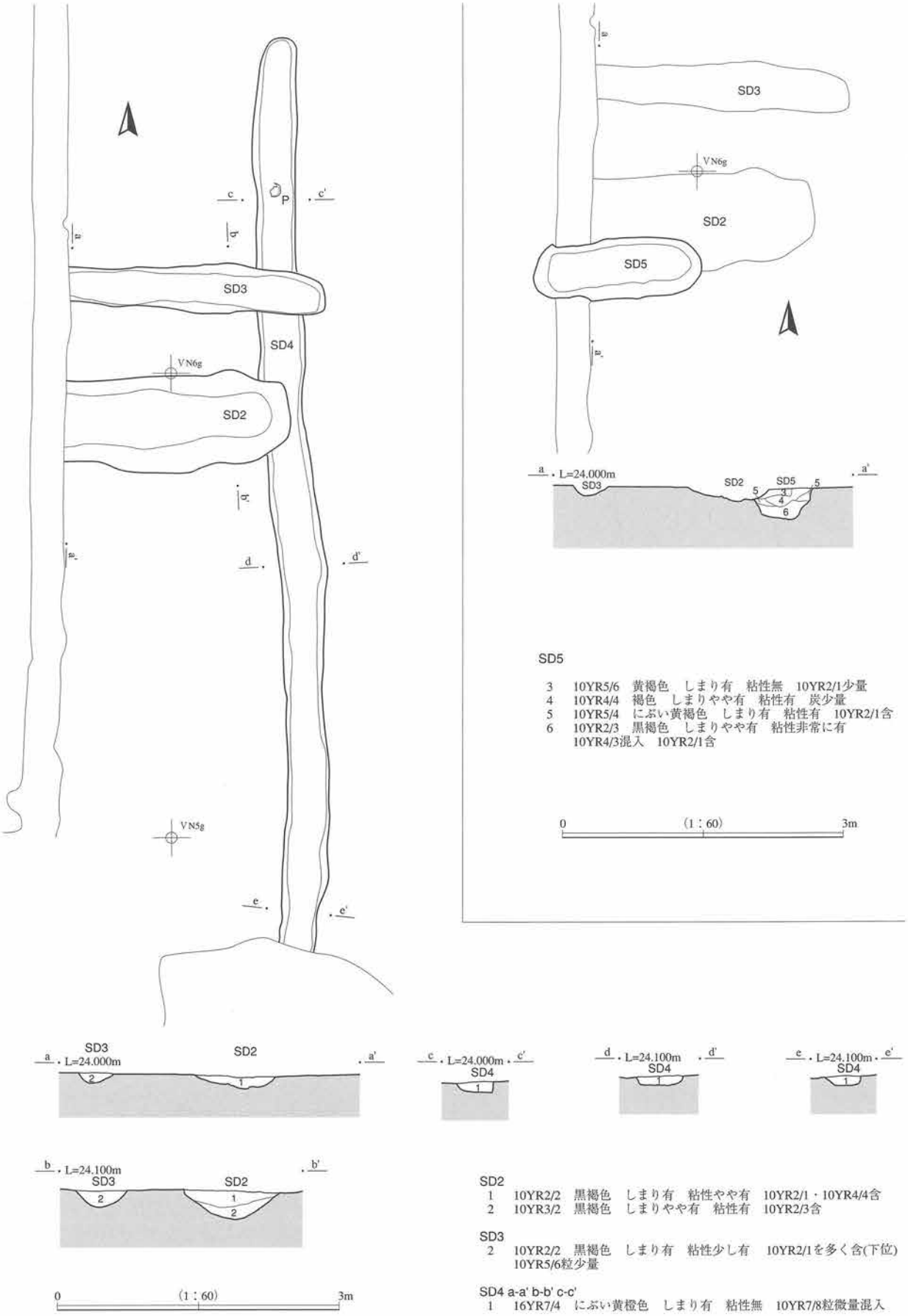
ＳＤ１溝（第63図、写真図版45）
〔位置〕ＶＯ７ｈ・８ｈ・９ｈグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.8～23.9mのⅢ層上面である。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔形状・規模〕総長11.18m、幅1.09～1.95mを測る。横断面形は半円形を示し、深さは11～13cmを測る（底面標高23.6～23.7m）。南端は深さを減じ、プランが消滅する。
〔方向〕南北方向（Ｎ－８°－Ｅ）である。
〔埋土〕Ⅳ層起源の暗褐色土を主体とした自然堆積を呈する。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅲ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕埋土から鉄製品の刀子？（127）が出土した。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＤ２溝（第64図、写真図版45）
〔位置〕ＶＮ５ｆ・５ｇグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.8～23.9mのＶ層上面である。西端を撹乱によって消失。
〔重複〕ＳＤ４・ＳＤ５を切っている。
〔形状・規模〕総長2.39m、幅0.81～1.03mを測る。横断面形は半円形を示し、深さは13～31cmを測る（底面標高23.5～23.8m）。
〔方向〕東西方向（Ｅ－０°－Ｓ）である。
〔埋土〕Ｖ層起源の暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。
〔底面〕概ね平坦である。Ｖ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕埋土から磁器皿（123）、砥石（147）が出土した。123は肥前産の磁器皿である。磁器は17世紀末～18世紀代。
〔性格〕不明。
〔年代〕近世以降。

ＳＤ３溝（第64図、写真図版45、46）
〔位置〕ＶＮ６ｆ・６ｇグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.8～23.9mのＶ層上面である。西端を撹乱によって消失。
〔重複〕ＳＤ４を切っている。
〔形状・規模〕総長2.71m、幅36～53cmを測る。横断面形は半円形を示し、深さは13～16cmを測る（底面標高23.8m）。
〔方向〕東西方向（Ｅ－３°－Ｓ）である。
〔埋土〕Ｖ層起源の暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。



第63図　細田遺跡　SD 1



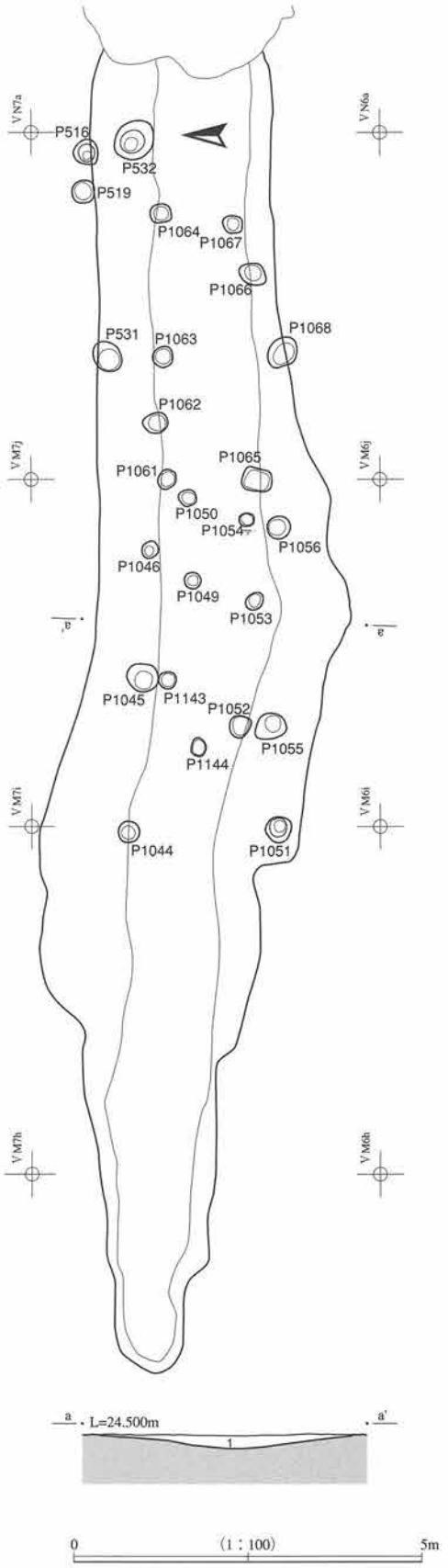
第64図　細田遺跡　SD２・３・４・５

〔底面〕概ね平坦である。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＤ４溝（第64図、写真図版46）
〔位置〕ＶＮ４ｇ・５ｇ・６ｇグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.8～23.9mの層上面である。
〔重複〕ＳＤ２・ＳＤ３に切られている。南端を撹乱によって消失。
〔形状・規模〕総長9.71m、幅36～50cmを測る。横断面形は逆台形を示し、深さは９～11cmを測る（底面標高23.7～23.8m）。
〔方向〕南北方向（Ｎ－１°－Ｗ）である。
〔埋土〕Ⅲ層起源の鈍い黄褐色土を主体とした自然堆積を呈する。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕埋土から12世紀の手づくねかわらけＣ４（14）とＣ３（15）が出土した。
〔性格〕不明。
〔年代〕埋土と出土遺物から12世紀代に属する可能性が高い。

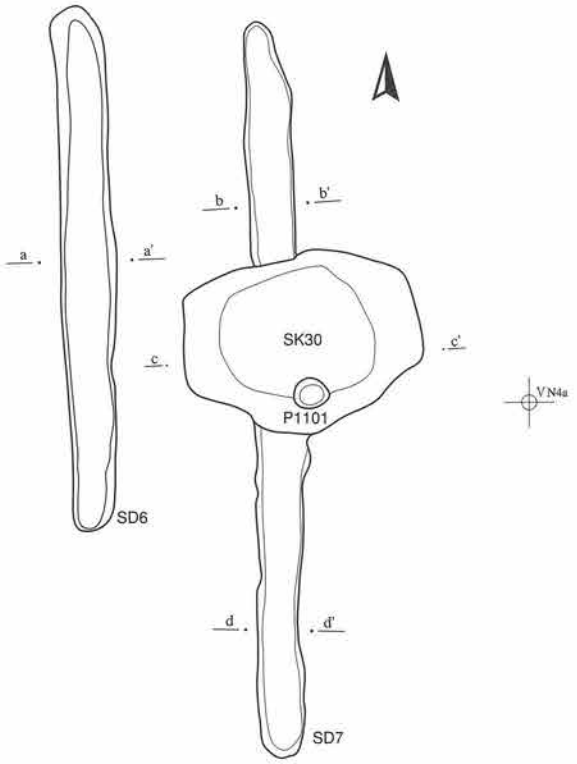
ＳＤ５溝（第64図、写真図版47）
〔位置〕ＶＮ５ｆグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高23.8～23.9mのⅤ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕ＳＤ２に切られている。西端を撹乱によって消失。
〔形状・規模〕総長1.76m、幅54～65cmを測る。横断面形は逆台形状を示し、深さは13～32cmを測る（底面標高23.5～23.7m）。
〔方向〕東西方向（Ｅ－４°－Ｎ）である。
〔埋土〕４層に細分した。いずれも人為堆積である。３～５層はⅥ層起源の黄褐色土、６層はⅤ層起源の黒褐色土を主体としている。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

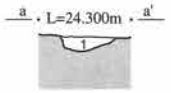
ＳＤ６溝（第65図、写真図版47）
〔位置〕ＶＭ３ｊ・４ｊグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.2～24.3mのⅤ層上面である。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔形状・規模〕総長4.20m、幅21～43cmを測る。横断面形は半円形を示し、深さは11cmを測る（底面標高24.0～24.1m）。
〔方向〕南北方向（Ｎ－２°－Ｗ）である。
〔埋土〕Ⅴ層起源の黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。



SD8

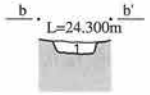
1　10YR3/3　暗褐色　しまり非常に有　粘性少し有
上位に焼土粒微量　全体に根含





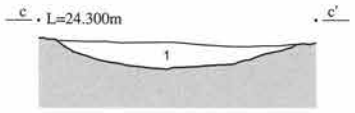
SD6

1　10YR2/3　黒褐色　しまり有　粘性無
10YR1.7/1・10YR4/4 粒含



SD7b-b'

1　10YR2/2　黒褐色　しまり有　粘性少し有
10YR7/3ブロック少量 炭・根含



SK30 c-c'

1　10YR2/2　黒褐色　しまり有　粘性少し有
10YR7/3ブロック少量　炭・根含

SD7 d-d'

1　10YR2/2　黒褐色　しまり有　粘性少し有
10YR7/3ブロック少量　炭・根含

0　(1：60)　3m

第65図　細田遺跡　SD６・７・８

〔底面〕概ね平坦である。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＤ７溝（第65図、写真図版47）
〔位置〕ＶＭ３ｊ・４ｊグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.2～24.3mのＶ層上面である。
〔重複〕ＳＫ30に切られている。
〔形状・規模〕総長5.88m、幅27～39cmを測る。横断面形は逆台形状を示し、深さは２～７cmを測る（底面標高24.0～24.1m）。
〔方向〕南北方向（Ｎ－３°－Ｗ）である。
〔埋土〕Ⅴ層起源の黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕埋土から磁器碗２点（52･55）、磁器香炉（73）、磁器瓶（126）、匙（138）が出土した。52・55は瀬戸・美濃産の磁器碗で、19世紀前半代。73は瀬戸・美濃産の香炉で、18世紀後半代。126は肥前産の磁器瓶で、17末～18世紀代。
〔性格〕不明。
〔年代〕19世紀前半以降。

ＳＤ８溝（第65図、写真図版47）
〔位置〕ＶＯ６ｇ・６ｈ・６ｉ・６ｊ、ＶＮ６ａグリッドに位置する。本遺構は細田遺跡と接待館遺跡にまたがっているが、全体をここで記載する。なお、本溝は接待館遺跡の調査の際にＳＤ７の名称を付していた。よって、接待館遺跡のＳＤ７は欠番として扱う。
〔検出状況〕検出面は標高24.1～24.3mのＶ層上面である。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔形状・規模〕総長18.50m、幅1.00～3.65mを測る。横断面形は半円形を示し、深さは12～18cmを測る（底面標高24.1～24.2m）。
〔方向〕東西方向（Ｅ－２°－Ｓ）である。
〔埋土〕Ⅴ層起源の黒褐色土を主体とした人為堆積を呈する。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。東に向かうにつれて低くなっていく。
〔出土遺物〕埋土から染付皿（45）、陶器皿（46）、陶器皿（68・69）、磁器碗蓋（105）が出土した。45は中国産の染付皿である。時期は16世紀。46は瀬戸・美濃産の陶器皿である。時期は16世紀。68は肥前産の陶器皿である。時期は18世紀。69は瀬戸・美濃産の折縁皿である。時期は18世紀。
なお、接待館遺跡分のＳＤ８（ＳＤ７）では、19世紀前半代の瀬戸美濃産碗が出土している。
〔性格〕不明。
〔年代〕出土遺物から19世紀以降と思われる。

（5）波板状遺構（ＳＸ）

波板状遺構は２箇所検出した。調査区北側から検出される傾向がある。所属時期はＳＸ２が12世紀代の掘立柱建物と判断されるＳＢ12に切られていることから、12世紀もしくはそれ以前となる可能性がある。また、ＳＸ１に関しては西約1.4mに位置するＳＤ４と埋土が類似しており、その関連性が想定される。

ＳＸ１波板状遺構（第66図、写真図版48）

〔位置〕ＶＮ５ｇ・６ｇ・６ｈグリッドに位置する。

〔検出状況〕検出面は標高23.8～24.0mのⅢ・Ⅳ層上面である。底面に向かうにつれてⅤ層に移行する。

〔重複〕重複する遺構はないが、西側約1.4mにＳＤ４が位置する。

〔形状・規模〕総長0.92～1.68m、幅27～54cm、深さ４～19cmの溝が、北西－南東方向に９条並行に検出された。便宜的に西から①②・・⑨と命名する。溝の間隔は30～40cm程を測る。35cm前後が多い印象がある。方向はＮ－39°－Ｗ付近に揃っている。横断面形はみな逆台形状を呈す。

〔埋土〕Ⅲ層起源のにぶい黄橙色を主体とした単層である。人為堆積の可能性がある。

〔底面〕起伏に富んでいる。Ⅴ層を掘り込み底面としている。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明だが、所謂道路状遺構に伴う、波板状圧痕に類似しており、ＳＤ４の位置づけ次第では道路に伴う遺構となり得る可能性も考えられよう。

〔年代〕ＳＸ２と形状・埋土が類似していることから、所属時期は12世紀代となる可能性がある。

	総長(m)	幅(cm)	深さ(cm)	断面形	底面標高(m)	軸方向
①	0.97	33	8	逆台形	23.85	Ｎ－47°－Ｗ
②	0.92	27	4	逆台形	23.90	Ｎ－32°－Ｗ
③	1.33	36	8	逆台形	23.85	Ｎ－39°－Ｗ
④	1.68	54	19	逆台形	23.76	Ｎ－40°－Ｗ
⑤	1.44	46	15	逆台形	23.81	Ｎ－37°－Ｗ
⑥	1.29	33	8	逆台形	23.89	Ｎ－37°－Ｗ
⑦	1.14	41	11	逆台形	23.85	Ｎ－34°－Ｗ
⑧	1.27	43	16	逆台形	23.78	Ｎ－38°－Ｗ
⑨	1.18	48	16	逆台形	23.80	Ｎ－42°－Ｗ

ＳＸ２波板状遺構（第66図、写真図版48）

〔位置〕ＶＭ９ｊ・ＶＮ９ａグリッドに位置する。

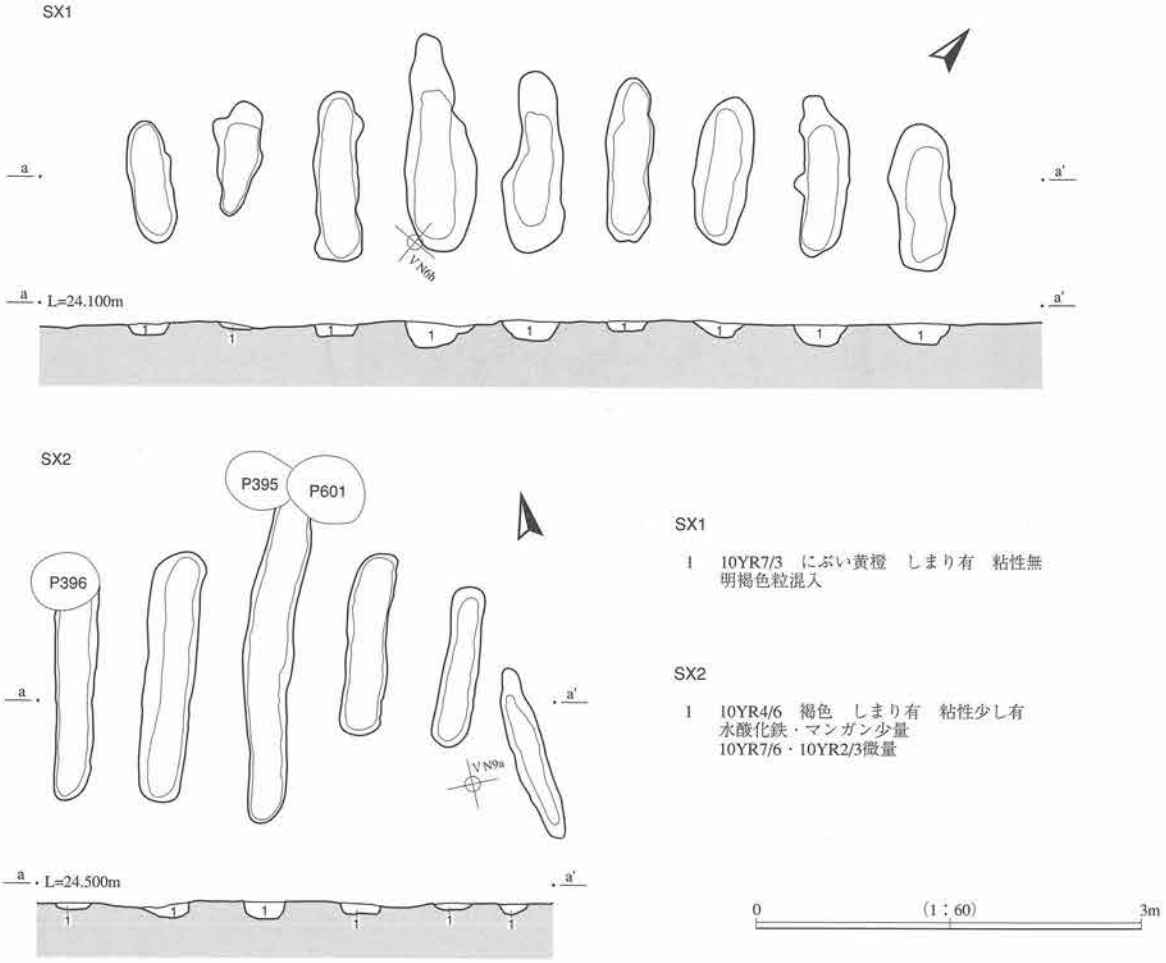
〔検出状況〕検出面は標高24.3～24.4mのⅣ層上面である。底面に向かうにつれてⅤ層に移行する。

〔重複〕掘立柱建物ＳＢ12よりも古い。

〔形状・規模〕総長1.27～2.53m、幅23～38cm、深さ５～13cmの溝が、北北東－南南西方向に６条並行に検出された。便宜的に西から①②・・⑥と命名する。溝の間隔は30～40cm程を測る。38cm前後が多い印象がある。方向はＮ－19°－Ｅ付近に揃っている。横断面形はみな逆台形状を呈す。

〔埋土〕Ⅲ層起源のにぶい黄橙色を主体とした単層である。人為堆積の可能性がある。
〔底面〕起伏に富む。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明だが、所謂道路状遺構に伴う、波板状圧痕に類似しており、類似した平面形を呈するＳＸ１の位置づけ次第では道路に伴う遺構の可能性も考えられよう。ただし、その場合には道路廃絶後にＳＢ12が設置される理屈となり、慎重に検討する必要がある。
〔年代〕所属時期が12世紀代の掘立柱建物と判断されるＳＢ12に切られていることから、12世紀もしくはそれ以前となる可能性がある。

	総長(m)	幅(cm)	深さ(cm)	断面形	底面標高(m)	軸方向
①	1.51	28	5	逆台形	24.29	N－13°－E
②	1.99	38	11	逆台形	24.23	N－18°－E
③	2.53	33	13	逆台形	24.22	N－19°－E
④	1.44	31	8	逆台形	24.28	N－18°－E
⑤	1.27	29	5	逆台形	24.30	N－21°－E
⑥	1.38	23	8	逆台形	24.26	N－6°－W



第66図　細田遺跡　SX１・２

第67図　細田遺跡　基本土層

細田遺跡　柱穴観察表①

No	グリッド	掘立柱建物	新旧関係　新>古	遺物・その他
1	VO4g	SB2		
2	没			
3	VO4g			
4	VO5h	SB17		
5	VO5g・5h	SB2		手1片0.7g
6	VO5h		>P76	
7	VO7j			
8	VN6g			
9	VO5h			
10	VO5h	SB2		
11	VN6g	SB7		手1片2.7g
12	VO5i	SB1		
13	VO4i	SB1		
14	VN7g			
15	没			
16	VO4i	SB1		
17	VO4j	SB1		
18	VO5i・6i	SB1	>P622	
19	VO5c			
20	VO5h			
21	VO5i	SB1		
22	VO5h	SB2		
23	没			
24	VO8g	SB37		
25	VO8g	SB33		
26	VO5f	SB3	>P126	
27	VO8g			
28	VO8g			
29	VN6g	SB7		
30	VO8g	SB37		手1片6.2g
31	VO7g	SB36		
32	VO8g		P36>	
33	没			
34	VO4i			
35	VO9g			
36	VO8g		>P32	
37	没			
38	VO6c	SB18		
39	SKに変更			
40	VO6d	SB24		
41	VO6d		>P101	
42	VO7d			
43	VO6d・7d			
44	没			
45	VO7e	SB22		
46	VO7e	SB39		手7片39.9g　ロ1片4.6g
47	VO7e			
48	VO7e			
49	VO6e			
50	VO7e	SB16		手3片12.3g　ロ1片0.5g
51	没			
52	VO6i			
53	没			
54	VO7i			
55	没			
56	VO8i			
57	VO8g			
58	VO7g・8g	SB36		
59	VO7g	SB37		
60	VO8g			
61	VO8g	SB36		ロ2片8.0g
62	VO8g			
63	VO8g	SB36		手1片2.0g
64	VO8g・9g			
65	VO7f		>P742	
66	VO8f			
67	VO8f			手1片3.9g　ロ1片0.6g
68	VO7f	SB16		
69	VO6f	SB16		
70	VO6f	SB16	<P182	
71	VO8g			
72	VO8g・9g			手1片1.8g　ロ2片3.7g
73	VO8g			
74	VO6h			
75	VO5h			
76	VO5h		P6>	
77	VO5h			
78	VO5h			
79	VO8f			手1片1.9g　ロ2片2.3g
80	没			
81	VO7e	SB22		
82	VO7e・8e			
83	VO8c			
84	SKに変更			
85	SKに変更			
86	没			
87	没			
88	VO6d	SB26	>1088	
89	没			
90	VO6c	SB24		
91	VO7e			手1片3.4g
92	VO6e	SB16		
93	VO6e	SB22		
94	VO6e			
95	VO6e			
96	VO5i	SB17		
97	VO5i			
98	VO5i	SB17		
99	VO5i	SB17		
100	VO4i・5i	SB17		
101	VO6d	SB22	P41>	
102	VO6c	SB24		
103	VO6d			
104	VO4d	SB5		
105	没			
106	没			
107	VO5d	SB15	>P1137	
108	VO5d	SB5		
109	VO4e・4d	SB5		
110	VO5g	SB3		
111	VO5f	SB3		手4片3.7g　ロ3片6.4g
112	VO5f・6f			
113	VO5f	SB5		
114	VO5f・6f	SB4		手1片11.9g
115	VO5f			
116	VO5f	SB26	P119>・<P117	
117	VO5f	SB6	>P116	
118	VO5f	SB3		
119	VO5f		>P116	
120	VO5g	SB5		
121	VO5g	SB3		
122	VO5g	SB4		
123	VO5f			
124	VO5f	SB4		
125	VO5f	SB5		
126	VO5f	SB4か・6	P26>	手1片1.5g
127	VO4f			
128	VO4f	SB5		
129	VO5f	SB16		
130	没			
131	VO5e	SB3		
132	VO4f			
133	VO4f			
134	VO4f			
135	VO4f			
136	VO5f			
137	VO5f	SB3		
138	VO5g	SB4		
139	VO5f			
140	VO5e・6e	SB4		
141	VO5e	SB5		
142				手1片4.0g　ロ1片2.9g
143	VO5e・5f	SB3		
144	VO5e	SB6		
145	VO5e	SB16		
146	VO5e			
147	VO5f			
148	VO5e・5f			
149	VO5d・5e	SB6		
150	VO5f			
151	VO6c	SB20		
152	VO6c			
153	VO6c			
154	VO6c	SB19		
155	VO6c	SB18		手1片2.5g
156	VO5c			
157	VO5c	SB24		
158	VO5c			
159	VO5c			
160	VO5b・5c	SB24		
161	VO5c			
162	VO5b・5c			
163	VO5b・5c	SB25		
164	VO5e	SB21		
165	VO5e	SB5		
166	VO5d	SB20		
167	VO3e			
168	VO4e			
169	VO3e・3f			
170	VO5e	SB3		
171	VO6f	SB16		
172	VO5f			
173	VO5c	SB20		
174	VO5e	SB26		
175	VO5e	SB21		
176	没			
177	VO3f			
178	没			
179	没			
180	VO6e・6f			
181	VO6f			
182	VO6f		>P70	

細田遺跡　柱穴観察表②

No	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新>古	遺物・その他
183	VO6f			
184	VO6e			
185	VO6e	SB22		
186	没			
187	VO6e	SB6		
188	没			
189	VO5f			
190	VO6e・6f	SB6		
191	VO5c	SB20		
192	VO5c・5d	SB15		
193	VO5d	SB6		
194	VO6c	SB20		手1片2.7g
195	VO5d			
196	VO5d	SB21		
197	没			
198	VO5c	SB6		
199	VO4c			
200	VO5c			
201	VO5d・6d	SB21		
202	VO5d	SB21		
203	VO6d	SB15		
204	VO6d			
205	VO6d	SB6		
206	VO6d	SB20		
207	VO6c	SB6		
208	VO6c・6d	SB15		
209	没			
210	VO5c	SB24		
211	VO5d	SB24		
212	VO5d	SB24か・26	>P213	
213	VO5d		P212>	
214	VO6e			
215	VO6e			
216	VO5e・6e	SB4		
217	VO6e	SB26		手1片4.3g　ロ1片3.2g
218	VO6b	SB14		
219	VO6b			
220	VO6e	SB16		
221	没			手1片8.8g
222	VO6b・6c	SB24		手1片0.6g　ロ1片1.3g
223	VO6b	SB14		
224	VO6b	SB10		手1片4.6g
225	VO6b・7b	SB18	>P624	
226	VO6b	SB14		
227	VO6b			
228	VO6b	SB20		
229	VO6b			
230	VO6b	SB25		
231	VO6b	SB19		
232	VO6b	SB18		
233	VO6b	SB10	>P234	
234	VO6b	SB14	P233>	
235	VO6b			
236	VO6b		>P237	
237	VO6b	SB19	P236>	
238	VO6b	SB18		
239	VO6b			
240	VO6b	SB14		
241	VO6b・7b	SB19	P242>	
242	VO7b	SB18	>P241	
243	没			
244	VO6c			
245	VO7a	SB18		
246	VO7a	SB14		
247	VO6a	SB34		
248	VO8b			
249	VN6i・6j	SB11		手2片9.6g
250	VN6i・6j	SB34		
251	VO6a			
252	VN6i・6j	SB8		
253	VN6j			
254	VN6j	SB8		
255	VN6j	SB11		
256	VN6j			
257	VN6j	SB11		
258	VO5a			
259	VO5a			
260	VO6a	SB11		手2片5.8g
261	VO8a			
262	VO8a			
263	VN9j			
264	VN9j			
265	VO5a			
266	VN5j	SB8		
267	VO5a	SB9		
268	VO5a	SB11		
269	VO5a	SB8		
270	VO5a			
271	VO5b			
272	VO5b	SB10		ロ1片1.5g
273	VO5b			
274	VO5b	SB25		
275	VO5b	SB10		
276	VO5b			
277	VO5b			
278	VO5b			
279	VO5b			
280	VO5b			
281	VO5b	SB20		
282	VO5b			
283	VO5b			
284	VO5b			
285	VO4b	SB10		
286	SK9へ			
287	VO4b・5b	SB10		
288	没			
289	VO4b			
290	VO4b			
291	VO4b			
292	VO4b			
293	VO4b			
294	VO4b			
295	VO4b			
296	VN4j			
297	没			
298	VN5j	SB11		
299	VN5j	SB9		
300	VN5j	SB8		
301	VN5j	SB11	P302と重なる	
302	VN5j	SB9	P301と重なる	
303	VN5i・5j	SB8		
304	VN5j			
305	VN5i・5j	SB8		
306	VN5j・6j			
307	VN5i	SB9		
308	VN5i			手2片1.8g
309	VN6i	SB11		
310	VN6i			
311	VN7i			
312	VN7i			
313	VN6i	SB11		手1片5.4g　ロ2片5.2g
314	VN6i	SB8		
315	VN5i	SB8	>P316	
316	VN5i	SB11	P315>	手1片1.1g
317	VN5f		P644>	
318	VN5h・5i			
319	VN5h	SB11		手1片2.2g
320	VN5h			
321	VN5i	SB8		手1片0.5g
322	VN5h			
323	VN5h			
324	VN5h	SB7		
325	VN6h	SB7		
326	VN6i			
327	VN6h・7h			
328	没			
329	VN9h			
330	没			
331	没			
332	VN4j	SB9		
333	VN4j	SB9		
334	VN6g			
335	VN7g			
336	VN7g			
337	VN6g			
338	VN7g			
339	没			
340	VN5g			
341	VN5g	SB7		手1片1.6g　ロ1片2.4g
342	VN5g			
343	VN5g	SB7		
344	VN4i	SB9		
345	没			
346	没			
347	VN4g			
348	VN4g			
349	VN3g			
350	VN4f			
351	没			
352	没			
353	没			
354	VN4e			
355	VN5g			
356	VN5f			
357	VN5f			
358	VN5f			
359	VN5f			
360	VN5f			手1片4.0g
361	VN5f			
362	VN5f			手1片3.7g
363	VN5f			
364	没			土師器1片3.3g　手1片4.5g
365	VN5e・5f	SB27		
366	VN5e		P367>	
367	VN5e・5f	SB28	>P366	
368	VN5e			
369	VN5e	SB31		
370	VN5e	SB28		
371	VN5e	SB31	P646>	

細田遺跡　柱穴観察表③

No	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新>古	遺物・その他
372	VN5e			
373	VN5e			
374	VN5e	SB28	>P389	
375	VN5e	SB31		
376	VN5e	SB28		
377	VN4e・4f	SB27		
378	VN4e	SB27		
379	VN4e			
380	VN4e・5e			
381	VN4c	SB32		
382	VN4e	SB28	P1140>	
383	VN6e	SB27		
384	VN5e			
385	VN6e	SB31		
386	VN5f			
387	VN8d	SB13		
388	VN8d	SB13		手2片6.6g
389	VN5e		P374>	
390	VIM0j			
391	VIM0i			
392	VIM0i			
393	VN5d			
394	VN4d・5d			
395	VN4d			
396	VN5d			
397	VN4d・5d			
398	VN5c	SB30		
399	VN5c・6c	SB32		
400	没			
401	VN5c	SB30		
402	VN4b・4c			
403	VN4c			
404	VN4c			
405	VN4c		>P417	
406	VN4c			
407	VN4c			
408	VN4c			
409	VN4c	SB32		
410	VN5c			
411	VN4c			
412	VN4c		P425>	
413	VN4c			
414	VN4c・5c	SB30		
415	VN5c			
416	VN5c			
417	VN4c		P405>	
418	VN4d			
419	VN4d			
420	VN5c			
421	VN5d・6d			
422	VN4d			
423	VN4d			
424	VN6d	SB32		
425	VN4c		>P412	
426	VN4c			
427	VN4c			
428	VN4d			
429	VN4d			
430	VN4d			
431	VN5d・6d			
432	VN4d			
433	VN4d		P1112>	
434	VN4d			

No	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新>古	遺物・その他
435	VN4d			
436	VN4d			
437	没			
438	VN4d			
439	没			
440	VN8b			
441	VN8b			
442	VN8a	SB12		
443	VN9a	SB12		
444	VN8a	SB12		
445	VN8a			
446	VIN0a	SB12		
447	VN7a	SB12		
448	没			
449	VN7a			
450	VN7a			
451	VN7a			
452	VN6a・6b	SB23		
453	VN7a			
454	VN7a			
455	VN6a	SB23		手1片3.2g
456	没			
457	VN6b	SB23		
458	VN7b	SB23		
459	没			
460	VN6b	SB23		
461	VN5b・6b	SB32		
462	VN6b			
463	VN5b・6b	SB32		
464	VN4b			
465	VN5b	SB30		
466	VN5b・6b	SB32		
467	VN7a			
468	VN6a	SB40		
469	VN7a	SB41		
470	VN6a			
471	VN5b			
472	VN5b	SB30	>P483	
473	VN5b			
474	VN5b			
475	VN5b			
476	VN5b	SB32		
477	VN5b	SB30		
478	VN5b			
479	VN4b・5b	SB32		
480	VN5a・5b			
481	没			
482	没			
483	VN4b		P472>	
484	VN4b・4c	SB32		
485	VN4b			
486	VN5a			
487	VN5b	SB32		
488	VN5b	SB32		
489	VN5b	SB32		
490	VN3a			
491	VM4j			
492	没			
493	VM9i	SB12		
494	VM9j		P1032>	
495	VM9i			
496	VM9i			
497	VM9i・9j	SB12		

No	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新>古	遺物・その他
498	VM9j			
499	VM9i			
500	VM9i			
501	VM8j			
502	VM8j・9j	SB12		
503	VM8j			
504	VM8j			
505	VM8j	SB12		
506	VM8i			
507	VM8j			
508	VM8j		P509>	
509	VM8j	SB12	>P508	手1片3.8g
510	VM8i			
511	VM8i			
512	VM8i			
513	VM8j	SB12		
514	VM8j	SB12		
515	VM7j	SB12		
516	VM6j			
517	VM6j	SB40	>P1060	
518	VM7j			
519	VM6j			手1片1.3g
520	VM7i			
521	VM7j			
522	VM7j			
523	VM7j			
524	VM7j			
525	VM7j			
526	VM7j			
527	VM7j	SB41		
528	VM6j・7j	SB40		
529	VM6j・7j	SB41		
530	VM7j			手3片5.7g
531	VM6j			
532	VM6j・VN6a			
533	VM6j	SB35		
534	VM6j			手2片7.1g　ロ1片1.4g
535	VM6j	SB41		
536	VM5j	SB35		
537	没			
538	VM5j			
539	没			
540	VM5i・6i	SB		
541	VM5j・VN5a			
542	VM5j			
543	VM5j			
544	VM5j			
545	VM5i			
546	VM6h・6i			
547	VM5j			
548	VM5j	SB35		
549	VM5i	SB35		
550	VM5i			
551	VM5i			
552	VM5i		>P553	
553	VM5i		P552>	
554	没			
555	VM5i			
556	VM5i			
557	VM5i			
558	VM4i・4j			

細田遺跡　柱穴観察表④

No	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新>古	遺物・その他
559	VM4j	SB35		
560	没			
561	VM4i			
562	VM2j・3j			
563	VM2i			
564	VM3i			
565	VM3i			
566	VM3i			
567	VM2i			
568	VM5i			
569	VM5i			
570	VM4h・4i			
571	VO5h	SB2		
572	VO4g・4h	SB2		
573	VO4h	SB2		
574	VO4h	SB2		
575	没			
576	VO5e	SB4		
577	VO5e	SB5		
578	VO4g	SB5		
579	VO4f・4g	SB5		
580	VO4f	SB5		
581	VO4e	SB5		
582	VO6f	SB6		
583	VO6d・6e	SB6		
584	没			
585	VO5e			
586	VN5h	SB7		手1片0.9g
587	VN6h	SB7		
588	VN5i	SB8		
589	VO6a	SB8		手1片0.8g
590	VN6i	SB8		
591	VN5j			
592	VO4a	SB9		
593	VO6a	SB10		ロ1片1.0g
594	VO6a	SB10		
595	VO5a	SB10		
596	VO5a	SB10		
597	VO4a・5a	SB10		
598	VM7j	SB12		
599	VM8j	SB12		
600	VM9j	SB12		
601	VM9j	SB12	>P1034・>SX2	
602	VN9a・VIN0a	SB12		
603	VN9a	SB12		
604	VN9a	SB12		
605	VN9a	SB12		
606	VN8a	SB12		
607	VN8d	SB13		
608	VN8e	SB13		
609	VN9d	SB13		
610	VN9d	SB13		
611	VN9e	SB13		
612	VN9e			
613	VN9e	SB13		
614	VO6a	SB14		
615	VO6b・7b	SB14		
616	VO6d	SB15	>P1135	
617	VO6c	SB15		
618	VO5d	SB15	>P632	
619	VO5e	SB15	>P633	

No	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新>古	遺物・その他
620	没			
621	VO5h	SB17		
622	VO4i・5i	SB17	P18>	
623	VO6a	SB18		
624	VO6b	SB19	P225>	
625	VO6a	SB19		
626	VO6a	SB20		
627	VO6b	SB20		
628	VO5a	SB20		
629	VO5b	SB20		
630	VO5d	SB20		
631	没			
632	VO5d	SB21	P618>	
633	VO5e	SB21	P619>	
634	VO7d	SB22		
635	VO7d	SB22		
636	没			
637	VN7b・7c	SB23		
638	VN6b	SB23		手1片2.2g
639	VN6a・6b	SB23		手1片1.4g
640	VO6b	SB25		
641	VO5b	SB25		
642	VN5f			
643	VN5f			
644	VN5f	SB29	>P317	
645	VN5f			
646	VN5e		P371>	
647	没			
648	没			
649	VN5e	SB31	>P646	
650	VN5e	SB31		
651	VN5e・6e			
652	VN5e・6e			
653	VN5e	SB28		
654	VN5e・5f	SB29		
655				
656	VN6e			
657	VN6f			
658	VN6f			
659	VN6f			
660	没			手1片2.2g
661	VN5e・6e			
662	VN5e	SB29		
663	VN5e			
664	VN5e	SB29		
665	VN5d			
666	VN5f			
667	VN5d			
668	VN5e	SB27		
669	VN5e	SB31		
670	VN5e	SB27		
671	VN5e			
672	VN5e			
673	VN5e			
674	VN5e			
675	VN5e			
676	VN5e			
677	VN4d・5d			
678	VN4d	SB32		
679	VN5c			
680	VN5b・5c	SB30		
681	VO8g			
682	VO8g	SB38		手1片1.8g

No	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新>古	遺物・その他
683	VO8g			
684	VO8g			
685	VO8g			
686	VO7g・8g			
687	VO7g			
688	VO7g			
689	VO7g		P690>	手1片2.0g　ロ1片1.7g
690	VO7g		>P689	手2片2.8g
691	VO7g			
692	VO7g			
693	VO7g	SB38		
694	VO7g			
695	VO7g			
696	VO7g			
697	VO7f・7g	SB33		
698	VO7g			
699	VO7g	SB33		手1片1.2g
700	VO7g			ロ1片2.1g
701	VO7g			
702	VO7g			
703	VO7g		P704>	
704	VO7g		>P703	
705	VO7g		>P704	
706	VO7g			
707	VO8f	SB33		
708	VO8f	SB33		
709	VO8f	SB38		
710	VO7f・8f	SB36		
711	VO7f	SB33		
712	VO7f			
713	VO7f			
714	VO7f	SB36		
715	VO7f	SB38		
716	VO7f			
717	VO7f			手1片9.1g　ロ2片6.5g
718	VO7f			
719	VO7f			手1片3.9g
720	VO7f			
721	VO7f			
722	VO7f			
723	VO7f			
724	VO7f			
725	VO7f			
726	VO7f	SB37		
727	VO7f			
728	VO7f			
729	VO7f			
730	VO7f			
731	VO7f			
732	VO7f			
733	VO7f			
734	VO8f			
735	VO8f			
736	VO8f			手2片1.5g　ロ1片3.2g
737	VO8f			手1片0.9g　ロ1片0.5g
738	VO8f	SB38		手1片4.3g
739	VO8f			手2片2.6g
740	VO8e・8f			
741	VO8e・8f			
742	VO7f		P65>	
743	VO7f			
744	VO8e・8f			
745	VO8e			

細田遺跡　柱穴観察表⑤

No	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新>古	遺物・その他
746	VO8e	SB39		
747	VO8e			手1片4.0g
748	没			
749	VO8e			
750	VO8e	SB38	P751>	
751	VO8e		>750	
752	VO8e			
753	VO7e・8e			手1片4.5g
754	VO7e			
755	VO7e			ロ1片8.5g
756	VO7e			手2片7.0g
757	VO7e			
758	VO7e			
759	VO7e			手5片8.8g　ロ1片2.2g
760	VO7e			
761	VO7e			
762	VO7f			
763	VO7e			
764	VO7e	SB39		手1片5.3g　ロ1片16.5g
765	VO7e			
766	VO7e	SB39		
767	VO8e			
768	VO8e	SB39		
769	VO8e			
770	VO7h			
771	VO7h			手2片14.0g
772	VO7h			
773	VO7h			
774	VO7h			
775	VO9g	SB37		
776	VO9g			
777	VO9g	SB37		
778	VO9g			
779	VO9g			
780	VO9g			
781	VO9g	SB37		
782	VO9g			
783	VO9h			
784	VO9h			
785	VO9h			
786	没			
787	VO8h			
788	VO9i			手5片6.8g
789	没			
790	VO8i			
791	VO8i			
792	VO8i			手1片6.2g
793	VO9f	SB37		
794	VO9f・9g			
795	VO9f			
796	VO9f			
797	VO9f			
798	VO9f			
799	VO9f			
800	VO9f			
801	VO9e			
802	VO9e			
803	VO7d			
804	VO7d		P805>	
805	VO7d		>P804	
806	没			
807	没			手1片2.6g
808	VN4e	SB27		

No	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新>古	遺物・その他
809	VN4e	SB27		
810	没			
811	没			
812	没			
813	没			
814	没			
815	没			
816	没			
817	没			
818	没			
819	没			
820	没			
821	没			
822	没			
823	没			
824	没			
825	没			
826	没			
827	没			
828	没			
829	VN4e	SB29		
830	VN4e			
831	VN6e	SB31	P857>	
832	VN4e・5e	SB31		
833	VN4e	SB31		
834	没			
835	没			
836	VN4e・4f			
837	VN4b	SB32		
838	VN4d・5d	SB32		
839	VN6c	SB32		
840	VN5f			手1片2.2g
841	没			
842	没			
843	没			
844	没			
845	没			
846	没			
847	没			
848	没			
849	没			
850	没			
851	没			
852	没			
853	没			
854	没			
855	没			
856	没			
857	VN6e	SB27	>P831	
858	没			
859	没			
860	没			
861	没			
862	没			
863	没			
864	没			
865	没			
866	没			
867	没			
868	没			
869	没			
870	没			
871	没			

No	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新>古	遺物・その他
872	没			
873	没			
874	没			
875	没			
876	没			
877	没			
878	没			
879	没			
880	没			
881	没			
882	没			
883	没			
884	没			
885	没			
886	没			
887	没			
888	没			
889	没			
890	没			
891	没			
892	没			
893	没			
894	没			
895	没			
896	没			
897	没			
898	没			
899	没			
900	没			
1001	VN7d			
1002	VN6f			
1003	VN6f・6g			
1004	VN6f		SD3>	
1005	VN5f			
1006	VN5f		SK11>	
1007	VN5f			
1008	VN5f			
1009	VN5f			
1010	VN4f			
1011	VN4e			
1012	VN4e			
1013	VN4e・4f			
1014	VN4e		SK15>	
1015	VN4e		SK15>	
1016	VN4e	SB31		
1017	VN4e・5e	SB28		
1018	VN4d			
1019	VN4d・5d			
1020	VN3f		>かくらん	
1021	VN6i	SB34		
1022	VN5g			
1023	VN4i・5i			
1024	VIN2c・3c			
1025	VIN2e			
1026	VIP1a			
1027	VIP1a			
1028	VIP1a			
1029	VIP1a			
1030	VIP1a・1b			
1031	VIP1b			
1032	VM9j		>P494	
1033	VM9j	SB12		旧P394(番号修正)
1034	VM9j		>SX2・P601>	旧P395(番号修正)

細田遺跡　柱穴観察表⑥

No	グリッド	掘立柱建物	新旧関係　新>古	遺物・その他
1035	VM9j	SB12	>SX2	旧P396(番号修正)
1036	VN8c			
1037	VO9g			
1038	VO8f	SB37		
1039	VO8f			
1040	VM7i			
1041	VO8g	SB33		
1042	VO8g			
1043	VM7j			
1044	VM6h・6i			
1045	VM6i			
1046	VM6i			
1047	VM6i・6j	SB40	>SK29	
1048	VM6i・7i	SB41	>SK29	
1049	VM6i			
1050	VM6i			
1051	VM6h・6i			
1052	VM6i			
1053	VM6i			
1054	VM6i			
1055	VM6i			
1056	VM6i	SB35		
1057	VM5i・6i	SB40		
1058	VM6j			
1059	VM6j			
1060	VM6j	SB40	P517>	
1061	VM6i・6j			
1062	VM6j			
1063	VM6j			
1064	VM6j			
1065	VM6i・6j			
1066	VM6j			
1067	VM6j			
1068	VM6j			
1069	VM6j			
1070	VM5j・6j			
1071	VM5j・6j	SB40		
1072	VN6a	SB41		
1073	VN5a・6a	SB40		手31片52.1g　ロ15片27.0g
1074	VN7c			
1075	VN7c			
1076	VN7c			
1077	VN7c			
1078	VN6j	SB34		
1079	VO6a・7a	SB19		
1080	VO6a			
1081	VO6c	SB25		
1082	VO6c		>SK8	手34片83.6g　ロ5片11.9g
1083	VO6c		>SK8	
1084	VO6c		>SK8	
1085	VO6c		>SK8・P1086>	
1086	VO6c		>P1085・SK8	
1087	没			
1088	VO6d	SB22	P88>	
1089	VO7g	SB33		
1090	VO7g			
1091	VO7g			
1092	VM5i			
1093	VM5i	SB35		
1094	VM5i			
1095	VM5i			

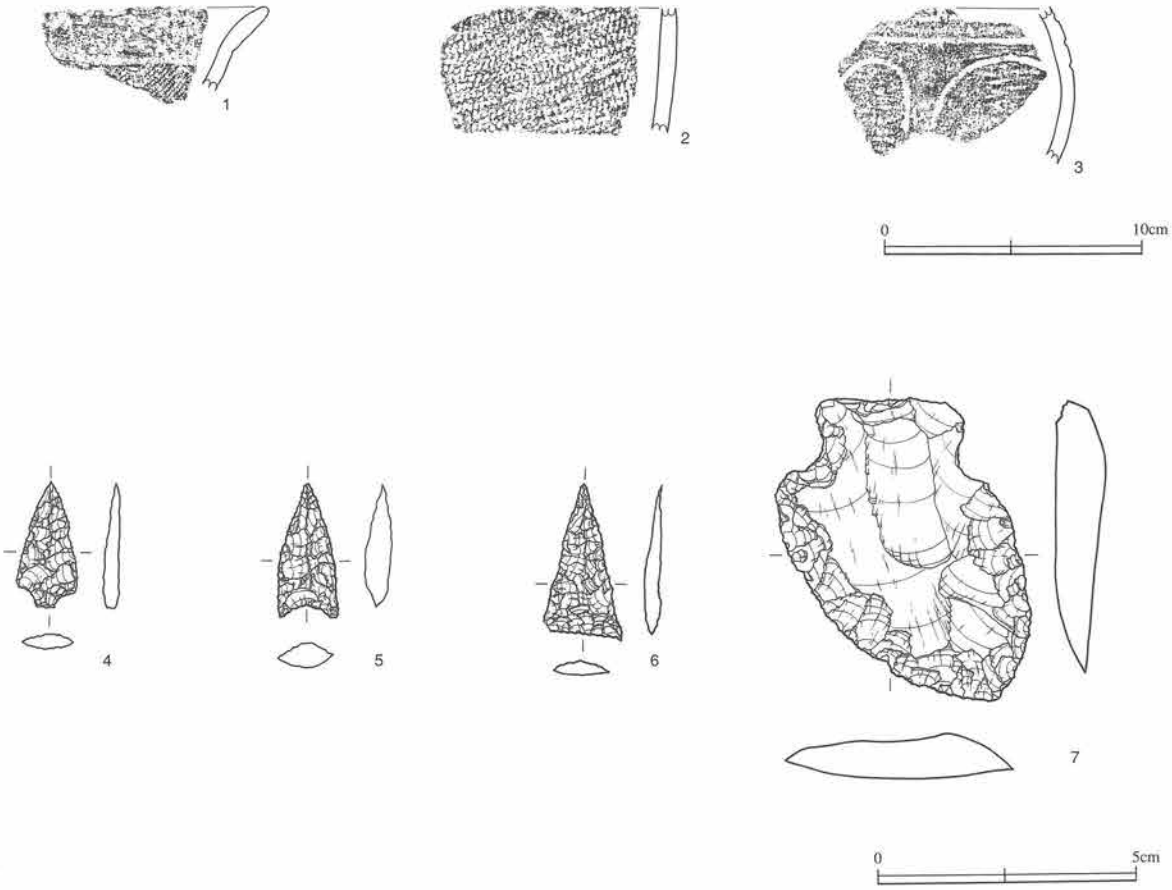
No	グリッド	掘立柱建物	新旧関係　新>古	遺物・その他
1096	VM5i			
1097	VM5j			
1098	VM4h・4i			
1099	VM4h・4i			
1100	VM4h・4i			
1101	VM3j・4j		>SK30	
1102	VM5j・VN5a			
1103	VN5a			
1104	VN5a			
1105	VN5c			
1106	VN4b	SB32		
1107	VN4b			
1108	VN4b			
1109	VN4c		P1118>	
1110	VN4c			
1111	VN4c			
1112	VN4c		SK5	
1113	VN3b			
1114	VN3c			
1115	VN3c			
1116	VN3c			
1117	VN4c			
1118	VN4c		>P1109	
1119	VN4b			
1120	VN4d			
1121	VN5e	SB31		
1122	VN4f・5f	SB29		
1123	没			
1124	VO5a			
1125	VO5a			
1126	VO5a			
1127	VO5b			
1128	VO5b			
1129	VO5b			
1130	VO5b			
1131	VO5b			
1132	没			
1133	VO5b			
1134	没			
1135	VO5d・6d		P616>	
1136	VO5d			
1137	VO5d		P107>	
1138	VO5e	SB26		
1139	VO5f	SB4		
1140	VN4e		>P382	
1141	VN4c			
1142	VN5e	SB27		
1143	VM6i			
1144	VM6i			
1145	VN5c	SB30		
1146	VO5a			
1147	VM7j			
1148	VM7j			

2　出　土　遺　物

（1）縄文土器・石器（第68図、写真図版62）

縄文時代の土器は3片が出土した。いずれも遺構外からの出土で、摩耗が著しく、近接する地点から移動して来た破片と推定される。本調査範囲内では縄文時代に属すると推測される遺構は検出されなかった。1は深鉢の口縁部片である。口縁部に無文帯があり、頚部より下には単節ＬＲ縄文が施される。縄文時代後期に属すると推測される。2は深鉢の体部片である。単節ＬＲ縄文が施される。縄文時代後期に属すると推測される。3は壺の体部片である。沈線で文様が施され、単節ＬＲ縄文が施される。縄文時代後期に属すると推測される。

石器は石鏃3点、石匙1点が出土した。いずれも石材は頁岩である。4～6は石鏃である。4は有茎鏃で、茎部分が欠損している。5は無茎鏃で抉りが施されている。P549の埋土から出土したが、混入品と判断される。6は無茎鏃で抉りが浅い形態である。7は完形の石匙である。つまみ基部部分は幅が広い形態である。これらの石器の所属時期の確定は不可能であるが、上記の縄文土器の年代観から縄文時代後期に属する可能性が想定される。



第68図　細田遺跡　縄文時代の土器、石器

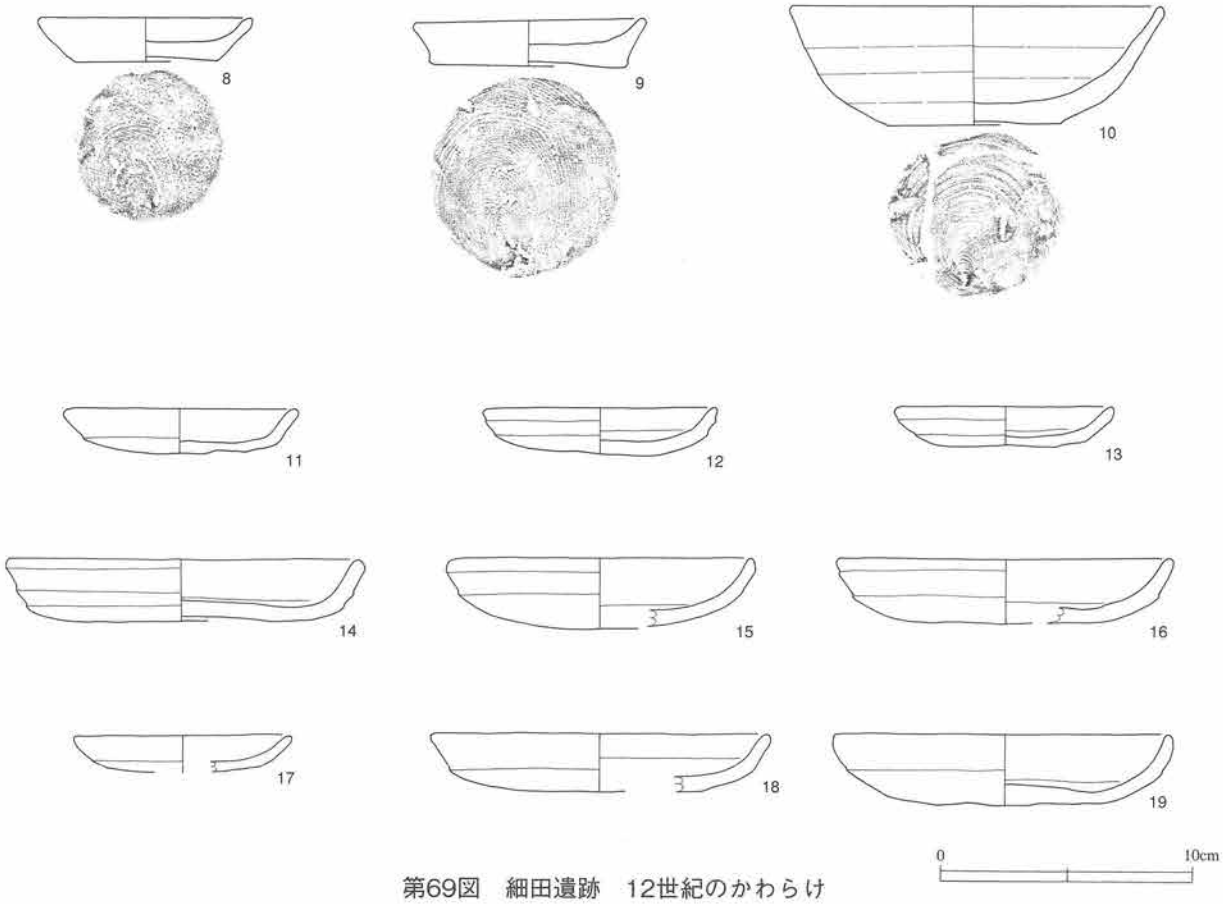
（2）12世紀のかわらけ（第69図、写真図版62）

12世紀の属するかわらけは12個体を図示した。ロクロかわらけ３個、手づくねかわらけは９個である。細田遺跡の今回の調査区から出土したかわらけの総重量は3,988gである。この内、掲載は913g、不掲載は3,075gである。重量比での掲載率は23％になる。不掲載の内、柱穴埋め土から出土したものが、638g　その他の遺構中からの出土が1,650g、遺構外からの出土が787gである。出土したかわらけは細片が多く、ロクロ、手づくねの判別が難しい個体も多く、ロクロ、手づくねでの重量比は測定していない。掲載したものでのロクロ、手づくねの重量比は１対1.42になる。

観察表の「種別」で「Ｄ３」等の記号が記してあるのは、手づくねかわらけの口縁部のナデ分類である。「種別」にこの記号が記してあるのは手づくねかわらけと読み取っていただきたい。口縁部分類記号は以下のとおりである。

Ｄ３・・・・口縁部１段なで、口唇部面取りなし
Ｄ４・・・・口縁部１段なで、口唇部面取りあり
Ｃ３・・・・口縁部２段なで、口唇部面取りなし
Ｃ４・・・・口縁部２段なで、口唇部面取りあり
内折・・・・コースター状のかわらけ（今回の出土はなし）

「残存率」は完形のものを100％とした百分率で示している。その基準として、柳之御所遺跡の完形のかわらけの重量を測定し、その平均値を求め、それとの重量比較で残存率を求めた。完形かわらけの重量測定は、ロクロ小型、ロクロ大型、手づくね小型、手づくね大型それぞれについて150個の完形品の測定を行い、平均値を求めた。その値は、ロクロ小型かわらけは70g、ロクロ大型かわらけは236g、手づくね小型63g、手づくねかわらけ176gである。しかしながら、この重量比率では100％を



第69図　細田遺跡　12世紀のかわらけ

越える値になるものも発生する。これらの個体については、実物を肉眼で観察し感覚的に求めた残存率を記している。「色調」は器表面の面積の大きい色調を、土色帳を用いて観察した。

８・９はロクロ小型かわらけである。どちらもＳＫ14埋土からの出土である。胎土は砂粒、海綿状骨針が混入し、平泉のロクロかわらけの胎土と共通する。９の底径は著しく大きく特徴的である。

10はロクロ大型かわらけである。器高が4.7cmと、器高が高い個体である。11は小型手づくねかわらけである。器形が全体的にやや歪み、内底面はハケメ状の調整痕が顕著である。12は小型手づくねかわらけである。取り上げ時に別個の番号を付したものが接合している。このかわらけは手づくねかわらけにもかかわらず、胎土に海面状骨針の混入が認められる。13は小形手づくねかわらけである。器形が全体的にややゆがみ、摩耗が著しい。14・15は大型手づくねかわらけである。共にＳＤ４からの出土である。14は外底面にすのこ痕が顕著にみられる。16は手づくね大型かわらけである。ＳＫ24の出土で、胎土には僅かながら海面状骨針の混入がみられる。17小形ロクロかわらけである。柱穴Ｐ754の出土で、摩耗が著しい。18・19は大型手づくねかわらけである。遺構に伴わず、検出時に出土したものである。共にすのこ痕が顕著である。

細田遺跡出土の12世紀のかわらけは不掲載のものも含めていずれも第３四半期ないし、第４四半期に属するものと判断される。これ以上の詳細な時期区分は、同一遺構でのセットを構成する個体数が少なく明らかにすることが困難である。強いて言えば、ＳＫ14出土の手づくねかわらけ、ＳＤ４出土の手づくねかわらけで、２段なでが卓越することから、12世紀第４四半よりも第３四半に属する可能性が高いことが指摘される。

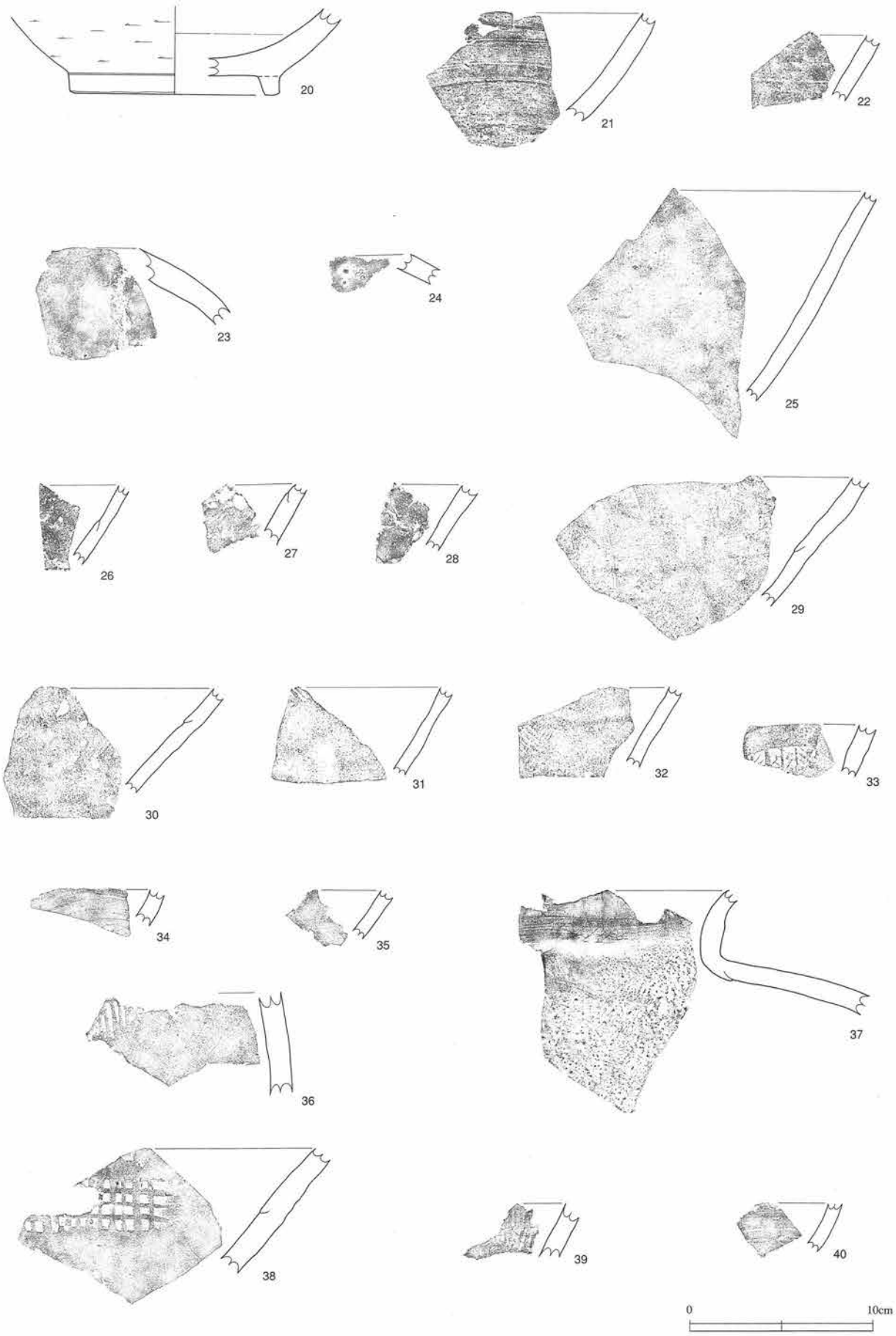
（３）12 世紀の国産陶器（第 70 図、写真図版 63）

12世紀に属する国産陶器は21点を図示した。出土した全点を掲載している。常滑産陶器は14点合計重量727.9gが出土し、渥美産陶器は６点、重量446.3gが出土し、須恵器系陶器１点、重量9.0gが出土している。破片数での比率は、常滑産陶器67％、渥美産陶器28％、須恵器系陶器５％となり、重量での構成比率は、常滑61％、渥美38％、須恵器系陶器１％となる。

観察表中の「釉、色調」は外面の色調について、土色帳を使用して観察している。また「分類・年代」については、口縁部等、型式の決め手となる部位が欠損しているものが多く、詳細な形式分類ができなかったが、遺跡から出土したかわらけの年代観などから類推していずれの年代も12世紀のものとしている。常滑産陶器の場合、生産地編年のＩｂ型式に属すると推測される個体はなく、いずれもⅡ型式か、Ⅲ型式に属すると推測される。

20～22は常滑産陶器の片口鉢である。20は底部～底辺部の破片で、外底辺部には回転ヘラケズリが施される。内面は使用のために摩耗している。21は体部片で外面の下端部に回転ヘラケズリが確認できる。内面には自然釉が付着する。22は体部下半部の破片で、外面に回転ヘラケズリ痕が認められる。内面には自然釉が付着する。23は常滑産陶器の広口壺の肩部片である。外面には灰オリーブ色の自然釉が被っている。24は小破片で判別が難しいが常滑産陶器の広口壺と推測される。外面には灰オリーブ色の自然釉薬が付着する。25～33は常滑産陶器の甕片である。25は押印が施された部位がないが、破片のカーブ等から甕と判断した。26・28は小破片で広口壺・甕の判別が難しいが、一応、甕と推測している。27も小破片であるが押印が認められ、甕と判断できる。29～33は褐～灰褐色の特徴的な胎土、質感で同一個体と判断される。いずれも細田遺跡の西寄りでの出土であるが、西隣の接待館遺跡の東辺部分でも同一個体片が出土している。

34、35は渥美産陶器の片口鉢片である。34は破片のカーブから底辺部の破片と推測される。ヘラケ



第70図　細田遺跡　12世紀の国産陶磁器

ズリは施されていない。35は小破片であるが、渥美特有の砂っぽい胎土を呈しており、渥美産陶器と判断した。36～39は渥美産陶器の甕片である。36は厚手の破片で押印が施されている。体部中程の破片と推測される。37は肩～頚部の破片である。肩部より下には暗灰黄色の灰が被っている。六日市場遺跡の掲載番号60の渥美産陶器甕は同一個体と判断される。38は体部下半片である。厚手の破片で格子目状の押印が認められる。内面には炭化物が付着している。39は小破片であるが、押印が認められる。

40は須恵器系陶器の片口鉢片である。小破片であるが、胎土、質感から須恵器系陶器と判断した。須恵器系陶器の中でも珠洲産陶器に類似する。

（4）12世紀の中国産磁器（第71図、写真図版63）

12世紀に属する中国産磁器は、白磁四耳壺片（41）、青磁碗片（42）の２点が出土している。出土した全点を図示した。

41は白磁四耳壺の体部下半の破片である。化粧土は認められず、大宰府分類の壺Ⅲ類と判断される。釉は内外面に施され、色調は白色を呈する。内面にはロクロ目の凹凸が顕著に存在する。12世紀後半に属すると判断される。

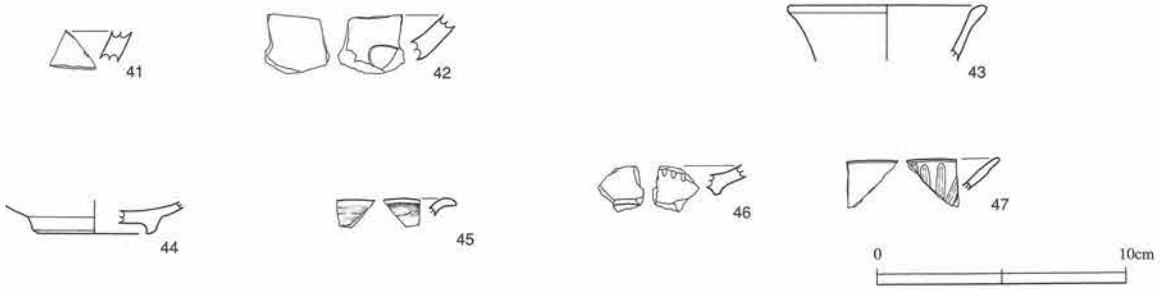
42は青磁碗の体部下半片である。竜泉窯産で、大宰府分類の碗Ⅰ２類に分類できる。内面には劃花文が施されている。12世紀後半に属すると推測される。

（5）中世の陶磁器（第71図、写真図版63）

13世紀以降の中世に属する陶磁器をここで示す。中国産磁器３片（43～45）、国産陶器２片（46、47）が出土している。出土した全点を図示した。

43は中国産青磁小碗である。内外面に緑青色の釉が厚く施されており、口縁部がやや外反する。14世紀の竜泉窯産と判断される。44は中国産の白磁皿である。口縁部が欠損するが、下半部の形状から端反皿と推測される。16世紀代と推測される。45は中国産染付皿の口縁部片である。口縁部は端反であり、小野分類Ｂ１群に分類され、15世紀後半～16世紀前半代に属する。染付が滲んでおり、文様は明確ではない。

46は瀬戸・美濃産陶器の灰釉皿である。胎土は灰色で、内面に放射状の沈線が施される。口縁部が欠損するが、折縁の皿と推定され、大窯Ⅳ期、16世紀後半と推測される。45の中国産染付皿と同一の溝ＳＤ８埋土から出土している。47は瀬戸・美濃産陶器の灰釉皿の口縁部片である。外面に沈線による鎬が施される。大窯Ⅱ期、16世紀中葉と推測される。44の中国産白磁皿と同じＰ532の埋土から出土している。



第71図　細田遺跡　中国産磁器・中世の国産陶磁器

（6）近世の陶磁器（第72～76図、写真図版63～66）

調査区からは近世～現代の陶磁器が出土している。ここでは近代以降の陶磁器は割愛し、近世に属する陶磁器を示す。図示したものは、陶器42点、土器（素焼き製品）２点、磁器35点である。図化可能なものは概ね全点掲載した。

①陶器

48は肥前産の御器手碗である。高台内にも透明釉が施される。49～55は瀬戸・美濃産の陶器碗である。49は褐釉が施され、「尾呂茶碗」と推測される。50は底部片であるが長石釉が施され、「御室碗」と推測される。51は「飛びカンナ」による文様が施され、「鎧茶碗」と判断される。18世紀後半以降の所属である。52・53は白土で牡丹文が施される刷毛目碗である。19世紀前半に属する。54、55は灰釉が施される碗である。54の胎土は灰色、55は高台内にも施釉されている。ともに19世紀前半に属すると推測される。56・57は瀬戸・美濃産の陶器小碗である。どちらも灰釉が施され、近似した外観を呈するが別個体である。18世紀後半～19世紀前半に属するものである。58～62は大堀相馬産の碗である。いずれも透明性のある灰釉を用いており、18世紀代に属すると推測される。58、59は灰釉の丸碗の底部～下半部片である。60～62は外面下半に鉄釉が施される碗である。内面、外面上半には灰釉が施される。62は厚手で大型の個体である。63は失透性の藁灰釉が施される大堀相馬産の陶器小碗である。高台部は施釉されず露胎である。19世紀前半に属すると推測される。

64・65は失透性の藁灰釉が施される大堀相馬産の陶器碗である。65は端反碗である。共に19世紀前半に属すると推測される。

66は大堀相馬産の陶器碗蓋である。鉄絵が下地に施され、上に透明性のある灰釉が施されている。19世紀前半に属すると推測される。

67・68は肥前産の陶器皿である。67は銅緑釉が施され、見込み部分は欠損するが、蛇目釉剥ぎと推測される。胎土は灰色である。68は折縁皿である。胎土は黄褐色で、銅緑釉が施される。ともに18世紀代に属する。69は瀬戸・美濃産の陶器灰釉折縁皿である。口縁部を欠損する。見込みは蛇目釉剥ぎで、外面底辺部以下は露胎である。18世紀代に属する。70は瀬戸・美濃産の陶胎染付皿の体部下半片である。黄灰色の胎土で、染め付けの上に透明釉が施されている。18世紀末に属する。

71は失透性の藁灰釉が施された大堀相馬産の陶器皿である。胎土は灰色で、19世紀前半に属すると推測される。

72・73は瀬戸・美濃産の陶器香炉である。72は外面に横走する櫛目状の沈線が描かれ、褐釉が施されている。施釉は内面にも施されている。73は体部に窪みが施されている。釉は外面に鉄絵の上に灰釉が施されている。内面は無釉である。共に18世紀後半に属する。74・75は在地産の陶器香炉である。74は破断面の胎土は暗灰色、表面は暗赤褐色を呈する。外面と内面口唇部に深緑色の釉が施されている。底部には脚が付くが三足と推測される。75は口縁部片であるが、内外面に鉄釉が施されている。ともに19世紀代のものと推測される。

76は瀬戸・美濃産の陶器灯明具と推測される。灯明具の皿部の端部と想定したが確定できない。18世紀に属すると推測される。

77は大堀相馬産の陶器仏飯器である。透明性のある灰釉が施される。底面と底辺部の一部は露胎で回転糸切痕がある。19世紀前半に属すると推測される。

78は大堀相馬産の陶器土瓶である。外面には銅緑釉が施される。内面と外面底辺部以下は無釉であ

る。２破片に分かれるが同一個体と判断し、一個体として図示した。19世紀前半に属する。

79は肥前産の陶器刷毛目鉢の体部片である。白土による刷毛目と銅緑釉の上に透明釉が施されている。胎土は肥前産陶器に特徴的な赤褐色を呈する。18世紀前半に属する。

80は在地産の陶器小型壺である。内外面に褐釉が施される。19世紀に属すると推測される。81は瀬戸・美濃産陶器の有耳壺である。口縁部と底部片は接合しないが、同一個体片と判断し、図上で器形を復原した。外面には褐色釉とうのふ釉が施され、内面と外面底部～底辺部は露胎である。胎土は黄褐色を呈する。時期は17世紀後半に属する。

82は在地産の陶器蓋である。茶色の鉄釉の上に、黒色の釉が流し掛けられる。19世紀に属すると推測される。

83は陶器の行平鍋である。産地は明確にし難いが在地産と推測される。外面には「飛びカンナ」がなされ、外面と内面上半には灰釉が施されている。19世紀に属すると推測される。

84・85はほうろくである。84は薄い透明釉が施されるが、85は無釉である。よって、84は陶器、85は土器ということになる。共に在地産で19世紀に属すると推測される。84は外面に沈線状の窪みが横走する。

86は素焼きの土器で、火入れと推測される。胎土は橙色を呈し、底部は回転糸切痕を有する。産地は在地産で19世紀代のものと推測される。

87～91は陶器擂鉢である。87は瀬戸産の擂鉢である。口唇部が欠損するが、18世紀代の所属と判断される。内外面に鉄釉（錆釉）が施される。88～91は在地産陶器と推測される。88は暗赤褐色の色調を呈し、焼締陶器と思われるがはっきりしない。89は内外面に茶褐色の鉄釉が施される。90は底部と口縁部が接合しないが、同一個体と判断した。内外面に鉄釉が施され、内底面は使用のため卸目が消えるほど摩耗している。また底辺部には、回転糸切後に持ち上げた際に付いた指の痕跡が付く。

91は口縁部と底部が接合しないが、同一個体と判断した。内外面に光沢のある鉄釉が施される。88～90は19世紀、91は19～20世紀の所属と推測される。

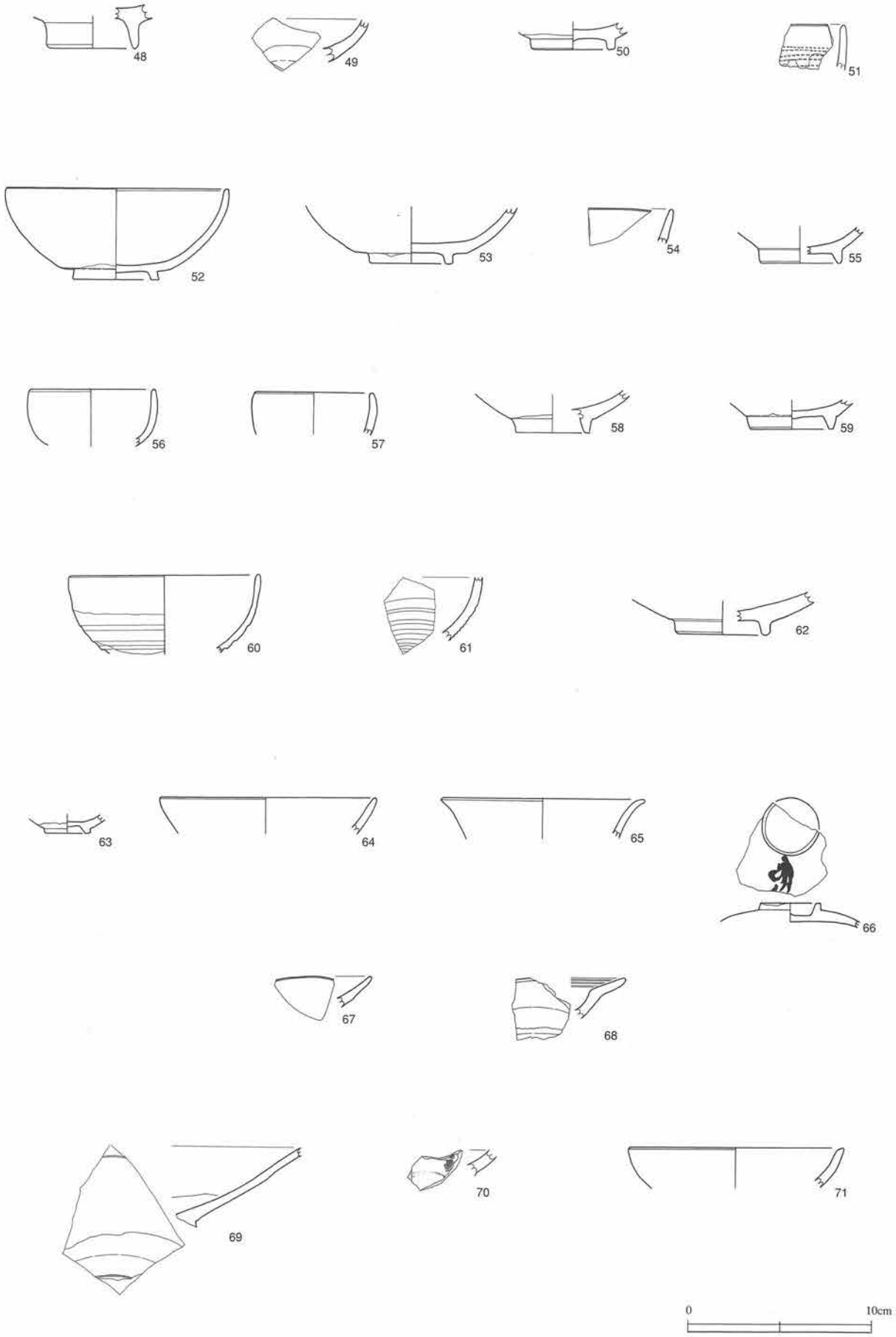
②磁器

92～102は肥前産の染付碗である。92は一重網目文で17世紀後半に属する。93は底辺部に砂粒が付着し、器形から17世紀30～50年代に属すると判断される。94～99は1690年～1780年に属する碗である。94は内外面に二重網目文、95～98は草花文が施される。95の高台部には銘があり、96は見込蛇目釉剥ぎである。99は松の文様が染付される。100・102は筒型碗で18世紀後半～19世紀初頭に属する。100は笹、101は矢羽根文が施される。102は18世紀後半～19世紀初頭の碗である。口縁部内面に花菱文が施される。またこの個体は「焼き継ぎ」がおこなわれており、破面がずれたまま接合されている。

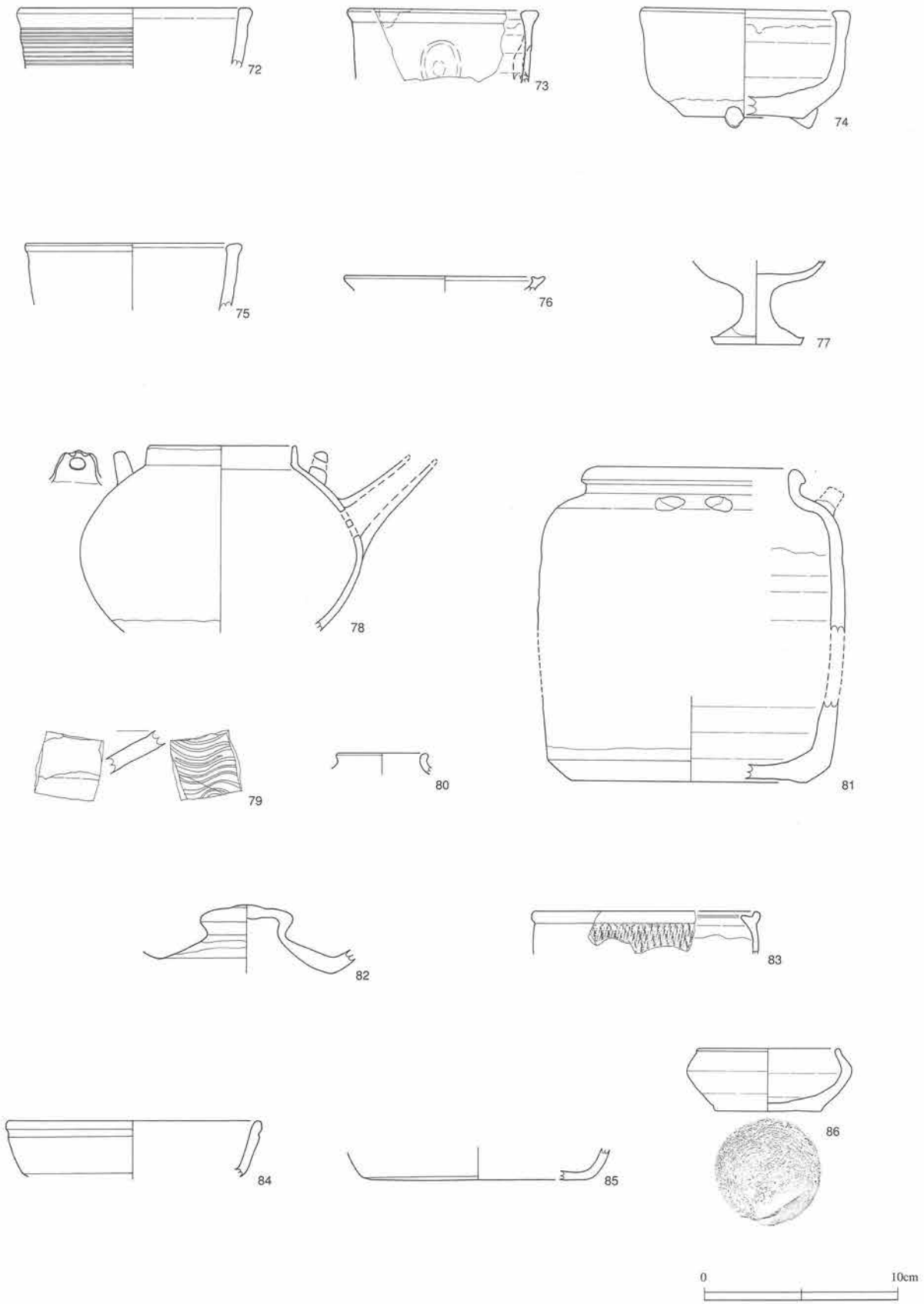
103～106は肥前産の染付碗蓋である。いずれも18世紀後半～19世紀初頭の所属である。103は外面に青磁釉が施されるが、高台内部には銘が染付され、青磁釉は施されていない。104は内面に松竹梅文が施されている。105は破断面に黒色の物質が付着しており、「漆継ぎ」の可能性が考えられる。106は内面に染付が施されていない。

107は瀬戸産の染付碗で、19世紀前半に属するものである。透明釉の釉むらがある。109は小型の染付碗で、外面に山水楼閣文が施される。産地は確定できないが、染付の色調、質感から切込産と推測される。時期は19世紀前半である。

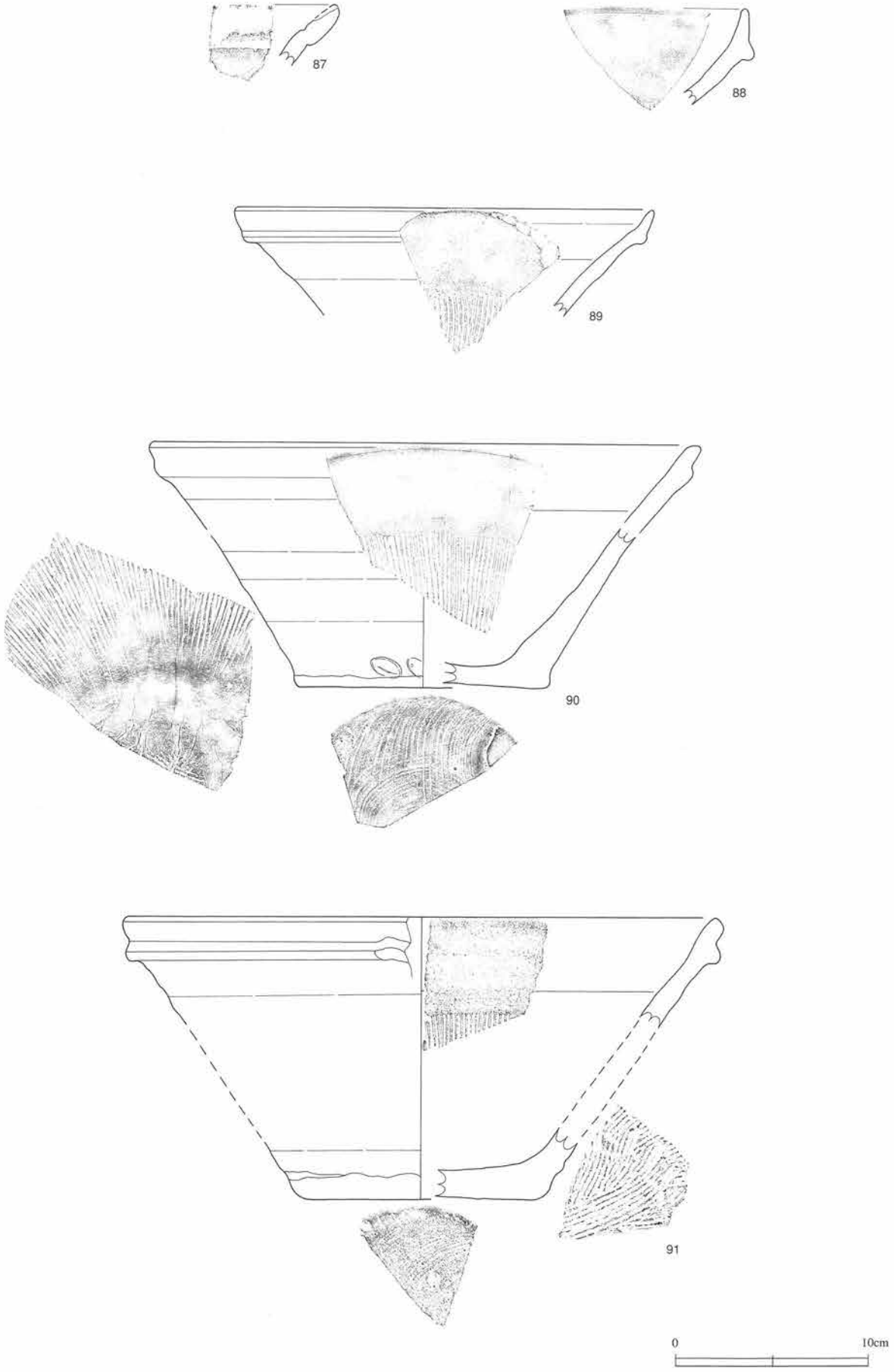
109は肥前産の染付小杯である。時期は1690～1780年で、高台内部に「～成」の銘がある。また見込みにも植物？の染付がある。



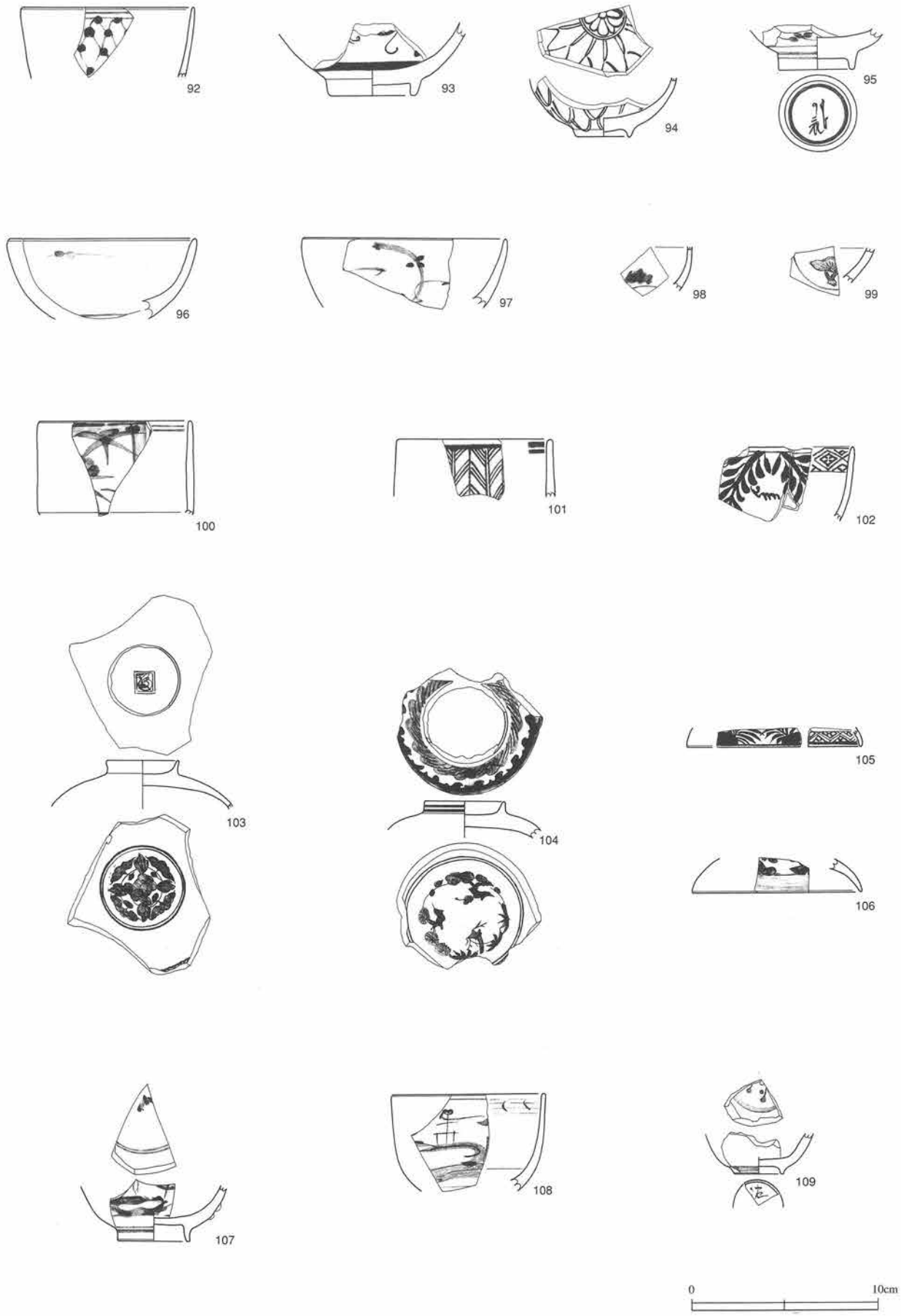
第72図　細田遺跡　近世の陶器①



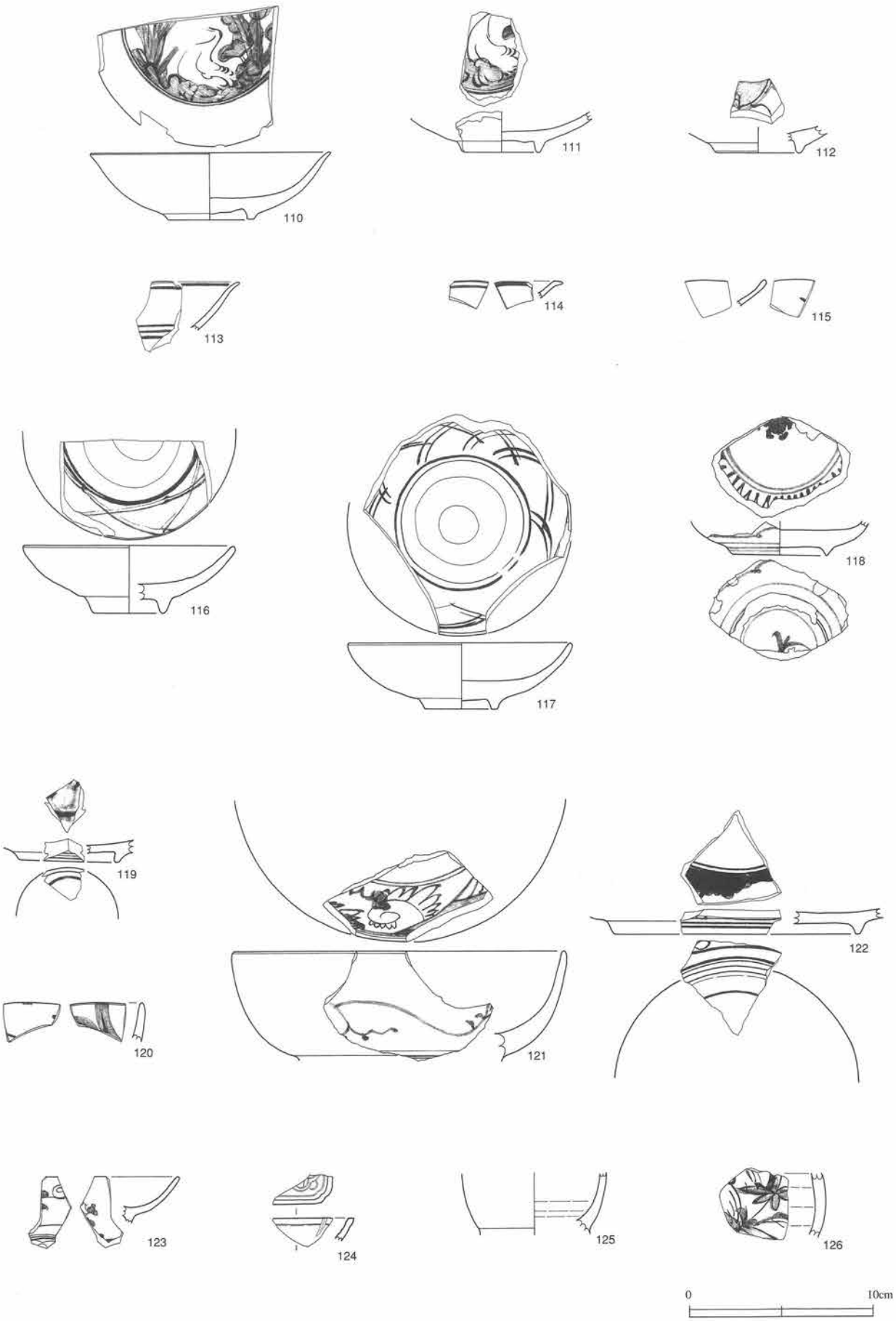
第73図　細田遺跡　近世の陶器②



第74図　細田遺跡　近世の陶器③



第75図　細田遺跡　近世の磁器①



第76図　細田遺跡　近世の磁器②

110～123は肥前産の染付皿である。110～112は器形から、17世紀30～50年代に属すると判断される。110と111は見込みに共通する水鳥の文様が施される。112は透明釉に釉むらが認められる。113・114は全体の器形が不明なため確定できないが、17世紀30～50年代に属すると推測される。

113は染付の御須の色が青灰色を呈する。114は端反の皿で、外面口唇部に染付が施される。115～119は小型の皿で、1690年～1780年に属するものである。115は小破片であるが、内面に僅かに染付が認められる。116・117は見込蛇目釉剥ぎの井桁文の皿である。118は見込みにコンニャク印判の五弁花が施される。119は呉須の色調が青灰色を呈する。120・121は器高の高い「なます皿」である。時期は1690～1780年に属する。121は接合できない２破片に分かれるが、同一個体と推測される。122はやや大型の皿である。呉須は鮮やかな紺色で上手の皿と推測される。時期は1690～1780年に属する。123は小型の皿で小破片であるが1690～1780年に属すると推測される。

124は角形の白磁型おこし皿である。19世紀前半の東北地方産と推測される。

125・126は肥前産の磁器瓶である。125は染付部分が無く、白磁の可能性がある。内面は無釉で1690～1780年に属すると推測される。126は染付を有する体部片である。内面は無釉で1690～1780年に属するものである。

細田遺跡調査区域内には、「寛文検地帳」、「安永風土記」に記載される近世の屋敷「六日市場屋敷」が所在した。その位置は調査前に所在していた「佐藤家」の敷地範囲と推測される。佐藤家は六日市場屋敷の後裔である。今回出土した近世陶磁器はこの六日市場屋敷に属するものと推測される。

（７）金　属　製　品（第77図、写真図版67）

①鉄製品

鉄製品は、刀子１点、鏃１点、釘５点（確定できないものも含む）が出土している。出土した全品を図示している。観察表中の「保存処理№」は保存処理に委託した際に付し番号である。保存処理は岩手県立博物館に委託した。

127は刀子である。柄部と刃部が欠損する。所属時期は不明である。128は鏃である。茎部分が欠損し、所属時期は不明である。12世紀に属する可能性もある。129は幅広の釘である。頭部が斜めになっている。所属時期は不明である。130・131は釘である。断面形は方形を呈する。所属時期は不明である。132・133は釘と推測したが、断面形が円形で疑問も残る。所属時期は不明である。

②銅製品

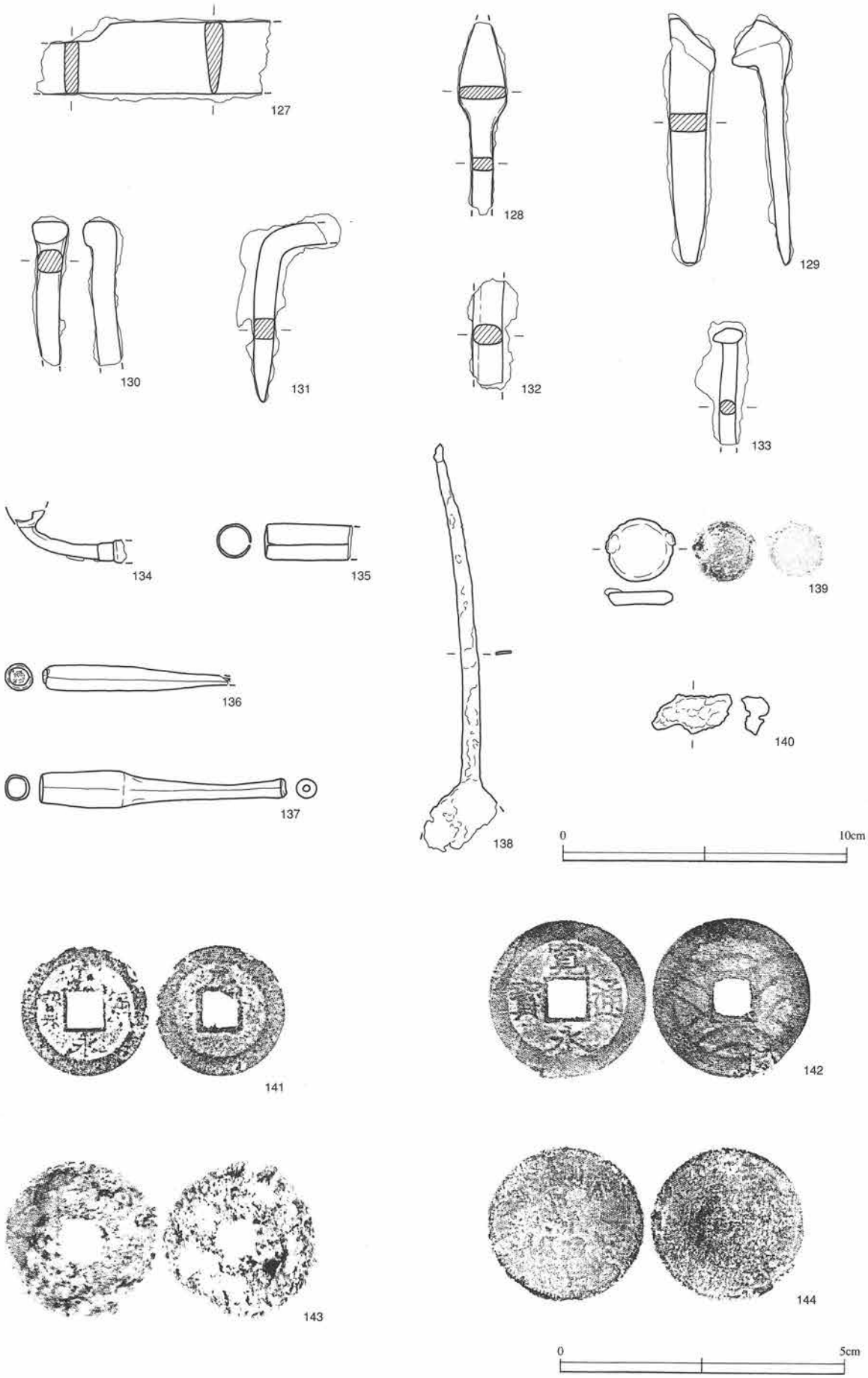
銅製品は煙管、匙がある。134は煙管の吸口である。柄部と火皿の大半を欠損するが形態から、16世紀末～17世紀初頭の製造と推測される。135は煙管の吸口と推測されるが、途中で意図的に切断している。136・137は煙管の吸口である。136は内部にらうの竹が残存している。138は匙である。匙部の半分以上が腐食のため欠損している。近世のものと推測される。

③その他の金属製品

139は鉛の円盤である。厚さは約３㎜で、重量は13.4gであるが用途は不明である。近世に属する可能性が高いが、確定できない。140は微少な鉄滓である。重さは4.5gで鍛冶滓と推測される。

④銭貨

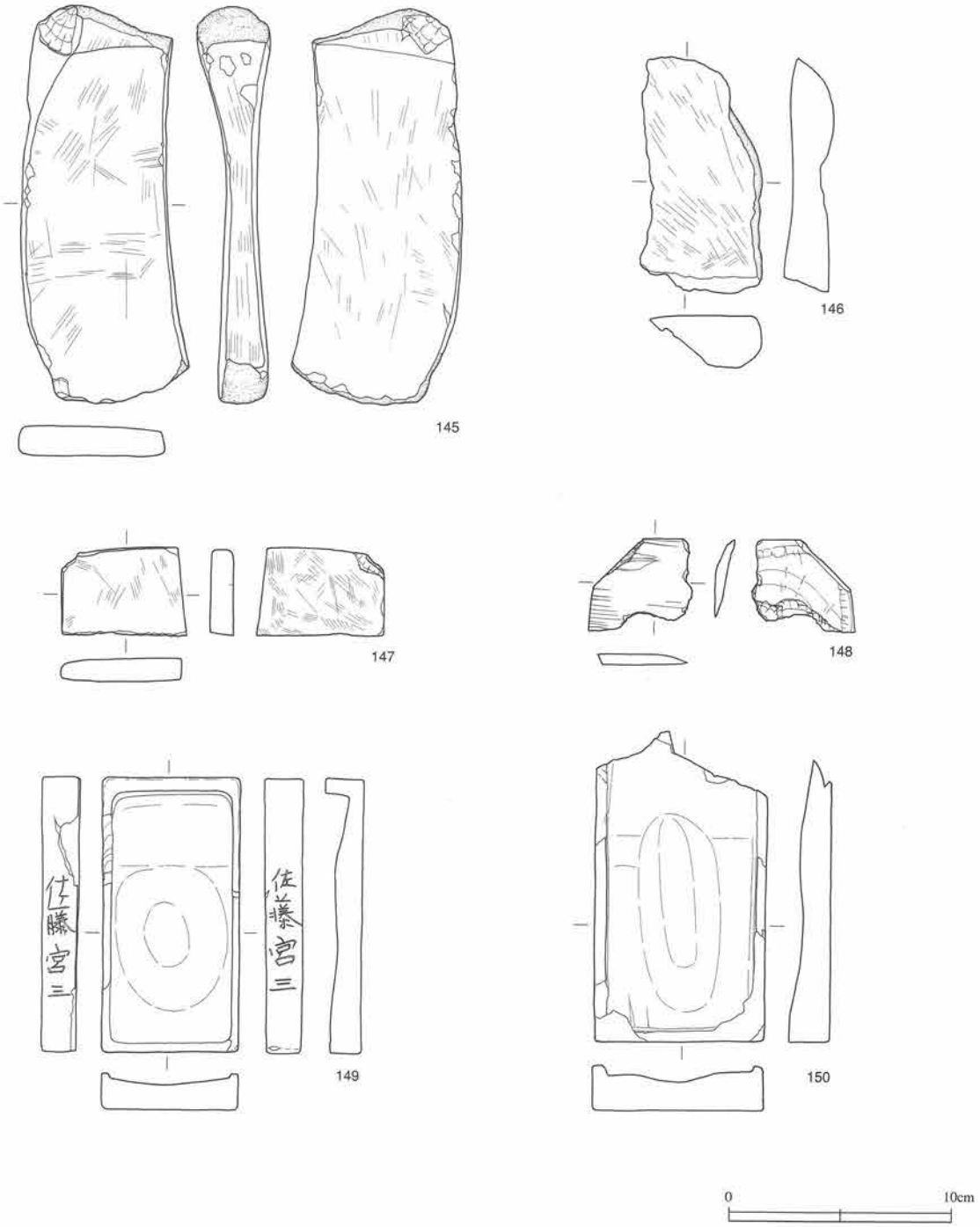
141は寛永通寶銅一文銭である。背に「元」の文字があり、新寛永である。18世紀中葉の鋳造と推測される。142は寛永通寶銅四文銭である。1768年以降の鋳造である。143は腐食のため明瞭ではないが、寛永通寶鉄四文銭と推測される。幕末期の鋳造であろう。144は明治時代の龍一銭銅貨である。腐食のため発行年は読み取れない。



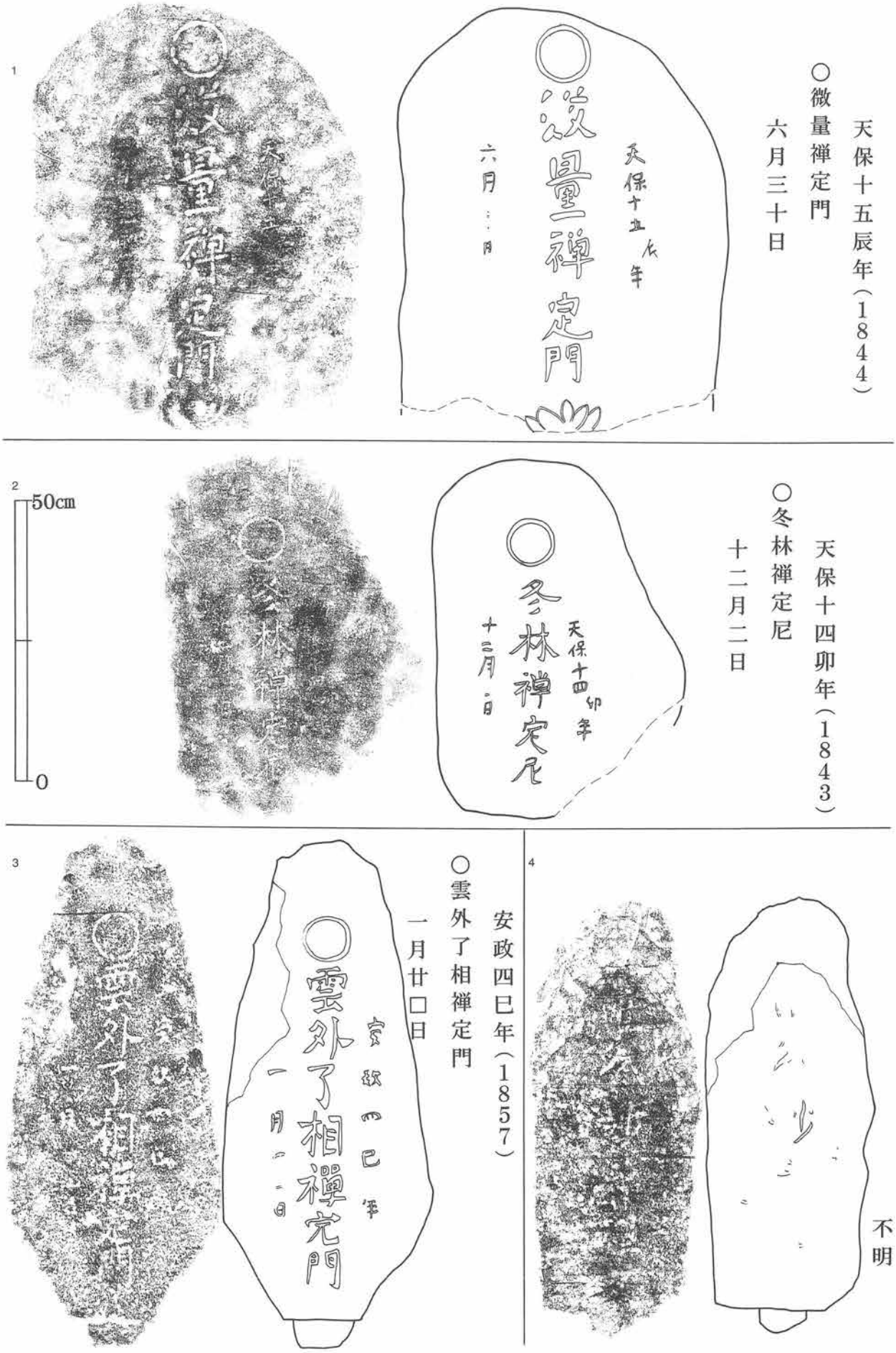
第77図　細田遺跡　金属製品

（8）石　製　品（第78図、写真図版68）

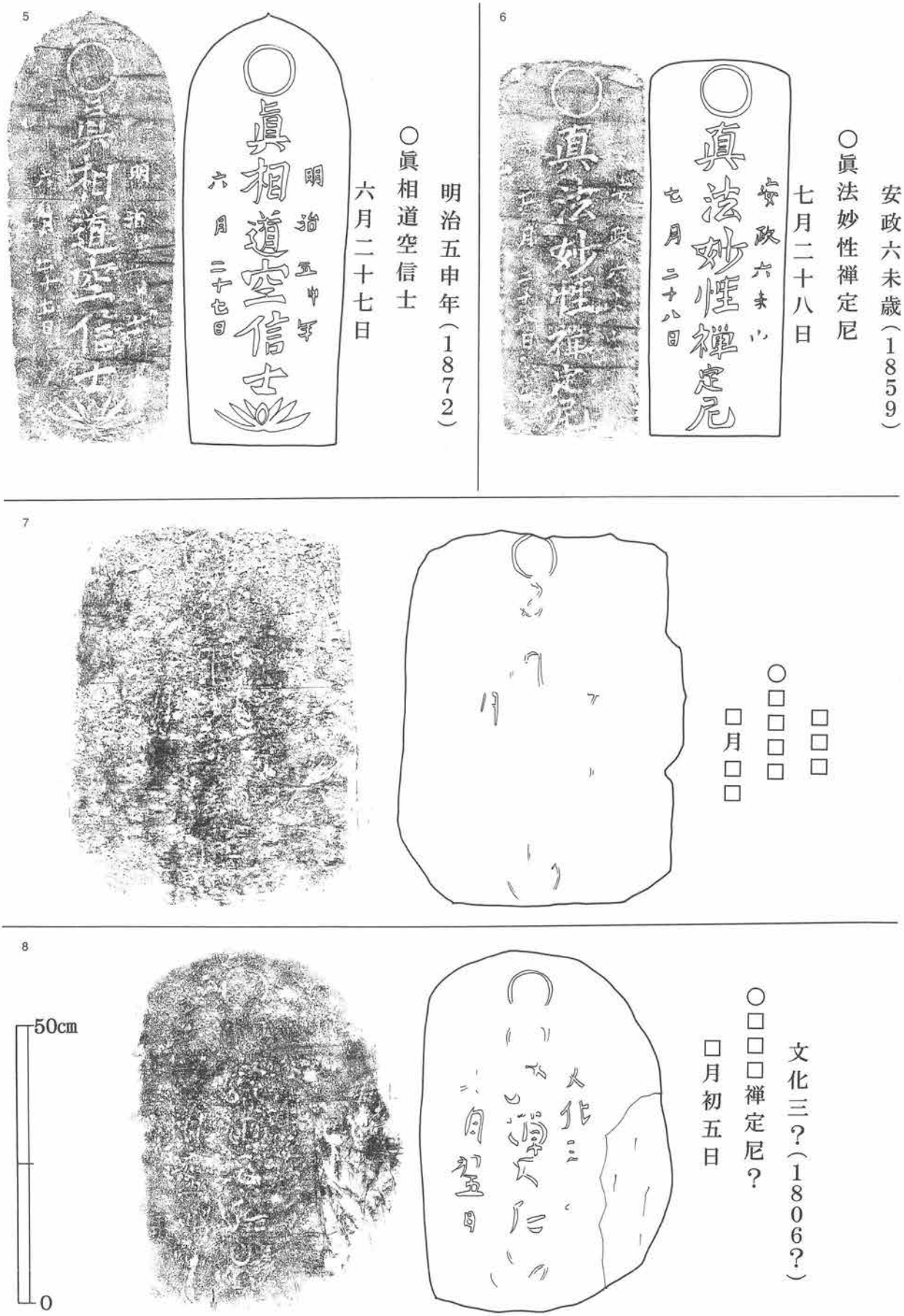
石製品には砥石、硯がある。145～147は硯である。石材はいずれも凝灰岩である。所属時期は不明である。148は硯から剥がれ落ちた剥片と推測される。表面には擦痕、背面は剥離面になっている。所属時期は不明である。石材は頁岩である。149・150は硯で、石材は共に粘板岩である。149の両側面には「佐藤宮三」の名が刻まれる。近代以降のものである。150は使い込まれ、陸部が大きく窪んでいる。所属時期は近世以降のものである。



第78図　細田遺跡　石製品



第79図　細田遺跡　近世の墓石①



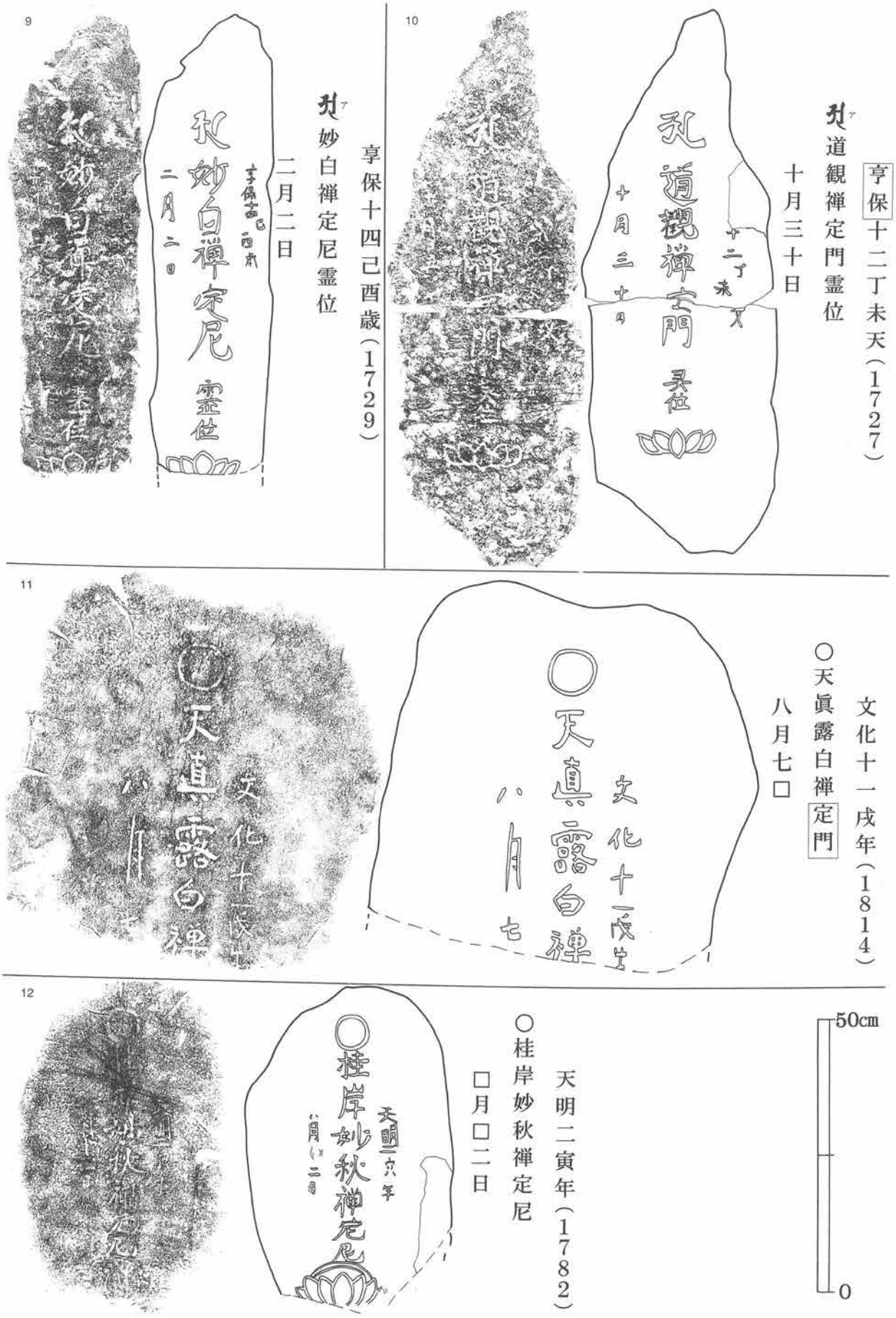
明治五申年（1872）
○眞相道空信士
六月二十七日

安政六未歳（1859）
○眞法妙性禪定尼
七月二十八日

□□□
○□□□□
□月□□

文化三？（1806？）
○□□□禪定尼？
□月初五日

第80図　細田遺跡　近世の墓石②



第81図　細田遺跡　近世の墓石③

○頭覚了禅禅定門
七月七日

（1785）
天明五巳年

○端相了然禅定尼
二月初三日

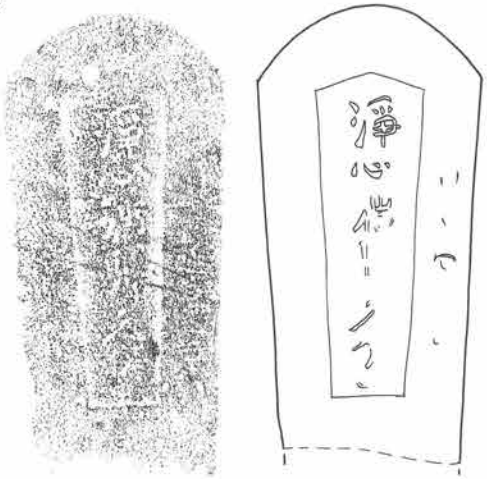
安永二巳年（1773）

○香林禅定尼
七月十三日

宝暦十三未天（1763）

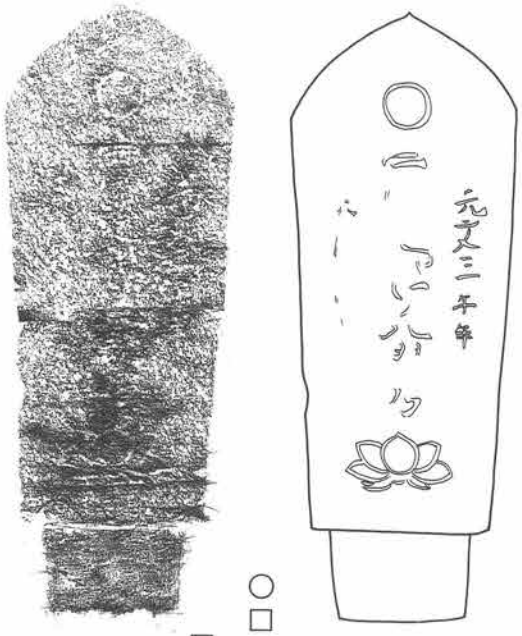
第82図　細田遺跡　近世の墓石④

16



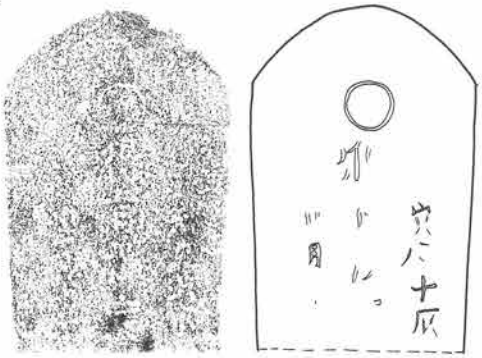
○浄心□□□□
□□□□
□□□□

17



○□□□□□□
□□□□
元文三午年
（1738）

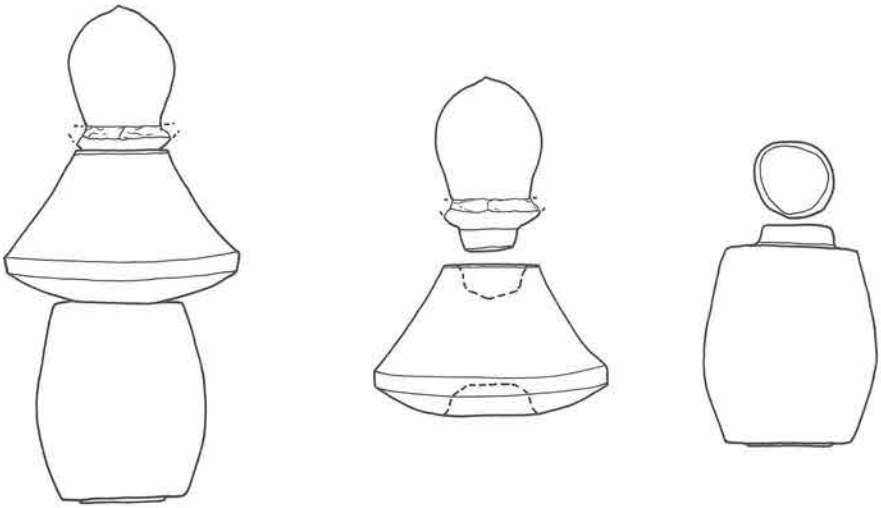
18



○□□□□□□□
寶暦十辰？
（1760？）
□月□□

0　50cm

19



第83図　細田遺跡　近世の墓石⑤

（9）墓　　石（第79～83図）

調査範囲の北側隣接区に六日市場屋敷佐藤家の墓石が存在する。ここではこれらの墓石について報告する。この場所は、明治時代に公葬墓が設置される以前の佐藤家の墓所であった。現在、墓石18基、五輪塔１基が所在する。１から15は西から東に一列に並んでおり、佐藤家の先祖の墓石として認識し供養しているものという。16・17・18の３基は一列に並ぶ墓石群からやや離れ、北東側後方にまとまっている。また、19の五輪塔は16～18とも離れ、１～15の後方（北側）に単独で存在する。

墓石の中で最新は５の明治５（1872）年最古は10の享保12（1727）年で、年号の解読不明の墓石もこの間に納まると推測される。19の五輪塔には、年号、戒名等が刻まれておらず、年代の推測が困難である。おそらく近世に属すると思われるが、近隣の五輪塔の形態等を調査しなければはっきりしたことは言えない。なお、この五輪塔は地輪を欠損しており、コンクリートブロックをその代用として用いている。各々の墓石の戒名・年号等の釈文は図に付してあるので、参照されたい。

細田遺跡　縄文土器観察表

No.	種別	出土位置	備考	重量(g)
1	深鉢	重機掘削時	口縁部片　単節LR縄文　口縁部無文　磨耗著しい　縄文時代後期？	16.8
2	深鉢	表採	体部破片　単節LR縄文　磨耗著しい　縄文時代後期？	42.9
3	壺	重機掘削時	体部破片　単節LR縄文　沈線文　磨耗著しい　縄文時代後期？	27.0

細田遺跡　石器観察表

No.	出土位置	器種	法量(cm)			重量(g)	石質	備考
			長さ	幅	厚さ			
4	VN8b	石鏃	2.4	1.2	0.3	0.7	頁岩　奥羽山脈	柄部欠損
5	P549	石鏃	2.6	1.2	0.5	1.4	頁岩　奥羽山脈	抉りがある
6	VN4f	石鏃	3.1	1.5	0.3	1.2	頁岩　奥羽山脈	抉りが浅い
7	遺構検出時	石匙	5.9	5.0	0.9	30.1	頁岩　奥羽山脈	完存品

細田遺跡　かわらけ（ロクロ・手づくね）観察表

No.	規格	種別	出土位置	法量（cm）			残存率(%)	重量(g)	色調	備考
				口径	器高	底径				
8	小	ロクロ	SK14埋土P1	8.4	1.7	5.8	90	50.5	橙	胎土砂粒、海綿状骨針多量混入
9	小	ロクロ	SK14埋土P5	9.2	1.8	7.8	100	89.6	橙	胎土砂粒、海綿状骨針多量混入　底径が著しく大きい　すのこ痕
10	大	ロクロ	SK14埋土P2	14.6	4.7	6.8	85	240.0	にぶい橙	胎土砂粒、海綿状骨針多量混入　すのこ痕
11	小	D3	SK14埋土P3	9.2	1.7	—	100	52.7	浅黄橙	全体ややゆがんでいる　内底面ハケメ状の調整顕著
12	小	C3	SK14埋土P1、P2	9.2	1.9	—	100	61.5	浅黄橙	胎土に海綿状骨針混入する　すのこ痕
13	小	C3	SK14埋土P6	8.6	1.6	—	95	54.2	灰白	全体ややゆがんでいる　磨耗している
14	大	C4	SD4埋土P1	14.0	2.2	—	80	140.1	浅黄橙	全体磨耗している　すのこ痕
15	大	C3	SD4埋土	12.3	2.7	—	10	18.3	灰白	全体やや磨耗している
16	大	C3	SK24埋土	13.1	2.5	—	16	28.2	浅黄橙	胎土に海綿状骨針わずかに混入する
17	小	D3	P754埋土	8.5	1.5	—	24	14.8	にぶい黄橙	全体磨耗している
18	大	D3	VINoh検出時	13.5	2.3	—	12	21.4	浅黄橙	すのこ痕
19	大	D3	重機掘削時	13.2	2.8	—	81	142.0	浅黄橙	内底面布？による調整　すのこ痕

細田遺跡　12世紀の国産陶器観察表

No.	種　別	器種	部位	出土位置		年代など	重量(g)	備　考
20	常滑	片口鉢	底～体部下半	P91埋土	暗灰黄	12世紀	83.9	内面磨耗
21	常滑	片口鉢	体部	重機掘削時	灰白	12世紀	73.3	内面自然釉　外面下端にヘラケズリ
22	常滑	片口鉢	体部下半	VF8f検出時	灰白	12世紀	23.4	内面自然釉
23	常滑	広口壺	肩部	VM5f木根付近	灰オリーブ	12世紀	70.1	外面自然釉　押印がみられない
24	常滑	広口壺？	肩部	村道北側整地層上	灰オリーブ	12世紀	10.5	外面自然釉
25	常滑	甕	体部下半	P244埋土	暗赤褐	12世紀	121.9	押印がない部位の破片
26	常滑	甕	体部下半	P788埋土	にぶい褐	12世紀	10.5	広口壺の可能性あり
27	常滑	甕	体部下半	SK16埋土	にぶい褐	12世紀	13.6	押印？がある
28	常滑	甕	体部下半	SD8埋土	にぶい赤褐	12世紀	15.3	摩滅した破片
29	常滑	甕	体部下半	VM5h木根付近	灰褐	12世紀	128.5	外面ハケメ状の調整
30	常滑	甕	体部下半	VM5h木根付近	灰褐	12世紀	57.1	29、31～33と同一個体
31	常滑	甕	体部下半	VM6i木根付近	灰褐	12世紀	30.9	接待館遺跡出土片に同一個体片あり
32	常滑	甕	体部下半	VM5f木根付近	褐	12世紀	35.2	押印がある破片
33	常滑	甕	体部下半	VM4i検出時	灰褐	12世紀	23.7	押印がある破片
34	渥美	片口鉢	体部下半	SK29埋土	灰	12世紀	14.0	底辺部の破片と思われる
35	渥美	片口鉢	体部	P61埋土	灰	12世紀	8.6	砂っぽい胎土で渥美と思われる
36	渥美	甕	体部中央	重機掘削時	灰	12世紀	69.9	押印がある破片
37	渥美	甕	肩～口縁	重機掘削時	暗灰黄	12世紀	196.5	細田遺跡60と同一個体
38	渥美	甕	体部下半	SK24埋土	灰褐	12世紀	141.3	内面炭化物付着
39	渥美	甕	体部下半	VM5i検出時	灰黄褐	12世紀	16.0	押印がある破片
40	須恵器系	片口鉢	体部	P771埋土	灰	12世紀	9.0	胎土、質感から須恵器系陶器と思われる

細田遺跡　12世紀・中世陶磁器観察表

No.	種　別	器　種	出土位置	法量(cm)			釉など	産　地	年　代	備　考
				口径	器高	底径				
41	白磁	壺	VO6i検出時	—	(1.1)	—	白磁　大宰府Ⅲ類	中国	12C	白磁四耳壺か
42	青磁	碗	SK6埋土2層	—	(1.7)	—	青磁　劃花文	中国(竜泉)	12C	内面に劃花文
43	青磁	小碗	SK29埋土	7.7	(2.0)	—	青磁	中国	14C	緑青色の釉
44	白磁	皿	P532埋土	—	(1.3)	4.8	白磁	中国	16C	端反皿か
45	染付	皿	SD8埋土	—	(0.6)	—	染付	中国	16C	染付が滲んでいる
46	陶器	皿	SD8埋土	—	(1.1)	—	灰釉	瀬戸・美濃	16C	胎土灰色　大窯4期か
47	陶器	皿	P532埋土	—	(1.3)	—	灰釉	瀬戸・美濃	16C	胎土灰色　大窯2期か

細田遺跡　近世陶磁器観察表

No.	種別	器　種	出土位置	法量(cm)			釉など	産　地	年　代	備　考
				口径	器高	底径				
48	陶器	碗	VN5e検出時	—	(2.5)	4.6	透明釉	肥前	18C前	呉器手碗
49	陶器	碗	VN7dかくらん	—	(2.2)	—	褐釉	瀬戸・美濃	18C	尾呂茶碗？
50	陶器	碗	重機掘削時	—	(1.4)	4.4	長石釉	瀬戸・美濃	18C	御室碗？
51	陶器	碗	SK5埋土	—	(2.5)	—	灰、褐釉	瀬戸・美濃	18C後	鎧茶碗
52	陶器	碗	SD7埋土(VM6i)	11.9	5.0	4.6	刷毛目、灰釉	瀬戸・美濃	19C前	下地に白土で牡丹文
53	陶器	碗	かくらん中	—	(3.1)	4.5	刷毛目、灰釉	瀬戸・美濃	19C前	下地に白土で牡丹文
54	陶器	碗	重機掘削時	—	(1.9)	—	灰釉	瀬戸・美濃	19C前	胎土灰色
55	陶器	碗	SD7埋土(VM6i)	—	(2.0)	4.3	灰釉	瀬戸・美濃	19C前	高台内にも施釉
56	陶器	小碗	VN6aかくらん	6.6	(3.1)	—	灰釉	瀬戸・美濃	18C後～19C前	57とは別個体
57	陶器	小碗	VN6aかくらん	6.2	(2.3)	—	灰釉	瀬戸・美濃	18C後～19C前	胎土黄褐色
58	陶器	碗	かくらん中	—	(2.3)	4.0	灰釉	大堀相馬	18C	灰釉丸碗
59	陶器	碗	重機掘削時	—	(1.4)	4.4	灰釉	大堀相馬	18C	灰釉丸碗
60	陶器	碗	VN3bかくらん	10.2	(4.2)	—	灰、鉄釉	大堀相馬	18C	外面上部内面灰釉
61	陶器	碗	VN7dかくらん	—	(3.4)	—	灰、鉄釉	大堀相馬	18C	外面上部内面灰釉
62	陶器	碗	VM4f木根付近	—	(2.4)	4.8	灰、鉄釉	大堀相馬	18C	高台内鉄釉
63	陶器	小碗	VN3bかくらん	—	(1.1)	2.4	藁灰釉	大堀相馬	19C前	高台内無釉
64	陶器	碗	VN5a検出時	11.8	(1.9)	—	藁灰釉	大堀相馬	19C前	胎土灰色
65	陶器	碗	VN3bかくらん	11.1	(2.1)	—	藁灰釉	大堀相馬	19C前	端反り碗
66	陶器	碗蓋	重機掘削時	—	(1.3)	3.2	鉄絵、灰釉	大堀相馬	19C前	鉄絵は下絵
67	陶器	皿	VN5a検出時	—	(1.7)	—	銅緑釉	肥前	18C	胎土灰色
68	陶器	皿	SD8埋土	—	(2.2)	—	銅緑釉	肥前	18C	胎土黄褐色
69	陶器	皿	SD8埋土	—	(4.8)	—	灰釉	瀬戸・美濃	18C	折縁皿、見込釉剥
70	陶器	皿	VN3bかくらん	—	(1.5)	—	染付、透明釉	瀬戸・美濃	18C末	陶胎染付皿
71	陶器	皿	VN3bかくらん	11.6	(2.1)	—	藁灰釉	大堀相馬	19C前	胎土灰色
72	陶器	香炉	VO4eかくらん	11.8	(2.9)	—	褐釉	瀬戸・美濃	18C後	外面横走沈線
73	陶器	香炉	SD7埋土(VM6i)	9.7	(3.5)	—	鉄絵、灰釉	瀬戸・美濃	18C後	体部にくぼみ
74	陶器	香炉	重機掘削時	10.4	6.1	6.2	深緑の釉	在地	19C	足は3足と推定
75	陶器	香炉	SB5(P581掘方)	11.1	(3.5)	—	鉄釉	在地	19C	内面施釉
76	陶器	灯明具	VN4eかくらん	10.4	(0.7)	—	灰釉	瀬戸・美濃	18C？	灯明具の皿部破片？
77	陶器	仏飯器	VN6dかくらん	—	(4.4)	4.4	灰釉	大堀相馬	19C前	底面回転糸切
78	陶器	土瓶	SK5埋土	7.4	(9.6)	—	銅緑釉	大堀相馬	19C前	2破片に分かれる
79	陶器	鉢	SB3(P118柱痕)	—	(2.2)	—	刷毛目、銅緑釉	肥前	18C前	刷毛目鉢
80	陶器	壺	VN3bかくらん	4.5	(0.7)	—	褐釉	在地	19C	小型の壺
81	陶器	壺	VN7dかくらん	10.0	(16.3)	—	褐釉、うのふ釉	瀬戸・美濃	17C後半	有耳壺
82	陶器	蓋	SB32(P424埋土)	4.7(上)	3.5	—	鉄釉(茶色)	在地	19C	黒色の鉄釉流掛
83	陶器	行平鍋	VN4eかくらん	11.8	(2.2)	12.0	灰釉	在地？	19C	外面飛びカンナ
84	陶器	ほうろく	SK5埋土	13.0	(2.9)	—	透明釉	在地	19C	薄い釉薬
85	土器	ほうろく	VN7dかくらん	—	(1.6)	11.6	素焼き	在地	19C	釉が施されていない
86	土器	火入？	VN7dかくらん	7.2	3.3	5.5	素焼き	在地	19C？	胎土橙色を呈する

細田遺跡　近世陶磁器観察表

No.	種別	器　種	出土位置	法量(cm)			釉など	産　地	年　代	備　考
				口径	器高	底径				
88	陶器	擂鉢	VM4j木根付近	—	(3.0)	—	焼締陶器？	在地	19C？	暗赤褐色の色調
89	陶器	擂鉢	VN6aかくらん	21.7	(5.7)	—	鉄釉	在地	19C	茶褐色の色調
90	陶器	擂鉢	VN7dかくらん	28.4	12.9	13.0	鉄釉	在地	19C	VN6aからも出土
91	陶器	擂鉢	VN7dかくらん	30.8	14.8	12.0	鉄釉	在地	19～20C	2破片に分かれる
92	磁器	碗	SB6(P187掘方)	9.4	(3.7)	—	染付	肥前	17C後半	一重網目文
93	磁器	碗	重機掘削時	—	(3.9)	4.7	染付	肥前	17C前半	畳付に砂粒付着
94	磁器	碗	SK16埋土	—	(3.3)	2.9	染付	肥前	1690～1780	二重網目文
95	磁器	碗	SB30(P472埋土)	—	(1.9)	4.0	染付	肥前	1690～1780	草花文
96	磁器	碗	VN6c検出時	10.0	(4.4)	—	染付	肥前	1690～1780	見込蛇の目釉剥ぎ
97	磁器	碗	重機掘削時	11.0	(3.8)	—	染付	肥前	1690～1780	草花文
98	磁器	碗	SB30(P398埋土)	—	(2.1)	—	染付	肥前	1690～1780	草花文
99	磁器	碗	VN6aかくらん	—	(1.9)	—	染付	肥前	1690～1780	松の文様
100	磁器	碗	重機掘削時	8.3	(5.2)	—	染付	肥前	18C後半～19C初	筒型碗
101	磁器	碗	VO3i検出時	8.3	(3.1)	—	染付	肥前	18C後半～19C初	筒型碗
102	磁器	碗	SB8(P321埋土)	—	(4.1)	—	染付	肥前	18C後半～19C初	焼き継ぎ痕
103	磁器	碗蓋	重機掘削時	3.8(上)	(2.5)	—	染付、青磁釉	肥前	18C後半～19C初	外面青磁釉
104	磁器	碗蓋	重機掘削時	4.4(上)	(1.6)	—	染付	肥前	18C後半～19C初	松竹梅の文様
105	磁器	碗蓋	SD8埋土	—	(1.1)	10.4(下)	染付	肥前	18C後半～19C初	漆継ぎか？
106	磁器	碗蓋	VM4f木根付近	—	1.9	9.0(下)	染付	肥前	18C後半～19C初	内面文様なし
107	磁器	碗	SK16埋土	—	(2.9)	2.0	染付	瀬戸	19C前半	釉むらがある
108	磁器	碗	重機掘削時	8.2	(5.3)	—	染付	東北地方	19C前半	切込産か？
109	磁器	小杯	VN9C検出時	—	(2.2)	2.6	染付	肥前	1690～1780	「～成」の銘
110	磁器	皿	SB4(P138埋土)	13.1	3.7	4.7	染付	肥前	17C前半	水鳥の文様
111	磁器	皿	VO3a検出時	—	(1.8)	4.2	染付	肥前	17C前半	111と同じ文様
112	磁器	皿	表採	—	(1.1)	4.6	染付	肥前	17C前半	釉むらがある
113	磁器	皿	VN7dかくらん	—	(2.7)	—	染付	肥前	17C前半？	呉須の色青灰色
114	磁器	皿	SB14(P234埋土)	—	(1.0)	—	染付	肥前？	17C前半？	口唇部に染付
115	磁器	皿	SK9埋土	—	(1.4)	—	染付	肥前	1690～1780	磨耗少ない
116	磁器	皿	表採	11.4	3.7	4.0	染付	肥前	1690～1780	見込蛇目釉剥ぎ
117	磁器	皿	VN6c検出時	12.1	3.6	4.0	染付	肥前	1690～1780	見込蛇目釉剥ぎ
118	磁器	皿	重機掘削時	—	(1.8)	5.2	染付	肥前	1690～1780	見込五弁花
119	磁器	皿	VN3e検出	—	(0.6)	5.4	染付	肥前	1690～1780	呉須の色青灰色
120	磁器	皿	重機掘削時	—	(2.1)	—	染付	肥前	1690～1780	なます皿の口縁部片
121	磁器	皿	VN7dかくらん	18.0	(6.0)	—	染付	肥前	1690～1780	2破片に分かれる
122	磁器	皿	表採	—	(0.9)	13.4	染付	肥前	1690～1780	紺色の上手の呉須
123	磁器	皿	SD2埋土	—	(2.6)	—	染付	肥前	1690～1780	凹蛇目高台ではない
124	磁器	皿	SK5埋土	—	(1.3)	—	白磁	東北地方	19C前半	角形の型おこし皿
125	磁器	瓶	VN7dかくらん	—	(3.4)	—	白磁	肥前	1690～1780？	内面無釉
126	磁器	瓶	SD7埋土(VM6i)	—	(3.5)	—	染付	肥前	1690～1780	内面無釉

細田遺跡　金属製品観察表

No.	種　別	出土位置	材質	法量(cm)			重量(g)	備　考	保存処理No.
				長さ	幅	厚さ			
127	刀子？	SD1埋土	鉄	(8.2)	2.5	0.5	60.3	柄部、先端部欠損	1
128	鉄鎌	P690	鉄	(6.7)	1.7	0.5	12.5	柄部、先端部欠損	3
129	釘	SB24(P102埋土)	鉄	8.5	1.5	0.6	30.7	頭部斜めになっている	6
130	釘	P759	鉄	(5.1)	0.8	0.8	11.2	先端部欠損	2
131	釘	SB24(P102埋土)	鉄	(6.3)	0.8	0.7	16.9	頭部欠損	4
132	釘？	SK29埋土	鉄	(3.7)	1.0	0.8	9.0	断面形丸い　釘か否か不明	5
133	釘？	P490	鉄	(4.2)	0.6	0.6	11.8	断面形丸い　釘か否か不明	7
134	煙管	SB11(P255掘方)	銅	(4.3)	0.7		2.1	雁首　柄部火皿欠損	
135	煙管	SK22埋土	銅	(2.8)	1.4		10.0	吸口か？　意図的に切断している	
136	煙管	VO5bかくらん	銅	(6.8)	0.9		6.3	吸口　らうの竹残存	
137	煙管	VN7c検出時	銅	8.7	1.3		14.0	吸口　完存品	
138	匙	SD7埋土(VM5t)	銅	(14.1)	(2.4)	0.1	4.4	匙部欠損　腐食著しい	
139	円盤状	SB8(P589)	鉛	2.1	2.3	0.4	13.4	鉛の円盤　用途不明	
140	鉄滓？	SB18(P155)	鉄滓	1.3	3.1	0.7	4.5	鍛冶滓と思われる	
141	寛永通寶	VM7i検出	銅	2.2	2.2		1.7	銅一文銭　背に「元」　時期18世紀	
142	寛永通寶	VN3b　落ち込み	銅	2.8	2.8		4.1	銅四文銭　　初鋳1768年	
143	寛永通寶？	VH7d	鉄	2.7	2.7		3.8	鉄四文銭か　　幕末期	
144	一銭銅貨	VN4h検出面	銅	2.7	2.7		5.8	龍一銭銅貨　鋳造年読み取れない　明治時代	

細田遺跡　石製品観察表

No.	種　別	出土位置	石　質	その他	重さ(g)
145	砥石	SB24(P160埋土)	凝灰岩　奥羽山脈　新生代第三紀	3面使用	439.2
146	砥石	P391	凝灰岩　奥羽山脈　新生代第三紀	1面使用　下半部欠損	159.8
147	砥石	SD2埋土	凝灰岩　奥羽山脈　新生代第三紀	2面使用　下半部欠損	46.4
148	硯？	SB28(P374埋土)	頁岩　奥羽山脈　新生代第三紀	硯の剥片か？	8.4
149	硯	VN4g覚乱	粘板岩　北上山地　古生代	両側面に「佐藤宮三」と線刻	237.1
150	硯	SK5埋土	粘板岩　北上山地　古生代	海部欠損	360.7

Ⅵ　接待館遺跡

1　検出された遺構

（1）調査区概観

平成17年度の接待館遺跡の野外調査中に、岩手県教育委員会生涯学習文化課より、今後の遺跡の評価を決定する暫定的な措置として、遺構を全掘せず、部分的な調査によって内容を把握するよう調査方法を指導された。そして、次年度（平成18年度）以降の調査再開を前提として、遺構面を保護する措置をとり、調査を中断する旨指示があった。よって、平成17年度の野外調査は未調査部分を多数残したまま、調査を中断したのであった。

その後、岩手河川国道事務所と生涯学習文化課との間で協議が行なわれ、堤防工事のルート変更、調査の凍結、遺跡の保存が決定され、本報告書の刊行の運びになった。よって、ここで記す検出遺構は、平成17年度までに、掘り下げ、精査をおこなった範囲に関してであり、未調査、未掘の遺構・範囲については報告することができない状況である。このように、調査区全体について調査が終了していないため、明らかにし得ない事柄、不明な範囲をかなり含んだ暫定的な報告にならざるを得ない。

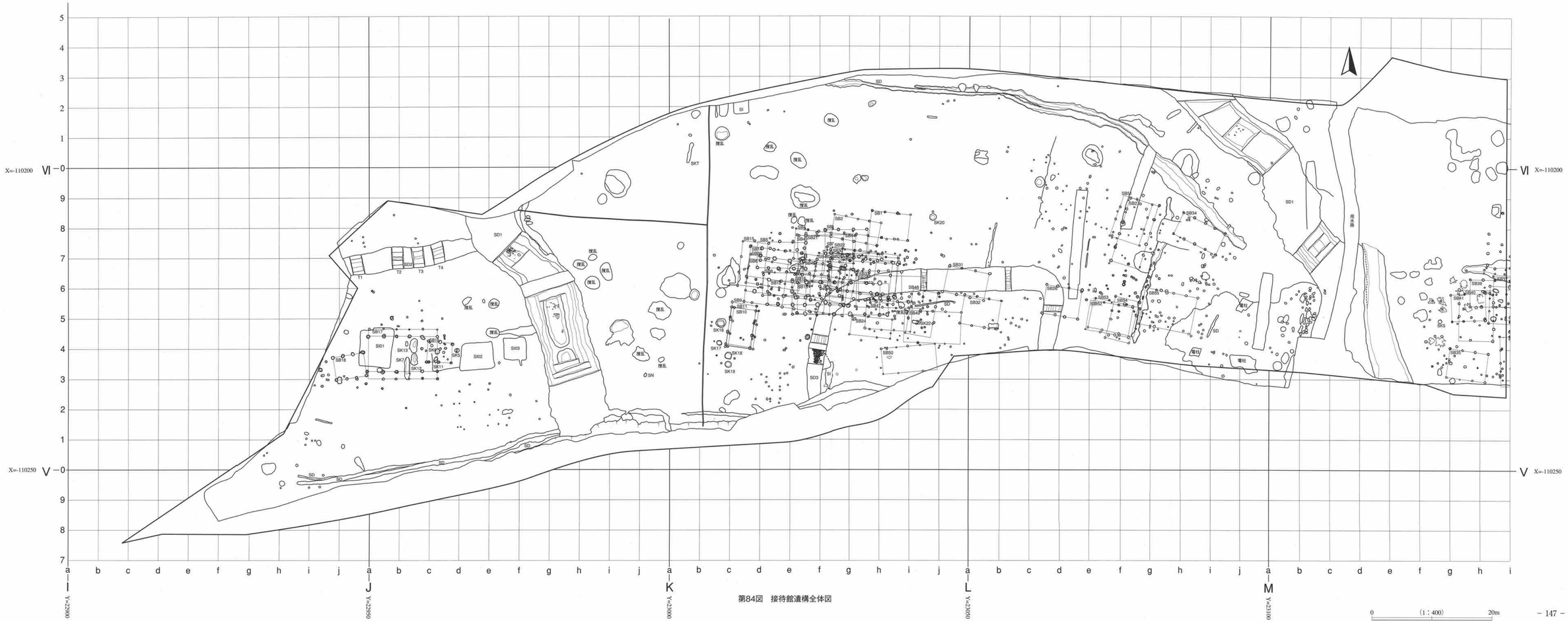
調査範囲は標高約24.5mの概ね平坦な地形で、面積は10,600㎡、幅（南北）約50m、長さ（東西）220mの範囲である。調査区の北側は水田、畑、民家の敷地に接し、西端は畑、水田に接する。南側は西半部が段丘崖の縁に接し、東半部は衣川によって浸食された急崖の縁に面する。この衣川の浸食により失われた遺構がかなり存在すると推測される。東端は隣接する細田遺跡と直接接する。調査区の東部（Ｍｄライン）に用水路が走り、その東脇には昭和20年代まで使用された道路が南北に走っており、この道路ラインが「六日市場」と「七日市場」の字の境界となっている。この字の境界は遺跡の範囲区分には反映されていない。

遺構配置図の用水路南側の東脇に記された長方形のプランは昭和20年代まで使用された道路の検出された部分である。なお、ＶＬ７ｄ、ＶＬ８ｆ、ＶＬ５ｊ、ＶＭ８ｂグリッド付近にみられる幅約２ｍ、長さ10数個ｍの４箇所の長方形プランは、平成16年度に生涯学習文化が掘削した試掘トレンチの痕跡である。また、Ｋｂライン、Ｖ８ラインに走るＴ字の直線は、農業用水の塩ビ管のパイプラインである。

調査区域内では1204個の柱穴、53棟の掘立柱建物、６条以上の溝、21基以上の土坑、３棟以上の竪穴住居跡が検出されたが、全ての遺構について調査が及んでいるわけではなく、特に土坑状のプランについては名称を付していないものも多く、遺構総数は明確にすることができない。

調査区の東南部ＶＬ４ｊグリッド付近には約25×15mの範囲で黄褐色の土の分布が見られた。人為的な整地層の可能性が想定されるが、精査をおこなっていないので、その性格は不明である。また調査区東側のＶＬ～ＶＭ付近はかわらけ細片を含む黒色土が分布する。これも人為的な整地層の可能性が考えられるが、精査未了であり、その性格は不明である。この範囲には建物に組めない柱穴が多数存在し、整地層を除去すると、さらに柱穴が検出され、掘立柱建物がさらに把握される可能性が高い。

また、大規模な堀ＳＤ１・ＳＤ２・ＳＤ３は部分的なトレンチ調査にとどめ、遺構の大半を掘削していない。よってその全体の構造、遺物出土総量は明らかになっていない。



第84図　接待館遺構全体図

0　(1：400)　20m

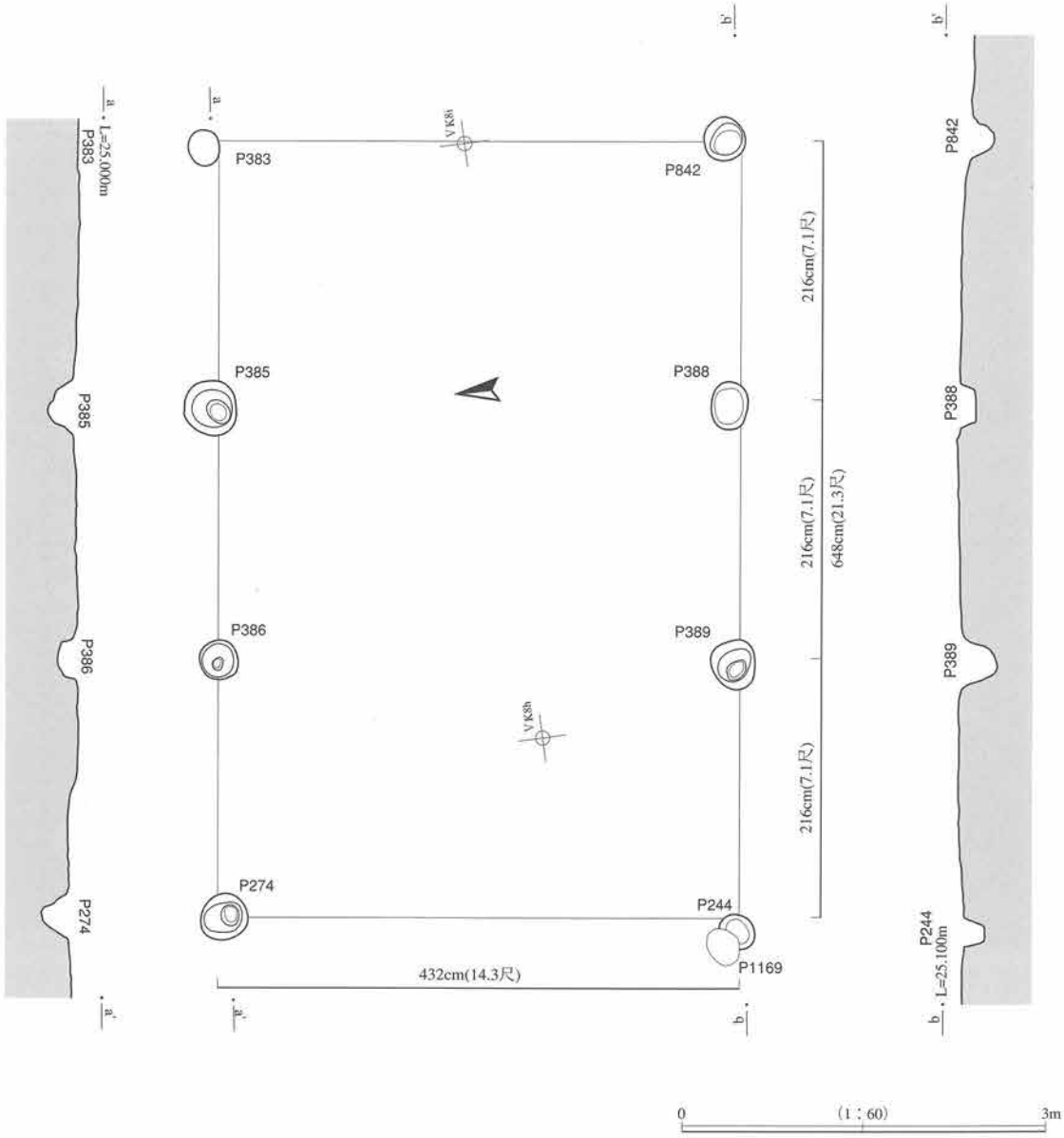
（2）掘立柱建物跡（ＳＢ）

今回の調査で付したＰ番号は1299個であるが、この内95個が柱穴でないと判断した。柱穴でないと判断したもののＰ番号は欠番のままにしている。よって検出した柱穴は1204個である。これらの柱穴から把握した掘立柱建物は53棟（ＳＢ23・ＳＢ42は欠番）である。

なお接待館遺跡の本報告書の調査範囲は調査未了の状況であり、未検出の柱穴の存在も多数予測される。特に調査区東側のＶＬ～ＶＭ付近はかわらけ細片を含む土（人為的な整地層）を除去していない段階での検出あり、この範囲でさらに柱穴が検出され、掘立柱建物がさらに把握される可能性が高い。よってここで報告する掘立柱建物は、平成17年度の調査終了段階で把握したもので、今後の調査でプラン等を変更する可能性を有する暫定的なものと理解していただきたい。

ＳＢ１掘立柱建物跡（第85図、写真図版73・83）

〔位置〕ＶＫ８ｈグリッド付近に位置する。



第85図　接待館遺跡　SB１

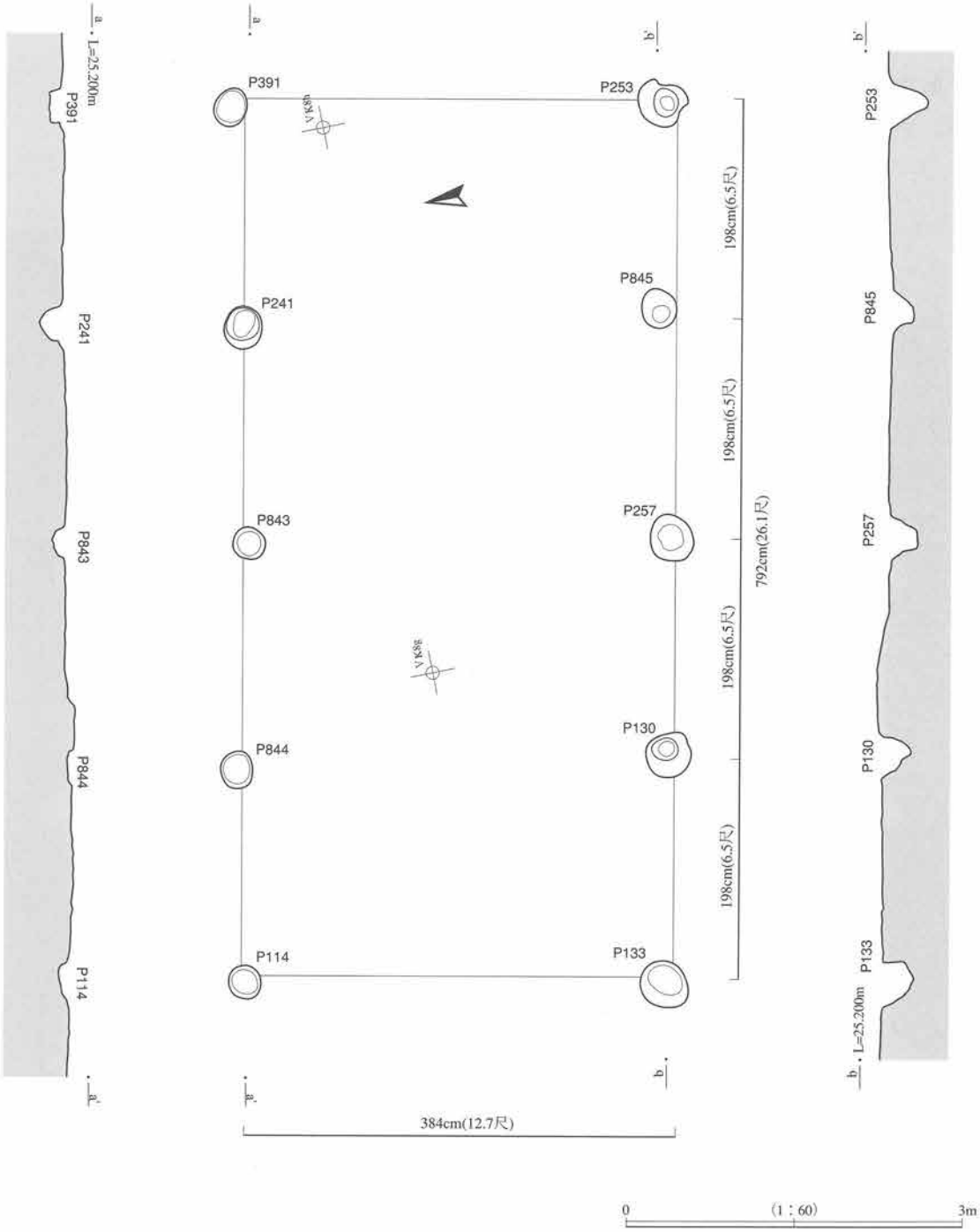
〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ274・386・385・383、Ｐ244・389・388・842）を使用した。柱痕跡はＰ385・Ｐ386・Ｐ274・Ｐ389でも検出で確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ244がＳＢ44のＰ1169に切られ、本建物はＳＢ44より古い。ＳＢ２とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－96°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き648cm（21.3尺）、梁間432cm（14.3尺）で、面積は27.99㎡（8.46坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、648：432＝３：２である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて216cm（7.1尺）である。216cmを６で割った36cmを用いて



第86図　接待館遺跡　SB２

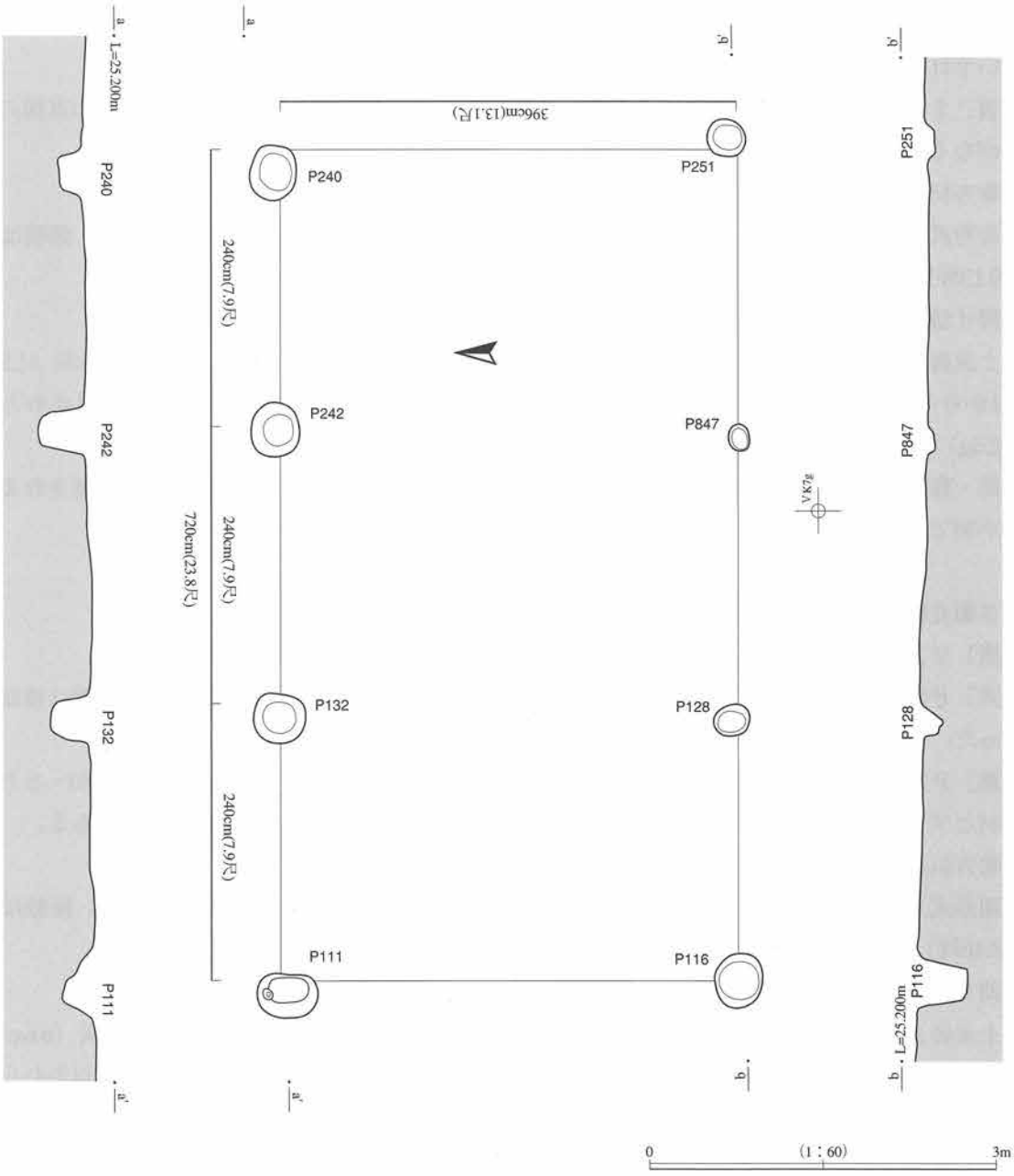
１尺′＝36cmと定めると、216cm＝６尺′で、桁行きの648cm＝18尺′、梁間の432cm＝12尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な１尺（30.3cm）を用いず、１尺′＝36cmを基準寸法とした可能性が考えられる。
〔出土遺物〕Ｐ244から手づくねかわらけ７片（11.5g）・ロクロかわらけ３片（5.1g）、Ｐ274から手づくねかわらけ４片（22.1g）、Ｐ383から手づくねかわらけ４片（3.5g）、Ｐ386から手づくねかわらけ６片（7.9g）・ロクロかわらけ２片（7.4g）、Ｐ388から鉄片１個（6.1g）・手づくねかわらけ４片（8.0g）、Ｐ389から手づくねかわらけ３片（2.9g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と推測される。性格は不明である。

ＳＢ２掘立柱建物跡（第86図、写真図版73・83）
〔位置〕ＶＫ８ｇグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕10個の柱穴（Ｐ114・844・843・241・391、Ｐ133・130・257・845・253）を使用した。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕ＳＢ１・ＳＢ３・ＳＢ４・ＳＢ43・ＳＢ44とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－100°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き792cm（26.1尺）、梁間384cm（12.7尺）で、面積は30.41㎡（9.19坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、792：384＝33：16である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて198cm（6.5尺）である。
〔出土遺物〕Ｐ133から手づくねかわらけ12片（34.8g）・ロクロかわらけ６片（10.1g）・木炭（1.9g）、Ｐ241から手づくねかわらけ７片（6.2g）・ロクロかわらけ３片（2.4g）、Ｐ391からロクロかわらけ１片（2.3g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と推測される。性格は不明である。

ＳＢ３掘立柱建物跡（第87図、写真図版73・83）
〔位置〕ＶＫ７ｆグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ111・132・242・240、Ｐ116・128・847・251）を使用した。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ111がＰ112を切る。ＳＢ２・ＳＢ４・ＳＢ７・ＳＢ21・ＳＢ22・ＳＢ29・ＳＢ30・ＳＢ43・ＳＢ44とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－89°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き720cm（23.8尺）、梁間396cm（13.1尺）で、面積は28.51㎡（8.46坪）である。桁行きと梁間の長さの比は20：11である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて240cm（7.9尺）である。
〔出土遺物〕Ｐ111からロクロかわらけ大（1245）・手づくねかわらけ５片（12.6g）・木炭（6.6g）、Ｐ116から手づくねかわらけ９片（37.7g）・ロクロかわらけ４片（7.2g）、Ｐ128から手づくねかわらけ５片（5.9g）・ロクロかわらけ１片（0.4g）、Ｐ132から手づくねかわらけ58片（126.1g）・ロクロかわらけ４片（5.8g）、Ｐ240から手づくねかわらけ23片（59.7g）・ロクロかわらけ３片（2.4g）、Ｐ242から

手づくねかわらけ23片（39.4g）、Ｐ847から手づくねかわらけ10片（17.4g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と推測される。性格は不明である。

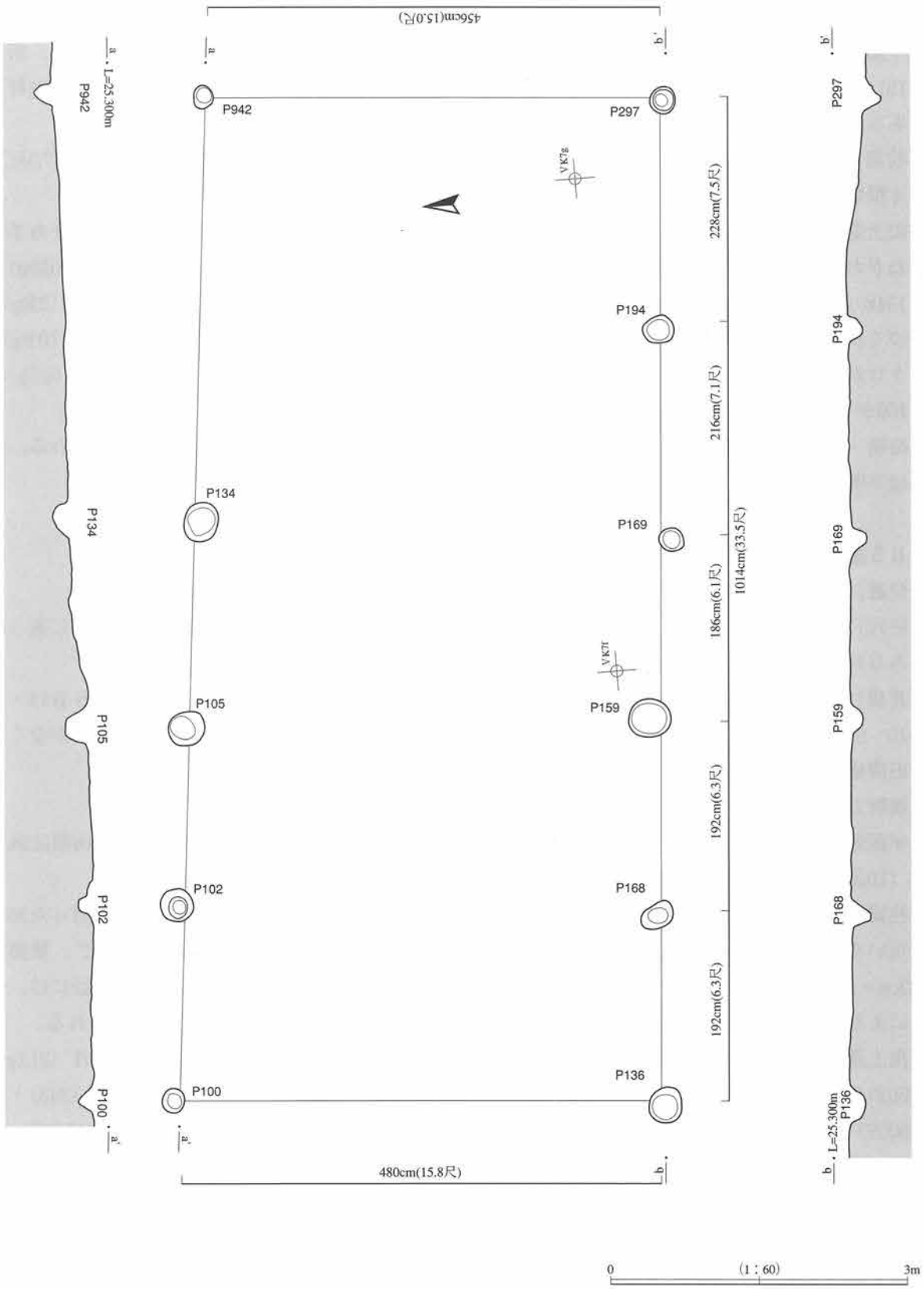
ＳＢ４掘立柱建物跡（第88図、写真図版74・83）
〔位置〕ＶＫ７ｆグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕11個の柱穴（Ｐ100・102・105・134・942、Ｐ136・168・159・169・194・297）を使用した。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕ＳＢ２・ＳＢ３・ＳＢ５・ＳＢ７・ＳＢ14・ＳＢ21・ＳＢ22・ＳＢ28・ＳＢ29・ＳＢ30・ＳＢ43・ＳＢ44・ＳＢ45・ＳＢ46とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。



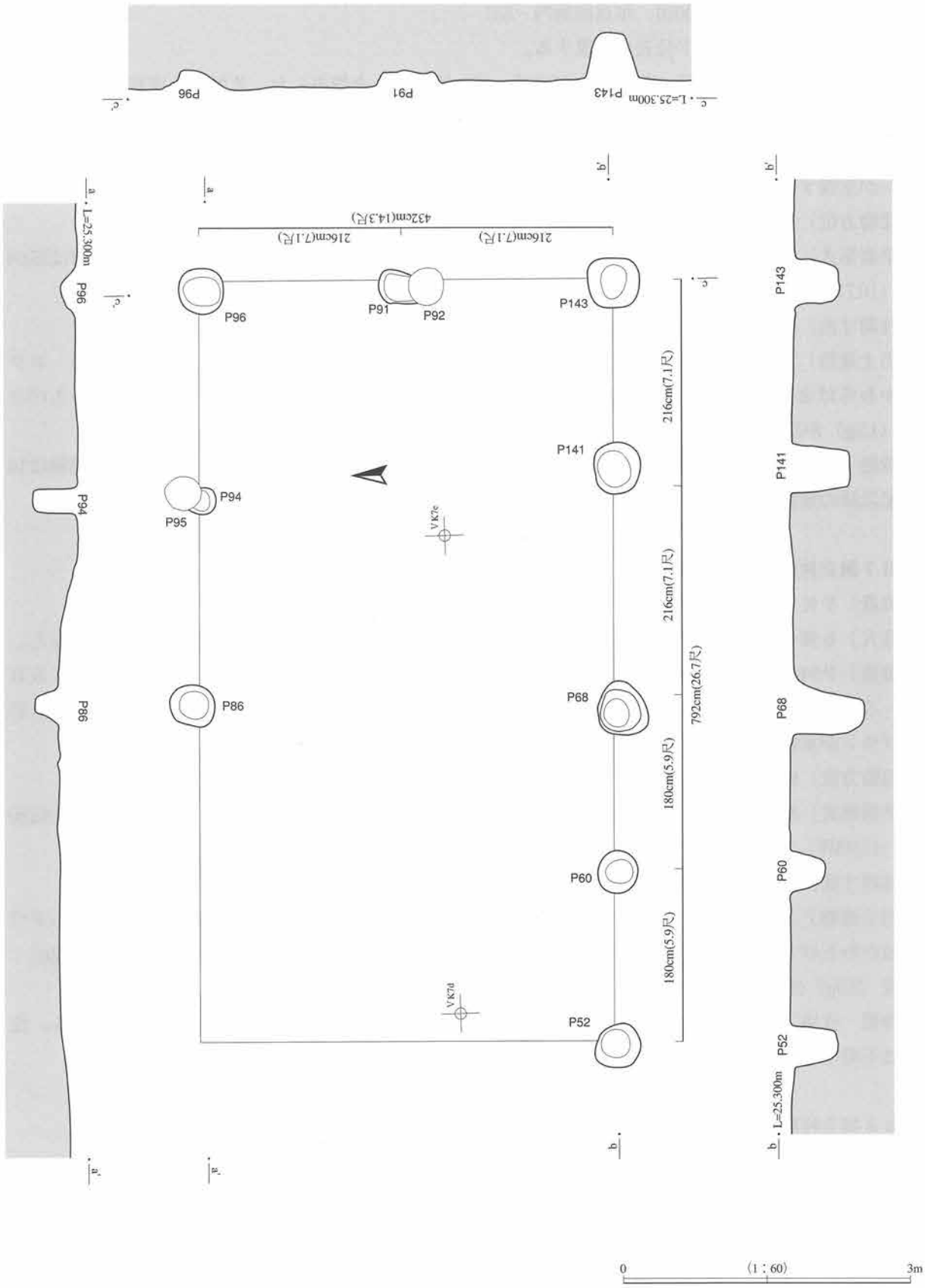
第87図　接待館遺跡　SB３

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、N－95°－Eである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。梁間長が東辺と西辺で異なり、プランは台形となる。規模は、桁行き1014cm（33.5尺）、東辺が456cm（15.0尺）、西辺が480cm（15.8尺）である。面積は47.46㎡（14.34坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、186cm（6.1尺）・192cm（6.3尺）・216cm（7.1尺）・228cm（7.5尺）の４種類で、一定ではない。
〔出土遺物〕Ｐ100から手づくねかわらけ５片（11.2g）・ロクロかわらけ１片（3.9g）、Ｐ102から手づくねかわらけ２片（2.2g）、Ｐ105から手づくねかわらけ８片（5.0g）・ロクロかわらけ１片（0.9g）、Ｐ134から手づくねかわらけ10片（13.4g）・ロクロかわらけ２片（3.1g）、Ｐ136から縄文土器１片（2.8g）・手づくねかわらけ５片（8.4g）・ロクロかわらけ２片（2.8g）、Ｐ159から手づくねかわらけ５片（10.9g）・ロクロかわらけ１片（1.0g）、Ｐ168から手づくねかわらけ７片（13.2g）・ロクロかわらけ５片（8.7g）、Ｐ169から手づくねかわらけ５片（3.6g）、Ｐ942からロクロかわらけ１片（1.2g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と推測される。性格は不明である。

ＳＢ５掘立柱建物跡（第89図、写真図版74・83）
〔位置〕ＶＫ７ｄグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕９個の柱穴（Ｐ86・94・96、Ｐ91、Ｐ52・60・68・141・143）を使用した。北西隅にあったとみられる柱穴は検出できなかった。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ68がＰ958を切る。Ｐ91がＰ92に、Ｐ94がＰ95に切られる。ＳＢ４・ＳＢ６・ＳＢ14・ＳＢ15・ＳＢ20・ＳＢ21・ＳＢ43・ＳＢ45とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、N－91°－Eである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き792cm（26.1尺）、梁間432cm（14.3尺）で、面積は34.21㎡（10.34坪）である。桁行きと梁間の長さの比は11：６である。
〔柱間寸法〕柱間寸法は、180cm（5.9尺）・216cm（7.1尺）の２種類である。216cmを６で割った36cmを用いて１尺′＝36cmと定めると、180cm＝５尺′、216cm＝６尺′で、桁行きの792cm＝22尺′、梁間の432cm＝12尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な１尺（30.3cm）を用いず、１尺′＝36cmを基準寸法とした可能性が考えられる。
〔出土遺物〕Ｐ52から常滑産甕片（2013）・手づくねかわらけ20片（41.5g）・ロクロかわらけ９片（21.1g）、Ｐ60から手づくねかわらけ８片（9.3g）・ロクロかわらけ10片（12.9g）、Ｐ68から至大通寶（343）・釘（5009）・縄文土器２片（34.9g）・手づくねかわらけ22片（76.2g）・ロクロかわらけ７片（15.8g）、Ｐ86から手づくねかわらけ１片（8.0g）・ロクロかわらけ５片（9.8g）、Ｐ91から手づくねかわらけ４片（11.4g）・ロクロかわらけ１片（3.3g）、Ｐ96から手づくねかわらけ26片（90.1g）・ロクロかわらけ５片（8.0g）、Ｐ141から手づくねかわらけ15片（48.8g）・ロクロかわらけ２片（5.0g）、Ｐ143から手づくねかわらけ５片（31.4g）・ロクロかわらけ１片（4.4g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と推測される。またＰ68から元銭の至大通寶（343）が出土しており、初鋳年代の1310年より新しいと判断される。よって本建物は12世紀に属する建物ではない。性格は不明である。



第88図　接待館遺跡　SB４



第89図　接待館遺跡　SB５

ＳＢ６掘立柱建物跡（第90図、写真図版74・83）

〔位置〕ＶＫ６ｄグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ53・56・142、Ｐ932・47・63・65）を使用した。北西隅・南東隅にあったとみられる柱穴は検出できなかった。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕ＳＢ５・ＳＢ８・ＳＢ12・ＳＢ13・ＳＢ14・ＳＢ15・ＳＢ16・ＳＢ20・ＳＢ43・ＳＢ45とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－98°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き900cm（29.7尺）、梁間396cm（13.1尺）で、面積は35.64㎡（10.77坪）である。桁行きと梁間の長さの比は25：11である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、192cm（6.3尺）・324cm（10.7尺）の２種類である。

〔出土遺物〕Ｐ53から瀬戸・美濃産の陶器皿（4009）、Ｐ56から手づくねかわらけ５片（6.1g）・ロクロかわらけ２片（0.7g）、Ｐ932から鉄片（1.5g）・手づくねかわらけ２片（2.9g）・ロクロかわらけ２片（4.5g）が出土した。

〔時期・性格〕Ｐ53から出土した瀬戸・美濃産の陶器皿は16世紀代のものである。よって本建物は16世紀以降の建築と推測される。性格は不明である。

ＳＢ７掘立柱建物跡（第91図）

〔位置〕ＶＫ６ｇグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕６個の柱穴（Ｐ119・256・1170、Ｐ183・944・923）を使用した。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ944がＳＢ13のＰ883に切られる。よって本建物はＳＢ13より古い。ＳＢ３・ＳＢ４・ＳＢ20・ＳＢ21・ＳＢ22・ＳＢ25・ＳＢ28・ＳＢ29・ＳＢ30・ＳＢ33・ＳＢ43・ＳＢ44・ＳＢ45・ＳＢ46とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－100°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き870cm（28.7尺）、梁間492cm（16.2尺）で、面積は42.80㎡（12.93坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、240cm（7.9尺）・390cm（12.9尺）の２種類である。

〔出土遺物〕Ｐ119から手づくねかわらけ２片（1.7g）・ロクロかわらけ２片（3.6g）、Ｐ183から手づくねかわらけ１片（1.7g）、Ｐ923から手づくねかわらけ７片（10.3g）・ロクロかわらけ２片（3.2g）・木炭（2.0g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と推測される。性格は不明である。

ＳＢ８掘立柱建物跡（第92図）

〔位置〕ＶＫ６ｄグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ58・894・157、Ｐ13・８・６・209）を使用した。Ｐ８で柱痕が確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕ＳＢ６・ＳＢ12・ＳＢ13・ＳＢ14・ＳＢ15・ＳＢ16・ＳＢ20・ＳＢ21・ＳＢ45とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－91°－Ｅである。

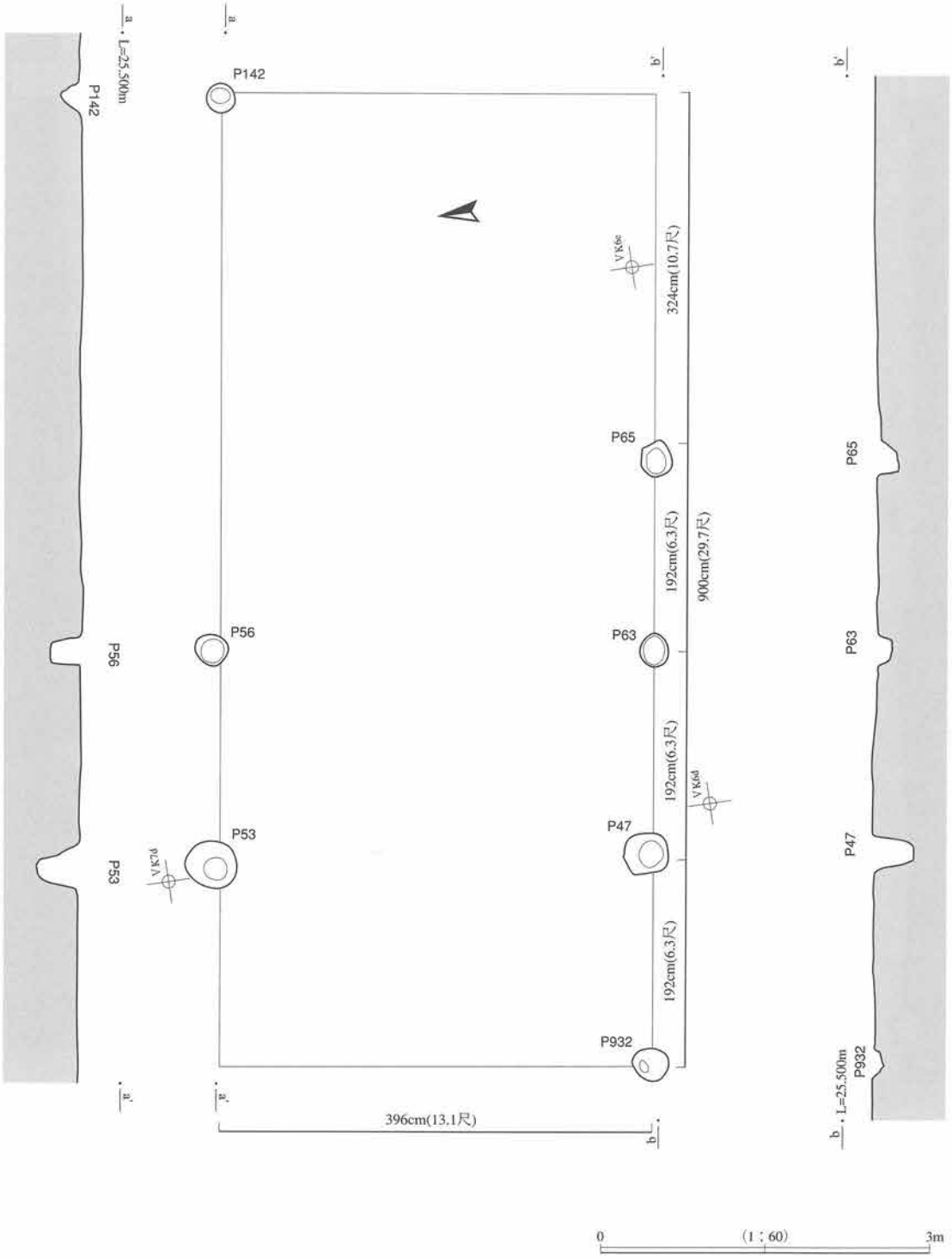
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きの長さが北辺と南辺で異なり、プランは台形となる。規模は、

桁行き786cm（25.9尺）、梁間378cm（12.5尺）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、192cm（6.3尺）・402cm（13.3尺）の２種類である。

〔出土遺物〕Ｐ８から縄文土器２片（3.6g）、Ｐ13から手づくねかわらけ１片（0.9g）・ロクロかわらけ１片（1.7g）、Ｐ58から縄文土器１片（5.5g）・手づくねかわらけ３片（3.7g）、Ｐ157から手づくねかわらけ２片（1.7g）、Ｐ894から鉄片（1.7g）・土師器１片（4.8g）・手づくねかわらけ３片（2.9g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と推測される。性格は不明である。



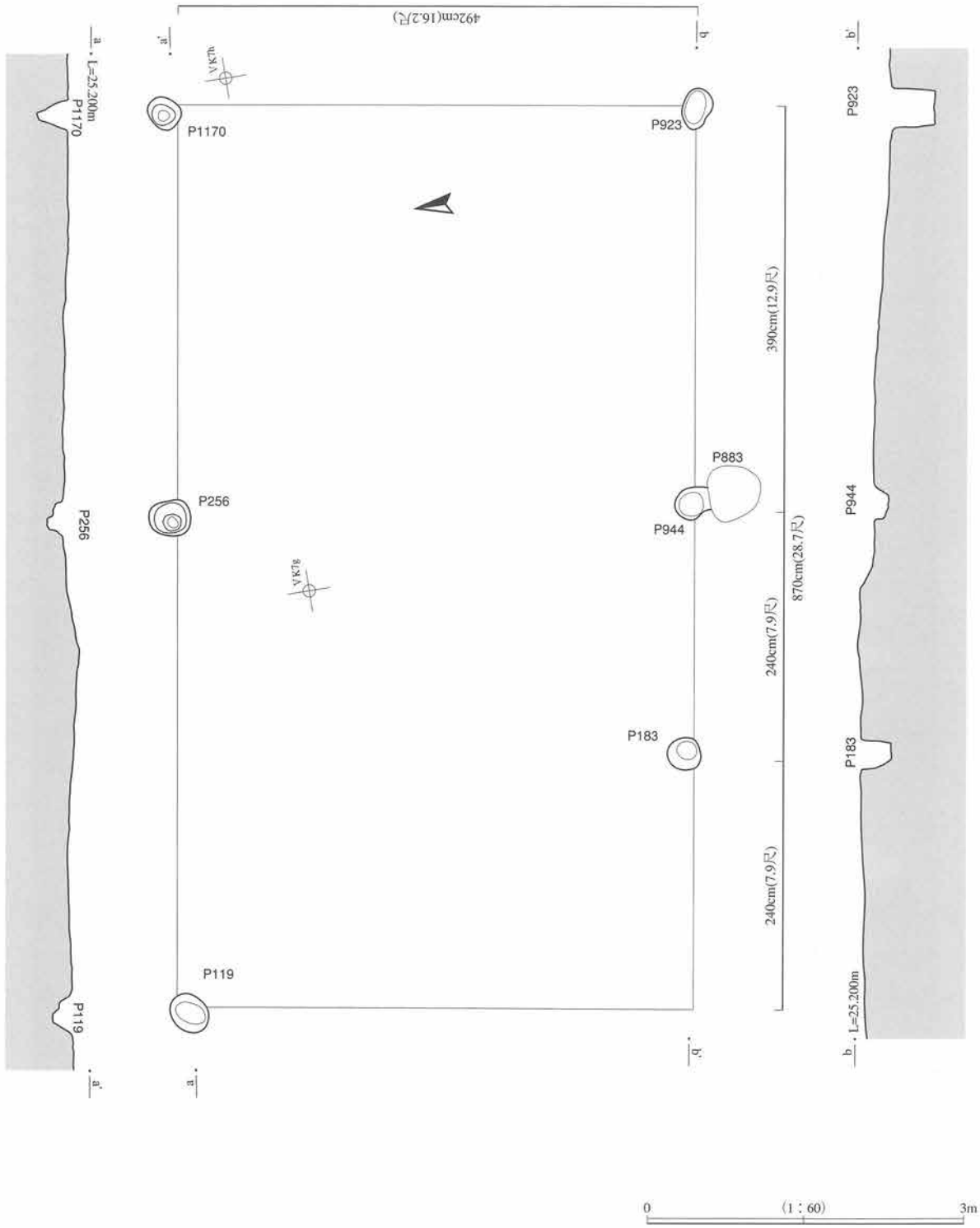
第90図　接待館遺跡　SB６

ＳＢ９掘立柱建物跡（第93図、写真図版75・83）

〔位置〕ＶＫ４ｃグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ16・28・867・865、Ｐ19・22・299・303）を使用した。Ｐ22・Ｐ16・Ｐ28・Ｐ867・Ｐ865で柱痕跡が確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ22がＳＢ10のＰ38、Ｐ299がＳＢ10のＰ300、Ｐ303がＳＢ10のＰ301、Ｐ28がＳＢ10のＰ29を切り、本建物はＳＢ10より新しい。また、ＳＢ11とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。



第91図　接待館遺跡　SB７

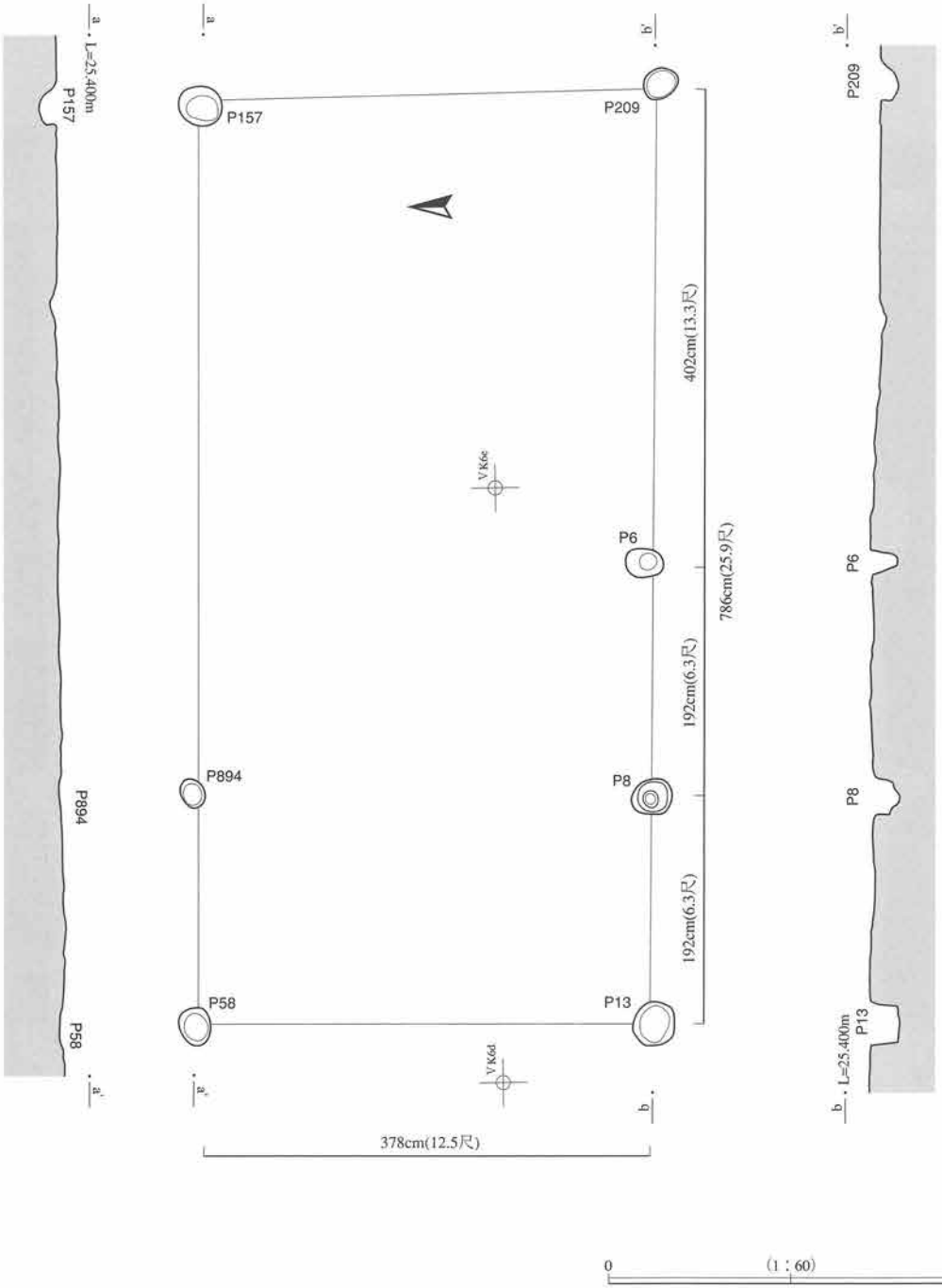
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、N－9°－Eである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き696cm（23.0尺）、梁間414cm（13.7尺）で、面積は28.81㎡（8.71坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、240cm（7.9尺）・216cm（23.0尺）の２種類である。

〔出土遺物〕Ｐ22から縄文土器１片（1.9g）、Ｐ28から刀子（5002）、Ｐ299から焼けた石１個（144.6g）が出土した。

〔時期・性格〕出土遺物から時期を推測することができない。本建物とＳＢ10、ＳＢ11は棟方向が共通し、規模も概ね同じで、ほぼ同一の場所に重複している。この状況から、本建物とＳＢ10、ＳＢ11は同一の性格の建物がほぼ場所を同じくして、建て替えがおこなわれたものと解釈される。



第92図　接待館遺跡　SB８

ＳＢ10掘立柱建物跡（第94図、写真図版75・83）

〔位置〕ＶＫ４ｃグリッド付近に位置する。

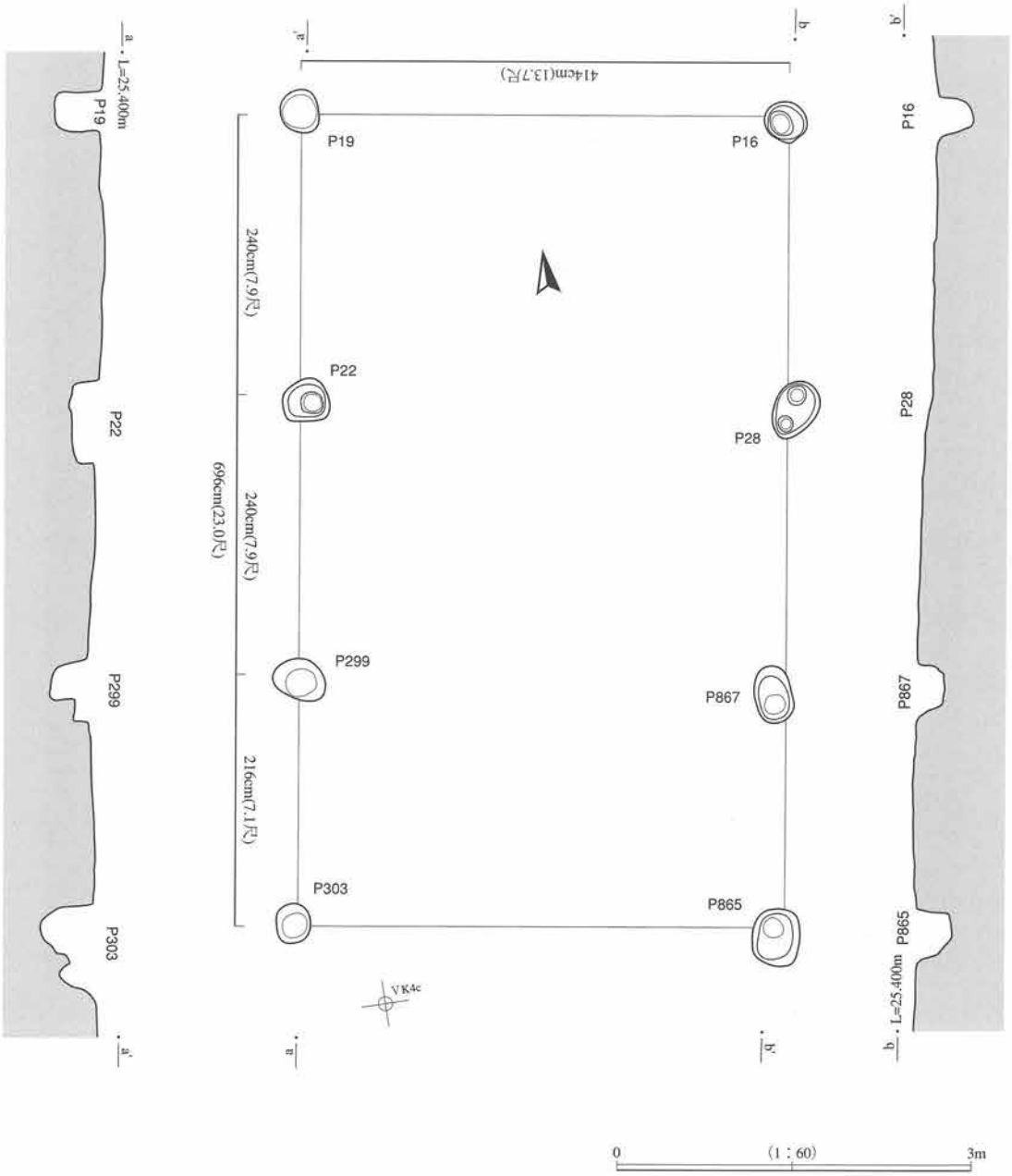
〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ301・300・38・862、Ｐ865・31・29・14）を使用した。Ｐ29・Ｐ31・Ｐ865で柱痕が確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ38がＳＢ９のＰ22、Ｐ300がＳＢ９のＰ299、Ｐ301がＳＢ９のＰ303、Ｐ29がＳＢ９のＰ28を切り、本建物はＳＢ９より古い。また、ＳＢ11とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－８°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き612cm（20.2尺）、梁間408cm（13.5尺）で、面積は24.97㎡（7.54坪）である。桁行きと梁間の長さの比は３：２である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて204cm（6.7尺）である。204cmを６で割った34cmを用いて



第93図　接待館遺跡　SB９

１尺′＝34cmと定めると、204cm＝６尺′で、桁行きの612cm＝18尺′、梁間の408cm＝12尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な１尺（30.3cm）を用いず、１尺′＝34cmを基準寸法とした可能性が考えられる。

〔出土遺物〕Ｐ14から手づくねかわらけ２片（4.2g）、Ｐ29から縄文土器３片（53.8g）が出土した。

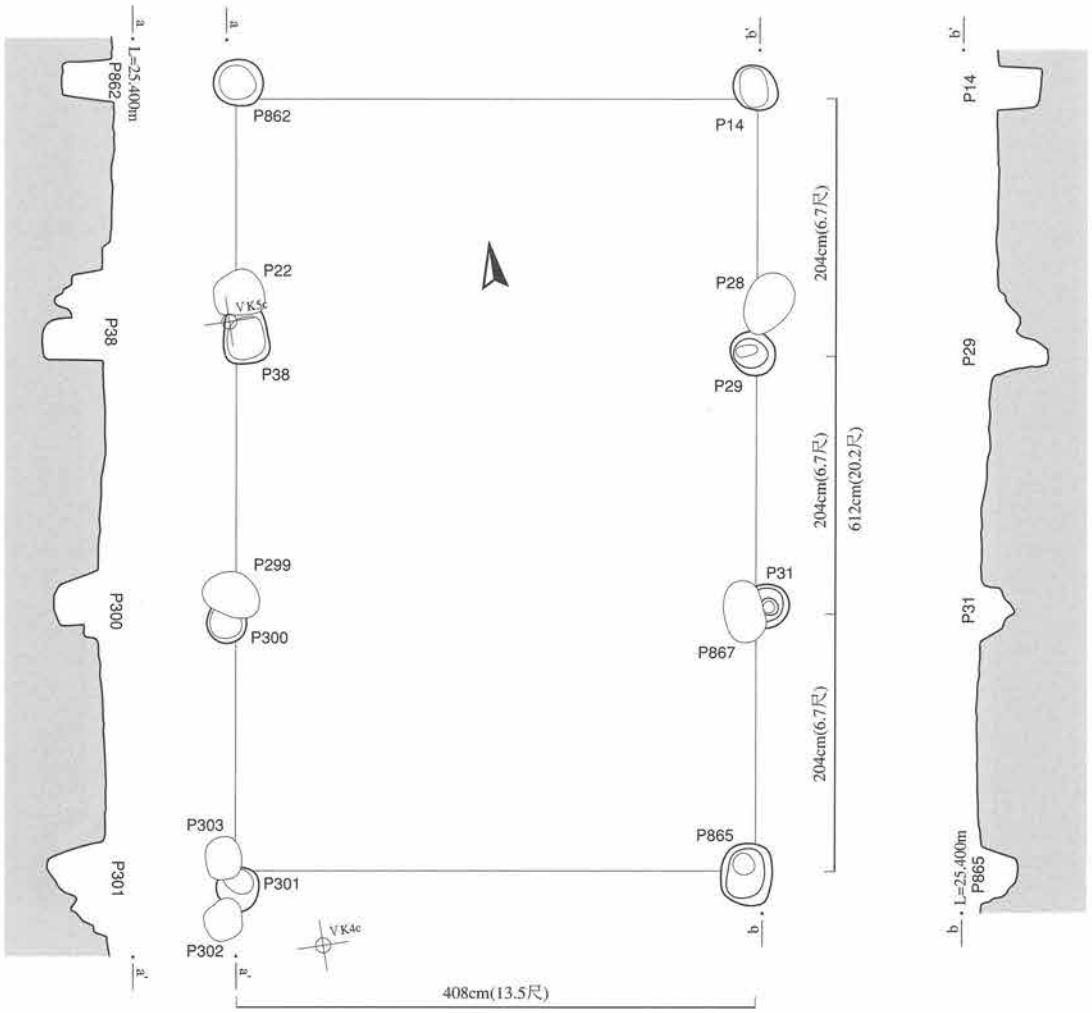
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と推測される。本建物とＳＢ９・ＳＢ11は棟方向が共通し、規模も概ね同じで、ほぼ同一の場所に重複している。この状況から、本建物とＳＢ９・ＳＢ11は同一の性格の建物がほぼ場所を同じくして、建て替えがおこなわれたものと解釈される。

ＳＢ11掘立柱建物跡（第95図、写真図版75・84）

〔位置〕ＶＫ４ｃグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ304・24・23・20、Ｐ864・32・30・15）を使用した。Ｐ24・Ｐ15・Ｐ30・Ｐ32で柱痕が確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕ＳＢ９・ＳＢ10とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不



第94図　接待館遺跡　SB10

明である。

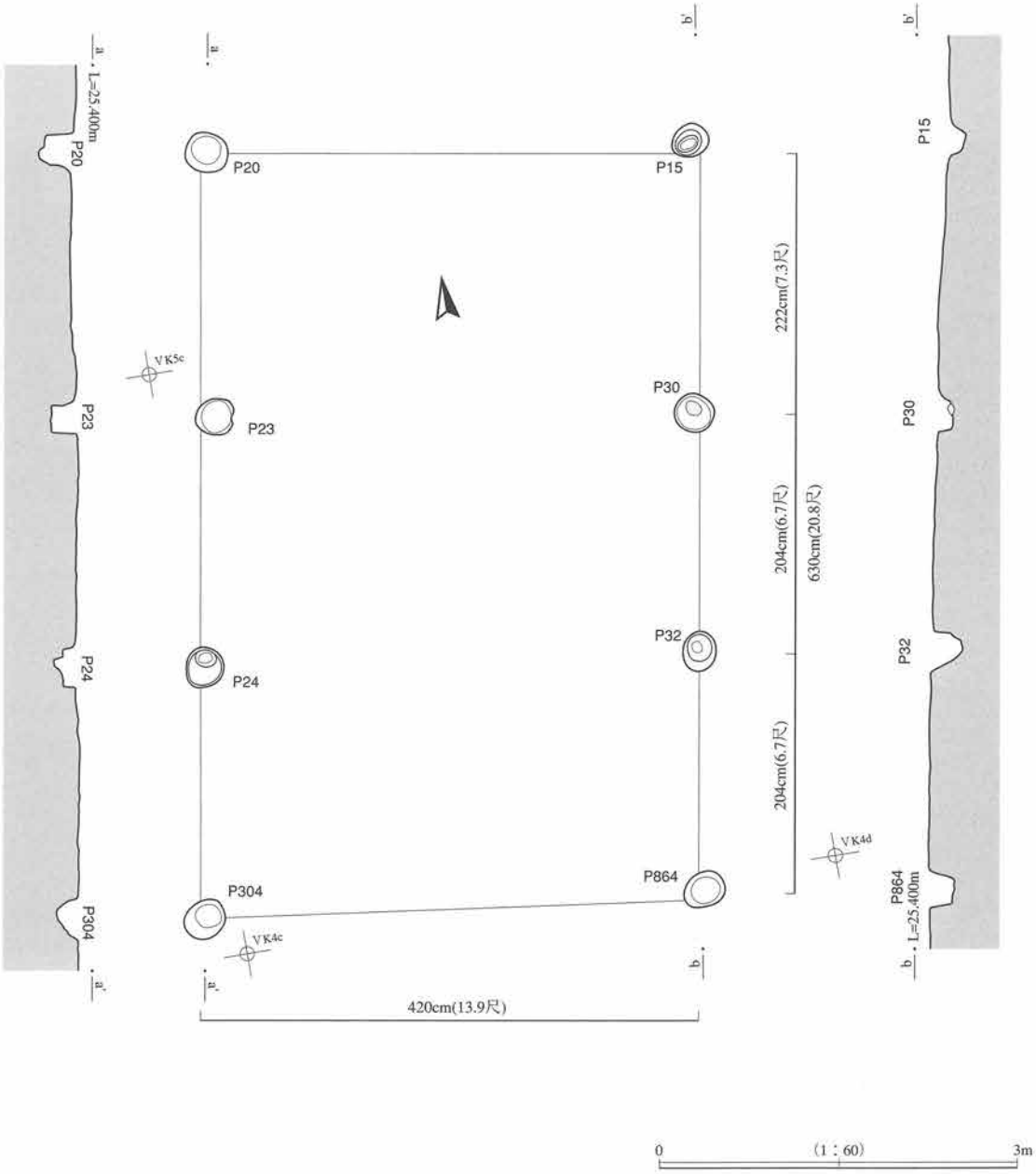
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、N－10°－Eである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きの長さが東辺と西辺で異なり、プランは台形となる。東辺を基準とすると、規模は、桁行き630cm（20.8尺）、梁間420cm（13.9尺）で、桁行きと梁間の長さの比は３：２である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、204cm（6.7尺）・222cm（7.3尺）の２種類である。

〔出土遺物〕Ｐ15から手づくねかわらけ１片（0.9g）、Ｐ23から手づくねかわらけ１片（0.8g）・ロクロかわらけ１片（0.7g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と推測される。本建物とＳＢ９・ＳＢ10は棟方向が共通し、規模も概ね同じで、ほぼ同一の場所に重複している。この状況から、本建物とＳＢ９・ＳＢ10は同一の性格の建物がほぼ場所を同じくして、建て替えがおこなわれたものと解釈される。



第95図　接待館遺跡　SB11

ＳＢ12掘立柱建物跡（第96図、写真図版76・84）

〔位置〕ＶＫ５ｅグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕13個の柱穴（Ｐ62・67・149・167・185、Ｐ10、Ｐ12・３・201・207・219・907・885）を使用した。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ149がＳＢ16の柱穴Ｐ161、Ｐ167がＳＢ13の柱穴Ｐ166を切る。Ｐ149がＳＢ12のＰ160を切る。また、Ｐ885とＰ907がＳＤ３を切る。Ｐ67がＳＢ14のＰ66に切られる。よって本建物はＳＤ３、ＳＢ16、ＳＢ13、ＳＢ45より新しく、ＳＢ14より古い。ＳＢ６・ＳＢ８・ＳＢ20・ＳＢ22・ＳＢ28・ＳＢ29・ＳＢ46とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－91°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きの長さが北辺と南辺で異なり、プランは台形となる。南辺を基準とすると、規模は、桁行き1224cm（40.4尺）、梁間390cm（12.9尺）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、180cm（5.9尺）・192cm（6.3尺）・210cm（6.9尺）・222cm（7.3尺）の４種類で、一定ではない。

〔出土遺物〕Ｐ10から手づくねかわらけ３片（10.7g）、Ｐ12から手づくねかわらけ１片（1.1g）・石１個（11.3g）、Ｐ62から縄文土器２片（16.1g）・手づくねかわらけ22片（42.1g）・ロクロかわらけ13片（38.3g）・石１個（2.1g）、Ｐ149から手づくねかわらけ28片（86.7g）・ロクロかわらけ７片（19.8g）、Ｐ167から手づくねかわらけ33片（57.9g）・ロクロかわらけ11片（40.4g）・木炭0.4g、Ｐ201からロクロかわらけ１片（4.5g）、Ｐ219から手づくねかわらけ１片（1.1g）、Ｐ885からロクロかわらけ１片（2.2g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と推測される。そして、12世紀後半のかわらけを多量に包含するＳＤ３より新しいことから、12世紀よりも新しい建物の可能性が高い。性格は不明であるが、桁が40尺にも及び、かなり大規模であり、単なる付属屋ではなく、何らかの施設の中核的な建物と推測される。

ＳＢ13掘立柱建物跡（第97・98図、写真図版76・84）

〔位置〕ＶＫ５ｆ・ＶＫ５ｇグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕19個の柱穴（Ｐ1168・152・166・182・883・886・912、Ｐ199・931・919・441・458、Ｐ204・206・231・235・268・287・463）を使用した。柱痕跡はＰ883・Ｐ182・Ｐ204で確認された。礎盤は確認されなかった。

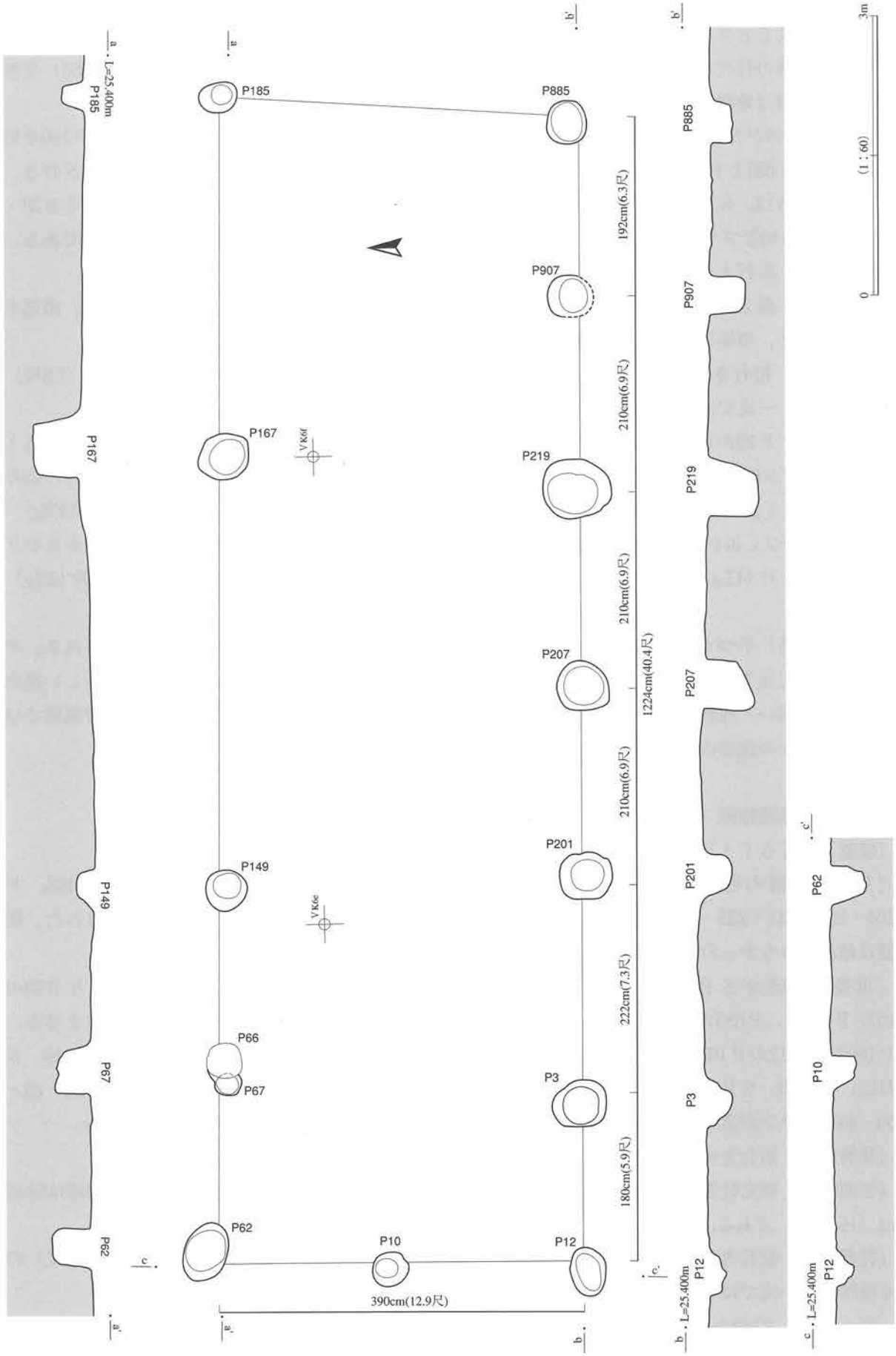
〔重複〕Ｐ152がＳＢ16のＰ153を、Ｐ155、Ｐ231がＳＤ３を、Ｐ458がＳＢ33のＰ459・ＳＢ28の457・Ｐ450を、Ｐ883がＳＢ７のＰ944を、Ｐ919がＳＢ47のＰ920を、Ｐ1168がＳＢ14のＰ151を切る。Ｐ166がＳＢ12のＰ167に、Ｐ199がＰ200に切られる。よって、本建物はＳＢ７、ＳＢ14、ＳＢ16、ＳＢ28、ＳＢ33、ＳＢ47、ＳＤ３より新しく、ＳＢ12より古い。また、ＳＢ６・８・20・22・25・29・30・46とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－91°－Ｅである。

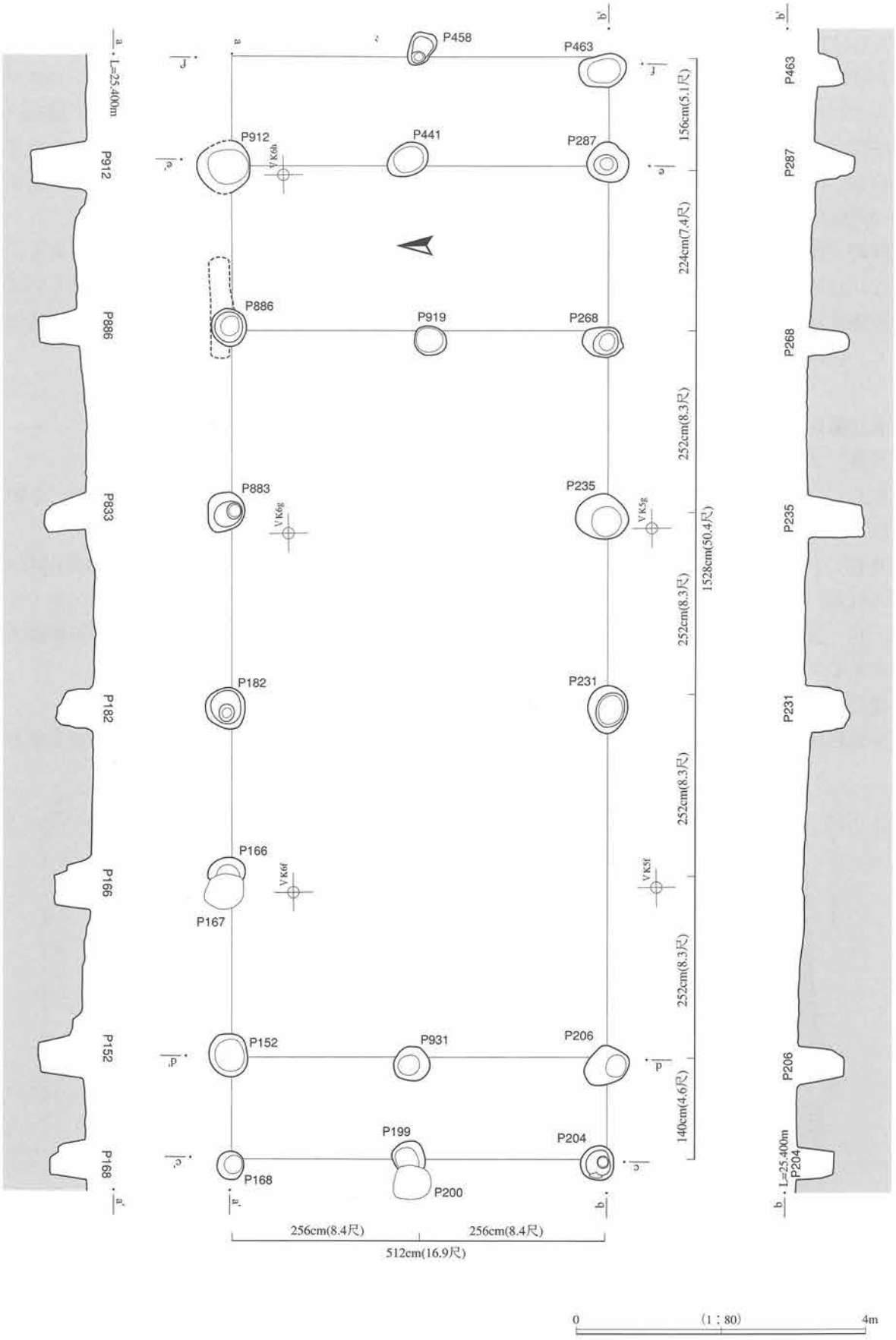
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き1528cm（50.4尺）、梁間512cm（16.9尺）で、面積は64.41㎡（19.46坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、140cm（4.6尺）・156cm（5.1尺）・224cm（7.4尺）・252cm（8.3尺）の４種類で、一定ではない。

〔出土遺物〕Ｐ182から鉄片１個（3.2g）・手づくねかわらけ11片（61.1g）・ロクロかわらけ３片（35.6g）、



第96図　接待館遺跡　SB12



第97図　接待館遺跡　SB13

P199から手づくねかわらけ１片（2.9g）、P204から手づくねかわらけ４片（12.3g）、P206から手づくねかわらけ33片（153.8g）・ロクロかわらけ14片（42.1g）、P235からロクロかわらけ小（1244）・手づくねかわらけ13片（68.5g）・ロクロかわらけ９片（51.3g）、P268から手づくねかわらけ１片（25.1g）・ロクロかわらけ１片（5.9g）、P287から釘（5011）・手づくねかわらけ２片（5.7g）・ロクロかわらけ３片（37.6g）、P441から手づくねかわらけ１片（3.1g）、P463から手づくねかわらけ２片（3.5g）・ロクロかわらけ３片（44.5g）、P883から手づくねかわらけ４片（3.0g）、P912から手づくねかわらけ１片（1.3g）、P931から手づくねかわらけ２片（2.5g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と推測される。そして、12世紀後半のかわらけを多量に包含するＳＤ３より新しいことから、12世紀よりも新しい建物の可能性が高い。性格は不明であるが、桁が50尺にも及び、かなり大規模であり、単なる付属屋ではなく、何らかの施設の中核的な建物と推測される。

ＳＢ14掘立柱建物跡（第99図、写真図版76・84）

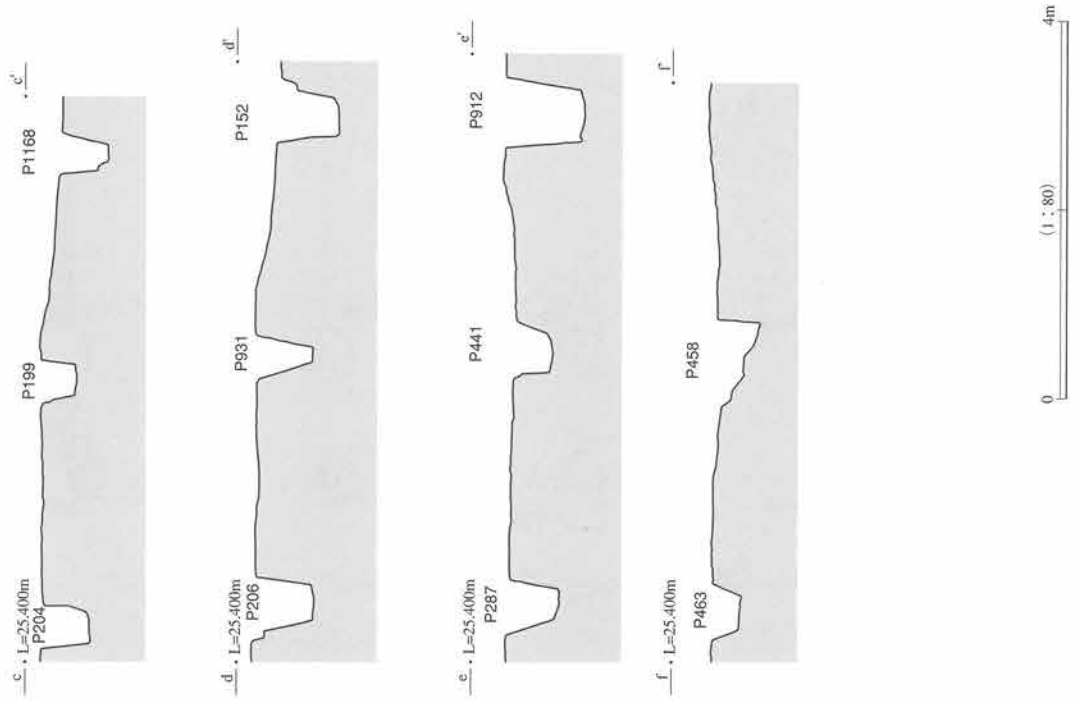
〔位置〕ＶＫ６ｄグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕11個の柱穴（Ｐ73・76・81・85・90・110、Ｐ42・62・66・151・881）を使用した。Ｐ90・Ｐ85・Ｐ73で柱痕跡が確認された。礎盤は確認されなかった。

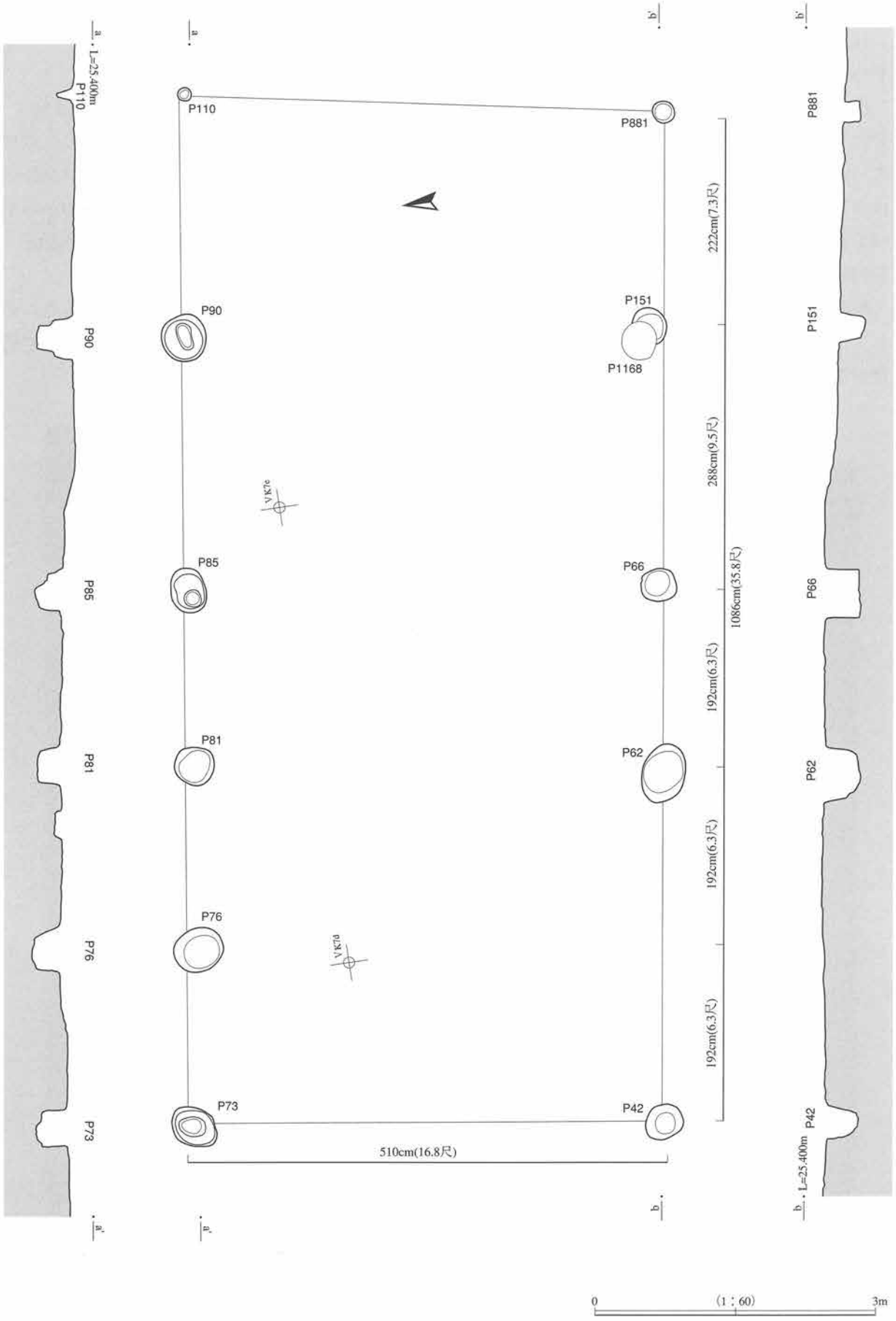
〔重複〕Ｐ42がＳＢ20のＰ41を切る。Ｐ66がＳＢ12のＰ67を切る。また、Ｐ151がＳＢ13のＰ1168に切られる。よって本建物はＳＢ12、ＳＢ20より新しく、ＳＢ13より古い。またＳＢ４・５・６・８・15・16・21・43・45・46とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－98°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。北辺と南辺の長さが異なり、プランは台形となる。南辺を基準とす



第98図　接待館遺跡　SB13



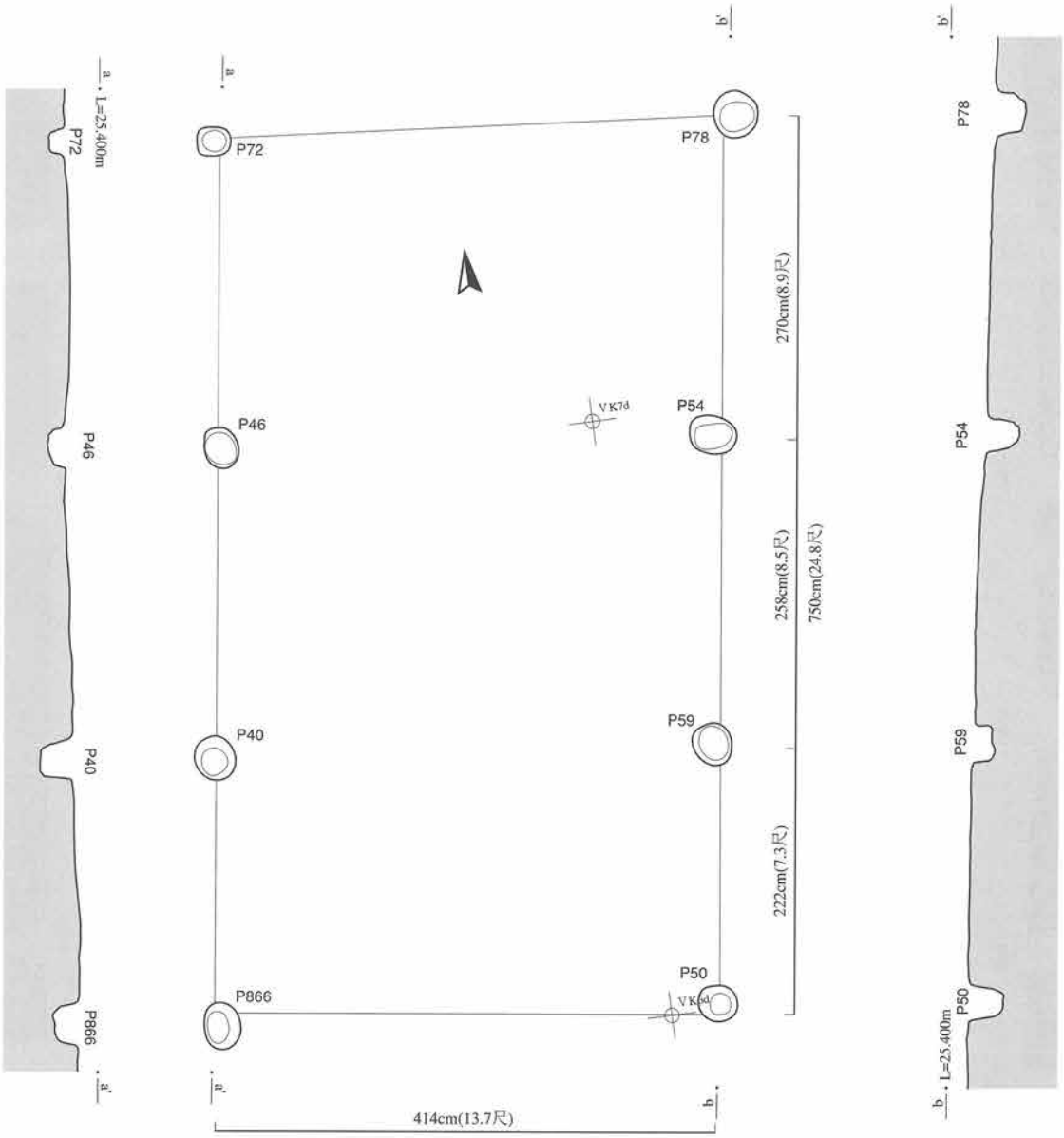
第99図　接待館遺跡　SB14

ると、規模は、桁行き1088cm（35.8尺）、梁間510cm（16.8尺）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、192cm（6.3尺）・288cm（9.5尺）・222cm（7.3尺）の３種類で、一定ではない。

〔出土遺物〕Ｐ66から須恵器（111）・手づくねかわらけ13片（26.8g）・ロクロかわらけ５片（10.5g）、Ｐ73から手づくねかわらけ１片（4.7g）・ロクロかわらけ３片（14.5g）、Ｐ76から手づくねかわらけ16片（24.0g）・ロクロかわらけ８片（11.1g）、Ｐ81から手づくねかわらけ８片（15.0g）・ロクロかわらけ３片（5.1g）、Ｐ85から手づくねかわらけ20片（26.3g）・ロクロかわらけ２片（1.5g）、Ｐ90から手づくねかわらけ２片（3.4g）、Ｐ151から手づくねかわらけ44片（71.0g）・ロクロかわらけ13片（32.4g）・石1個（1.3g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と推測される。そして、12世紀後半のかわらけを多量に包含するＳＤ３より新しい建物であるＳＢ12より、さらに本建物が新しいことから、12世紀よりも新しい年代の建物の可能性が高い。性格は不明である。



第100図　接待館遺跡　SB15　0　(1：60)　3m

ＳＢ15掘立柱建物跡（第100図、写真図版77・84）

〔位置〕ＶＫ６ｃグリッド付近に位置する。

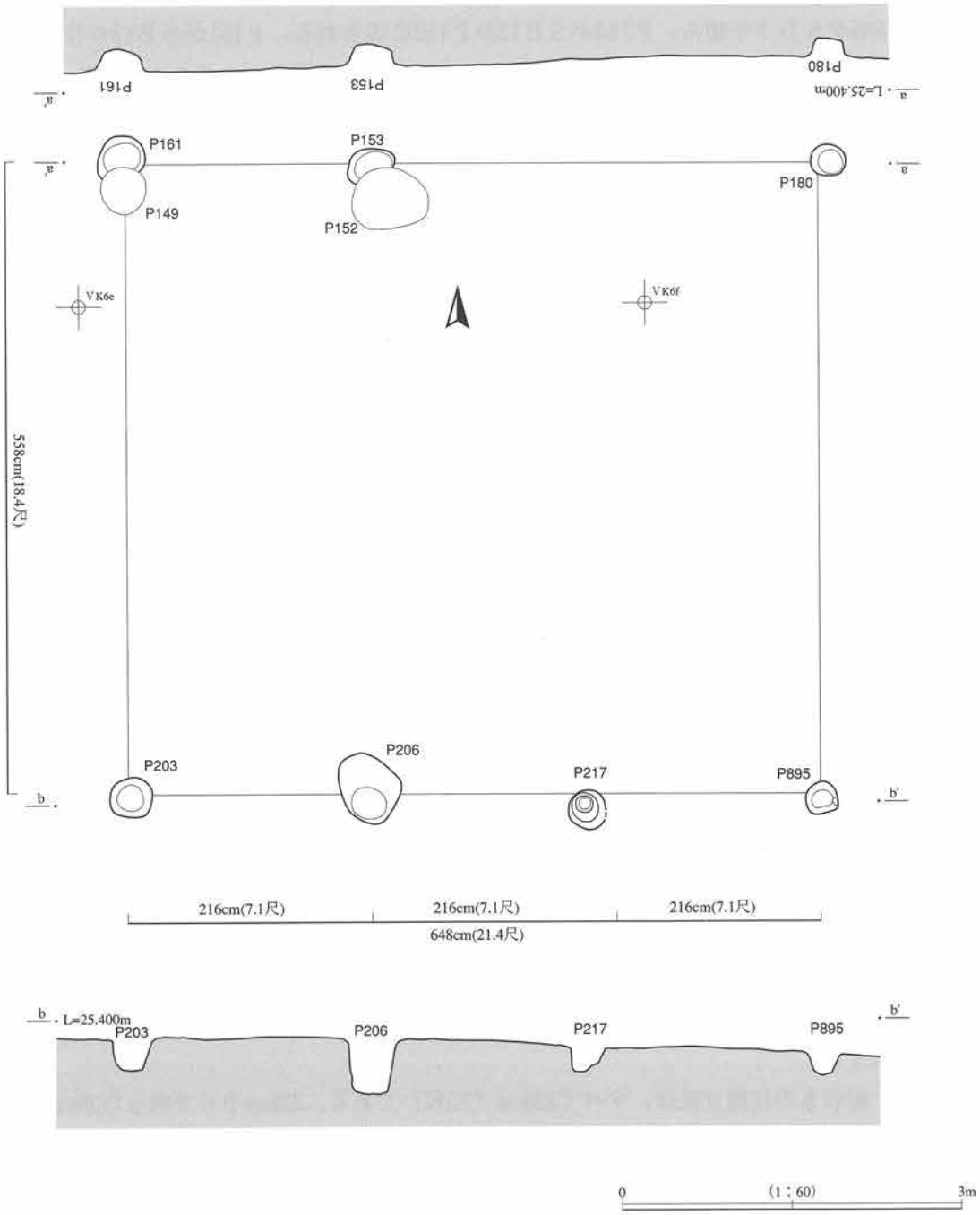
〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ866・40・46・72、Ｐ50・59・54・78）を使用した。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕ＳＢ５・ＳＢ６・ＳＢ８・ＳＢ14・ＳＢ20とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－８°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。東辺と西辺の長さが異なり、プランは台形となる。東辺を基準とすると、規模は、桁行き750cm（24.8尺）、梁間414cm（13.7尺）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、222cm（7.3尺）・258cm（8.5尺）・270cm（8.9尺）の３種類で、一定ではない。



第101図　接待館遺跡　SB16

〔出土遺物〕Ｐ40からロクロかわらけ１片（5.6g）、Ｐ46から手づくねかわらけ５片（6.1g）・ロクロかわらけ２片（3.4g）、Ｐ54から手づくねかわらけ４片（4.8g）・ロクロかわらけ４片（15.3g）、Ｐ59から手づくねかわらけ２片（2.0g）、Ｐ72から手づくねかわらけ１片（3.0g）、Ｐ78から不明鉄製品（5019）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と推測される。性格は不明である。

ＳＢ16掘立柱建物跡（第101図）
〔位置〕ＶＫ５ｅグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ161・153・180、Ｐ203・206・217・895）を使用した。柱痕跡はＰ217で確認されている。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ895がＳＤ３を切る。Ｐ153がＳＢ13のＰ152に切られる。Ｐ161がＳＢ12の柱穴Ｐ149に切られる。よって、本建物はＳＢ12、ＳＢ13より古く、ＳＤ３より新しい。また、ＳＢ６・ＳＢ８・ＳＢ14・ＳＢ20・ＳＢ30・ＳＢ45・ＳＢ46とプランが重複するが、柱穴どうしの切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－90°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き648cm（21.4尺）、梁間558cm（18.4尺）で、面積は36.16㎡（10.92坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて216cm（7.1尺）である。
〔出土遺物〕Ｐ153から手づくねかわらけ16片（42.6g）・ロクロかわらけ５片（14.8g）・木炭0.3g、Ｐ161から手づくねかわらけ５片（8.5g）、Ｐ180から手づくねかわらけ３片（3.9g）・ロクロかわらけ１片（2.5g）、Ｐ203から手づくねかわらけ３片（2.9g）、Ｐ217から手づくねかわらけ16片（34.8g）・ロクロかわらけ１片（2.1g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と推測される。そして、12世紀後半のかわらけを多量に包含するＳＤ３より新しいことから、12世紀よりも新しい建物の可能性が高い。性格は不明である。

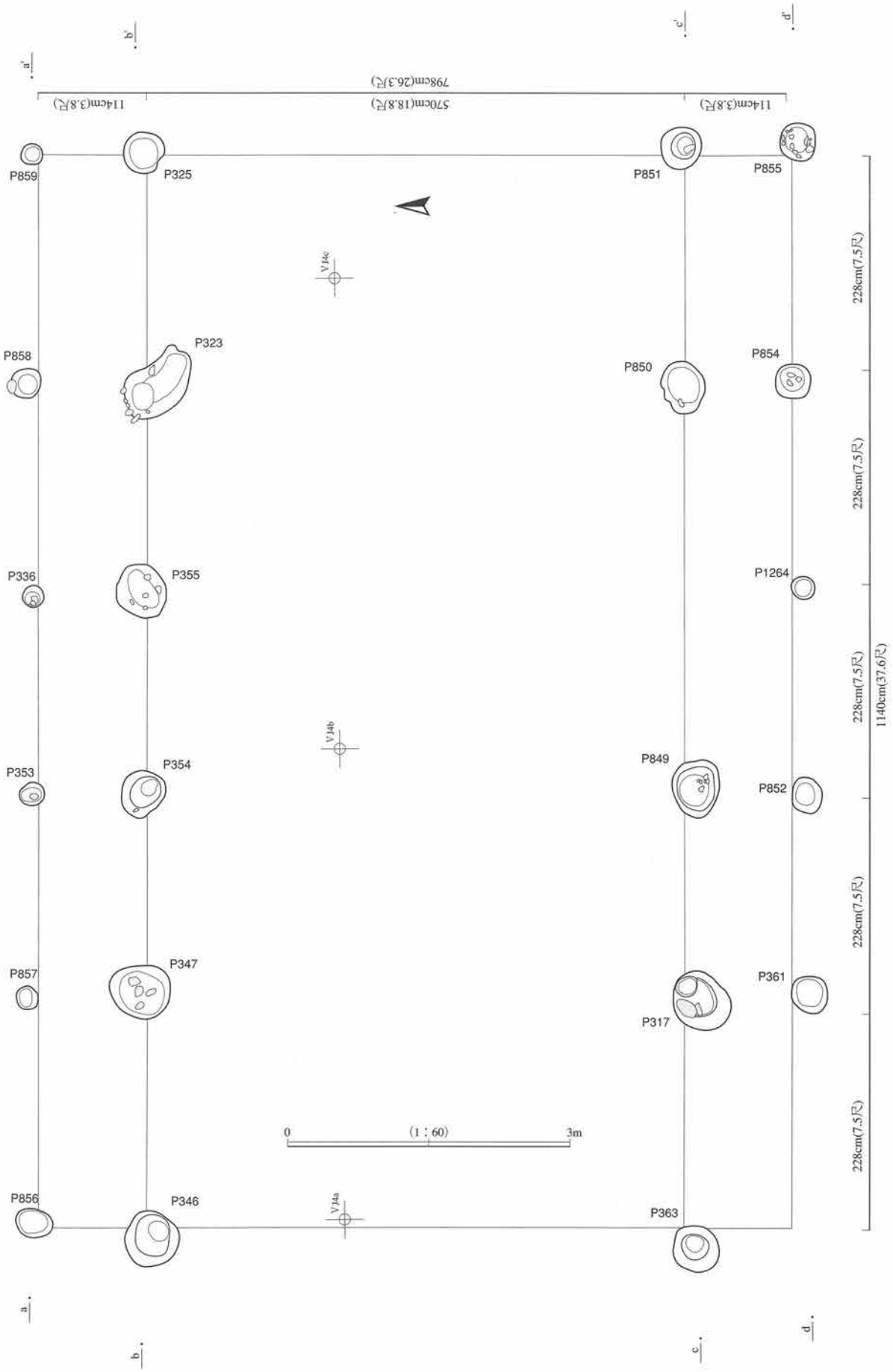
ＳＢ17掘立柱建物跡（第102・103図、写真図版77・84）
〔位置〕ＶＪ３ａ・ＶＪ３ｂグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕22個の柱穴（Ｐ856・857・353・336・858・859、Ｐ346・347・354・355・323・325、Ｐ363・317・849・850・851、Ｐ361・852・1264・854・855）を使用した。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ851が土師器の竪穴住居（ＳＩ１、未調査）を切る。またＳＢ19とプランが重複するが、柱穴どうしの切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－90°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き1140cm（37.6尺）、梁間798cm（26.3尺）で、面積は90.97㎡(27.48坪)である。桁行きと梁間の長さの比は10：７である。北側と南側の２面に庇をもつ構造で、ＳＢ22と類似する。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて228cm（7.5尺）である。228cmを６で割った38cmを用いて１尺′＝38cmと定めると、228cm＝６尺′で、桁行きの1140cm＝30尺′、梁間の798cm＝21尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な１尺（30.3

cm）を用いず、１尺′＝38cmを基準寸法とした可能性が考えられる。
〔出土遺物〕Ｐ336から手づくねかわらけ１片（1.7g）・ロクロかわらけ１片（0.7g）、Ｐ346から手づくねかわらけ１片（3.3g）、Ｐ856から土師器１片（2.9g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。形状からは中世後半の建物と推測される。性格は、かなり大規模な建物であり、単なる付属屋ではなく、何らかの施設の中核的な建物と推測される。

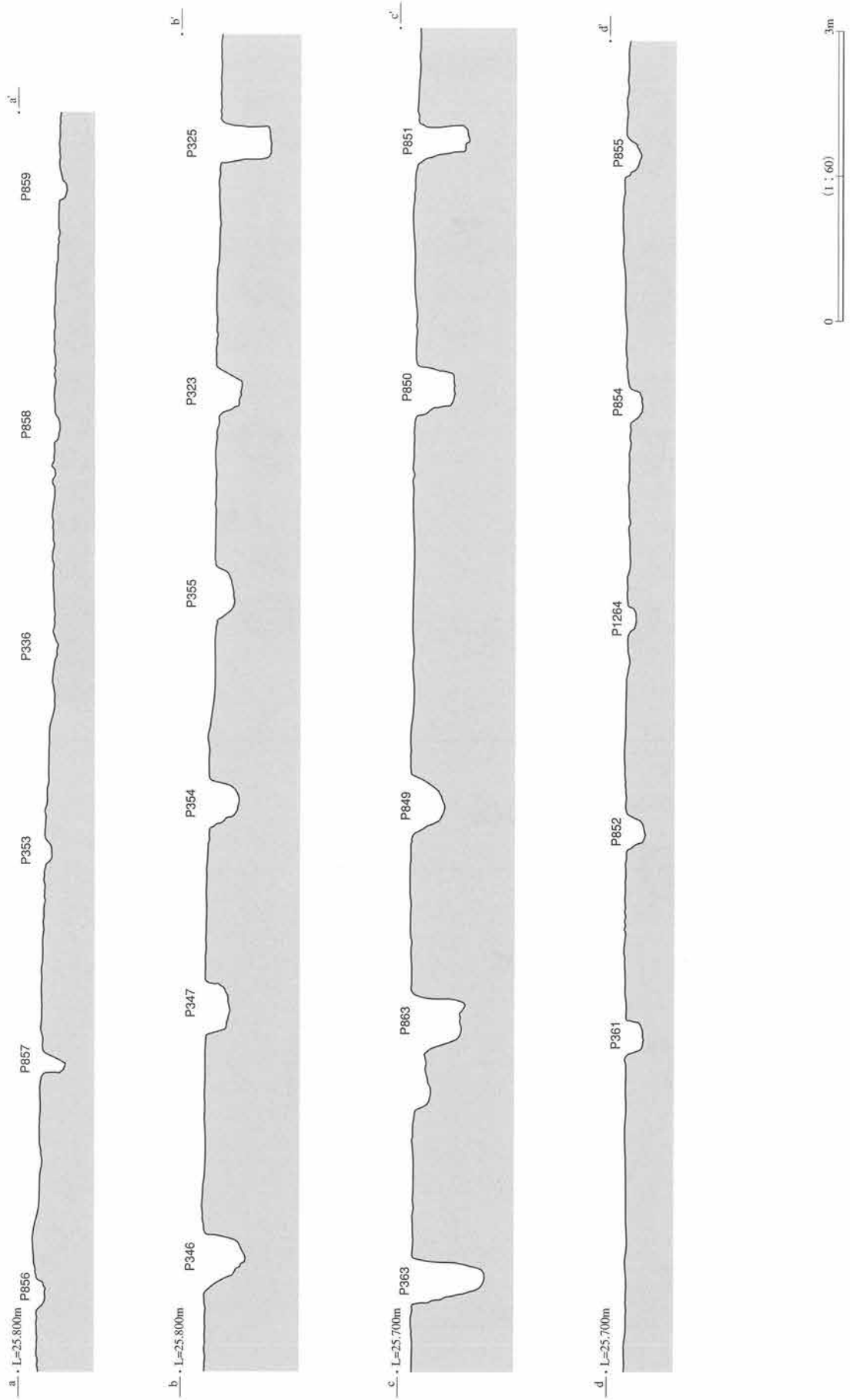
ＳＢ18掘立柱建物跡（第104図、写真図版77・84）
〔位置〕ＶＩ３ｊグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ377・378・379・860、Ｐ390・367・366・364）を使用した。Ｐ364で柱痕跡が確認された。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ366がＰ380を切る。Ｐ860が土師器の竪穴住居（ＳＩ１、未調査）を切る。Ｐ390がＳＫ９に切られる。またＳＢ17とプランが接し同時存在とは考えられない。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－82°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き522cm（17.2尺）、梁間378cm（12.5尺）で、面積は19.73㎡（5.96坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて174cm（5.7尺）である。
〔出土遺物〕なし。
〔時期・性格〕土師器住居より新しい。また本建物より新しいＳＫ９からは永楽通寶が６枚（337～342）が出土している。性格は不明である。

ＳＢ19掘立柱建物跡（第104図、写真図版78・85）
〔位置〕ＶＪ３ｃグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕６個の柱穴（Ｐ324・326・861、Ｐ953・335・320）を使用した。Ｐ861・Ｐ320・Ｐ335・Ｐ953で柱痕跡が確認されている。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕ＳＢ17とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－93°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。東辺と西辺で長さが異なり、プランは台形となる。西辺を基準とすると、規模は、桁行き432cm（14.3尺）、梁間342cm（11.3尺）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて216cm（7.1尺）である。
〔出土遺物〕なし。
〔時期・性格〕時期、性格ともに不明である。

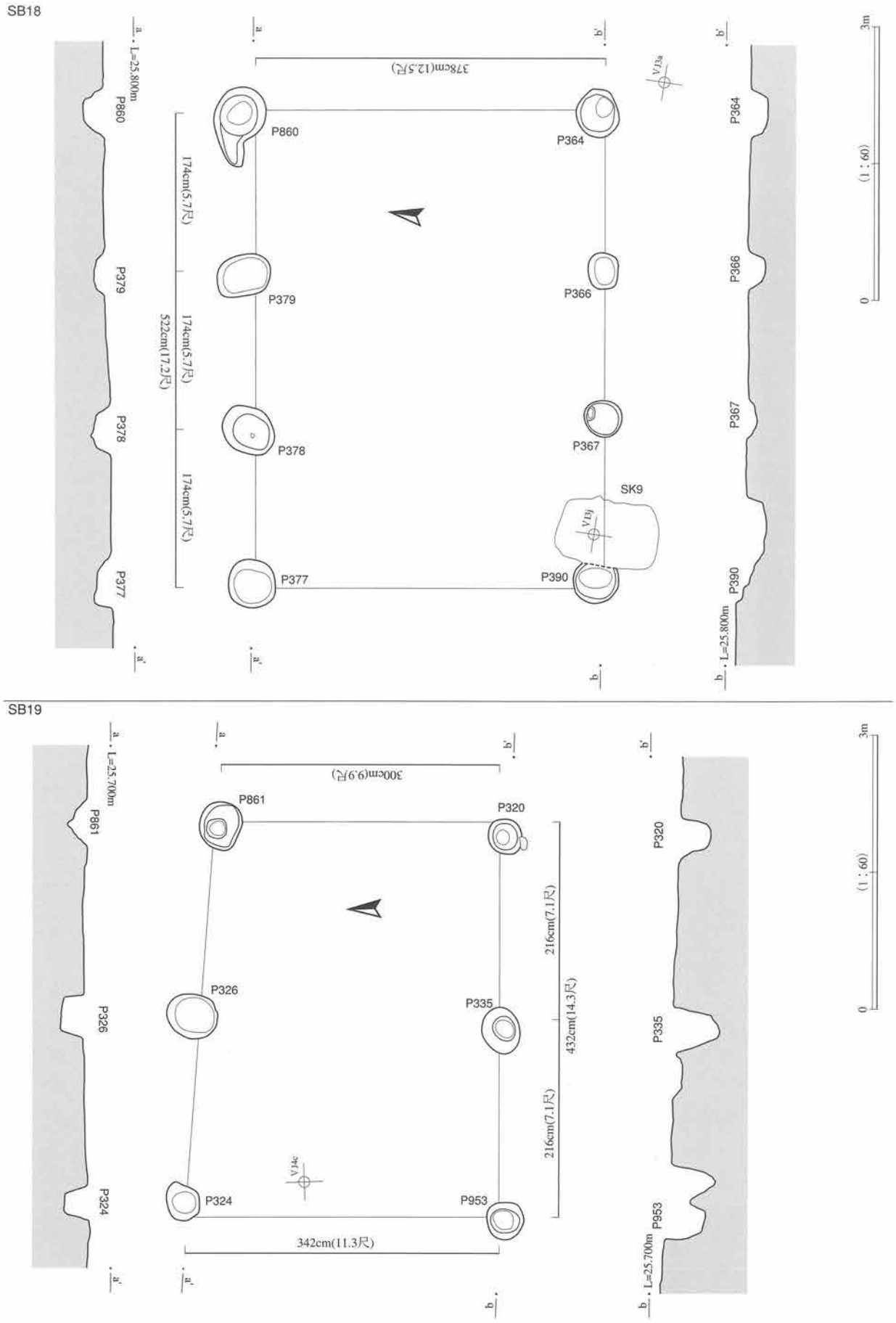
ＳＢ20掘立柱建物跡（第105・106図、写真図版78・85）
〔位置〕ＶＫ６ｄ・ＶＫ６ｅ・ＶＫ６ｆグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕31個の柱穴（Ｐ74・75・57・69・140・173・925・21・17・９・５・200・210・906・233、Ｐ18・914・12・２・202・214・884・232、Ｐ45・41・70・146・163・179・71・225）を使用した。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ173がＳＢ22の柱穴Ｐ174に切られる。Ｐ41がＳＢ14の柱穴Ｐ42に切られる。Ｐ140がＳＢ21の柱穴Ｐ139に切られる。Ｐ200がＳＢ13のＰ199を切る。Ｐ904、Ｐ884がＳＤ３を切る。よって、



第102図　接待館遺跡　SB17



第103図　接待館遺跡　SB17



第104図　接待館遺跡　SB18・19

本建物はＳＢ14、ＳＢ21、ＳＢ22より古く、ＳＢ13、ＳＤ３より新しい。また、ＳＢ５・ＳＢ６・ＳＢ７・ＳＢ８・ＳＢ13・ＳＢ15・ＳＢ16・ＳＢ28・ＳＢ29・ＳＢ30・ＳＢ43・ＳＢ45・ＳＢ46とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－98°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き1688cm（55.7尺）、梁間784cm（25.9尺）で、面積は132.33㎡（39.98坪）である。内部は６室に分かれる。南辺のＰ18～Ｐ232の列は他に比較すると径が小さく、深さも浅く、下屋柱と推測される。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、128cm（4.2尺）・196cm（6.5尺）・228cm（7.5尺）・260cm（8.6尺）・356cm（11.7尺）の５種類である。梁間の柱間寸法はすべて196cm（6.5尺）である。

〔出土遺物〕Ｐ２から手づくねかわらけ１片（3.0g）・ロクロかわらけ７片（8.5g）、Ｐ５から手づくねかわらけ８片（10.1g）、Ｐ９から石匙１点（16.5g）・縄文土器７片（83.3g）・手づくねかわらけ19片（48.0g）・ロクロかわらけ２片（3.1g）、Ｐ12から石１個（11.3g）・手づくねかわらけ１片（1.1g）、Ｐ17から手づくねかわらけ６片（11.3g）・ロクロかわらけ２片（3.6g）、Ｐ18から手づくねかわらけ３片（4.8g）、Ｐ21から手づくねかわらけ１片（1.6g）、Ｐ41から手づくねかわらけ３片（3.9g）、Ｐ45から手づくねかわらけ６片（8.6g）・ロクロかわらけ２片（1.2g）、Ｐ57から渥美産甕（2044）・石１個（3.2g）・縄文土器１片（11.9g）・手づくねかわらけ29片（49.3g）・ロクロかわらけ８片（21.9g）、Ｐ69から手づくねかわらけ５片（18.1g）・ロクロかわらけ28片（72.5g）、Ｐ70から手づくねかわらけ６片（10.8g）・ロクロかわらけ２片（9.4g）、Ｐ71から手づくねかわらけ９片（22.8g）、Ｐ74から手づくねかわらけ１片（1.6g）・ロクロかわらけ１片（5.0g）、Ｐ75から常滑産広口壺？（2028）・手づくねかわらけ24片（38.3g）・ロクロかわらけ18片（35.7g）、Ｐ140から手づくねかわらけ21片（39.4g）・ロクロかわらけ９片（22.7g）、Ｐ163から手づくねかわらけ11片（15.1g）・ロクロかわらけ１片（0.6g）、Ｐ173から手づくねかわらけ17片（36.8g）・ロクロかわらけ２片（4.9g）、Ｐ179から手づくねかわらけ１片（2.7g）、Ｐ200から手づくねかわらけ12片（29.8g）・ロクロかわらけ１片（1.8g）、Ｐ202から手づくねかわらけ２片（9.3g）・ロクロかわらけ１片（1.4g）、Ｐ214からロクロかわらけ１片（3.2g）、Ｐ225からロクロかわらけ１片（2.2g）、Ｐ233から木炭（0.4g）・手づくねかわらけ15片（64.5g）・ロクロかわらけ４片（21.5g）、Ｐ884から釘（5010）、Ｐ906から須恵器甕（111）・木炭（6.3g）・土師器３片（13.1g）・手づくねかわらけ174片・ロクロかわらけ24片（91.5g）、Ｐ914から手づくねかわらけ２片（14.0g）・ロクロかわらけ１片（0.5g）が出土した。

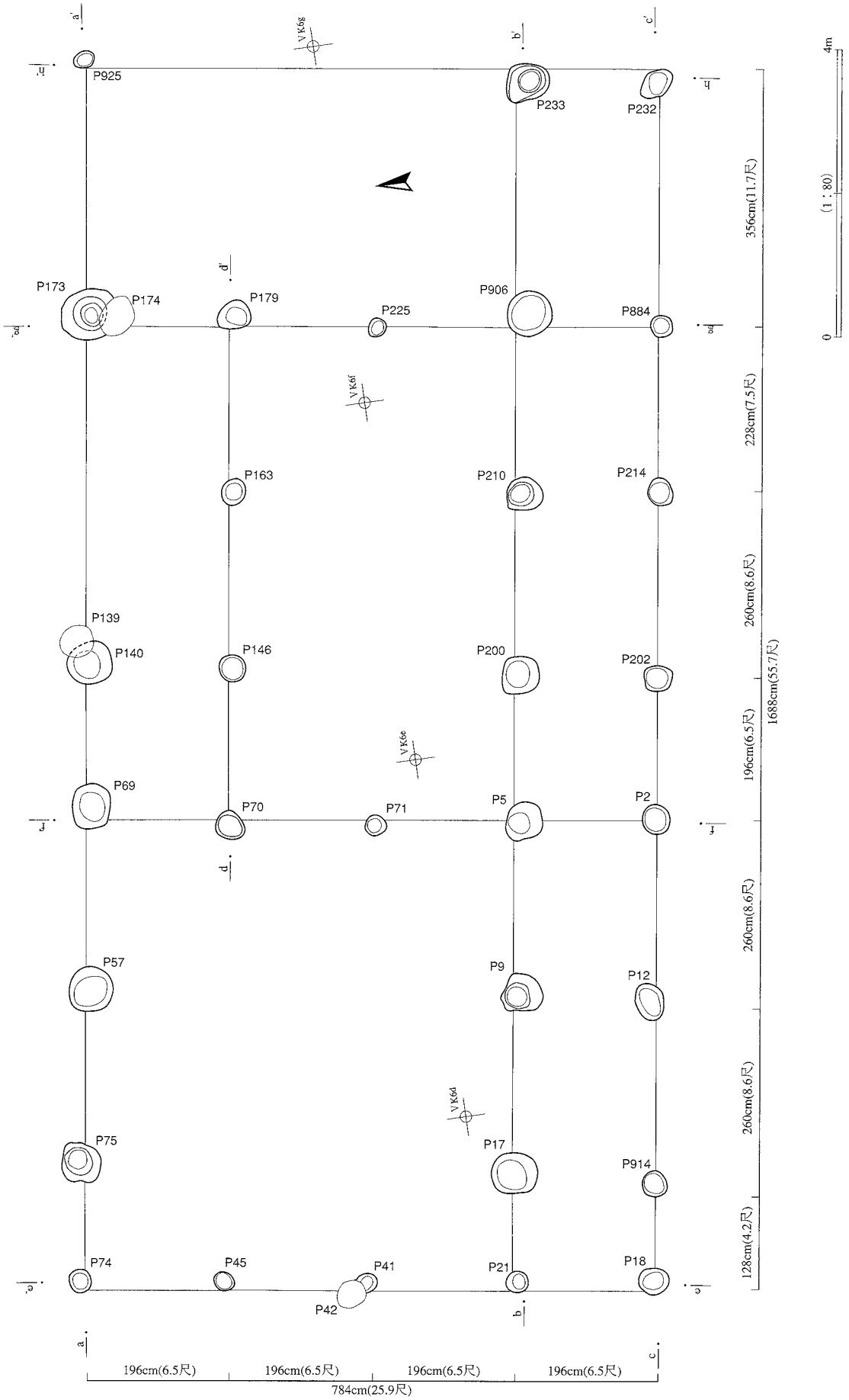
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。そして、12世紀後半のかわらけを多量に包含するＳＤ３より新しいことから、12世紀よりも新しい建物の可能性が高い。形状からは中世後半の建物と推測される。性格は、かなり大規模な建物であり、単なる付属屋ではなく、何らかの施設の中核的な建物と推測される。

ＳＢ21掘立柱建物跡（第107図、写真図版78・85）

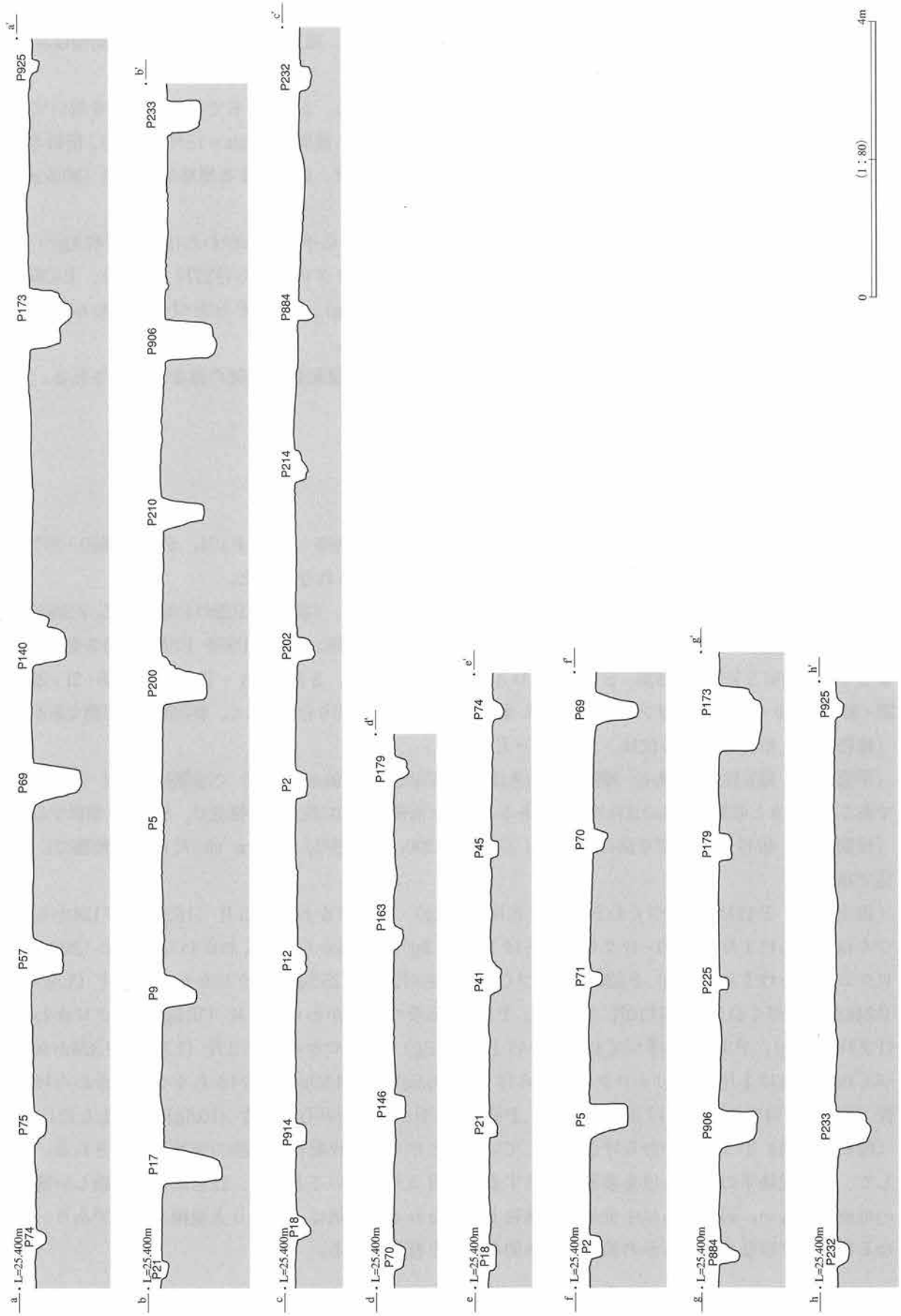
〔位置〕ＶＫ７ｅグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕９個の柱穴（Ｐ133・120・170・176、Ｐ108、Ｐ104・93・139・148）を使用した。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ104がＰ103を切る。Ｐ139がＳＢ21のＰ140を切る。よって本建物はＳＢ21より新しい。ＳＢ３・ＳＢ４・ＳＢ５・ＳＢ７・ＳＢ８・ＳＢ14・ＳＢ20・ＳＢ22・ＳＢ30・ＳＢ43・ＳＢ45・ＳＢ46とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。



第105図　接待館遺跡　SB20

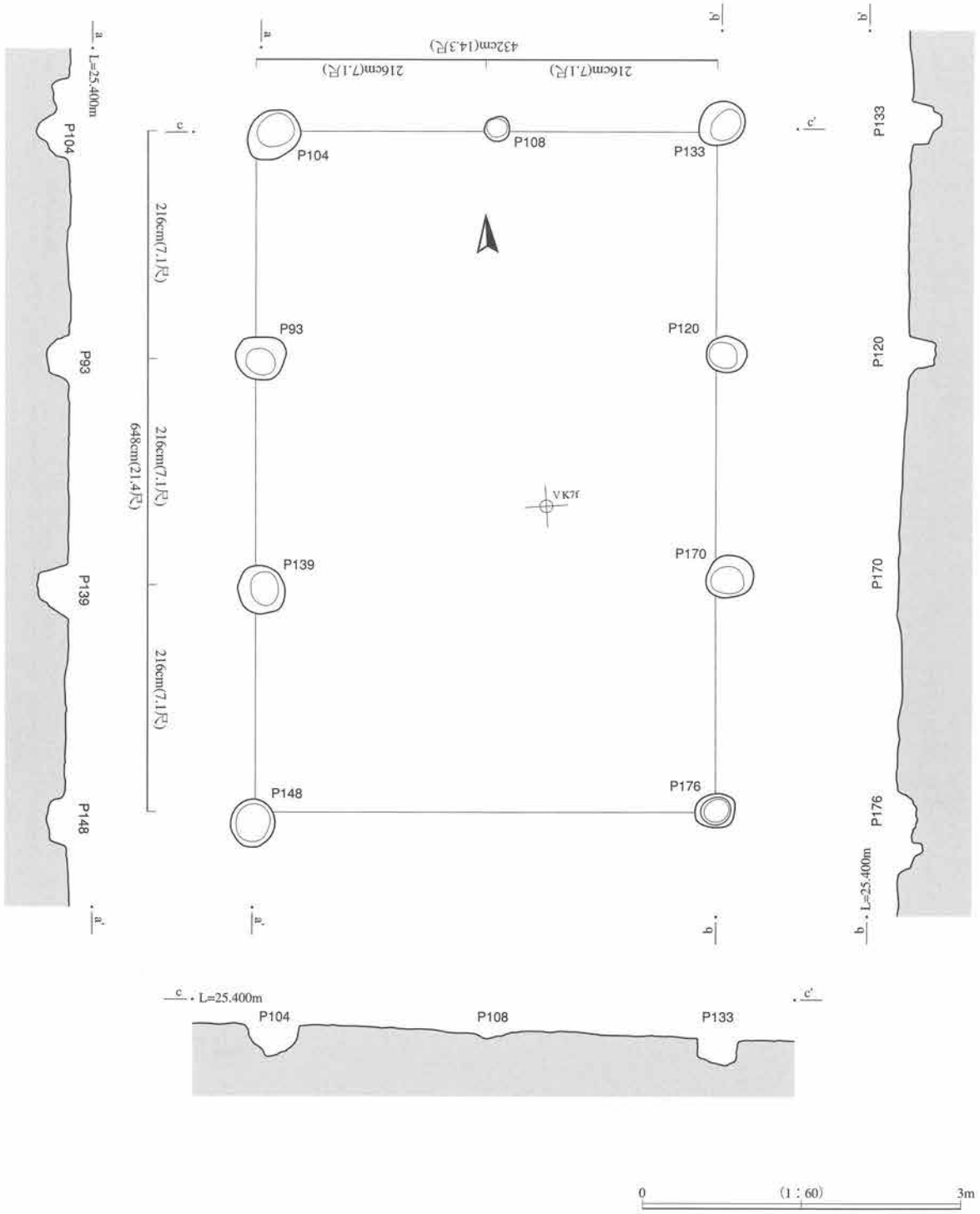


第106図　接待館遺跡　SB20

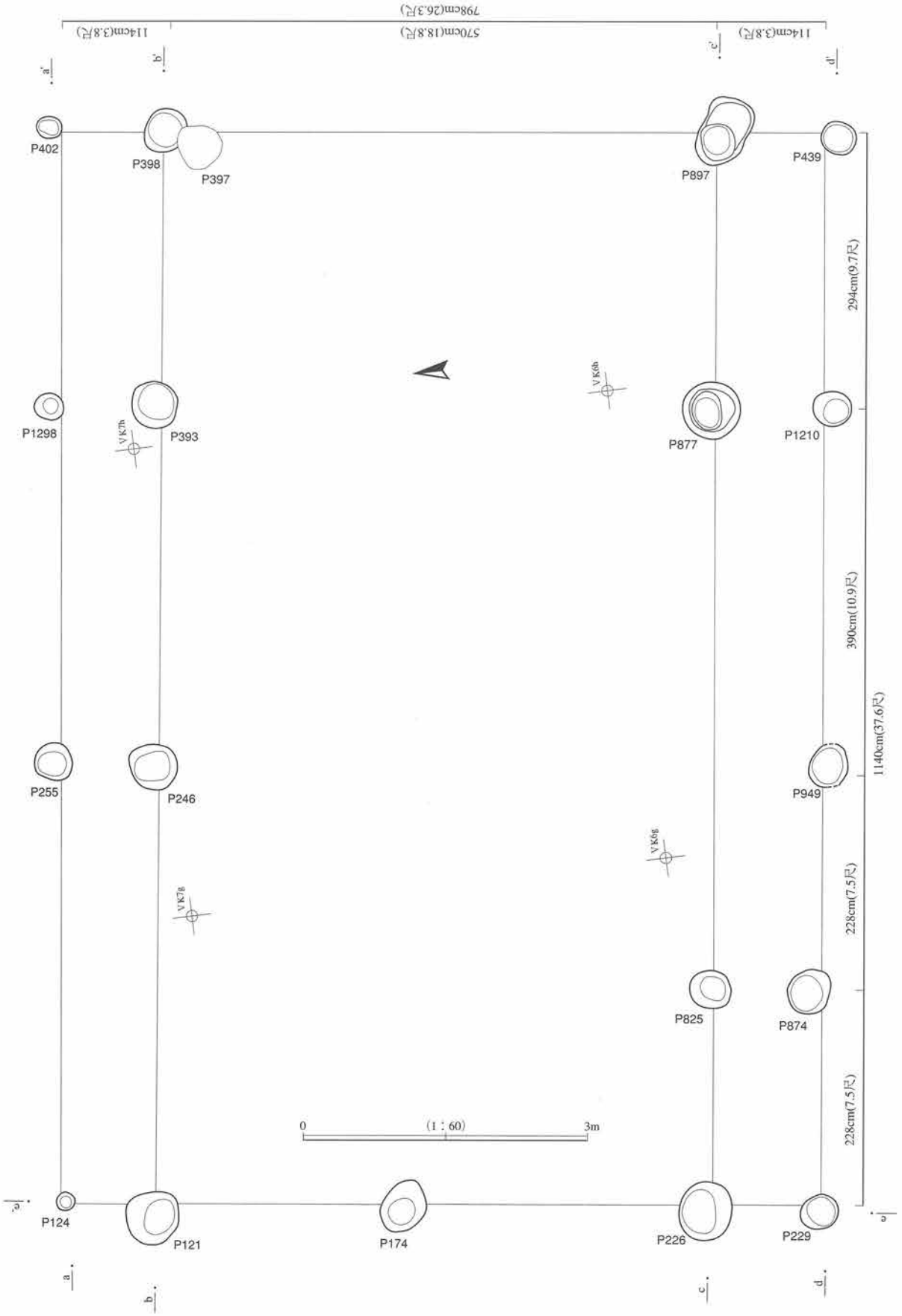
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、N－4°－Eである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き648cm（21.4尺）、梁間432cm（14.3尺）で、面積は27.99㎡（8.46坪）である。桁行きと梁間の長さの比は3：2である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて216cm（7.1尺）である。216cmを6で割った36cmを用いて1尺′＝36cmと定めると、216cm＝6尺′で、桁行きの648cm＝18尺′、梁間の432cm＝12尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な1尺（30.3cm）を用いず、1尺′＝36cmを基準寸法とした可能性が考えられる。
〔出土遺物〕P93から手づくねかわらけ10片（88.2g）、P104から手づくねかわらけ20片（47.4g）・ロクロかわらけ1片（5.7g）、P120から縄文土器1片（2.0g）・ロクロかわらけ27片（61.6g）、P139から手づくねかわらけ9片（28.6g）・ロクロかわらけ3片（13.3g）、P148から手づくねかわらけ9片（20.4g）、P176から手づくねかわらけ1片（1.2g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。性格は不明である。

ＳＢ22掘立柱建物跡（第108・109図、写真図版79・85）
〔位置〕ＶＫ６ｇグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕18個の柱穴（P124・255・1298・402、P121・246・393・398、P174、P226・825・877・897、P229・874・949・1210・439）を使用した。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕P174がＳＢ20のP173を切る。P121がＳＢ29のP122を切る。P897がＳＢ29のP896を切る。P398がＳＢ29のP397を切る。P174がＳＢ45のP177を切る。P1298がP936を切る。P825・P874・P877がＳＤ３を切る。よって本建物はＳＢ20、ＳＢ29、ＳＢ45、ＳＤ３より新しい。また、ＳＢ３・４・７・12・13・16・21・25・28・30・33・43・44・46とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、N－97°－Eである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き1140cm（37.6尺）、梁間798cm（26.3尺）で、面積は90.97㎡（27.48坪）である。桁行きと梁間の長さの比は10：7である。北側と南側の2面に庇を持つ構造で、ＳＢ17と類似する。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、228cm（7.5尺）・390cm（12.9尺）・294cm（9.7尺）の3種類で、一定ではない。
〔出土遺物〕P121から手づくねかわらけ8片（26.2g）・ロクロかわらけ3片（16.2g）、P124から手づくねかわらけ1片（4.1g）・ロクロかわらけ1片（1.8g）、P174から手づくねかわらけ11片（29.0g）・ロクロかわらけ1片（2.9g）、P226から手づくねかわらけ20片（25.5g）・ロクロかわらけ3片（3.3g）、P246から手づくねかわらけ10片（15.6g）、P393から手づくねかわらけ6片（10.5g）・ロクロかわらけ2片（1.3g）、P398から手づくねかわらけ1片（1.3g）・ロクロかわらけ2片（1.3g）、P398から手づくねかわらけ1片（1.3g）・ロクロかわらけ1片（0.6g）・木炭2.0g、P874から手づくねかわらけ24片（43.9g）・ロクロかわらけ3片（6.6g）、P877から手づくねかわらけ6片（16.8g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。そして、12世紀後半のかわらけを多量に包含するＳＤ３より新しいことから、12世紀よりも新しい建物の可能性が高い。形状からは中世後半の建物と推測される。性格は、かなり大規模な建物であり、単なる付属屋ではなく、何らかの施設の中核的な建物と推測される。

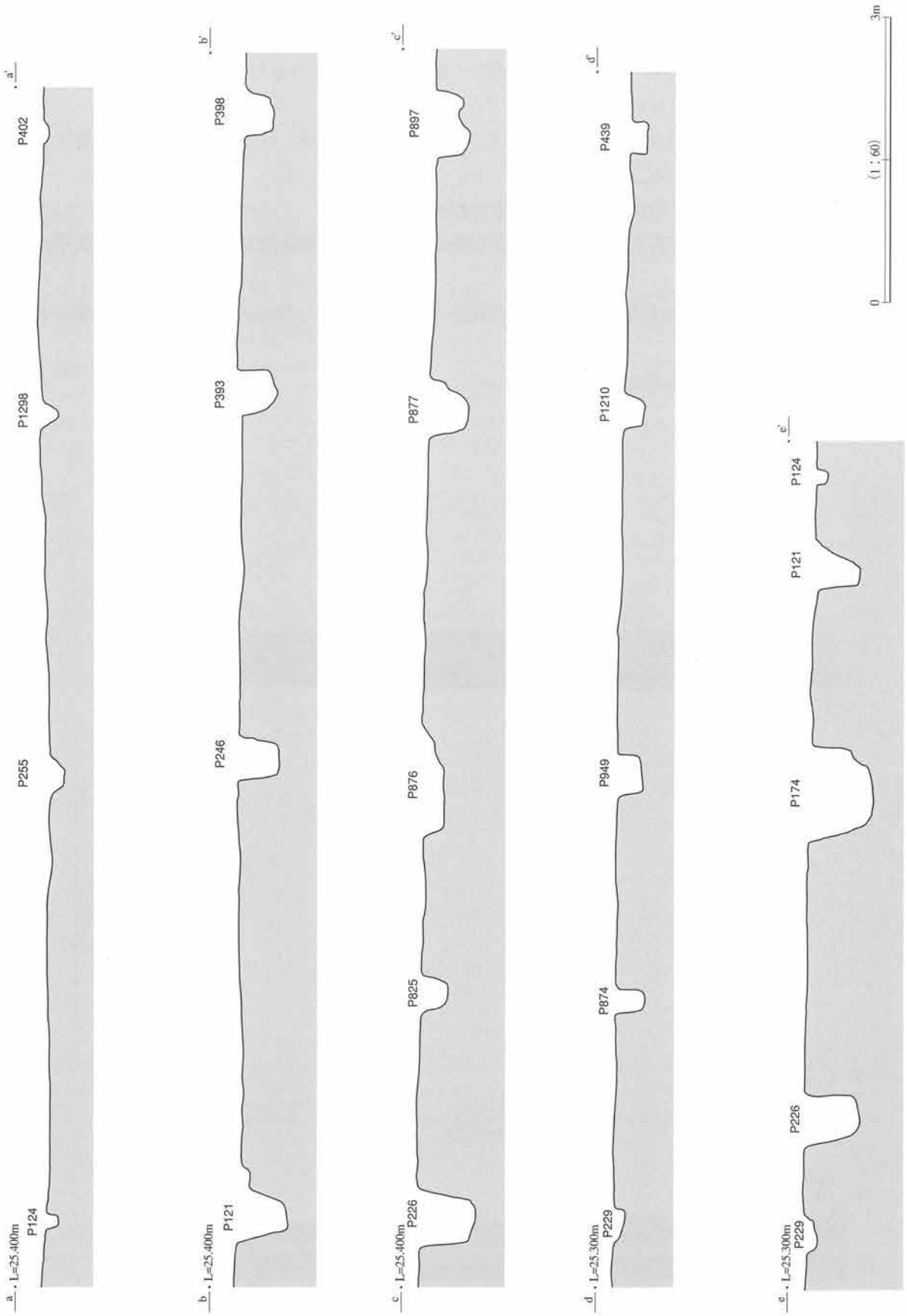
ＳＢ23掘立柱建物跡　欠番



第107図　接待館遺跡　SB21



第108図　接待館遺跡　SB22



第109図　接待館遺跡　SB22

ＳＢ24掘立柱建物跡（第110図、写真図版79・84）

〔位置〕ＶＫ４ｇグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕６個の柱穴（Ｐ1208・269・480、Ｐ273・284・466）を使用した。柱痕跡はＰ269で確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ269がＰ290を切る。また、ＳＢ47とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

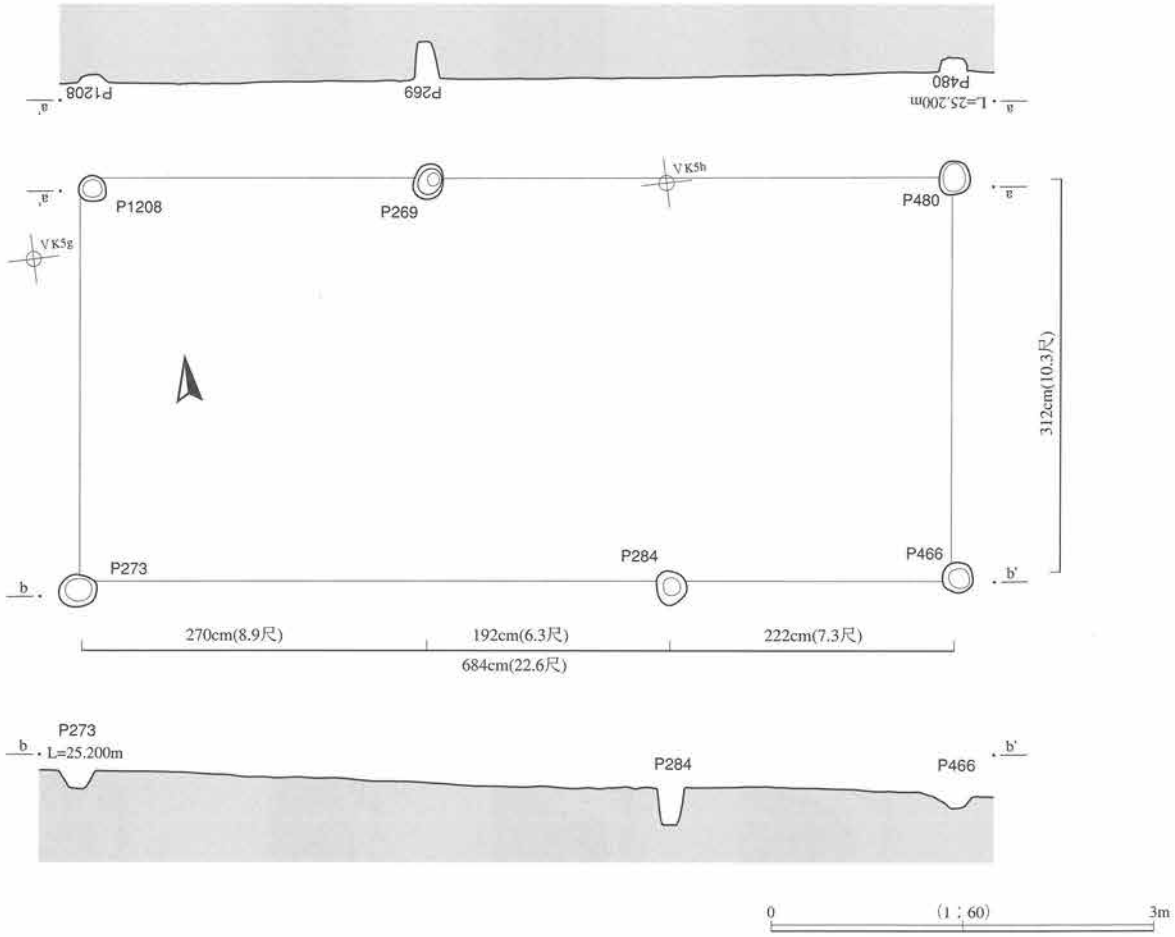
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－96°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き684cm（22.6尺）、梁間312cm（10.3尺）で、面積は21.34㎡（6.45坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、270cm（8.9尺）・192cm（6.3尺）・222cm（7.3尺）の３種類である。

〔出土遺物〕なし。

〔時期・性格〕時期、性格ともに不明である。



第110図　接待館遺跡　SB24

ＳＢ25掘立柱建物跡（第111図）

〔位置〕ＶＫ５ｈグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ261・295、Ｐ264・291・443・462・440・489）を使用した。礎盤は確認されなかった。北辺東側の柱穴が検出されなかったが、検出面の標高と。北辺西側の柱穴Ｐ261・Ｐ291の残存する深さを考え合わせると、柱穴が失われた可能性はかなり高い。

〔重複〕Ｐ264がＰ263に切られる。また、ＳＢ７・ＳＢ13・ＳＢ22・ＳＢ28・ＳＢ29・ＳＢ33とプランが重複するが、柱穴どうし切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－91°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き1104cm（36.4尺）、梁間528cm（17.4尺）で、面積は58.29㎡（17.61坪）である。桁行きと梁間の長さの比は23：11である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、216cm（7.1尺）・228cm（7.5尺）の２種類である。

〔出土遺物〕Ｐ264から手づくねかわらけ４片（6.6g）、Ｐ440から手づくねかわらけ２片（3.7g）、Ｐ489から手づくねかわらけ13片（33.3g）・ロクロかわらけ１片（1.4g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。性格は不明である。

ＳＢ26掘立柱建物跡（第112図、写真図版79・85）

〔位置〕ＶＬ５ｄグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ870・869・1178・515、Ｐ871・1227・559・558）を使用した。Ｐ178で柱痕跡が確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ515がＰ1228を切る。Ｐ869、Ｐ870、Ｐ1227がＳＤ３を切り、本建物はＳＤ３より新しい。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－99°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き594cm（19.6尺）、梁間486cm（16.0尺）で、面積は28.87㎡（8.72坪）である。桁行きと梁間の長さの比は11：９である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、186cm（6.1尺）・222cm（7.3尺）の２種類である。

〔出土遺物〕Ｐ515から瓦質土器手あぶり？（4011）・手づくねかわらけ６片（6.0g）・ロクロかわらけ２片（3.0g）・頁岩剥片１個（11.0g）、Ｐ559から手づくねかわらけ２片（1.7g）・ロクロかわらけ１片（2.8g）、Ｐ869から手づくねかわらけ９片（7.5g）・ロクロかわらけ７片（9.5g）、Ｐ870から縄文土器１片（2.2g）・手づくねかわらけ４片（2.4g）・ロクロかわらけ１片（3.5g）が出土した。

〔時期・性格〕Ｐ515出土の瓦質土器（4011）は中世のものと推測される。よって本建物は中世以降の可能性が高い。性格は不明である。

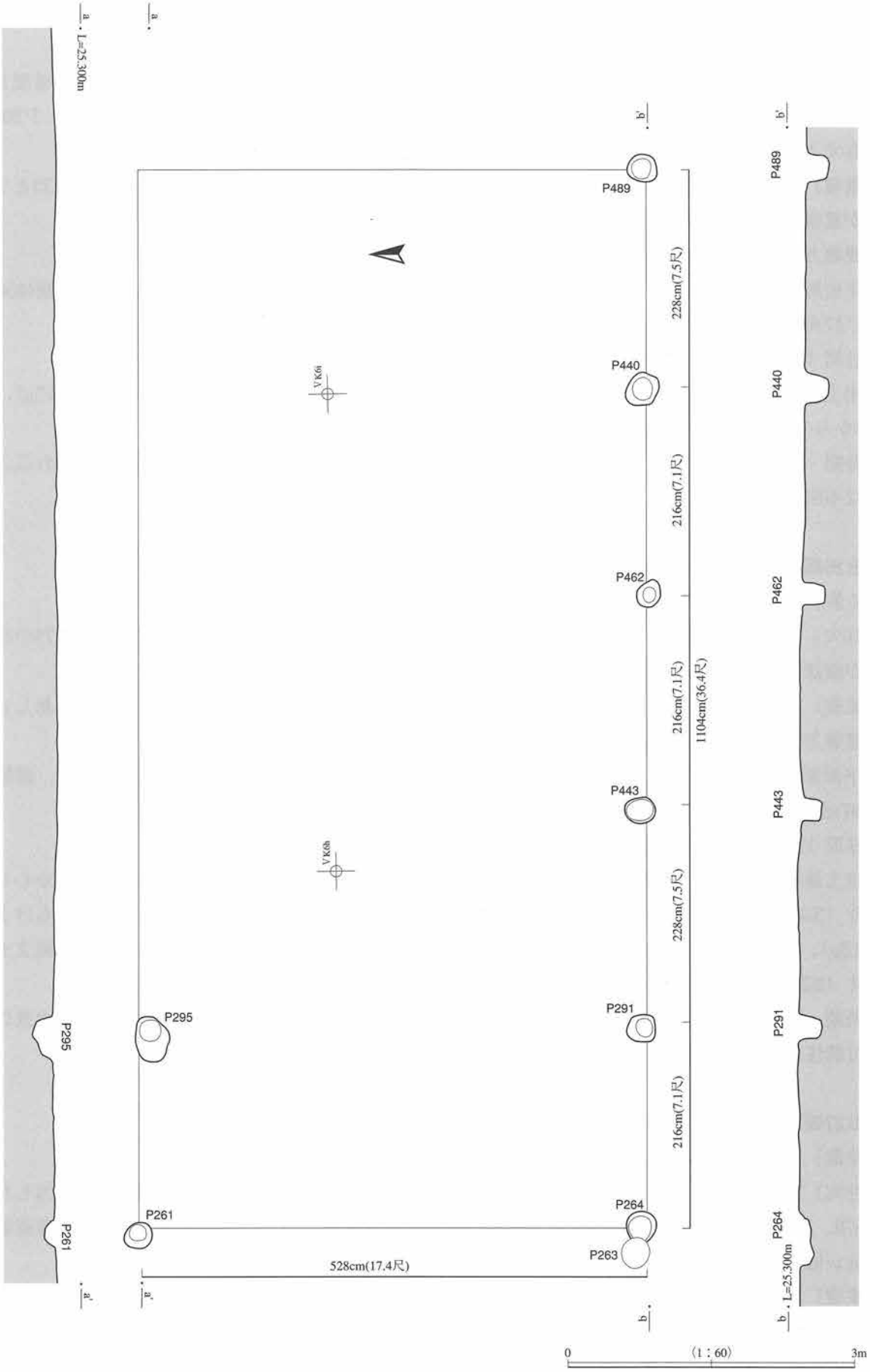
ＳＢ27掘立柱建物跡（第113図、写真図版80・85）

〔位置〕ＶＬ７ｆグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕11個の柱穴（Ｐ674・676・619・643・633、Ｐ878・628・879・570・576・581）を使用した。Ｐ576、Ｐ676、Ｐ674は柱痕跡が確認された。礎盤は確認されなかった。南東隅の柱穴は、確認面の標高が低いため失われたと推測される。

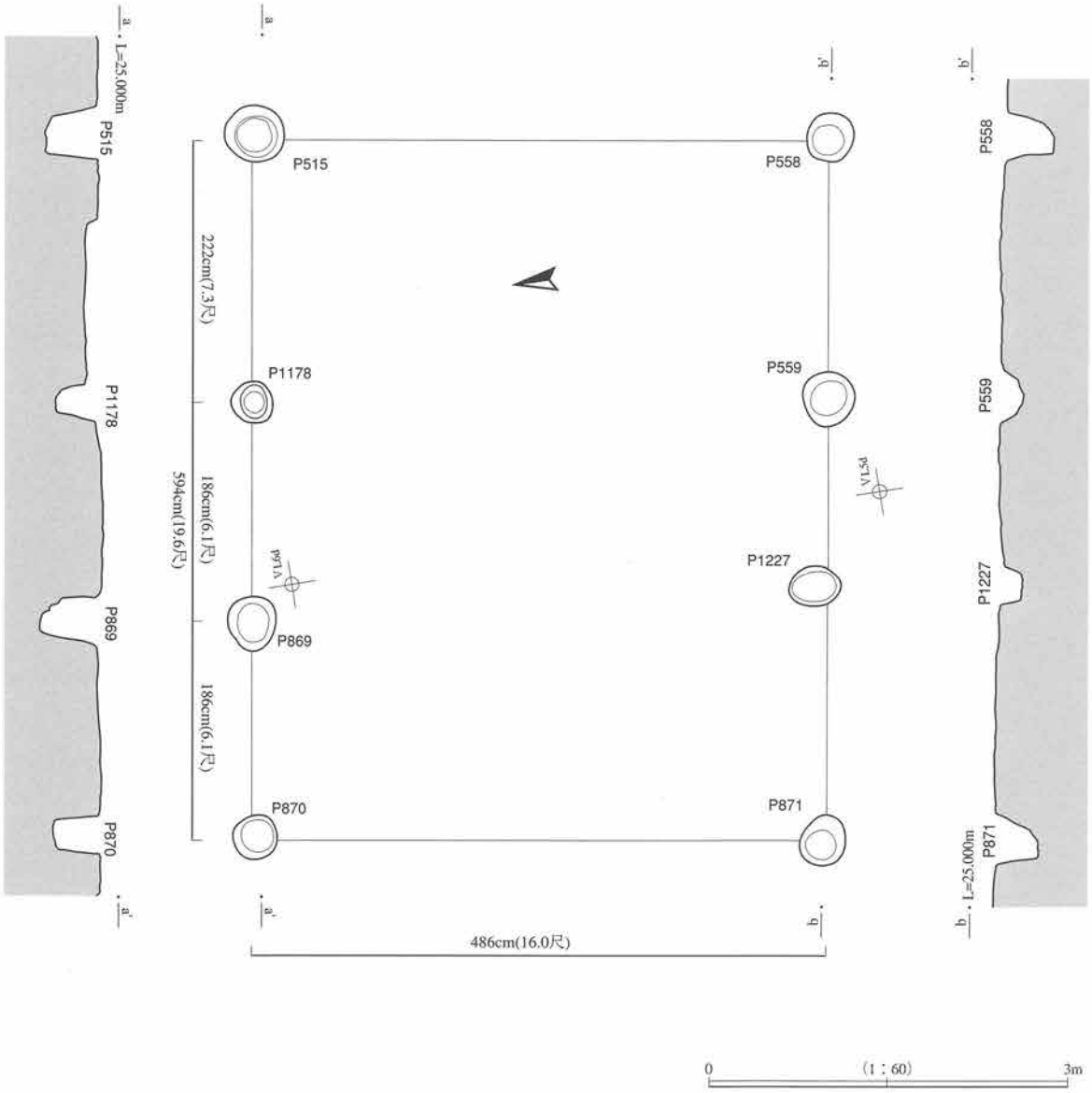
〔重複〕Ｐ879がＳＫ15を切る。ＳＢ51とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－12°－Ｅである。

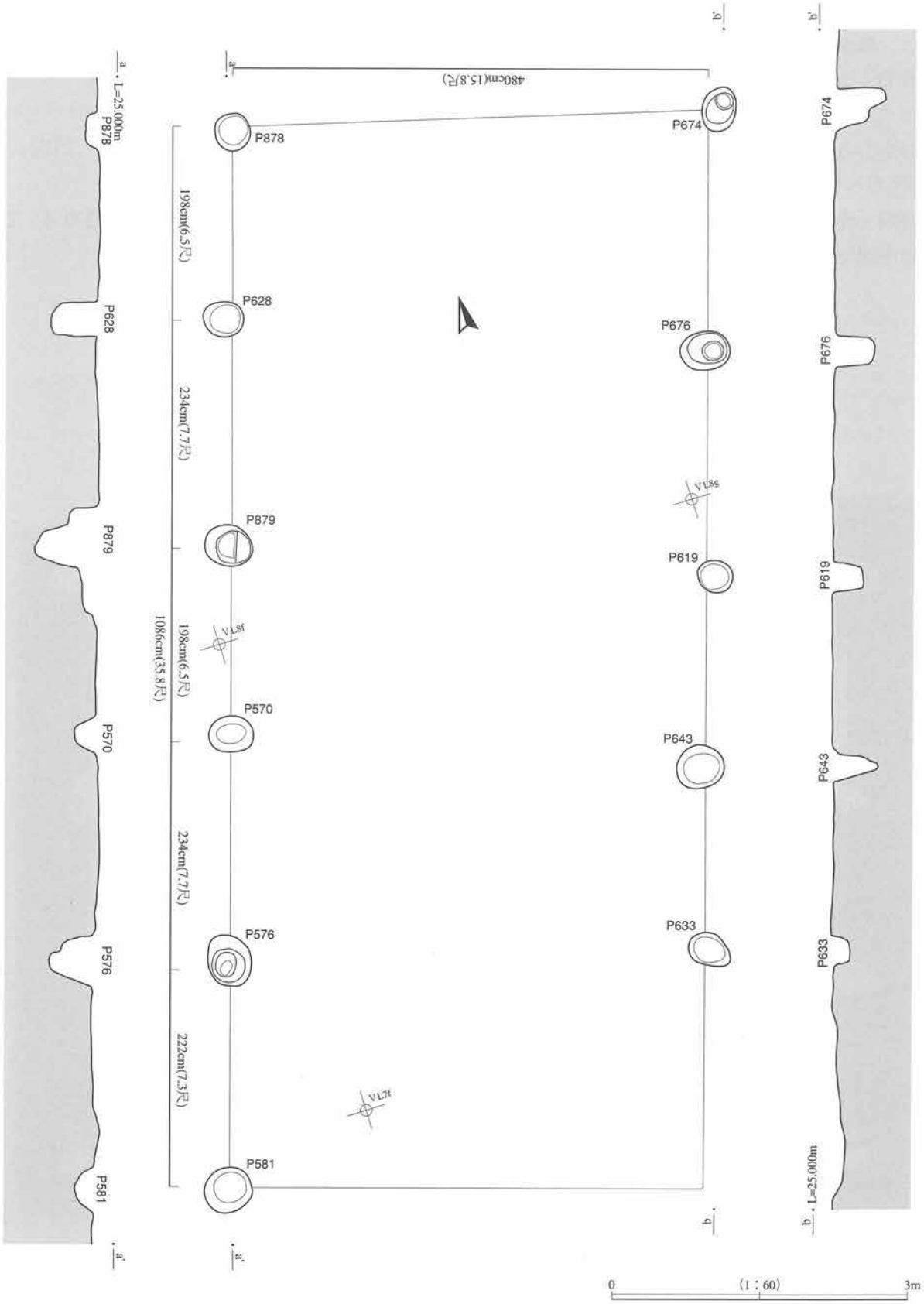


第111図　接待館遺跡　SB25

〔平面形式〕掘立柱建物である。東辺と西辺の長さが異なり、プランは台形となる。東辺を基準とすると、規模は、桁行き1086cm（35.8尺）、梁間480cm（15.8尺）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、198cm（6.5尺）・222cm（7.3尺）・234cm（7.7尺）の３種類である。
〔出土遺物〕Ｐ570から手づくねかわらけ22片（78.4g）・ロクロかわらけ18片（48.8g）、Ｐ576から手づくねかわらけ３片（3.3g）、Ｐ643から手づくねかわらけ28片（68.3g）・ロクロかわらけ11片（25.5g）、Ｐ676から手づくねかわらけ１片（1.5g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。性格は不明である。



第112図　接待館遺跡　SB26



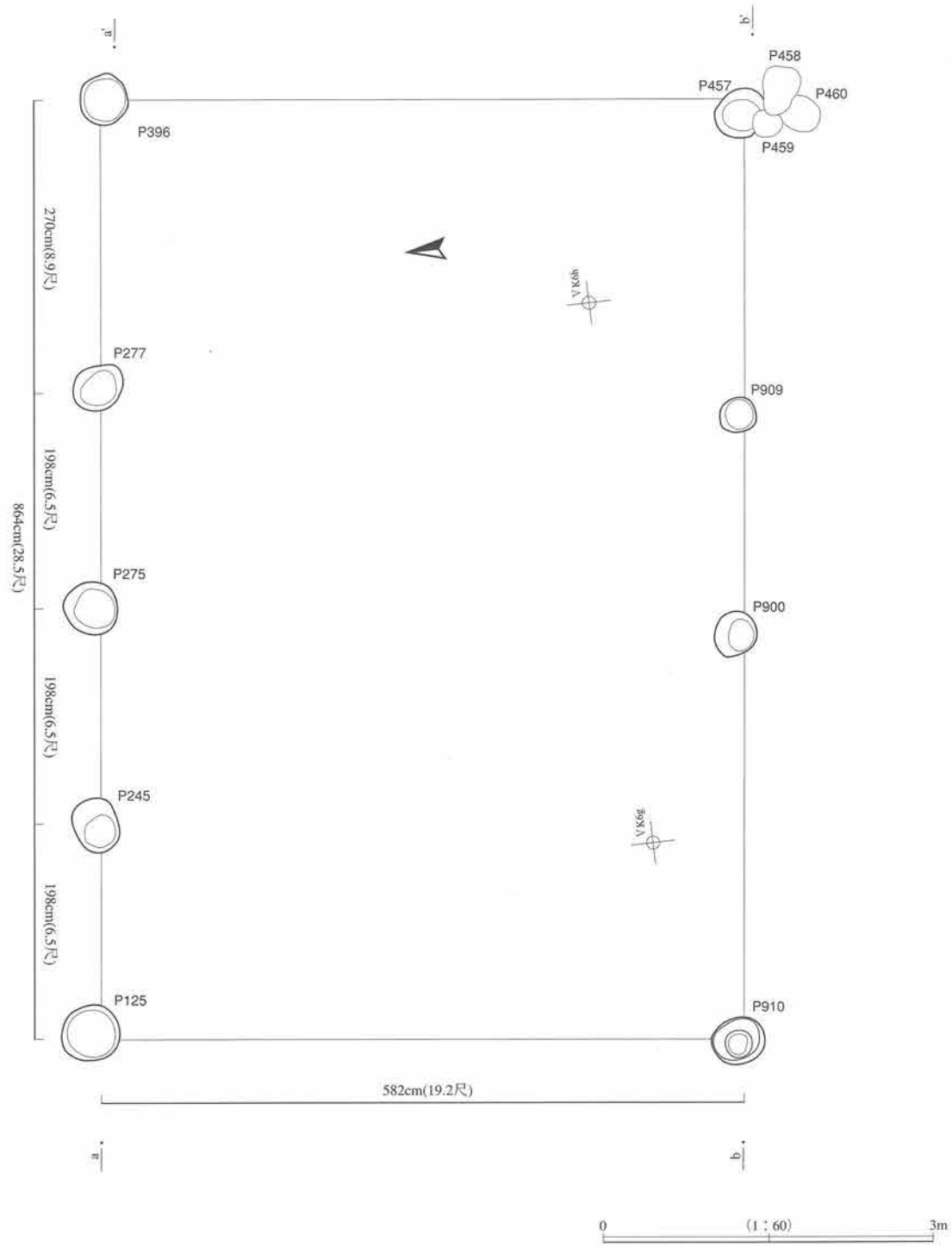
第113図　接待館遺跡　SB27

ＳＢ28掘立柱建物跡（第114・115図）

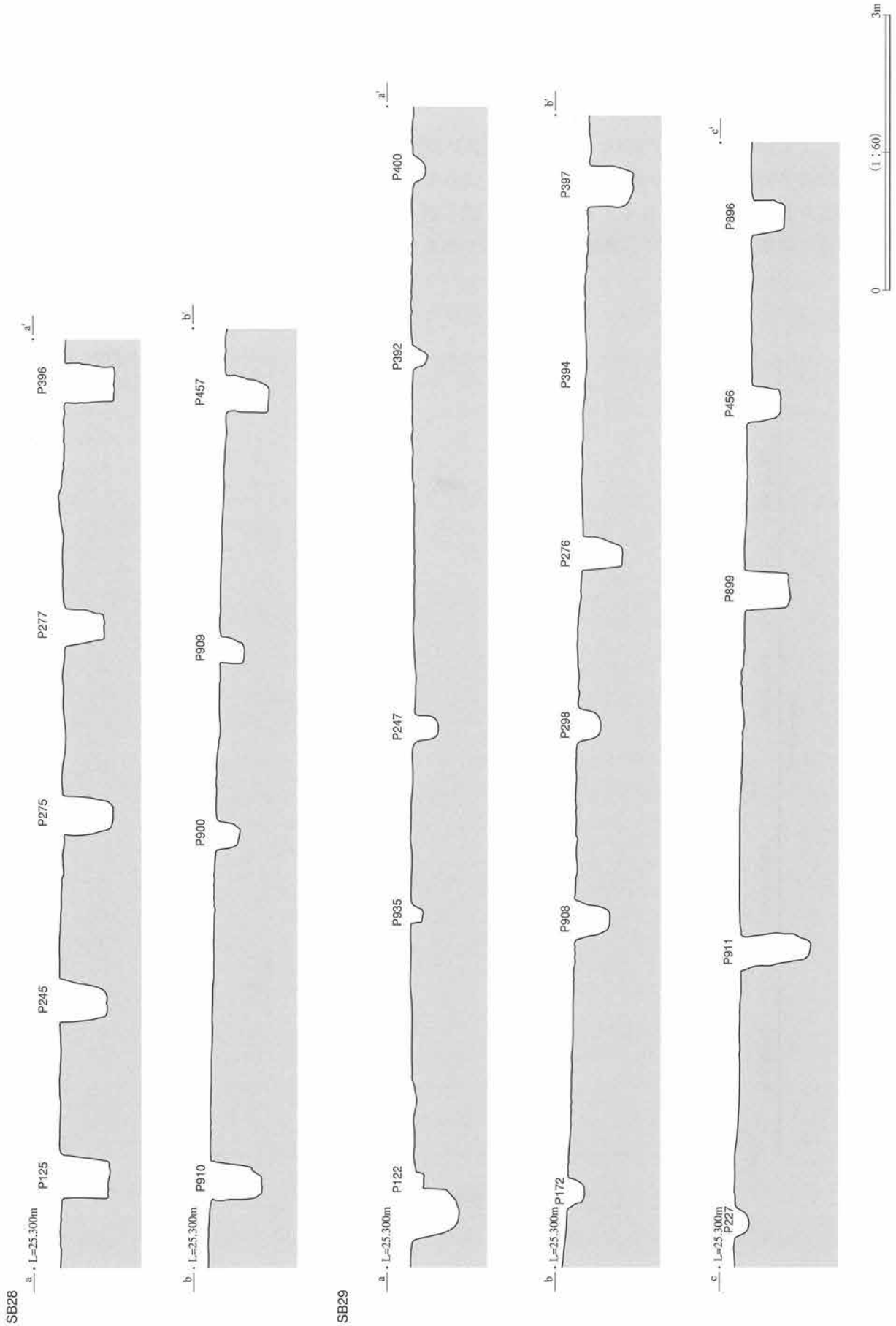
〔位置〕ＶＫ６ｇグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕９個の柱穴（Ｐ125・245・275・277・396、Ｐ910・900・909・457）を使用した。柱痕跡はＰ910で確認された。礎盤は確認されなかった。

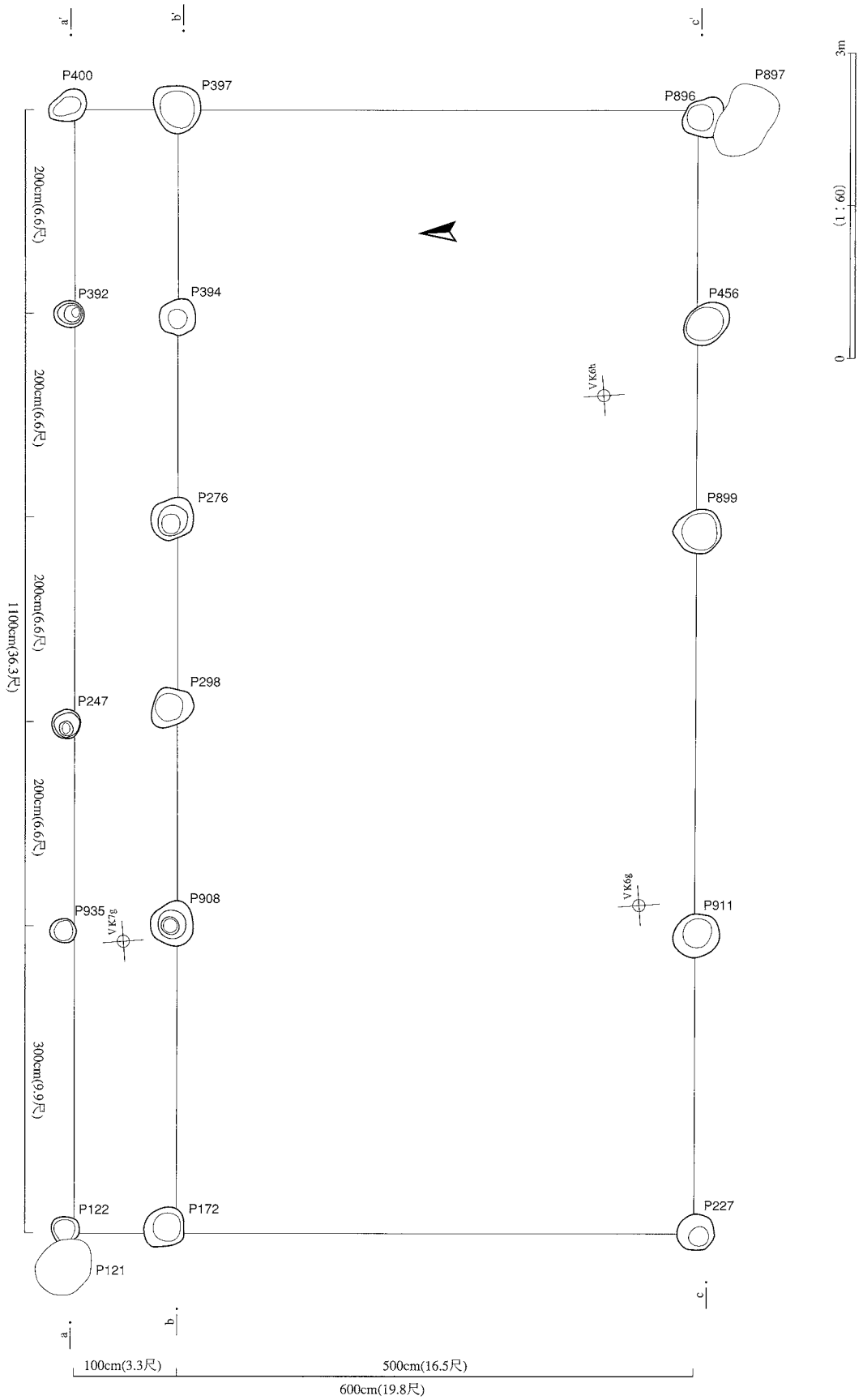
〔重複〕Ｐ125がＳＢ44のＰ126を切る。Ｐ396がＰ395を切る。Ｐ900・Ｐ910がＳＤ３を切る。Ｐ457がＳＢ13のＰ458とＳＢ33のＰ459に切られる。よって本建物はＳＢ44、ＳＤ３より新しく、ＳＢ13、ＳＢ33より古い。また、ＳＢ４・７・12・20・22・25・29・30・43・45・46とプランが重複するが、柱穴どうしの切り合いがなく、新旧関係は不明である。



第114図　接待館遺跡　SB28



第115図　接待館遺跡　SB28・29



第116図　接待館遺跡　SB29

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－97°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き864cm（28.5尺）、梁間582cm（19.2尺）で、面積は50.28㎡（15.19坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、198cm（6.5尺）・270cm（8.9尺）の２種類である。
〔出土遺物〕Ｐ275から手づくねかわらけ10片（15.0g）・ロクロかわらけ２片（28.1g）、Ｐ277から常滑産甕（2015）・手づくねかわらけ１片（8.1g）、Ｐ457から渥美産甕（2029）、Ｐ900から手づくねかわらけ２片（5.7g）・ロクロかわらけ１片（1.1g）、Ｐ909から手づくねかわらけ３片（3.9g）、Ｐ910から手づくねかわらけ７片（15.2g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。性格は不明である。

ＳＢ29掘立柱建物跡（第115・116図、写真図版80・86）
〔位置〕ＶＫ６ｇグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕16個の柱穴（Ｐ122・935・247・392・400、Ｐ172・908・298・276・394・397、Ｐ227・911・899・456・896）を使用した。Ｐ392・Ｐ247・Ｐ908で柱痕跡が確認された。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ456・Ｐ899・Ｐ911がＳＤ３を切る。Ｐ122がＳＢ22のＰ121に切られる。Ｐ896がＳＢ22のＰ897に切られる。Ｐ397がＳＢ22のＰ398に切られる。よって本建物はＳＤ３より新しく、ＳＢ22より古い。また、ＳＢ４・ＳＢ７・ＳＢ12・ＳＢ13・ＳＢ20・ＳＢ25・ＳＢ28・ＳＢ30・ＳＢ33・ＳＢ43・ＳＢ44・ＳＢ45・ＳＢ46とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－94°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き1110cm（36.3尺）、梁間600cm（19.8尺）で、面積は66.00㎡（19.94坪）である。桁行きと梁間の長さの比は11：６である。北面には下屋が付く。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、200cm（6.6尺）・300cm（9.9尺）の２種類である。200cmを６で割った33.33cmを用いて１尺′＝33.33cmと定めると、200cm＝６尺′で、桁行きの1100cm＝33尺′、梁間の600cm＝18尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な１尺（30.3cm）を用いず、１尺′＝33.3cmを基準寸法とした可能性が考えられる。
〔出土遺物〕手づくねかわらけ４片（5.6g）・ロクロかわらけ３片（9.2g）・木炭（14.4g）、Ｐ227から手づくねかわらけ５片（4.9g）、Ｐ276から手づくねかわらけ３片（4.9g）・ロクロかわらけ１片（4.5g）、Ｐ298から手づくねかわらけ10片（31.7g）・ロクロかわらけ２片（12.0g）・石英１個（4.7g）、Ｐ456から手づくねかわらけ１片（3.9g）、Ｐ899から手づくねかわらけ１片（0.8g）、Ｐ908から手づくねかわらけ５片（9.9g）・ロクロかわらけ３片（8.2g）、Ｐ911から手づくねかわらけ７片（13.8g）・ロクロかわらけ５片（54.0g）、Ｐ935から手づくねかわらけ４片（6.5g）・ロクロかわらけ２片（1.8g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。そして、12世紀後半のかわらけを多量に包含するＳＤ３より新しいことから、12世紀よりも新しい建物の可能性が高い。形状からは中世後半の建物と推測される。性格は、かなり大規模な建物であり、単なる付属屋ではなく、何らかの施設の中核的な建物と推測される。

ＳＢ30掘立柱建物跡（第117図、写真図版80・86）

〔位置〕ＶＫ６ｆグリッド付近に位置する。

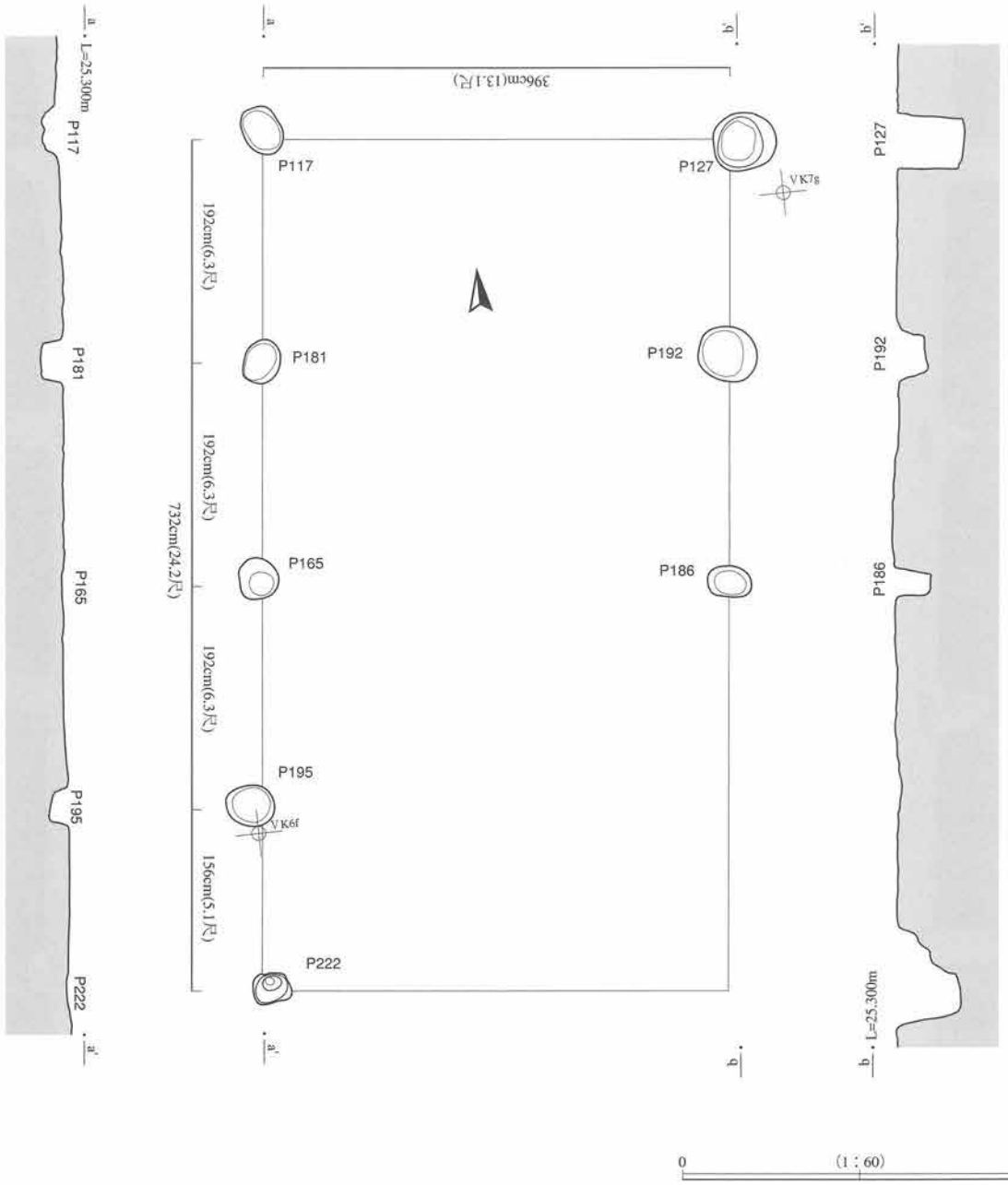
〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ127・192・186、Ｐ117・181・165・195・222）を使用した。礎盤は確認されなかった。南西隅の柱穴は検出されなかった。

〔重複〕ＳＢ３・ＳＢ４・ＳＢ７・ＳＢ13・ＳＢ16・ＳＢ20・ＳＢ21・ＳＢ22・ＳＢ28・ＳＢ29・ＳＢ43・ＳＢ45・ＳＢ46とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－６°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き732cm（24.2尺）、梁間396cm（13.1尺）で、面積は28.99㎡（8.76坪）である。桁行きと梁間の長さの比は24：13である。

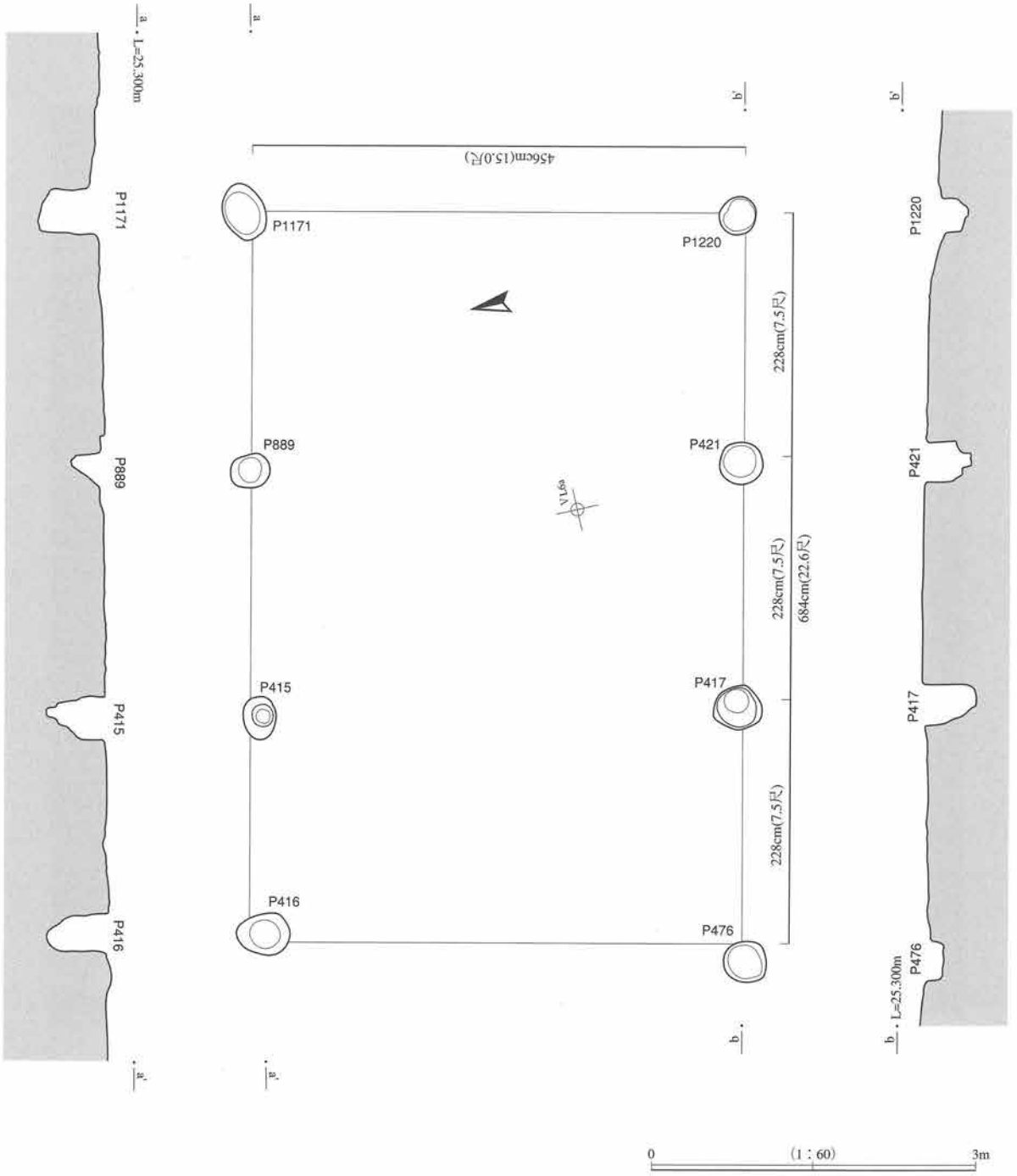
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、192cm（6.3尺）・156cm（5.1尺）の２種類である。



第117図　接待館遺跡　SB30

〔出土遺物〕Ｐ127から縄文土器（１）・渥美産甕（2034）、Ｐ186から手づくねかわらけ１片（1.2g）、Ｐ192から手づくねかわらけ１片（1.2g）、Ｐ222から手づくねかわらけ１片（0.6g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。性格は不明である。

ＳＢ31掘立柱建物跡（第118図、写真図版81・86）
〔位置〕ＶＬ６ａグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ416・415・889・1171、Ｐ476・417・421・1220）を使用した。柱痕跡はＰ415・Ｐ417で確認された。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ415、Ｐ889はＳＤ３を切り、本建物はＳＤ３より新しい。ＳＢ32とプランが重複するが、



第118図　接待館遺跡　SB31

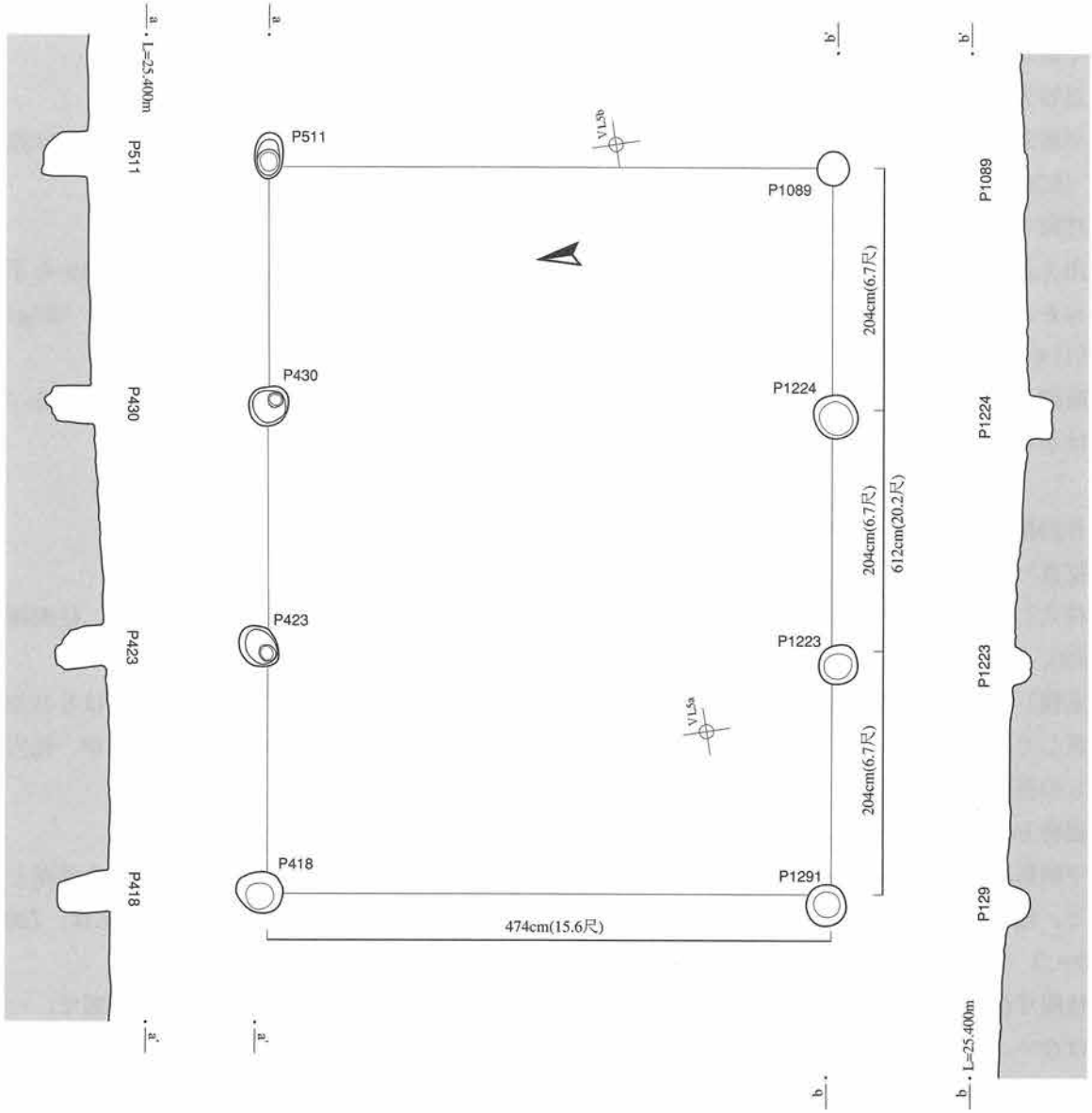
柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、N－103°－Eである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き684cm（22.6尺）、梁間456cm（15尺）で、面積は31.19㎡（9.42坪）である。桁行きと梁間の長さの比は684：456＝３：２である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて228cm（7.5尺）である。228cmを６で割った38cmを用いて１尺′＝38cmと定めると、228cm＝６尺′で、桁行きの684cm＝18尺′、梁間の456cm＝12尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な１尺（30.3cm）を用いず、１尺′＝38cmを基準寸法とした可能性が考えられる。

〔出土遺物〕Ｐ415から手づくねかわらけ３片（6.2g）、Ｐ416から縄文土器１片（2.0g）・手づくねかわらけ18片（35.8g）・ロクロかわらけ３片（6.5g）、Ｐ421から手づくねかわらけ１片（1.6g）・ロクロ



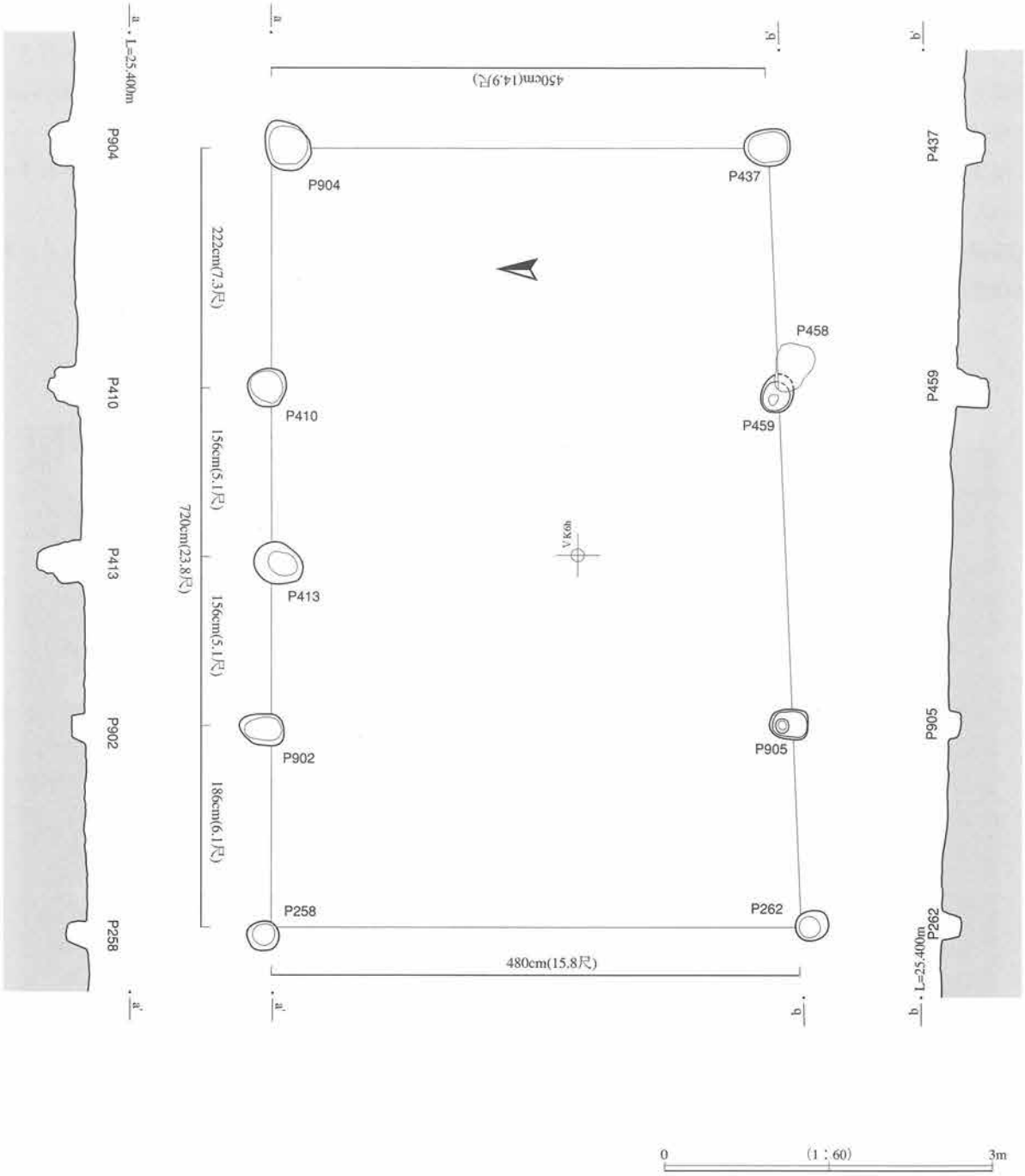
0　(1：60)　3m

第119図　接待館遺跡　SB32

かわらけ１片（1.0g）、Ｐ889から手づくねかわらけ17片（39.0g）・ロクロかわらけ４片（8.6g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。そして、12世紀後半のかわらけを多量に包含するＳＤ３より新しいことから、12世紀よりも新しい建物の可能性が高い。性格は不明である。

ＳＢ32掘立柱建物跡（第119図、写真図版81・86）
〔位置〕ＶＬ５ａグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ418・423・430・511、Ｐ1291・1223・1224・1089）を使用した。ただし、Ｐ1089は検出のみである。柱痕跡はＰ511・Ｐ430・Ｐ423で確認された。
〔重複〕ＳＢ31・ＳＢ49とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－99°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き612cm（20.2尺）、梁間474cm（15.6尺）で、面積は29.01㎡（8.76坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて204cm（6.7尺）である。
〔出土遺物〕Ｐ418から手づくねかわらけ２片（2.0g）・ロクロかわらけ１片（4.0g）、Ｐ423から手づくねかわらけ５片（9.6g）、Ｐ430から手づくねかわらけ２片（2.8g）・ロクロかわらけ１片（0.7g）、Ｐ511からロクロかわらけ１片（4.1g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。性格は不明である。

ＳＢ33掘立柱建物跡（第120図、写真図版81・86）
〔位置〕ＶＫ６ｈグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕９個の柱穴（Ｐ258・902・413・410・904、Ｐ262・905・459・437）を使用した。柱痕跡はＰ405、Ｐ459で確認された。礎石は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ459がＳＢ28のＰ457とＰ460を切り、ＳＢ13のＰ458に切られる。よって本建物はＳＢ28より新しく、ＳＢ13より古い。また、ＳＢ７・ＳＢ22・ＳＢ25・ＳＢ29とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－90°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。東辺と西辺で長さが異なり、プランは台形となる。西辺を基準とすると、規模は、桁行き720cm（23.8尺）、梁間480cm（15.8尺）で、桁行きと梁間の長さの比は、720：480＝３：２である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、156cm（5.1尺）・186cm（6.1尺）・222cm（7.3尺）の３種類で、一定ではない。
〔出土遺物〕Ｐ262から手づくねかわらけ12片（65.3g）・ロクロかわらけ３片（7.6g）、Ｐ410から手づくねかわらけ４片（4.6g）、Ｐ902から手づくねかわらけ４片（6.0g）・ロクロかわらけ３片（1.0g）、Ｐ905から手づくねかわらけ９片（33.4g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。性格は不明である。



第120図　接待館遺跡　SB33

ＳＢ34掘立柱建物跡（第121図、写真図版82・86）

〔位置〕ＶＬ７ｈグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕10個の柱穴（Ｐ960・970・669・971・972、Ｐ681・683・685・686・750）を使用した。ただし、柱穴はすべて半裁したのみである。柱痕跡はＰ681・Ｐ683で確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕ＳＤ６と重複するが本建物が新しい。

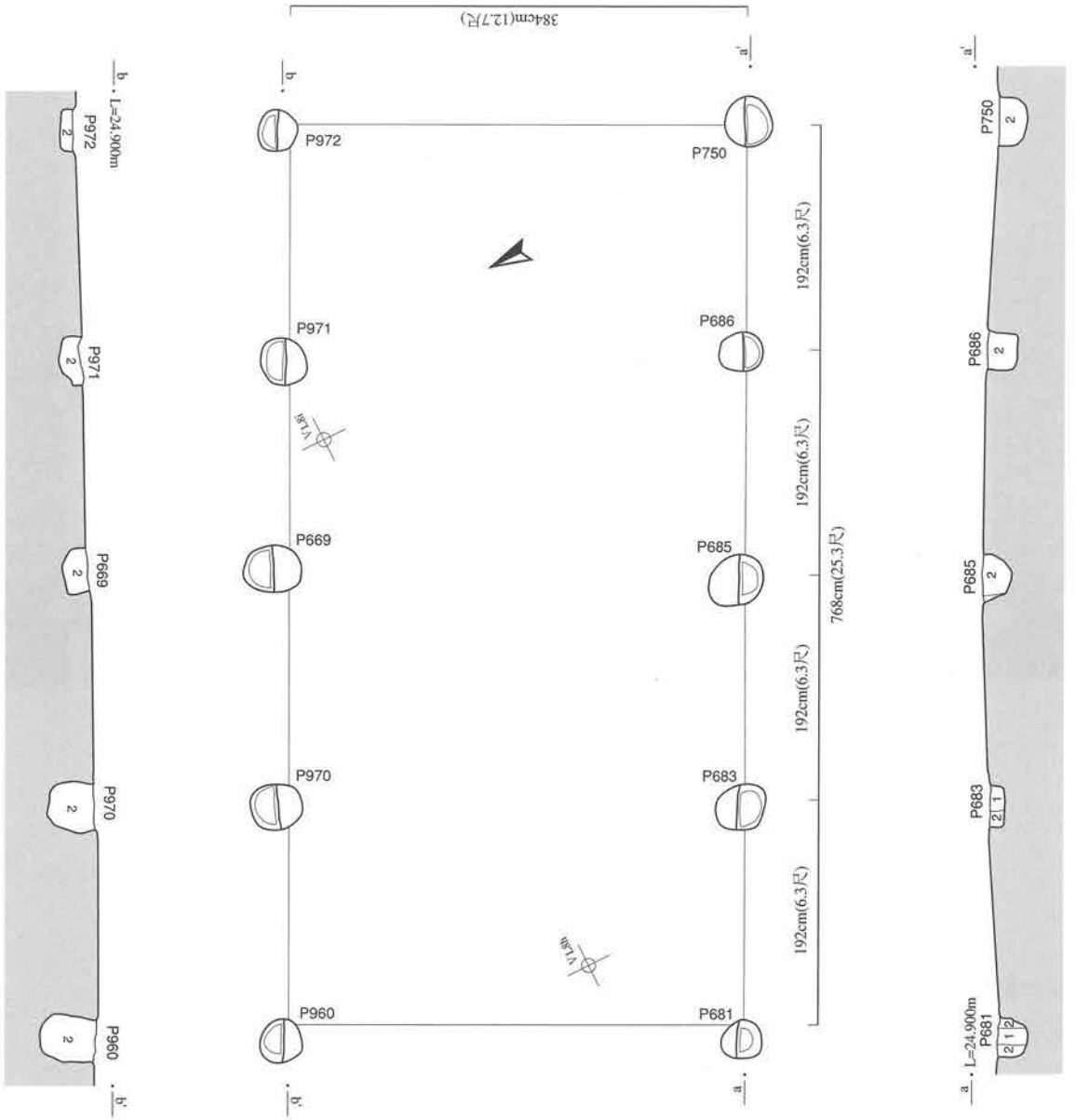
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－117°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き768cm（25.3尺）、梁間384cm（12.7尺）で、面積は29.49㎡（8.91坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、768：384＝２：１である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて192cm（6.3尺）である。192cmを６で割った32cmを用いて１尺′＝32cmと定めると、192cm＝６尺′で、桁行きの768cm＝24尺′、梁間の384cm＝12尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な１尺（30.3cm）を用いず、１尺′＝32cmを基準寸法とした可能性が考えられる。

〔出土遺物〕Ｐ685から手づくねかわらけ１片（1.9g）・ロクロかわらけ２片（6.9g）、Ｐ686から手づくねかわらけ１片（1.1g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。性格は不明である。



SB34
1　10YR3/2　黒褐色土　柱痕
2　10YR4/2　灰黄褐色土　炭化物多量混入　10YR4/4ブロック含

0　(1：60)　3m

第121図　接待館遺跡　SB34

ＳＢ35掘立柱建物跡（第122図、写真図版69・71）

〔位置〕ＶＭ３ｇグリッド付近に位置する。接待館遺跡の東端部付近である。

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ994・993・798・777、Ｐ995・996・997・998）を使用した。柱痕跡はＰ994で確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕なし。

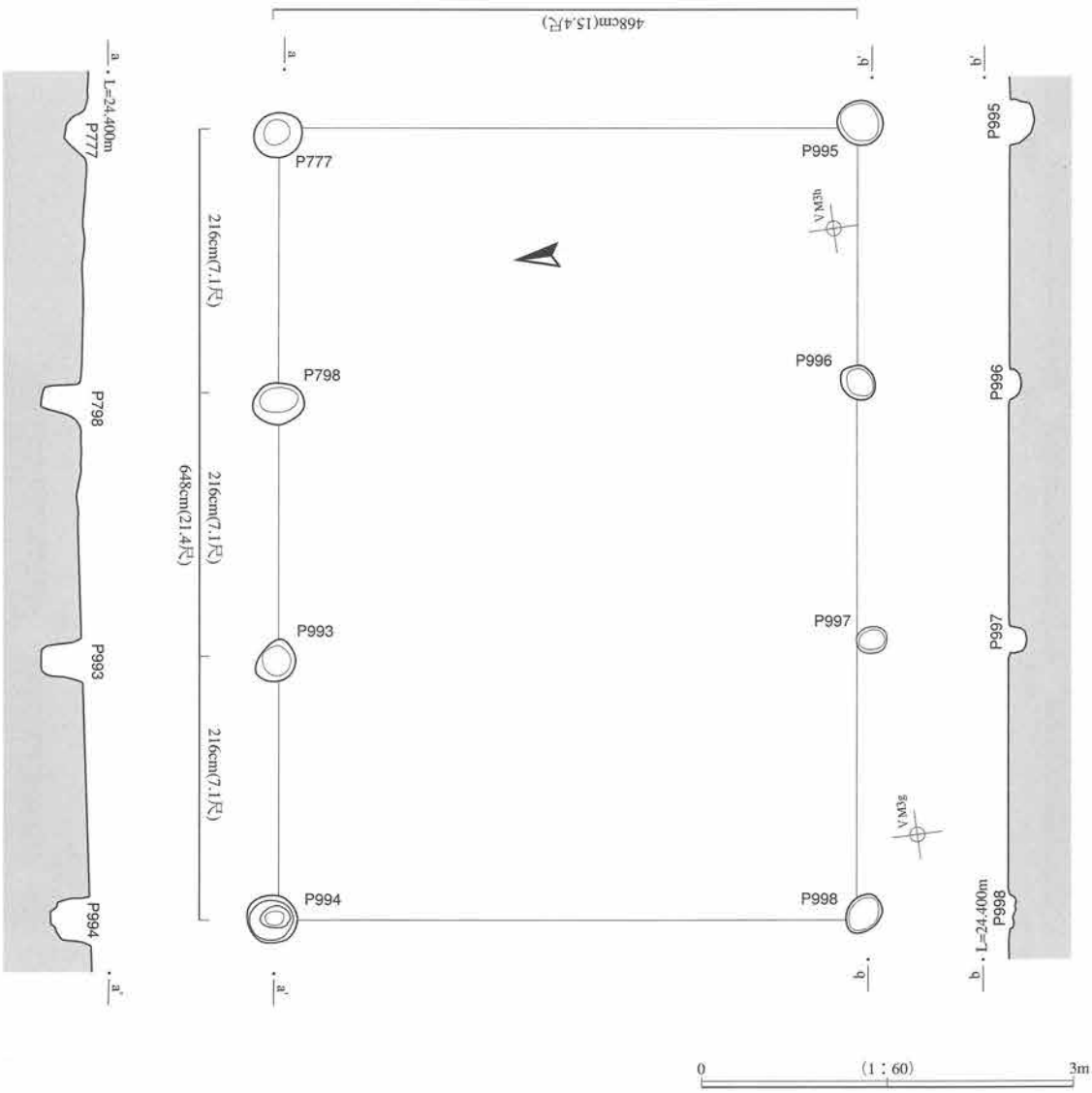
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－97°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き648cm（21.4尺）、梁間468cm（15.4尺）で、面積は30.33㎡（9.16坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、648：468＝18：13である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて216cm（7.1尺）である。216cmを６で割った36cmを用いて１尺′＝36cmと定めると、216cmは６尺′で、桁行きの648cm＝18尺′、梁間の468cm＝13尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な１尺（30.3cm）を用いず、１尺′＝36cmを基準寸法とした可能性が考えられる。

〔出土遺物〕なし。

〔時期・性格〕時期、性格ともに不明である。



第122図　接待館遺跡　SB35

ＳＢ36掘立柱建物跡（第123図、写真図版69・71）

〔位置〕ＶＭ３ｉグリッド付近に位置する。接待館遺跡の東端付近である。

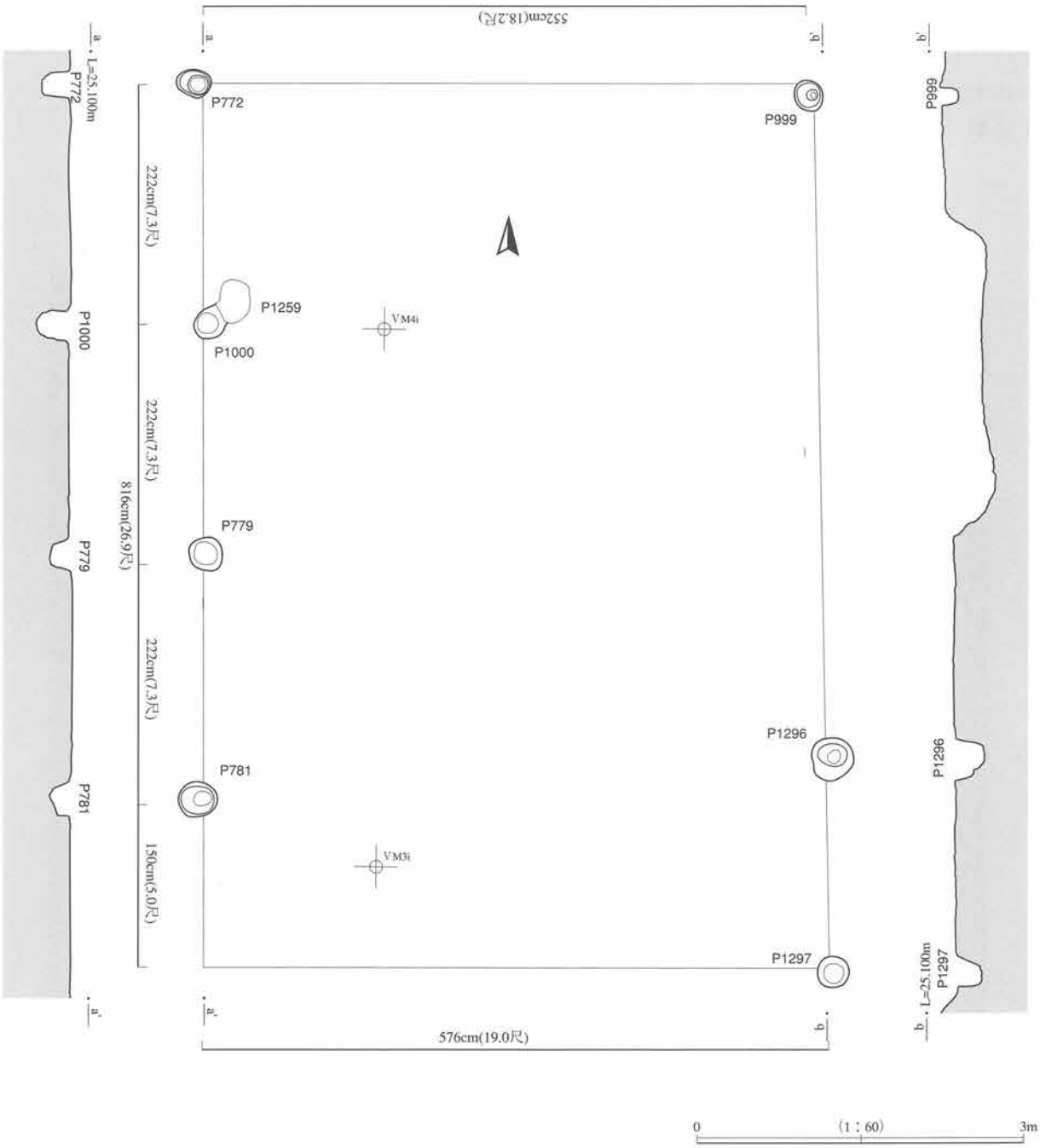
〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ999・1296・1297、Ｐ772・1000・779・781）を使用した。柱痕跡はＰ999・Ｐ1296・Ｐ772・Ｐ781で確認された。礎盤は確認されなかった。南西隅の柱穴は検出できなかった。

〔重複〕Ｐ1000がＰ1259に切られる。他に重複する建物跡はない。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－179°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。北辺と南辺で長さが異なり、プランは台形となる。南辺を基準とすると、規模は、桁行き816cm（26.9尺）、梁間552cm（18.2尺）で、面積は45.04㎡（13.61坪）である。

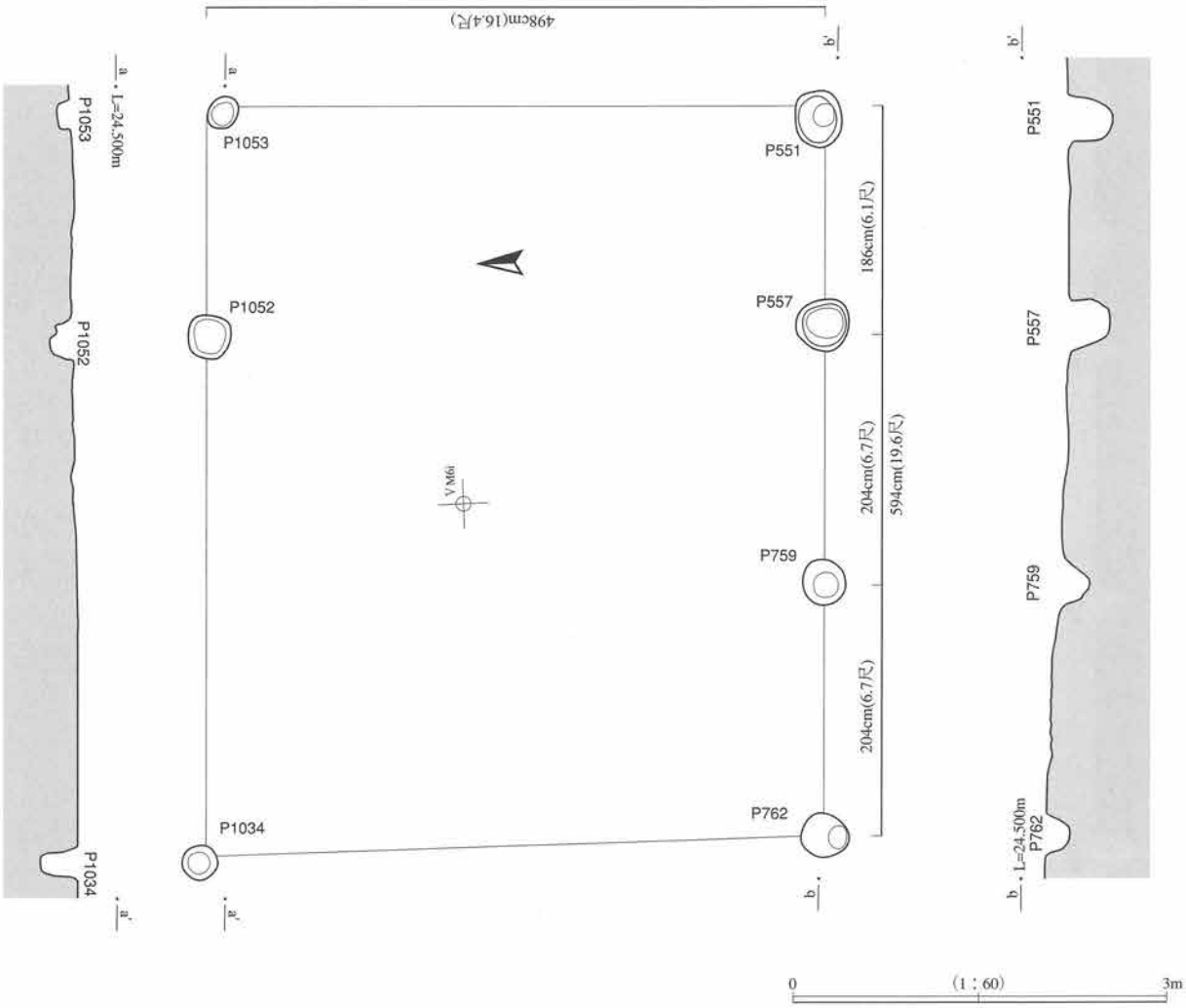
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、222cm（7.3尺）・150cm（5.0尺）の２種類である。



第123図　接待館遺跡　SB36

〔出土遺物〕なし。
〔時期・性格〕時期、性格ともに不明である。

ＳＢ37掘立柱建物跡（第124図、写真図版69・71）
〔位置〕ＶＭ５ｉグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ1034・1052・1053、Ｐ762・759・557・551）を使用した。柱痕跡はＰ551で確認された。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕ＳＢ38・ＳＢ39・ＳＢ40とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－92°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。北辺と南辺の長さが異なり、プランは台形となる。南辺を基準とすると、規模は、桁行き594cm（19.6尺）、梁間498cm（16.4尺）で、面積は29.58㎡（8.94坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、204cm（6.7尺）・186cm（6.1尺）の２種類である。
〔出土遺物〕なし。
〔時期・性格〕時期、性格ともに不明である。



第124図　接待館遺跡　SB37

ＳＢ38掘立柱建物跡（第125図、写真図版70・71）

〔位置〕ＶＭ５ｈグリッド付近に位置する。接待館遺跡の東端付近である。

〔柱穴〕６個の柱穴（Ｐ1295・556、Ｐ1199・1294・1254・769）を使用した。柱痕跡はＰ769で確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕ＳＢ37・ＳＢ39・ＳＢ40とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

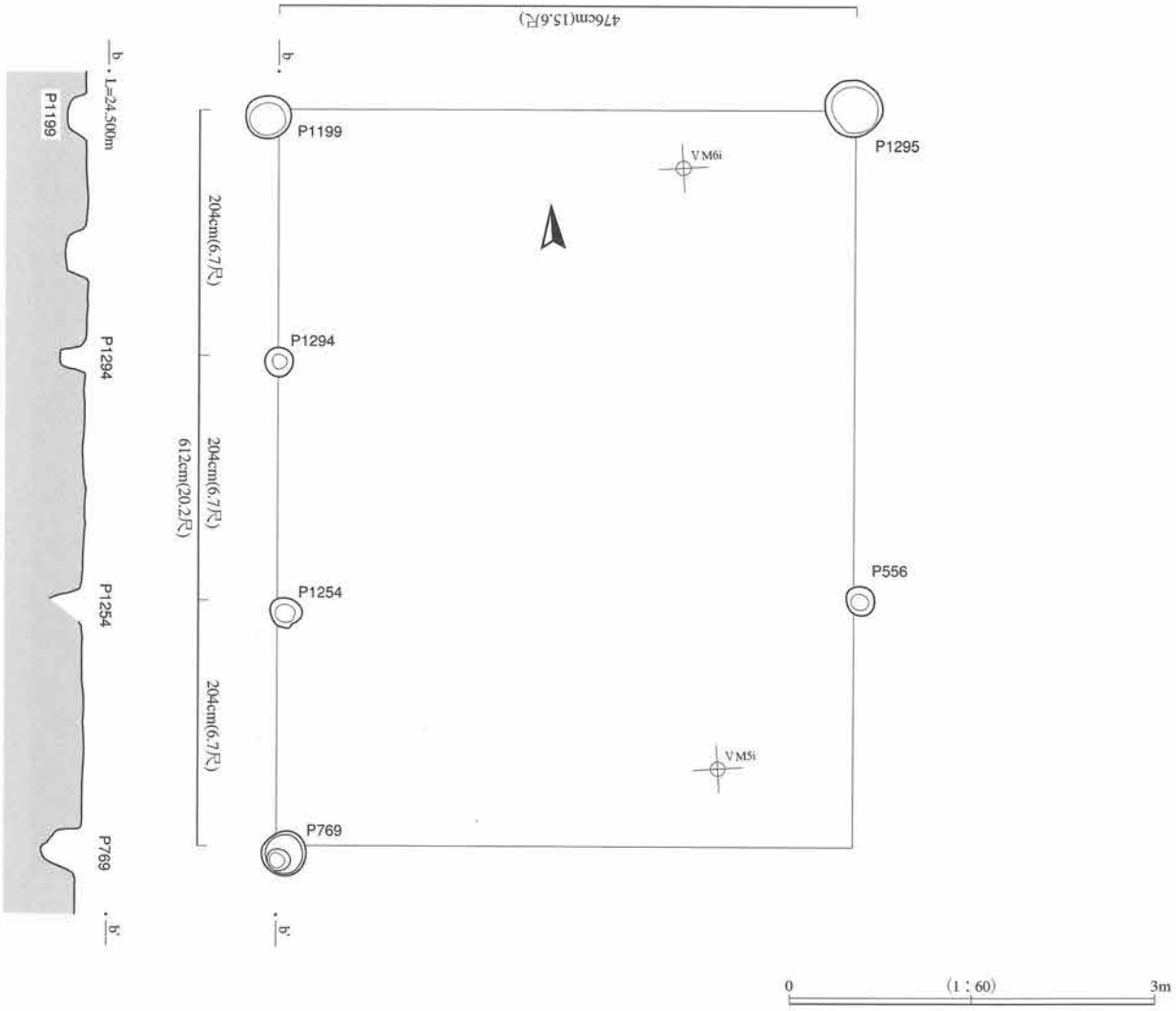
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－３°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き612cm（20.2尺）、梁間476cm（15.7尺）で、面積は29.13㎡（8.80坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、612：476＝９：７である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて204cm（6.7尺）である。204cmを６で割った34cmを用いて１尺′＝34cmと定めると、204cmは６尺′で、桁行きの612cmは18尺′、梁間の476cmは14尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な１尺（30.3cm）を用いず、１尺′＝34cmを基準寸法とした可能性が考えられる。

〔出土遺物〕Ｐ556から、ロクロかわらけ１片（1.0g）が出土した。

〔時期・性格〕ロクロかわらけが出土したことから12世紀以降の建築と推測される。性格は不明である。



第125図　接待館遺跡　SB38

ＳＢ39掘立柱建物跡（第126図、写真図版70・71）

〔位置〕ＶＭ５ｈグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ1190・1197・1043・1203、Ｐ1042・767・1255・1261）を使用した。柱痕跡はＰ1203・Ｐ1043・Ｐ767で確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕ＳＢ37・ＳＢ38・ＳＢ40とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

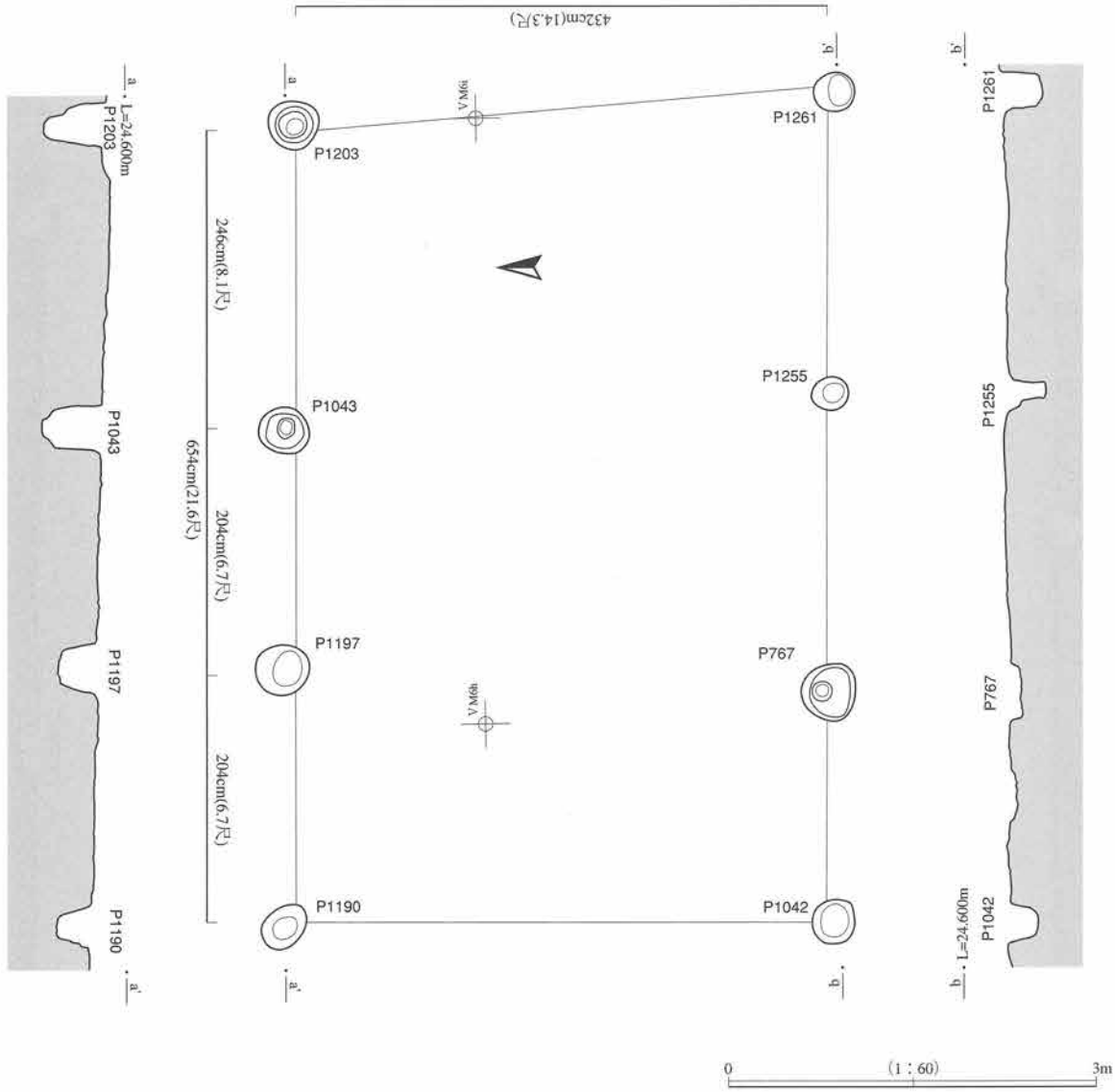
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－91°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。北辺と南辺で長さが異なり、プランは台形となる。北辺を基準とすると、規模は、桁行き654cm（21.6尺）、梁間432cm（14.3尺）で、面積は28.25㎡（8.54坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、204cm（6.7尺）・246cm（8.1尺）の２種類である。

〔出土遺物〕なし。

〔時期・性格〕時期、性格ともに不明である。



第126図　接待館遺跡　SB39

ＳＢ40掘立柱建物跡（第127図、写真図版71）

〔位置〕ＶＭ５ｇグリッド付近に位置する。接待館遺跡の東端付近である。

〔柱穴〕６個の柱穴（Ｐ761・770・776、Ｐ790・791・793）を使用した。礎盤は確認されなかった。

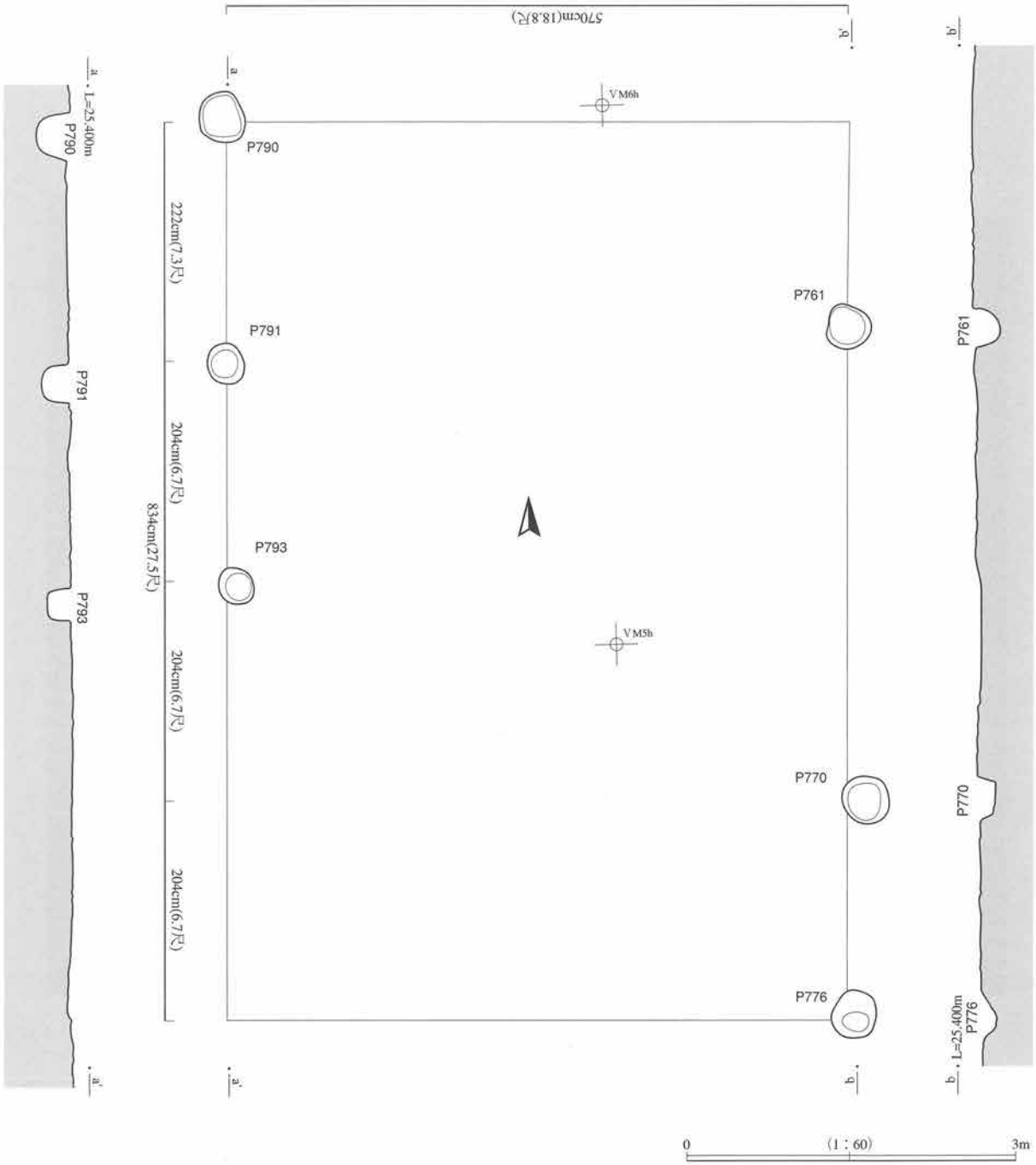
〔重複〕ＳＢ37・38・39・41とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。北東隅、南西隅の柱穴は検出されなかった。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－２°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き834cm（27.5尺）、梁間570cm（18.8尺）で、面積は47.54㎡（14.36坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、204cm（6.7尺）・222cm（7.3尺）の２種類である。

〔出土遺物〕なし。



第127図　接待館遺跡　SB40

〔時期・性格〕時期、性格ともに不明である。

ＳＢ41掘立柱建物跡（第128図、写真図版70・71）

〔位置〕ＶＭ５ｇグリッド付近に位置する。接待館遺跡の東端付近である。

〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ1050・1049・1035、Ｐ795・789・785・1051）を使用した。柱痕跡はＰ1049・Ｐ789・Ｐ795で確認された。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ1051がＰ766を切る。Ｐ1035がＰ1036に切られる。また、ＳＢ40とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－89°－Ｅである。

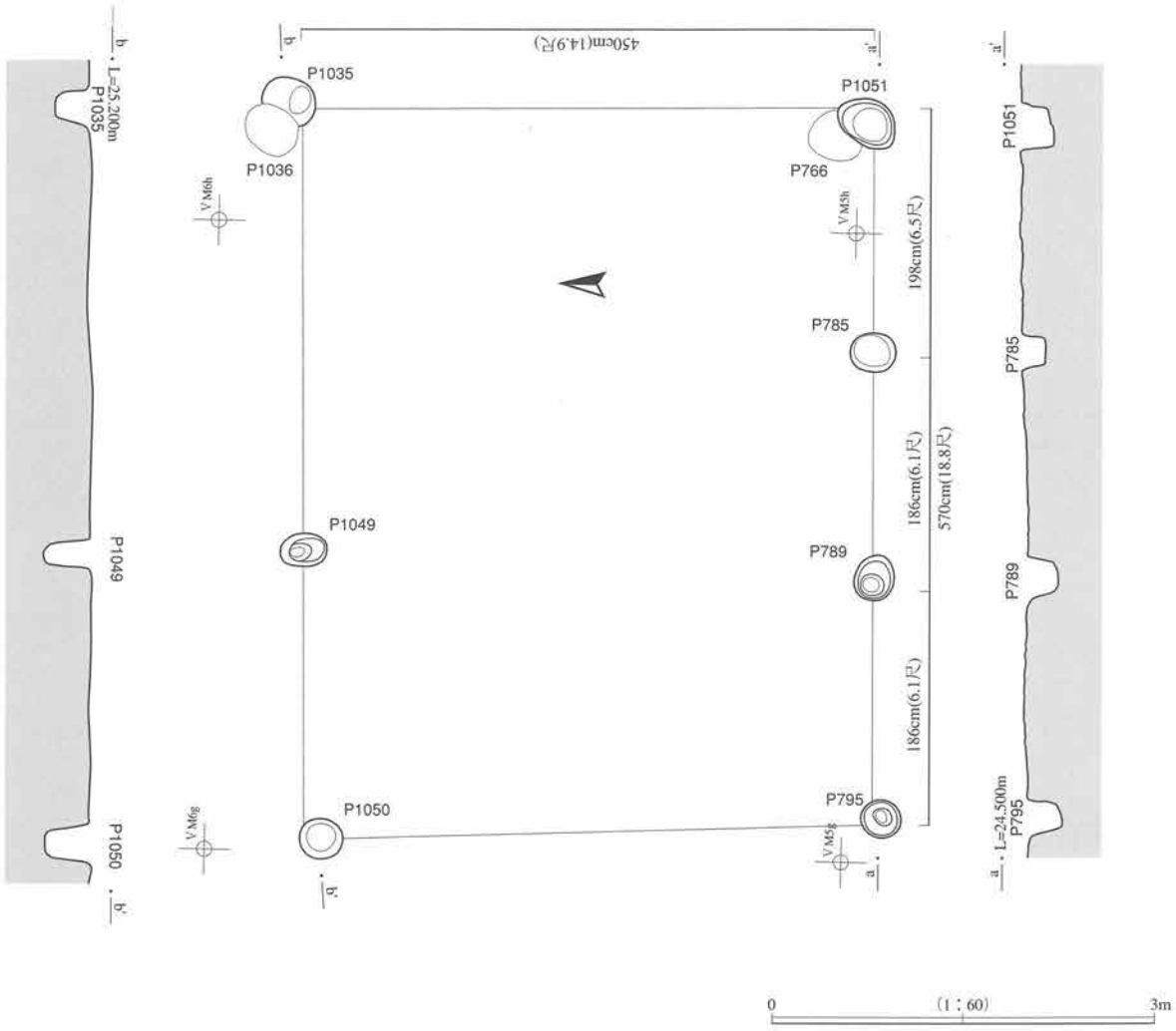
〔平面形式〕掘立柱建物である。北辺と南辺で長さが異なり、プランは台形となる。南辺を基準とすると、規模は、桁行き570cm（18.8尺）、梁間450cm（14.9尺）で、面積は25.65㎡（7.75坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、570：450＝19：15である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、186cm（6.1尺）・198cm（6.5尺）の２種類である。

〔出土遺物〕なし。

〔時期・性格〕時期、性格ともに不明である。

ＳＢ42掘立柱建物跡　欠番



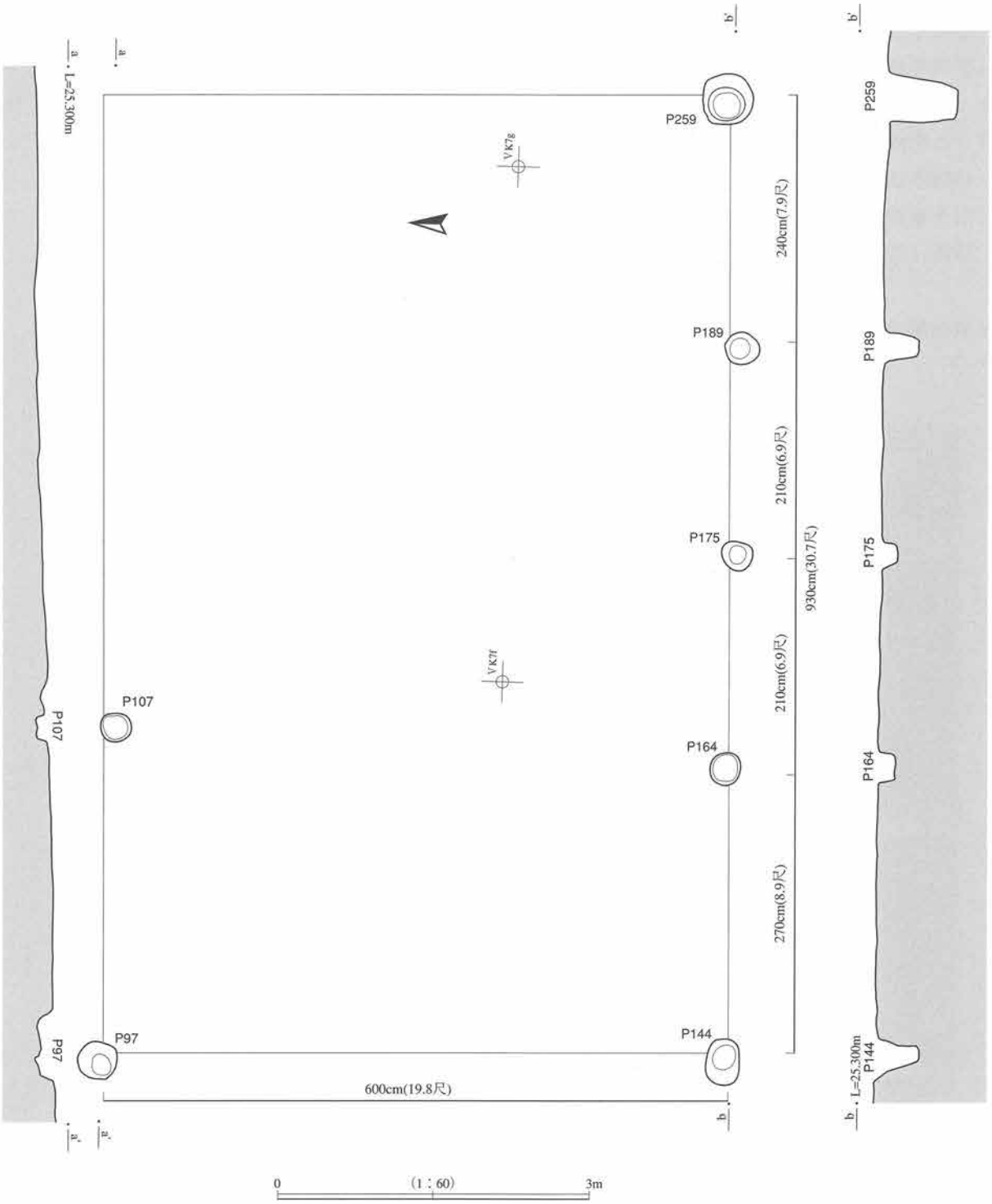
第128図　接待館遺跡　SB41

ＳＢ43掘立柱建物跡（第129図）

〔位置〕ＶＫ７ｆグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ97・107、Ｐ144・164・175・189・259）を使用した。礎盤は確認されなかった。北東側の柱穴が検出されていないが、この付近は検出面の標高が低くなっており、失われたと推測される。

〔重複〕ＳＢ２・ＳＢ３・ＳＢ４・ＳＢ５・ＳＢ６・ＳＢ７・ＳＢ14・ＳＢ20・ＳＢ21・ＳＢ22・ＳＢ28・ＳＢ29・ＳＢ30・ＳＢ44・ＳＢ45・ＳＢ46とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合



第129図　接待館遺跡　SB43

いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、N－89°－Eである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き930cm（30.7尺）、梁間600cm（19.8尺）で、面積は55.80㎡（16.86坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、930：600＝31：20である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、210cm（6.9尺）・240cm（7.9尺）・270cm（8.9尺）の３種類である。210cmを７で割った30.0cmを用いて１尺′＝30.0cmと定めると、210cm＝７尺′、240cm＝８尺′、270cm＝９尺′で、桁行きの930cm＝31尺′、梁間の600cm＝20尺′となり、桁行き・梁間ともに切りのいい数値となる。よって、この建物の設計には、曲尺による標準的な１尺（30.3cm）を用いず、１尺′＝30.0cmを基準寸法とした可能性が考えられる。

〔出土遺物〕Ｐ97から手づくねかわらけ２片（11.5g）・ロクロかわらけ１片（3.6g）、Ｐ144から縄文土器２片（18.1g）・手づくねかわらけ７片（11.6g）・ロクロかわらけ２片（4.4g）、Ｐ189から手づくねかわらけ２片（2.7g）・ロクロかわらけ１片（1.1g）、Ｐ259から手づくねかわらけ36片（83.7g）・ロクロかわらけ14片（40.6g）が出土した。

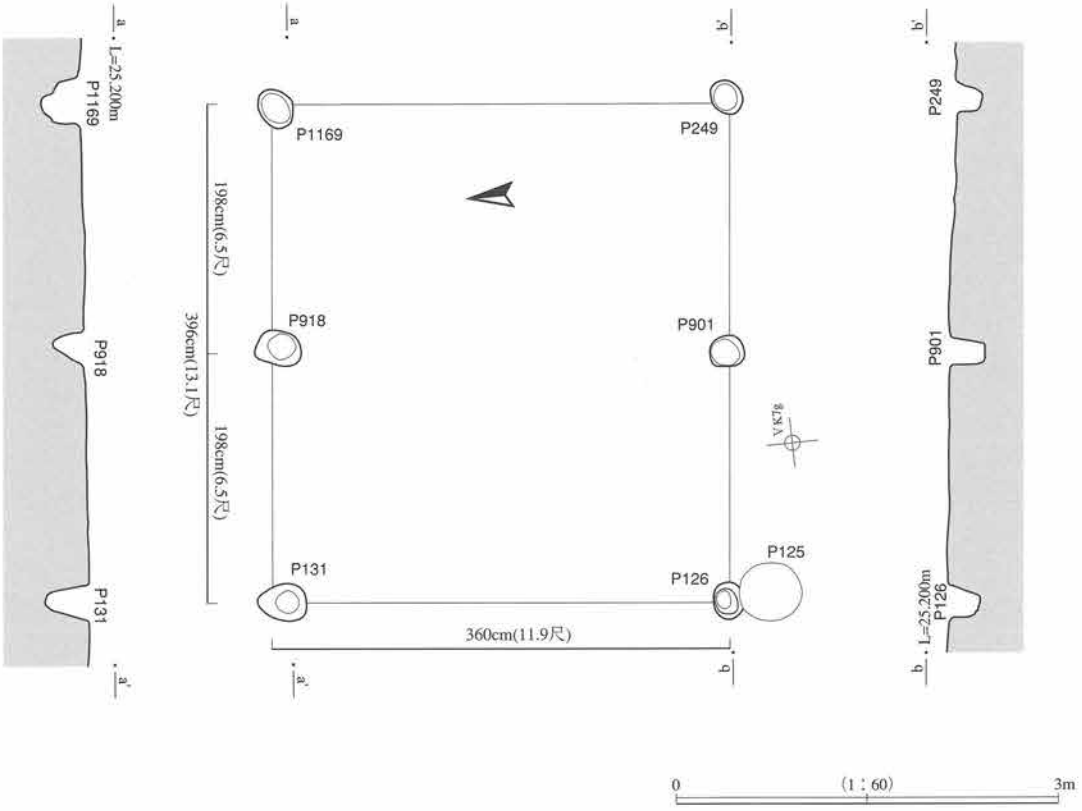
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。性格は不明である。

ＳＢ44掘立柱建物跡（第130図）

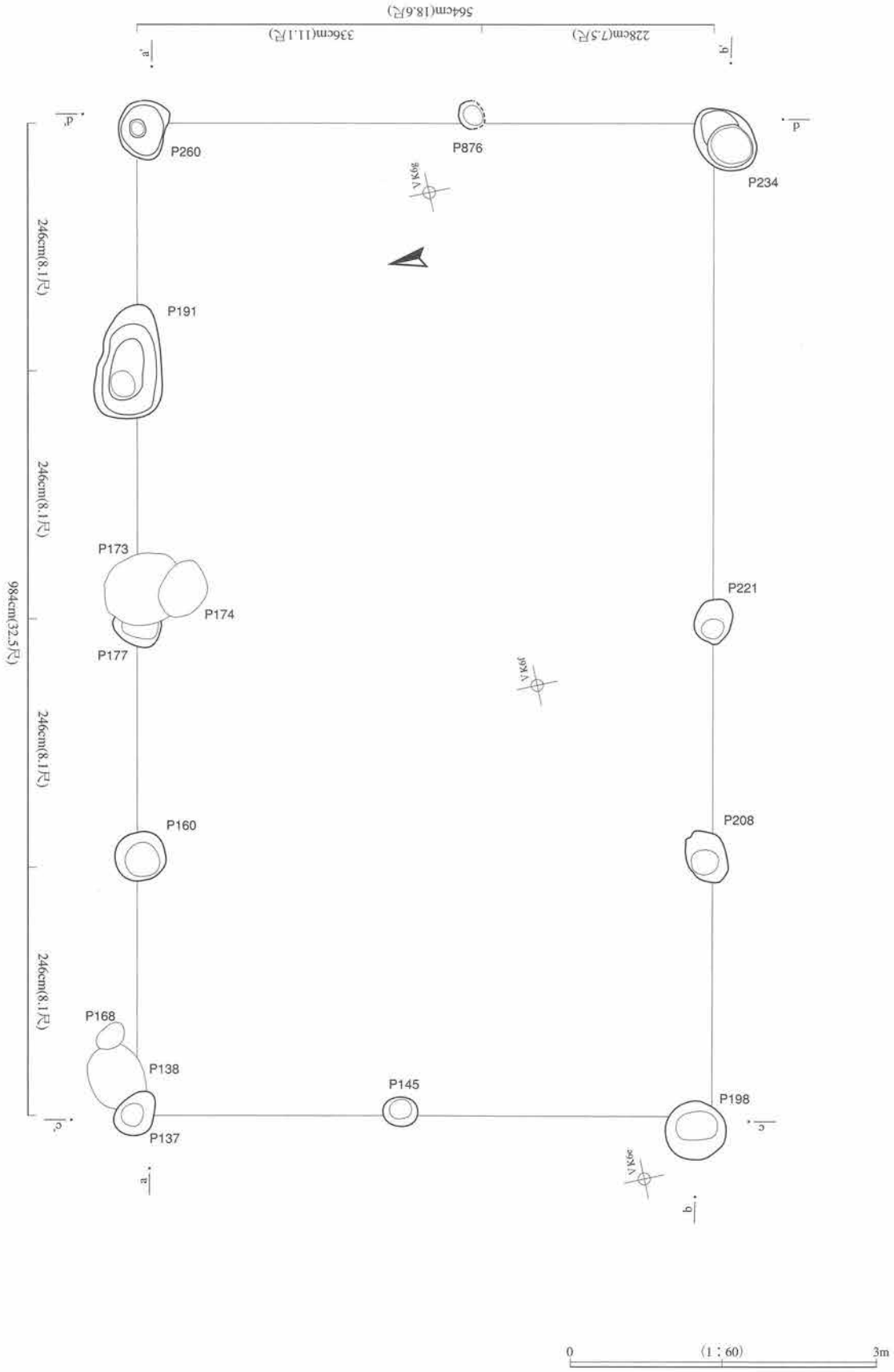
〔位置〕ＶＫ７ｇグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕６個の柱穴（Ｐ131・918・1169、Ｐ126・901・249）を使用した。柱痕跡はＰ126で確認された。礎盤は確認されなかった。

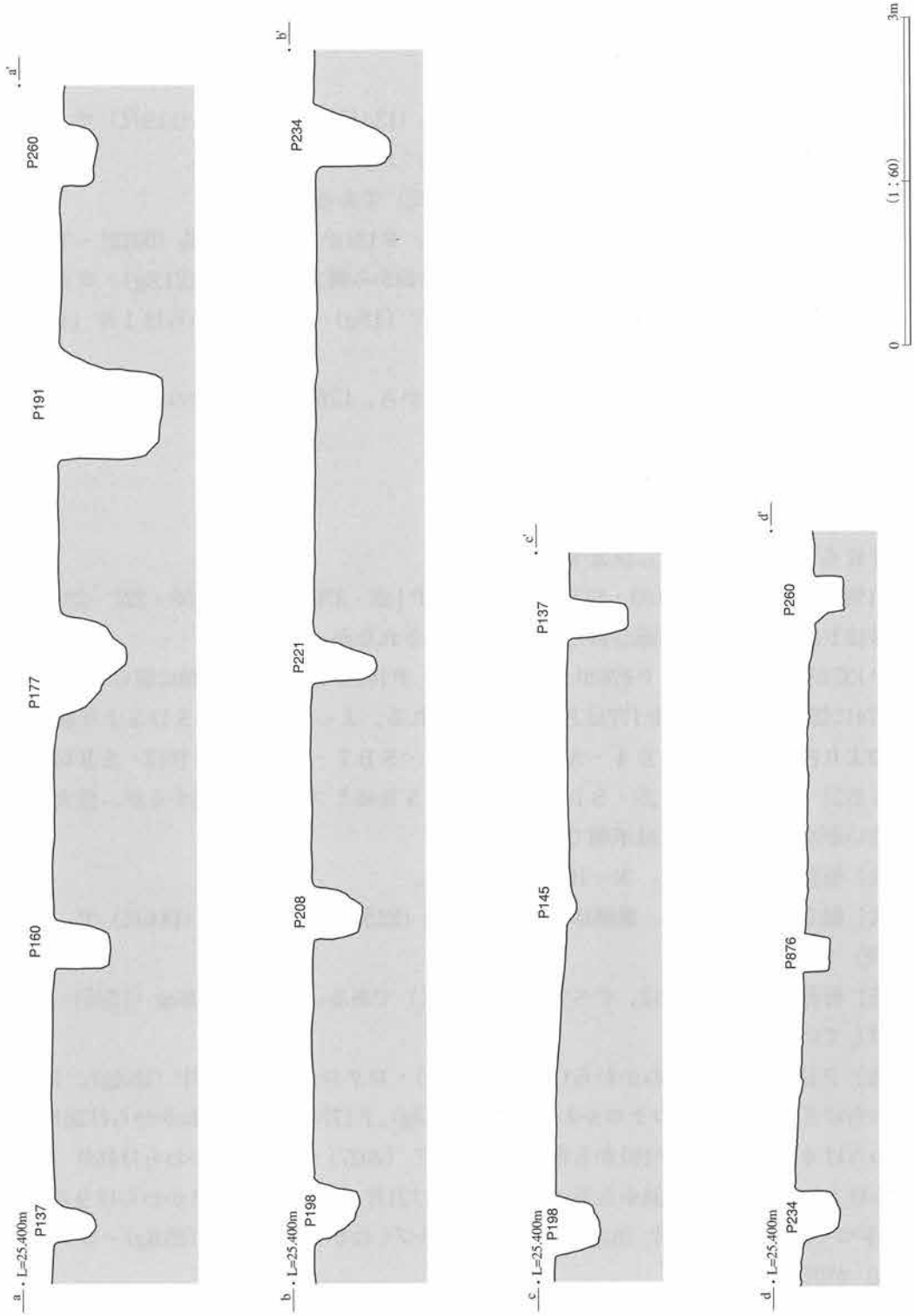
〔重複〕Ｐ126がＳＢ28のＰ125に切られる。Ｐ1169がＳＢ１のＰ244を切る。よって本建物はＳＢ28



第130図　接待館遺跡　SB44



第131図　接待館遺跡　SB45



第132図　接待館遺跡　SB45

より古く、ＳＢ１より新しい。また、ＳＢ２・ＳＢ３・ＳＢ４・ＳＢ７・ＳＢ22・ＳＢ29・ＳＢ43とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－96°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き396cm（13.1尺）、梁間360cm（11.9尺）で、面積は14.26㎡（4.31坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、396：360＝11：10である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて198cm（6.5尺）である。
〔出土遺物〕Ｐ126から手づくねかわらけ２片（7.3g）、Ｐ131から不明鉄製品（5022）・手づくねかわらけ61片（135.7g）・ロクロかわらけ５片（6.3g）、Ｐ249から縄文土器１片（21.8g）・ロクロかわらけ１片（3.4g）、Ｐ901から渥美産甕（2043）・土師器１片（4.9g）・ロクロかわらけ１片（1.0g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。性格は不明である。

ＳＢ45掘立柱建物跡（第131・132図）
〔位置〕ＶＫ６ｆグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕11個の柱穴（Ｐ137・160・177・191・260、Ｐ145・876、Ｐ198・208・221・234）を使用した。柱痕跡はＰ260・Ｐ191で確認された。礎盤は確認されなかった。
〔重複〕Ｐ137がＰ138を切る。Ｐ876がＳＤ３を切る。Ｐ160がＳＢ12のＰ149に切られる。Ｐ177がＳＢ22のＰ174に切られる。またＰ177はＰ173にも切られる。よって本建物はＳＤ３より新しく。ＳＢ12、ＳＢ22より古い。また、ＳＢ４・ＳＢ５・ＳＢ６・ＳＢ７・ＳＢ８・ＳＢ13・ＳＢ14・ＳＢ16・ＳＢ20・ＳＢ21・ＳＢ28・ＳＢ29・ＳＢ30・ＳＢ43・ＳＢ46とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－102°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き984cm（32.5尺）、梁間564cm（18.6尺）で、面積は55.50㎡（16.77坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて246cm（8.1尺）である。梁間では228cm（7.5尺）・336cm（11.1尺）を使用している。
〔出土遺物〕Ｐ137から手づくねかわらけ14片（37.6g）・ロクロかわらけ９片（18.4g）、Ｐ160から手づくねかわらけ５片（10.0g）・ロクロかわらけ２片（4.3g）、Ｐ177から手づくねかわらけ26片（60.1g）・ロクロかわらけ４片（3.0g）、Ｐ191から常滑産広口壺？（2027）・手づくねかわらけ16片（27.1g）・ロクロかわらけ１片（6.7g）、Ｐ198から手づくねかわらけ21片（40.1g）・ロクロかわらけ９片（20.0g）、Ｐ221から手づくねかわらけ５片（6.8g）、Ｐ234から手づくねかわらけ19片（25.8g）・ロクロかわらけ３片（3.8g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。そして、12世紀後半のかわらけを多量に包含するＳＤ３より新しいことから、12世紀よりも新しい建物の可能性が高い。性格は不明である。

ＳＢ46掘立柱建物跡（第133図）
〔位置〕ＶＫ６ｆグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕６個の柱穴（Ｐ948・162・109、Ｐ230・188・193）を使用した。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ109がＰ83を切る。また、ＳＢ４・ＳＢ７・ＳＢ12・ＳＢ13・ＳＢ14・ＳＢ16・ＳＢ20・ＳＢ22・ＳＢ28・ＳＢ29・ＳＢ30・ＳＢ43・ＳＢ45とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－13°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き480cm（15.8尺）、梁間432cm（14.3尺）で、面積は20.74㎡（6.26坪）である。桁行きと梁間の長さの比は、480：432＝10：９である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、246cm（8.1尺）・234cm（7.7尺）の２種類である。

〔出土遺物〕Ｐ109から手づくねかわらけ16片（23.6g）・ロクロかわらけ２片（7.8g）、Ｐ162から手づくねかわらけ４片（11.7g）・ロクロかわらけ２片（6.4g）、Ｐ188から手づくねかわらけ３片（8.4g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。性格は不明である。

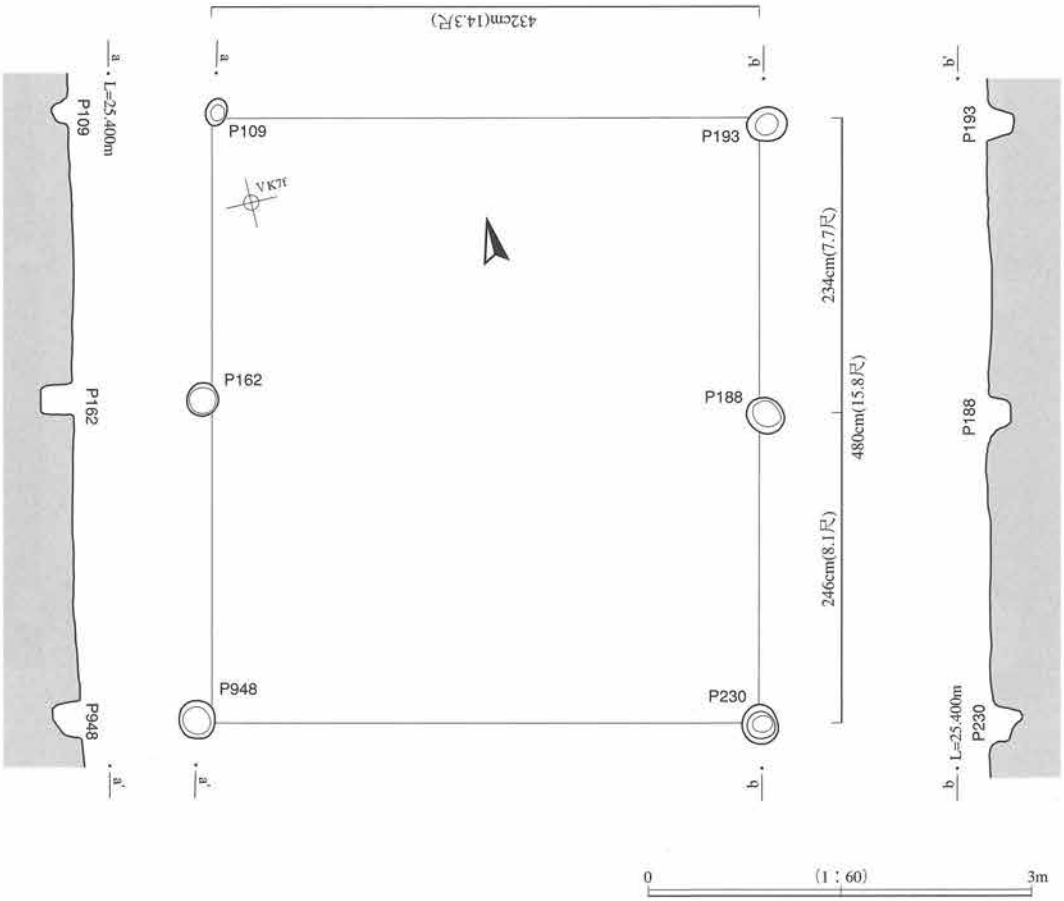
ＳＢ47掘立柱建物跡（第134図）

〔位置〕ＶＫ５ｈグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ469・493・1213・272、Ｐ1215・461・442・920）を使用した。礎盤は確認されなかった。

〔重複〕Ｐ920がＳＢ13のＰ919に切られる。また、ＳＢ24・ＳＢ49とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

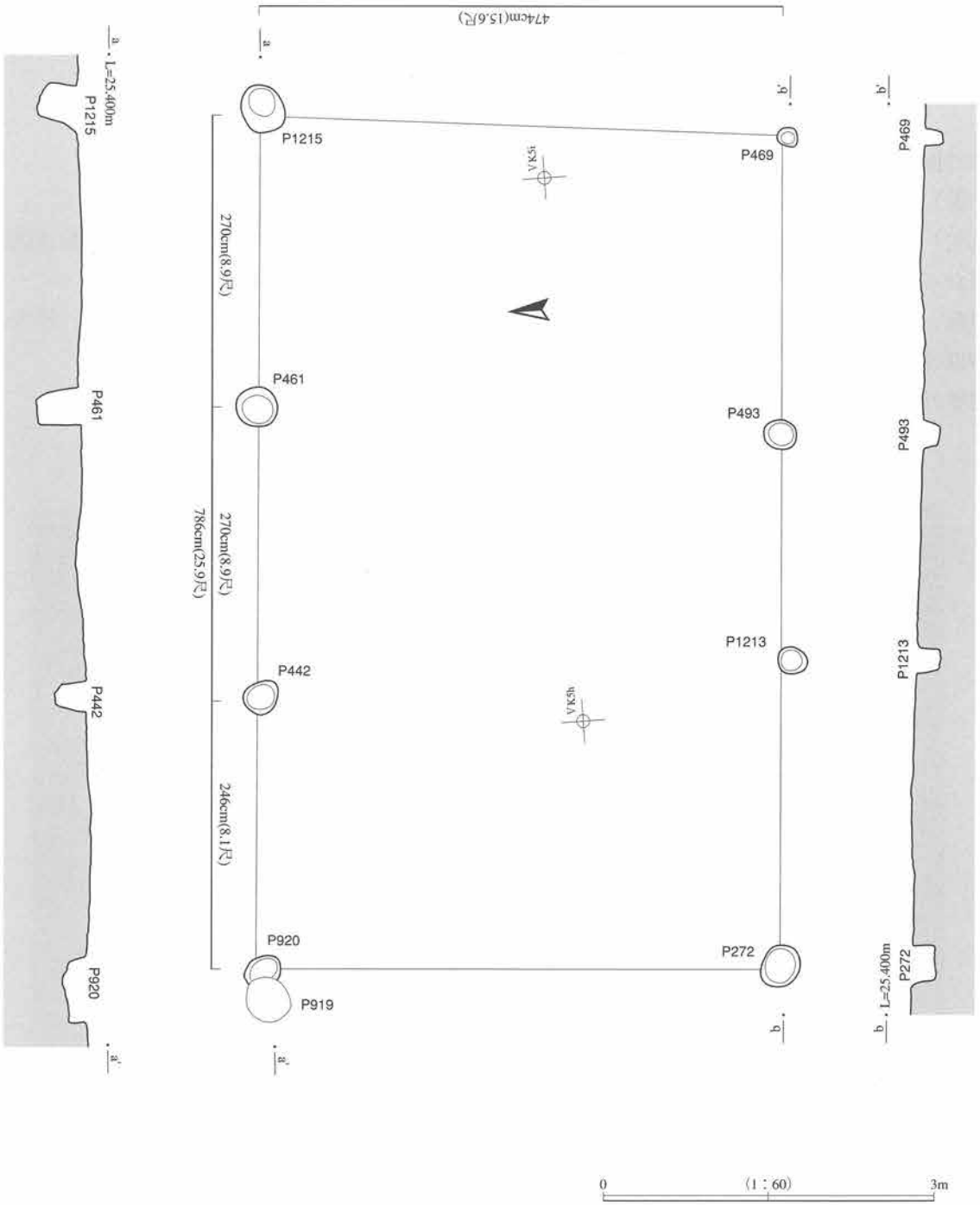
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－95°－Ｅである。



第133図　接待館遺跡　SB46

〔平面形式〕掘立柱建物である。北辺と南辺で長さが異なり、プランは台形となる。北辺を基準とすると、規模は、桁行き786cm（25.9尺）、梁間474cm（15.6尺）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、270cm（8.9尺）・246cm（8.1尺）の２種類である。
〔出土遺物〕Ｐ920から、手づくねかわらけ２片（3.3g）・ロクロかわらけ１片（3.7g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。性格は不明である。

ＳＢ48掘立柱建物跡（第135図）
〔位置〕ＶＫ５ｉグリッド付近に位置する。



第134図　接待館遺跡　SB47

〔柱穴〕６個の柱穴（Ｐ475・452・1222、Ｐ498・913・470）を使用した。柱痕跡はＰ475・Ｐ913で確認されている。礎盤は確認されなかった。南東隅の柱穴、北西隅の柱穴は検出されなかった。

〔重複〕Ｐ475がＰ450、Ｐ1222がＰ966を切る。また、ＳＢ49、ＳＤ３とプランが重複するが、柱穴の直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

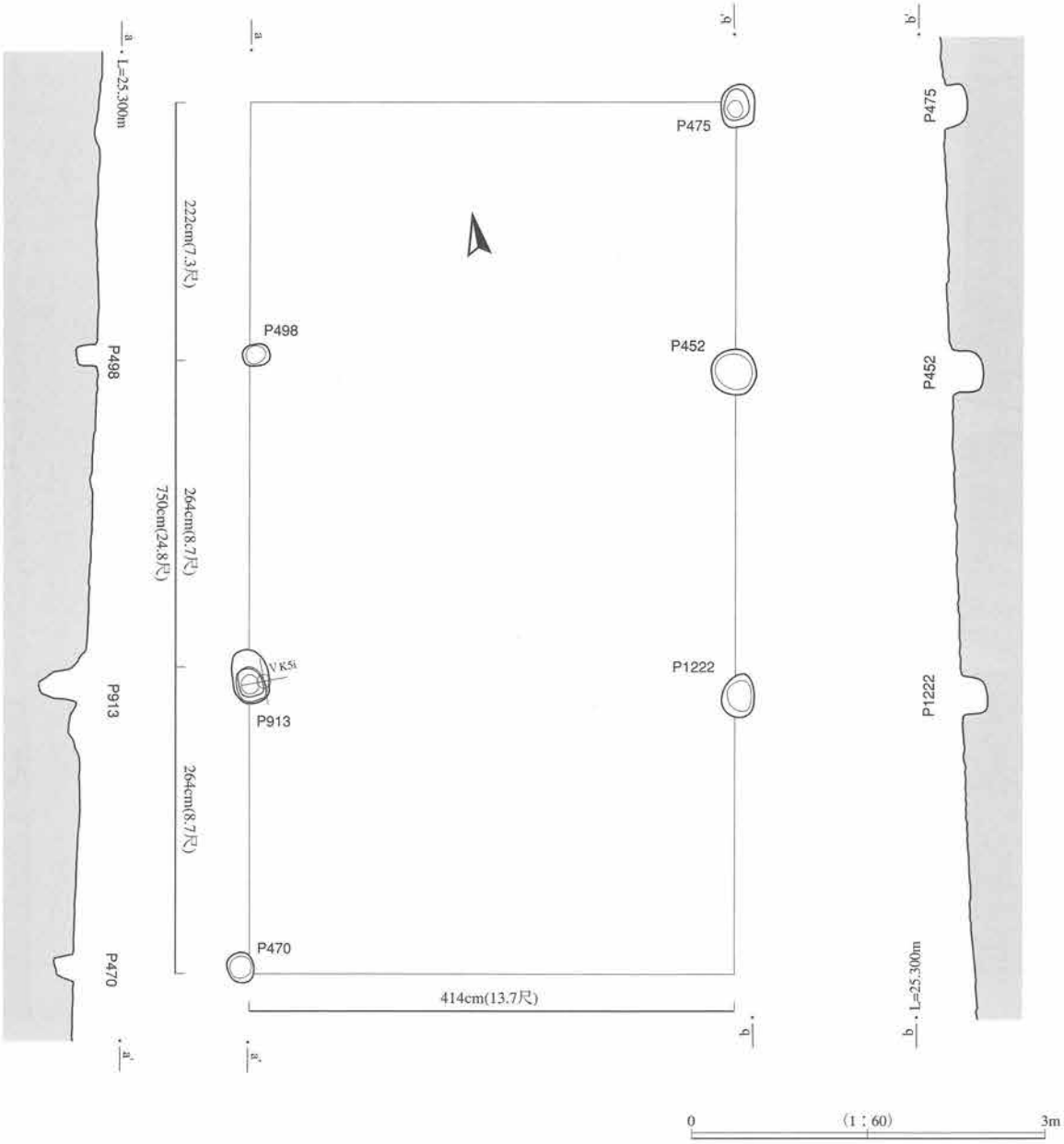
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－11°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き750cm（24.8尺）、梁間414cm（13.7尺）で、面積は31.05㎡（9.38坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、222cm（7.3尺）、264cm（8.7尺）の２種類である。

〔出土遺物〕Ｐ470からロクロかわらけ１片（5.6g）、Ｐ498から手づくねかわらけ１片（7.2g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。検出できなかった北西隅の柱穴はＳＤ３のプラン内に位置する。該当する場所を吟味して検出作業をおこなったが、この位置で柱穴を見出すことはできなかった。よって、本建物はＳＤ３より古い可能性



第135図　接待館遺跡　SB48

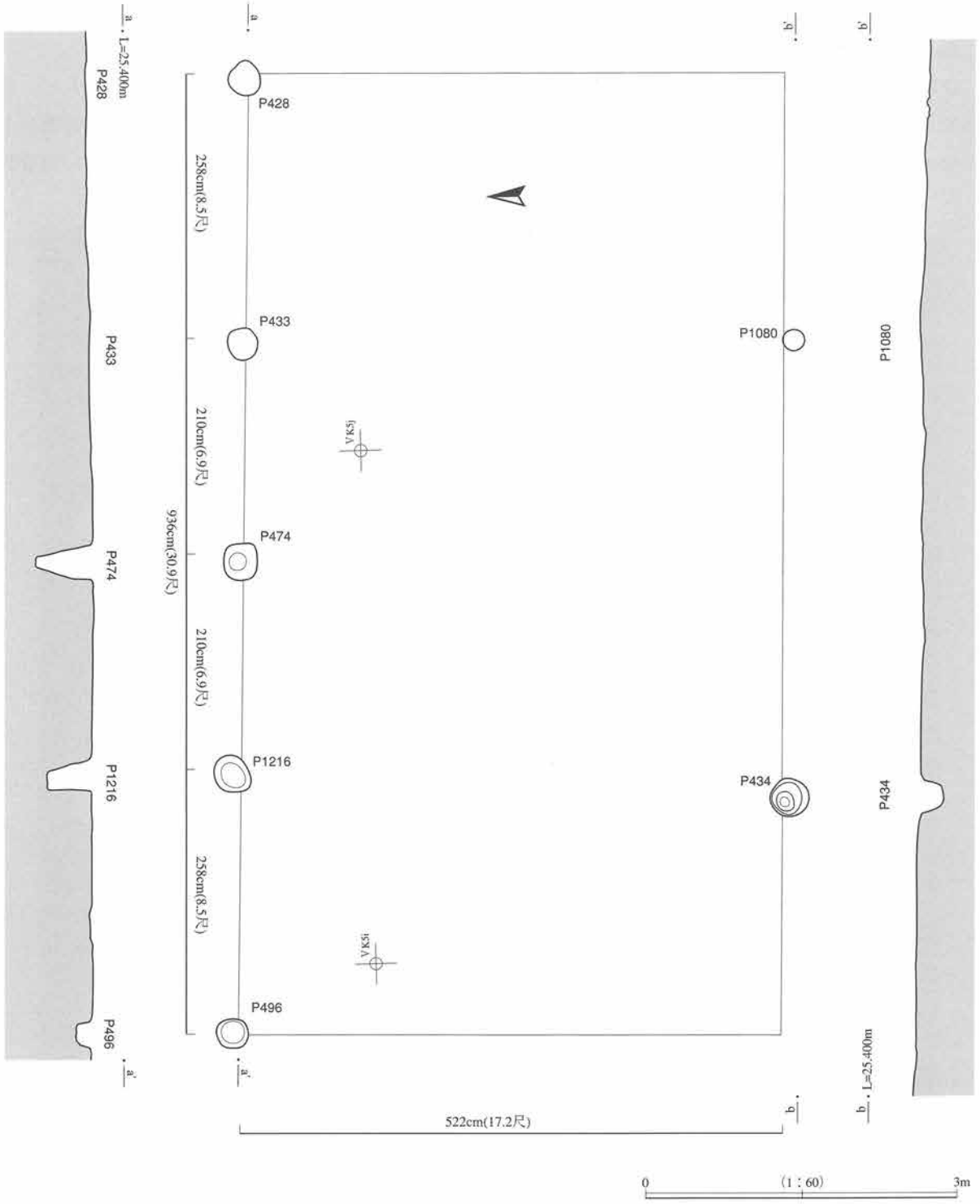
がある。しかし、溝の埋土中での検出であり、単に見逃した可能性もある。建物の性格は不明である。

ＳＢ49掘立柱建物跡（第136図）

〔位置〕ＶＫ４ｉグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ496・1216・474・433・428、Ｐ434・1080）を使用した。ただし、Ｐ428・433・1080は検出のみである。柱痕跡はＰ434で確認された。南東、南西隅の柱穴は検出できなかった。

〔重複〕Ｐ1216がＰ1217を切る。また、ＳＢ32・ＳＢ47・ＳＢ48とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。



第136図　接待館遺跡　SB49

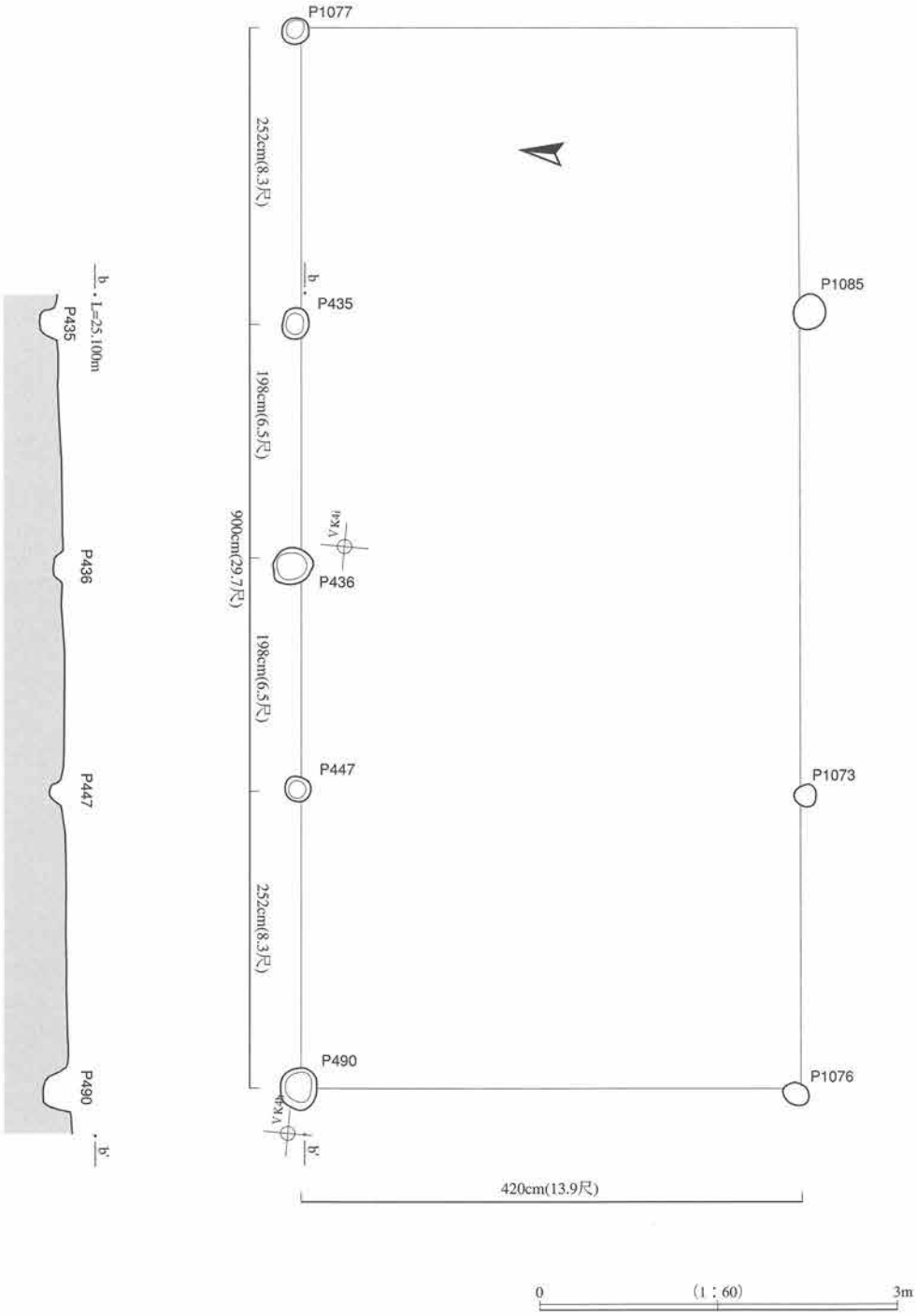
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、N－92°－Eである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き936cm（30.9尺）、梁間522cm（17.2尺）で、面積は48.86㎡（14.76坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、210cm（6.9尺）、258cm（8.5尺）の２種類である。

〔出土遺物〕なし。

〔時期・性格〕時期、性格ともに不明である。本建物はＳＤ３で区画されるプラン内に位置し、軸方向もＳＤ３の東西辺と共通する。よってＳＤ３と同時代、12世紀の可能性も指摘できる。しかし、それを確定する事象は存在しない。



第137図　接待館遺跡　SB50

ＳＢ50掘立柱建物跡（第137図）

〔位置〕ＶＫ３ｈ・ＶＫ３ｉグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕８個の柱穴（Ｐ490・447・436・435・1077、Ｐ1076・1073・1085）を使用した。ただし、Ｐ1076・1073・1085は検出のみである。柱痕跡はいずれの柱穴でも検出できなかった。南東隅の柱穴は表土を剥がしていない部分に位置している。

〔重複〕ＳＢ49とプランが接し、同時存在とは考えられない。

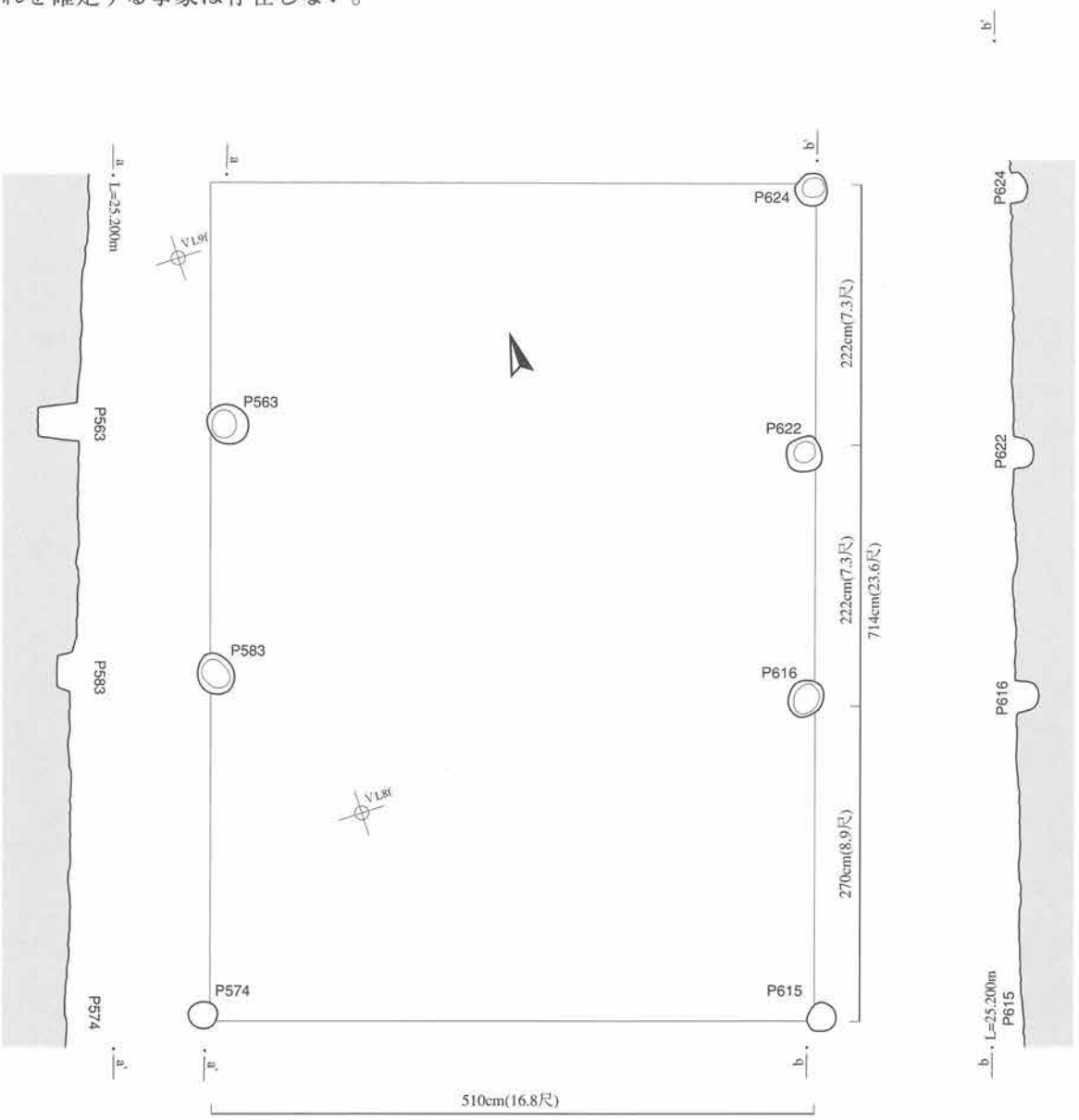
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－85°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き900cm（29.7尺）、梁間420cm（13.9尺）で、面積は37.80㎡（11.42坪）である。桁行きと梁間の長さの比は，900：420＝15：７である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、252cm（8.3尺）、198cm（6.5尺）の２種類である。

〔出土遺物〕なし。

〔時期・性格〕時期、性格ともに不明である。本建物はＳＤ３で区画されるプラン内に位置し、軸方向もＳＤ３の東西辺と共通する。よってＳＤ３と同時代、12世紀の可能性も指摘できる。しかし、それを確定する事象は存在しない。



第138図　接待館遺跡　SB51　0　(1：60)　3m

ＳＢ51掘立柱建物跡（第138図）

〔位置〕ＶＬ８ｆグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ574・583・563、Ｐ615・616・622・624）を使用した。ただし、Ｐ574・615は検出のみである。北西隅の柱穴は検出されていない。

〔重複〕ＳＢ27とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－18°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き714cm（23.6尺）、梁間510cm（16.8尺）で、面積は36.41㎡（11.10坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、270cm（8.9尺）、222cm（7.3尺）の２種類である。

〔出土遺物〕Ｐ563から手づくねかわらけ20片（109.4g）・ロクロかわらけ６片（20.2g）・木炭0.7g、Ｐ574から手づくねかわらけ（Ｄ4）大（1247）、Ｐ583から手づくねかわらけ６片（8.4g）・ロクロかわらけ３片（6.9g）、Ｐ615から手づくねかわらけ13片（89.9g）・ロクロかわらけ７片（61.8g）、Ｐ616からロクロかわらけ４片（2.5g）、Ｐ622から手づくねかわらけ１片（4.3g）が出土した。

〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。性格は不明である。

ＳＢ52掘立柱建物跡（第139図）

〔位置〕ＶＬ５ｅグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ589・600・655、Ｐ1098・1100・1104・1109）を使用した。ただし、Ｐ589・600・655は半裁のみで、Ｐ1098・1100・1104・1109は検出のみである。北西隅の柱穴は検出されていない。

〔重複〕ＳＢ53・ＳＢ54とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－101°－Ｅである。

〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き702cm（23.1尺）、梁間492cm（16.2尺）で、面積は34.54㎡（10.43坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて234cm（7.7尺）である。

〔出土遺物〕Ｐ655から釘（5016）が出土した。

〔時期・性格〕時期、性格ともに不明である。

ＳＢ53掘立柱建物跡（第139図）

〔位置〕ＶＬ５ｅグリッド付近に位置する。

〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ591・602・663・1231、Ｐ1099・1101・1106）を使用した。ただし、Ｐ591・602・663・1231は半裁のみで、Ｐ1099・1101・1106は検出のみである。南東隅の柱穴は検出されなかった。

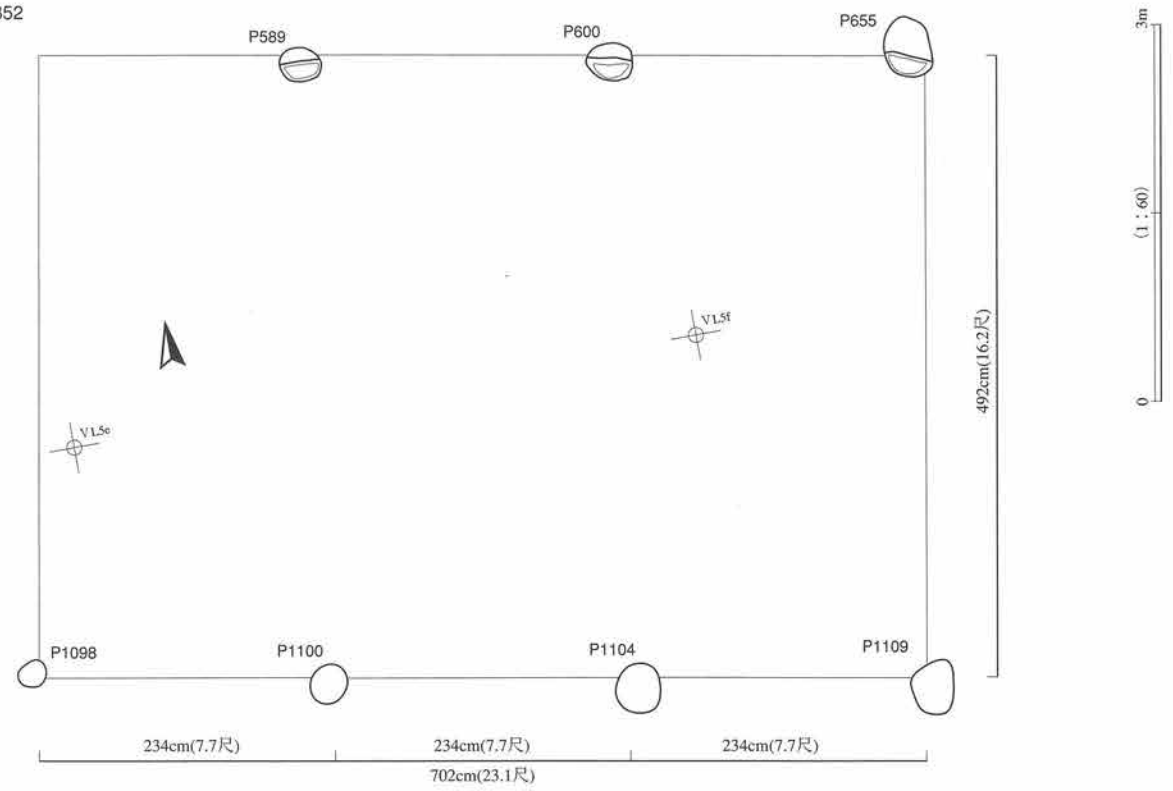
〔重複〕Ｐ663がＰ664を切る。Ｐ1106がＰ1107を切る。また、ＳＢ52・ＳＢ54とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく新旧関係は不明である。またＳＤ４と重複するが、本建物が古い。

〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－102°－Ｅである。

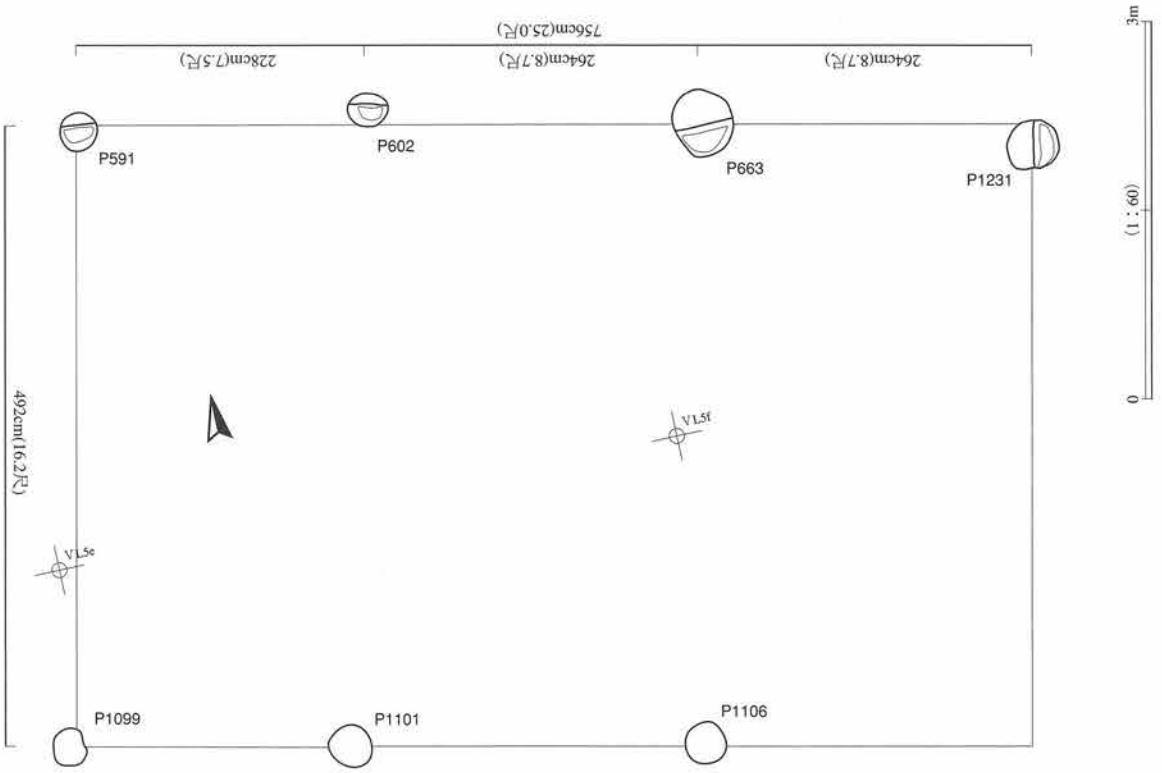
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き756cm（25.0尺）、梁間492cm（16.2尺）で、面積は37.20㎡（11.24坪）である。

〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、すべて264cm（8.7尺）・228（7.5尺）である。

SB52

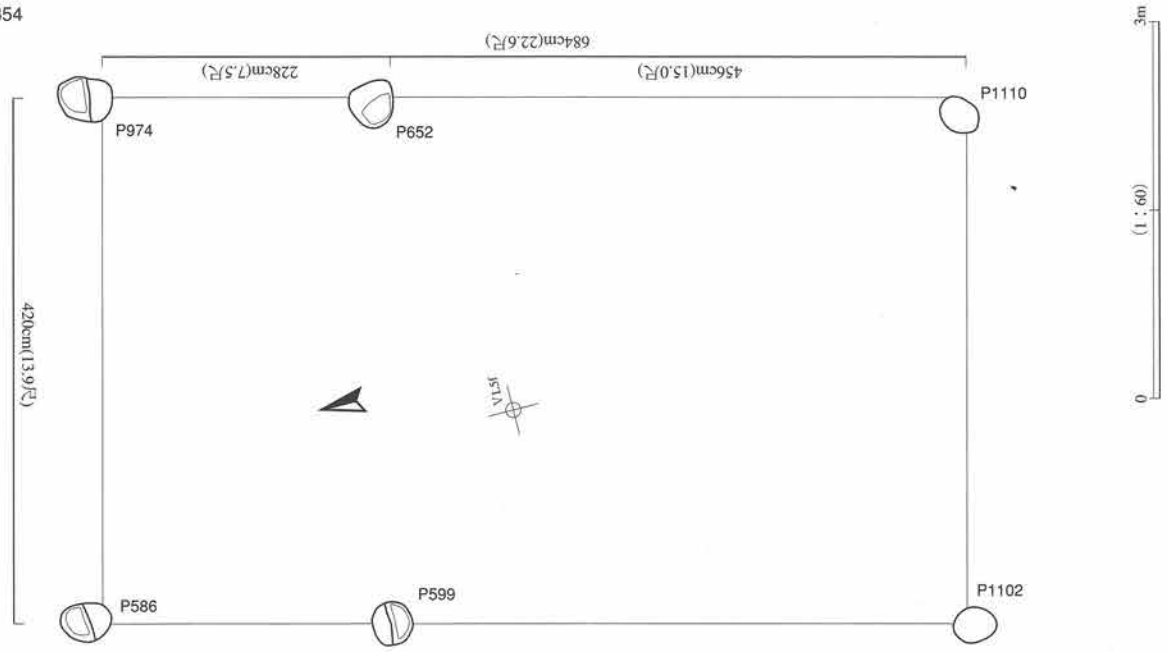


SB53

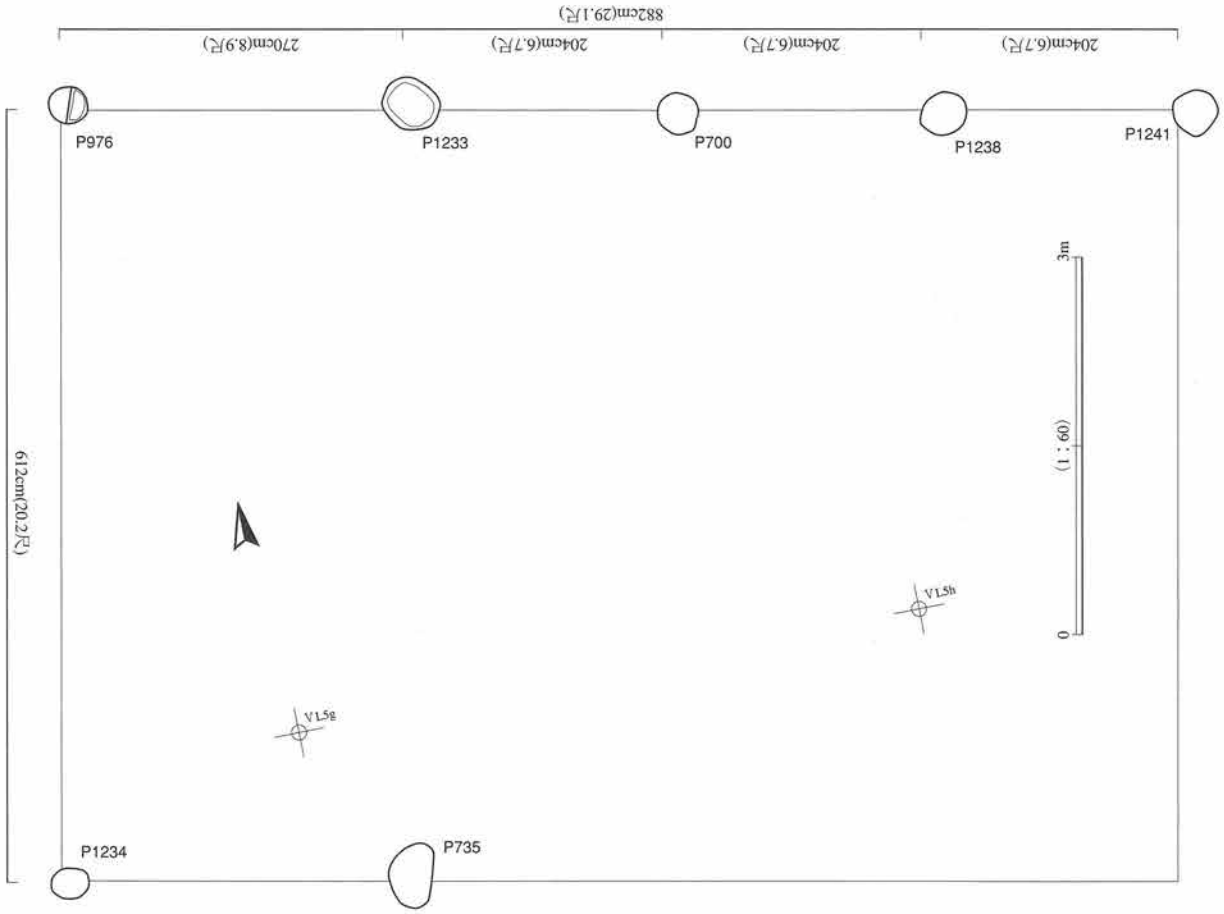


第139図　接待館遺跡　SB52・SB53

SB54



SB55



第140図　接待館遺跡　SB54・SB55

〔出土遺物〕Ｐ633から、手づくねかわらけ19片（20.6g）・ロクロかわらけ４片（7.2g）・鏃（5005）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。性格は不明である。

ＳＢ54掘立柱建物跡（第140図）
〔位置〕ＶＬ５ｆグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕６個の柱穴（Ｐ1102・599・586、Ｐ1110・652・974）を使用した。ただし、Ｐ974・586・599は半裁のみで、Ｐ1110・1102は検出のみである。
〔重複〕Ｐ652がＰ653を切る。また、ＳＢ52・ＳＢ53とプランが重複するが、柱穴どうしの直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－15°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き684cm（22.6尺）、梁間420cm（13.9尺）で、面積は28.73㎡（8.68坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、456cm（15.0尺）・228cm（7.5尺）である。
〔出土遺物〕Ｐ599から、手づくねかわらけ６片（8.3g）・ロクロかわらけ２片（10.6g）、Ｐ652から手づくねかわらけ９片（12.5g）・ロクロかわらけ２片（5.5g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。性格は不明である。

ＳＢ55掘立柱建物跡（第140図）
〔位置〕ＶＬ５ｇグリッド付近に位置する。
〔柱穴〕７個の柱穴（Ｐ976・1233・700・1238・1241、Ｐ1234・735）を使用した。ただし、976は半裁のみで、Ｐ700・1238・1241・1234・735は検出のみである。
〔重複〕なし。
〔建物方位〕桁行きの軸方位は、Ｎ－101°－Ｅである。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き882cm（29.1尺）、梁間612cm（20.2尺）で、面積は53.98㎡（16.31坪）である。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は、204cm（6.7尺）、270cm（8.9尺）の２種類である。
〔出土遺物〕Ｐ735から手づくねかわらけ２片（1.1g）、Ｐ976から手づくねかわらけ８片（4.8g）・ロクロかわらけ３片（6.6g）が出土した。
〔時期・性格〕手づくねかわらけが出土していることから、12世紀後半以降の建築と判断される。性格は不明である。

（3）土　　坑（SK）

土坑は21基検出した。調査区内各地から検出され、検出位置に傾向はない。所属時期が不明なものが大半を占めるが、中には古代～中世の遺構も確認されている。埋土から残存状況が良好な土師器を出土したＳＫ５や、底面から永楽銭を出土したＳＫ９などである。また、ＳＫ９は出土状況から墓壙の可能性もある。

ＳＫ１土坑（第141図、写真図版72）

〔位置〕ＶＭ６ｈ・７ｈグリッドに位置する。接待館遺跡の東端付近である。

〔検出状況〕検出面は標高24.3m前後のⅣ層上面である。

〔重複〕重複する遺構はない。

〔平面形・規模〕開口部径1.04×0.56mの楕円形状を呈する。深さ18～24cmを測る（底面標高約24.1m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径0.80×0.41mを測る。

〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、Ⅵ層起源の褐色ブロックを多量に含んでいる。

〔底面〕西壁から東壁に向かうにつれて低くなり、比高差６cmを測るが、概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明。

〔年代〕不明。

ＳＫ２土坑（第141図、写真図版72）

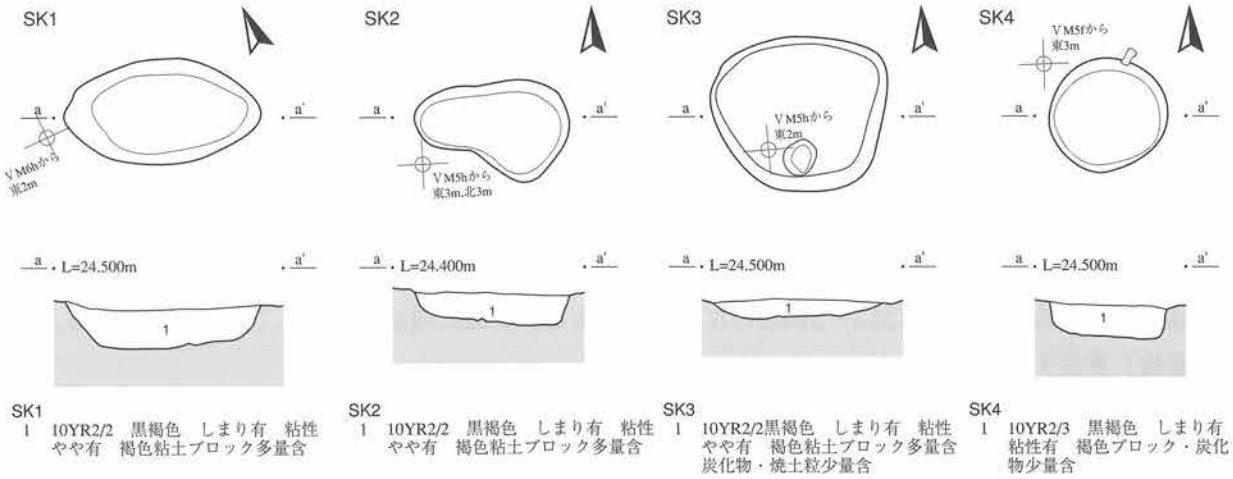
〔位置〕ＶＭ５ｈグリッドに位置する。接待館遺跡の東端付近である。

〔検出状況〕検出面は標高24.3m前後のⅣ層上面である。

〔重複〕重複する遺構はない。

〔平面形・規模〕開口部径86×53cmの不整形状を呈する。深さ８～14cmを測る。壁は概ね垂直に立ち上がる。底部径73×43cmを測る。

〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、Ⅵ層起源の褐色ブロックを多量に含んでいる。



第141図　接待館遺跡　ＳＫ１～ＳＫ４

〔底面〕西壁から東壁に向かうにつれて低くなり、比高差６cmを測るが、概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕埋土から常滑甕片（2007）が出土した。時期は12世紀。
〔性格〕不明
〔年代〕出土遺物から12世紀以降と推測される。

ＳＫ３土坑（第141図、写真図版72）
〔位置〕ＶＭ４ｈ・５ｈグリッドに位置する。接待館遺跡の東端付近である。
〔検出状況〕検出面は標高24.3m前後のⅣ層上面である。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径94×81cmの円形状を呈する。深さ８～10cmを測る（底面標高約24.2m）。断面形は浅皿状を呈する。底部径86×64cmを測る。
〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、Ⅵ層起源の褐色ブロックを多量に、炭化物・焼土粒を少量含んでいる。
〔底面〕若干凹凸があるが、概ね平坦であるといえよう。Ⅳ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕埋土からてづくねかわらけＤ３（1250）、常滑甕片８点（2001・2002・2005・2006、2008～2011）、常滑広口壺（2026）が出土した。常滑甕片は全て同一個体である。所属時期はいずれも12世紀代である。
〔性格〕不明。
〔年代〕12世紀以降と推測される。

ＳＫ４土坑（第141図、写真図版72）
〔位置〕ＶＭ４ｆグリッドに位置する。接待館遺跡の東端付近である。
〔検出状況〕検出面は標高24.3m前後のⅣ層上面である。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径63×60cmの円形を呈する。深さ15～18cmを測る（底面標高約24.1m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径52×50cmを測る。
〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、Ⅵ層起源の褐色ブロック・炭を少量含んでいる。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ５土坑（第142図、写真図版87）
〔位置〕ＶＪ３ｃグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.3～24.4mのⅣ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径81×69cmの楕円形状を呈する。深さ18cmを測る（底面標高約24.2m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径34×26cmを測る。

〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、土師器を包含し、焼土ブロックが少量含まれている。
〔底面〕起伏に富む。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕埋土から瀬戸・美濃産の陶器碗（51）、土師器坏（101）、土師器長胴甕２点（102・103）、土師器鉢（105）が出土した。出土状況から51は流れ込みの遺物であると判断した。
〔性格〕平安の土坑もしくは住居内床面施設の可能性が高い。
〔年代〕出土した土師器の年代から９世紀代と推測される。

ＳＫ６土坑（第142図、写真図版87）
〔位置〕ＶＪ３ｃグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.3～24.4mのⅥ層上面である。
〔重複〕Ｐ329に切られている。
〔平面形・規模〕開口部径93×77cmの楕円形状を呈する。深さ13～15cmを測る（底面標高約24.15m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径80×60cmを測る。
〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、Ⅵ層起源の黄褐色土混入、炭化物・焼土粒が微量含まれている。
〔底面〕若干凹凸があるが、概ね平坦であるといってよい。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕埋土から染付碗（4004）が出土した。産地は中国産。年代は16世紀と推測される。
〔性格〕不明。
〔年代〕16世紀以降と推測される。

ＳＫ７土坑（第142図、写真図版87）
〔位置〕ＶＪ３ｂグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.5m付近のⅥ層上面である。
〔重複〕ＳＢ17の柱穴Ｐ1264に切られており、本土坑はＳＢ17より古い。
〔平面形・規模〕開口部径3.68×0.87mの長楕円形状を呈する。深さ13cmを測る（底面標高約24.4m）。断面形は逆三角形状を呈する。底部径2.67×0.55mを測る。
〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、Ⅵ層起源の黄褐色土を少量含んでいる。
〔底面〕多少起伏がある。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ８土坑（第142図、写真図版87）
〔位置〕ＶＪ３ａグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.5m付近のⅤ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕Ｐ863に切られている。
〔平面形・規模〕開口部92×87cmの隅丸方形状を呈する。深さ16cmを測る（底面標高約24.4m）。断面形は独楽状を呈する。底部径72×66cmを測る。

〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、Ⅵ層起源の黄褐色土を少量含んでいる。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ９土坑（第142図、写真図版88）
〔位置〕ＶＩ２ｉ・２ｊグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.5m前後のⅥ層上面である。
〔重複〕ＳＢ18の柱穴Ｐ390を切る。よって本土坑はＳＢ18より新しい。
〔平面形・規模〕開口部1.11×0.74mの長方形を呈する。深さ15～20cmを測る（底面標高約24.3～24.4m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径0.96×0.61mを測る。
〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の黒褐色土を主体とした土とⅥ層起源の黄褐色土を少量含んでいる。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕底面から永楽通寶６枚（337～342）が重なった状態で出土したいずれも本銭である。永楽通寶の初鋳年代は1408年（明代）である。
〔性格〕６枚の永楽通寶は「六道銭」と推測され、墓壙の可能性が高い。
〔年代〕本土坑の年代は永楽通寶の初鋳年代の1408年以降である。下限は寛永通寶の初鋳年代1636年以前の可能性が高い。概ね15～16世紀と推測される。

ＳＫ10土坑（第142図、写真図版88）
〔位置〕ＶＩ４ｊグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.4m前後のⅥ層上面である。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径76×63cmの楕円形状を呈する。深さ８～10cmを測る（底面標高約24.3m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径69×56cmを測る。
〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の黒色土を主体とした自然堆積を呈し、Ⅵ層起源の黄褐色土、炭化物粒・焼土粒を多量含んでいる。
〔底面〕凹凸がある。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

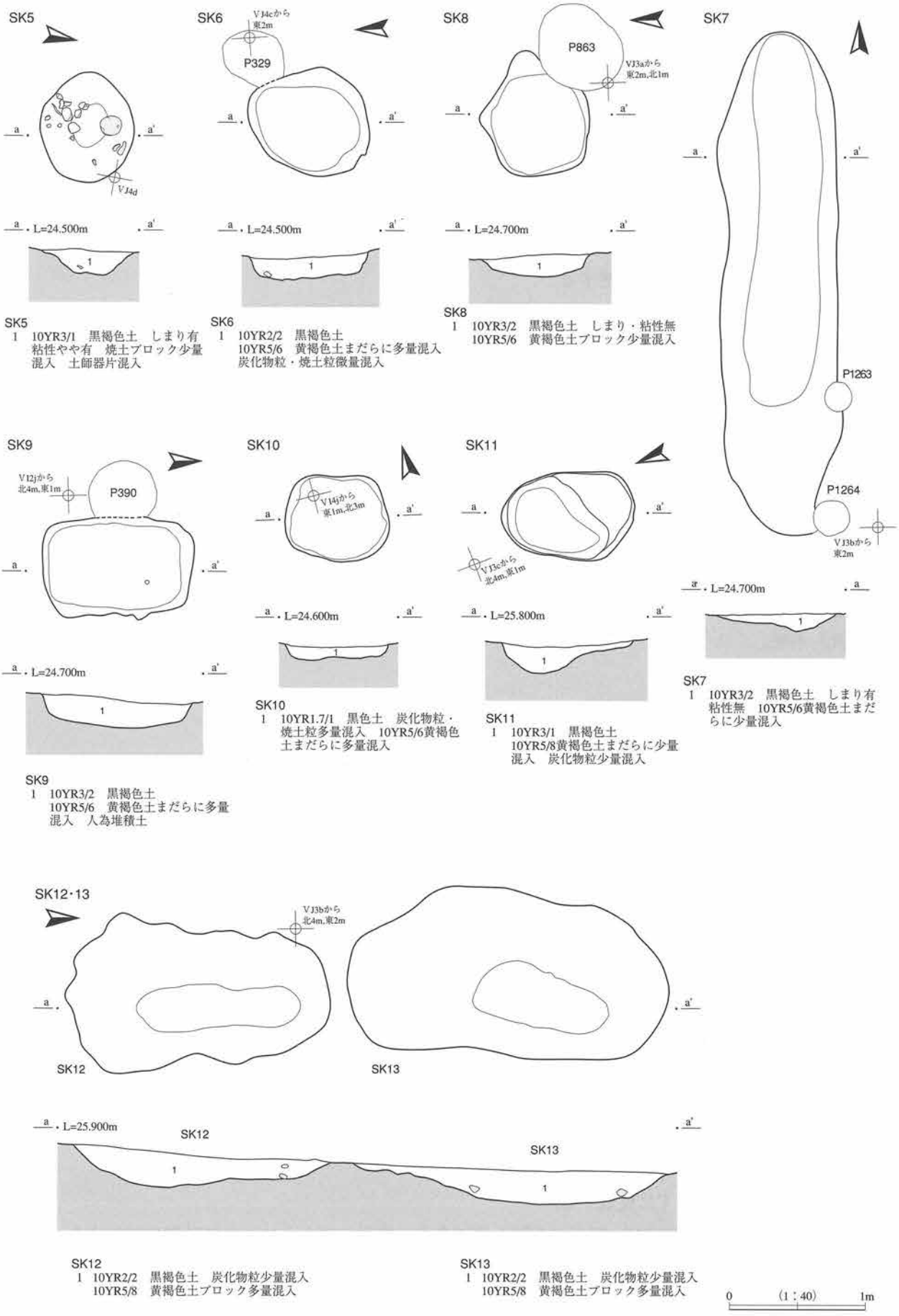
ＳＫ11土坑（第142図、写真図版88）
〔位置〕ＶＪ３ｃグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高25.6m前後のⅤ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径97×89cmの楕円形状を呈する。深さ４～19cmを測る（底面標高約25.4m）。断面形は半円状を呈する。底部径67×56cmを測る。

〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、Ⅵ層起源の黄褐色土、炭化物粒を少量含む。
〔底面〕丸底風である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ12土坑（第142図、写真図版88）
〔位置〕ＶＪ３ｂグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高25.6～25.8mのＶ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕ＳＢ17とプランが重複するが、直接の切り合いがなく前後関係は不明である。また、本土坑とＳＫ13は並列する位置関係にある。
〔平面形・規模〕開口部径1.93×1.18mの不整な楕円形状を呈する。深さ31cmを測る（底面標高約25.5m）。断面形は半円状を呈する。底部径1.20×0.34mを測る。
〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、Ⅵ層起源の黄褐色土を多量混入し、炭化物粒を少量含む。
〔底面〕Ⅵ層を掘り込み底面としているが、Ⅵ層に含まれた礫が露頭しているため起伏に富む。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ13土坑（第142図、写真図版89）
〔位置〕ＶＪ３ｂ・４ｂグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高25.6m前後のＶ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕ＳＢ17とプランが重複するが、直接の切り合いがなく前後関係は不明である。また、本土坑とＳＫ12は並列する位置関係にある。
〔平面形・規模〕開口部径2.95×1.17mの楕円形状を呈する。深さ29cmを測る（底面標高約25.3～25.4m）。断面形は半円状を呈する。底部径0.97×0.45mを測る。
〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、Ⅵ層起源の黄褐色土を多量含む。
〔底面〕Ⅵ層を掘り込み底面としているが、Ⅵ層に含まれた礫が露頭しているため起伏に富む。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ15土坑（第143図、写真図版89）
〔位置〕ＶＬ８ｆグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.6m付近のⅣ層上面である。底面に向かうにつれてＶ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径1.04×0.81mの不整形状を呈する。深さ30cmを測る（底面標高約24.3～24.5m）。



SK5
1　10YR3/1　黒褐色土　しまり有　粘性やや有　焼土ブロック少量混入　土師器片混入

SK6
1　10YR2/2　黒褐色土　10YR5/6　黄褐色土まだらに多量混入　炭化物粒・焼土粒微量混入

SK8
1　10YR3/2　黒褐色土　しまり・粘性無　10YR5/6　黄褐色土ブロック少量混入

SK7
1　10YR3/2　黒褐色土　しまり有　粘性無　10YR5/6黄褐色土まだらに少量混入

SK9
1　10YR3/2　黒褐色土　10YR5/6　黄褐色土まだらに多量混入　人為堆積土

SK10
1　10YR1.7/1　黒色土　炭化物粒・焼土粒多量混入　10YR5/6黄褐色土まだらに多量混入

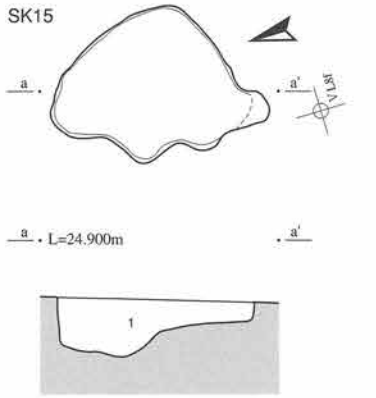
SK11
1　10YR3/1　黒褐色土　10YR5/8黄褐色土まだらに少量混入　炭化物粒少量混入

SK12
1　10YR2/2　黒褐色土　炭化物粒少量混入　10YR5/8　黄褐色土ブロック多量混入

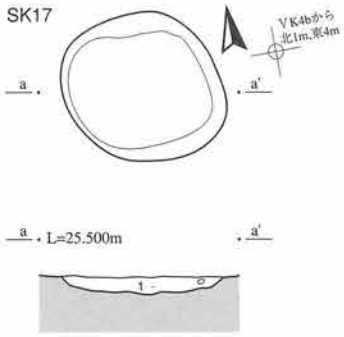
SK13
1　10YR2/2　黒褐色土　炭化物粒少量混入　10YR5/8　黄褐色土ブロック多量混入

0　(1：40)　1m

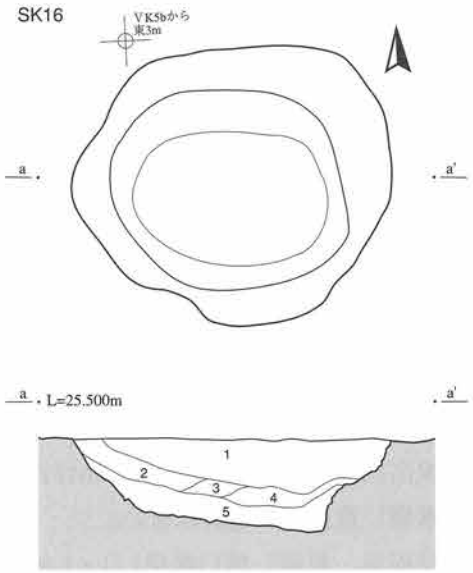
第142図　接待館遺跡　SK５～SK13



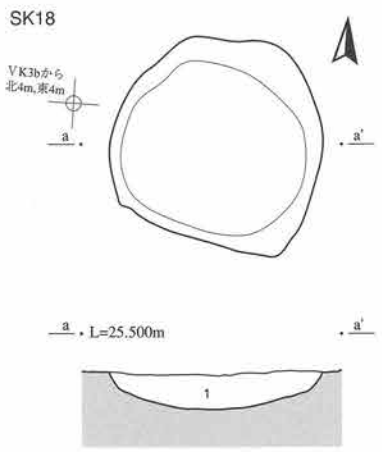
SK15
1　10YR3/1　黒褐色土　10YR5/6黄褐色ローム
ブロック少量混入



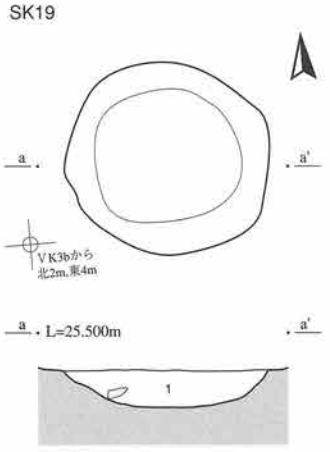
SK17
1　10YR3/2　黒褐色　しまり有
粘性少し有　10YR5/6粒含
根少量　φ1cm礫微量



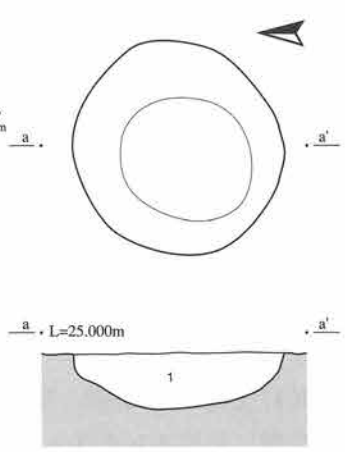
SK16
1　10YR2/2　黒褐色　しまり有　粘性無　10YR4/6ブロック多く、炭少量
2　10YR2/1　黒色　しまり有　粘性少し有　10YR4/6含
3　10YR4/3　鈍い黄褐色　しまり有　粘性少し有　10YR2/2含
4　10YR4/4　褐色　しまり有　粘性無　10YR4/3・10YR2/3含
5　10YR4/6　褐色　しまり有　粘性有　10YR4/3少量



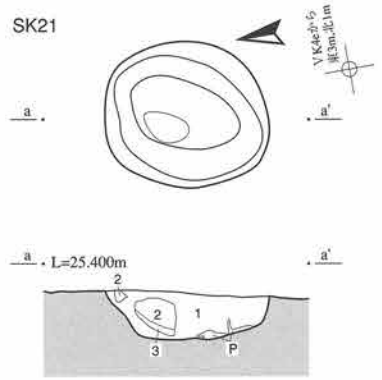
SK18
1　10YR2/2　黒褐色　しまり有　粘性有
10YR5/6粒少量



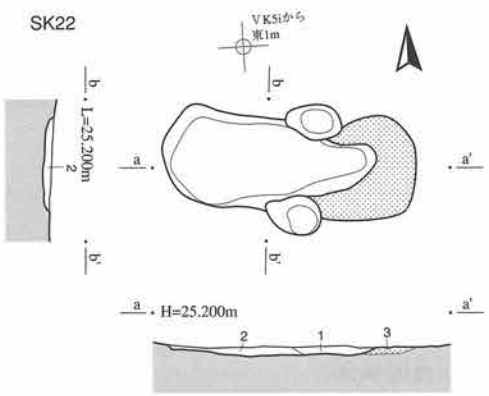
SK19
1　10YR2/2　黒褐色　しまり有　粘性少し有
10YR5/6粒を下位を中心に含　φ3cmの礫少量



SK20
1　10YR2/2　黒褐色　しまり有　粘性有
10YR5/6ブロック　炭少量



SK21
1　10YR2/3　黒褐色　しまりやや有
粘性少し有　10YR4/6ブロック含
2　10YR7/2　にぶい黄橙色　しまり有
粘性無　砂質
3　5YR4/6　赤褐色焼土　2のブロック
の被熱した



SK22
1　10YR2/3　黒褐色　しまり有　粘性無
5YR4/6焼土・10YR4/6含
2　10YR2/2　黒褐色　しまり有　粘性無
5YR4/6焼土・炭少量
3　5YR3/4　暗褐色　焼土

0　(1：40)　1m

第143図　接待館遺跡　SK15～SK22

断面形は隅丸長方形状を呈する。底部径0.99×0.77mを測る。
〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、Ⅵ層起源の黄褐色ブロックを少量含む。
〔底面〕中央が窪んでいるが、概ね平らである。Ⅴ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ16土坑（第143図、写真図版89）
〔位置〕ＶＫ４ｂグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高25.3m付近のⅤ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径1.71×1.46mの楕円形状を呈する。深さ40～49cmを測る（底面標高約24.8～24.9m）。断面形は逆台形状を呈する。底部径0.99×0.71mを測る。
〔埋土〕上位は黒褐色土系（１・２層）、下位は褐色土系（３～５層）に大別される。自然堆積を呈し、５層に細分した。１層はⅣ層起源の黒褐色土、２層はⅣ層起源の黒色土である。いずれもⅥ層起源の褐色ブロックを含む。３～５層はⅥ層起源の鈍い黄褐色土（３層）、褐色土（４・５層）である。３層はⅣ層起源の黒褐色土を、４・５層はⅤ層起源のにぶい黄褐色土を含んでいる。
〔底面〕若干凸凹がある。東に向かうにつれて標高が低くなり、比高差９cmを測る。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ17土坑（第143図、写真図版89）
〔位置〕ＶＫ４ｂグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高25.3m付近のⅤ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径90×79cmの円形状を呈する。深さ９cmを測る（底面標高約25.2m）。断面形は浅い半円状を呈する。底部径78×65cmを測る。
〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈している。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ18土坑（第143図、写真図版90）
〔位置〕ＶＫ３ｂ・３ｃグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高25.3m付近のⅤ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はないが、南側でＳＫ19が近接している。

〔平面形・規模〕開口部径1.11×1.06mの円形を呈する。深さ19cmを測る（底面標高約25.1m）。断面形は半円状を呈する。底部径0.97×0.85mを測る。
〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の褐色土を主体とした自然堆積を呈している。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ19土坑（第143図、写真図版90）
〔位置〕ＶＫ３ｂ・３ｃグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高25.3m付近のＶ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はないが、北側でＳＫ18が近接している。
〔平面形・規模〕開口部径1.08×1.02mの円形を呈する。深さ20cmを測る（底面標高約25.1m）。断面形は半円状を呈する。底部径0.77×0.69mを測る。
〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の褐色土を主体とした自然堆積を呈している。
〔底面〕若干凹凸がある。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ20土坑（第143図、写真図版90）
〔位置〕ＶＫ８ｉグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.9m付近のⅣ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径1.12×1.11mの円形を呈する。深さ29cmを測る（底面標高約24.6m）。断面形は半円状を呈する。底部径0.68×0.65mを測る。
〔埋土〕単層である。Ⅳ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、Ⅵ層起源の褐色ブロックを含んでいる。
〔底面〕若干凹凸がある。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明。
〔年代〕不明。

ＳＫ21土坑（第143図、写真図版90）
〔位置〕ＶＫ４ｅグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高25.2～25.3mのＶ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径87×77cmの円形状を呈する。深さ25cmを測る（底面標高約25.0m）。断面形は半円状を呈する。底部径56×35cmを測る。
〔埋土〕３層に細分した。基本的にはⅣ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、Ⅵ層起源の

褐色ブロックを含む単層といってもよい。褐色ブロックは一部は被熱し、赤褐色焼土化している。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕土師器坏（104）が出土。
〔性格〕不明。
〔年代〕９世紀代と推測される。

ＳＫ22土坑（第143図、写真図版88）
〔位置〕ＶＫ４ｉグリッドに位置する。
〔検出状況〕検出面は標高25.0m前後のＶ層上面である。底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。
〔重複〕重複する遺構はない。
〔平面形・規模〕開口部径1.10×0.5mの楕円形状を呈する。深さ４㎝を測る（底面標高約25.0m）。断面形は浅皿状を呈する。底部径0.97×0.44mを測る。東壁際には暗褐色焼土の範囲が認められ、その範囲は東西約20㎝、南北約50㎝を測る。
〔埋土〕３層に細分した。１・２層はⅣ層起源の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈している。３層は暗褐色焼土である。
〔底面〕概ね平坦である。Ⅵ層を掘り込み底面としている。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕古代の竪穴住居跡のカマド・煙道部の残穴か、所謂カマド状遺構の可能性が考えられる。出土遺物がないことから、カマド状遺構の可能性も高いと考える。
〔年代〕古代以降。

（4）堀　・　溝（ＳＤ）

堀・溝跡としたもの５条について調査をおこなった。ＳＤ４・ＳＤ６に関しては調査が終了したが、ＳＤ１・ＳＤ２・ＳＤ３は完掘しておらず、部分的なトレンチ調査のみ行った。トレンチ調査のため全容は明らかにし得ない点が多く、基本的な事実記載は一覧表で示し、一覧表で記載できない内容のみ文章で補足する。なお、ＳＤ７は細田遺跡ＳＤ８と同一の遺構であるので、そちらの事実記載を参照していただきたい。またＳＤ５は調査時にはＳＤ６と重複する遺構としていたものであるが、ＳＤ５とＳＤ６は同一の遺構と判断され、両者をＳＤ６と一括した遺構として報告することにした。よってＳＤ５は欠番となっている。

遺構名	総長	幅	断面形	深さ	埋　土	方　位	検出面	底面標高	遺　物
SD１西	39.2m	8.99～9.32m	逆台形	1.90～2.30m	Ⅳ・Ⅴ層起源の黒褐色土	N－24°－W	25.1～25.4mのⅤ・Ⅵ層面	23.3～23.6mのⅥ層面	補足説明参照
SD１東	55.0m	7.41～8.12m	逆台形	1.75～2.04m	Ⅳ・Ⅴ層起源の黒褐色土	N－29°－W	24.7～25.5mのⅣ・Ⅴ層面	22.8～23.8mのⅥ層面	補足説明参照
SD２	21.2m	3.06～3.33m	薬研状	1.04～1.47m	Ⅴ層起源の暗褐色土 Ⅵ層起源の黄褐色土	E－8°－N	25.6～25.8mのⅤ・Ⅵ層面	24.2～24.6mのⅥ層面	補足説明参照
SD３北辺	40.4m	2.70～2.85m	薬研状	1.15～1.26m	Ⅴ層起源の暗褐色土 Ⅵ層起源の黄褐色土	E－3°－N	25.1～25.2mのⅤ・Ⅵ層面	23.9～24.0mのⅥ層面	補足説明参照
SD３西辺	17.5m	3.65～3.96m	薬研状	1.22～1.60m	Ⅴ層起源の暗褐色土 Ⅵ層起源の黄褐色土	N－7°－E	24.9～25.1mのⅣ～Ⅵ層面	23.4～23.7mのⅥ層面	補足説明参照
SD３東辺	12.4m	3.14m	薬研状	1.36m	Ⅴ層起源の暗褐色土 Ⅵ層起源の黄褐色土	N－9°－E	24.7～24.8mのⅤ・Ⅵ層面	23.4mのⅥ層面	補足説明参照
SD４	24.6m	0.57～1.55m	浅い逆台形状	0.04～0.10m	Ⅴ層起源の暗褐色土。かわらけ片混入。	N－15°－E	24.8～24.9mのⅣ層面	24.7～24.8mのⅤ層面	補足説明参照
SD６	74.1m	0.44～3.57m	逆台形	0.03～0.29m	Ⅳ層起源の暗褐色土 Ⅴ層起源の黒褐色土	E－22°－S	24.2～24.8mのⅣ～Ⅵ層面	24.1～24.5mのⅤ・Ⅵ層面	補足説明参照

ＳＤ１堀（第144・145図、写真図版91～94）

〔位置・検出状況の補足説明〕調査区の東・西で、幅7.41～9.32m、深さ1.90～2.3mを測る堀を各１条検出した。これらは埋土が類似し、ともに12世紀代のかわらけが埋土下層・底面から出土し、どちらも北側の調査区外に続いている。調査区外の地形観察と堀の軸方向から、調査区東西で検出されたこの２条の堀は北側の調査区外でつながるものと判断し、同一の遺構名ＳＤ１とした。調査区東側で検出された部分を「ＳＤ１東」、調査区西側で検出された部分を「ＳＤ１西」と称する。

ＳＤ１に区画された範囲は東西方向約120m、南北方向約65mを測る。なお、東側で検出された堀の延長線上には、土塁の一部が残存している。堀の軸方向からみて、土塁は堀に沿って構築された可能性が想定される。そうなると土塁が堀の内外いずれにあったかが問題となる。現時点では、調査区外に残存する土塁に関しては、堀の軸方向からみて堀の外側にあった可能性が考えられる。それに加え、ＳＤ１の両脇に遺構が全く認められないこと、調査区外の地割の状況、明治時代の地籍図に土塁とみられる地割の存在、昭和20年代まで堀の内側に土塁状の高まりが存在したとの証言から、堀の両側に土塁が存在したと判断できる。

〔出土遺物〕ＳＤ１西の埋土からは須恵器坏（106）、須恵器甕（107・109）、灰釉陶器壺（116）、ロクロかわらけ小（1221）、ロクロかわらけ大（1222）、手づくねかわらけ小Ｄ３（1223）、手づくねかわらけ小Ｃ３（1224）、手づくねかわらけ大Ｃ３（1225・1226）、常滑甕（2018）、渥美甕（2030・2032・2042）、土錘（6010）、羽口（6011）、釘（5007・5013・5017）、不明鉄製品（5020・5023）。他に馬の歯、人の歯が出土している。また、ここに記した掲載遺物の他に、手づくねかわらけ650g、ロクロかわらけ240gが出土している。

ＳＤ１東の埋土からは須恵器甕（110）、ロクロかわらけ小（1001～1028）、ロクロかわらけ大（1029～1047）、内折れかわらけ（1048・1049）、手づくねかわらけ小Ｃ３（1050・1055・1061・1065・1069～1073・1077・1078）、手づくねかわらけ小Ｄ３（1051～1054、1056、1058、1060、1062～1064、1066～1068、1074～1076）、手づくねかわらけ大Ｄ４（1057・1059）、手づくねかわらけ大Ｃ３（1079～1081、1083・1084・1086～1090、1092～1095、1097、1098、1100、1002～1105、1107～1112、1114・1116）、手づくねかわらけ大Ｃ４（1091・1096・1099）、手づくねかわらけ大Ｄ３（1085）、手づくねかわらけ大Ｄ４（1082・1101・1115・1201）、３段なで大（1106）、常滑甕（2003・2014・2017）、常滑広口壺（2023）、渥美甕（2031・2033・2035～2039、2041）、短刀（5001）、棒状鉄製品（5006）、釘（5014）、不明鉄製品（5018・5021）が出土した。また、ここに記した掲載遺物の他に手づくねかわらけ36,590g　ロクロかわらけ11,060gが出土している。

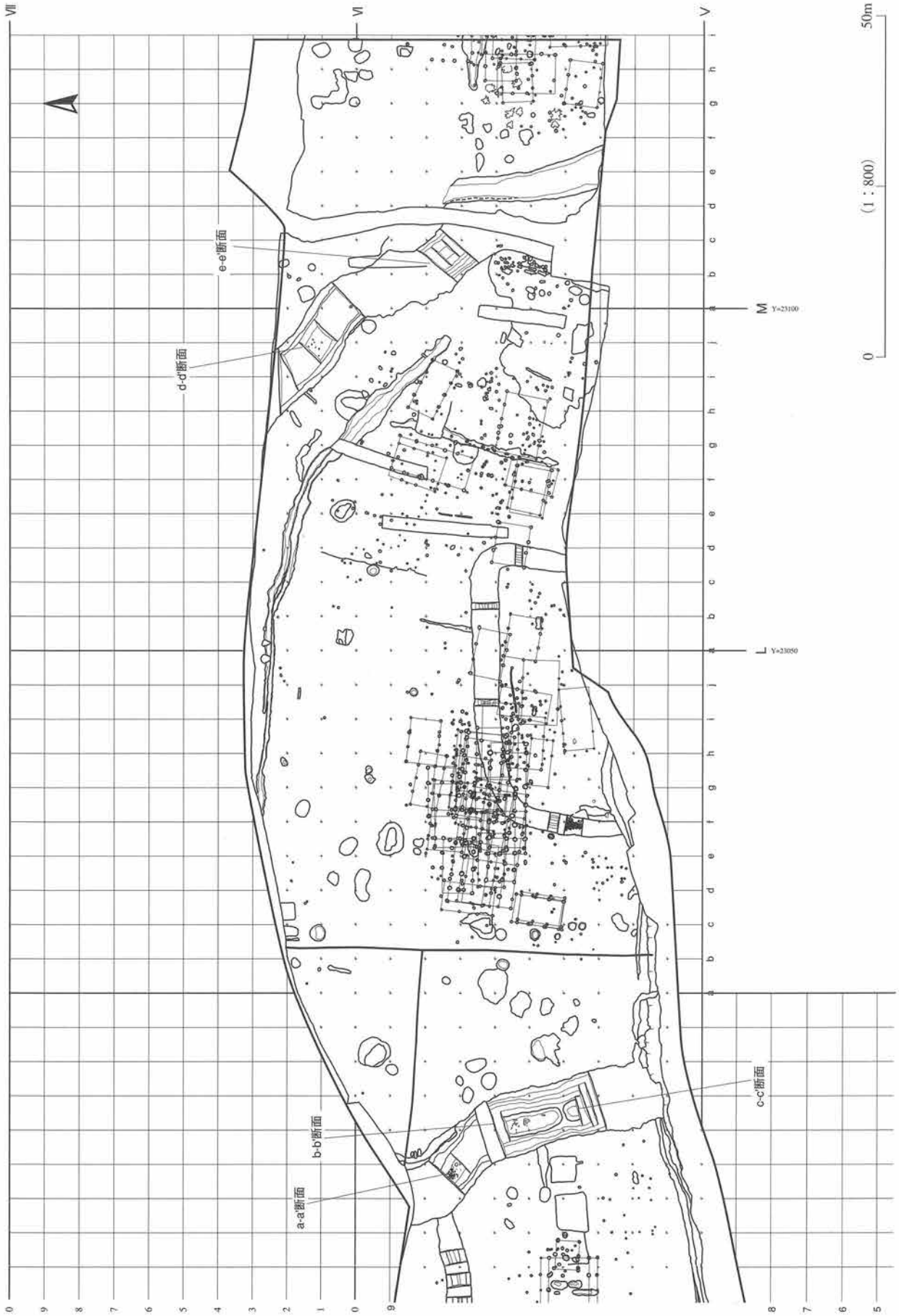
〔性格〕堀（区画の用途）と推測される。

〔年代〕底面や埋土下層から12世紀代後半代のかわらけがまとまって出土していることから12世紀後半代には機能していたと判断できる。構築年代については明確な事象がなく判断が難しい。

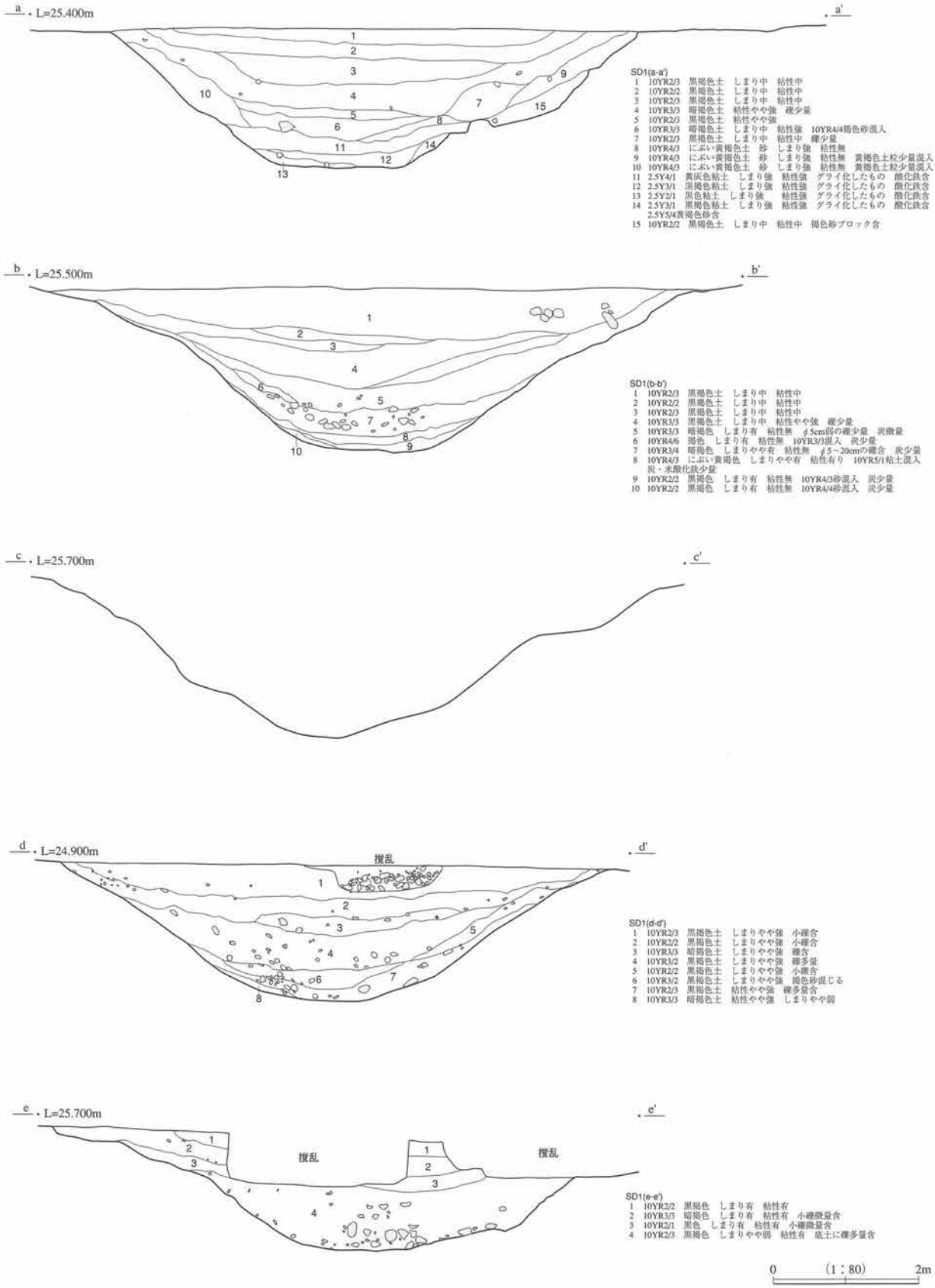
〔年代測定〕ＳＤ１西出土の炭化材について、放射性炭素年代測定をおこなっている。分析機関は株式会社加速器分析研究所（神奈川県川崎市）である。分析方法はＡＭＳ測定で、年代値の算出にはＬｉｂｂｙの半減期5568年を用いている。炭化物の採集場所はＳＤ１西のＶＪ５ｇグリッド付近に設置したトレンチの堀底面直上で、２点の炭化物について年代測定をおこなった。２点の炭化物の採取場所は約50cm離れている。ＢＰ年代値は1950年からさかのぼること何年かを示している。結果は以下の通りである。　試料１：Ａｇｅ（ｙｒＢＰ）950±40年

試料２：Ａｇｅ（ｙｒＢＰ）920±40年

暦年代に直すと、試料１は西暦1000年±40年、試料２は西暦1030年±40年となる。



第144図　接待館遺跡　SD１（１）



第145図　接待館遺跡　SD１（２）

ＳＤ２堀（第146図、写真図版94）

〔重複関係〕ＳＤ１とプランが重複し、埋土の観察ではＳＤ１に切られているようにみえる。しかし直接の切合い部分の掘り下げ、断面観察はおこなっておらず、前後関係は明確になっていない。ＳＤ２はＳＤ１の東側に突き抜けているわけではなく、時間差がある遺構ではなく、同時存在の遺構である可能性が高い。

〔埋土の補足説明〕大半が人為堆積を呈しているが、場所によって様相は異なる。ＳＤ１から一番遠いＴ１は埋土中・下位が人為堆積（Ⅵ層起源の黄褐色土）であるのに対して、ＳＤ１に一番近いＴ４は埋土最下位14層（Ⅴ層起源の暗褐色土）以外の１～13層（Ⅵ層起源の黄褐色土）は人為堆積である。以上の状況からみて、ＳＤ１に近付けば近づくほど人為堆積の土は厚くなる傾向がある。人為堆積土がⅥ層起源の黄褐色土であったことから、ＳＤ２はＳＤ１掘削時もしくは土塁構築時に埋め戻された可能性も想定される。しかし、ＳＤ１・ＳＤ２は同時存在で、両者が廃絶された後にＳＤ１の土塁を構成する土がＳＤ２に流入し、人為堆積に類似する様相を呈している可能性もあり、明確な前後関係を証明できるわけではない。出土遺物からはＳＤ２でも12世紀後半のロクロ、手づくねかわらけが出土しており、ＳＤ１との時間差は見いだせない。

〔出土遺物〕埋土から須恵器甕（112）、須恵器大甕（115）、ロクロかわらけ小（1227）、ロクロかわらけ大（1228・1229）が出土した。ロクロかわらけ大（1228・1229）は12世紀前半代のかわらけと推測される。ロクロかわらけ小は12世紀後半のかわらけである。また、土錘（6009）、刀子（5003）、鉄鏃（5004）。が出土した。ここに示した掲載遺物の他に、手づくねかわらけ100g　ロクロかわらけ400g、土師器片490gが出土している。

〔性格〕区画、通路の側溝などの機能が想定されるが、明確な性格は不明である。

〔年代〕出土したかわらけの中には12世紀後半代のものがあり、12世紀後半代には開口していたと判断される。1228・1229の12世紀前半と推測されるロクロかわらけの存在は、ＳＤ２の構築年代を示す可能性を含んでいる。

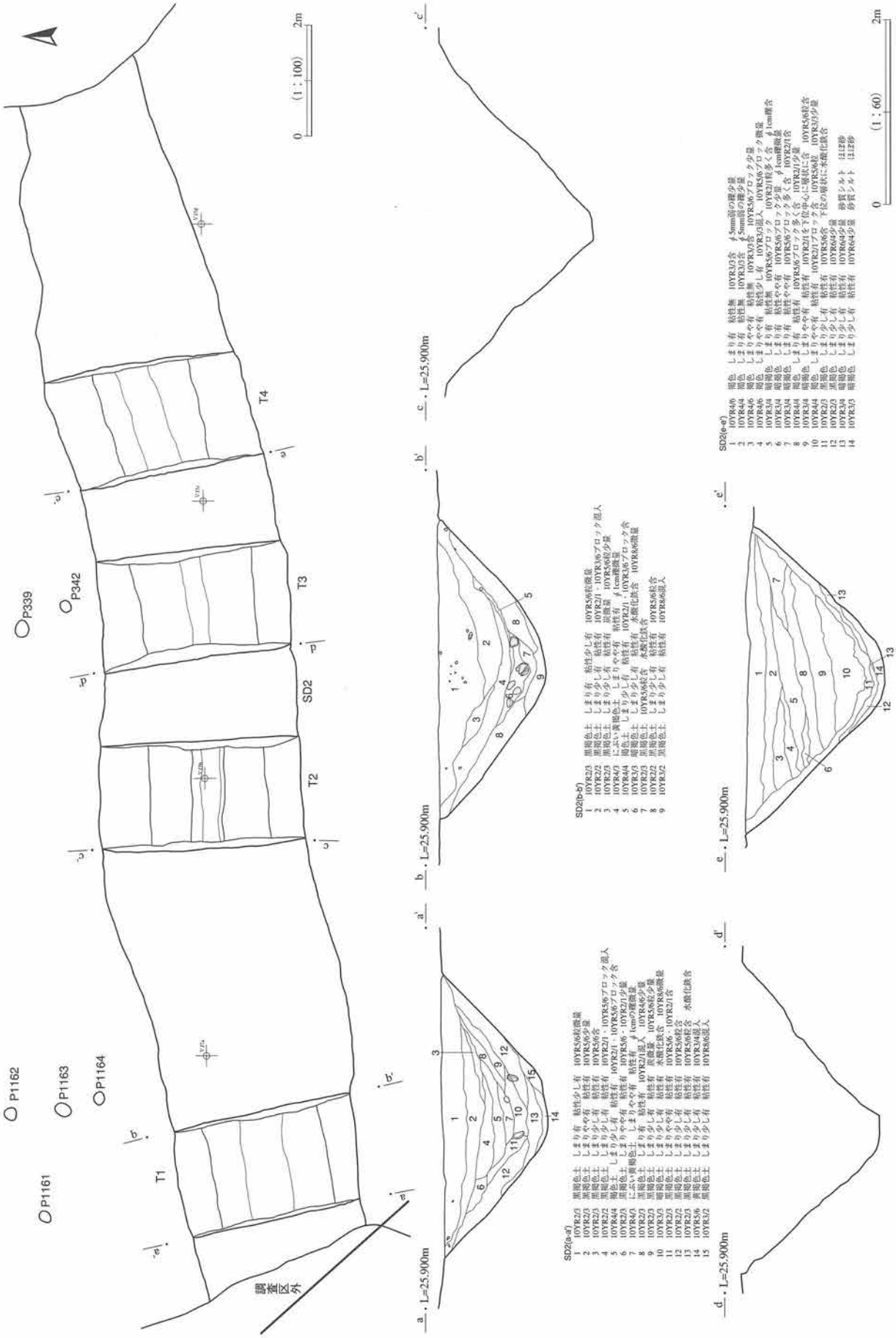
ＳＤ３堀（第147図、写真図版91・95）

〔位置・重複関係〕ＳＤ１で囲まれた範囲の中央部に位置し、多数の柱穴に切られている。東辺、西辺の南端は衣川縁の旧崖に切られており、南側は川の浸食により失われたと判断される。

〔補足説明〕調査は部分的に幅約１ｍのトレンチを４本入れたのみであるため、全体の傾向を示しているとは言えないが、かわらけ堆積層より下からは遺物がほとんど出土していない。西辺の埋土上位から大量のかわらけが出土している。第147図には西辺のトレンチの平面図・写真を示した（ＶＫ４ｅ付近）。これは堀の周辺でかわらけを使った儀式・宴会儀礼が盛んに行われたことを示していると言える。ただし、埋土上位にかわらけが大量に投棄されている状況から、ＳＤ３はかわらけ投棄時には埋没が進行していた状況と判断される。かわらけ出土が埋土下層を中心に出土したＳＤ１とは埋没時期に差がある（ＳＤ１より早く廃絶した）可能性がある。しかし、接待館遺跡の外部区画であるＳＤ１で囲まれる範囲のちょうど中央部分に、内部区画であるＳＤ３は位置しており、同一の設計で同時期に構築された遺構の可能性が高い。

なお、堀が機能していた段階には、衣川に面する南側以外の三方を区画していたものと思われ、その範囲は東西幅約40ｍを測る。区画が正方形に近い形状であったとすると、南側約３／５は衣川により浸食されたことになる。

ＳＤ３の埋土を切る柱穴で構成される掘立柱建物はＳＢ12、ＳＢ13、ＳＢ16、ＳＢ20、ＳＢ22、Ｓ



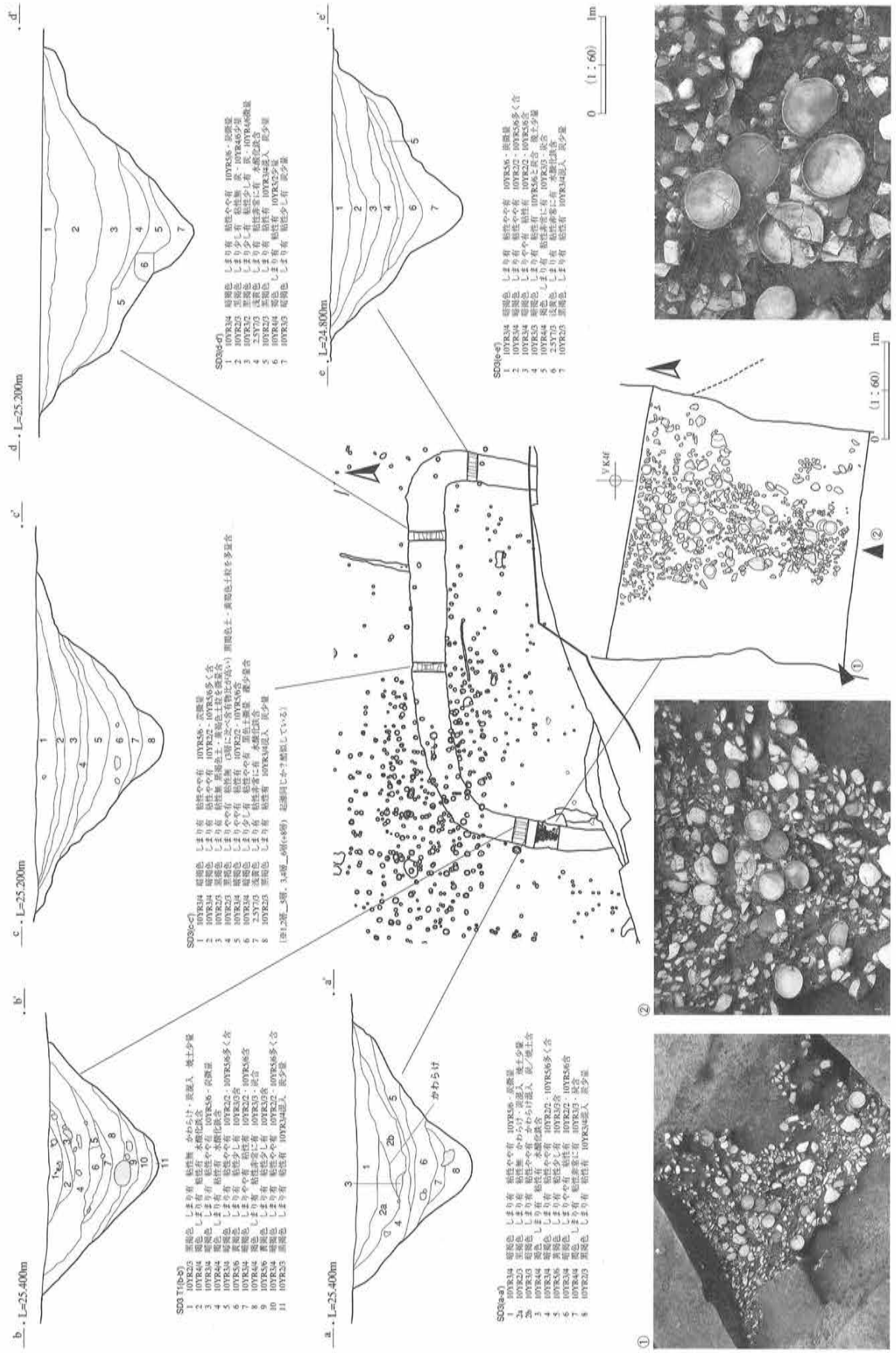
第146図　接待館遺跡　SD２

Ｂ26、ＳＢ28、ＳＢ45がある。これらの建物はＳＤ３よりも新しい。
〔出土遺物〕埋土から須恵器系陶器甕（2045）、ロクロかわらけ小（1117～1131・1230）、ロクロかわらけ大（1132～1154）、手づくねかわらけ小Ｃ３（1157・1159・1160・1162・1167～1169・1171・1178～1180・1234）、手づくねかわらけ小Ｃ４（1156・1163・1172・1175）、手づくねかわらけ小Ｄ３（1155・1166・1173・1174・1232・1233・1235）、手づくねかわらけ小Ｄ４（1158・1161・1164・1165・1170・1176・1177）、内折れかわらけ小（1231）、手づくねかわらけ大Ｄ３（1181・1205・1211・1214・1238）、手づくねかわらけ大Ｃ３（1113、1182～1188、1190・1191・1194・1197・1198・1202・1204・1206～1208、1210、1212・1213・1215、1217～1219、1224、1226、1236・1237、1240・1241、1243）、手づくねかわらけ大Ｃ４（1189・1192・1193・1195・1200・1203・1209・1220・1239・1242）、手づくねかわらけ大Ｄ２（1196）、手づくねかわらけＤ４（1199・1201・1216）、釘（5008・5015）が出土した。
　掲載遺物以外にＶＫ４ｆトレンチからはロクロかわらけ6,460g、手づくねかわらけ18,230gが出土している。また、このトレンチ以外からは手づくねかわらけ4,290g、ロクロかわらけ1,120gが出土している。
〔性格〕区画の機能を持つ堀と判断される。しかし区画内部の建物等の配置は明瞭ではない。土砂の堆積が進み、浅い状態になった段階では、かわらけの廃棄場所となっている。
〔年代〕毎土上位から出土したかわらけは12世紀第３四半期の年代が想定される。よって、この段階では埋没が大部進んだ状況と判断される。構築年代はＳＤ１との配置関係からＳＤ１と同時期と推測される。完全に埋没した年代はかわらけの出土層の位置から、12世紀第３四半期をそれほど下らない時期と推測される。また、ＳＤ３の埋土を切る柱穴で構成される掘立柱建物は中世後半のものと推測される。よって、少なくとも中世後半には完全に埋没していた状況が読み取れる。

ＳＤ４溝（第148図、写真図版96）
〔補足説明〕埋土から多量のかわらけが出土し、埋土の堆積状況を勘案すると12世紀の溝の可能性もあると思われる。
〔出土遺物〕埋土から手づくねかわらけ1120g、ロクロかわらけ300g、土師器片120gが出土した。細片が多く、掲載した遺物はない。
〔性格〕不明。
〔年代〕出土遺物から12世紀後半以降である。

ＳＤ５　欠番

ＳＤ６溝（第148図、写真図版96）
〔補足説明〕、本遺構はＳＤ１東の内側約６m付近をＳＤ１と並行する走行で検出されている。ＳＤ１はⅥＬ２ｉ付近で調査区外北側に延びていくが、その後のＳＤ１の推定走行とも本遺構は並行関係にあると推測される。周辺住民からの聞き取りによると、昭和20年代まではこの付近に土塁状の土手が存在していたという。昭和22・23年のアイオン、カサリン台風後に、衣川沿いに暫定堤防を構築することになり、その際に堤防の構築土として、土塁状の土手を崩し土取りしたという。この土塁の存在は明治時代の地籍図からもその存在が読み取れる。よって、本溝はＳＤ１と並行関係にあることと、土塁が存在したとの聞き取りから、昭和20年代の土塁の土取作業の際に形成された作業の痕跡と推測



第147図　接待館遺跡　SD３

される。本溝の埋土からは近世～近代の陶磁器片が出土しているが、この推測と矛盾しない。よって、本溝は昭和20年代に形成されたものではあるが、ＳＤ１の内側に存在した土塁の走行、幅を示す遺構と位置付けられる。本溝の検出位置からＳＤ１内側の土塁の幅は底部で約６ｍと判断される。

〔出土遺物〕埋土から近世～近代の磁器片（計40g）と、常滑広口壺（2025）、渥美甕（2040）、中国産白磁碗（3001）が出土した。他に手づくねかわらけ片1250g、ロクロかわらけ片170gが出土した。

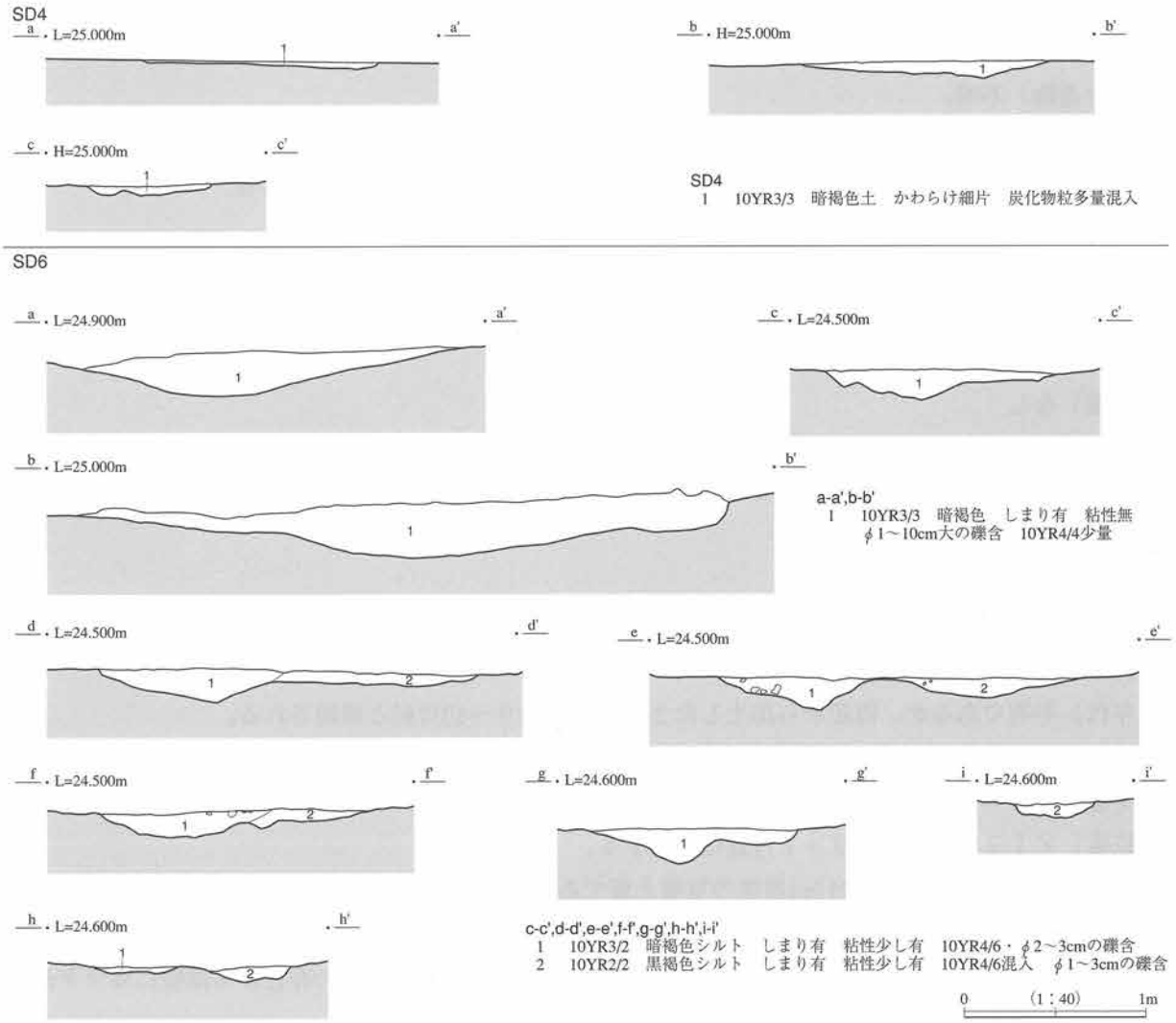
〔性格〕昭和20年代のＳＤ１内側に存在した土塁の土取作業の際に形成された作業の痕跡と推測されるが、土塁の走行、幅を示唆するものと推測される。

〔年代〕昭和20年代に形成されたと推測される。近世・近代陶磁器が出土しており、この推測と矛盾しない。

ＳＤ７溝　細田遺跡ＳＤ８と同一遺構のため、細田遺跡の遺構として記載

未調査の溝　検出のみ行い、名称を付していない溝の概略を記す。

- 調査区西側、南辺の段丘際（Ⅳ Ｉ ９ ｈ～Ⅴ Ｊ１ｊ付近）に幅10～20cmの溝が２条重複している。ＳＤ１より新しいと推測される。時期・性格は不明である。
- 調査区中央部、南辺の段丘縁（Ⅴ Ｋ １ ａ～１ ｈ付近）に幅10～100cmの溝が存在する。この溝はＳＤ３を切っており、ＳＤ３より新しい。時期・性格は不明である。上記の溝とは連続しないが同一



第148図　接待館遺跡　SD４・SD６

の性格と推測される。

- ＶＪ４ｅ付近からＳＤ１に向かって延びる溝がある。幅は20～120cmである。ＳＤ１より古い溝である。自然流路の痕跡と推測される。
- ５Ｌ７ｉ付近にあり南北に走りＳＤ３に交わる溝。幅は10～50cm。ＳＤ３より古く自然流路の痕跡と推測される。

（5）竪穴住居跡

９～10世紀と推測される竪穴住居跡が３棟検出されている。検出位置はいずれもＳＤ１西よりも西側のＶＪ付近である。これらの住居にはＳＩ１～ＳＩ３の名称を付したが、いずれも精査をおこなっておらず、検出作業に留まっている。ＶＪ３ｃ付近に南辺、西片のみが残存する竪穴住居状の落ち込みが存在するが、竪穴住居跡と判断するに至っておらず、ここでの記述はおこなっていない。

ＳＩ１

〔位置〕ＶＩ４ｊ・ＶＪ４ａグリッド付近に位置する。接待館遺跡調査区の西端付近である。
〔検出状況〕検出面は標高24.5m前後のⅥ層上面である。
〔重複〕ＳＢ17、ＳＢ18よりも古い。
〔平面形・規模〕南北6.10m、東西5.05mの方形を呈する。カマドの有無、方位は不明である。
〔埋土〕不明。
〔床面〕不明。
〔出土遺物〕不明。
〔性格〕古代の竪穴住居と推測される。
〔年代〕不明であるが、周辺から出土した土師器片から９～10世紀と推測される。

ＳＩ２

〔位置〕ＶＪ３ｄ・４ｄグリッド付近に位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.5m前後のⅥ層上面である。
〔重複〕なし
〔平面形・規模〕南北4.35m、東西5.15mの方形を呈する。カマドの有無、方位は明瞭ではないが、埋土中の焼土の散布から、南壁にカマドが付くと推測される。
〔埋土〕不明。
〔床面〕不明。
〔出土遺物〕不明。
〔性格〕古代の竪穴住居と推測される。
〔年代〕不明であるが、周辺から出土した土師器片から９～10世紀と推測される。

ＳＩ３

〔位置〕ＶＪ３ｅ・４ｅグリッド付近に位置する。
〔検出状況〕検出面は標高24.5m前後のⅥ層上面である。
〔重複〕なし
〔平面形・規模〕南北3.60m、東西3.95mの方形を呈する。煙道状の突出の存在から南壁にカマドが付

くと推測される。

〔埋土〕不明。

〔床面〕不明。

〔出土遺物〕不明。

〔性格〕古代の竪穴住居と推測される。

〔年代〕不明であるが、周辺から出土した土師器片から９～10世紀と推測される。

接待館遺跡　柱穴観察表①

NO	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新＞古	遺物・その他 手→手づくねかわらけ ロ→ロクロかわらけ 縄→縄文土器
1	VK5d			
2	VK5d	SB20		手2片3.0g　ロ7片8.5g
3	VK5d	SB12		
4	VK5d			手8片13.3g
5	VK5d	SB20		手8片10.1g
6	VK5d	SB8		
7	VK5d			縄3片4.8g　手2片0.7g　ロ3片4.8g
8	VK5d	SB8		縄2片3.6g
9	VK5d	SB20		石匙16.5g　縄7片83.3g　手19片48.0g　ロ2片3.1g
10	VK5d	SB12		手3片10.7g
11	VK5d	SB20		縄1片11.8g　手1片1.1g　ロ1片2.5g
12	VK5d	SB12		石1個11.3g　手1片1.1g
13	VK5d	SB8		手1片0.9g　ロ1片1.7g
14	VK5c	SB10		手2片4.2g
15	VK5c	SB11		手1片0.9g
16	VK5c	SB9		
17	VK5c	SB20		手6片11.3g　ロ2片3.6g
18	VK5c	SB20		手3片4.8g
19	VK5c	SB9		
20	VK5c	SB11		
21	VK5c	SB20		手1片1.6g
22	VK5c	SB9	>P38	縄1片1.9g
23	VK4c	SB11		手1片0.8g　ロ1片0.7g
24	VK4b・4c	SB11		
25	VK4c			
26	VK4c			
27	没			
28	VK4c	SB9	>P29	刀子(5002)。
29	VK4c	SB10	P28>	縄3片53.8g
30	VK4c	SB11		
31	VK4c	SB10	P867	
32	VK4c	SB11		
33	没			
34	VK4d			
35	VK4d			
36	VK3d			手2片3.9g
37	VK3d・4d			
38	VK4b・4c	SB10		
39	VK6b			
40	VK6c	SB15		ロ1片5.6g
41	VK6c	SB20	P42(SB14)>	手3片3.9g
42	VK6c	SB14	>P41(SB20)	
43	VK6c			
44	VK6c			
45	VK6c	SB20		手6片8.6g　手2片1.2g
46	VK7c	SB15		手5片6.1g　ロ2片3.4g
47	VK6c	SB6		
48	VK6c			手2片2.8g
49	VK6b			手4片12.0g
50	VK5d・6d	SB15		
51	VK6d			
52	VK6c	SB5		常滑甕(2013)。手20片41.5g　ロ9片21.1g
53	VK6d	SB6		陶器皿(4009)。
54	VK6d	SB15		手4片4.8g　ロ4片15.3g
55	VK6d			手2片2.6g　ロ1片5.0g
56	VK6d	SB6		手5片6.1g　ロ2片0.7g
57	VK6d	SB20		渥美甕(2044)。石1個3.2g　縄1片11.9g 手29片49.3g　ロ8片21.9g
58	VK6d	SB8		縄1片5.5g　手3片3.7g
59	VK6d	SB15		手2片2.0g
60	VK6d	SB5		手8片9.3g　ロ10片12.9g
61	VK6d			
62	VK6d	SB12		石1個2.1g　縄2片16.1g　手22片42.1g ロ13片38.3g SB14と重複
63	VK6d	SB6		
64	VK5d・6d			
65	VK5d・6d	SB6		
66	VK6d	SB14	>P67	須恵器(111)。手13片26.8g　ロ5片10.5g
67	VK6d	SB12	P66>	
68	VK6d	SB5	>P958	至大通寶(343)。釘(5009)。縄2片34.9g 手22片76.2g　ロ7片15.8g　非磨耗
69	VK6d・6e	SB20		手5片18.1g　ロ28片72.5g
70	VK6d	SB20		手6片10.8g　ロ2片　9.4g
71	VK6d	SB20		手9片22.8g
72	VK7c	SB15		手1片3.0g
73	VK7c	SB14		手1片4.7g　ロ3片14.5g
74	VK7c	SB20		手1片1.6g　ロ1片5.0g
75	VK7d	SB20		常滑広口壺？(2028)。手24片38.3g　ロ18片35.7g
76	VK7d	SB14		手16片24.0g　ロ8片11.1g
77	VK7d			
78	VK7d	SB15		不明鉄製品(5019)。
79	VK7d			手2片1.0g　ロ2片5.9g
80	VK7d			
81	VK7d	SB14		手8片15.0g　ロ3片5.1g
82	VK7d			手4片7.5g　ロ1片1.3g
83	VK7e		P109>	
84	VK7d・7e			手7片14.9g
85	VK7d	SB14		手20片26.3g　ロ2片1.5g
86	VK7d	SB5		手1片8.0g　ロ5片9.8g
87	VK7d			
88	VK7d			手14片60.1g　ロ5.9g
89	VK7e			手13片25.7g　ロ5片9.5g
90	VK7e	SB14		手2片3.4g
91	VK7e	SB5	P92>	手4片11.4g　ロ1片3.3g
92	VK7e		>P91	C3手づくねかわらけ小(1246)。手12片 52.5g　ロ1片1.3g　縄文1片2.3g　非磨耗
93	VK7e	SB21		手10片88.2g
94	VK7e	SB5	P95>	
95	VK7e		>P94	手28片109.9g　ロ13片33.5g
96	VK7e	SB5		手26片90.1g　ロ5片8.0g
97	VK7e	SB43		手2片11.5g　ロ1片3.6g
98	VK7e			手3片8.4g
99	VK7e・8e			手4片12.5g
100	VK7e	SB4		手5片11.2g　ロ1片3.9g
101	VK7e			手7片7.6g　ロ3片2.6g
102	VK7e	SB4		手2片2.2g
103	VK7e		P104>	
104	VK7e	SB21	>P103	手20片47.4g　ロ1片5.7g
105	VK7e	SB4		手8片5.0g　ロ1片0.9g
106	VK7e			
107	VK7e	SB43		
108	VK7e	SB21		
109	VK7e	SB46	>P83	手16片23.6g　ロ2片7.8g
110	VK7e	SB14		
111	VK7f	SB3	>P112	ロクロかわらけ大(1245)。手5片12.6g　木炭6.6g
112	VK7f		P111>	手6片8.2g
113	VK7f			手1片3.2g
114	VK8f	SB2		
115	VK8f			手4片10.2g
116	VK7f	SB3		手9片37.7g　ロ4片7.2g

接待館遺跡　柱穴観察表②

NO	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新 > 古	遺物・その他 手→手づくねかわらけ ロ→ロクロかわらけ 縄→縄文土器
117	VK7f	SB30		
118	VK7f			
119	VK7f	SB7		手2片1.7g　ロ2片3.6g
120	VK7f	SB21		縄1片2.0g　ロ27片61.6g
121	VK7f	SB22	>P122	手8片26.2g　ロ3片16.2g
122	VK7f	SB29	P121>	手4片5.6g　ロ3片9.2g　木炭14.4g
123	VK7f		P171>	
124	VK7f	SB22		手1片4.1g　ロ1片1.8g
125	VK7f	SB28	>P126	
126	VK7f	SB44	P125>	手2片7.3g
127	VK7f	SB30		縄文土器(1)。渥美甕(2034)。
128	VK7f	SB3		手5片5.9g　ロ1片0.4g
129	VK7f			手7片5.4g　ロ3片18.5g
130	VK7f	SB2		
131	VK7f	SB44		不明鉄製品(5022)。手61片135.7g　ロ5片6.3g
132	VK7f	SB3		手58片126.1g　ロ4片5.8g
133	VK7f	SB2		手12片34.8g　ロ6片10.1g　木炭1.9g　SB21と重複
134	VK7f	SB4		手10片13.4g　ロ2片3.1g
135	VK6e			縄1片3.1g　手9片11.0g　ロ2片5.7g
136	VK6e	SB4		縄1片2.8g　手5片8.4g　ロ2片2.8g
137	VK6e	SB45	>P138	手14片37.6g　ロ9片18.4g
138	VK7e・6e		P137・168>	
139	VK6e	SB21	>P140(SB20)	手9片28.6g　ロ3片13.3g
140	VK6e	SB20	P139(SB21)>	手21片39.4g　ロ9片22.7g
141	VK6e	SB5		手15片48.8g　ロ2片5.0g
142	VK6e	SB6		
143	VK6e	SB5		手5片31.4g　ロ1片4.4g
144	VK6e	SB43		縄2片18.1g　手7片11.6g　ロ2片4.4g
145	VK6e	SB45		
146	VK6e	SB20		
147	VK6e			
148	VK6e	SB21		手9片20.4g
149	VK6e	SB12	>P161	手28片86.7g　ロ7片　19.8g
150	VK6e			手1片5.8g
151	VK6e	SB14	>P1168	石1個1.3g　手44片71.0g　ロ13片32.4g
152	VK6e	SB13	>P153(SB16)・155	
153	VK6e	SB16	P152(SB13)>	木炭0.3g　手16片42.6g　ロ5片14.8g
154	VK6e			手1片3.7g
155	VK6e		P152(SB13)>	
156	VK6e			手9片13.5g　ロ3片6.2g
157	VK6e	SB8		手2片1.7g
158	VK6e			手5片7.4g
159	VK6e	SB4		手5片10.9g　ロ1片1.0g
160	VK6e	SB45	P149>	手5片10.0g　ロ2片4.3g
161	VK6e	SB16		手5片8.5g
162	VK6e	SB46		手4片11.7g　ロ2片6.4g
163	VK6e	SB20		手11片15.1g　ロ1片0.6g
164	VK6e	SB43		
165	VK6f	SB30		
166	VK6f	SB13	P167>	
167	VK6f	SB12	>P166	木炭0.4g　手33片57.9g　ロ11片40.4g
168	VK6e	SB4		手7片13.2g　ロ5片8.7g
169	VK6f	SB4		手5片3.6g
170	VK6f	SB21		
171	VK6f		>P123	手2片5.2g
172	VK6f	SB29		
173	VK6f	SB20	P174>P173>P177	手17片36.8g　ロ2片4.9g
174	VK6f	SB22	P174>P173>P177	手11片29.0g　ロ1片2.9g
175	VK6f	SB43		
176	VK6f	SB21		手1片1.2g
177	VK6f	SB45	P174>P173>P177	手26片60.1g　ロ4片3.0g
178	VK6g	SB20		手7片9.4g
179	VK6f			手1片2.7g
180	VK6f	SB16		手3片3.9g　ロ1片2.5g
181	VK6f	SB30		
182	VK6f	SB13		鉄片1個3.2g　手11片61.1g　ロ3片35.6g
183	VK6f	SB7		手1片1.7g
184	VK6f			
185	VK6f	SB12		
186	VK6f	SB30		手1片1.2g
187	VK6f			手6片8.4g
188	VK6f	SB46		手3片8.4g
189	VK6f	SB43		手2片2.7g　ロ1片1.1g
190	没			手4片8.1g

NO	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新 > 古	遺物・その他 手→手づくねかわらけ ロ→ロクロかわらけ 縄→縄文土器
191	VK6f	SB45		常滑広口壺？(2027)。手12片19.0g　ロ1片6.7g
192	VK6f	SB30		手1片1.2g
193	VK6f	SB46		
194	VK6f	SB4		
195	VK6e・6f	SB30		
196	VK6f			手2片3.2g
197	VK5f			鉄片1個7.6g　手9片14.1g　ロ3片11.5g
198	VK5e	SB45		手21片40.1g　ロ9片20.0g
199	VK5e	SB13	P200(SB20)>	手1片2.9g
200	VK5e	SB20	>P199(SB13)・205	手12片29.8g　ロ1片1.8g
201	VK5e	SB12		ロ1片4.5g
202	VK5e	SB20		手2片9.3g　ロ1片1.4g
203	VK5e	SB16		手3片2.9g
204	VK5e	SB13		手4片12.3g
205		没	P200(SB20)>	手1片2.5g
206	VK5e	SB13		手33片33.7g　ロ2片5.3g　SB16と重複
207	VK5e	SB12		
208	VK5e	SB45		
209	VK5e	SB8		
210	VK5e	SB20		
211	VK5e			手2片6.0g　ロ1片6.2g
212	没			手6片12.4g
213	VK5e		P214>	手7片9.8g　ロ2片1.0g
214	VK5e	SB20	>P213	ロ1片3.2g
215	VK4e・5e			手1片4.4g
216	VK5e			
217	VK5e	SB16		手16片34.8g　ロ1片2.1g
218	VK5e			手2片3.3g　ロ2片6.8g
219	VK5e	SB12		手1片1.1g
220	VK5e			
221	VK5f	SB45		手5片6.8g
222	VK5e・6e	SB30		手1片0.6g
223	VK5e			
224	VK5f			手14片9.3g
225	VK5f	SB20		ロ1片2.2g
226	VK6f	SB22		手20片25.5g　ロ3片3.3g
227	VK5f	SB29		手5片4.9g
228	VK5f			
229	VK5f	SB22		
230	VK6f	SB46		
231	VK5f	SB13	>SD3	手30片153.8g　ロ14片42.1g
232	VK5f	SB20		
233	VK5f	SB20	>SD3	木炭0.4g　手15片64.5g　ロ4片21.5g
234	VK5f・5g	SB45		手19片25.8g　ロ3片3.8g
235	VK5g	SB13		ロクロかわらけ小(1244)。手13片68.5g　ロ9片51.3g
236	VK5g			
237	VK4e			
238	VK4e			手5片7.8g　ロ2片3.1g
239	没			
240	VK7g	SB3		手23片59.7g　ロ3片2.4g
241	VK8g	SB2		手7片6.2g　ロ3片2.4g
242	VK7g	SB3		手23片39.4g
243	没			手8片17.0g　ロ1片1.4g
244	VK7g	SB1	P1169>	手7片11.5g　ロ3片5.1g
245	VK6g	SB28		
246	VK7g	SB22		手10片15.6g
247	VK7g	SB29		
248	VK6g			
249	VK7g	SB44		縄1片21.8g　ロ1片3.4g
250	VK8g			
251	VK7g	SB3		
252	VK7g			手1片1.3g
253	VK7g	SB2		
254	VK7g			ロ1片0.9g
255	VK7g	SB22		
256	VK7g	SB7		
257	VK7g	SB2		
258	VK6g	SB33		
259	VK6g	SB43		手36片83.7g　ロ14片40.6g
260	VK6g	SB45		
261	VK6g	SB25		
262	VK5g	SB33		手12片65.3g　ロ3片7.6g
263	VK5g		>P264	
264	VK5g	SB25	P263>	手4片6.6g
265	VK5g			ロ3片7.7g
266	VK4g		P267>	手1片1.2g
267	VK4g		>P266	手1片1.5g　ロ4片8.1g

接待館遺跡　柱穴観察表③

NO	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新 > 古	遺物・その他 手→手づくねかわらけ ロ→ロクロかわらけ 縄→縄文土器
268	VK5g	SB13		手1片25.1g　ロ1片5.9g
269	VK5g	SB24	>P290	
270	没			
271	VK4g			
272	VK4g	SB47		
273	VK4f・4g	SB24		
274	VK8g	SB1		手4片22.1g
275	VK6g	SB28		手10片15.0g　ロ2片28.1g
276	VK6g	SB29		手3片4.9g　ロ1片4.5g
277	VK6g	SB28		常滑甕(2015)。手1片8.1g
278	没			
279	没			
280	没			
281	VK4b			
282	VK4b			縄1片4.0g
283	VK4g			
284	VK4g	SB24		
285	VK4g			
286	VK4g			手3片　5.3g
287	VK5h	SB13		釘(5011)。手2片5.7g　ロ3片37.6g
288	VK5g			梅の種3個3.6g　手1片1.4g
289	VK5g			
290	VK5g			手2片2.7g
291	VK5g	SB25		
292	没			
293	VK7g			ロ1へん2.8g
294	VK5g			
295	VK6g	SB25		
296	VK6g			手6片8.9g
297	VK6g	SB4		
298	VK6g	SB29		石英1個4.7g　手10片31.7g　ロ2片12.0g
299	VK4b	SB9	>P300	焼けた石1個144.6g
300	VK4b	SB10	P299>	
301	VK4b	SB10	P302・303>	
302	VK4b		>P301	
303	VK4b	SB9	>P301	
304	VK4b	SB11		
305	VK4b			
306	VK3b			煙管(6008)。
307	VK3b			
308	VK3b			
309	VK3a・3b			
310	没			
311	VJ2d			
312	VJ2d			
313	VJ2d			
314	VJ2d			
315	VJ2d・2e			
316	VJ5b			
317	VJ3a	SB17		
318	VJ3e			
319	VJ4b・4c			
320	VJ3c	SB19	>SI	
321	VJ4b			
322	VJ3b・4b			
323	VJ4b	SB17		
324	VJ4b	SB19		
325	VJ4c	SB17		
326	VJ4c	SB19		
327	VJ4c			
328	VJ3c・4c			土師器(内黒)5片12.0g
329	VJ3c・4c			土師器(内黒)1片4.7g
330	没			
331	VJ2c			
332	VJ2c			
333	VJ2c・2d			
334	SKに変更		>SI	
335	VJ3c	SB19	>SI	
336	VJ4b	SB17		手1片1.7g　ロ1片0.7g
337	VJ8a			
338	VJ5b			
339	VJ7b			
340	VJ5a			
341	VJ5a			
342	VJ7b			
343	SKに変更		>SI	
344	VJ2c			
345	VJ5b			

NO	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新 > 古	遺物・その他 手→手づくねかわらけ ロ→ロクロかわらけ 縄→縄文土器
346	VI4j	SB17		手1片3.3g
347	VJ4a	SB17		
348	没			
349	VJ4a			
350	VJ4a・5a			
351	VJ4a			
352	VJ4a			
353	VJ4a	SB17		
354	VJ4a	SB17		
355	VJ4b	SB17		
356	没			
357	没			
358	VJ3b			
359	VJ3b			
360	没			
361	VJ2a・3a	SB17		
362	SKに変更			
363	VI3j	SB17		
364	VI3j	SB18		
365	VI2j			
366	VI3j	SB18	>P380	
367	VI2j・3j	SB18		
368	VI3j			
369	SKに変更			
370	没			
371	VI2i			
372	VI2i・3i			
373	VI3i			黒曜石1個1.4g　ロ2片12.1g
374	VI3i			
375	VI3i			
376	VI3i			
377	VI3i	SB18		
378	VI3j	SB18		
379	VI3j	SB18		
380	VI2j・3j		P366	手1片1.7g　ロ2片10.8g
381	VJ2a			
382	VI2j			
383	VK8i	SB1		手4片3.5g
384	VK8h			
385	VK8h	SB1		
386	VK8h	SB1		手6片7.9g　ロ2片7.4g
387	VK7h			ロ1片2.8g
388	VK7h	SB1		鉄片1個6.1g　手4片8.0g
389	VK7h	SB1		手3片2.9g
390	VI2i・3i	SB18		
391	VK8h	SB2		ロ1片2.3g
392	VK7h	SB29		
393	VK6h	SB22		手6片10.5g　ロ2片1.3g
394	VK6h	SB29		
395	VK6h		P396>	
396	VK6h	SB28	>P395	
397	VK6h	SB29	<P398(SB22)	
398	VK6h	SB22	P397(SB29)>	木炭2.0g　手1片1.3g　ロ1片0.6g
399	VK6h			手3片3.3g
400	VK7h・6h	SB29		
401	VK7h			
402	VK7h	SB22		
403	VK7h			手1片1.0g
404	VK7h			木炭4.5g　手2片4.2g
405	VK6h			
406	VK6h			
407	VK6h			陶器皿(4010)。手2片2.1g
408	VK6h			手1片6.1g
409	VK6i			
410	VK6h	SB33		手4片4.6g
411	VK7h			手1片2.0g
412	VK7h			
413	VK6g	SB33		
414	VK7i			
415	VK6j	SB31		手3片6.2g
416	VK6j	SB31		縄1片2.0g　手18片35.8g　ロ3片6.5g
417	VK5j	SB31		
418	VK5j	SB32		手2片2.0g　ロ1片4.0g
419	VK5i			手6片26.3g
420	VK5h			手5片21.0g　ロ1片2.4g
421	VK5j・VL5a	SB31		手1片1.6g　ロ1片1.0g
422	VL5a			

接待館遺跡　柱穴観察表④

NO	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新 > 古	遺物・その他 手→手づくねかわらけ ロ→ロクロかわらけ 縄→縄文土器
423	VL5a	SB32		手5片9.6g
424	没			
425	没			
426	VK4i			
427	没			
428	VK5j	SB49		
429	VK5i			
430	VL5a	SB32		手2片2.8g　ロ1片0.7g
431	VL4a			
432	VK5j			
433	VK5j	SB49		
434	VK4i	SB49		
435	VK4i	SB50		
436	VK4h	SB50		
437	VK5h	SB33		
438	VK5j			
439	VK5h	SB22		
440	VK5h・5i	SB25		手2片3.7g
441	VK5h	SB13		手1片3.1g
442	VK5h	SB47		
443	VK5h	SB25		
444	VK4i			手1片5.1g
445	VK4i			
446	没			
447	VK4h	SB50		
448	VK5i			手32片130.8g　ロ9片50.2g
449	VL6b			
450	VK5i・5j		P475>	手1片1.1g　ロ1片1.2g
451	VK5i・5j			手2片2.1g　ロ1片25.2g
452	VK5i	SB48		
453	没			
454	没			
455	没			
456	VK5h	SB29	>SD3	手1片3.9g
457	VK5h	SB28	P458(SB13)・459>	渥美甕(2029)。
458	VK5h	SB13	P458(SB13)>P459>P457>P450	
459	VK5h	SB33		
460	VK5h		P458(SB13)・459>	
461	VK5h	SB47		
462	VK5h	SB25		
463	VK5h	SB13		手2片3.5g　ロ3片44.5g
464	VK5h			
465	VK4h			
466	VK4h	SB24		
467	VK4h			
468	VK4h			
469	VK4i	SB47		
470	VK4h	SB48		ロ1片5.6g
471	VK4h			
472	VK4h			手2片7.1g　ロ7片12.0g
473	VK5h			
474	VK5i	SB49		
475	VK5i	SB48	>P450	
476	VK5j	SB31		
477	没			
478	VK5h			
479	VK5h			
480	VK4h	SB24		
481	没			手4片10.2g　ロ2片2.6g
482	VK5h・5i			ロ2片4.2g
483	VK4h・5h			手4片4.0g
484	VK5h			
485	VK5h			ロ1片2.5g
486	没			
487	VK5i			
488	VK5i			手4片6.1g
489	VK5i	SB25		手13片33.3g　ロ1片1.4g
490	VK3h・4h	SB50		
491	VK4h			
492	VK4h			
493	VK4h	SB47		
494	没			
495	没			
496	VK5h	SB49		
497	VK5h・5i			
498	VK5i	SB48		手1片7.2g
499	没			
500	VK5i			手2片2.7g
501	VK5i			
502	VK5i			手4片3.5g
503	VK5i			
504	VK7j			手4片11.1g　ロ1片1.8g
505	VK5i			手2片7.3g　ロ1片1.1g
506	VK7j			
507	VL7a			
508	VL7a			
509	没			
510	VIL0b			
511	VL5b	SB32		ロ1片4.1g
512	VL4b			
513	VL4b・5b			
514	VK7j			
515	VL5d	SB26	>P1228	瓦質土器手あぶり？(4011)。頁岩剥片1個11.0g　手6片6.0g　ロ2片2.7g
516	VL9c			
517	VL6d			
518	VL6d			
519	VL6c		>P1176	
520	没			
521	没			
522	VL6c			
523	没			
524	没			
525	VL7c			
526	VL9c			
527	VL9c			
528	VL9c			
529	VL9d			
530	VL9d			
531	没			
532	VL9d			
533	VL9d			
534	VL9d			
535	没			
536	VL9e		P609>	
537	没			
538	VIL0c			
539	VIL0c			
540	VL9c			
541	VIL0c			
542	VIL0c			手3片5.3g
543	VIL0c			
544	VL7d・8d			
545	VL7d・8d			
546	VL8c			
547	VL8c			
548	VL8c			
549	VL8d			手2片2.7g
550	VL8d			
551	VL8d	SB37		
552	VL8d			
553	VL8d			
554	VL9d			
555	VL8d			
556	VM5i	SB38		ロ1片1.0g
557	VL5d	SB37		
558	VL4d・5d	SB26		
559	VL5d	SB26		手2片1.7g　ロ1片2.8g
560	VL5c			
561	没			
562	没			
563	VL8e	SB51		木炭0.7g　手20片109.4g　ロ6片20.2g
564	VL8e			
565	VL8d			
566	VL8e			
567	VL8e			
568	VL7e			
569	VL7e			手11片30.6g　ロ5片5.0g
570	VL7e	SB27		手22片78.4g　ロ18片48.8g
571	VL7e			
572	VL7e			
573	VL7e			

接待館遺跡　柱穴観察表⑤

NO	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新 > 古	遺物・その他 手→手づくねかわらけ ロ→ロクロかわらけ 縄→縄文土器
574	VL7e	SB51		D4手づくねかわらけ大(1247)。
575	VL7e			手40片126.7g　ロ11片35.9g
576	VL7e	SB27		手3片3.3g
577	VL7e			
578	没			
579	VL7e			
580	VL7e			雲母3.3g　手10片26.3g　ロ4片11.0g
581	VL6e	SB27		
582	VL6e			手3片6.1g　ロ3片5.1g
583	VL8e	SB51		手6片8.4g　ロ3片6.9g
584	VL6e			
585	VL6e			
586	VL5e	SB54		
587	没			
588	VL6e			
589	VL5e	SB52		
590	VL5e			
591	VL5e	SB53		
592	VL5e			
593	VL5e			
594	VL5e			
595	VL5e			
596	没			
597	VL4e・5e			手2片4.1g
598	没			手3片2.5g
599	VL5e	SB54		手6片8.3g　ロ2片10.6g
600	VL5e	SB52		
601	VL5e			手10片8.4g　ロ3片5.0g
602	VL5e	SB53		
603	VL5e			
604	VIL0e			
605	VIL0e			
606	VIL0e			
607	VIL0e			
608	VIL0e			
609	VL9e		>P536	
610	VL9e			
611	VL9g			
612	VL9f			手2片1.2g　ロ2片5.2g
613	VL8f		>P614	
614	VL8f		P613>	
615	VL7f	SB51		手13片89.9g　ロ7片61.8g
616	VL7f	SB51		ロ4片2.5g
617	VL7f			
618	VL7f			手39片103.9g　ロ3片5.5g
619	VL7f・7g	SB27		
620	VL7f			
621	VL7f			手13片69.5g　ロ12片34.2g
622	VL8f	SB51		手1片4.3g
623	VL8f			手48片273.3g　ロ17片65.3g
624	VL8g	SB51		
625	VL8f			
626	VL8f			
627	VL8f			手7片36.2g　ロ4片14.3g
628	VL8f	SB27		
629	VL8f			
630	VL7f			
631	VL6f・7f			手4片2.5g
632	VL6f			手30片59.3g　ロ4片18.1g
633	VL7f	SB27		
634	VL6f			
635	VL6f			手16片37.8g　ロ8片14.0g
636	VL6f			手8片6.0g　ロ2片0.8g
637	VL6f			手16片30.1g　ロ9片29.0g
638	VL6f			手8片26.5g　ロ2片3.6g
639	VL5f			手50片103.5g　ロ16片34.3g
640	VL6f			手98片368.0g　ロ23片65.8g
641	VL6f			手1片0.7g　ロ2片5.2g
642	VL7f・7g			手3片1.8g　ロ2片1.1g
643	VL7f	SB27		手28片68.3g　ロ11片25.5g
644	VL5f			手17片30.4g　ロ4片4.3g
645	VL5f			
646	没			
647	没			石11.4g　手75片354.2g　ロ14片41.8g
648	VL6f			メノウ17.3g　手30片58.3g　ロ6片10.8g
649	VL6f			
650	没			手2片1.5g
651	没			
652	VL5f	SB54	>P653	手9片12.5g　ロ2片5.5g
653	VL5f		P652>	手5片10.6g
654	VL5f			土師器1片2.4g　手25片41.1g　ロ3片6.5g
655	VL5f	SB52		釘(5016)。
656	VL5f			
657	VL5f			
658	VL5f・5g			手2片3.5g
659	VL5f			
660	没			
661	没			
662	没			2個34.4g　手40片103.1g　ロ4片6.、9g
663	VL5f	SB53	>P664	鏃(5005)。手19片20.6g　ロ4片7.2g
664	VL5f		P663>	手9片28.8g　ロ2片7.9g
665	没			
666	没			
667	VL9g			
668	VL8h		SD6>	手9片26.8g　ロ1片3.3g
669	VL8h	SB34		
670	没			
671	VL8h			
672	VL8h			
673	VL8g			手67片190.7g　ロ8片24.4g
674	VL8g	SB27		
675	没			手26片67.4g　ロ22片96.3g
676	VL8g	SB27		手1片1.5g
677	没			
678	VL7g			
679	VL7g			
680	VL7g			手13片13.2g　ロ4片9.7g
681	VL7g	SB34		
682	VL7g・7h			手11片20.1g　ロ2片2.9g
683	VL7h	SB34		
684	没			手18片12.3g　ロ11片14.4g
685	VL7h	SB34		手1片1.9g　ロ2片6.9g
686	VL7h	SB34		手1片1.1g
687	VL7h			
688	VL7g			手24片26.4g　ロ2片2.5g
689	VL7h			手2片3.4g　ロ2片3.9g
690	VL6g			手36片90.7g
691	VL6g			陶器皿(4013)。
692	VL6g			手7片6.1g　ロ1片0.8g
693	VL6g			手6片4.2g　ロ5片2.8g
694	没			手7片8.7g　ロ2片2.0g
695	VL6h		>P716	手1片1.1g
696	VL6h			手2片1.4g　ロ1片1.4g
697	VL6h			
698	VL6h		>P710	
699	没			手7片5.6g　ロ1片0.9g
700	VL5g	SB55		
701	没			手2片5.9g
702	VL5g			ロ1片2.7g
703	VL5g			
704	没			手42片76.5g　ロ19片71.1g
705	VL5g			手3片1.8g　ロ1片10.6g
706	VL5g			手37片53.2g　ロ11片24.3g
707	VL5g			手46片131.0g　ロ14片18.8g
708	VL6h		P709>	手6片9.8g　ロ1片0.5g
709	VL6h		>P708	
710	VL6h		P698>	
711	没			手7片15.4g　ロ2片4.1g
712	VL6h			手7片8.5g
713	VL6h			
714	VL6h			
715	VL5h			
716	VL6h		P695>	手1片2.0g　ロ2片4.5g
717	VL6h			
718	VL6h			手3片5.1g　ロ1片1.5g
719	没			
720	没			手4片9.5g　ロ1片9.4g
721	VL5g			土師器2片2.2g　手6片14.4g　ロ2片9.6g
722	VL5g			手15片33.1g　手3片13.7g
723	VL5g			
724	VL4g			
725	VL4g			手1片2.0g
726	VL5g			
727	VL4g			
728	VL4g			
729	VL4g			

接待館遺跡　柱穴観察表⑥

NO	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新 > 古	遺物・その他 手→手づくねかわらけ　ロ→ロクロかわらけ　縄→縄文土器
730	VL6h			手5片13.6g　ロ3片7.9g
731	VL5g		P732>	手7片10.3g
732	VL5g		>P731	手6片13.2g　ロ2片3.2g
733	VL5g			手5片8.7g　ロ1片1.9g
734	VL5g			手2片3.3g
735	VL4g	SB55		手2片1.1g
736	VL4g			
737	VL4f			
738	VL4g			
739	VL4g			
740	VL4g			手26片29.0g　ロ6片6.2g
741	VL6h			
742	没			
743	没			
744	没			
745	没			
746	VL7i			
747	VL7i			
748	VL6i・7i			
749	VL7i			手3片6.4g　ロ1片3.3g
750	VL7i	SB34		
751	VL7i			
752	VL7i			
753	VL7i			
754	没			
755	VM5h			常滑甕(2020)。
756	VM5h			
757	VM5h			
758	VM5h			
759	VM5h	SB37		
760	VM5h			
761	VM5h	SB40		
762	VM5h	SB37		
763	VM5h			
764	VM5h			
765	VM5h			
766	VM5h		P1051>	
767	VM5h	SB39		
768	VM5g			
769	VM4h	SB38		
770	VM4h	SB40		
771	VM4h			
772	VM4h	SB36		
773	VM4h・4i			
774	VM4h・4i			
775	VM4h・4i			
776	VM4h	SB40		
777	VM3h	SB35		
778	VM3h			
779	VM3h	SB36		
780	VM3h			
781	VM3h	SB36		
782	VM3h			
783	VM3h			
784	VM4g			
785	VM4g	SB41		
786	VM5g			
787	VM4g			
788	VM4g			
789	VM4g	SB41		
790	VM5g・6g	SB40		
791	VM5g	SB40		
792	VM5g			
793	VM5g	SB40		
794	VM5g			
795	VM4g	SB41		
796	VM4g			
797	VM4g			
798	VM3g	SB35		
799	VM3g			
800	VM3g			
801	VM3h			
802	没			
803	VM3g			
804	没			
805	没			
806	VM3f・3g		>P809	
807	VM3f			
808	VM3f			
809	VM3f・3g		P806>	
810	VM3f			
811	VM3g			
812	没			
813	VM4f			
814	VM3f			
815	VM3f			
816	VM3f			
817	VM3f			
818	VM4f			
819	没			
820	VM4f			
821	没			
822	VM4f			
823	VM4f・5f			
824	VM5f			
825	VK5f	SB22	>SD3	
826	VM3h			
827	没			
828	VM4f	SB27		
829	没			
830	没			
831	没			
832	没			
833	没			
834	没			
835	没			
836	没			
837	没			
838	没			
839	没			
840	没			手1片14.6g　ロ1片7.3g
841	没			手4片3.9g　ロ2片1.7g
842	VK7h	SB1		
843	VK8g	SB2		
844	VK8f	SB2		
845	VK7g	SB2		
846	没			
847	VK7g	SB3		手10片17.4g
848	没			土師器1片4.9g
849	VJ3a	SB17		
850	VJ3b	SB17		
851	VJ3c	SB17	>SI	
852	VJ2a・3a	SB17		
853	没			
854	VJ3b	SB17		
855	VJ2c・3c	SB17		
856	VI4j	SB17		土師器1片2.9g
857	VJ4a	SB17		
858	VJ4b	SB17		
859	VJ4c	SB17		
860	VI3j	SB18		
861	VJ4c	SB19		
862	VK5c	SB10		
863	没			
864	Vk3c・4c	SB11		
865	Vk3c・4c	SB9		
866	VK6c	SB15		
867	VK4c	SB9		
868	没			手4片19.5g　ロ4片16.9g
869	VL6c	SB26		手9片7.5g　ロ7片9.5g
870	VL6c	SB26		縄1片2.2g　手4片2.4g　ロ1片3.5g
871	VL5c	SB26		
872	没			
873	没			手1片0.9g
874	VK5f	SB22	>SD3	手24片43.9g　ロ3片6.6g
875	VK5f		>SD3	手19片46.0g　ロ4片7.1g
876	VK5g	SB45	>SD3	
877	VK5g	SB22	>SD3	手6片16.8g
878	VL8f			手80片237.7g　ロ56片153.1g
879	VL8f	SB27	>SK15	
880	没			
881	VK6e	SB14		
882	VK6f			
883	VK6g	SB13	>P944(SB7)	手4片3.0g
884	VK5f	SB20	>SD3	釘(5010)。
885	VK5f	SB12	>SD3	ロ1片2.2g

接待館遺跡　柱穴観察表⑦

NO	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新 > 古	遺物・その他 手→手づくねかわらけ ロ→ロクロかわらけ 縄→縄文土器
886	VK6g	SB13		
887	没			手1片2.3g　ロ1片0.8g
888	VK6e			手5片14.5g
889	VL6a	SB31		手17片39.0g　ロ4片8.6g
890	没			
891	没			
892	没			
893	没			手1片1.5g
894	VK6d	SB8		鉄片1.7g　土師器1片4.8g　手3片2.9g
895	VK5f	SB16	>SD3	
896	VK5h	SB29	P897>	
897	VK5h	SB22	>P896	
898	没			
899	VK5g	SB29	>SD3	手1片0.8g
900	VK5g	SB28	>SD3	手2片5.7g　ロ1片1.1g
901	VK7g	SB44		渥美甕(2043)。土師器1片4.9g　ロ1片1.0g
902	VK6g	SB33		手4片6.0g　ロ1.0g
903	没			手3片8.8g　ロ1片4.4g
904	VK6h	SB33		
905	VK5g	SB33		手9片33.4g
906	VK5f	SB20	>SD3	須恵器甕(111)。木炭6.3g　土師器3片13.1g 手片174片　ロ24片91.5g
907	VK5f	SB12	>SD3	
908	VK6g	SB29		手5片9.9g　ロ3片8.2g
909	VK5g	SB28		手3片3.9g
910	VK5f	SB28	>SD3	手7片15.2g
911	VK5f	SB29	>SD3	手7片13.8g　ロ片54.0g
912	VK6h	SB13		手1片1.3g
913	VK4i・5i	SB48		
914	VK5c	SB20		手2片14.0g　ロ1片0.5g
915	没			
916	VK5c・6c			
917	VK7h			手4片7.8g
918	VK7g	SB44		
919	VK5g	SB13	>P920(SB47)	
920	VK5g	SB47	P919(SB13)>	手2片3.3g　ロ1片3.7g
921	VK6h			手3片3.2g
922	VK6g			
923	VK6g	SB7		木炭2.0g　手7片10.3g　ロ2片3.2g
924	VK6h			手3片6.7g
925	VK6g	SB20		
926	没			手1片1.2g
927	没			手3片5.1g
928	VK5i		>SD3	
929	VK5h			
930	VK5h			
931	VK5e	SB13		手2片2.5g
932	VK6c	SB6		鉄片1.5g　手2片2.9g　ロ2片4.5g
933	VK6f			
934	VK6g			
935	VK7g	SB29		手4片6.5g　ロ2片1.8g
936	VK7h		P390>	
937	没			
938	VK7h			手1片3.9g
939	VK7i			手3片39.6g
940	VK6i			
941	VK6e			
942	VK7g	SB4		ロ1片1.2g
943	VK6g			手8片25.7g　ロ1片3.7g
944	VK6g	SB7	>P883(SB13)	
945	VK6g			手4片6.5g
946	VK5h			手2片2.5g　ロ4片9.2g
947	VK6g			
948	VK6e	SB46		
949	VK5g	SB22		
950	VJ2b			
951	VJ4c・5c			
952	VJ4c		>P955	
953	VJ3b	SB19		
954	VI2i			
955	VJ4c		P952>	
956	VK4f			
957	VK3c			手1片1.0g　ロ1片2.2g
958	VK6d		P68>	
959	没			
960	VL8h	SB34		
961	没			
962	VK4i			
963	没			
964	没			
965	SKに変更 Vk4i			
966	VK4i		P1222>	
967	VK8i			
968	没			手47片74.9g　ロ7片7.3g
969	没			手23片110.6g　ロ2片6.8g
970	VL8h	SB34		
971	VL8i	SB34		
972	VL7i	SB34		
973	VL5f			手19片34.4g　ロ3片3.3g
974	VL5f	SB54		
975	VL5f			手4片15.4g
976	VL6f	SB55		手8片4.8g　ロ3片6.6g
977	VL6f			手6片13.3g
978	VL6f			手26片92.5g　ロ15片69.9g
979	VL6f			手11片14.3g　ロ4片3.4g
980	VL6f			手6片5.3g　ロ1片2.6g
981	VL6f・6g			
982	VL6g			
983	VL7g			手3片18.5g　ロ3片8.5g
984	VL7g			手8片16.1g
985	VL5f			
986	没			
987	没			
988	没			
989	没			
990	没			
991	没			
992	没			
993	VM3g・4g	SB35		
994	VM4f・4g	SB35		
995	VM2h	SB35		
996	VM2g・3g	SB35		
997	VM3g	SB35		
998	VM3f	SB35		
999	VM4i	SB36		
1000	VM3h・4h	SB36	P1259>	
1001	VM4i			常滑甕(2004)。
1002	VM4i			
1003	VM3i			
1004	VM3h・4h		P1005>P1006 >P1004	
1005	VM3i		P1005>P1006 >P1004	
1006	VM3h・4h		P1005>P1006 >P1004	
1007	VM3i			
1008	VM3i			
1009	VM3i			
1010	VM3i			縄1片4.4g
1011	VM3i			
1012	VM3i			
1013	VM3i		>P1014	
1014	VM3i		P1013>	
1015	VM3h			
1016	VM3h			
1017	没			
1018	VM3j			
1019	VM3h			
1020	VM2h・3h			
1021	VM3j			
1022	VM3j			
1023	VM3j			
1024	VM2j		>P1025	
1025	VM2j		P1024>	
1026	VM2j・3j			
1027	VM3j			
1028	VM3j			
1029	VM2j			
1030	VM7h			
1031	VM7h			
1032	VM7h			
1033	VM7h			
1034	VM6h	SB37		
1035	VM5h	SB41	P1036>	
1036	VM5h		>P1035・1037	

接待館遺跡　柱穴観察表⑧

NO	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新 > 古	遺物・その他 手→手づくねかわらけ ロ→ロクロかわらけ 縄→縄文土器
1037	VM5h		P1036>	
1038	VM7i			
1039	VM7h・7i			
1040	VM7h			
1041	没			
1042	VM5g	SB39		
1043	VM6h	SB39		
1044	没			
1045	VM6i			
1046	VM6i・7i			
1047	VM6i・6j			
1048	VM6i・7i			
1049	VM5g	SB41		
1050	VM5g	SB41		
1051	VM4h	SB41	>P766	
1052	VM8h	SB37		
1053	VK2c	SB37		
1054	VK2d			
1055	VK2c			
1056	VK2d			
1057	VK2d			
1058	VK2d			
1059	VK2d			
1060	VK3d			
1061	VK2d			
1062	VK2d			
1063	VK2d			
1064	VK2d			
1065	VK3d			
1066	VK3d			
1067	VK3d			
1068	VK3d			
1069	VK3e			
1070	VK2d			
1071	VK2d			
1072	VK3d・3e			
1073	VK3h	SB50		
1074	VK3h			
1075	VK3g			
1076	VK3h	SB50		
1077	VK4i	SB50		
1078	VK4i・4j			
1079	VK4j			
1080	VK4j	SB49		
1081	VK4j			
1082	VK4j			
1083	VL4a			
1084	VK3j			
1085	VK3i	SB50		
1086	VL4b			
1087	VL4a			
1088	VL4a			
1089	VL4a	SB32		
1090	VL4b			
1091	VL4b			
1092	VL4b			
1093	VL4b			
1094	VL4b			
1095	VL4b			
1096	VL4b			
1097	VL4b			
1098	VL4d	SB52		
1099	VL4d	SB53		
1100	VL4e	SB52		
1101	VL4e	SB53		
1102	VL4e	SB54		
1103	VL4e			
1104	VL4e	SB52		
1105	VL4e			
1106	VL4e	SB53	>P1107	
1107	VL4e		P1106>	
1108	VL4e			
1109	VL4f	SB52		
1110	VL4f	SB54		
1111	VL4h			
1112	VL4h			
1113	VL4h			
1114	VL4h			

NO	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新 > 古	遺物・その他 手→手づくねかわらけ ロ→ロクロかわらけ 縄→縄文土器
1115	VL4h			
1116	VL4h			
1117	VL4h			
1118	VL4h			
1119	VL5h			
1120	VL5h			
1121	VJ2f			
1122	VJ1f			
1123	VJ1e			
1124	VJ1e			
1125	VJ1e			
1126	VJ1e			
1127	VJ1e			
1128	VJ1d			
1129	VJ1d			
1130	VJ1c			
1131	VJ1d			
1132	VIK2j		>SD6	
1133	VIL2a		>SD6	
1134	VIL2a		>SD6	
1135	VIK2j			
1136	VIK2j			
1137	VIK2j			
1138	VIL2a			
1139	VIL2c			
1140	VIM1a			
1141	VIK1a			
1142	VIK1a			
1143	VIK1c			
1144	VIK1c			
1145	VIK1d			
1146	VIK1d			
1147	VIK0i			
1148	VIL0b			
1149	VIM1a			
1150	VJ9h			
1151	VL9g			
1152	VL8g			
1153	VL8g			
1154	VL9h			
1155	VL9h			
1156	VL9h			
1157	VL9h			
1158	VL9i			
1159	VL9i			
1160	VL8h			
1161	VI7j			
1162	VI7j			
1163	VI7j			
1164	VI7j			
1165	VK7b			
1166	VK6b			
1167	VK7c			
1168	VK6e	SB13	P151>	
1169	VK7g	SB44	>P244	
1170	VK7g	SB7		
1171	VL6a	SB31		
1172	VL7c			
1173	VL7d			
1174	VL7d			
1175	VL7d			
1176	VL6c		P519>	
1177	VL6d			
1178	VL6d	SB26		
1179	VL7g			
1180	VL6f			
1181	VL6h			
1182	VL6i			
1183	VL6i			
1184	VL6i・5i			
1185	VM6b			
1186	VM6b			
1187	VM4f			
1188	VM7i			旧1040
1189	VM6g			
1190	VM6g	SB39		
1191	VM6h			
1192	VM6h			

接待館遺跡　柱穴観察表⑨

NO	グリッド	掘立柱建物	新旧関係 新 > 古	遺物・その他 手→手づくねかわらけ　ロ→ロクロかわらけ　縄→縄文土器
1193	VM6h			
1194	VM6h			
1195	VM6h			
1196	VM6h			
1197	VM6h	SB39		
1198	VM6h			
1199	VM6h	SB38		
1200	VM6h・6i			
1201	VM6h			
1202	VM6h			
1203	VM6h・6i	SB39		
1204	VM6h・6i			細田？ P546
1205	VJ4c		>P1206	
1206	VJ4c		P1205>	
1207	VK3d		>SD3	
1208	VK5g	SB24		
1209	VK5g			
1210	VK5g	SB22		
1211	VK5g			
1212	VK5h			
1213	VK4h	SB47		
1214	VK3h・4h			
1215	VK5i	SB47		
1216	VK5i	SB49	>P1217	
1217	VK5i		P1216>	
1218	VK5j			
1219	VK5j			
1220	VL5a	SB31		
1221	VK4i			
1222	VK4i	SB48	>P966	
1223	VL4a	SB32		
1224	VL4a	SB32		
1225	VL5b			
1226	VL5b			
1227	VL5c	SB26		
1228	VL5d		P515>	
1229	VL5d・5e			
1230	VL4b			
1231	VL5f	SB53		
1232	VL5f			
1233	VL5g	SB55		
1234	VL4f	SB55		
1235	VL4f			
1236	VL4f・4g			
1237	VL4f			
1238	VL5h	SB55		
1239	VL5h			
1240	没			
1241	VL5h	SB55		
1242	VL5j			
1243	VL4j			
1244	VM5a			
1245	VM5a			
1246	VM5a			
1247	VM5a			
1248	VM4a			
1249	VM4a			
1250	VM4a			
1251	VM4a			
1252	VM4a			
1253	VM5h			
1254	VM5h	SB38		
1255	VM5h	SB39		
1256	VM5h			
1257	VM5i		>P1260	
1258	VM5h・5i			
1259	VM4h		P1000>	
1260	VM5i		>P1257	
1261	VM5i	SB39		
1262	VM4h・4i			
1263	VJ3b			
1264	VJ3b	SB17		
1265	VJ2e			
1266	VL3i			
1267	VL3i			
1268	VL3i			
1269	VL3i			
1270	VL3i			
1271	VL3i			
1272	VL3i			
1273	VL3h			
1274	VL2j			
1275	VM3a			
1276	VM3a			
1277	VM3f			
1278	VI0g			
1279	VI0g			
1280	VI1h			
1281	VI1h			
1282	VI0h			
1283	VI0h			
1284	VI0i			
1285	VI0i			
1286	VJ1d			
1287	Ⅳ I9h			
1288	Ⅳ I9h・9i			
1289	Ⅳ I9i			
1290	Ⅳ I9i			
1291	VK4j	SB32		
1292	VL8b			
1293	ⅥL2a			
1294	VM5h	SB38		
1295	VM6i	SB38		
1296	VM3i	SB36		
1297	VM2i	SB36		
1298	VK7h	SB22	>P936	
1299	VL7a			
1300				

2　出　土　遺　物

（1）縄文土器・石器（第149図、写真図版99）

縄文時代の土器は1片を図示した。1は注口部付きの深鉢片で、縄文時代中期末から後期初頭の時期が想定される。出土した部位には縄文原体は施文されない。

石器は石鏃が1点出土した。石材は頁岩で無茎鏃である。基部の抉りは小さい。

（2）土師器・須恵器・灰釉陶器（第150図、写真図版99）

古代の土師器・須恵器は17点を図示した。調査区域内西側では古代の竪穴住居が複数棟検出されているが、これらの遺構の掘り下げ、精査はおこなっていない状況である。ここで示した土師器・須恵器は調査をおこなった遺構、あるいは粗掘、遺構検出作業中に出土した遺物であり、調査範囲全体の土師器・須恵器の遺物様相を示すには至っていない。図示した土師器・須恵器はセット関係も明瞭ではなく、明確な時期を示すことは難しいが、117を除いて、9～10世紀に属すると推測される。

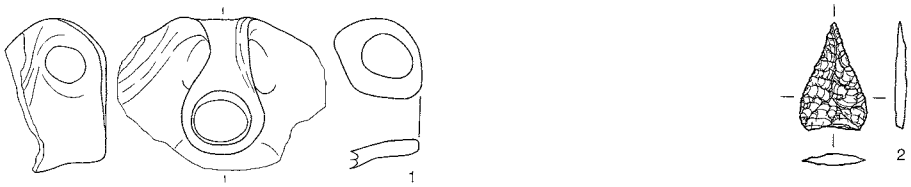
101～103はＳＫ５埋土から出土した土師器である。101は内面黒色処理の土師器坏で、底面は回転糸切と推測されるが、摩耗のためはっきりしない。102はロクロ土師器長胴甕である。下半部を欠損するが、下半部もロクロ調整で、底面は回転糸切と推測される。口縁部内面に帯状に炭化物が付着する。103はロクロ土師器長胴甕の底部片である。ロクロ不使用の長胴甕で、外底面の調整はヘラケズリと推測される。

104・105はＳＫ21埋土出土の土師器である。104は内面黒色処理のロクロ土師器坏で、外底面、底辺部には手持ちヘラケズリが施される。105は内面黒色処理のロクロ土師器鉢である。外面体部下半は回転ヘラケズリが施される。ロクロ調整の下地にはタタキ目は見いだせない。

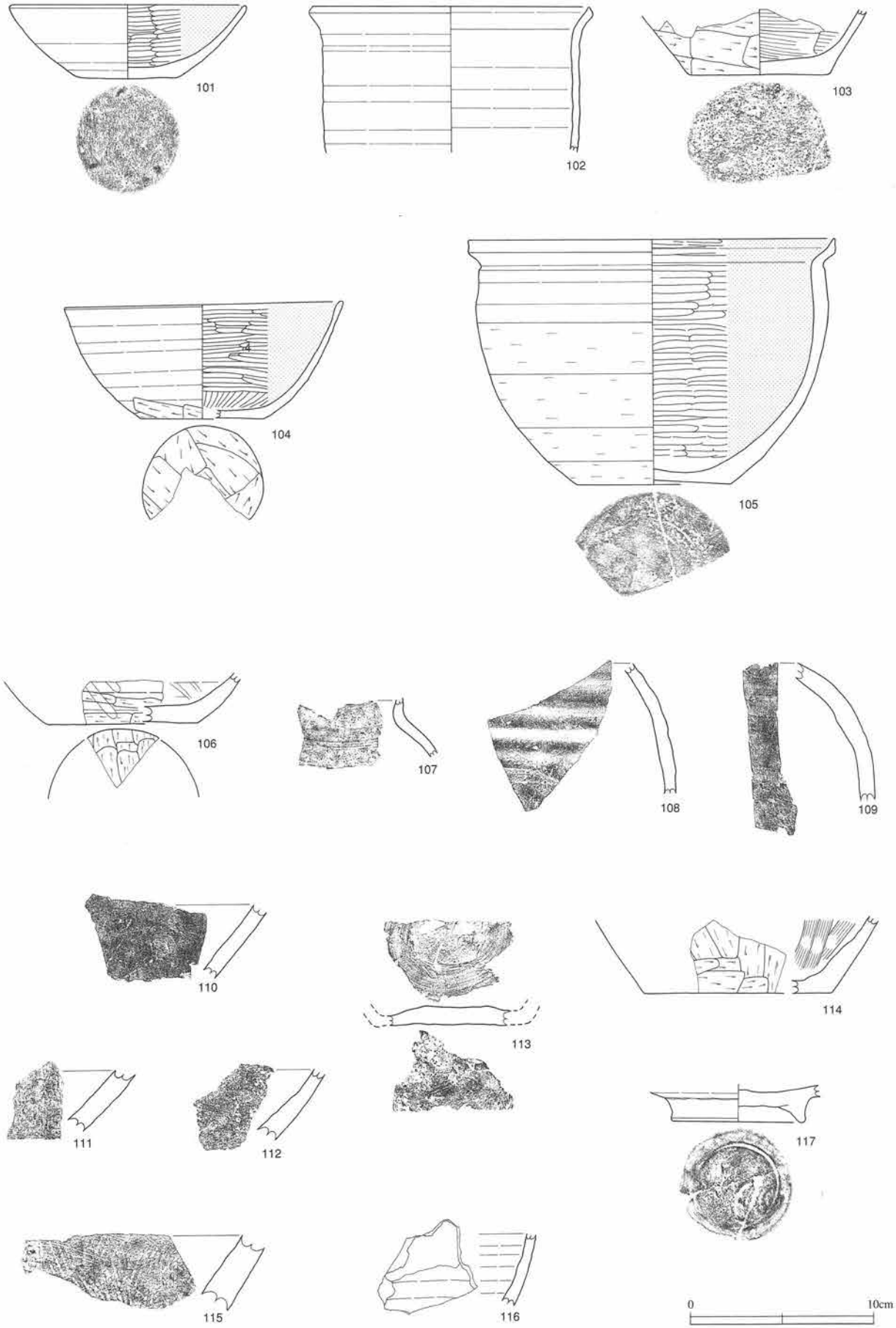
106は須恵器坏である。底面と底辺部に手持ちヘラケズリが施され、内外面に火襷痕がある。107は須恵器甕の肩部片である。破断面は赤褐色を呈する。108は須恵器の甕と推測される。破断面は赤褐色を呈する。109は須恵器甕の体部上半部片である。器種は長頸壺の可能性もある。110は須恵器甕の下半部片で、外面にヘラケズリが施される。111は12世紀の常滑片にも似るが、須恵器甕の下半部片と推測した。112・114は須恵器甕の底辺部片である。外面にヘラケズリが施される。113は須恵器甕の底部片である。外底面は砂粒が付着する「砂底」である。115は須恵器大甕片である。外面に格子目状のタタキ目、内面にアテ具痕がみられる。

116は灰釉陶器の壺類の体部下半の破片である。胎土は灰白色で、外面に灰釉が施され、内面は無釉である。特徴的な部位がなく、詳細な器種、時期を特定できない。概ね9～10世紀のものと推測される。

117は高台坏の土師器？坏である。灰白色の胎土で、高台は付け高台で、高台内部に回転糸切痕が見える。単独の出土で確定できないが、長者ヶ原廃寺跡出土の10世紀末～11世紀前半とされる高台付土師器に類似する。



第149図　接待館遺跡　縄文時代の土器、石器



第150図　接待館遺跡　土師器、須恵器、灰釉陶器

（３）12世紀のかわらけ（第151～164図、写真図版100～116）

接待館遺跡では2004・20005年度調査の合計で12世紀のかわらけが117kg 480.5g出土した。これは、取り上げて持ち帰った分であり、接待館遺跡の調査区域全体に含まれるかわらけの総量を示すものではない。特にかわらけが大量に包含されているＳＤ３はトレンチ状に僅かな面積しか掘り下げておらず、総量は上記の重量よりかなり多くなると仮定される。出土したかわらけのほとんどは12世紀後半代のものと判断される。それ以外の時期に属する可能性のあるものは、文中にその旨記したが、12世紀後半と判断されるものについては、特に年代観を記していない。

持ち帰ったかわらけの内、掲載したかわらけの重量は20,300.5gである。この内、ロクロかわらけは8,283.6g　手づくねかわらけは12,016.9gである。不掲載かわらけの総量は97,180gで、この内　ロクロかわらけ19,750g、手づくね62,230gで、他に未分類のかわらけ（柱穴出土など）が15,200gある。重量比での掲載率は17.3％である。また、未分類のものを除いたロクロ、手づくねの重量比率はロクロ１に対して手づくね2.64となる。

掲載したかわらけの個数はロクロ小型48個、ロクロ大型47個、手づくね小形63個、手づくね大型89個、内折れかわらけ３個の合計250個である。掲載したかわらけではロクロ１に対して、手づくね1.6の比率となる。

観察表の「種別」で「Ｄ３」等の記号が記してあるのは、手づくねかわらけの口縁部のナデ分類である。「種別」にこの記号が記してあるのは手づくねかわらけと読み取っていただきたい。口縁部分類記号は以下のとおりである。

Ｄ２・・・・口縁部１段なで、口縁部外反
Ｄ３・・・・口縁部１段なで、口唇部面取りなし
Ｄ４・・・・口縁部１段なで、口唇部面取りあり
Ｃ３・・・・口縁部２段なで、口唇部面取りなし
Ｃ４・・・・口縁部２段なで、口唇部面取りあり
内折・・・・コースター状のかわらけ

「残存率」は完形のものを100％とした百分率で示している。その基準として、柳之御所遺跡の完形のかわらけの重量を測定し、その平均値を求め、それとの重量比較で残存率を求めた。完形かわらけの重量測定は、ロクロ小型、ロクロ大型、手づくね小型、手づくね大型それぞれについて150個の完形品の測定を行い、平均値を求めた。その値は、ロクロ小型かわらけは70g、ロクロ大型かわらけは236g、手づくね小型63g、手づくねかわらけ176gである。しかしながら、この重量比率では100％を越える値になるものも発生する。これらの個体については、実物を肉眼で観察し感覚的に求めた残存率を記している。「色調」は器表面の面積の大きい色調を、土色帳を用いて観察した。

①ＳＤ１東側出土かわらけ（第151～156図）

1001～1116はＳＤ１の東側検出範囲の埋土中から出土したかわらけである。掲載した他にＳＤ１東からは、手づくねかわらけ36,590g、ロクロかわらけ11,060gが出土している。

1001・1002は小型ロクロかわらけの底部片である。ともに底部が肥厚し高台状になっている。しかし所謂「柱状高台」に比較すると低い形態である。今回の接待館遺跡のかわらけ全体の中で、視認できる範囲では不掲載も含めて、この底部形態はこの２点のみである。口縁部形態が不明であるのが惜しまれる。

1003～1028は小型ロクロかわらけ（27点）である。口径の最大は9.4cm（1028）、最小は7.9cm（1017）で平均値は8.3cmである。底径は最大7.6cm（1010）、最小5.6cm（1020、1021）で平均値6.0cmである。器高は最大が2.0cm（1007）、最小が1.2cm（1003）で平均値は1.5cmである。外面のロクロ調整の単位は、ほとんどが１段階で、２段階のものがわずかにみられる。1024は内面に油煙が付着しており、灯明皿の用途が推測される。また、ほとんどのものの底面にすのこ痕がみられる。

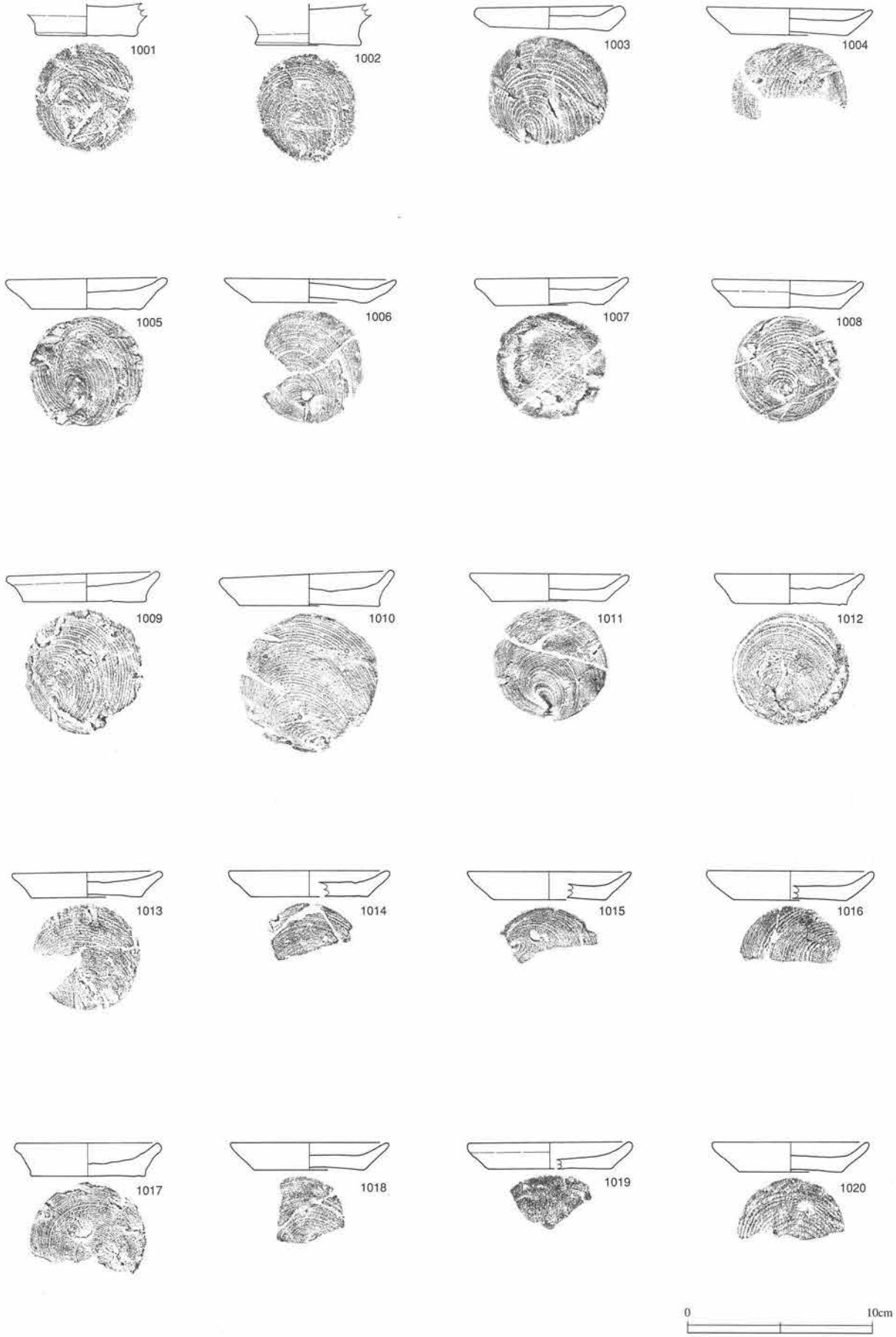
1029～1047はロクロ大型かわらけ（19点）である。口径は最大が14.9cm（1031）、最小が12.6cm（1044）で平均値は13.9cmである。底径は最大が8.6cm（1047）、最小が5.8cm（1043）で平均値は7.3cmである。器高は最大が4.1cm（1035）、最小が2.6cm（1045）で平均値3.3cmである。外面のロクロ調整の単位は４段階がほとんどで、３段階、２段階のものが少量みられる。1030、1038は油煙が付着しており、灯明皿としての用途が推測される。1031・1040・1044は内面のロクロ調整をハケ目状の工具を用いておこなっている。1043は他の個体に比較すると胎土に砂粒が多量に混入している。また、ほとんどの個体の底面にすのこ痕がみられる。

1048・1049は内折れかわらけである。胎土は手づくねかわらけの土と共通する。確実に内折れかわらけと視認できるのはＳＤ１東埋土ではこの2点のみである。口径は9.0cmと8.6cmで、他の手づくね小型かわらけと概ね同じである。

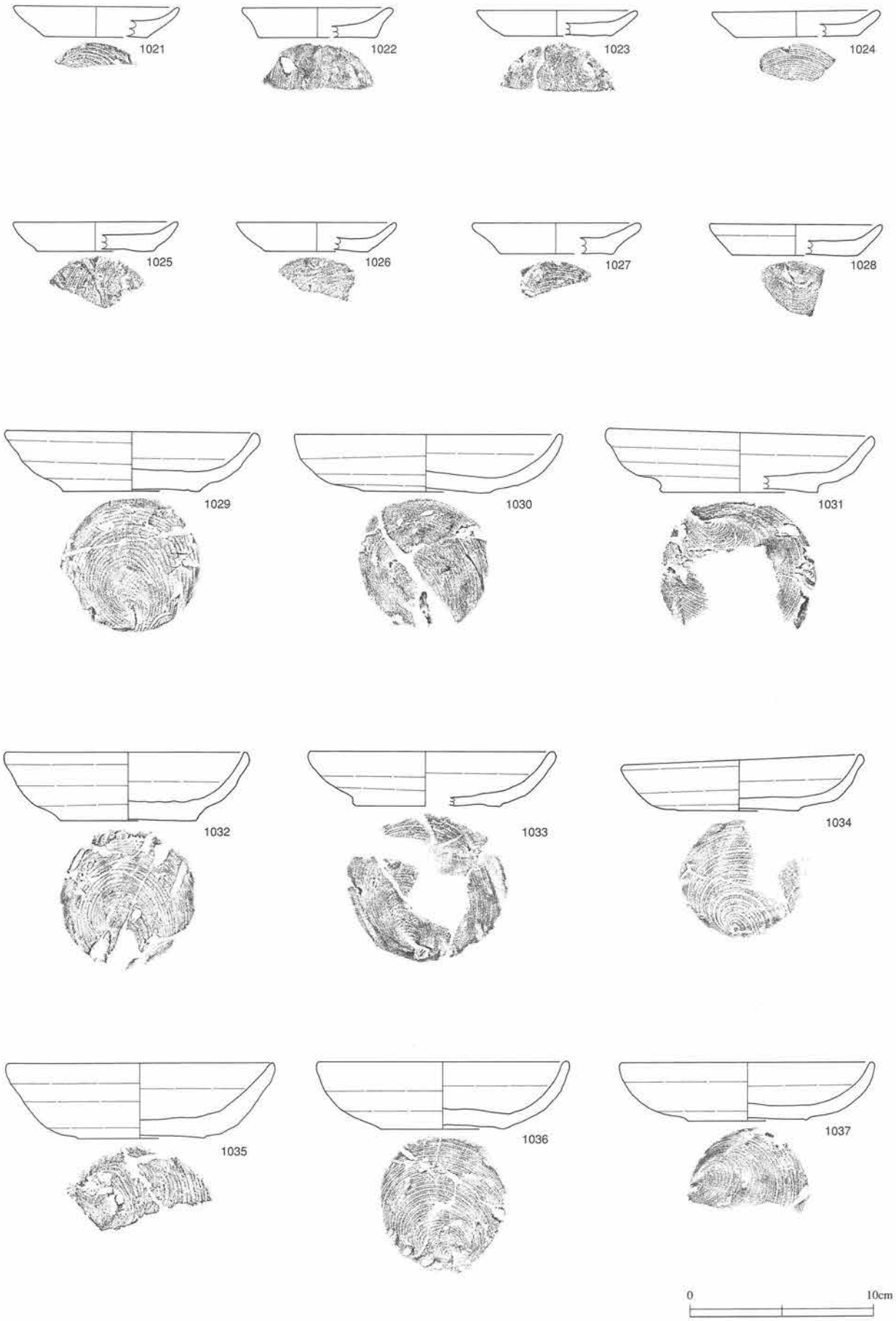
1050～1078は手づくね小型かわらけ（29点）である。口径は最大が10.0cm（1073）、最小7.2cm（1063）で平均値は8.8cmである。器高は最大が2.1cm（1060）、最小が1.5cm（1054・1059・1067）で平均値は1.7cmである。なお、1078は器形の歪みが著しく、法量の平均値を試料には含めていない。口縁部のナデ形態はＤ３（１段ナデ　口唇部面取りなし）16点、Ｄ４（１段ナデ　口唇部面取りあり）２点、Ｃ３（２段ナデ　口唇部面取りなし）11点である。単純な調整のＤ３が16点（55％）、２段階以上の調整のＤ４、Ｃ３が合計13点（45％）ある。単純な調整Ｄ３以外の比率も割合に高い状況といえる。また、1071は口縁部に油煙が付着し、灯明皿の用途が推測される。1066の胎土には、手づくねにはあまり見られない海綿状骨針が僅かに混入する。1074は胎土に金雲母が顕著に混入する。1078は歪んだ形態の小型かわらけである。歪みは意図的と推測され、耳皿の用途が推測される。

1079～1116は大型手づくねかわらけ（38点）である。口径は最大が16.0cm（1113）、最小12.4cm（1097）で平均値は13.8cmである。器高は最大が3.9cm（1115）、最小が2.1cm（1084・1085）で平均値は2.8cmである。口縁部のナデ形態はＤ３（１段ナデ　口唇部面取りなし）１点、Ｄ４（１段ナデ　口唇部面取りあり）３点、Ｃ３（２段ナデ　口唇部面取りなし）30点、Ｃ４（２段ナデ　口唇部面取りなし）３点、そして分類外の口縁部３段ナデが１点（1116）である。単純な調整のＤ３が１点（３％）のみであるのに対し、２段階以上の調整が37点（97％）と高率であるのが特徴的である。1106の３段ナデ調整は他にあまり例を見ないものである。１段目のナデは口唇部ではなく明らかに口縁部に施されており、３段ナデとした。

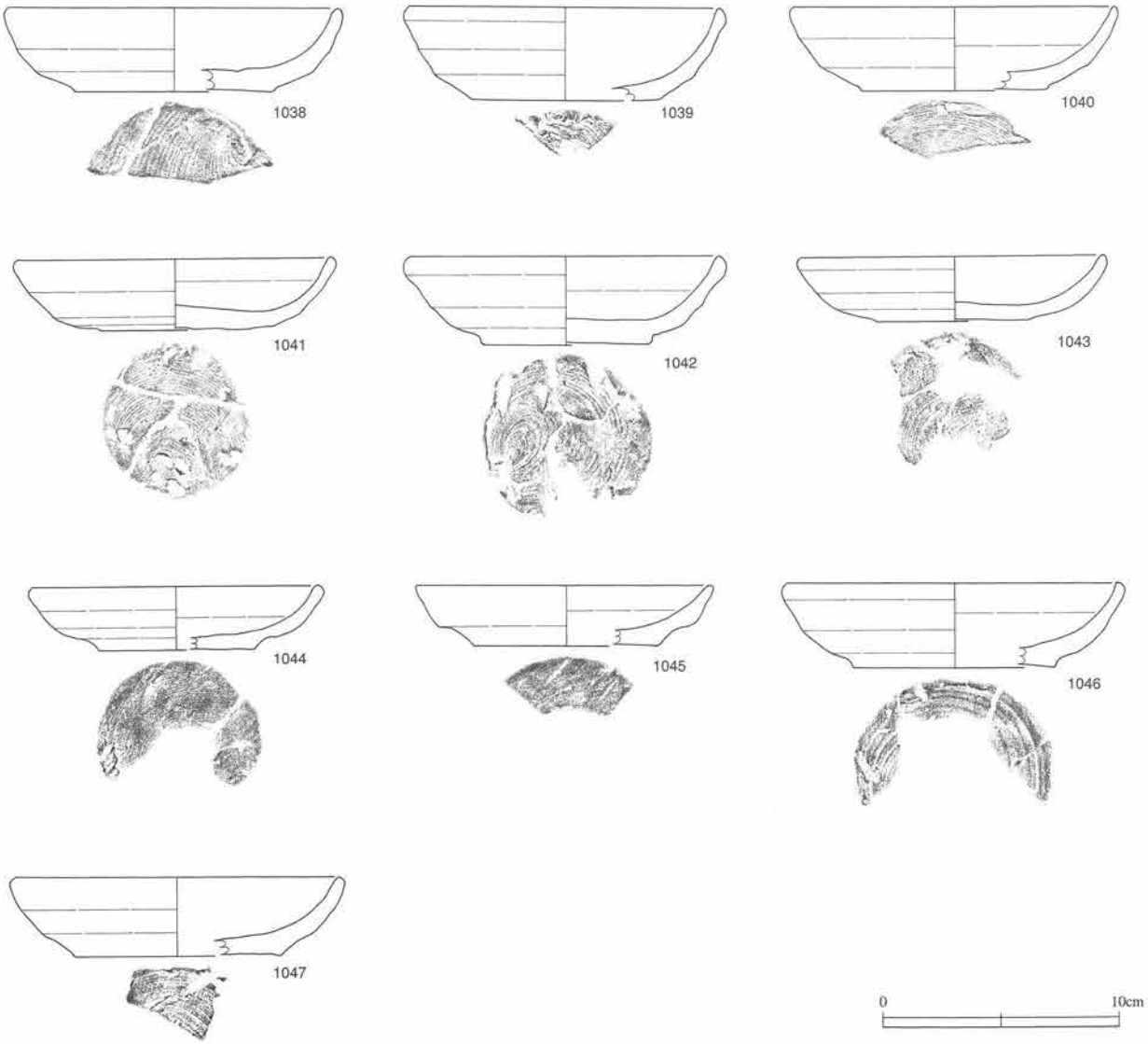
1079・1089・1094・1100・1114・1115は油煙が付着しており、灯明皿の用途が推測される。1084は底面中央に欠損がある。欠損部がちょうど中央であり、意図的な穿孔の可能性も考えられる。1087は胎土に海綿状骨針が僅かに混入している。1089は口縁部内面に２条の沈線がみられる。焼成前に施されたものである。1106は底部中央に穿孔が施される。穴は貫通するものと、外面から施されて貫通しないものが２個ある。



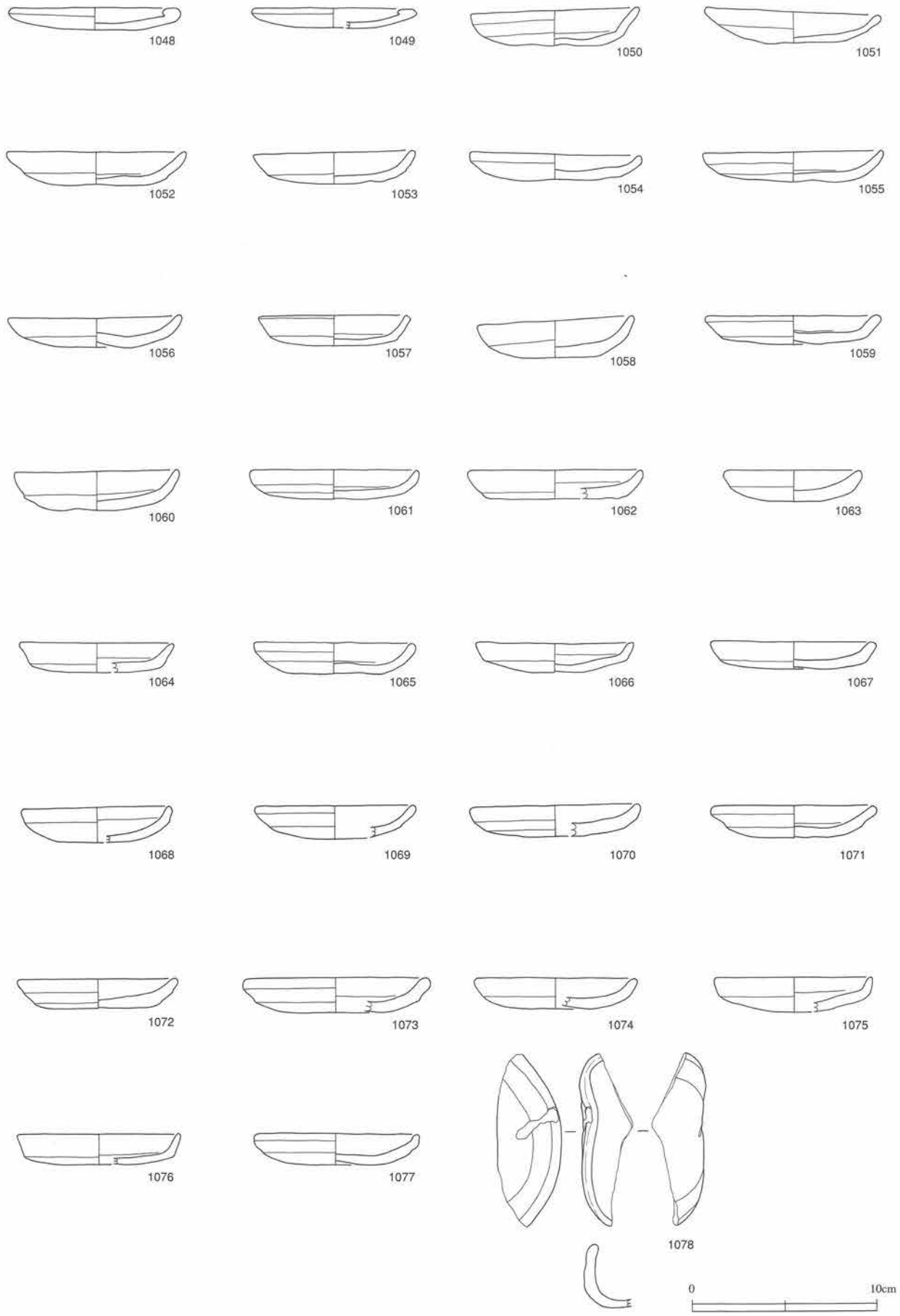
第151図　接待館遺跡　12世紀のかわらけ①



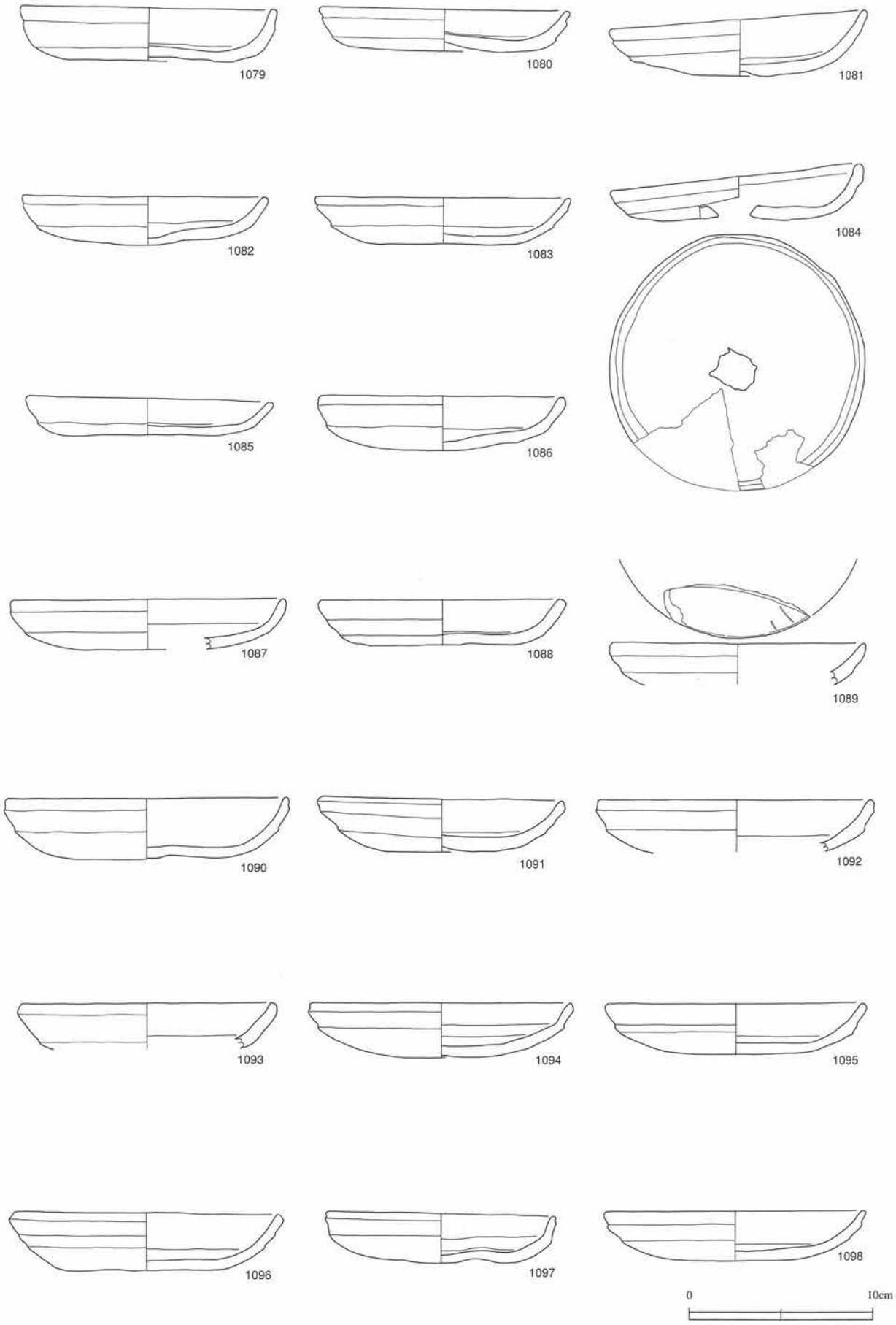
第152図　接待館遺跡　12世紀のかわらけ②



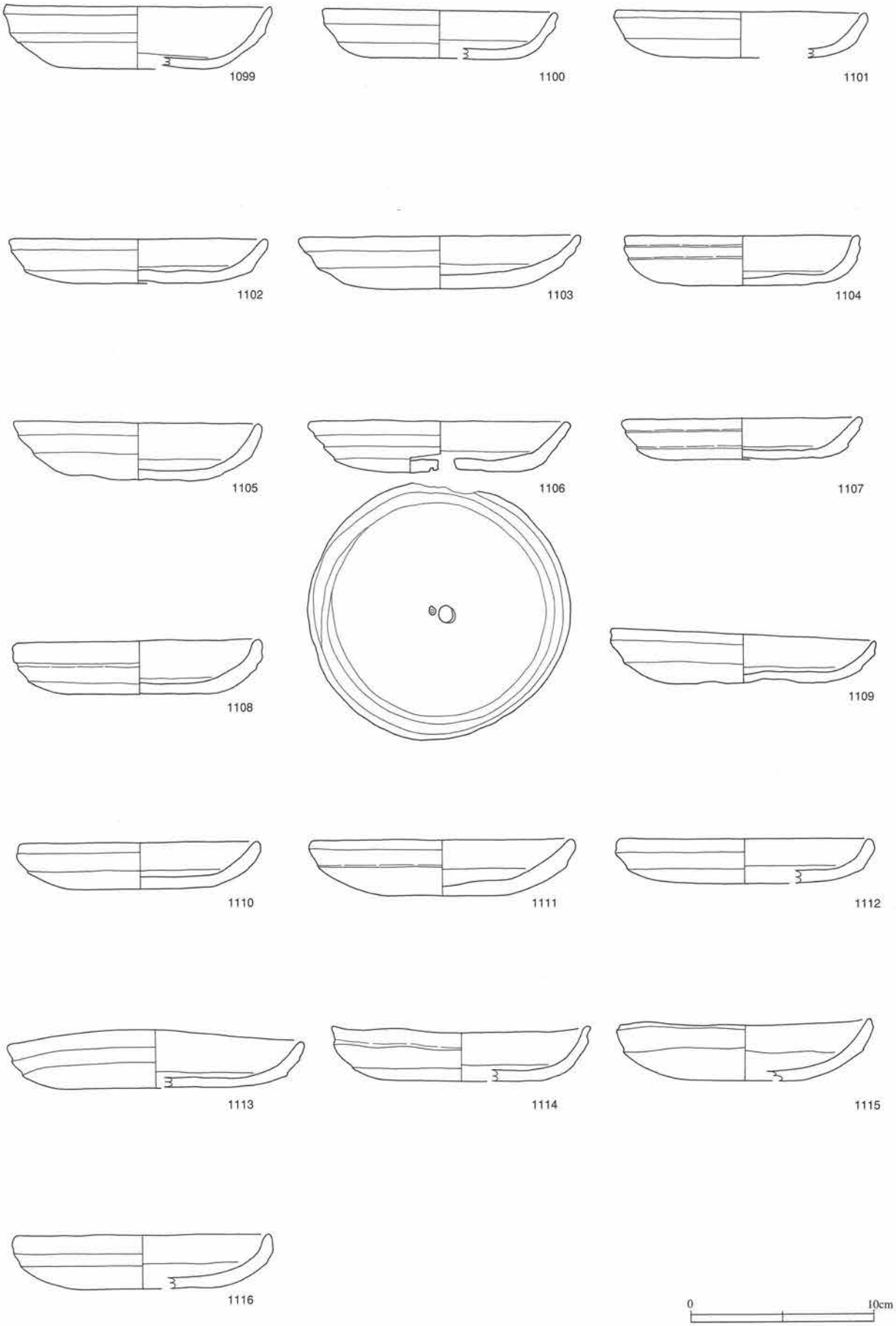
第153図　接待館遺跡　12世紀のかわらけ③



第154図　接待館遺跡　12世紀のかわらけ④



第155図　接待館遺跡　12世紀のかわらけ⑤



第156図　接待館遺跡　12世紀のかわらけ⑥

②ＳＤ３トレンチ（ＶＫ4ｆ付近）出土かわらけ（第157～162図）

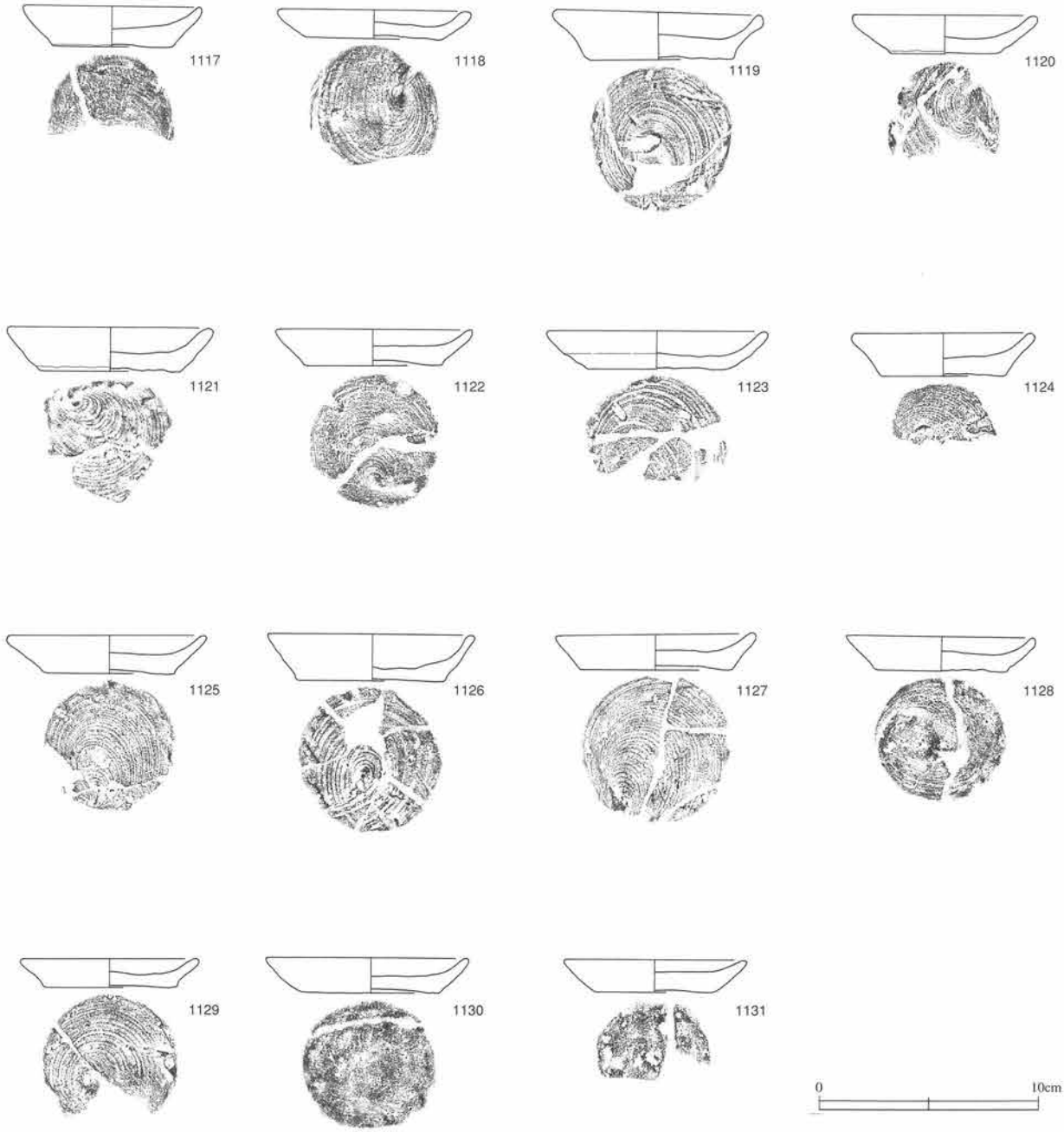
1117～1220はＳＤ３のＶＫ4ｆ付近に設置したトレンチから出土したかわらけである。トレンチの幅は約120cmで、かわらけのほとんどは埋土上半の２層中からまとまって出土している。出土状況から、同時性の強い、一括廃棄に近い状況と推測される。掲載した以外に、ロクロかわらけ6,460g、手づくねかわらけ18,230gの不掲載遺物が出土している。なお、このトレンチの南側（ＶＫ３ｆグリッド）にもトレンチを設定し、かわらけの出土状況を記録しているが、このかわらけは取り上げをおこなっておらず、ここに示したかわらけは、ＶＫ３ｆトレンチのものは含んでいない。

1117～1131はロクロ小型かわらけ（15個）である。口径の最大は9.9cm（1123・1127）、最小は8.0cm（1124・1129）で平均値は8.8cmである。底径は最大7.0cm（1127）、最小5.0cm（1120）で平均値6.1cmである。器高は最大が2.2cm（1121・1126）、最小が1.3cm（1118・1129）で平均値は1.8cmである。外面のロクロ調整の単位は、ほとんどが１段階で、２段階のものがわずかにみられる。1119は口縁部が肥厚する特徴的な形態を呈している。また、ほとんどの個体底面にすのこ痕がみられる。

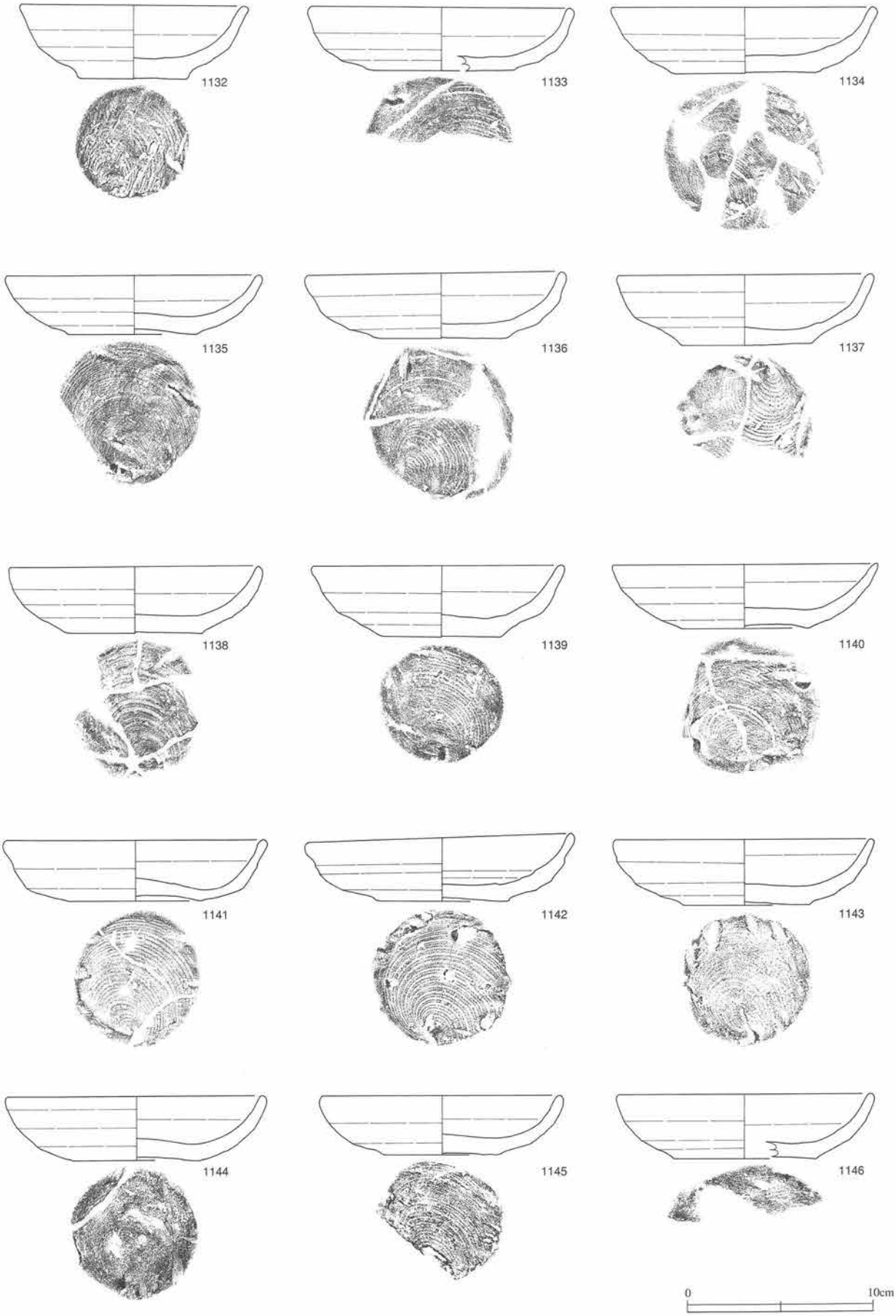
1132～1154はロクロ大型かわらけ（23点）である。口径は最大が15.2cm（1152）、最小が12.4cm（1132・1153）で平均値は14.0cmである。底径は最大が8.6cm（1148）、最小が6.0cm（1132）で平均値は7.2cmである。器高は最大が3.9cm（1132・1137・1139・1150）、最小が3.2cm（1145）で平均値3.5cmである。外面のロクロ調整の単位は４段階がほとんどで、３段階のものが少量みられる。1152は油煙が付着しており、灯明皿としての用途が推測される。また、ほとんどの個体の底面にすのこ痕がみられる。

1155～1180は手づくね小型かわらけ（26点）である。口径は最大が10.3cm（1171）、最小7.8cm（1161・1169）で平均値は9.2cmである。器高は最大が2.9cm（1160）、最小が1.4cm（1174）で平均値は2.0cmである。なお、器高の平均値には底部まで残存していない４個体は含んでいない。口縁部のナデ形態はＤ３（１段ナデ　口唇部面取りなし）４点、Ｄ４（１段ナデ　口唇部面取りあり）７点、Ｃ３（２段ナデ　口唇部面取りなし）11点、Ｃ３（２段ナデ　口唇部面取りあり）４点である。単純な調整のＤ３が４点（15％）、２段階以上の調整のＤ４、Ｃ３、Ｃ４が合計22点（85％）ある。単純な調整Ｄ３以外の比率が非常に高い状況といえる。また、1166・1173は油煙が付着し、灯明皿の用途が推測される。1178の胎土には金雲母が顕著に混入する。

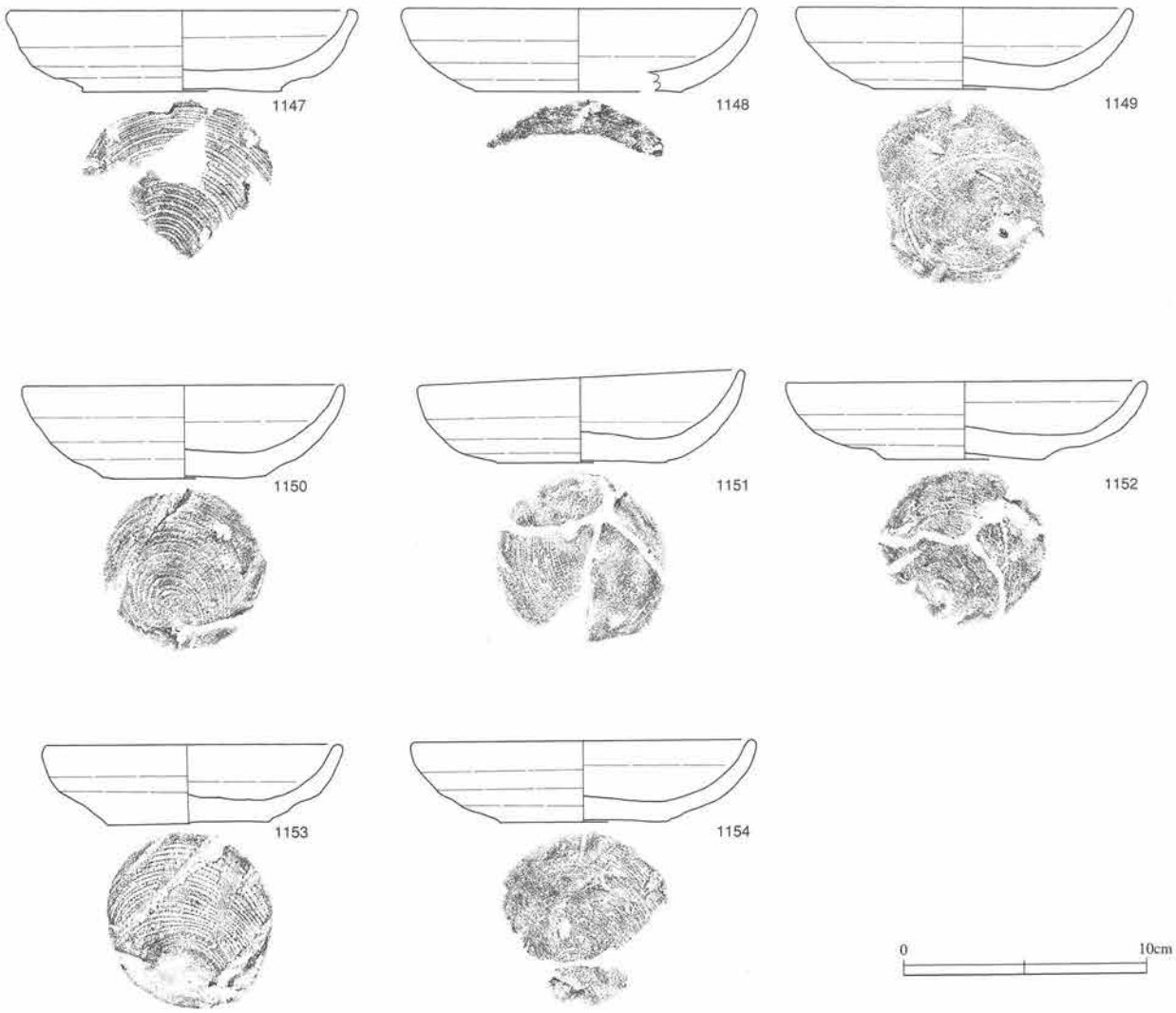
1181～1220は大型手づくねかわらけ（40点）である。口径は最大が15.2cm（1192）、最小12.7cm（1188）で平均値は13.9cmである。器高は最大が3.9cm（1218）、最小が2.4cm（1207）で平均値は3.0cmである。器高の平均値は底部まで残存していない１個体を含んでいない。口縁部のナデ形態はＤ２（１段ナデ　口縁部外反）１点、Ｄ３（１段ナデ　口唇部面取りなし）４点、Ｄ４（１段ナデ　口唇部面取りあり）３点、Ｃ３（２段ナデ　口唇部面取りなし）24点、Ｃ４（２段ナデ　口唇部面取りなし）８点である。単純な調整のＤ２、Ｄ３が５点（13％）のみであるのに対し、２段階以上の調整が35点（87％）と高率であるのが特徴的である。1184・1187・1192は油煙が付着しており、灯明皿の用途が推測される。1214・1216は胎土に金雲母が顕著に混入している。1185は継ぎ目によって口縁部に段差が生じている。



第157図　接待館遺跡　12世紀のかわらけ⑦



第158図　接待館遺跡　12世紀のかわらけ⑧



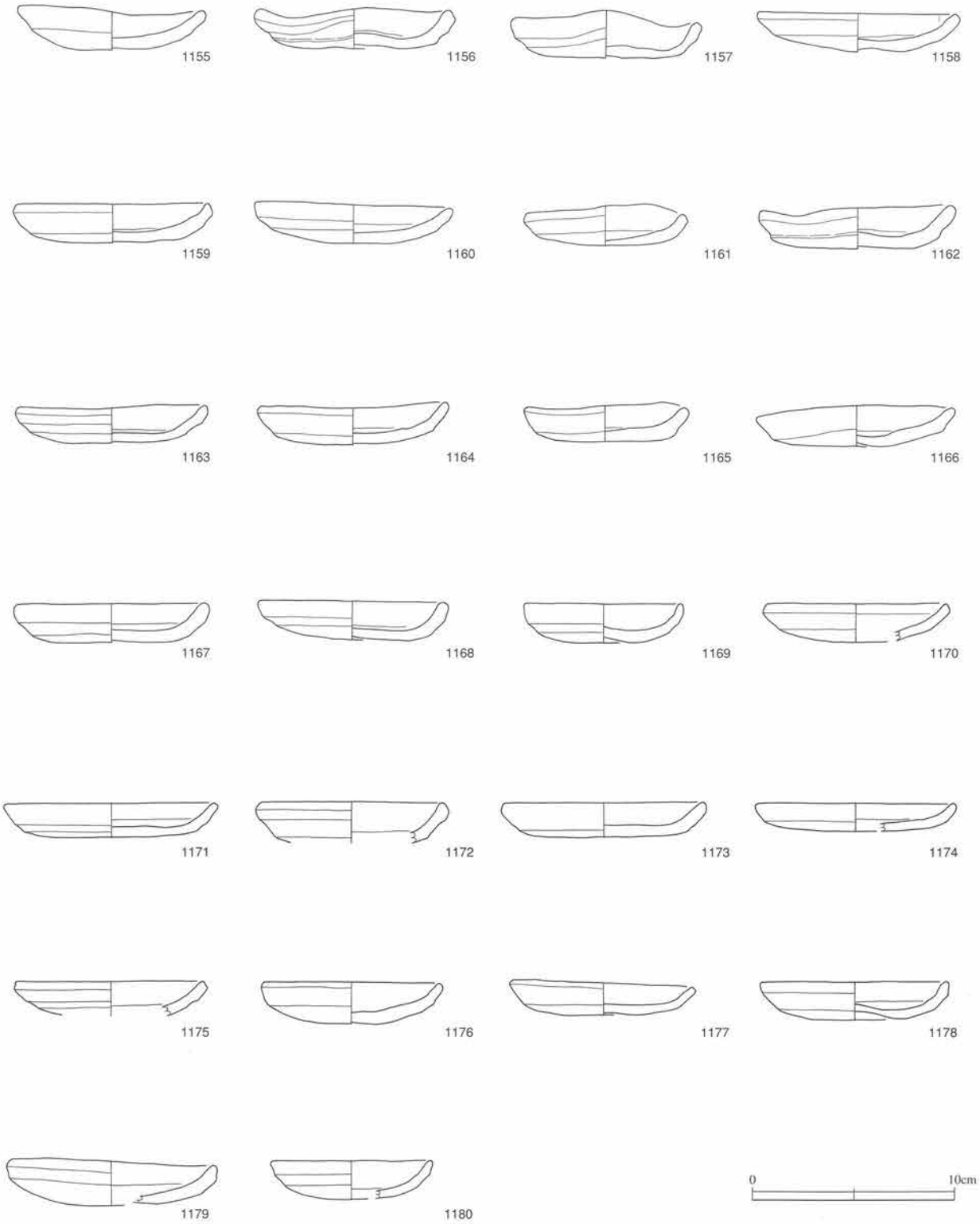
第159図　接待館遺跡　12世紀のかわらけ⑨

③ＳＤ１西出土かわらけ（第163図）

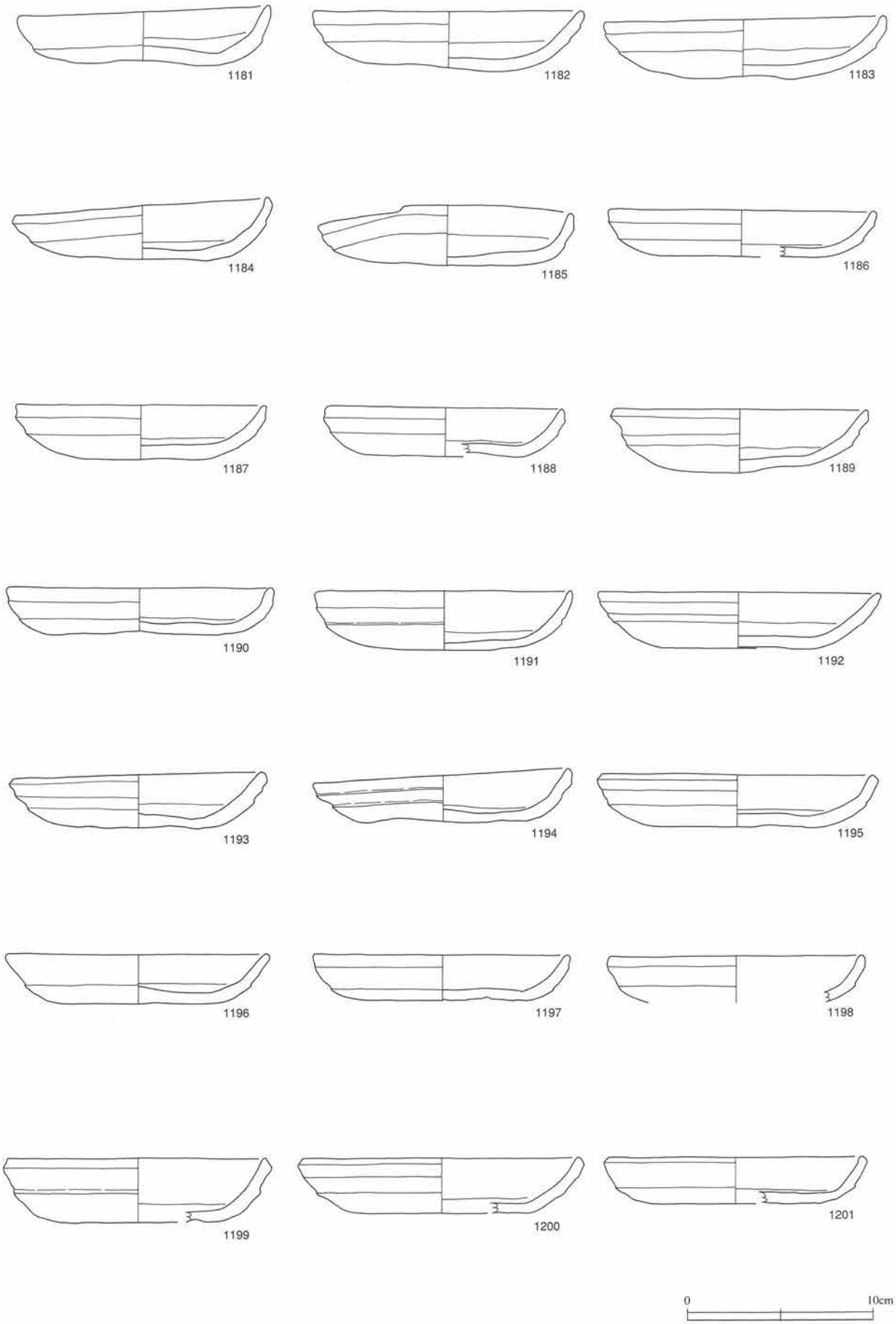
1221～1226はＳＤ１西の埋土中から出土したかわらけである。掲載した他にＳＤ１西からは手づくねかわらけ650g、ロクロかわらけ240gが出土している。ＳＤ１東側に比較すると、かわらけの出土量は非常に少ない。1221はロクロ小型、1222はロクロ大型かわらけである。ともに摩耗が著しい。1223・1224は手づくね小型、1225、1226は手づくね大型かわらけである。1223はＤ３（１段ナデ　口唇部面取りなし）で1224、1225、1226はＣ３（２段ナデ　口唇部面取りなし）である。

④ＳＤ２出土かわらけ（第163図）

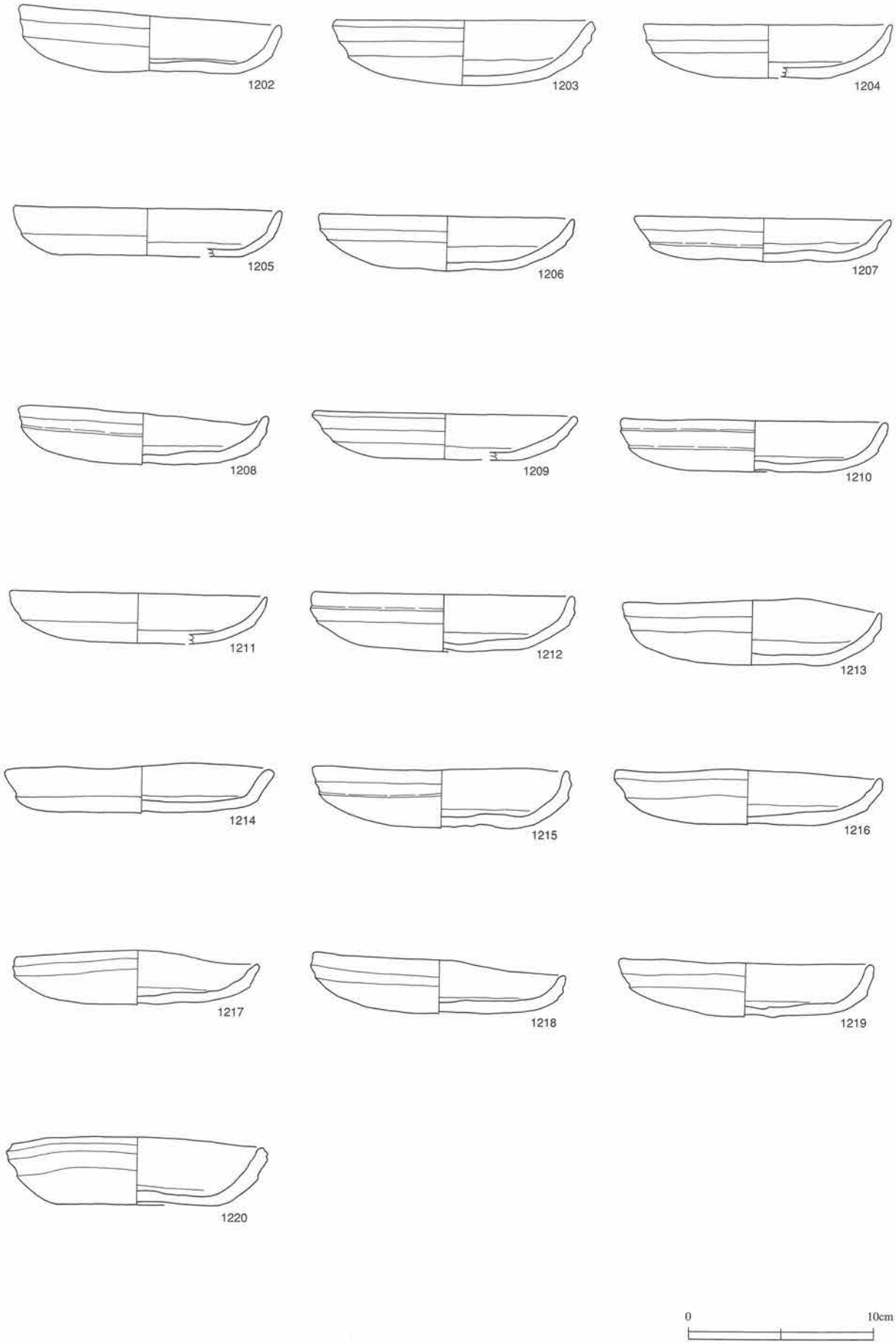
1227～1229はＳＤ２埋土出土のかわらけである。掲載した以外にＳＤ２からは、手づくねかわらけ100g、ロクロかわらけ400gが出土している。また、12世紀のかわらけの他に土師器片490gも出土している。1227はロクロ小型かわらけである。器形から12世紀後半のものと思われる。1228、1229はロクロ大型かわらけである。ともに、それぞれ5.0cm、5.7cmと底径が小さく、今回出土の他のロクロ大型かわらけとは器形が異なるものである。1229は器高も高く、12世紀前半代に属するかわらけと判断される。このように、1228・1229は12世紀前半に属するかわらけと考えられるが、1227は12世紀後半の小型ロクロかわらけであるので、ＳＤ２は12世紀後半まで開口していたことになる。



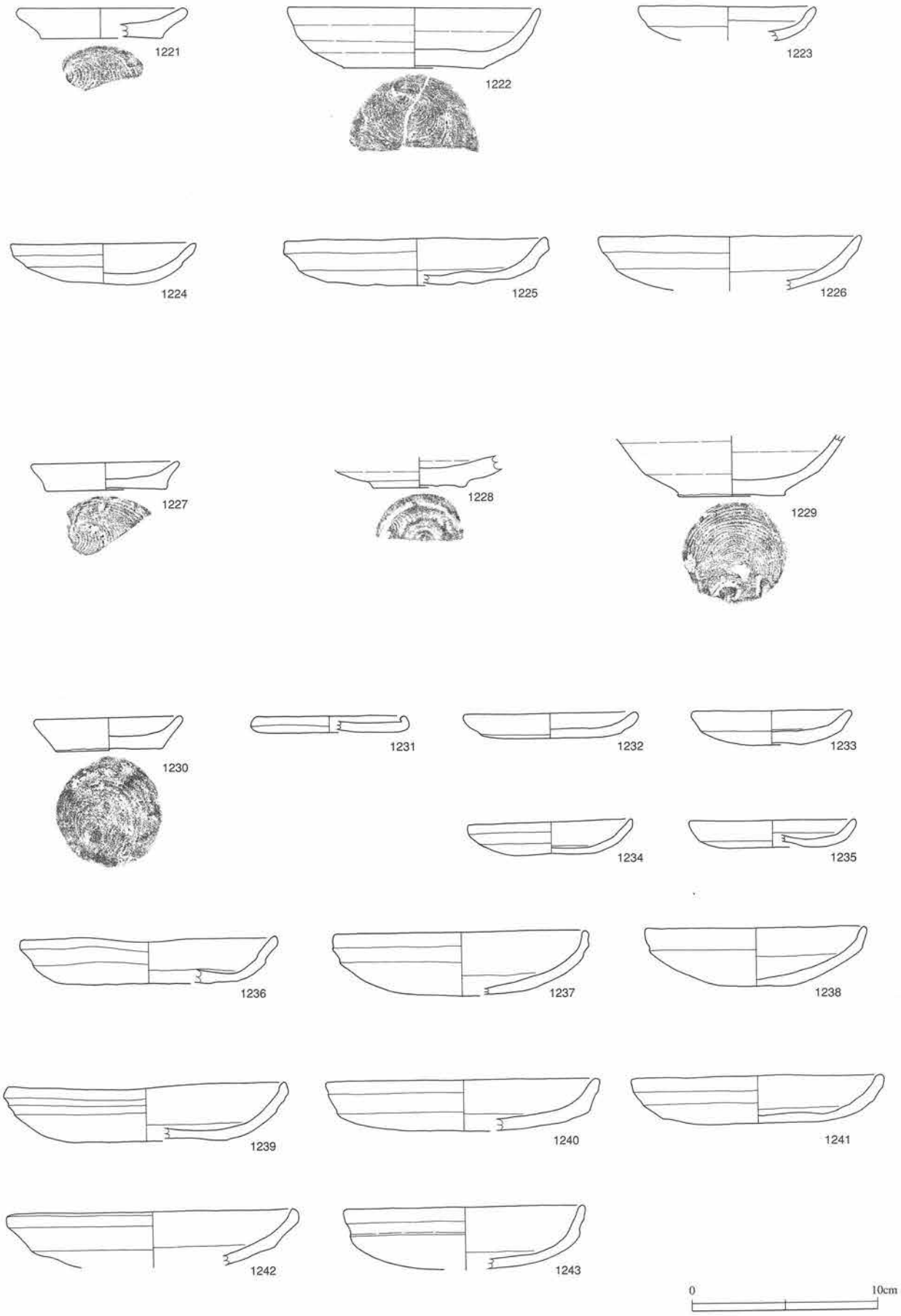
第160図　接待館遺跡　12世紀のかわらけ⑩



第161図　接待館遺跡　12世紀のかわらけ⑪



第162図　接待館遺跡　12世紀のかわらけ⑫



第163図　接待館遺跡　12世紀のかわらけ⑬

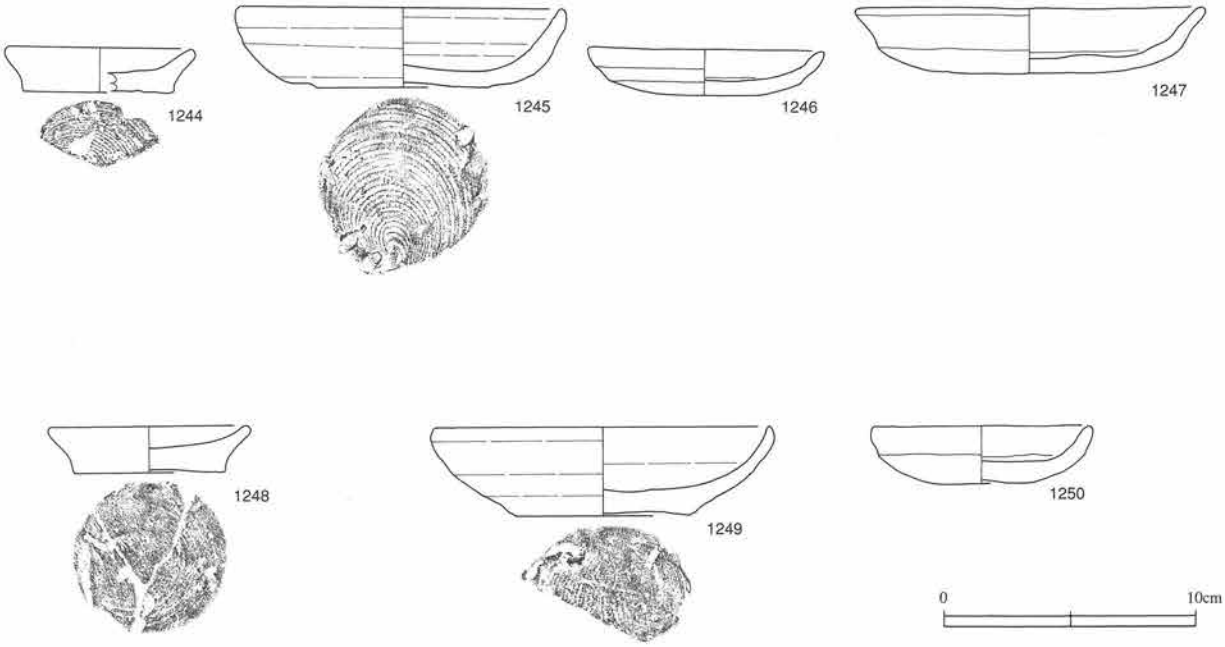
⑤ＳＤ３（ＶＫ4ｆ付近以外）出土かわらけ（第163図）

1230～1240はＳＤ３のＶＫ４ｆトレンチ以外から出土したかわらけである。ＳＤ３にはＶＫ4ｆトレンチ以外に３箇所のトレンチを設置し掘り下げた。ここに示したのは、これらのトレンチから出土したものと、ＳＤ３の検出作業中に出土したものである。ここに掲載した他に、ＳＤ３のＶＫ４ｆトレンチ以外からは、手づくねかわらけ4,290g、ロクロかわらけ1,120gが出土している。この出土重量は、ＶＫ４ｆトレンチの出土重量に比較すると非常に少ないものである。

1230はロクロ小型かわらけである。外面のロクロ調整の単位は１段階である。1231は内折れかわらけである。胎土は手づくねかわらけの土と共通する。1232～1235はロクロ小型かわらけである。1235の外底面には草の茎の圧痕が多数ある。1236～1243は手づくね大型かわらけである。単純な調整のＤ３が１点に対し、２段階以上の調整のＣ３、Ｃ４が合計７点で、単純な調整Ｄ３以外の比率が非常に高い状況である。

⑥ＳＤ１～３以外から出土のかわらけ（第164図）

1244～1250は上記のＳＤ１～３以外から出土したかわらけである。掲載した他に、18,540gのかわらけが出土している。内訳は、ＳＤ４（手づくね1120g、ロクロ300g）、ＳＤ５（手づくね440g、ロクロ60g）、ＳＤ６（手づくね810g、ロクロ110g）、ＳＫ（未分類390g）、柱穴（未分類14,000g）、遺構外（未分類1,310g）である。1244はＳＢ13の柱穴Ｐ235から出土したロクロ小型かわらけである。底面にすのこ痕がある。1245はＳＢ３のＰ11から出土したロクロ大型かわらけである。完存品である。1250はＳＫ３埋土から出土した手づくね小型かわらけである。胎土に砂粒、海綿状骨針が混入し、ロクロかわらけに類似した胎土で、器壁も厚い。胎土、器壁の厚さから13世紀代のかわらけの可能性も考えられるが、他に類似するかわらけや、13世紀代の陶磁器も出土しておらず、確定することは難しい。



第164図　接待館遺跡　12世紀のかわらけ⑭

（４）12 世紀の国産陶器（第 165・166 図、写真図版 117・118）

12世紀に属する国産陶器は46点（合計重量2213.1g）を図示した。出土した全点を掲載しているが、本調査区は未調査の部分がかなりあり、調査区全体の出土量、組成を反映するものではない。

常滑産陶器は28点、合計重量904.7gが出土し、渥美産陶器は16点、重量1131.3gが出土し、須恵器系陶器２点、重量177.1gが出土している。破片数での比率は、常滑産陶器61％、渥美産陶器35％、須恵器系陶器４％となり、重量での構成比率は、常滑41％、渥美51％、須恵器系陶器８％となる。

また、出土した器種はいずれの産地の陶器も甕・壺で、片口鉢が１点もないのが特徴的である。

観察表中の「釉、色調」は外面の色調について、土色帳を使用して観察している。また「分類・年代」については、口縁部等、型式の決め手となる部位が欠損しているものが多く、詳細な形式分類ができなかったが、遺跡から出土したかわらけの年代観などから類推していずれの年代も12世紀のものとしている。常滑産陶器の場合、生産地編年のＩｂ型式に属すると推測される個体はなく、いずれもⅡ型式か、Ⅲ型式に属すると推測される。

①常滑産陶器（第165図）

2001～2011は同一個体の常滑産陶器甕である。同一個体片は細田遺跡でも出土している（掲載番号29～33）。色調は灰褐～褐灰色を呈するものが多い。2012・2013は同一個体の常滑産甕の口縁部破片である。2012の口唇部内面はわずかに凹む。2014は常滑産甕の口縁部で外面にオリーブ黒色の自然釉がかかる。2014～2022は常滑産甕の体部片である。2016と2017は同一個体と思われる。2018には目の大きい押印が施されている。2019～2022は体部の下半の破片である。

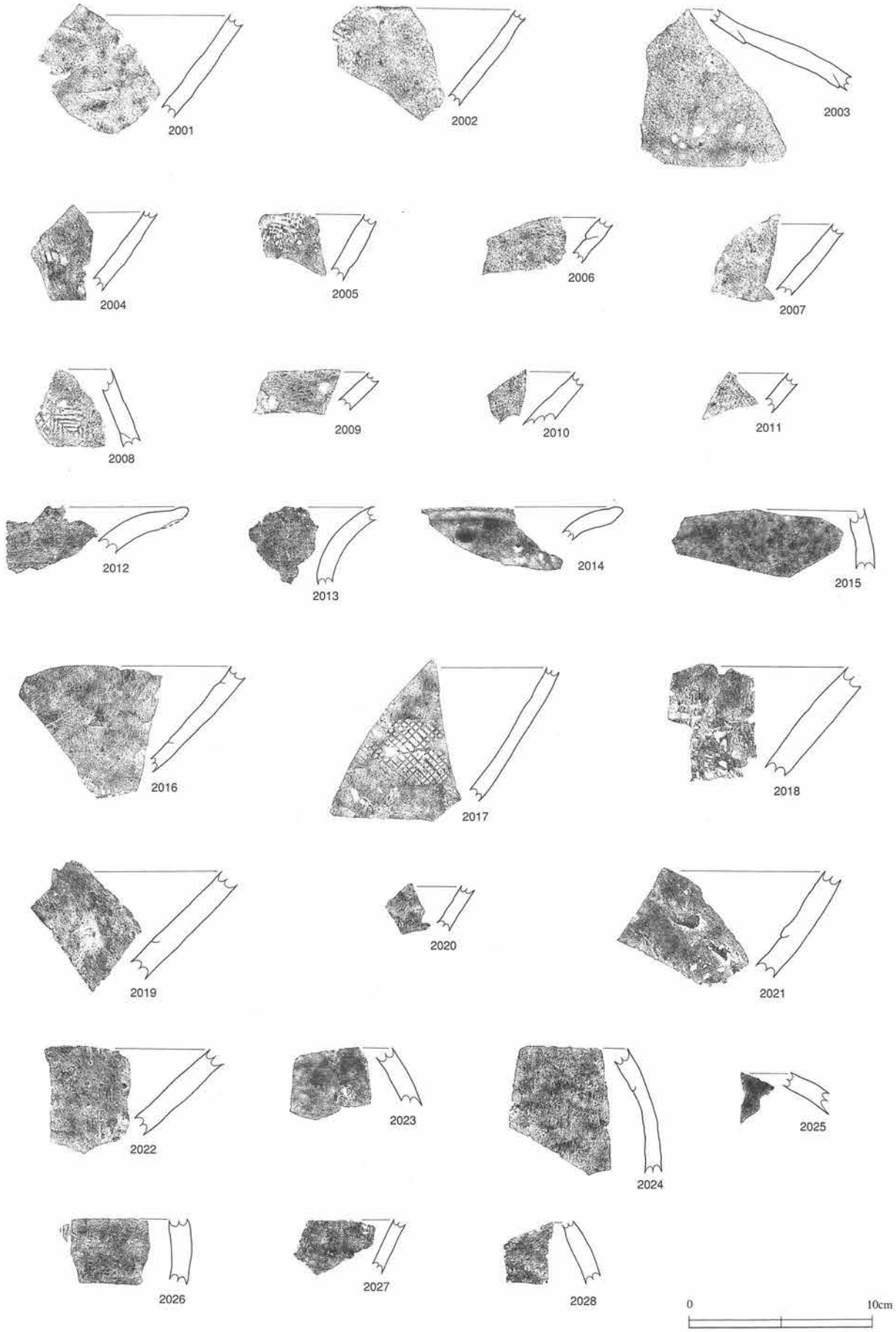
2023～2028は常滑産広口壺と推測されるが、たまたま押印部の無い部位の破片の可能性も残る。2022・2027は内面に、2023・2025・2028は外面に自然釉がかかる。

②渥美産陶器（第166図）

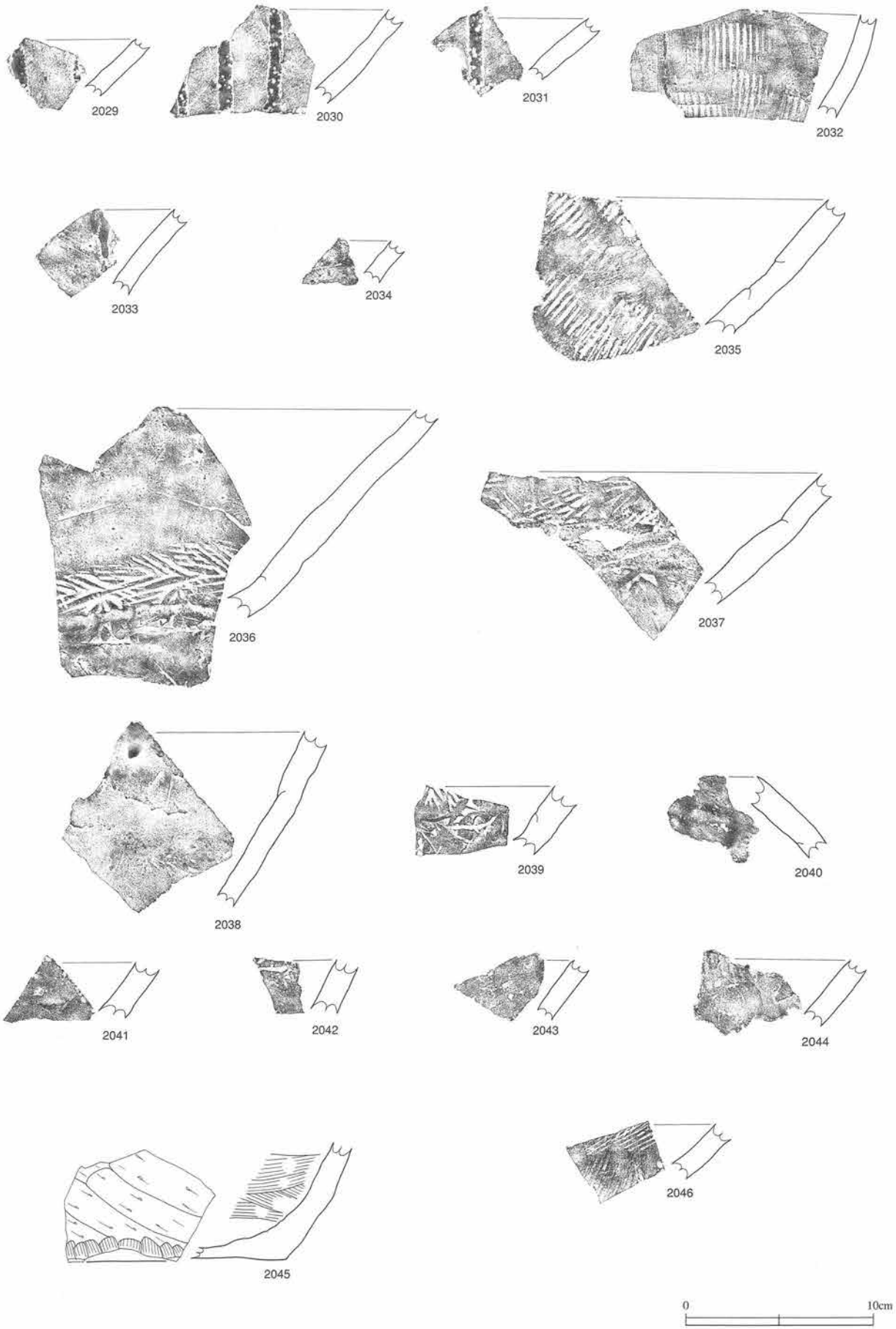
2029～2034は同一個体の渥美産甕片である。2029～2033は外面にオリーブ黒色の自然釉が帯状に流れている。また2032は押印が施されている。2034は内面に自然釉が付着する。2035は押印のある渥美産甕片である。外面は意図的に擦られている。2036と2037は同一個体の渥美産甕体部下半片である。矢羽根状の共通する押印が施されている。2038は甕の下半部片である。内面に炭化物が付着している。2039は渥美産甕の体部片である。複雑な形状の押印が施されている。2040～2044は微細な小破片であるが渥美産甕の体部片と判断される。2043と2044は同一個体である。

③須恵器系陶器（第166図）

2045は須恵器系陶器甕の体部下半～底部片と推測される。外面にはヘラケズリ、底辺部にはヘラナデが施されている。胎土、質感から12世紀の須恵器系陶器と推測したが、古代の須恵器の可能性も捨てきれない。2046は須恵器系陶器甕の体部片である。外面にタタキ目が施されている。胎土、質感から12世紀の須恵器系陶器と判断した。



第165図　接待館遺跡　12世紀の国産陶器（常滑）



第166図　接待館遺跡　12世紀の国産陶器（渥美・須恵器系）

（5）12世紀の中国産磁器（第167図、写真図版118）

12世紀に属する中国産磁器は、白磁碗片３点（3001～3003）、白磁四耳壺片４点（3004～3007）、青白磁碗片１点（3008）、青磁皿片１点（3009）を図示した。出土した全点を掲載しているが、本調査区は未調査の部分がかなりあり、調査区全体の出土量、組成を反映するものではない。

3001は大宰府分類Ⅱ類の白磁碗である。釉の下地に化粧土が施され、見込みに段を有する。口縁部は小さい玉縁の形状と推測される。11世紀～12世紀前半に属する碗である。3002は化粧土を有しない白磁碗の体部下半片である。内面に沈線が施されている。口縁部、高台部を欠き詳細な分類は不明であるが、12世紀後半に属する碗と判断される。3003は白磁碗の体部片である。二次被熱しているため明確ではないが、化粧土は有せず、12世紀後半の所属と推測される。

3004は白磁四耳壺肩部片である。化粧土を有し内面は無釉であり、大宰府分類壺Ⅱ類である。被熱しており、外面は器面がはじけている。11世紀から12世紀前半に属する。3005は白磁四耳壺の耳部片である。２条の横位の刻みが施されている。大宰府分類の壺Ⅲ類で12世紀後半に属する。3006は白磁四耳壺の体部中位片、3007は白磁四耳壺の頸部片で、ともに大宰府分類壺Ⅲ類で12世紀後半に属する。

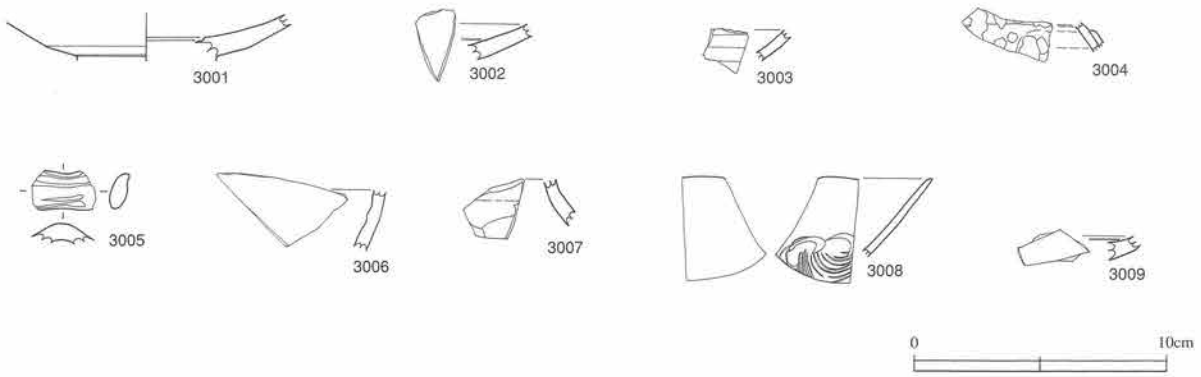
3008は青白磁碗の口縁部片である。薄手の造りで淡青色を呈し、内面に劃花文が描かれる。12世紀に属する。3009は青磁皿の底辺部片である。大宰府分類竜泉窯皿Ⅰ類で12世紀後半以降に属する。

（6）中世、近世の陶磁器（第168図、写真図版119）

13世紀以降に属する陶磁器をここで示す。中世陶磁器は中国産染付５点（4001～4005）、瀬戸・美濃産陶器５点（4006～4010）、瓦質土器１点（4011）が出土している。近世陶器は肥前産陶器鉢（4012）がある。また時期を特定できない陶器鉢（4013）がある。

4001～4004は明産染付碗で16世紀から17世紀初頭頃に納まるものである。4001は破断面に黒色の物質が付着しており、漆継ぎ痕と判断される。染付の発色はかなり悪い。4002は口縁部片であるが僅かに端反りする。4003は碗の体部片である。4004は釉むらがあり、色調、質感から漳州窯系の染付碗と推測される。4005は明産染付皿である。高台内部には放射状のカンナ痕がみられる。また畳付には小石が付着する。景徳鎮産で16世紀代と推測される。この染付皿はＳＤ３の検出時に出土したが、おそらくＳＤ３の埋土を掘込んだ柱穴の埋め土に含まれていた遺物と推測される。

4006・4007は古瀬戸の灰釉平碗である。4006は高台は削り出しで、古瀬戸後期Ⅲ期、15世紀前半のものである。4007も4006と同時期と推測される。4008は瀬戸・美濃産の灰釉丸皿で大窯Ⅲ期、16世紀第３四半期頃の所属である。4009・4010は瀬戸・美濃産の灰釉皿の底辺部片である。微細片のため詳



第167図　接待館遺跡　12世紀の中国産器

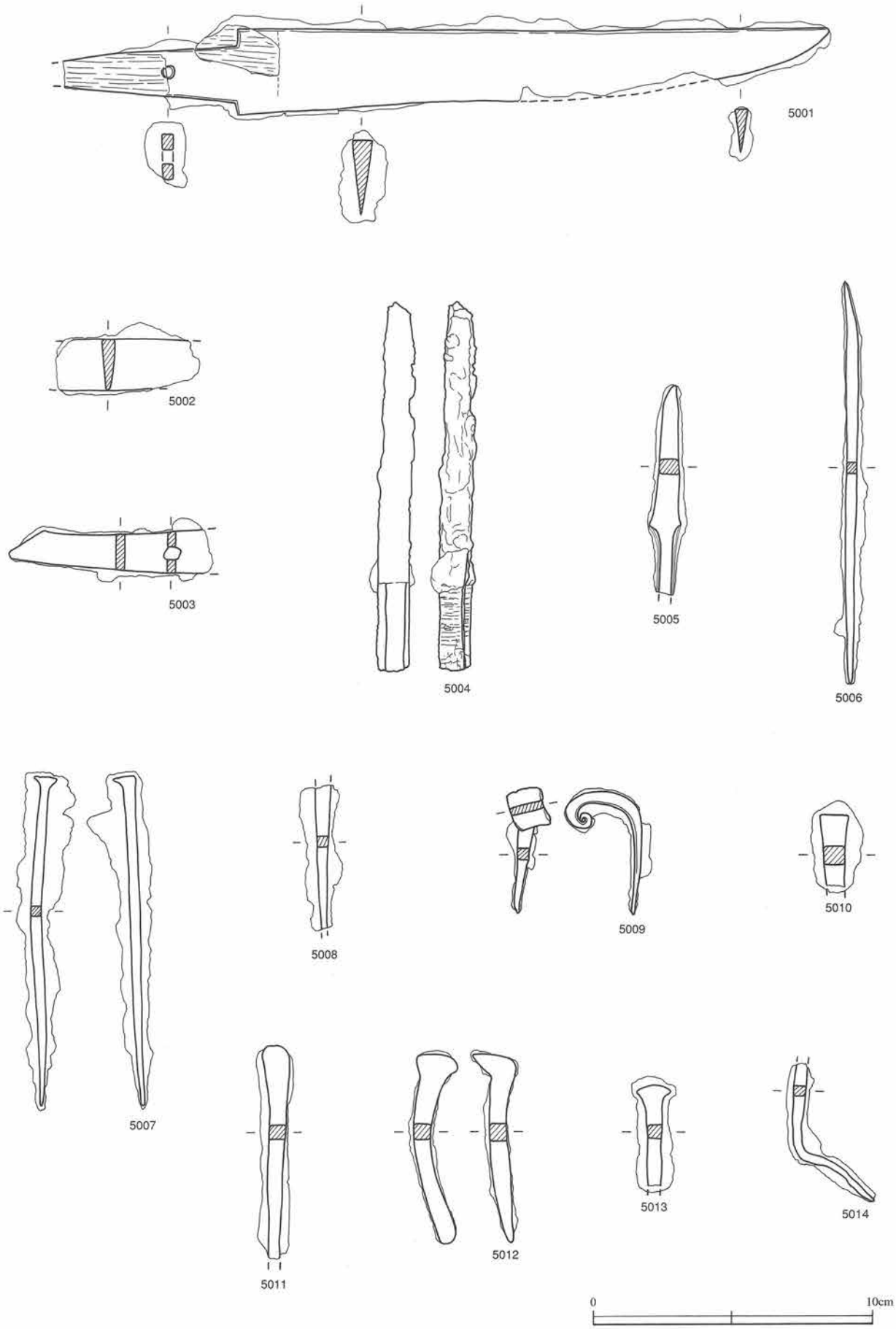
細な分類はできないが、大窯期、16世紀代のものである。

4011は瓦質土器である。器種は確定し難いが、手あぶりと推測される。外面はヘラミガキ、内面はロクロ目で、全体が黒色を呈する。口唇は欠損する。時期は確定できないが、他の中世陶磁器の年代観から16世紀に属する可能性が高い。

4012は肥前産の陶器鉢である。内面に白化粧が施され、17世紀後半～18世紀前半に属するものである。調査区東側の県生涯学習文化の試掘トレンチの埋め戻しの土中から出土した。この地点は東隣の細田遺跡にも近く、細田遺跡調査区内に所在した近世の屋敷「六日市場屋敷」に伴う陶磁器である可能性が高い。

4013は黄褐色の胎土に深緑の釉が施された陶器鉢である。中国産青磁盤にも器形が似るが、焼成が軟質で磁器質ではなく陶器質であり、明確な判断ができない。産地、時期ともに不明としておく。

第168図　接待館遺跡　中世、近世の陶磁器



第169図　接待館遺跡　鉄製品①

（7）金　属　製　品（第169～171図、写真図版120・121）

①鉄製品

鉄製品は、短刀１点、刀子２点、鏃２点、棒状製品１点、釘10点（確定できないものも含む）、不明製品７点が出土している。出土した全品を図示している。観察表中の「保存処理№」は保存処理に委託した際に付し番号である。保存処理は岩手県立博物館に委託した。

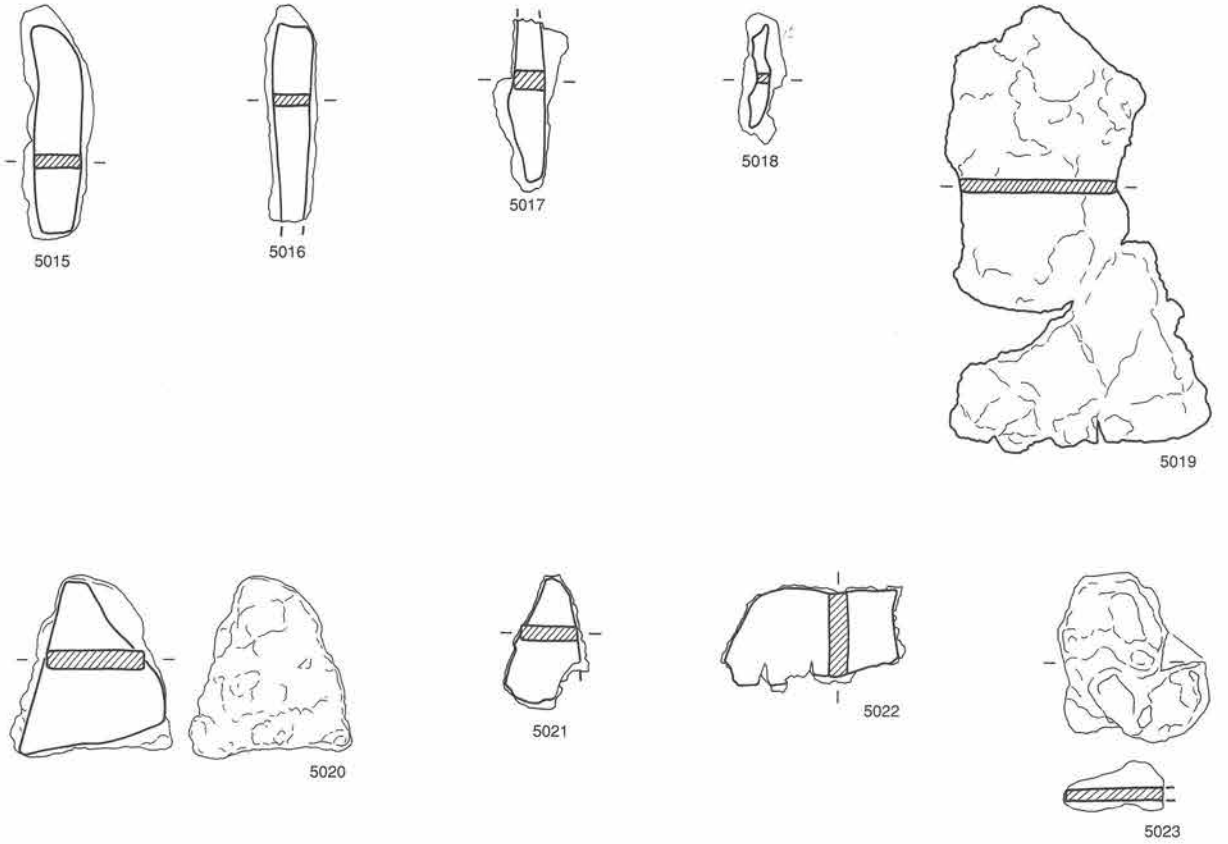
5001は短刀である。柄部の端部、刃部の一部が欠損する他は完存品である。残存長は27.4cmで、１尺の長さに造られていると理解できる。レントゲン写真の観察では柄部の「まち」寄りに目釘穴が認められる。また、柄部と刀身部に木質の痕跡が認められ、柄が装着され、鞘に納まった状態と推測される。この短刀の形態から時期を推測することは難しいが、出土した遺構SD１の年代観と、そこから出土しているかわらけの年代観から、12世紀に属する可能性が想定される。

5002・5003は刀子である。5002は刃部の破片、5003は柄部の破片で目釘穴がみられる。大きさから短刀の柄部の可能性もある。5002の所属年代は不明、5003は出土遺構の年代観から12世紀代の年代が想定される。

5004・5005は鏃である。5004は鑿状の鏃で、矢柄装着部分が錆に覆われ残存している。時期は出土遺構の年代観から12世紀のものと推測される。5005は柄部が欠損している。台状の茎で12世紀以前の所属と推測される。

5006は棒状の鉄製品である。両端が尖り、断面形は方形であるが、器種名は不明である。出土遺構の年代観から、12世紀に属する可能性が高い。

5007～5014は釘である。5007・5008・5013・5014は検出遺構の年代観から12世紀に属するものと推



第170図　接待館遺跡　鉄製品②

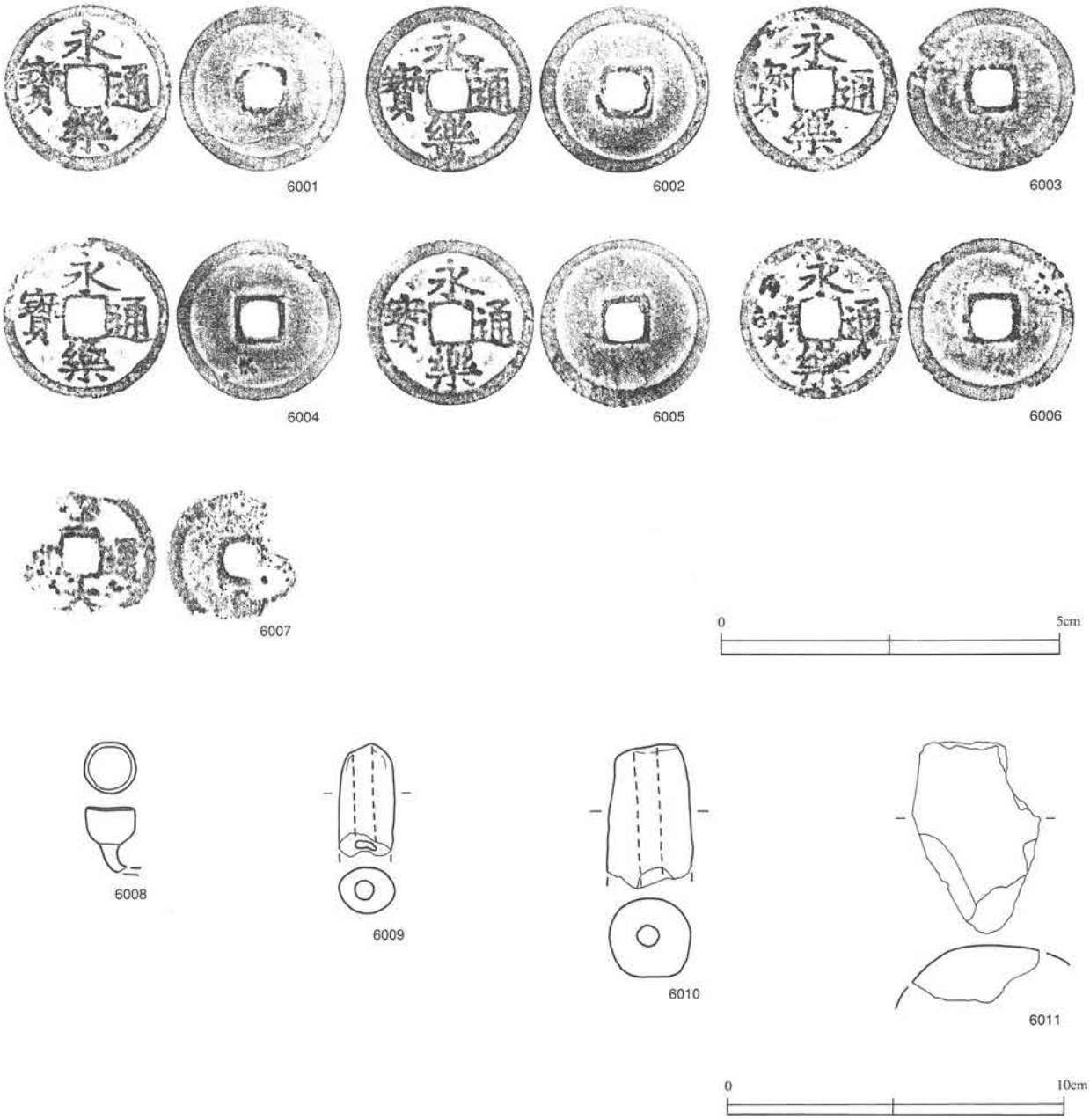
測される。他の釘の所属時期は不明である。5007は完存品で長さ11.9cmである。5015～5017は両端部が欠損するため、器種を確定できないが釘と推測される。5015・5016の断面形は長方形である。5017は出土遺構から12世紀に属すると推測される。

5018は棒状の鉄製品であるが、小破片で器種を判別できない。5019～5023は板状の鉄製品で、鍋等の破片と推測される。5020・5021・5023は出土遺構の年代観から12世紀に属する可能性が高い。

②銭貨

6001～6006は永楽通寶である。これらはＳＫ９の底面東側から６枚重なり癒着した状態で出土した。いずれも本銭である。永楽通寶は明銭で、初鋳年は1408年である。出土状況からＳＫ９は墓壙で、６枚の永楽通寶は六道銭と解釈される。

6007は至大通寶である。周縁部約３/４が欠損している。至大通寶は元銭で、初鋳年代は1310年である。本銭、模鋳銭の別は判断し難い。



第171図　接待館遺跡　銭貨・銅製品・土製品

③銅製品

銅製品は煙管の雁首（6008）がある。柄の基部を欠損している。火皿から柄部の形態から、16世紀末～17世紀初頭の製造と推測される。柱穴Ｐ306の埋土から出土している。

（8）土　製　品（第171図、写真図版121）

土製品には土錘、羽口がある。6009、6010の土錘は筒状の形状で、素焼きの土製品である。いずれも完存品ではない。出土したのは6009がＳＤ２、6010はＳＤ１西で、ともに12世紀に属する遺構であるが、これらの遺構からは土師器等も出土しており、12世紀の遺物とは限定はできない。ＳＤ２・ＳＤ１西の近辺には土師器の住居跡が所在し、これらの土錘も９～10世紀に属する可能性が高いと思われる。

6010は羽口片である。浅黄橙色を呈し、基部、先端部を欠損する。12世紀の遺構ＳＤ１西の出土であるが、土錘と同様に、12世紀の遺物とは断定できず、９～10世紀に属する可能性が高いと思われる。

（9）その他の遺物（写真図版120・122・123）

実測図を作成、掲載しなかったが、鉄滓と馬の骨・歯、人の歯が出土している。鉄滓は椀型のもの３点がＳＤ１埋土から出土している。いずれも錆色を呈し、鍛冶滓と判断される。時期は特定できないが、12世紀の可能性と、９～10世紀の両者の可能性がある。

馬の歯、骨はＳＤ１西の埋土下位から出土した。野外調査時は、上下の歯のみが噛み合わせの状態で出土したと認識していたが、持ち帰ってクリーニングしたところ、歯に顎の骨が付着していることが確認できた。歯に比較すると、骨は腐食しやすく、大半が腐食した状態になったと判断できる。よって、この状況は、上顎と下顎が分離しない状態で頭蓋骨が埋もれていたと理解できる。あるいは骨ではなく、肉が付いた生首の状態で埋もれていた状況も考えられる。また、歯、顎の骨以外は確認できなかったが、馬の全身が存在した可能性も想定される。この馬の骨、歯の年代は確定が難しいが、出土した位置がＳＤ１の底面近くで、遺構の年代観から12世紀に属する可能性が高い。

人の歯はＳＤ１西（グリッドＶＪ７ｅ）の埋土４層から出土した。大臼歯と思われる。所属時期は決定できないが、12世紀に属する可能性も考えられる。

接待館遺跡　縄文土器観察表

No.	種　別	出土位置	備　考	重量(g)
1	縄文土器	SB30(P127埋土)	注口部付き深鉢の注口部片　施文原体なし　縄文中期末から後期初頭	69.1

接待館遺跡　石器観察表

No.	出土位置	器　種	法量(cm)			重量(g)	石　質	備　考
			長さ	幅	厚さ			
2	SD2埋土中位(VJ7b)	石鏃	2.1	1.8	0.3	0.5	頁岩　奥羽山脈	柄部欠損

接待館遺跡　土師器、須恵器観察表

No.	種　別	器　種	出土位置	法量(cm)			残存率(%)	重量(g)	調　整	色調	備　考
				口径	器高	底径					
101	土師器	坏	SK5埋土	13.0	3.9	5.6	70	98.9	ロクロ　ヘラミガキ	明黄褐	内面黒色処理　底面回転糸切か
102	土師器	長胴甕	SK5埋土	15.0	7.7	—	10	23.3	ロクロ	灰黄褐	2破片から合成　口縁内面炭化物付着
103	土師器	長胴甕	SK5埋土	—	(3.5)	7.5	5	73.3	ヘラケズリ　ヘラナデ	浅黄橙	底面ヘラケズリ？
104	土師器	坏	SK21埋土	6.6	6.1	15.2	70	150.0	ﾛｸﾛ　ヘラケズリ　ヘラミガキ	浅黄橙	内面黒色処理　底面、底辺部手持ちヘラケズリ
105	土師器	鉢	SK21埋土	20.0	13.3	8.4	40	436.5	ﾛｸﾛ　回転ヘラケズリ　ヘラミガキ	浅黄橙	内面黒色処理　ロクロ下地のタタキ目みえない
106	須恵器	坏	SD1西埋土	—	2.3	8.0	10	30.9	ロクロ　ヘラケズリ	褐灰	内外面火襷痕　底面に手持ちヘラケズリ
107	須恵器	甕	SD1西埋土	—	(3.0)	—	3	15.0	ロクロ	黒	破断面赤褐色
108	須恵器	甕	表採	—	(6.9)	—	3	37.5	ロクロ　ヘラケズリ	灰褐	破断面赤褐色
109	須恵器	甕	SD1西埋土	—	(7.5)	—	2	28.8	ロクロ	灰	長頸壺の可能性あり
110	須恵器	甕	SD1東埋土中位(VIL1i)	—	(6.0)	—	1	35.7	ヘラケズリ	灰	内面アテ具痕？
111	須恵器	甕	P906埋土	—	(3.4)	—	1	20.7	ヘラケズリ？	灰褐	12世紀常滑片にも似る
112	須恵器	甕	SD2埋土	—	(3.8)	—	1	19.0	ヘラケズリ　ヘラナデ	灰	底辺部の破片
113	須恵器	甕	調査区南側粗掘時	—	(1.0)	(6.5)	3	34.8	ヘラナデ	灰	底部の破片　外底面砂底
114	須恵器	甕	調査区西側粗掘時(04年度)	—	3.9	10.2	3	43.0	ヘラケズリ　ヘラナデ	黒褐	破断面赤褐色
115	須恵器	大甕	SD2埋土1層(VO7b)	—	(4.1)	—	1	98.1	タタキ目　アテ具	黒褐	格子目状のタタキ目
116	灰釉陶器	壺	SD1西埋土1層	—	(3.9)	—	5	17.8	ロクロ　灰釉	灰白	
117	土師器	高台付坏	調査区南側粗掘時	—	(1.4)	7.1	20	81.4	ロクロ	灰白	付け高台　高台内回転糸切

接待館遺跡　かわらけ(ロクロ・手づくね)観察表

No.	規格	種　別	出土位置	法量(cm)			残存率(%)	重量(g)	色　調	備　考
				口径	器高	底径				
1001	小	ロクロ	SD1東埋土(VIL0j)	—	(1.7)	5.6	50	75.0	にぶい橙	器高の高い高台部　すのこ痕
1002	小	ロクロ	SD1東埋土下位(VIL0j)	—	(2.2)	5.7	50	86.3	にぶい橙	器高の高い高台部　すのこ痕
1003	小	ロクロ	SD1東埋土中位⑧(VIL1i)	8.2	1.2	6.4	100	57.8	にぶい褐	器壁が厚い　すのこ痕
1004	小	ロクロ	SD1東埋土下位(VIL1i)	8.9	1.4	6.2	55	38.7	にぶい黄橙	すのこ痕
1005	小	ロクロ	SD1東埋土下位⑤(VIL1i)	8.7	1.6	6.0	95	90.0	浅黄橙	すのこ痕
1006	小	ロクロ	SD1東埋土中～下位(VIL1i) SD1東埋土下位(VIL1i)	9.2	1.3	6.2	78	54.8	橙	すのこ痕
1007	小	ロクロ	SD1東埋土下位(VIL0j)	8.2	2.0	5.8	79	55.4	橙	すのこ痕　磨耗している
1008	小	ロクロ	SD1東埋土中位(VIL1i)	8.2	1.5	5.7	62	43.3	にぶい黄橙	すのこ痕
1009	小	ロクロ	SD1東埋土下位⑨(VIM1i)	8.3	1.5	6.6	100	70.1	にぶい黄橙	完存品　すのこ痕
1010	小	ロクロ	SD1東埋土下位(VIL0j)	9.2	1.7	7.6	85	86.5	にぶい橙	すのこ痕
1011	小	ロクロ	SD1東埋土(VIL1i)	8.5	1.5	6.1	77	53.7	浅黄橙	すのこ痕
1012	小	ロクロ	SD1東埋土下位(VIL0j)	8.1	1.6	6.1	86	60.3	黄橙	すのこ痕
1013	小	ロクロ	SD1東埋土下位(VIL1i)	8.1	1.4	6.0	67	46.8	橙	すのこ痕　内面著しく磨耗している
1014	小	ロクロ	SD1東埋土中位(VIL1i)	8.7	1.4	6.3	28	19.4	橙	すのこ痕
1015	小	ロクロ	SD1東埋土下位(VIL1i)	8.7	1.6	6.1	34	23.9	橙	すのこ痕
1016	小	ロクロ	SD1東埋土下位(VIL1i)	8.9	1.6	6.1	49	34.6	橙	すのこ痕
1017	小	ロクロ	SD1東埋土中位(VM7d)	7.9	1.8	6.1	63	43.9	にぶい橙	すのこ痕
1018	小	ロクロ	SD1東埋土下位(VIL1i)	8.5	1.5	6.0	29	20.1	橙	内外面やや磨耗
1019	小	ロクロ	SD1東埋土中～下位(VIL1i)	8.8	1.4	6.7	25	17.6	橙	すのこ痕　内外面磨耗
1020	小	ロクロ	SD1東埋土中～下位(VIL1i)	8.4	1.6	5.6	37	26.2	橙	すのこ痕
1021	小	ロクロ	SD1東埋土下位～底面(VIL1i)	8.9	1.7	5.6	20	14.3	橙	すのこ痕
1022	小	ロクロ	SD1東埋土中位(VIL1i)	8.2	1.6	6.3	29	20.6	橙	すのこ痕
1023	小	ロクロ	SD1東埋土中～下位(VIL1i)	8.6	1.4	5.8	45	31.4	にぶい橙	外面磨耗
1024	小	ロクロ	SD1東埋土中位(VIL1i)	9.2	1.4	6.7	24	16.9	橙	内面油煙付着　すのこ痕
1025	小	ロクロ	SD1東埋土下位(VIL1i)	8.9	1.6	6.3	31	21.9	にぶい橙	すのこ痕
1026	小	ロクロ	SD1東埋土	8.5	1.6	5.7	23	16.0	にぶい黄橙	すのこ痕
1027	小	ロクロ	SD1東埋土中位～底面(VIL1i)	9.1	1.7	6.1	23	16.0	浅黄橙	すのこ痕
1028	小	ロクロ	SD1東埋土下位(VIL1i)	9.4	1.7	6.9	25	17.2	橙	内外面磨耗
1029	大	ロクロ	SD1東埋土下部⑨(VIL1i)	13.9	3.2	7.4	85	200.4	橙	すのこ痕
1030	大	ロクロ	SD1東埋土中～下位(VIL1j)	14.7	3.2	6.9	86	203.7	にぶい橙	内外面油煙付着　すのこ痕
1031	大	ロクロ	SD1東埋土下位(VIL0j)	14.9	3.3	8.5	87	205.2	にぶい黄橙	すのこ痕　内面のロクロ目ハケ目状の工具を使用している。
1032	大	ロクロ	SD1東埋土中～下層(VIL1i) SD1東埋土下～底面(VIL1i)	13.3	3.8	7.3	60	142.3	橙	内面ロクロ目が顕著　すのこ痕
1033	大	ロクロ	SD1東下～底面(VIL1i)	13.6	3.0	7.9	54	126.7	浅黄橙	すのこ痕　内外面磨耗
1034	大	ロクロ	SD1東埋土下位(VIL0j)	13.3	2.8	6.5	49	116.0	にぶい橙	すのこ痕　内外面磨耗
1035	大	ロクロ	SD1東埋土中位(VIL1i)	14.8	4.1	6,8	49	115.5	橙	すのこ痕　器壁が厚い
1036	大	ロクロ	SD1東埋土下位(VIL0j)	13.8	3.7	6.7	66	155.9	橙	すのこ痕
1037	大	ロクロ	SD1東埋土下位(VIL1i)	14.0	3.2	6.4	27	63.5	褐灰	すのこ痕
1038	大	ロクロ	SD1東埋土下位～底面(VIL1i)	14.4	3.4	8.1	31	73.4	にぶい橙	すのこ痕　内外面油煙付着
1039	大	ロクロ	SD1東埋土下位(VIL1i)	13.7	3.9	7.9	14	32.0	黄橙	すのこ痕
1040	大	ロクロ	SD1東埋土下位③(VIL1i)	14.0	3.6	7.8	17	39.5	浅黄橙	すのこ痕　内面のロクロ目ハケ目状の工具を使用している。
1041	大	ロクロ	SD1東埋土下位(VIL1i)	13.7	3.1	6.2	45	106.8	浅黄橙	すのこ痕
1042	大	ロクロ	SD1東埋土下部(VIL1i)	13.9	3.8	7.2	64	151.4	浅黄橙	すのこ痕

接待館遺跡　かわらけ(ロクロ・手づくね)観察表

No.	規格	種　別	出土位置	法量(cm) 口径	器高	底径	残存率(%)	重量(g)	色　調	備　考
1043	大	ロクロ	SD1東埋土	13.2	2.8	5.8	31	71.9	にぶい橙	胎土に砂粒多量に混入
1044	大	ロクロ	SD1東埋土中～下位(ⅦL1i)	12.6	2.8	6.5	24	57.3	橙	すのこ痕　内面のロクロ目ハケ目状の工具を使用している。
1045	大	ロクロ	SD1東埋土中～下位②(ⅦL1i)	12.7	2.6	7.8	9	20.9	浅黄橙	すのこ痕　内外面磨耗
1046	大	ロクロ	SD1東埋土下位(ⅦL0j) SD1東埋土中～下位(ⅦL0j)	14.7	3.7	8.5	44	103.6	浅黄橙	すのこ痕
1047	大	ロクロ	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	14.2	3.4	8.6	12	27.2	橙	すのこ痕
1048	小	内折れ	SD1東埋土中位(ⅤM7d)	9.0	1.2	—	50	31.4	浅黄橙	手づくねかわらけの胎土
1049	小	内折れ	SD1東埋土	8.6	1.1	—	26	16.2	黄橙	手づくねかわらけの胎土
1050	小	C3	SD1東埋土中～下位(ⅦL1i)	9.1	1.9	—	87	55.0	にぶい橙	すのこ痕　内底面ハケ目状工具でなで
1051	小	D3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	9.5	1.8	—	82	51.8	浅黄橙	すのこ痕見えず
1052	小	D3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	9.7	1.9	—	95	63.3	浅黄橙	すのこ痕
1053	小	D3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	8.6	1.7	—	78	49.0	浅黄橙	すのこ痕
1054	小	D3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	9.3	1.5	—	85	66.6	浅黄橙	すのこ痕見えず
1055	小	C3	SD1東埋土下位(ⅦL0j) SD1東埋土下位(ⅦL0j)	9.7	1.8	—	80	60.3	浅黄橙	すのこ痕
1056	小	D3	SD1東埋土下位(ⅦL1i)	9.4	1.6	—	100	46.9	浅黄橙	内底面指によるなで
1057	小	D4	SD1東埋土下位④(ⅦL1i)	7.8	1.6	—	68	43.0	浅黄橙	完存品
1058	小	D3	SD1東埋土下位(ⅦL1i)	8.4	2.1	—	90	63.6	浅黄橙	すのこ痕
1059	小	D4	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	9.2	1.5	—	58	36.8	にぶい橙	すのこ痕
1060	小	D3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	8.8	2.1	—	74	46.9	にぶい橙	すのこ痕
1061	小	C3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	9.0	1.6	—	54	33.7	浅黄橙	内底面指によるなで
1062	小	D3	SD1東埋土中位(ⅦL1i)	9.3	1.6	—	37	23.5	浅黄橙	すのこ痕見えず
1063	小	D3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	7.2	1.7	—	42	26.6	にぶい橙	すのこ痕
1064	小	D3	SD1東埋土下位(ⅦL0j) SD1東埋土中～下位(ⅦL1i)	8.2	1.6	—	35	22.0	浅黄橙	すのこ痕
1065	小	C3	SD1東埋土下位～底面(ⅦL1i)	8.4	1.7	—	37	23.1	浅黄橙	すのこ痕見えず
1066	小	D3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	8.5	1.6	—	50	31.6	にぶい黄橙	胎土に海綿状骨針わずかに混入
1067	小	D3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	8.6	1.5	—	39	24.5	浅黄橙	すのこ痕
1068	小	D3	SD1東埋土中位(ⅦL0j)	8.0	1.9	—	28	17.9	浅黄橙	すのこ痕
1069	小	C3	SD1東埋土中～下位(ⅦL1i)	8.4	1.7	—	34	21.1	浅黄橙	すのこ痕
1070	小	C3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	9.0	1.7	—	76	47.9	にぶい黄橙	すのこ痕
1071	小	C3	SD1東埋土中位(ⅦL1i)	8.6	1.8	—	33	20.8	浅黄橙	外面口縁油煙付着
1072	小	C3	SD1東埋土中位(ⅤM7d)	8.5	1.6	—	39	24.6	浅黄橙	内外面磨耗
1073	小	C3	SD1東埋土中～下位(ⅦL1i)	10.0	1.9	—	33	20.6	にぶい橙	すのこ痕見えず
1074	小	D3	SD1東埋土中～下層(ⅦL1i)	8.6	1.7	—	37	23.1	にぶい橙	胎土に金雲母混入
1075	小	D3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	8.4	1.9	—	43	27.1	浅黄橙	すのこ痕
1076	小	D3	SD1東埋土中位(ⅦL1i)	8.6	1.8	—	49	30.6	にぶい黄橙	すのこ痕見えず
1077	小	C3	SD1東埋土下位(ⅦL0i)	8.8	1.7	—	47	29.7	にぶい橙	すのこ痕
1078	小	C3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	(10.0)	(3.5)	—	47	29.6	浅黄橙	口縁部ゆがんでいる　耳皿か？
1079	大	C3	SD1東埋土中～下位(ⅦL1i)	13.6	2.8	—	91	160.5	浅黄橙	内外面油煙付着　すのこ痕
1080	大	C3	SD1東埋土下位④(ⅦL1i)	13.4	2.3	—	57	100.9	浅黄橙	すのこ痕
1081	大	C3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	13.8	3.0	—	87	153.9	にぶい黄橙	すのこ痕
1082	大	D4	SD1東埋土下部(ⅦL0j) SD1東埋土下部(ⅦL1i)	13.3	2.7	—	78	136.7	浅黄橙	内底面ハケメ状工具によるなで
1083	大	C3	SD1東埋土中位④(ⅦL1i)	13.7	2.5	—	33	58.7	灰白	内面油煙？　内外面磨耗
1084	大	C3	SD1東埋土下位(ⅦL1i) SD1東埋土下位(ⅦL0j) SD1東埋土下～底面(ⅦL1i)	13.6	2.1	—	89	155.8	浅黄橙	底面の欠損意図的な穿孔か　すのこ痕　内底面指によるなで
1085	大	D3	SD1東埋土下位(ⅦL0j) SD1東埋土中～下位(ⅦL1i) SD1東埋土上位(ⅦL1i)	13.3	2.1	—	42	74.3	浅黄橙	すのこ痕　内底面指によるなで
1086	大	C3	SD1東埋土下位④(ⅦL1i) SD1東埋土下位②(ⅦL1i) SD1東埋土中～下位(ⅦL1i)	13.3	3.0	—	76	133.7	浅黄橙	内外面磨耗
1087	大	C3	SD1東埋土下位(ⅦT0j)	14.8	2.8	—	21	37.0	にぶい黄橙	胎土に海綿状骨針わずかに混入
1088	大	C3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	13.1	2.5	—	41	71.4	浅黄橙	内外面油煙付着　すのこ痕
1089	大	C3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	13.8	(2.3)	—	10	16.9	浅黄橙	内面に2条の沈線　焼成前の施文と推測される
1090	大	C3	SD1東埋土下位②(ⅦL1i)	15.2	3.4	—	51	89.9	浅黄橙	内外面磨耗
1091	大	C4	SD1東埋土(ⅦL0j)	13.2	2.9	—	86	151.0	浅黄橙	内底面指によるなで　すのこ痕　外底面に指紋多数
1092	大	C3	SD1東埋土中位(ⅦL1i)	14.7	(2.8)	—	21	37.4	浅黄橙	内底面ハケメ状工具によるなで
1093	大	C3	SD1東埋土下位～底面(ⅦL1i)	13.8	(2.5)	—	26	46.5	浅黄橙	胎土に金雲母混入
1094	大	C3	SD1東埋土下位⑩(ⅦL1i)	14.4	3.0	—	39	69.0	浅黄橙	内面油煙付着　すのこ痕
1095	大	C3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	13.9	2.8	—	52	91.9	浅黄橙	内底面指によるなで　すのこ痕
1096	大	C4	SD1東南西中位(ⅦL1i) SD1東埋土中位(ⅦL1i)	14.5	3.2	—	87	152.3	にぶい黄橙	内底面指によるなで
1097	大	C3	SD1東埋土中位(ⅦL1i)	12.4	2.8	—	44	77.3	浅黄橙	すのこ痕　内底面ハケ目状工具によるなで
1098	大	C3	SD1東埋土下位(ⅦL0i)	14.0	2.8	—	43	74.8	浅黄橙	すのこ痕　内底面指によるなで
1099	大	C4	SD1東南西中位(ⅦL1i)	14.6	3.3	—	29	50.4	にぶい黄橙	破断面が黒色を呈する
1100	大	C3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	12.7	2.6	—	20	35.4	浅黄橙	内面油煙付着
1101	大	D4	SD1東埋土②(ⅦL1i)	13.6	2.5	—	23	40.6	浅黄橙	すのこ痕見えず
1102	大	C3	SD1東埋土下位(ⅦL1i) SD1東埋土下位(ⅦL0j)	14.0	2.4	—	35	61.3	にぶい黄橙	すのこ痕　内面指によるなで
1103	大	C3	SD1東埋土下位⑨(ⅦL1i)	15.3	2.9	—	71	124.8	浅黄橙	すのこ痕　内外面磨耗
1104	大	C3	SD1東埋土下位(ⅦL1i)	12.6	2.7	—	62	108.3	浅黄橙	すのこ痕　内底面指によるなで
1105	大	C3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	13.3	3.0	—	100	155.6	浅黄橙	すのこ痕　内底面ハケメ状工具によるなで
1106	大	3段なで	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	14.0	2.7	—	95	193.1	浅黄橙	底面に穿孔　もう一つ未貫通の孔もある。　口縁部3段なで
1107	大	C3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	13.0	2.2	—	41	72.1	浅黄橙	内底面指によるなで
1108	大	C3	SD1東埋土下～底面(ⅦL1i)	13.3	2.9	—	95	167.6	浅黄橙	すのこ痕　内底面指によるなで

接待館遺跡　かわらけ(ロクロ・手づくね)観察表

No	規格	種　別	出土位置	法量(cm) 口径	器高	底径	残存率(%)	重量(g)	色　調	備　考
1109	大	C3	SD1東埋土下部(ⅦL0j)	14.4	2.6	—	69	121.3	浅黄橙	すのこ痕　内底面ハケメ状工具によるなで
1110	大	C3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	13.2	2.5	—	42	73.9	にぶい黄橙	すのこ痕　内底面ハケメ状工具によるなで
1111	大	C3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	14.0	3.0	—	67	118.0	にぶい黄橙	すのこ痕　内底面指によるなで
1112	大	C3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	13.8	2.5	—	34	59.4	灰白	すのこ痕　内底面指によるなで
1113	大	C3	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	16.0	3.2	—	71	125.3	浅黄橙	すのこ痕　内底面指によるなで
1114	大	C3	SD1東埋土中位⑧(ⅦL0j)	14.0	3.0	—	66	116.3	浅黄橙	内外面口縁部油煙付着　すのこ痕　内底面指によるなで
1115	大	D4	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	13.7	3.9	—	84	147.8	にぶい黄橙	内外面油煙付着　すのこ痕　内底面ハケメ状工具によるなで
1116	大	C3	SD1東埋土下位～底面(ⅦL1i) SD1東埋土中～下層(ⅦL1i)	13.8	2.9	—	52	92.1	灰白	内底面指によるなで
1117	小	ロクロ	SD3東埋土③(ⅤK4f)	8.1	1.8	5.6	53	36.9	灰白	すのこ痕　内外面磨耗している
1118	小	ロクロ	SD3東埋土①(ⅤK4f)	8.8	1.3	6.0	66	46.2	にぶい橙	すのこ痕
1119	小	ロクロ	SD3東埋土(ⅤK4f)	9.3	2.2	6.7	90	93.5	浅黄橙	すのこ痕　底面が厚い
1120	小	ロクロ	SD3東埋土①(ⅤK4f)	8.2	1.8	5.0	57	40.1	にぶい橙	すのこ痕
1121	小	ロクロ	SD3東埋土②(ⅤK4f)	9.2	2.0	6.3	64	45.1	褐灰	すのこ痕
1122	小	ロクロ	SD3東埋土②(ⅤK4f)	8.8	1.7	6.2	79	55.4	にぶい黄橙	すのこ痕
1123	小	ロクロ	SD3東埋土③(ⅤK4f)	9.9	1.8	6.5	78	54.5	にぶい橙	すのこ痕
1124	小	ロクロ	SD3東埋土(ⅤK4f)	8.0	2.0	5.6	35	24.4	橙	すのこ痕
1125	小	ロクロ	SD3東埋土①(ⅤK4f)	9.0	1.8	6.0	99	69.1	浅黄橙	すのこ痕
1126	小	ロクロ	SD3東埋土(ⅤK4f)	9.2	2.2	6.7	96	67.2	橙	すのこ痕
1127	小	ロクロ	SD3東埋土③(ⅤK4f)	9.9	1.7	7.0	100	69.8	橙	すのこ痕
1128	小	ロクロ	SD3東埋土③(ⅤK4f)	8.6	1.6	5.9	74	51.5	浅黄橙	内外面磨耗
1129	小	ロクロ	SD3東埋土(ⅤK4f)	8.0	1.3	6.1	51	35.6	橙	すのこ痕　内外面著しく磨耗
1130	小	ロクロ	SD3東埋土(ⅤK4f)	9.1	1.6	6.1	65	45.3	浅黄橙	底面磨耗のため糸切痕がみえない
1131	小	ロクロ	SD3東埋土③(ⅤK4f)	8.3	1.5	5.5	46	32.3	浅黄橙	すのこ痕　内外面磨耗
1132	大	ロクロ	SD3東埋土②(ⅤK4f)	12.4	3.9	6.0	53	125.6	橙	すのこ痕　他の大型かわらけに比べて口径が小さい
1133	大	ロクロ	SD3東埋土①(ⅤK4f)	14.4	3.4	8.0	50	118.1	にぶい橙	すのこ痕　内外面磨耗
1134	大	ロクロ	SD3東埋土②(ⅤK4f) SD3東埋土③(ⅤK4f)	14.3	3.6	8.0	95	275.3	橙	すのこ痕
1135	大	ロクロ	SD3東埋土(ⅤK4f)	14.0	3.3	7.5	79	185.3	褐灰	すのこ痕　胎土に草の茎？が混入
1136	大	ロクロ	SD3東埋土(ⅤK4f)	14.2	3.6	7.4	90	228.4	橙	すのこ痕
1137	大	ロクロ	SD3東埋土(ⅤK4f)	14.0	3.9	7.0	57	133.7	にぶい黄橙	すのこ痕　内面著しく磨耗している
1138	大	ロクロ	SD3東埋土②(ⅤK4f)	13.7	3.7	7.2	84	199.3	黄橙	すのこ痕
1139	大	ロクロ	SD3東埋土③(ⅤK4f)	13.7	3.9	6.3	93	220.2	にぶい橙	すのこ痕
1140	大	ロクロ	SD3東埋土③(ⅤK4f)	14.5	3.5	6.6	73	173.0	黄橙	すのこ痕
1141	大	ロクロ	SD3東埋土①(ⅤK4f)	14.5	3.4	7.3	54	126.2	橙	すのこ痕
1142	大	ロクロ	SD3東埋土③(ⅤK4f)	14.6	3.5	7.3	95	240.3	浅黄橙	すのこ痕
1143	大	ロクロ	SD3東埋土②(ⅤK4f)	14.2	3.6	6.8	95	210.5	にぶい黄橙	すのこ痕
1144	大	ロクロ	SD3東埋土(ⅤK4f)	14.4	3.5	7.0	53	124.1	浅黄橙	すのこ痕
1145	大	ロクロ	SD3東埋土①(ⅤK4f)	13.2	3.2	6.3	40	95.2	浅黄橙	すのこ痕
1146	大	ロクロ	SD3東埋土(ⅤK4f)	14.0	3.6	7.5	59	138.2	浅黄橙	内外面磨耗している
1147	大	ロクロ	SD3東埋土②(ⅤK4f)	14.5	3.6	8.2	41	97.2	橙	すのこ痕
1148	大	ロクロ	SD3東埋土③(ⅤK4f)	14.6	3.4	8.6	21	50.2	浅黄橙	内外面磨耗している
1149	大	ロクロ	SD3東埋土③(ⅤK4f)	14.2	3.4	7.5	71	167.2	黄橙	すのこ痕
1150	大	ロクロ	SD3東埋土①・③(ⅤK4f)	13.4	3.9	6.7	88	207.5	浅黄橙	すのこ痕
1151	大	ロクロ	SD3東埋土(ⅤK4f)	13.6	3.6	7.0	92	216.6	浅黄橙	すのこ痕
1152	大	ロクロ	SD3東埋土(ⅤK4f)	15.2	3.4	6.6	44	103.9	浅黄橙	内面油煙付着　すのこ痕
1153	大	ロクロ	SD3東埋土③(ⅤK4f)	12.4	3.3	6.8	57	133.8	にぶい橙	すのこ痕　底部が分厚い
1154	大	ロクロ	SD3東埋土③(ⅤK4f)	14.4	3.4	7.0	50	118.9	にぶい橙	すのこ痕
1155	小	D3	SD3東埋土③(ⅤK4f)	9.1	1.9	—	100	70.4	灰白	すのこ痕　完存品
1156	小	C4	SD3東埋土①(ⅤK4f)	9.3	1.9	—	100	87.2	灰白	すのこ痕　内底面指によるなで　完存品
1157	小	C3	SD3東埋土①(ⅤK4f)	9.1	2.3	—	100	77.5	灰白	すのこ痕　内底面指によるなで　完存品
1158	小	D4	SD3東埋土①(ⅤK4f)	9.7	1.9	—	100	73.0	灰白	すのこ痕　完存品
1159	小	C3	SD3東埋土①(ⅤK4f)	9.5	2.0	—	100	71.3	浅黄橙	すのこ痕
1160	小	C3	SD3東埋土③(ⅤK4f)	9.5	2.9	—	100	79.8	浅黄橙	すのこ痕　内底面指によるなで　完存品
1161	小	D4	SD3東埋土②(ⅤK4f)	7.8	2.0	—	100	50.3	にぶい黄橙	すのこ痕　内底面指によるなで　完存品
1162	小	C3	SD3東埋土③(ⅤK4f)	9.4	2.1	—	100	94.9	浅黄橙	すのこ痕　内底面指によるなで
1163	小	C4	SD3東埋土③(ⅤK4f) SD3東埋土①(ⅤK4f)	9.2	1.9	—	95	63.0	浅黄橙	すのこ痕　内底面指によるなで　内底面に炭化物？微量付着
1164	小	D4	SD3東埋土①(ⅤK4f)	9.1	1.8	—	100	72.2	浅黄橙	すのこ痕　内底面指によるなで
1165	小	D4	SD3東埋土③(ⅤK4f)	8.9	1.8	—	88	55.6	褐灰	すのこ痕
1166	小	D3	SD3東埋土①(ⅤK4f)	9.6	2.1	—	100	67.0	浅黄橙	内面油煙付着　すのこ痕　完存品
1167	小	C3	SD3東埋土①(ⅤK4f)	9.4	1.9	—	81	51.2	浅黄橙	すのこ痕
1168	小	C3	SD3東埋土①(ⅤK4f)	9.2	1.9	—	92	57.8	浅黄橙	すのこ痕
1169	小	C3	SD3東埋土①(ⅤK4f)	7.8	2.0	—	33	21.0	にぶい黄橙	すのこ痕
1170	小	D4	SD3東埋土(ⅤK4f)	9.0	(1.9)	—	40	24.9	灰白	すのこ痕
1171	小	C3	SD3東埋土③(ⅤK4f)	10.3	1.7	—	65	40.7	浅黄橙	すのこ痕
1172	小	C4	SD3東埋土(ⅤK4f)	9.0	(2.0)	—	56	35.1	浅黄橙	器壁が厚い
1173	小	D3	SD3東埋土①(ⅤK4f)	10.0	1.7	—	39	24.5	浅黄橙	内外面油煙付着　すのこ痕
1174	小	D3	SD3東埋土(ⅤK4f)	9.8	1.4	—	71	44.8	浅黄橙	内外面磨耗
1175	小	C4	SD3東埋土③(ⅤK4f)	9.3	(1.7)	—	65	40.8	浅黄橙	すのこ痕見えず
1176	小	D4	SD3東埋土②(ⅤK4f)	8.7	2.1	—	76	47.6	灰白	すのこ痕
1177	小	D4	SD3東埋土(ⅤK4f)	9.0	1.6	—	63	39.9	浅黄橙	すのこ痕　胎土に金雲母多量混入
1178	小	C3	SD3東埋土②(ⅤK4f)	9.2	1.9	—	82	51.6	浅黄橙	すのこ痕　底面が上底状になっている。
1179	小	C3	SD3東埋土(ⅤK4f)	10.0	2.2	—	85	80.9	にぶい黄橙	器表面が剥離している
1180	小	C3	SD3東埋土④(ⅤK4f)	8.0	(2.0)	—	35	22.0	褐灰	すのこ痕
1181	大	D3	SD3東埋土(ⅤK4f)	13.6	2.8	—	100	199.7	にぶい黄橙	すのこ痕　内底面指なで　完存品
1182	大	C3	SD3東埋土①(ⅤK4f)	14.5	3.2	—	95	201.2	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1183	大	C3	SD3東埋土①(ⅤK4f)	15.1	3.2	—	100	234.0	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで　完存品

接待館遺跡　かわらけ(ロクロ・手づくね)観察表

No.	規格	種　別	出土位置	法量(cm) 口径	器高	底径	残存率(%)	重量(g)	色　調	備　考
1184	大	C3	SD3東埋土③(VK4f)	13.7	3.1	—	100	170.9	浅黄橙	内外面油煙付着　すのこ痕　内底面指なで　完存品
1185	大	C3	SD3東埋土①(VK4f)	13.6	3.3	—	100	167.7	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1186	大	C3	SD3東埋土(VK4f)	14.3	2.6	—	69	122.2	にぶい黄橙	内面磨耗している
1187	大	C3	SD3東埋土①(VK4f)	13.5	3.0	—	64	112.5	にぶい黄橙	すのこ痕　内外面油煙付着
1188	大	C3	SD3東埋土②(VK4f)	12.7	2.7	—	37	65.1	浅黄橙	すのこ痕
1189	大	C4	SD3東埋土①(VK4f) SD3東埋土②(VK4f) SD3東埋土③(VK4f)	13.7	3.5	—	81	143.2	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1190	大	C3	SD3東埋土(VK4f)	14.3	2.6	—	89	155.9	にぶい黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1191	大	C3	SD3東埋土①(VK4f)	13.8	3.3	—	46	81.6	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1192	大	C4	SD3東埋土①(VK4f) SD3東埋土③(VK4f)	15.2	3.1	—	52	91.5	浅黄橙	内外面油煙付着　内底面指なで すのこ痕みえず
1193	大	C4	SD3東埋土③(VK4f)	13.7	2.9	—	84	148.6	浅黄橙	内底面指なで
1194	大	C3	SD3東埋土①(VK4f)	13.9	2.5	—	69	121.6	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1195	大	C4	SD3東埋土③(VK4f)	14.7	2.9	—	55	96.0	浅黄橙	すのこ痕見えず　内底面指なで
1196	大	D2	SD3東埋土①(VK4f) SD3東埋土②(VK4f) SD3東埋土③(VK4f)	14.1	2.7	—	46	81.1	浅黄橙	すのこ痕見えず　内底面指なで
1197	大	C3	SD3東埋土(VK4f)	13.8	2.5	—	37	64.3	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1198	大	C3	SD3東埋土③(VK4f)	13.7	(2.6)	—	33	57.6	浅黄橙	すのこ痕みえず
1199	大	D4	SD3東埋土③(VK4f)	14.0	3.5	—	42	73.6	にぶい黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1200	大	C4	SD3東埋土(VK4f)	15.1	3.0	—	37	65.7	浅黄橙	内底面指なで
1201	大	D4	SD3東埋土③(VK4f)	13.7	2.6	—	29	51.3	浅黄橙	すのこ痕みえず　内底面指なで
1202	大	C3	SD3東埋土(VK4f)	14.0	3.0	—	100	182.8	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで　全体に磨耗している
1203	大	C4	SD3東埋土(VK4f)	13.9	3.5	—	93	162.9	浅黄橙	内底面指なで
1204	大	C3	SD3東埋土①(VK4f) SD3東埋土②(VK4f)	13.3	2.9	—	36	63.1	にぶい黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1205	大	D3	SD3東埋土(VK4f)	14.3	2.6	—	30	53.4	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1206	大	C3	SD3東埋土③(VK4f)	13.7	3.0	—	28	49.1	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1207	大	C3	SD3東埋土②(VK4f)	13.7	2.4	—	51	89.2	にぶい黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1208	大	C3	SD3東埋土①(VK4f) SD3東埋土③(VK4f)	13.3	2.8	—	58	101.4	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1209	大	C4	SD3東埋土②(VK4f)	14.0	2.5	—	31	54.0	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1210	大	C3	SD3東埋土(VK4f)	14.0	2.8	—	67	117.8	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1211	大	D3	SD3東埋土(VK4f)	13.8	2.7	—	30	53.4	にぶい黄橙	すのこ痕　全体に磨耗している
1212	大	C3	SD3東埋土(VK4f)	14.0	3.1	—	82	144.9	にぶい黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1213	大	C3	SD3東埋土②(VK4f) SD3東埋土③(VK4f)	13.8	3.6	—	81	141.6	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1214	大	D3	SD3東埋土②・上位(VK4f)	14.2	2.6	—	81	142.6	にぶい黄橙	胎土に金雲母混入　内面磨耗している
1215	大	C3	SD3東埋土(VK4f)	13.5	3.2	—	95	166.8	浅黄橙	すのこ痕見えず　内底面指なで
1216	大	D4	SD3東埋土(VK4f)	14.2	3.0	—	100	177.3	にぶい黄橙	すのこ痕　内底面指なで　胎土に金雲母混入
1217	大	C3	SD3東埋土(VK4f)	13.0	3.0	—	95	144.9	浅黄橙	すのこ痕見えず　内底面指なで
1218	大	C3	SD3東埋土③(VK4f)	13.4	3.9	—	95	156.9	浅黄橙	すのこ痕見えず　内底面指なで
1219	大	C3	SD3東埋土③(VK4f)	13.4	2.9	—	78	136.9	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1220	大	C4	SD3東埋土(VK4e)	13.4	3.7	—	65	114.5	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1221	小	ロクロ	SD1西埋土	9.4	1.5	7.0	24	17.0	にぶい黄橙	すのこ痕　全体に磨耗している
1222	大	ロクロ	SD1西埋土上位(VJ4g)	13.5	3.2	7.6	28	64.8	灰白	全体に磨耗している
1223	小	D3	SD1西埋土(VJ4f)	9.5	(1.9)	—	38	24.2	浅黄橙	すのこ痕
1224	小	C3	SD1西埋土4層(VJ7e)	10.0	2.3	—	81	51.2	浅黄橙	すのこ痕見えず　内底面指なで
1225	大	C3	SD1西埋土4層(VJ7e)	14.0	2.4	—	46	80.6	にぶい黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1226	大	C3	SD1西埋土下部No1(04年度)	14.0	(2.9)	—	18	31.1	浅黄橙	全体に磨耗している
1227	小	ロクロ	SD2東埋土7(VJ3g)	7.8	1.5	6.4	20	13.8	浅黄橙	すのこ痕
1228	大	ロクロ	SD2東埋土(VJ7b)	—	(1.6)	5.0	12	28.9	にぶい黄橙	外底面の縁が高台状にやや高くなっている
1229	大	ロクロ	SD2東埋土1層	—	(3.3)	5.7	41	96.0	浅黄橙	すのこ痕　器高が高く12世紀前半の可能性がある
1230	小	ロクロ	SD3検出時	7.8	1.8	5.7	60	41.8	にぶい黄橙	すのこ痕　全体に著しく磨耗
1231	小	内折れ	SD3東埋土(VK3e)	8.0	0.9	—	13	8.1	浅黄橙	内折れかわらけ　手づくねかわらけの胎土
1232	小	D3	SD3東埋土(VL5c)	9.4	1.4	—	60	37.5	灰白	全体に磨耗している
1233	小	D3	SD3東埋土2層(VK3c)	8.4	1.9	—	69	43.4	浅黄橙	すのこ痕見えず　内底面指なで
1234	小	C3	SD3東埋土①(VK6i)	8.9	1.8	—	74	46.5	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1235	小	D3	SD3東埋土2層(VK3e)	8.9	1.5	—	32	20.1	灰白	内底面指なで　外底面に草の茎の圧痕多数あり
1236	大	C3	SD3検出時	13.8	3.6	—	21	36.4	にぶい黄橙	すのこ痕
1237	大	C3	SD3東埋土①(VK6i)	13.6	3.4	—	27	47.3	浅黄橙	すのこ痕　胎土に金雲母混入
1238	大	D3	SD3検出時	11.8	3.2	—	24	42.7	にぶい黄橙	すのこ痕見えず　内底面指なで
1239	大	C4	SD3検出時	15.2	3.2	—	53	92.9	にぶい黄橙	すのこ痕見えず　内底面指なで
1240	大	C3	SD3検出時	14.7	2.6	—	38	66.6	にぶい黄橙	すのこ痕
1241	大	C3	SD3東埋土①(VK6i)	13.4	2.6	—	36	63.9	浅黄橙	すのこ痕見えず　内底面指なで
1242	大	C4	SD3東埋土2層(VK3e)	15.6	(3.0)	—	28	49.4	にぶい黄橙	内底面指なで　外底面に草の茎？の圧痕あり
1243	大	C3	SD3東埋土①(VK6i)	13.0	(3.4)	—	22	38.9	浅黄橙	すのこ痕　内底面指なで
1244	小	ロクロ	SB13(P235)	9.8	1.7	6.0	25	17.7	にぶい橙	すのこ痕
1245	大	ロクロ	SB3(P111)	12.8	3.2	6.8	100	179.9	にぶい橙	すのこ痕　完存品
1246	小	C3	P92埋土	9.3	1.8	—	95	59.6	浅黄橙	すのこ痕　内底面指によるなで
1247	大	D4	P574	13.0	3.7	—	33	57.6	灰白	すのこ痕　内底面指によるなで
1248	小	ロクロ	粗堀	7.8	1.9	6.0	50	60.7	浅黄橙	すのこ痕
1249	大	ロクロ	粗堀	13.4	3.6	7.0	29	68.1	にぶい橙	すのこ痕　全体に磨耗している
1250	小	D3	SK3埋土	8.6	2.3	—	84	53.1	浅黄橙	砂粒海綿状骨針が混じる胎土　13世紀以降のかわらけか？

接待館遺跡　国産陶器観察表

No.	種　別	器　種	部　位	出土位置	釉・色調	年代など	重量(g)	備　考
2001	常滑	甕	体部下半	SK3埋土	灰褐	12世紀	48.7	2002～2011同一個体
2002	常滑	甕	体部下半	SK3埋土	にぶい赤褐	12世紀	36.1	破断面暗灰色
2003	常滑	甕	肩部	SD1東埋土上位(ⅤM7b)	灰	12世紀	77.4	器表面部分的に弾けている
2004	常滑	甕	体部下半	P1001埋土	褐灰	12世紀	20.7	押印あり
2005	常滑	甕	体部下半	SK3埋土	褐灰	12世紀	15.9	押印あり
2006	常滑	甕	体部下半	SK3埋土	灰褐	12世紀	16.7	押印なし
2007	常滑	甕	体部下半	SK2埋土	褐灰	12世紀	18.4	押印なし
2008	常滑	甕	体部上半	SK3埋土	灰褐	12世紀	21.3	押印あり
2009	常滑	甕	体部下半	SK3埋土	灰褐	12世紀	14.5	押印なし
2010	常滑	甕	体部下半	SK3埋土	褐灰	12世紀	9.4	押印なし
2011	常滑	甕	体部下半	SK3埋土	褐灰	12世紀	5.5	押印なし
2012	常滑	甕	口縁部	04年　粗堀時	褐灰	12世紀	34.7	2013と同一個体
2013	常滑	甕	口縁部	P52埋土	灰	12世紀	26.9	口唇部欠損
2014	常滑	甕	口縁部	SD1東埋土下位(ⅦL1j)	オリーブ黒(釉)・灰褐	12世紀	22.1	外面に自然釉
2015	常滑	甕	体部上半	SB28(P277埋土)	灰オリーブ(釉)	12世紀	43.9	外面に自然釉
2016	常滑	甕	体部下半	ⅦL1g検出時	にぶい赤褐	12世紀	60.9	下端部に押印
2017	常滑	甕	体部下半	SD1東埋土中位(ⅦL1i)	にぶい赤褐	12世紀	53.9	2016と同一個体か
2018	常滑	甕	体部下半	SD1西埋土上位(ⅤJ5g)	灰	12世紀	76.8	目の大きい押印あり
2019	常滑	甕	体部下半	SD6埋土	灰褐	12世紀	52.8	器表面になでが施される
2020	常滑	甕	体部下半	P755埋土	黒褐	12世紀	4.9	押印なし
2021	常滑	甕	体部下半	ⅦL1f検出時	灰	12世紀	57.5	目の大きい押印あり
2022	常滑	甕	体部下半	ⅦM0a表土	暗灰黄	12世紀	47.1	内面自然釉
2023	常滑	広口壺？	体部上半	SD1東埋土中位(ⅦL1i)	灰オリーブ(釉)	12世紀	28.8	外面に自然釉
2024	常滑	広口壺？	体部上半	重機掘削時	褐灰	12世紀	49.4	押印なし
2025	常滑	広口壺？	肩部	SD6埋土	暗オリーブ(釉)	12世紀	6.0	外面に自然釉
2026	常滑	広口壺？	体部上半	SK3埋土	褐灰	12世紀	30.5	外面にケズリ状の調整
2027	常滑	広口壺？	体部下半	SB45(P191埋土)	にぶい赤褐	12世紀	11.4	内面自然釉
2028	常滑	広口壺？	体部上半	P75埋土	灰オリーブ(釉)	12世紀	12.5	外面自然釉
2029	渥美	甕	体部下半	SB28(P457埋土)	褐灰・オリーブ黒(釉)	12世紀	20.3	287～292同一個体
2030	渥美	甕	体部下半	SD1西埋土(ⅤJ3g)	褐灰・オリーブ黒(釉)	12世紀	58.9	外面に自然釉の流れ
2031	渥美	甕	体部下半	SD1東埋土	褐灰・オリーブ黒(釉)	12世紀	25.4	外面に自然釉の流れ
2032	渥美	甕	体部中央	SD1西埋土上位(ⅤJ4g)	灰	12世紀	111.4	外面に釉の流れ
2033	渥美	甕	体部下半	SD1東ⅤM7d	褐灰・オリーブ黒	12世紀	28.1	外面に釉の流れ
2034	渥美	甕	体部下半	SB30(P127埋土)	暗灰黄	12世紀	9.2	内面釉付着
2035	渥美	甕	体部下半	SD1東埋土上～中位(ⅦL1j)	灰	12世紀	146.1	器表面擦られている
2036	渥美	甕	体部下半	SD1東埋土下位(ⅦL0j)	褐	12世紀	315.3	内面自然釉
2037	渥美	甕	体部下半	SD1東埋土中位(ⅦL1i)	褐・灰オリーブ(釉)	12世紀	120.7	2037と同一個体
2038	渥美	甕	体部下半	SD1東トレンチ埋土	黒褐・暗オリーブ(釉)	12世紀	124.9	内面炭化物様のもの付着
2039	渥美	甕	体部下半	SD1東埋土中位(ⅦL1j)	褐灰	12世紀	38.7	複雑な形状の押印
2040	渥美	甕	体部上半	SD6埋土	オリーブ灰(釉)	12世紀	41.0	外面自然釉
2041	渥美	甕	体部下半	SD1東埋土下位～底面(ⅦI1i)	灰褐	12世紀	24.2	内面自然釉わずかに付着
2042	渥美	甕	体部下半	SD1東埋土中位(ⅦL1i)	灰オリーブ	12世紀	14.9	外面自然釉付着
2043	渥美	甕	体部下半	P901埋土	灰	12世紀	19.0	2044と同一個体
2044	渥美	甕	体部下半	P57埋土	灰	12世紀	33.2	軟質な感じの焼成
2045	須恵器系？	甕	底～体部下半	SD3ⅤK4fトレンチ埋土④	黒褐	12世紀	146.1	タタキ目はみえない 古代の須恵器の可能性もある。
2046	須恵器系	甕	体部下半	SD2Ⅴj3gトレンチ埋土7層	灰	12世紀	31.0	外面タタキ目

接待館遺跡　12世紀中国産磁器観察表

No.	種　別	器　種	部　位	出土位置	分類・年代	備　考
3001	白磁	碗	体部下半	SD6埋土	大宰府分類碗Ⅱ類　11～12C前半	見込に段　化粧土あり
3002	白磁	碗	体部下半	ⅥM2a 検出時	12C後半	内面に沈線
3003	白磁	碗	体部	粗掘中(04年度)	12C後半	二次被熱している
3004	白磁	四耳壺	肩部	P640埋土	大宰府分類壺Ⅱ類　11C～12C前半	内面無釉　外面器面がはじけている
3005	白磁	四耳壺	耳部	SD1東埋土下位(ⅦL1j)	大宰府分類壺Ⅲ類　12C後半	四耳壺の耳の破片
3006	白磁	壺	体部中位	SD1東埋土中位(ⅦL1j)	大宰府分類壺Ⅲ類　12C後半	内面施釉
3007	白磁	壺	頸部	P794埋土	大宰府分類壺Ⅲ類　12C後半	頸部の破片　磨滅している
3008	青白磁	碗	口縁部	SD1東埋土(ⅦL1i)	青白磁碗　12C	内面劃花文
3009	青磁	皿	底辺部	SD1東埋土下位(ⅦL1j)	大宰府分類竜泉窯皿Ⅰ類　12C後半	内面に段がある

接待館遺跡　中、近世陶磁器観察表

No.	種　別	器　種	出土位置	法量(cm)			釉など	産　地	年　代	備　考
				口径	器高	底径				
4001	染付	碗	粗掘時(04年度)	—	(3.1)	5.0	染付	中国	16C	漆継ぎ
4002	染付	碗	粗掘時(04年度)	—	(1.5)	—	染付	中国	16C	わずかに端反
4003	染付	碗	表採(05年度)	—	(2.6)	—	染付	中国	16C	体部片
4004	染付	碗	SK6埋土	—	(2.7)	5.2	染付	中国	16C	しょう州窯系？
4005	染付	皿	SD3検出時	—	(1.0)	8.8	染付	中国	16C	畳付に石付着
4006	陶器	平碗	風倒木痕中(04年度)	15.1	6.2	4.8	灰釉	瀬戸	15C前半	古瀬戸灰釉平碗　古瀬戸後Ⅲ期
4007	陶器	平碗	粗掘時(04年度)	—	(3.3)	—	灰釉	瀬戸	15C前半か	古瀬戸灰釉平碗　古瀬戸後Ⅲ期か
4008	陶器	皿	SD3付近検出時(04年度)	10.2	2.5	5.5	灰釉	瀬戸・美濃	16C第3四半期	灰釉丸皿　大窯Ⅲ期
4009	陶器	皿	SB6(P53埋土)	—	(0.5)	5.1	灰釉	瀬戸・美濃	16C	灰釉皿　大窯期
4010	陶器	皿	P407埋土	—	(0.9)	—	灰釉	瀬戸・美濃	16C	灰釉皿　大窯期　体部下半の破片
4011	瓦質土器	手あぶり？	SB26(P515埋土)	—	(5.6)	9.1	黒色処理	在地？	16C？	内面体部上半に錆状のもの付着　中世か
4012	陶器	鉢	VM7b文化課試掘トレンチ中	—	1.8	12.2	白化粧	肥前	17C後半～18C前半	近世肥前産陶器鉢
4013	陶器	皿	P691埋土	24.0	(3.3)	—	深緑の釉	不明	不明	産地、時期不明

接待館遺跡　金属製品観察表

No.	種　別	出土位置	材質	法量(cm)			重量(g)	備　考	保存処理No.
				長さ	幅	厚さ			
5001	短刀	SD1西埋土	鉄	(27.4)	3.2	0.7	123.3	柄に木質が付着　鞘部にも一部木質が付着	1
5002	刀子	SB9(P28)	鉄	(5.7)	1.8	0.5	14.9	刃部の破片	20
5003	刀子	SD2埋土中位(VJ7b)	鉄	(7.3)	1.3	0.3	14.0	柄部の破片	12
5004	鏃	SD2埋土10層(VIJ7a)	鉄	13.4	1.1	1.1	23.7	矢柄装着部分残存	2
5005	鏃	SB53(P663埋土)	鉄	(7.6)	0.8	0.5	13.4	柄部欠損	18
5006	棒状	SD1東埋土(VIL1i)	鉄	14.6	0.4	0.4	16.5	断面角型　先端部尖る　器種不明	3
5007	釘	SD1西埋土(VJ4g)	鉄	11.9	0.4	0.4	29.3	断面角型　完存品	4
5008	釘	SD3埋土	鉄	(5.8)	0.6	0.4	10.9	頭部、先端部欠損	8
5009	釘	SB5(P68)	鉄	4.5	0.6	0.4	8.8	頭部丸まっている	9
5010	釘	P884	鉄	(2.6)	0.9	0.7	9.1	下半部欠損	11
5011	釘	SB13(P287)	鉄	(7.7)	0.8	0.5	15.7	先端部欠損	14
5012	釘	VM3e　検出時	鉄	6.8	0.6	0.6	22.9	完存品	17
5013	釘	SD1西埋土(VJ4g)	鉄	(3.6)	0.6	0.5	12.0	先端部欠損	22
5014	釘	SD1東埋土中～下位(VIL1i)	鉄	5.0	0.4	0.4	7.8	頭部欠損	23
5015	釘？	SD3付近粗掘中(04年度)	鉄	5.4	1.2	0.3	22.1	断面形長方形　器種不明	7
5016	釘？	SB52(P655)	鉄	(5.2)	1.0	0.3	10.8	断面形長方形　器種不明	19
5017	釘？	SD1西埋土4層(VJ7e)	鉄	(4.2)	0.8	0.5	12.0	釘と思われる	21
5018	不明	SD1東埋土中位(VIL1j)	鉄	2.7	0.5	0.3	5.6	器種不明	15
5019	不明	SB158(P78)	鉄	11.7	4.1	0.3	105.6	鋳造品か？　鍋等の破片か？	5
5020	不明	SD1西南埋土(VJ3g)	鉄	4.5	2.6	0.5	37.1	鋳造品か？　鍋等の破片か？	6
5021	不明	SD1東埋土(VIL1i)	鉄	3.3	1.5	0.4	7.5	鋳造品か？　鍋等の破片か？	10
5022	不明	SB44(P131)	鉄	(4.6)	2.2	0.5	16.1	鋳造品か？　鍋等の破片か？	13
5023	不明	SD1西埋土上位(VJ4g)	鉄	4.5	3.8	0.3	22.3	鋳造品か？　鍋等の破片か？	16
6001	永楽通寶	SK9東側底面	銅	2.5	2.5		3.8	6001～6006は癒着して出土	
6002	永楽通寶	SK9東側底面	銅	2.5	2.5		3.1	6001～6006はいずれも本銭	
6003	永楽通寶	SK9東側底面	銅	2.5	2.5		2.2	永楽通寶　初鋳年代1408年	
6004	永楽通寶	SK9東側底面	銅	2.5	2.5		3.2		
6005	永楽通寶	SK9東側底面	銅	2.5	2.5		2.6		
6006	永楽通寶	SK9東側底面	銅	2.5	2.5		2.5		
6007	至大通寶	SB5(P68)	銅	(2.2)	(2.2)		1.1	欠損している　初鋳年代1310年	
6008	煙管	P306埋土	銅	(1.9)	0.8		6.2	雁首　柄部欠損　火皿の直径0.8cm	

接待館遺跡　土製品・その他の遺物観察表

No.	器種	出土位置	材質	その他
6009	土錘	SD2西埋土	土製品	下半部欠損　重さ7.2g
6010	土錘	SD1西埋土	土製品	下半部欠損　重さ24.5g
6011	羽口	SD1西北上位層	土製品	浅黄橙呈する　重さ26.2g
—	人の歯	SD1西埋土4層(VJ7e)	—	大臼歯か？

Ⅶ　ま　と　め

1　六日市場、細田、接待館遺跡の変遷

３つの遺跡では様々な時期の遺構、遺物が検出されている。ここではその変遷についてまとめる。

（1）弥　生　時　代

六日市場遺跡で複数の土器片（１～５）が出土し、近辺に集落の存在が予想される。

（2）古墳時代（5世紀）

六日市場遺跡で、この時期に属すると推測される土器片（12）、黒曜石製石器（６～９）が出土しており、近辺に集落の存在が予想される。

（3）9 ～ 10 世 紀

接待館遺跡西部で竪穴住居が３棟（ＳＩ１～ＳＩ３）検出され、集落が存在している。この集落に伴うと推測される灰釉陶器壺片（116）が接待館遺跡ＳＤ１西の埋土から出土している。また六日市場遺跡ＳＤ１埋土からも土師器、須恵器片（13～25）が出土し、近辺に集落の存在が予想される。

（4）11世紀初頭？

接待館遺跡で当該期と推測される高台付き坏片（117）が１片出土している。遺構との関連は不明。出土土器片は長者ヶ原廃寺跡出土のもの（衣川村教委2006）に類似する。

（5）12世紀初頭～前半

六日市場遺跡で12世紀初頭のかわらけ（26～27）が出土しており、衣川北岸の12世紀の遺構展開の開始が12世紀初頭であることを示す。また、接待館遺跡でも12世紀前半と推測されるかわらけ(1228、1229)、中国産白磁（3001・3004）が出土しており、接待館遺跡の堀、土塁の構築が12世紀前半である可能性を示している。

（6）12 世 紀 後 半

接待館遺跡内でかわらけを大量に使用する儀礼がおこなわれている。他に中国産磁器、国産陶器、鉄製品の出土がある。また、六日市場遺跡、細田遺跡にも当該期に属する建物、溝、土坑が存在し、遺構、遺物の展開がみられる。

（7）14　世　紀

細田遺跡で当該期の青磁片（43）が１片出土している。遺構との関連は不明。また出土遺物ではないが、接待館遺跡調査区西端に接する神明社には貞治４（1365）年銘の鰐口が存在したという。

（8）14世紀末～16世紀

接待館遺跡でまとまった量の陶磁器が出土している（4001～4010など)。また、12世紀の内部区画ＳＤ３を切る掘立柱建物が複数棟以上構築されている。接待館遺跡ＳＫ９からは永楽通寶が６枚出土し（6001～6006)、この時期の墓壙と推測される。

（9）17 ～ 19 世 紀

細田遺跡調査区域内に六日市場屋敷が構えられる。細田遺跡の多数の陶磁器（48～128)、掘立柱建物（ＳＢ６・ＳＢ11・ＳＢ32など）がこれに伴う。

引用文献

衣川村教育委員会　2006 「長者ヶ原廃寺跡発掘調査報告書―第８次調査―」 第10集

2　六日市場遺跡出土の黒曜石製石器について

六日市場遺跡出土（6～9）の黒曜石製石器は、その形態的特徴（厚手で刃部形成範囲の広い拇指状のスクレイパー）から、おもに古墳時代に見られるいわゆる北海道系遺物と考えられる。5～6世紀の岩手県域において、この石器群は宮城県湯ノ倉産の黒曜石を主体的に使用することで知られ（佐藤1998、井上2002)、本資料の石質もこれに符合する。また、共伴遺物に南小泉式？の土師器1片（12）があり、おそらくこれと同時期の所産と考えられる。

石器製作技法の特徴を挙げると、以下のようになる。

① 両極剥離を多用している（素材剥片剥離は4点とも両極剥離による)。

② 刃部調整部位について、調整可能な箇所（側縁と裏面のなす角度が鋭角な部位）すべてに刃部調整が施されており、現形態ではこれ以上の刃部拡張は困難である。

出土点数が少ないためこれ以上の言及はできないが、①については全点に共通、②についてはスクレイパーすべてに共通することから、製作技法に関しては斉一性が看取される。これらの特徴は、奥州市（旧水沢市）中半入遺跡で出土した古墳時代中期を中心とする石器群と同様である（高木2002、高瀬・丸山2003、丸山2003)。

また、この種の石器群は祭祀儀礼（副葬品など）に用いられる場合があることが指摘されているが（高橋ほか1991、相沢1999など)、本遺跡の資料に関してもその可能性がないわけではない。ただし、スクレイパー刃部の調整が最大限実施されていること、8には使用痕が確認されることから実用性が高く、その使用を第一義と捉えるのが適当であろう。なお、これまでに実施された当該石器の使用痕分析では、おもに獣・魚類の生皮のスクレイピングに利用された可能性の高いことが指摘されている（御堂島1993、高橋1998、須藤・高橋1997、高瀬2002、高瀬・丸山2003、高橋2005)。

引用文献

相沢清利　1999「東北地方続縄文文化小考―仙台平野の事例を主にして―」『宮城考古学』第1号　宮城県考古学会

井上雅孝　2002「岩手県域における続縄文文化」第29回岩手考古学会研究大会発表資料

佐藤嘉広　1998「東北地方―特に中・北部の古墳期の石器のありかた―」『考古学ジャーナル』433

須藤　隆・高橋　哲　1997「山王遺跡出土石器の使用痕分析」『山王遺跡』Ⅰ　多賀城市文化財報告書第45集

高木　晃ほか　2002『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第380集

高瀬克範　2002「黒曜石製石器の使用痕分析」『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団第380集

高瀬克範・丸山浩治　2003「中半入遺跡における古墳時代の黒曜石製石器―1D区「105号住居跡」出土資料の検討―」『古代』第113号　早稲田大学考古学会

高橋　哲　1998「木戸脇裏遺跡出土の北海道系石器の研究」『考古学の方法』第2号　東北大学文学部考古学研究会

高橋　哲　2005「続縄文時代後半期の石器研究―札幌市資料を用いて―」『北海道考古学』第41輯　北海道考古学会

高橋信雄・高橋與右衛門　1991「北海道の続縄文文化と東北」『北からの視点』日本考古学協会宮城・仙台大会資料集

丸山浩治　2003『古墳時代の黒曜石製石器に関する基礎的研究―水沢市中半入遺跡105号住居跡の接合資料・スクレイパーから―』紀要XXⅡ　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

御堂島正　1993「岩手県滝沢村仏沢Ⅲ遺跡出土石器の使用痕分析」『大石渡遺跡』岩手県滝沢村文化財調査報告書第24集

3　近世六日市場屋敷について

細田遺跡では近世に属する掘立柱建物や多数の近世陶磁器が出土し、調査区の隣接地には近世の墓標が存在する。これらは、近世の検地帳、高人数改帳に記載される「六日市場屋敷」に属するものと考えられる。細田遺跡調査区西半には佐藤義美氏宅（字六日市場43番地）が所在していたが、佐藤家は近世六日市場屋敷の子孫にあたる。ここでは六日市場屋敷に関連する文献資料を紹介し、出土遺物、検出遺構との関連を考察する。六日市場屋敷は仙台藩胆沢郡下胆沢下衣川村に属する。以下に、「六日市場屋敷」の記載がある文献を示す。

① **寛文二年（1662）下衣川村御検地帳**

六日一場屋敷　藤左衛門　氏家主水分

耕作者　同人　半右衛門　吉左衛門　半兵衛

筆名　道下　川はた　うしろ　槻木はた　のきハ　西はた

面積　一町九反八畝一歩

値　五百三十七文

② **安永六年（1777）膽澤郡下膽澤下衣川村風土記御用書出**（衣川村1988「衣川村史Ⅳ」所収）

一屋敷名　八拾四

一　並木屋敷　四軒・・・・

一　六日市場屋敷　三軒

③ **天保七年（1836）下膽澤下衣川村高人数御改帳**（衣川村1989「衣川村史Ⅴ」所収）

・同宗同寺（曹洞宗雲際寺）

六日市場屋敷甚十郎51　女房さよ46　聟留松26　女房里よ22　男子嘉蔵４　弟寅吉42

合六人分男四人女弐人

高七拾七文

・同宗同寺（曹洞宗雲際寺）

同屋敷覚之丞66　女房はる66

合弐人内男壹人女壹人

高弐文　外一三拾弐文本地西磐井平泉村之内高館江入作

④ **安政五年（1857）下膽澤下衣川村高人数御改牒**（衣川村1989「衣川村史Ⅴ」所収）

同宗同寺（曹洞宗雲際寺）

六日市場屋敷留蔵47　女房里よ43　女子はる５　女子なか８　男子嘉助10　女子さん12男子嘉蔵25　女房さよ17　父甚十郎72　女房さよ67

合拾人内男四人女六人

高七拾七文

但六日市場屋敷覚兵衛跡地親類組合預地　　親類留蔵

与頭伊惣平

高拾弐文　外一三拾弐文　本地西磐井平泉村之内高館江入作

⑤ **慶応二年（1866）下伊沢下衣川村高人数御改帳控**（衣川村1989「衣川村史Ⅴ」所収）

同宗同寺（曹洞宗雲際寺）

一六日市場屋敷　留蔵56　一女子はる14　一女子なか17　一男子栄吉19　一男子嘉蔵34　一女房さよ26　一孫女子りよ４
合七人　男三人　女四人
高七拾七文
但六日市場屋敷覚兵衛跡地親類組合預地　　親類留蔵
与頭伊惣平
高拾弐文　外一三拾弐文　　本地西磐井平泉村之内高館江入作

⑥「近世の衣川」（佐々木1995）　引用原文献未見

「享保二十一年（1736年）押切にて六日市場屋敷甚平の畑が木材御蔵として利用されている所を見る」との記述がある。

六日市場屋敷の開始年代

細田遺跡では78点の近世陶磁器が出土しており、これらは六日市場屋敷に伴うものと考えられる。出土の近世陶磁器の中で最も古手のものは大橋編年Ⅱ期の肥前産磁器（92・93・110～112）である。実年代は1630～1650年頃と推測される。近世陶磁器の他に16世紀代の中国産白磁皿（44）や大窯期の陶器皿（46・47）も出土しているが、17世紀第１四半期にブランクがあり、近世六日市場屋敷には連続しない遺物と判断される。よって、近世陶磁器の年代観からは六日市場屋敷の開始年代は1630～1650年頃、17世紀第２四半期と推測される。六日市場屋敷の存在を文献上で確実に確認できるのは、寛文２年（1662）の検地帳である。17世紀第２四半期に成立した屋敷であれば、寛永17～18年（1640～1641年）に仙台藩領内で行われた寛永検地の検地帳への記載があるはずである。下衣川村の寛永十八年（1641年）検地帳は５冊の内３冊が残っているが、３冊の中に六日市場屋敷の記載はなく、おそらくは欠損の２冊の内に記載されていたと推測される。

掘立柱建物との関係

近世民家の母屋と推測される掘立柱建物跡はＳＢ６・ＳＢ11・ＳＢ32の３棟がある。これらは六日市場屋敷の母屋と推測される。出土遺物等から古い順にＳＢ11→ＳＢ６→ＳＢ32と推測される。想定に過ぎないが、１棟の存続年代を40年間とすると、ＳＢ11（1640年～1680年頃）、ＳＢ６（1680～1720年頃）、ＳＢ32（1720～1760年頃）となり、それ以降、礎石建物の母屋に建て替えがおこなわれたと想像される。

墓石ついて

上記の人数改帳等に記された人名、年齢・近世墓石に記された没年から、六日市場屋敷の系図を推測する。１代を25年、没年を60才と仮定するが、もとより根拠のあるものではなく、代数も含め、近世屋敷の流れを知るための目安的なものと理解していただきたい。

初代（1610～1670年頃）→二代藤左衛門（1635～1695年頃）→三代（1660頃～1727年）→四代甚平（1685頃～1745年頃）→五代（1710頃～1785年）→六代（1735頃～1814年）→七代（1760頃～1820年頃）→八代甚十郎（1786～1857）→九代留蔵（1811～1872）→十代嘉蔵（1833～）

「②下衣川村風土記御用書出（安永七年）」の「代数在之御百姓」には15人（九代～四代）が名を記されているが、この中に「六日市場屋敷」は含まれていない。しかし、下衣川村寛永検地帳（３/５冊の残存で）には63の屋敷が記され、安永年間までは通常５代程度は経過すると考えられるのに、「代数在之御百姓」は15人にすぎない。これは「代数在之御百姓」の掲載には何らかの選択基準の存在を覗わせる。よって「代数在之御百姓」に「六日市場屋敷」が無い点は問題がないと考える

そして、推測した系図と文献にみられる記載から、墓石と人名の相関関係を推測する。墓石の最古級のものは９の享保14（1729）年と10の享保12（1727）年である。屋敷の成立が17世紀第２四半期と

すれば、この享保の墓石は年代的考えて、初代のものではなく、三代のものと推測される。元禄以前は墓石の造立は一般的ではなく、初代・二代の墓石が存在しないのは不自然ではない。もしくは、紀年銘のない19の五輪塔が初代の墓標の可能性も考えられる。「③天保７年人数御改帳」には当主甚十郎の両親の記載はなく、天保７年以前に両親は亡くなっていることがわかる。よって墓石１（天保15年)、墓石２（天保14年）は甚十郎の両親の墓石ではない。墓石１・２は別世帯ではあるが、「同（六日市場）屋敷覚之丞66　女房はる66」の墓石である可能性が高い。また十代と推測される「嘉蔵」と妻「さよ」の墓石がない。これは明治17年の「墓地及埋葬取締規則」布告以降に公葬墓に葬られたためと推測される。また墓石の中に四代のものが見あたらない。四代の妻のものと推測される墓石15は、倒れて半ば埋もれている状況を掘り起こしたものである。その周囲には倒れ埋もれた墓石状の石がまだ見受けられ、その中に四代の墓石が存在すると推測される。墓石の16～18は佐藤家の墓石とは少し離れた位置に立ち、佐藤家直系の墓石ではないと認識されているという。

墓石番号	戒　　名	人名など	生没年など
1	微量禅定門	覚之丞	明和８年(1771)～天保15年(1844)　74歳没
2	冬林禅定尼	はる	明和８年(1771)～天保14年(1843)　73歳没
3	雲外了相禅定門	八　代 甚十郎	天明６年(1786)～安政４年(1857)　72歳没
4	不明	さよ？	寛政３年(1791)生まれ　慶応２年(1866)以前に死去　墓石の紀年銘不明
5	眞相道空信士	九代留蔵	文化８年(1811)～明治５年(1872)　62歳没
6	眞法妙性禅定尼	里よ	文化12年(1815)～安政６年(1859)　45歳没
7	不明	七代か	墓石の紀年銘不明　　天保７年(1836)以前に没
8	・・禅定尼	七代妻か	天保７年(1836)以前に没　　文化３？年(1806？)没か
9	妙白禅定尼	三代妻か	享保14年(1729)没
10	道観禅定門	三代か	享保12年(1727)没
11	天眞露白禅定門	六代か	文化11年(1814)没
12	桂岸妙秋禅定尼	六代妻か	天明２年(1782)没
13	頭覚了禅定門	五代か	天明５年(1785)没
14	端相了然禅定尼	五代妻か	安永２年(1773)没
15	香林禅定尼	四代妻か	宝暦13年(1763)没
16	浄心・・・	不明	不明　　佐藤家の直系ではないと思われる
17	不明	不明	元文３年(1738)没　　佐藤家の直系ではないと思われる
18	不明	不明	宝暦10年？(1760？)没　佐藤家の直系ではないと思われる
19	なし	不明	五輪塔　六日市場屋敷初代、二代の可能性がある

引用文献

衣川村　　1988「衣川村史Ⅳ」資料編３
衣川村　　1989「衣川村史Ⅴ」資料編４
佐々木元實　1995「近世の衣川」

4　「接待館」・「六日市場」の伝承について

（1）「接待館」の伝承

遺跡名にもなっている「接待館」の伝承についてまとめる。また、伝承が記された地誌類ではないが、「接待」の名称が記される検地帳も紹介する。

①**「寛永十八年下衣川村検地帳」　寛永18年（1641年）**（佐々木元實　1995「近世の衣川」所収）

せったや屋敷　仁左衛門

②**「寛文弐年下衣川村御検地帳」　寛文２年（1662年）**（衣川村1988「衣川村史Ⅳ」所収）

氏家主水分せったい屋敷彦八郎前惣右衛門

③**「平泉舊跡志」　相原友直　宝暦10年（1760）**（平泉町史編纂委員会1993「平泉町史資料編二」所収）

一　攝待所　下衣川にあり

④**「封内風土記」　田辺希文　安永元年（1772年）**（鈴木編1975「復刻版仙台叢書」所収）

號雪踏屋舘　傳伝　藤原秀衡母堂所居

⑤**「膽澤郡下膽澤下衣川村風土記御用書出」　安永６年（1777年）**（衣川村1988「衣川村史Ⅳ」所収）

一　古館　五ツ

一　セツタヤ館　攝待　南北三拾壱間　東西六拾四間

秀衡朝臣御母公居館之由申伝候当時畑に罷成居候事

一　屋敷名　八拾四

一　並木屋敷　四軒・・・・

一　攝待屋敷　一軒

⑥**「岩手県管轄地誌」　明治13年（1880年）**（衣川村1989「衣川村史Ⅴ」所収）

古跡　古館　接待舘ト伝フ本村ノ東南字七日市場二アリ昔時藤原秀衡ノ母之レ二居レリト云フ

⑦**「衣川の古跡」　千葉孫左衛門編　明治20年（1887年）前後**（衣川村1984「衣川村史Ⅲ」所収）

接待館跡　藤原秀衡の母堂慈善のため往来の旅人に接待せし所なり

⑧**「衣川誌」　梅尾禅牛　明治30年（1897年）前後**（衣川村1984「衣川村史Ⅲ」所収）

接待舘跡　字六日市場にあり。即ち神明社の北東、関の桜の側にしてその広袤東西六十四間南北三十一間あり。此舘は往古衣の関の跡にして后年秀衡朝臣の母公が居舘を構えり。又一説に藤原朝臣三衡には佛法に帰依するを以て、母公も其意に随い、我は一層往来の行人へ接待を施さんと夫々の施物を往来する行人へ與施せし所なりと。故に接待舘と名付けたると云う。

（2）「接待館」の名称・伝承の変遷

地誌類に記されたものではないが1641年の①「寛永十八年下衣川村検地帳」には「せったや屋敷　仁左衛門」の記載があり、17世紀前半にはすでに接待館に関連する「せったや」の地名が存在していたことがわかる。そして、1662年の②「寛文弐年下衣川村御検地帳」には「氏家主水分せったい屋敷」と記され、「せったや」＝「せったい」であることを理解させ、呼称にバラェティがあることもわかる。

各文献に記される名称をみると、1777年の⑤「風土記御用書出」以前は「せったや」の名称が多いことが分かる。このことから、本来地元では「せったや」と呼称していた可能性が想定される。ただし、1662年の②「寛文弐年検地帳」では「せったい屋敷」、1777年の⑤「風土記御用書出」の屋敷名

では「攝待屋敷」が記され、「せったい」の呼称も混在していた可能性もある。

おそらくは、「平泉舊跡志」編纂の際に「せったや」を相原友直が「接待」と解釈して旧跡として理解し、「摂待」の漢字を当てはめたのであろう。しかし、この「接待」の文字はすぐには影響が及ばす、1772年の④「封内風土記」、1777年の⑤「風土記御用書出」には旧来の「せったや」の名称を使用されている。その後、近代に至る過程で、「せったい」の読みと「攝待」の文字が定着していったと想定される。

地誌類に登場する最も古い事例は、③「平泉舊跡志」(1760) である。これには旧跡名と位置のみ記され、具体的な伝承内容には触れられていない。そして1770年代の④「封内風土記」、⑤「風土記御用書出」では「藤原秀衡の母の居所」という旨が記されるが、名称起源などの説明はない。1880年の⑥「岩手県管轄地誌」でも④「封内風土記」、⑤「風土記御用書出」の記述に準拠した内容になっている。そして、1887年前後に編纂と推測される⑦「衣川の古跡」では「藤原秀衡の母堂慈善のため往来の旅人に接待せし所なり」と「接待」の名称の起源説明も付されるようになる。さらに1897年前後の⑧「衣川誌」では「此舘は往古の衣の関跡にして・・」と「衣関」との関連が記され、秀衡の母の行為もより具体的に記されている。このように時代が下るにつれ、伝承の内容が付加されていく過程が明瞭に現れている。

接待館伝承一覧

番号	文書名	年　代	名　称	伝承内容
①	寛永十八年下衣川村検地帳	1641年	せったや屋敷	検地帳
②	寛文弐年下衣川村御検地帳	1662年	せったい屋敷	検地帳
③	平泉舊跡志	1760年	攝待所	名称・位置のみ記載
④	封内風土記	1772年	雪踏屋舘	秀衡母の居所の旨記載
⑤	下衣川村風土記御用書出	1777年	セツタヤ館	規模・秀衡母の居所の旨記載
⑥	岩手県管轄地誌	1880年	接待舘	秀衡母の居所の旨記載
⑦	衣川の古跡	1887年前後	接待館	「接待」の名称起源説明
⑧	衣川誌	1897年前後	接待舘	秀衡母の居所、衣関との関係、「接待」の名称起源説明

想定される伝承の変遷は、

①17世紀前半　「せったや」と呼称される地名があり、屋敷名にもなる。
②17世紀後半　「せったや」から変化し「せったい」の呼称も併用される。
③1760年頃　「平泉舊跡志」編纂の際、「せったや、せったい」に「攝待」の文字を当てる。
④1770年代　「せったや」、「攝待」の名称が併存し、秀衡母の居所との伝承が付加される。
⑤18C末～幕末　「攝待」の名称が定着し、「せったや」は廃れる。
⑥近代以降　「攝待」名称起源説明が付加される。

近代以降に「接待館」の名称起源説明が付されるのは、謡曲「攝待」が関与していると思われる。謡曲「攝待」は、義経主従が奥州に下る途中、佐藤継信、忠信の母である老尼が設けた山伏攝待の宿に泊まり、佐藤兄弟の忠勇を老尼に語り聞かせる物語で、佐藤兄弟の母の心情も描かれている（大曽根他編1998)。近世に成立した「攝待」の名称と「(秀衡の) 母の居館」という伝承が、謡曲「摂待」を連想させ、「旅人を摂待する館、故に接待館」との名称説明が創作されたのではないだろうか。

（3） 六日市場の伝承

遺跡名にもなっている「六日市場」の伝承についてまとめる。

①「**寛文弐年下衣川村御検地帳**」 **寛文２年（1662年）**（衣川村1988「衣川村史Ⅳ」所収）

六日一場屋敷　藤左衛門　氏家主水分

②「**膽澤郡下膽澤下衣川村風土記御用書出**」 **安永６年（1777年）**（衣川村1988「衣川村史Ⅳ」所収）

一　舊跡

一　古宿、一　宿、一　六日市場、一　八日市場、一　七日市場　右五ヶ所何茂往古之駅馬之由申傳候

③「**衣川の古跡**」 **千葉孫左衛門編　明治20年（1887年）前後**（衣川村1984「衣川村史Ⅲ」所収）

旧市場跡　六日市場、七日市場、八日市場、十日市場等の跡あり、傳へいふ。平泉全盛の頃の市街地なりと（或は云ふ安倍氏の頃の市場なりと）

④「**衣川誌**」 **梅尾禅牛　明治30年（1897年）前後**（衣川村1984「衣川村史Ⅲ」所収）

この地あたりは藤原氏全盛の頃、子弟宗族の邸宅を此処に構うるに当り、市廛商戸軒を聯ね甍を並べ、街衢四通五通にして頗る殷賑を極めたりしが、后幾多の星霜を経るに従い蕩然として地を佛い、今は幾点の茅屋其の間に散在するを見るのみ。

（4）「六日市場」伝承の変遷

六日市場に関する伝承は「接待館」に比較すると少ない。1662年の①「寛文弐年下衣川村御検地帳」から「六日一場」の地名が存在したことが示される。寛永検地帳には「六日一場屋敷」の記載はないが、出土遺物等から、六日市場屋敷の成立は寛永年間までさかのぼると推測され、17世紀前半から「六日市場」の地名が存在したと推測される。1777年の②「下衣川村風土記御用書出」では他の市場地名とともに「何茂往古之駅馬之由申傳候」とされ、時代等は説明されていない。それに対して1887年前後③「衣川の古跡」では「傳へいふ。平泉全盛の頃の市街地なりと（或は云ふ安倍氏の頃の市場なりと）」と時代についての言及が付加される。そして、さらに1897年前後の④「衣川誌」では文飾を多くし、具体的な記述になり、時期も「藤原氏全盛の頃」と特定される。このように時期が下るつれ、内容が付加されていく過程は、「接待館」の伝承と共通するものである。

引用・参考文献

小原千枝　2006「安倍氏、奥州藤原氏と衣川」『歴史論集第Ⅱ期第八集』 宮城学院女子大学人間文化学科
大曽根章介他編　1998「日本古典文学大事典」 明治書院
衣川村　1984「衣川村史Ⅲ」資料編２
衣川村　1988「衣川村史Ⅳ」資料編３
衣川村　1989「衣川村史Ⅴ」資料編４
佐々木元實　1995「近世の衣川」
鈴木武夫編　1975「復刻版仙台叢書　封内風土記第三巻」 宝文堂
平泉町史編纂委員会　1993「平泉町史」資料編二

5　六日市場、細田、接待館遺跡出土かわらけの年代観

（1）は　じ　め　に

六日市場・細田・接待館遺跡では12世紀のかわらけが合計130kg 793.5g出土した。ここでは、これらの実年代について考察する。かわらけの実年代を推測する場合、個々の法量、器形からは半世紀程度の実年代推測は可能であるが、それよりも詳細な年代を推測する場合、同時性があり、ある程度の数量がある一括資料の法量の平均値を用いるのが有効と考える。今回の出土かわらけの中で、この条件にある程度あてはまる資料は、接待館遺跡ＳＤ３トレンチ（ＶＫ4ｆ付近）出土かわらけと接待館遺跡ＳＤ１東側出土かわらけが挙げられる。

なお、六日市場・細田・接待館遺跡出土のかわらけは、平泉出土のものと胎土、器形が全く同じであり、平泉のかわらけ編年をそのまま使用することができる。筆者は以前に平泉のロクロかわらけの変遷について以下のように考察した（羽柴　2001）。

時期区分・・６時期に分類　１期（1100年頃～1115年頃）、２期（1116年頃～1130年頃）、
３期（1131年頃～1145年頃）、４期（1146年頃～1160年頃）、５期（1161年～1175年頃）、
６期（1176年～1189年頃）・・この時期区分は前後を含んだ目安的なものである。

口径変化・・小さいものから序々大きくなり、ピーク後に序々に小さくなる。
１期13.7cm程度、ピーク４期15.0cm程度、６期13.7cm程度

底径変化・・小さいものから大きいものに変化１期5.6cm程度、６期7.7cm程度

器高変化・・高いものから低い物になるが、３期以降ほとんど変化なし。

底径／口径の比率・・１期0.41程度　２期0.42程度　３期0.45程度　４期0.48程度
５期0.51　程度　６期0.53程度

この時期区分の中で手づくねかわらけが平泉に導入されるのは４期と考えられる。ロクロかわらけの形態変遷、年代観、手づくねかわらけの導入の時期に関しては、多くの研究者の見解と共通するものである。

（2）ＳＤ３・ＶＫ４ｆトレンチ出土かわらけ

ＳＤ３のＶＫ４ｆ付近に設置したトレンチから出土したかわらけは104点を図化・掲載している。その構成は、ロクロ小型かわらけ15点、ロクロ大型かわらけ23点、手づくね小型かわらけ26点、大型手づくねかわらけ40点である。これらのかわらけは出土状況から、一括廃棄に近い状況と推測され、時間的には、ほぼ同一時期と判断できるものである。そして、手づくねかわらけの存在は、これらが12世紀後半以降に属することを示している。

ロクロ大型かわらけ（23点）の口径平均は14.0cm、底径平均は7.2cm、器高平均は3.5cmである。底径／口径の比率は0.51になる。これを平泉のロクロかわらけ編年（羽柴　2001）に当てはめると、「５期　1161年～1175年頃」の形態にいずれの数値も当てはまる。

大型手づくねかわらけ（40点）の口径平均値は13.9cmである。手づくねかわらけの口径変遷は大きいものが古く、小さいものが新しいという共通理解がなされている。平泉遺跡群における最終段階とされる柳之御所遺跡52ＳＥ８（岩手県教委　2001）の大型手づくねかわらけの口径平均値は13.4cmである。よって口径の値からすると、「1161～1175年頃」の年代に矛盾はない。そして、柳之御所遺跡ＳＥ８などの手づくねかわらけは口縁部の形態は、Ｄ３（１段ナデ面取りなし）が卓越するが、本事

例では２段階以上調整形態であるＤ４（１段ナデ　口唇部面取りあり）、Ｃ３（２段ナデ　口唇部面取りなし）、Ｃ４（２段ナデ　口唇部面取りなし）が合わせて87％と高率を占めており、最終段階の様相とは異なっており、「1161～1175年頃」の年代観を裏づけている。

小型かわらけはロクロ、手づくねのいずれも、時期差による形態変化が読み取りにくい傾向にある。しかし、上記の年代観を逸脱する要素は見うけられない。また、手づくね小型の口縁部形態が２段階以上の調整のものが85％を占めていることは、大型手づくねと同様に「５期　1161～1175年頃」の年代観を裏づける事象である。

以上の点から、ＳＤ３のＶＫ４ｆ付近トレンチ出土のかわらけの実年代は「５期　西暦1161年頃～1175年頃」と解釈するのが妥当と考える。

（３）ＳＤ１東かわらけ

ＳＤ１の東の埋土中から出土したかわらけは117点を掲載した。掲載した他に、ＳＤ１東からは手づくねかわらけ36,590g、ロクロかわらけ11,060gが出土している。

ロクロ大型かわらけ（19点）の口径平均は13.9cm、底径の平均は7.3cmである。器高平均は3.3cmである。底径／口径の比率は0.52になる。この数値を平泉のロクロかわらけ編年（羽柴　2001）に当てはめると、「６期　1176年～1189年頃」に一応あてはまる。ただし、口径平均値の7.3cm、底径／口径の比率0.52は、「６期」の中でも、「５期」に近い数値であり、底径の平均7.3cmは「５期」の形態にあてはまる数値である。よって、ＳＤ１東のロクロ大型かわらけはこれはＳＤ３ＶＫ４ｆトレンチ出土のロクロかわらけよりもやや新しい６期の初頭頃の年代にあてはまる。また、大型手づくねかわらけ（38点）の口径平均値は13.8cmである。これはＳＤ３ＶＫ４ｆトレンチ出土の手づくねかわらけ平均値よりも１mm小さい値である。手づくね大型かわらけの年代は口径の値から、ＳＤ３ＶＫ４ｆトレンチ出土かわらけの手づくねかわらけよりもやや新しく、平泉最終期の52ＳＥ８の13.4cmよりは古い年代を想定できる。これは上記のロクロ大型かわらけの年代観と同様の見解となる。よってＳＤ１東出土のかわらけは、「６期　1176年～1189年頃」の初頭頃、５期に連続する時期が一応導きだされる。

しかし、注意しなければならないのは、「ＳＤ１東出土」としたかわらけの一括性から求めた平均値に有効性があるか否かということである。「ＳＤ１東」とした出土範囲は広いもので、層位もＳＤ３ＶＫ４ｆトレンチのような明確なまとまりがあるわけではなく、その一括性、同時性は大部緩いものと考えるべきであろう。ＳＤ１東出土のロクロ大型かわらけの底径／口径の比率をみると、0.44～0.62とかなり幅があり、手づくね大型かわらけでも口径の最大が16.0cm、最小は12.4cmで、その幅は3.6cmにも及ぶ（ＳＤ３ＶＫ４ｆトレンチは15.2cm～12.7cm）。これらの点から、ＳＤ１東出土のかわらけは時間幅がある程度広いと考えられる

また、ＳＤ１東の大型手づくねかわらけの中で口径13.5cm以下のものは38点中13点を占め、平均値から推測した「６期の初頭」よりも新しい年代のかわらけを含む可能性もある。逆に、口径15cm以上の手づくねかわらけも３点存在し、「５期　1161年～1175年頃」以前に属するものを含む可能性も推測される。このように、ＳＤ１東出土のかわらけは、一括性、同時性が低く、その時期を細かく限定することは難しく、大まかに「12世紀後半」という年代を提示するのが妥当である。平均値がＳＤ３ＶＫ４ｆトレンチよりも、やや新しい年代観を示すということは、ＳＤ１東出土かわらけの中に「６期　1176年～1189年頃」の一群が含まれる可能性を高くしている。

他の六日市場、細田、接待館遺跡出土のかわらけは、詳細な年代を推測するために必要な、一括性や個体数のまとまりがないものであり、多くは大まかに「12世紀後半」の年代観を提示しておく。

（4）12世紀前半代に属するかわらけ

六日市場、細田、接待館遺跡出土のかわらけのほとんどは12世紀後半に属すると推測されるが、12世紀前半に属すると推測されるかわらけも存在する。

①・・六日市場遺跡ＳＤ１出土かわらけの小型ロクロかわらけ（26）、大型ロクロかわらけ（27・28）は形態から12世紀前半に属すると考えられる。27の底径／口径の比率は0.34であり、「１期　1100年～1115年頃」の比率に近い。単体の数値から実年代を推測するのは困難であるが、27は「１期　1100年～1115年頃」に属する可能性がある。大型かわらけ（28）は底部を欠くが、小型かわらけ（26）とともに形態から「１期　1100年～1115年頃」に属する可能性が推測される。これらの３点は六日市場遺跡ＳＤ１からの出土であるが、ＳＤ１からは12世紀後半のかわらけも出土しており、遺構の年代を直接示す資料ではない。しかし、衣川北岸の12世紀遺跡群の開始時期を示す遺物として注目される。

②・・接待館遺跡ＳＤ２出土かわらけ

ロクロ大型かわらけ1228、1229は形態から12世紀前半に属すると考えられる。どちらも口縁部を欠くが、底径がそれぞれ5.0cm、5.7cmと、「１期　1100年～1115年頃」ないし「２期　1116年～1130年頃」、の数値に近い。詳細な時期判定までは困難であるが、少なくとも12世紀前半に属すると判断できる。ＳＤ２からは12世紀後半のロクロ小型かわらけ（1227）や手づくねかわらけ片が出土しており、直接遺構の年代を示す遺物ではないが、接待館遺跡の堀で囲まれる施設の構築年代を示唆する資料といえる。

（5）ま　と　め

- 六日市場遺跡ＳＤ１、接待館遺跡ＳＤ２からは12世紀前半のかわらけが出土している。特に六日市場遺跡ＳＤ１のかわらけは「１期　1100年～1115年頃」の年代が想定される。これらは衣川北岸の12世紀遺跡群の開始年代を示すものといえる。
- ＳＤ３のＶＫ４ｆ付近トレンチから出土したかわらけは「５期　1161年～1175年頃」に属する一括性の高いものと推測される。
- ＳＤ１東出土かわらけは、時間的な幅があり、その時期は「12世紀後半」とするのが妥当である。この中には「６期　1176年～1189年頃」に属するものも含まれている可能性が高い。
- 以上、六日市場、細田、接待館遺跡出土のかわらけは、時期による量の多少や、明確なセットが不明瞭な点も存在するが、12世紀初頭から平泉最終末期までものが存在する見通しが得られた。

引用文献

羽柴直人　2001「平泉遺跡群のロクロかわらけについて」『岩手考古学13号』岩手考古学会
岩手県教育委員会　2001「柳之御所遺跡　第52次調査概報」第111集

6　12世紀の接待館遺跡について

（1）接待館遺跡の現況

12世紀の接待館遺跡は堀で囲まれた施設である。ここでは調査区域外も含めて、12世紀の景観復原をおこない。その性格について検討する。

接待館遺跡は東西120m、南北65mの範囲を幅７～９ｍの外堀（ＳＤ１）で囲まれる。南辺は衣川により浸食されており、外堀は存在せず直接衣川に接している。外堀の北辺外側には幅９ｍの土塁が残存する。外堀で囲まれる範囲のほぼ中央に、幅３～４ｍの内堀（ＳＤ３）で囲まれる内部区画が存在する。内部区画の南辺は衣川に直接接し、内堀は存在しない。内部区画は東西35m、南北19mの範囲である。内部区画の範囲内にでは主殿に相応しい規模の掘立建物は検出されていない。

（2）12 世紀の景観の想定復元

上記のとおり、接待館遺跡の南辺は衣川によって浸食されている。浸食された規模は不明であるが、外堀（ＳＤ１）で囲まれる範囲が方形に近い形状であったと仮定すると、約55mが浸食されたことになる。浸食の程度はともかくとして、衣川の流路を考慮すると、南辺には外堀が存在せず、直接衣川に接していたと推測される。

現況では堀の北辺の外側のみに土塁が残存するが、遺構分布の状況、昭和20年代までの残存状況の聞き取り、古地籍図の読み取りから堀の内外に土塁が存在していたと判断できる。ＳＤ６は外堀西～北辺内側の土塁を除去した際に形成された痕跡と判断されるが、この痕跡から推測すると、土塁の底辺幅は約11mと読み取れる。なお、聞き取り、地籍図から存在を判断できる土塁は東～北辺の範囲であり、西辺については確認できない。しかし遺構分布状況から西辺の外堀内外にも土塁が存在していた蓋然性が高い。西辺の土塁は近代の地籍図作成以前に崩れ、痕跡が残っていなかったのであろう。また、土塁の開口部の有無については判別する事象を見出せず状況は不明である。いずれにせよ、接待館遺跡は外堀と二重の土塁で囲郭される、閉塞性の強い施設であったと推測される。

ＳＤ２は外堀ＳＤ１西から枝分かれする幅約３ｍの堀である。ＳＤ２はＳＤ１と同時存在と推測される。ＳＤ２の東側埋土には人為堆積と推測される土が存在するが、ＳＤ１の土塁が崩れた可能性も考えられる。ＳＤ２が枝分かれする付近のＳＤ１は西側に屈曲する変化のある走行になっている。このＳＤ１の屈曲部に橋がかかり、入口施設である可能性が想定される。ＳＤ２も入口通路に伴う側溝の可能性も考えられる。しかし、この部分のＳＤ１は未掘であり、また、ＳＤ２と対になる溝が存在すべき位置は調査区域外になっており、その存在は未確認で、入口施設存在は想定の範疇を出ない。今後の調査で確認すべき事項である。

内堀ＳＤ３は南側が開くコの字の形状で検出されており、南辺は衣川により浸食されている。ＳＤ３で囲まれる内部区画がほぼ方形であったと仮定すると、区画の約３/５は失われていることになる。上述のように残存する範囲内においては、区画中央部におさまる主殿となるべき大規模な掘立柱建物は検出されていない。浸食された範囲を考慮に入れても、主殿級の建物の存在の余地は少ないと思われる。これは接待館遺跡の性格、用途を考える上で重大な事象と言わざるを得ない。

内堀ＳＤ３の大半は未掘であるが、トレンチ調査から北辺西半～西半の埋土に多量のかわらけが廃棄されていることが明らかになった。このかわらけは1161年～1175年頃の一括性の高いものと推測される。また、かわらけを含む土層の堆積位置から、かわらけの廃棄はＳＤ３が２/３以上埋没した段

階でおこなわれていることが読み取れる。つまり、内部区画ＳＤ３は1161年～1175年頃には半ば以上埋もれており、堀の区画としての機能は衰えていたことになる。そして、かわらけの廃棄により、埋没はさらに進み、ＳＤ３はわずかな窪み状になってしまう。

（３）12世紀接待館遺跡の性格

最初に記しておくが、接待館遺跡の調査は未了であり、現況で遺跡の性格を確定するのは時期尚早である。特に、外堀ＳＤ１、内堀ＳＤ３の掘り下げが未了であり、入口施設の検出がなされていないことや、衣川に接する南側が浸食により失われている点、衣川北岸地区の埋蔵文化財調査が進展しておらず、周辺の状況が不明である点なども推測を困難にしている。ここでは居館である可能性、宗教施設である可能性などを提示するが、結論を導き出すには今後の追加調査が必要となる。

（４）居館である可能性

平泉遺跡群の柳之御所遺跡（平泉町教委　1994　他）と福島県会津坂下町の陣が峯城（会津坂下町教委2005）は、大規模な二重堀で囲まれる12世紀の居館である。どちらも平面形は自然地形に沿った不整な形状で方形を基調とはしていない。接待館遺跡の平面形も楕円形に近い不整な形状で、外堀は二重堀になっていないが、土塁が外堀の内外二重に存在し、外観的には柳之御所遺跡、陣が峯城の二重堀に類似している。そして、数量の多少はあるが、内部でかわらけを使った儀礼がおこなわれていること、中国産磁器、国産陶器を所有している点など、出土遺物の点でも柳之御所遺跡、陣が峯城と共通しており、接待館遺跡が居館である可能性を支持する要素が存在する。また、接待館遺跡で12世紀前半に属するかわらけが出土しており、施設の成立が12世紀前半である可能性が高いが、柳之御所遺跡、陣が峯城の成立時期も12世紀前半とされ、成立の年代観は共通している。

接待館遺跡の性格を居館とすることに疑問の要素としては、中核となる主殿級の建物が見出せないという点がある。内堀ＳＤ３で区画される内部に主殿が無いのは、居館の構造としては理解し難いものである。また、柳之御所遺跡堀内部に多数みられる井戸、トイレ状土坑が全く存在していない点も疑問点としてあげられる。このように接待館遺跡は居館と解釈する要素も有するが、主殿となるべき建物の欠損など、居館と解釈するには疑問点も有している。

（５）宗教施設である可能性

平泉遺跡群において、土塁、堀で囲まれる施設は居館に限定されず、宗教施設にも堀、土塁が存在する。具体的には無量光院跡、白山社遺跡（平泉町教委　2004）がある。無量光院の外郭は基本的には方形を基調とするが、白山社遺跡の平面形はやや不整な形状で、接待館遺跡の形状に類似する要素が見出せる。

白山社遺跡は北辺と東辺に幅10m以上の堀が存在し、その内側に土塁が存在している。残存状況が明瞭でない部分もあるが、土塁は南側が開いたコの字型であったと推測される。西辺の堀の有無は判明していないが、南面には堀、土塁が存在せず、鈴沢低地を利用した石積み護岸を有する苑地が存在したことが確認されている。苑地には橋脚がみられ、参道から施設内部への橋が存在している。このように白山社遺跡は北、東、西が堀・土塁で閉塞され、南面が池に面し開いており、入り口が存在した施設と捉えられる。これは北、東、西が土塁、堀で閉塞され、南面が水を湛える衣川に面する接待館遺跡と共通する共通する景観である。

無量光院は寺院であることは明確であるが、白山社遺跡の性格は確定していない。白山社遺跡は平

泉遺跡群拠点地区の中央に位置しており、考えられる候補としては、平泉鎮守の「中央総社」が上げられる（羽柴　2001）。吾妻鏡文治五年九月十七日、「寺塔已下注文」には「一、鎮守事　中央惣社、東方日吉・白山兩社、南方祇園社・王子諸社、西方北野天神・金峯山、北方今熊野・稲荷等社也、悉以摸本社之偽」（平泉町史編纂委員会　1993　所収）とあり、都市平泉の鎮守として、中央と四方に神社が配されたことが記されている。

白山社遺跡がこの「中央総社」であるとすれば、平泉の北方に位置する接待館遺跡は北方鎮守である「今熊野・稲荷等社」に相当するという発想が生じる。ちなみに、接待館遺跡から東方約400mの位置には以前、熊野神社が存在しており（昭和22年の台風で流されたという）、北方鎮守今熊野社の擬定地の一つになっている。また、接待館遺跡調査区西側に隣接する神明社には鰐口があり（現在行方不明）、「奉敬白御寶前　大檀那沙彌主道重　大檀那沙彌主明用　檀那沙彌光秀　禰宜兼屋矢大正宣安　貞治乙巳四年卯月十五日　敬白（銘文は下衣川風土記御用書出による　衣川村　1998　所収）との銘があり、貞治４年（1365年）に調査区隣接地に神社が存在したことを示しており、後身（接待館遺跡が神社であった場合の）の神社の可能性も考えられる。

しかしながら、接待館遺跡が神社であるとするには種々の問題点がある。まず、調査検出された出土遺物、遺構には神社を想定させる要素が存在していないことがあげられる。居館を想定する場合でも疑問になったのと同様に、内部区画の中に社殿と想定される建物が検出されていない。社殿は礎石建物であった可能性も高いが、礎石を据えるための基壇、あるいはその痕跡も検出されていないのである。また、白山社遺跡と同様に南面を入り口と想定した場合、衣川に橋を架けるのは技術的にかなり厳しいものがあり疑問が生じる。また、根本的な問題として、白山社遺跡が神社の遺跡であるのか検証がなされていない点があげられる。ここでは神社について検討したが、寺院と想定した場合でも調査では、それを想定させる要素が存在しないのは同様である。

（６）周辺遺跡との関連

接待館遺跡の性格は明らかにできないが、堀・土塁で囲まれた範囲が明瞭な施設であることは確かである。注目されるのは、接待館遺跡の区画の外部である細田遺跡、六日市場遺跡、衣の関道遺跡でも同時代（12世紀）の遺構、遺物が確認されていることである。これは12世紀に接待館遺跡が単独で存在したのではなく、周囲にも広範囲に同時代の種々の施設が存在したことを示している。衣川北岸に様々な施設で構成される12世紀の遺跡群が存在することが明らかになったのである。その広がり、内容を明らかにするには、衣川北岸を対象とした広域的な考古学的調査が必要とされる。

引用文献

会津坂下町教育委員会　2005 「陣が峯城跡」第58集
衣川村　　1988 「衣川村史Ⅳ」資料編３　所収膽澤郡下膽澤下衣川村風土記御用書出
平泉町史編纂委員会　1993 「平泉町史」資料編二　所収吾妻鏡
平泉町教育委員会　1994 「柳之御所跡発掘調査報告書」第38集
平泉町教育委員会　2004 「白山社遺跡第3次発掘調査報告書」 第89集
羽柴直人　　2001 「平泉を構成する地割」『都市・平泉―成立とその構成―』日本考古学協会2001年度盛岡大会

報告書抄録

ふりがな	むいかいちば・ほそた・せったいかんいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	六日市場・細田・接待館遺跡発掘調査報告書
副書名	一関遊水地事業衣川左岸築堤工事関連遺跡発掘調査
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第523集
編著者名	羽柴直人・島原弘征・川又　晋
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL（019）638-9001
発行年月日	2008年3月17日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
むいかいちばいせき 六日市場遺跡	いわてけんおうしゅうし 岩手県奥州市 ころもがわくおおあざしもころも 衣川区大字下衣 がわあざむいかいちば 川字六日市場	03215	NE65 -2346	39度 00分 22秒	141度 06分 08秒	2005.04.11 ～ 2005.09.29	5,500㎡	一関遊水地事業衣川左岸築堤工事に伴う緊急発掘調査
ほそたいせき 細田遺跡	いわてけんおうしゅうし 岩手県奥州市 ころもがわくおおあざしもころも 衣川区大字下衣 がわあざむいかいちば 川字六日市場	03215	NE65 -2334	39度 00分 22秒	141度 06分 02秒	2005.04.11 ～ 2005.09.29	5,400㎡	
せったいかんいせき 接待館遺跡	いわてけんおうしゅうし 岩手県奥州市 ころもがわくおおあざしもころも 衣川区大字下衣 がわあざなのかいちば 川字七日市場	03215	NE65 -2343	39度 00分 22秒	141度 05分 58秒	2004.10.01 ～ 2004.11.11 2005.06.01 ～ 2005.11.16	10,600㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
六日市場遺跡	集落跡	12世紀 弥生 古墳？	掘立柱建物　3棟 溝跡　4条 土坑　5基 その他の遺構2基	弥生土器　黒曜石製石器　かわらけ(12C) 陶磁器(12C) 鉄製品(短刀、はさみ)	大規模な12世紀の2条の溝を検出　古墳時代？の黒曜石製石器出土
細田遺跡	集落跡	12世紀 近世	掘立柱建物　41棟 溝跡　8条 土坑　29基 その他の遺構2基	かわらけ(12C) 陶磁器(12C) 近世陶磁器 石製品	12世紀の四面庇掘立柱建物を検出
接待館遺跡	居館跡？	古代 12世紀 中世	掘立柱建物　55棟 溝・堀跡　6条 土坑　22基	土師器、須恵器 かわらけ、陶磁器(12C) 中世陶磁器　鉄製品	幅約7mの堀で囲まれる居館？跡　幅3mの堀で囲まれる内部区画あり 多量の12世紀のかわらけ出土

要約

六日市場遺跡、細田遺跡、接待館遺跡は奥州市衣川区に所在し、衣川北岸の河岸段丘に立地する。いずれの遺跡からも12世紀代の出土遺物、遺構が検出され、衣川南岸に展開する奥州藤原氏関連の平泉遺跡群との関係が推察される。中でも接待館遺跡は大規模な堀で囲まれた居館？跡であり、内部からは非常に多量のかわらけが出土した。このかわらけの出土状況から接待館遺跡は儀式、儀礼を繰り返しおこなう特殊な施設であったことが覗われる。これらの遺跡の状況は12世紀平泉の都市構造を明らかにする重要な資料を提示することになる。

写　真　図　版

南から

西から

写真図版１　航空写真（衣川地区）

衣川遺跡群　全景

接待館遺跡　南から

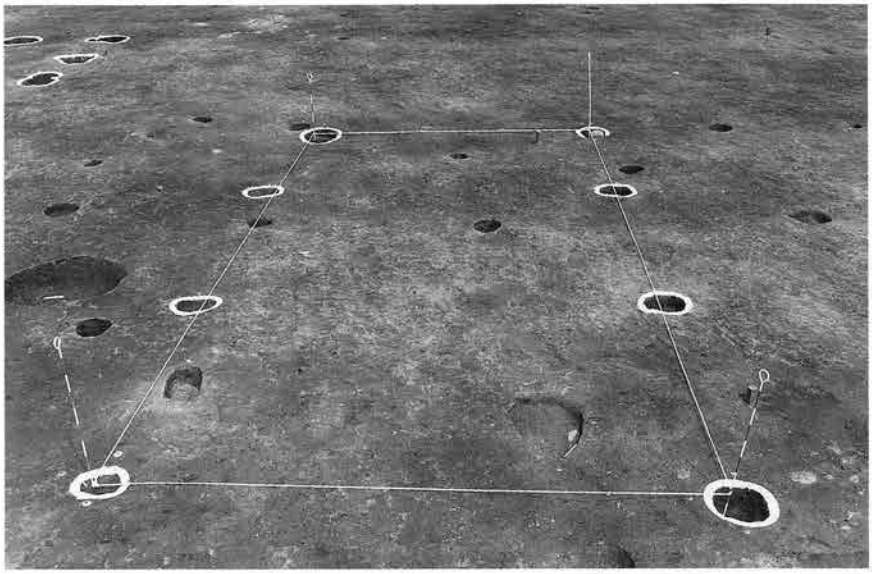
写真図版２　航空写真（衣川地区・接待館）

接待館遺跡　直上

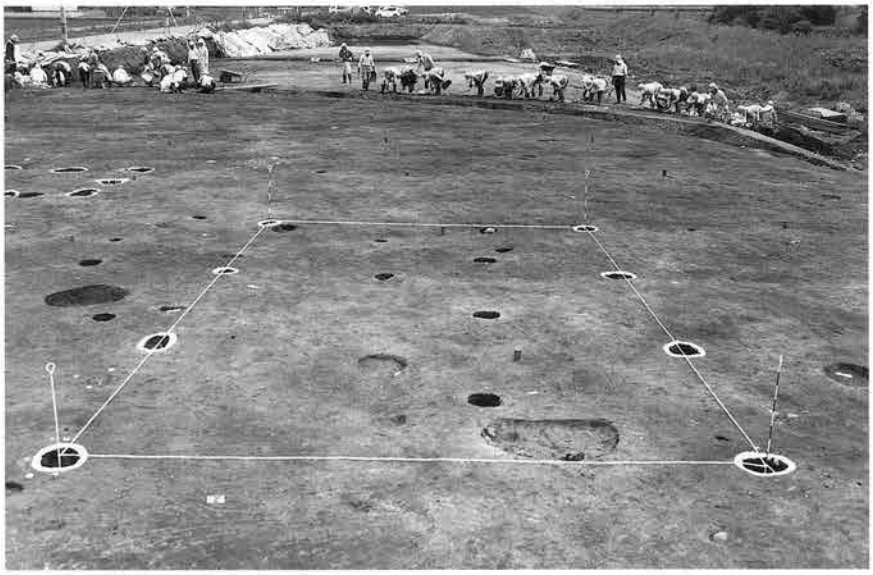
細田・六日市場遺跡　直上

写真図版３　航空写真（接待館遺跡・細田・六日市場遺跡）

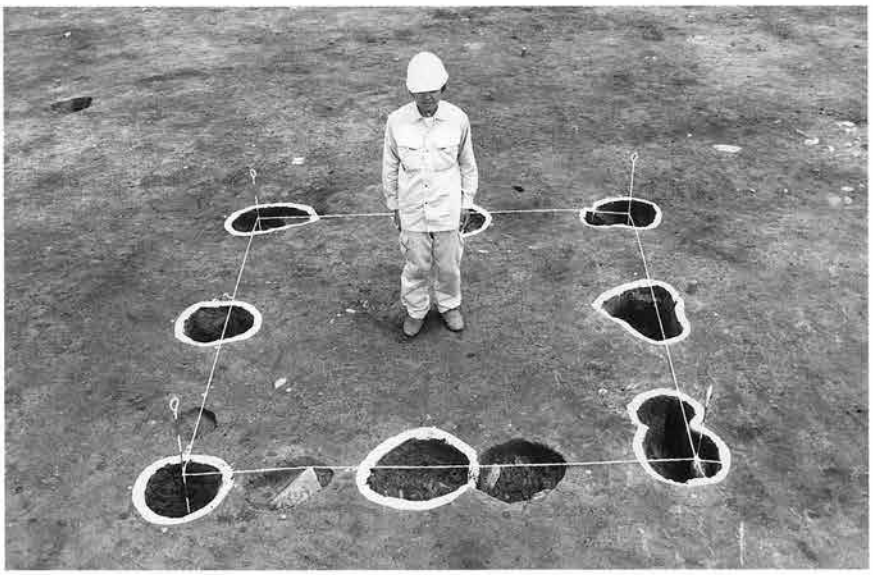
写真図版４　接待館遺跡SD３かわらけ出土状況



SB１　平面（西から）



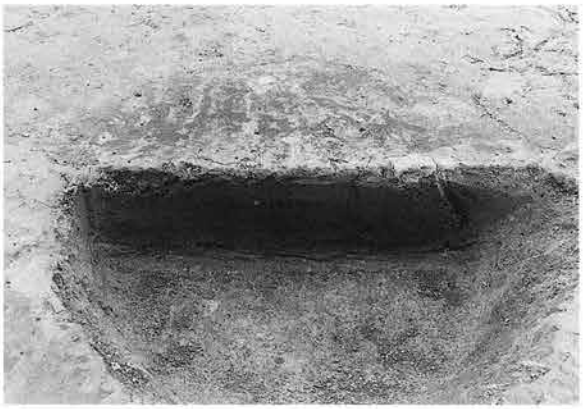
SB２　平面（西から）



SB３　平面（南から）

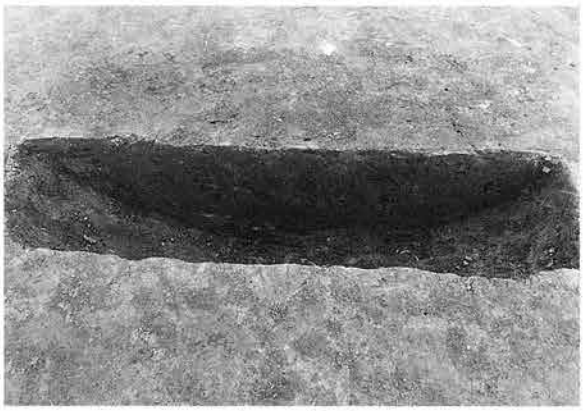
写真図版５　SB１～３平面

SK１　平面（南から）



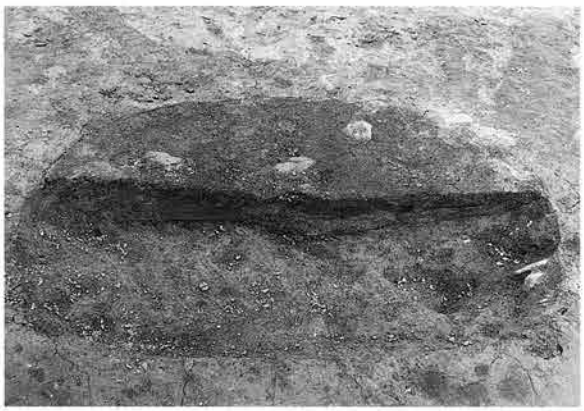
SK１　断面

SK２　平面（南から）



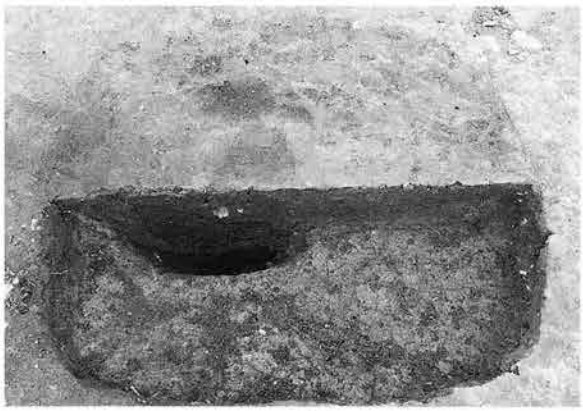
SK２　断面

SK３　平面（南から）



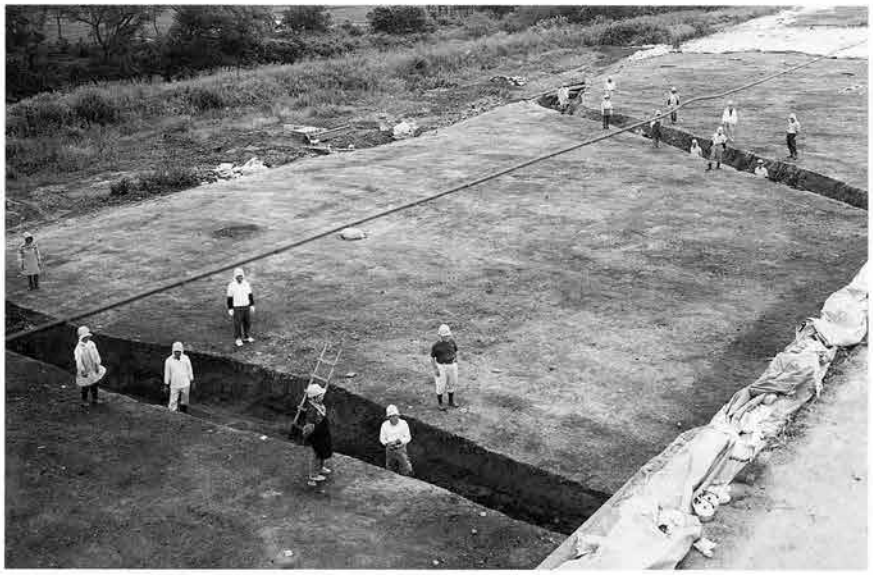
SK３　断面

SK４　平面（南から）



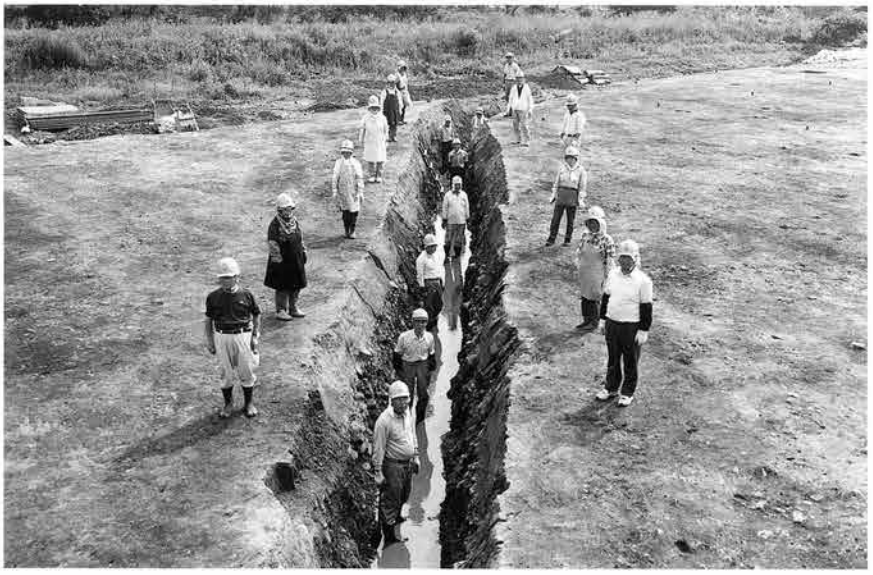
SK４　断面

写真図版６　SK１～４



SD１・２　平面（北東から）

SD１　平面（北から）



SD２　平面（北東から）

写真図版７　SD１（１）・２（１）

平面（北東から）

村道北平面（南西から）

断面（北東から）

a−a'断面

b−b'断面

c−c'断面

e−e'断面

g−g'断面

写真図版８　SD１（２）

SD１　f−f'断面

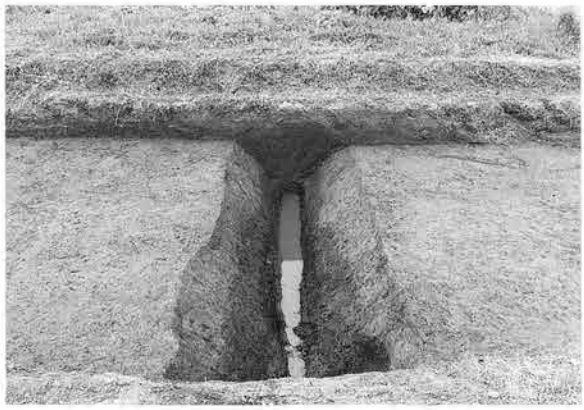
SD１　かわらけ出土状況①

SD１　かわらけ出土状況②（VP５g）

SD１　かわらけ出土状況③

SD１　馬骨出土状況

SD２　平面（北から）



SD２　村道北平面（南から）

SD２　断面（北から）

写真図版９　SD１（３）・２（２）

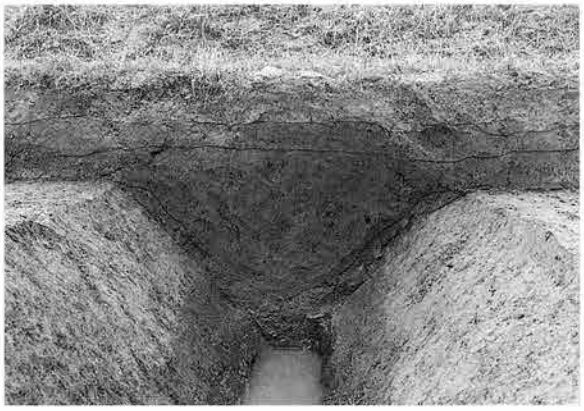
SD２　a−a'断面

SD２　b−b'断面

SD２　c−c'断面

SD２　d−d'断面

SD２　e−e'断面



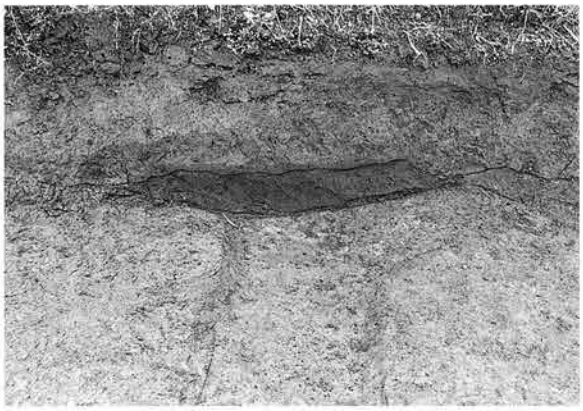
SD２　f−f'断面

SD３　平面（南から）

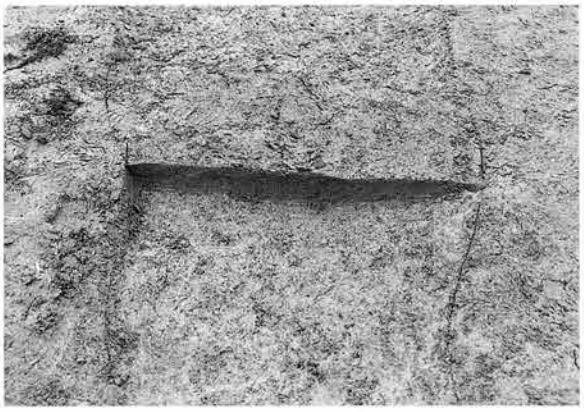
SD３　断面

写真図版10　SD２（３）・３

SD４　平面（西から）



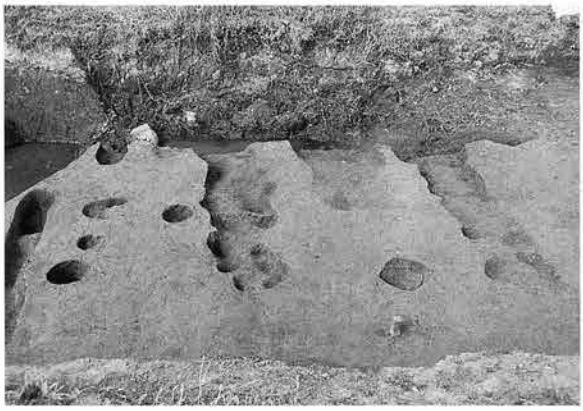
SD４　a－a'断面



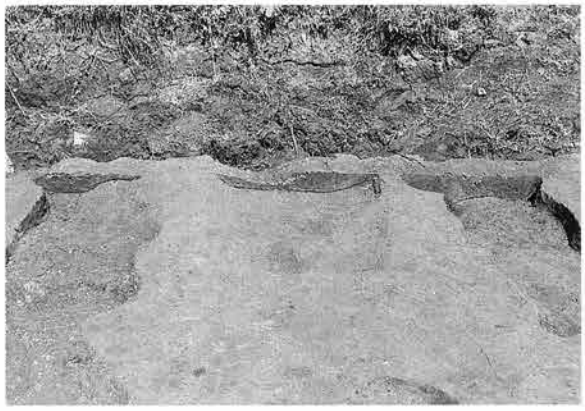
SD４　c－c'断面

SX１　平面（南東から）

SX１　断面



SX２　平面（南から）



SX２　断面

写真図版11　SD４・SX１・２

P6（SB1）

P10（SB1）

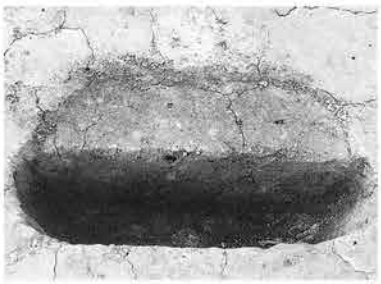
P27（SB1）

P29（SB1）

P34（SB1）

P45（SB1）

P12（SB2）


P23（SB2）

P25（SB2）

P64（SB2）

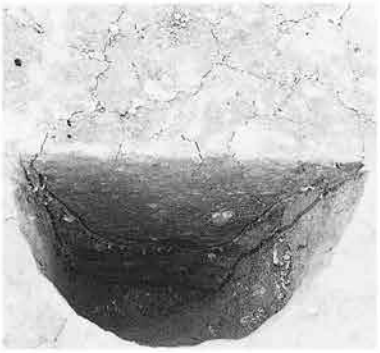
P66（SB2）

P67（SB2）

写真図版12　SB1・2柱穴

P38（SB３）

P42（SB３）

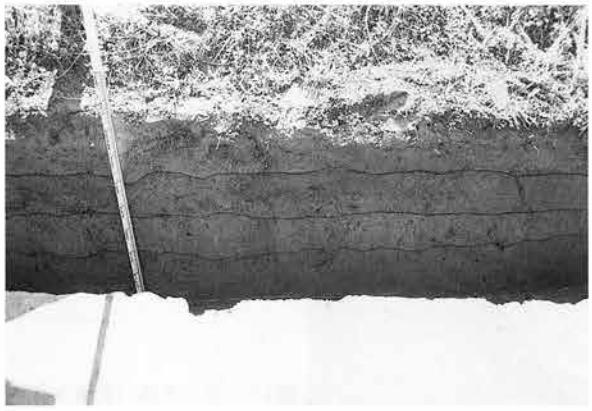


P47（SB３）

P54（SB３）

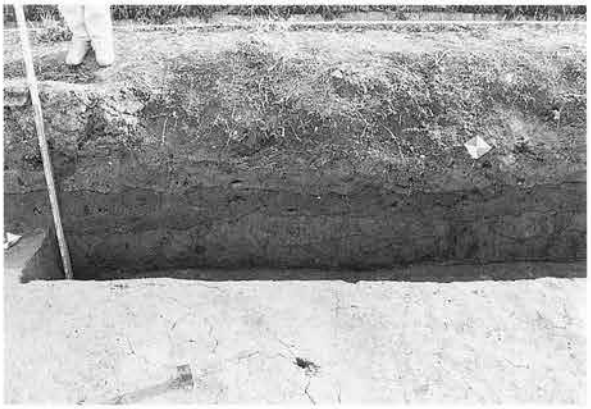
P55（SB３）

P56（SB３）



Ⅵ Robグリッド付近

Ⅵ Q０iグリッド付近

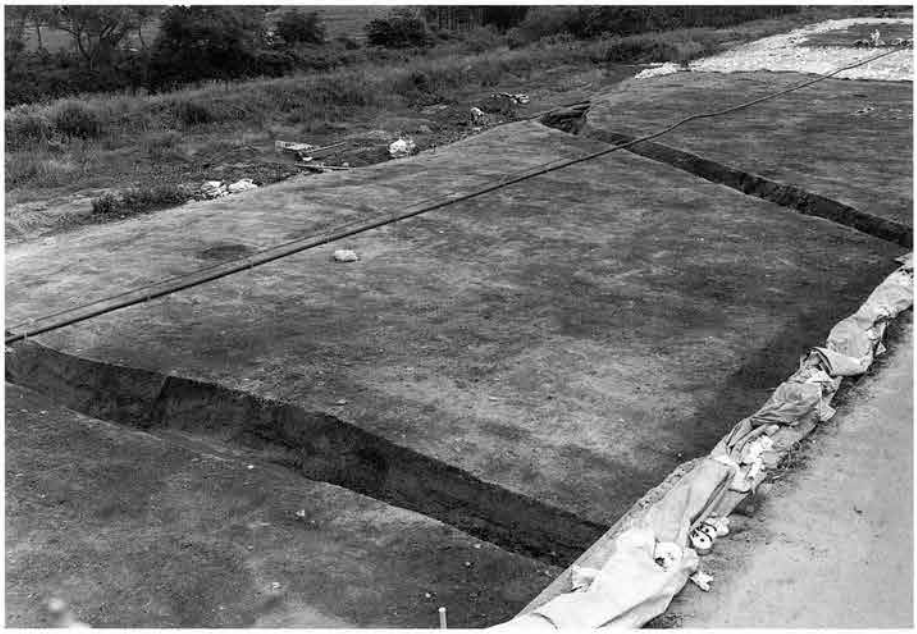


Ⅵ Q０dグリッド付近

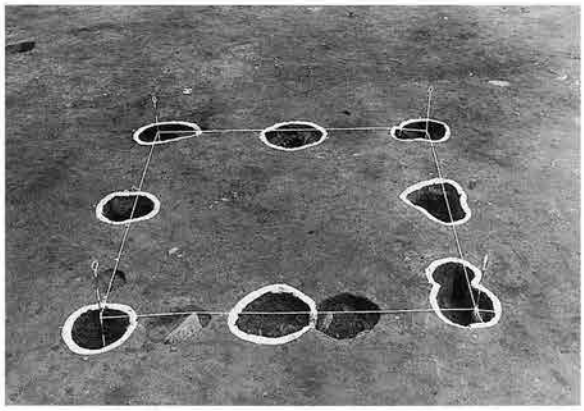
ⅤP８jグリッド付近

写真図版13　SB３柱穴・基本土層

調査区全景（東から）



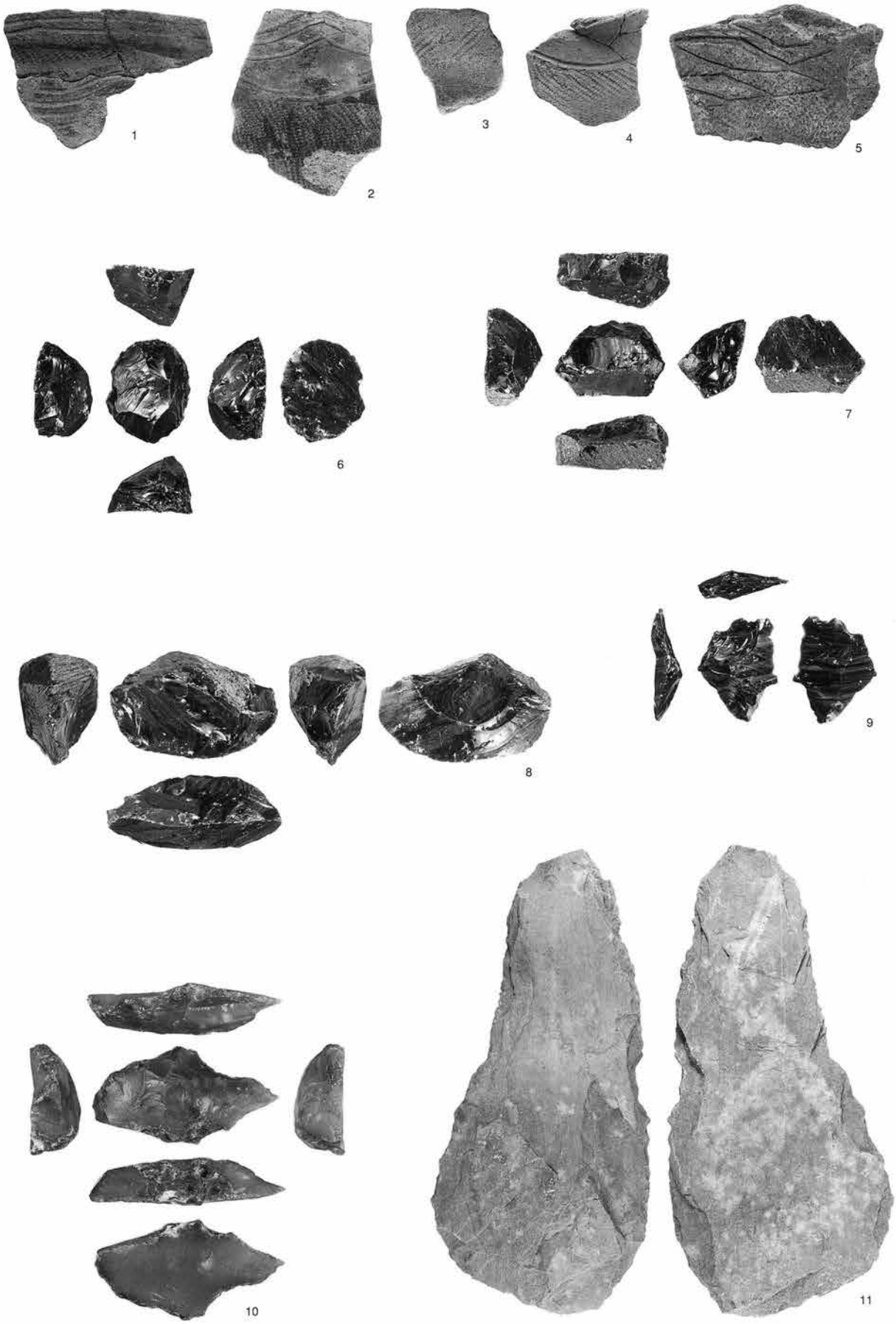
SD１・２　平面（北東から）



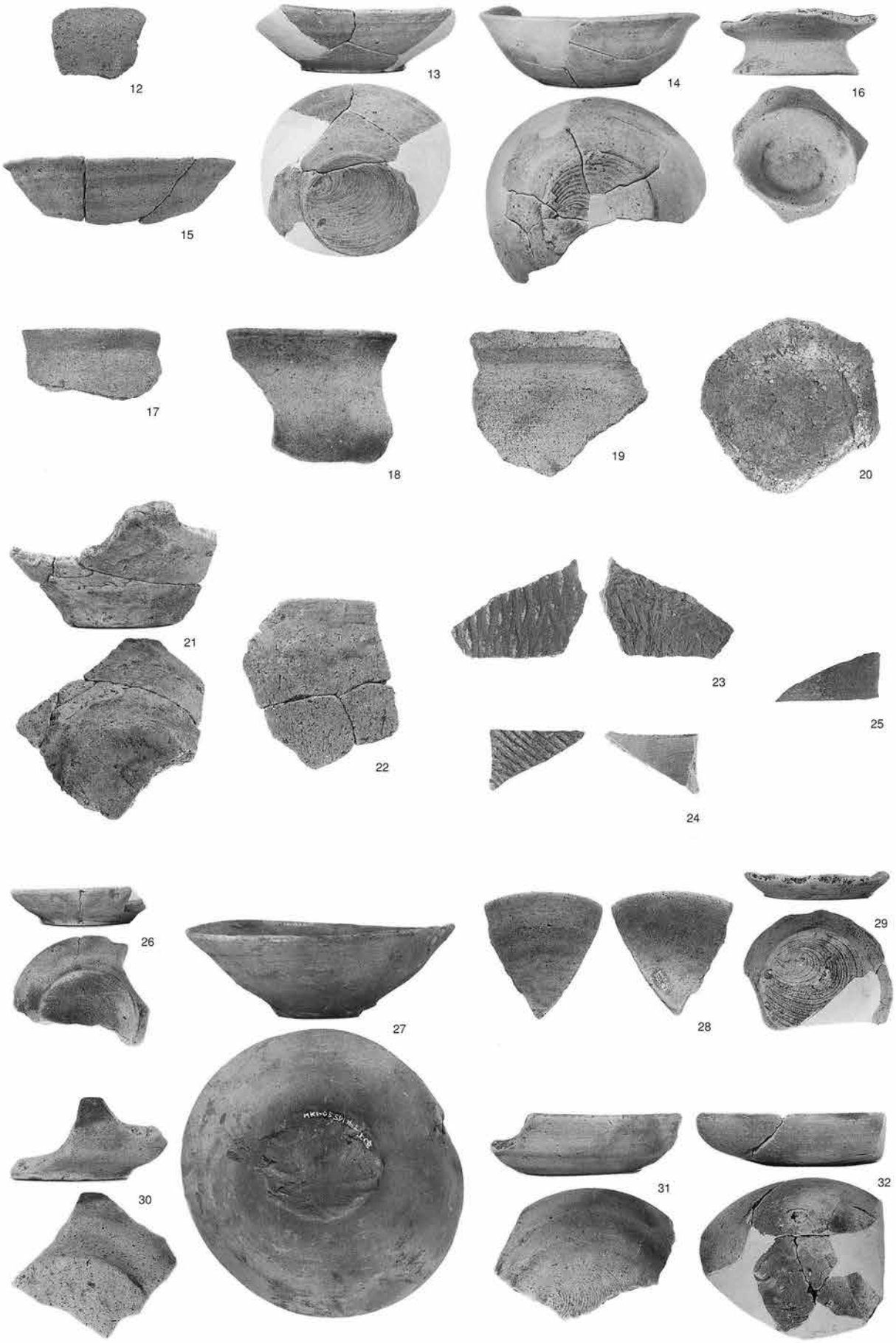
SB３　平面（西から）

作業風景

写真図版14　調査区全景等

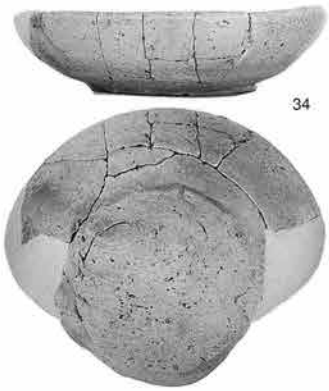


写真図版15　弥生土器・石器



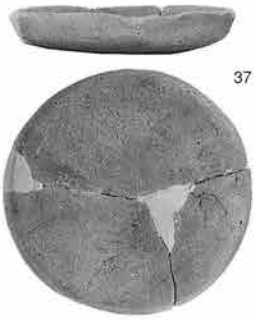
写真図版16　土師器・須恵器　かわらけ①

33


34

35

36

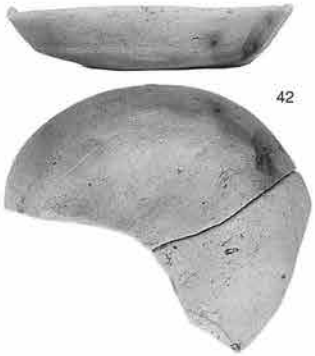

37

38

39

40

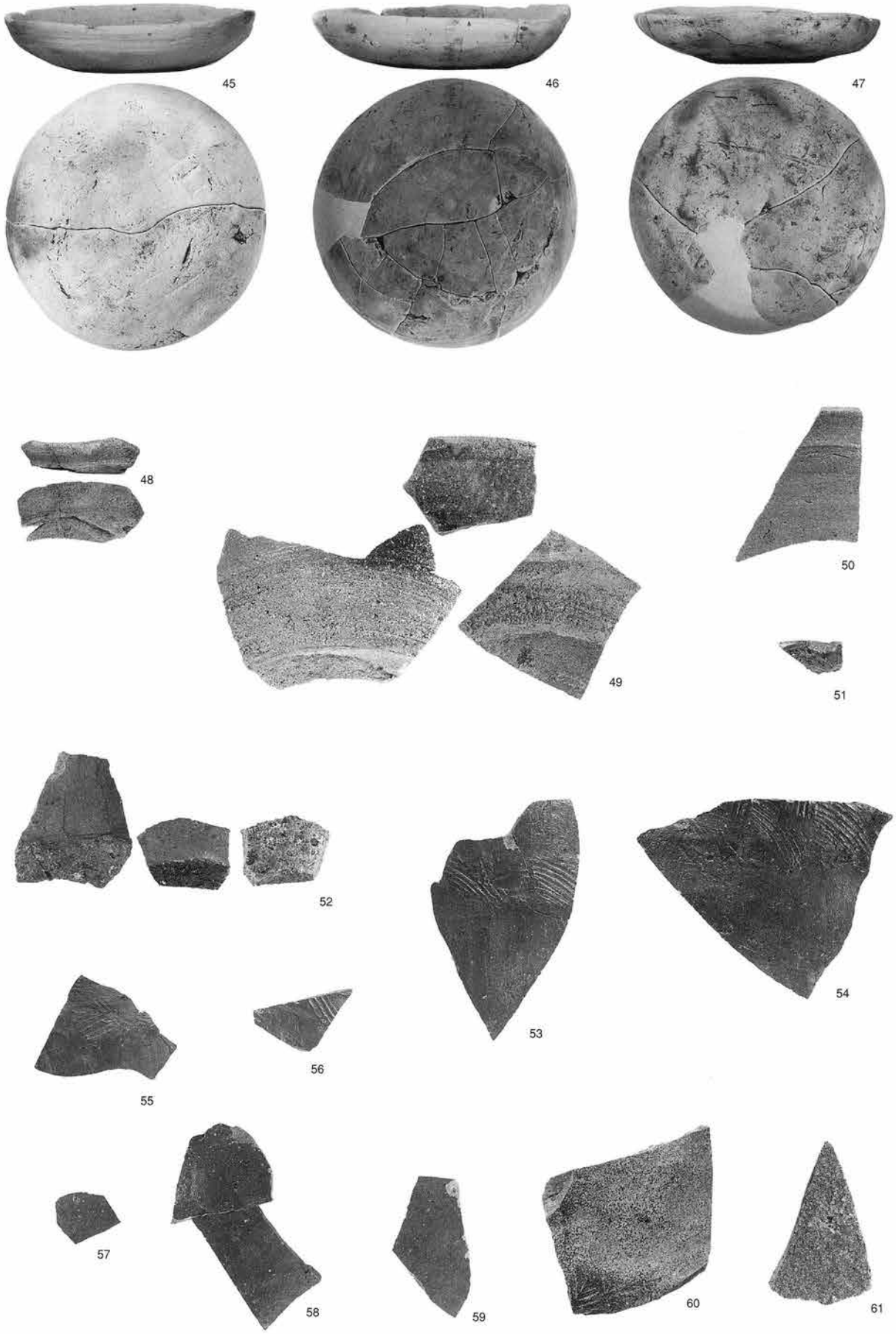
41


42

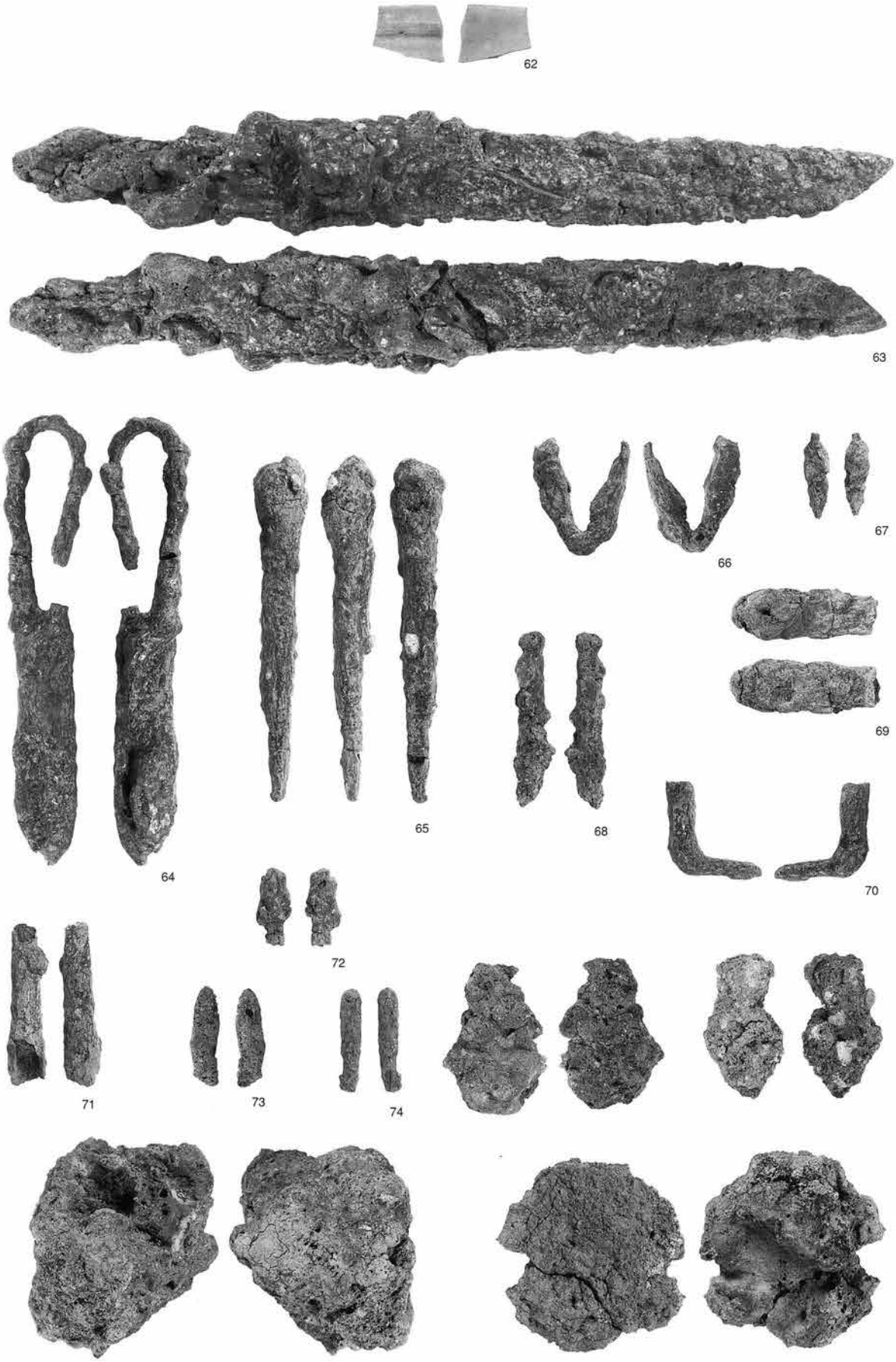
43

44

写真図版17　かわらけ②

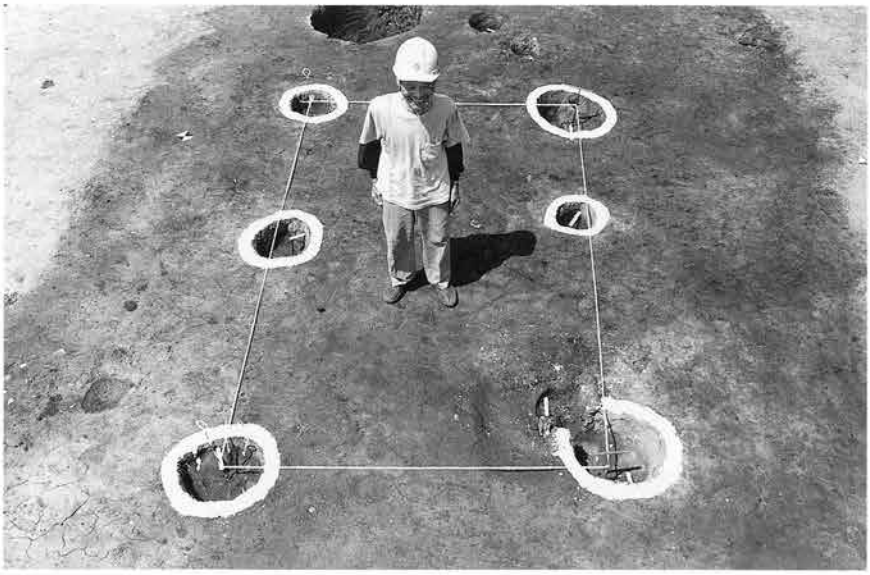


写真図版18　かわらけ③、国産陶器

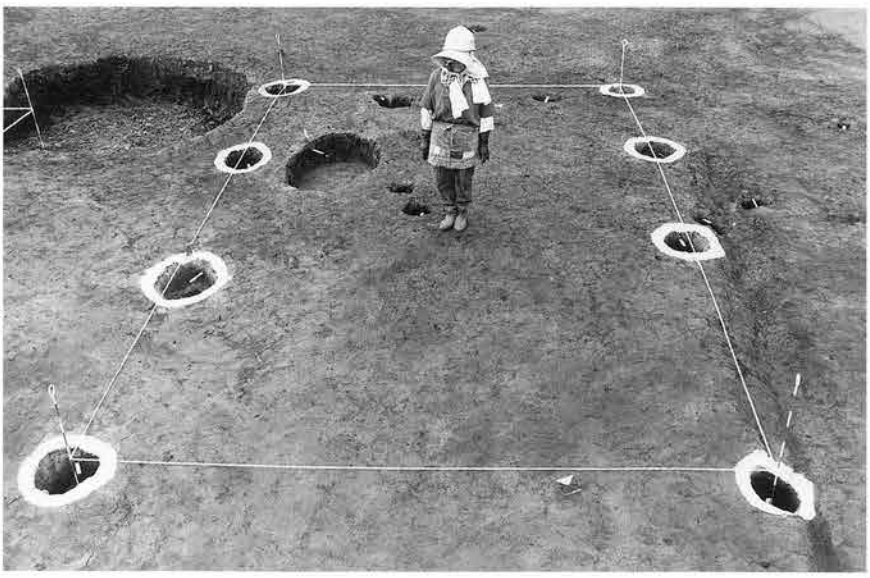


写真図版19　中国産磁器、鉄製品

写真図版20　馬骨・歯



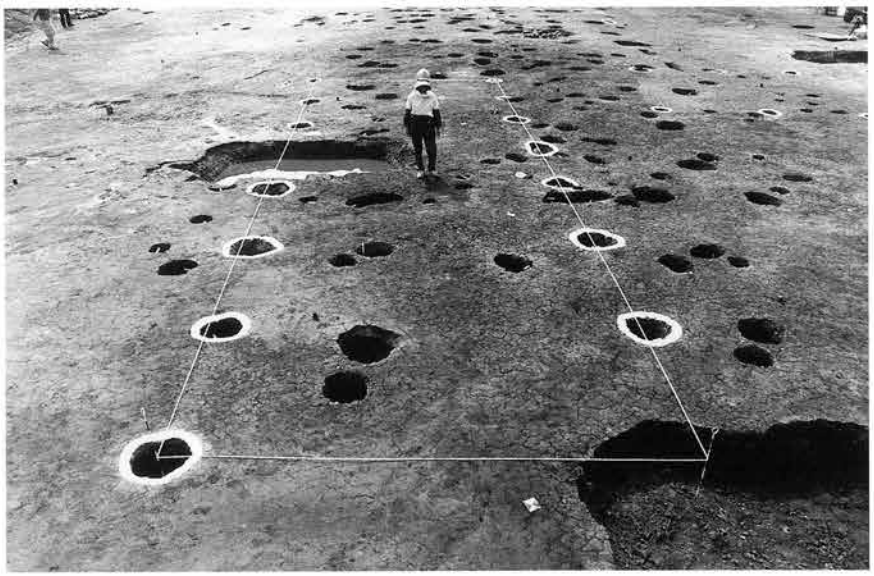
SB１　平面（東から）



SB２　平面（南から）

SB４　平面（西から）

写真図版21　SB１・２・４平面

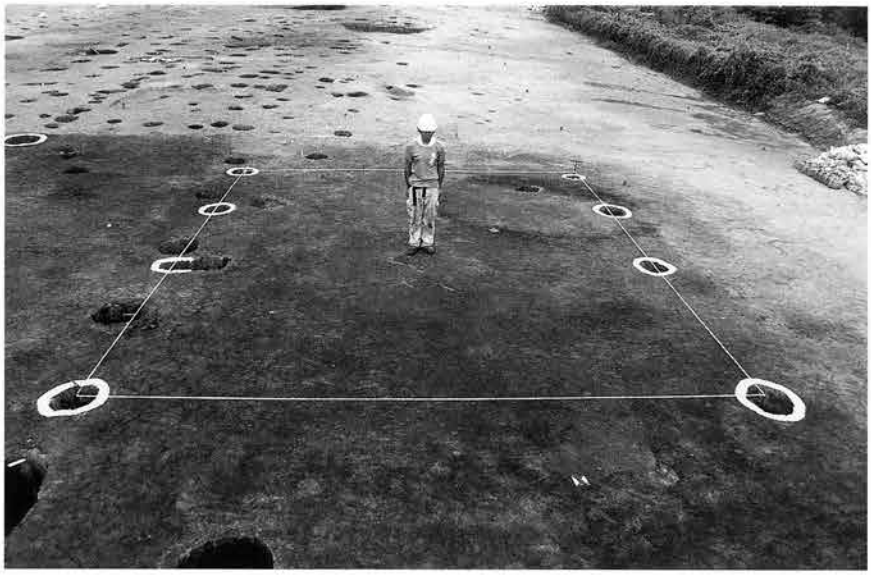


SB5　平面（東から）

SB6　平面（西から）

SB8　平面（西から）

写真図版22　SB5・6・8平面

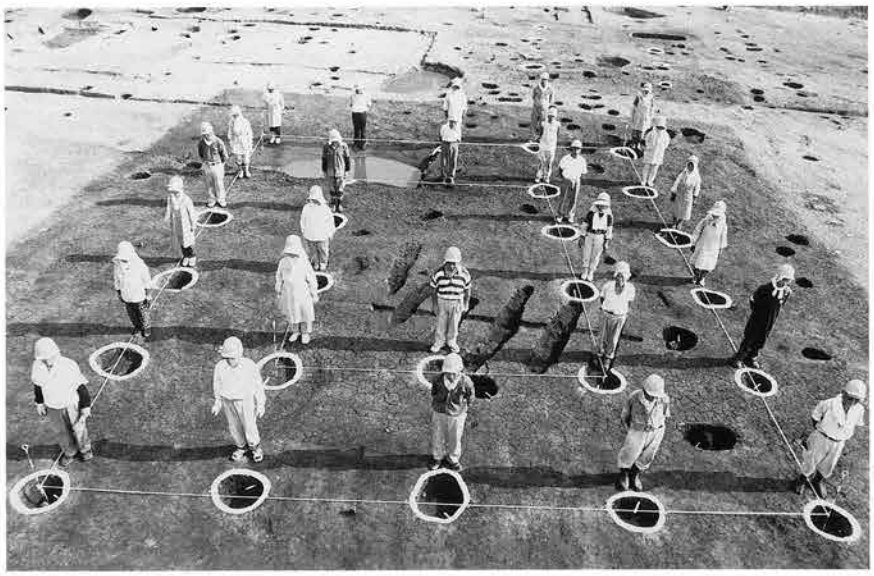


SB9　平面（西から）

SB10　平面（南から）

SB11　平面（東から）

写真図版23　SB９～11平面

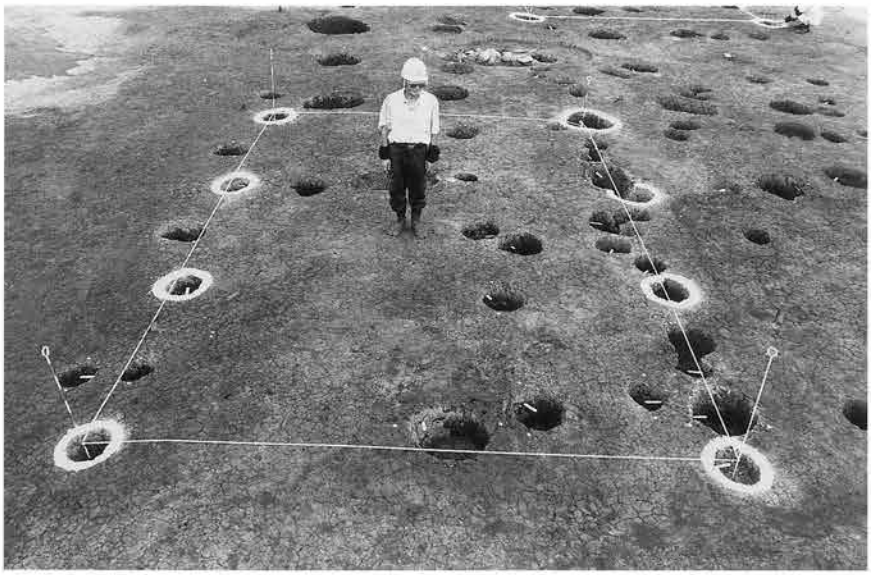


SB12　平面（北から）

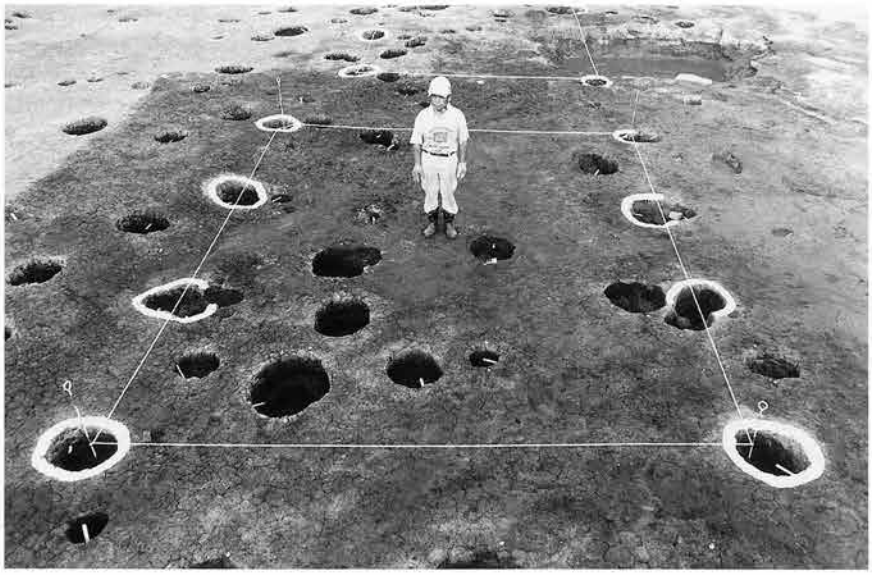
SB12　平面（北から）

SB13　平面（東から）

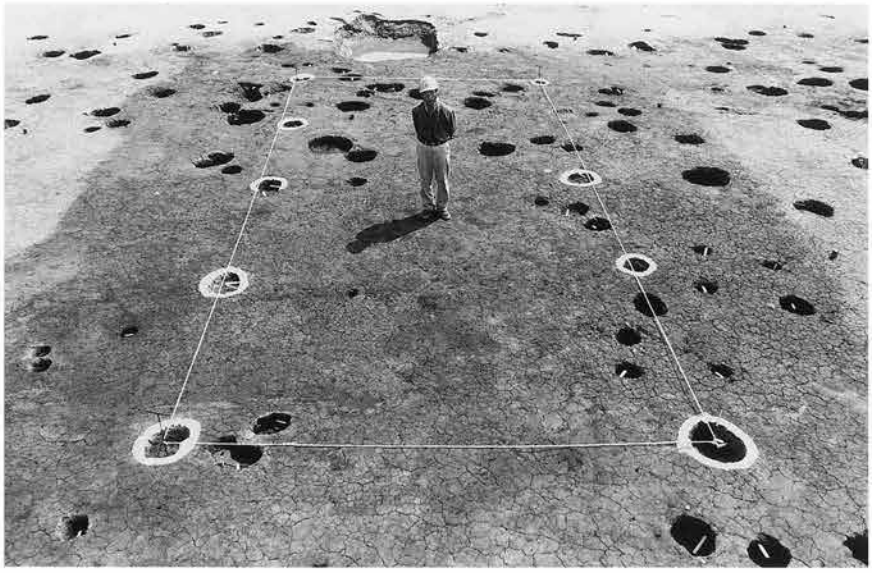
写真図版24　SB12・13平面



SB14　平面（西から）

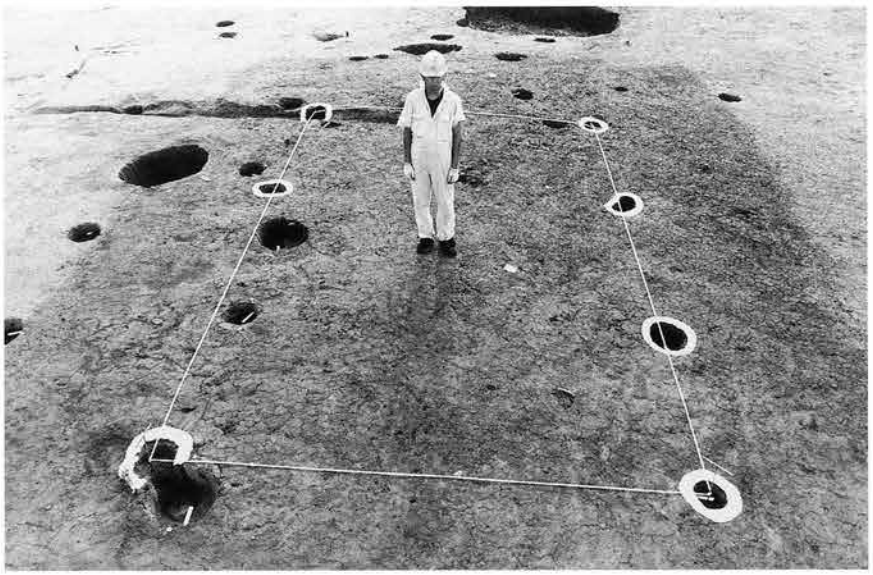


SB15　平面（西から）



SB16　平面（西から）

写真図版25　SB14～16平面



SB17　平面（東から）

SB18　平面（西から）

SB19　平面（西から）

写真図版26　SB17～19平面

SB20　平面（東から）

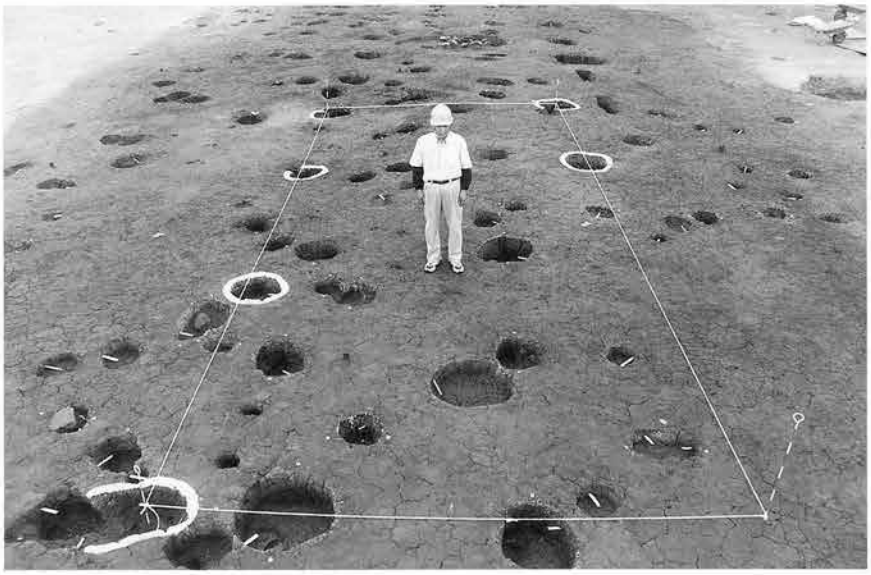
SB22　平面（北から）

SB23　平面（南から）

写真図版27　SB20・22・23平面

SB24　平面（東から）

SB25　平面（西から）



SB26　平面（南から）

写真図版28　SB24～26平面

SB27　平面（南から）

SB28　平面（南から）

SB29　平面（南から）

写真図版29　SB27～29平面

SB30　平面（西から）

SB31　平面（南から）

SB32　平面（西から）

写真図版30　SB30～32平面

SB33　平面（北から）

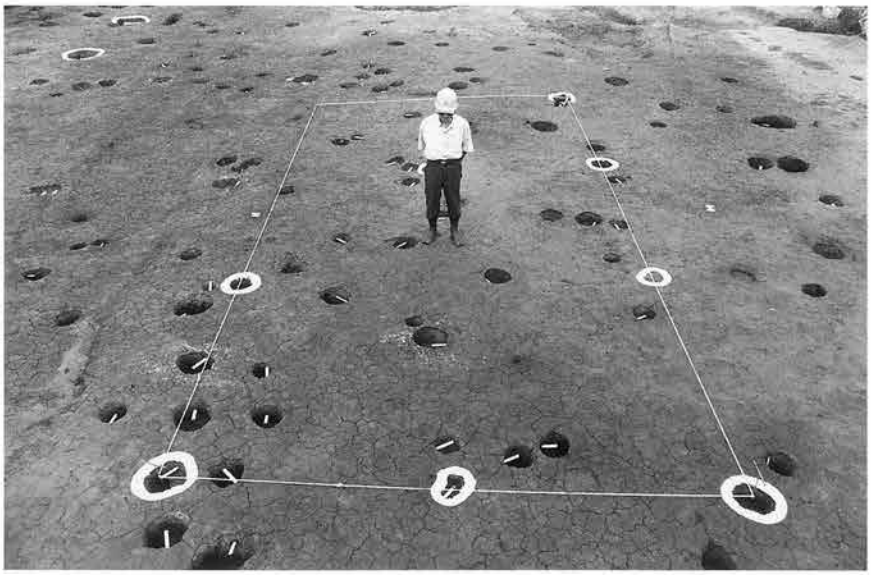
SB34　平面（東から）

SB35　平面（南から）

写真図版31　SB33～35平面

SB36　平面（北から）

SB37　平面（北から）



SB38　平面（東から）

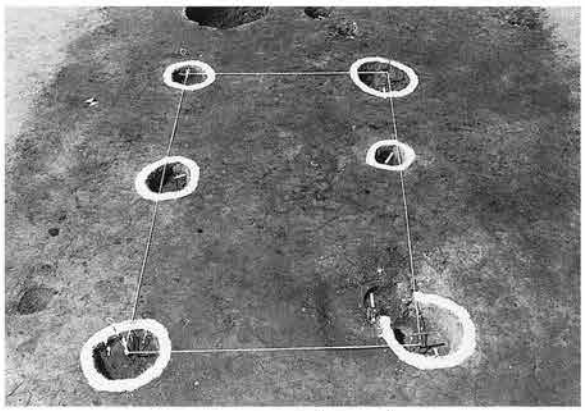
写真図版32　SB36～38平面

SB39　平面（北から）

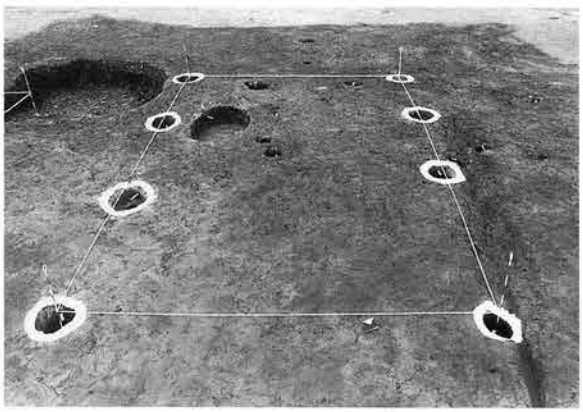
SB40　平面（東から）

SB41　平面（東から）

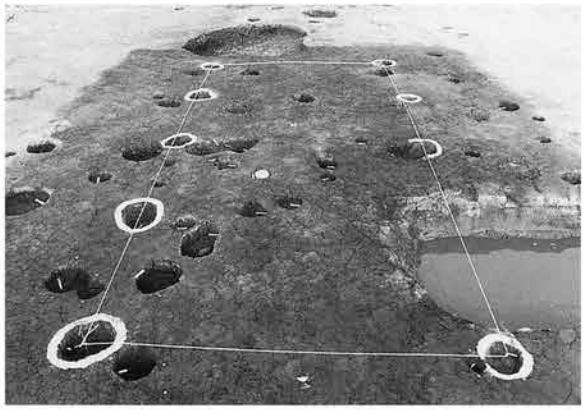
写真図版33　SB39～41平面



SB１　平面（西から）

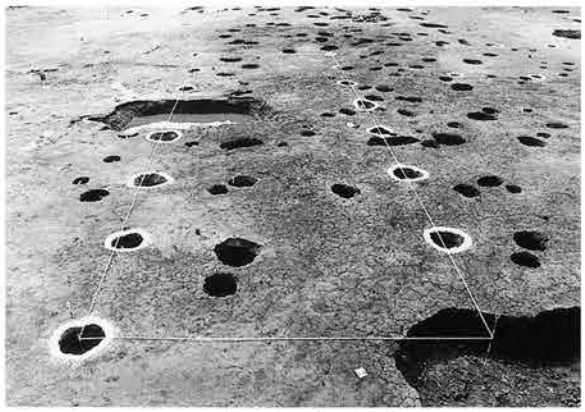


SB２　平面（南から）

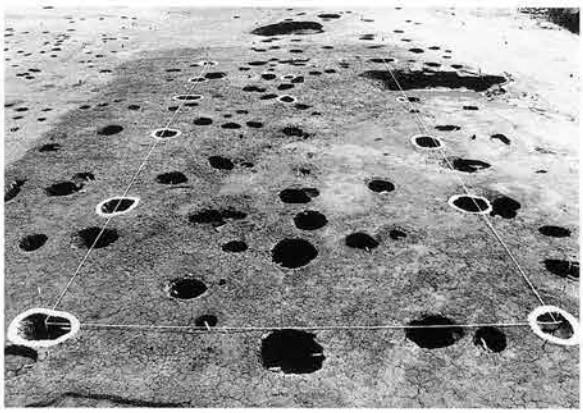


SB３　平面（西から）

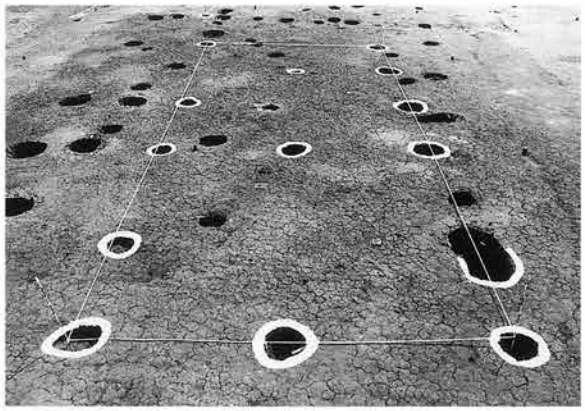
SB４　平面（西から）



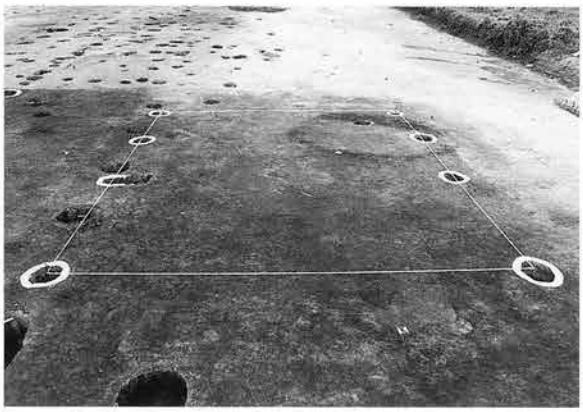
SB５　平面（東から）



SB６　平面（西から）



SB８　平面（西から）



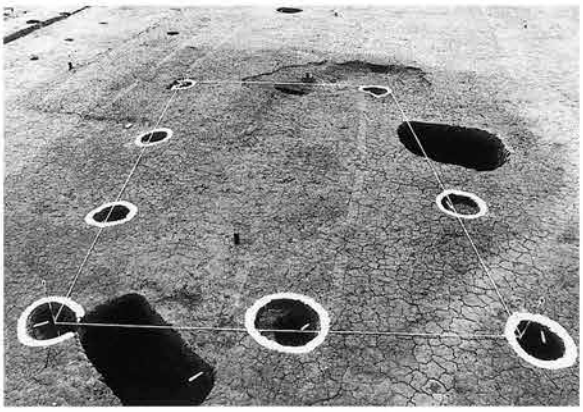
SB９　平面（西から）

写真図版34　掘立柱建物平面（１）

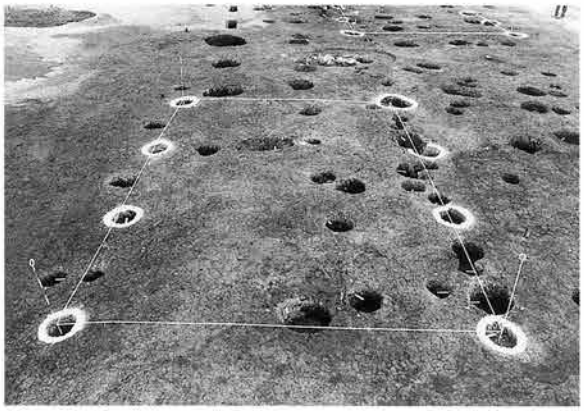
SB10　平面（南から）

SB11　平面（東から）

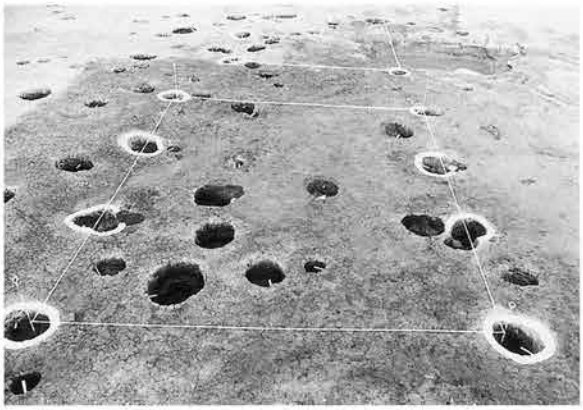
SB12　平面（北から）



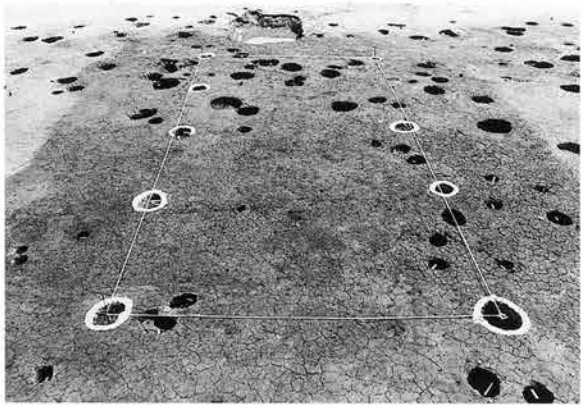
SB13　平面（東から）



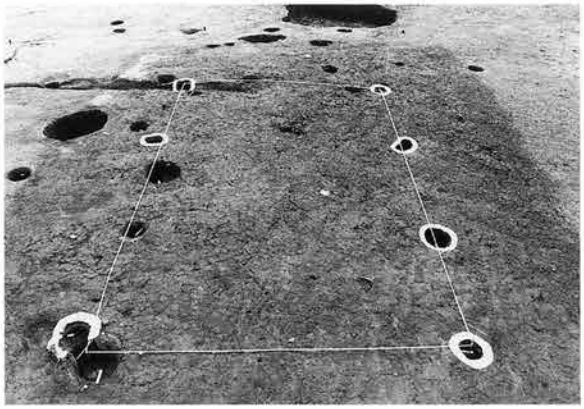
SB14　平面（西から）



SB15　平面（西から）



SB16　平面（北から）



SB17　平面（東から）

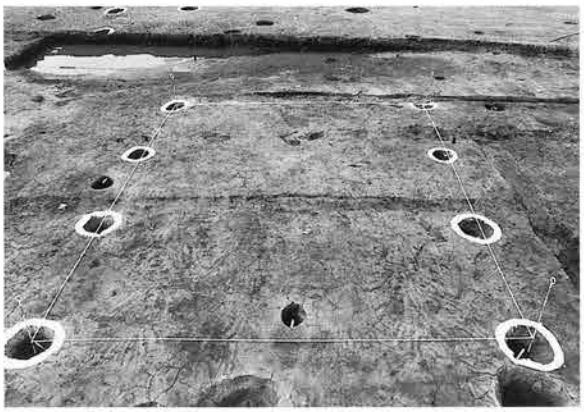
写真図版35　掘立柱建物平面（2）

SB18　平面（西から）

SB19　平面（西から）

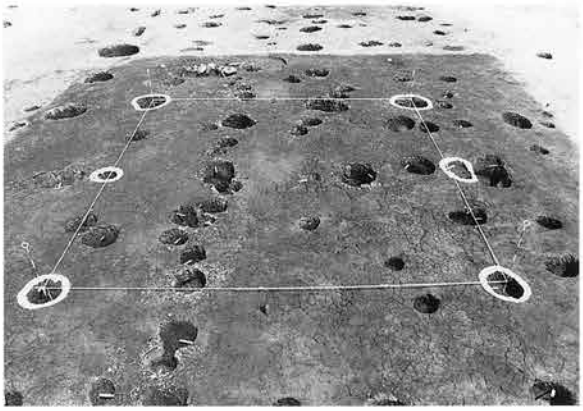
SB20　平面（東から）

SB22　平面（北から）

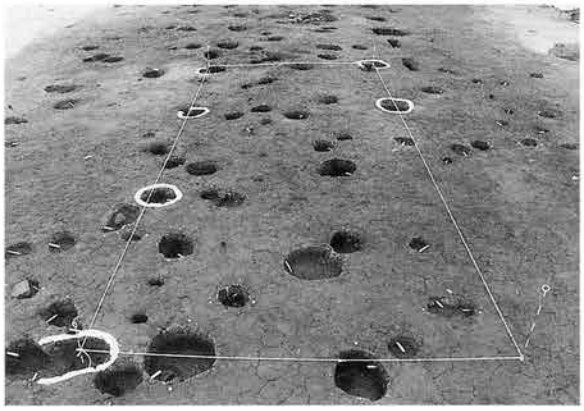


SB23　平面（南から）

SB24　平面（東から）



SB25　平面（西から）

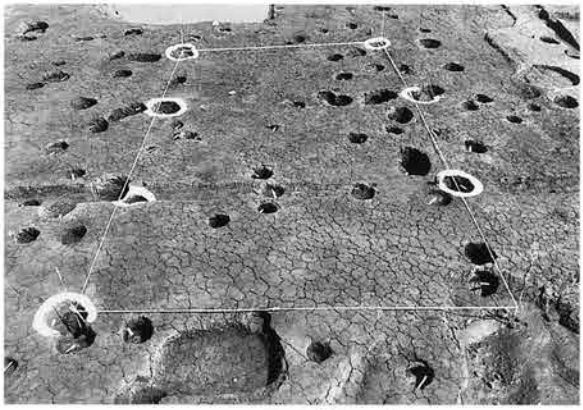


SB26　平面（東から）

写真図版36　掘立柱建物平面（3）

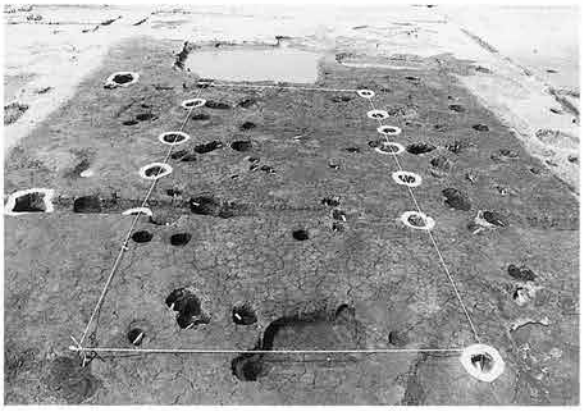
SB27　平面（南から）

SB28　平面（南から）

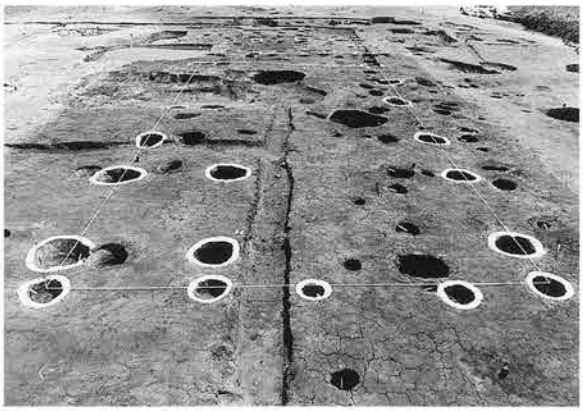


SB29　平面（南から）

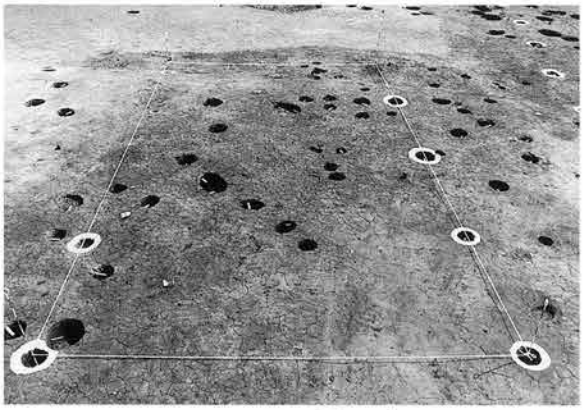
SB30　平面（西から）



SB31　平面（南から）



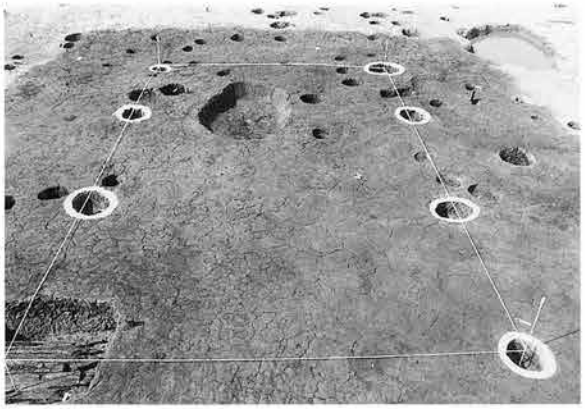
SB32　平面（西から）



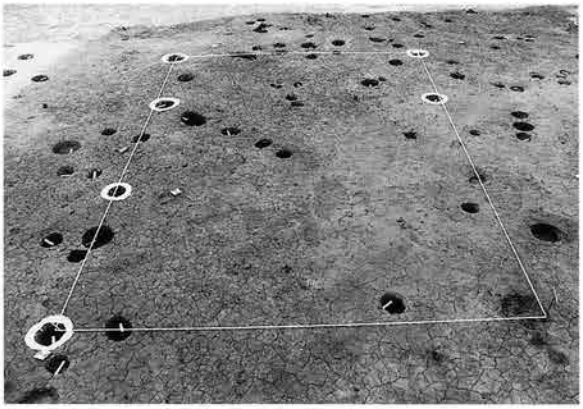
SB33　平面（北から）

SB34　平面（東から）

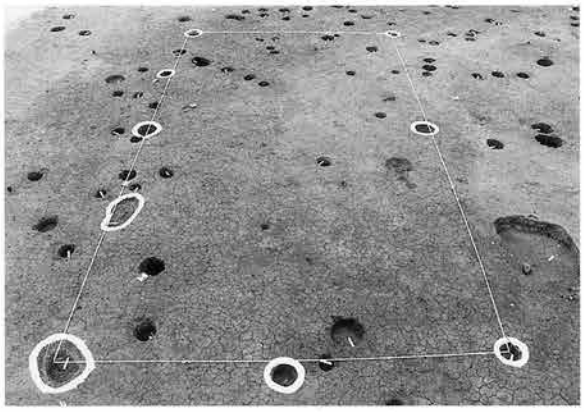
写真図版37　掘立柱建物平面（4）



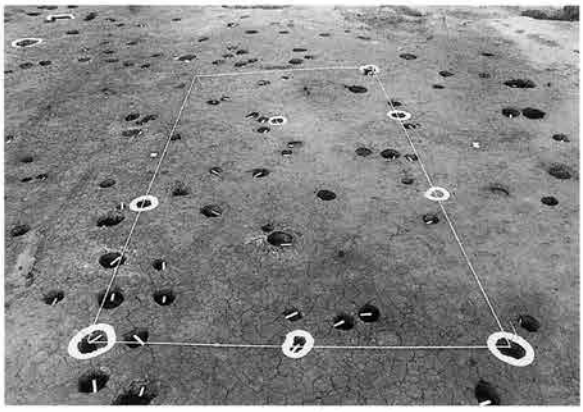
SB35　平面（南から）



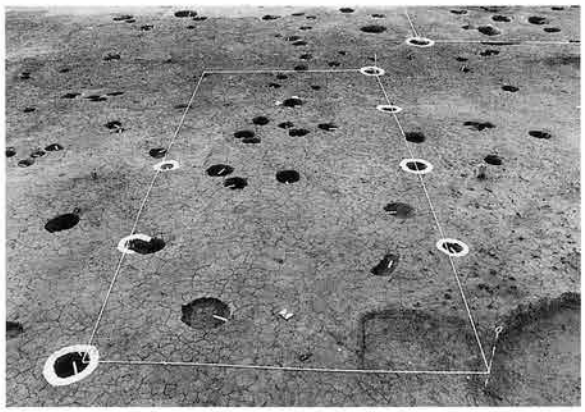
SB36　平面（南から）



SB37　平面（北から）



SB38　平面（東から）



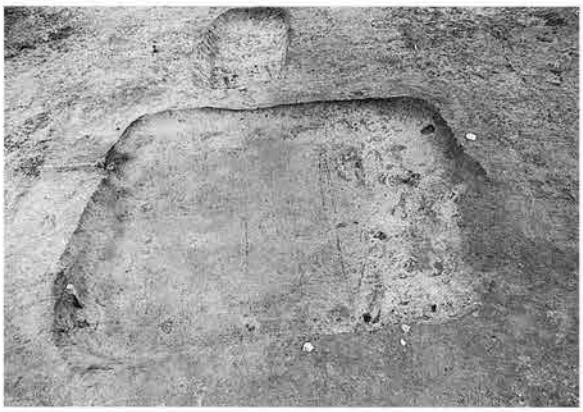
SB39　平面（北から）

SB40　平面（東から）

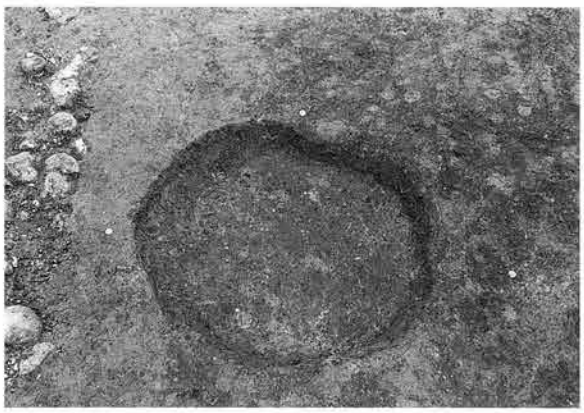
SB41　平面（東から）

作業風景

写真図版38　掘立柱建物平面（5）

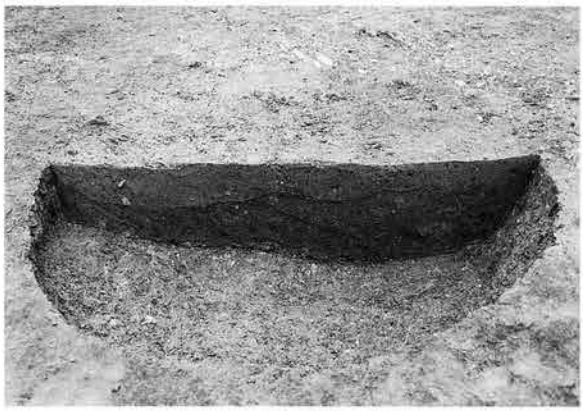


SK１　平面（西から）



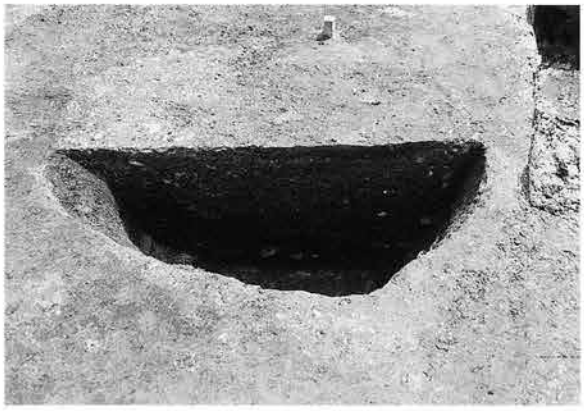
SK２　平面（南から）

SK４　平面（南から）

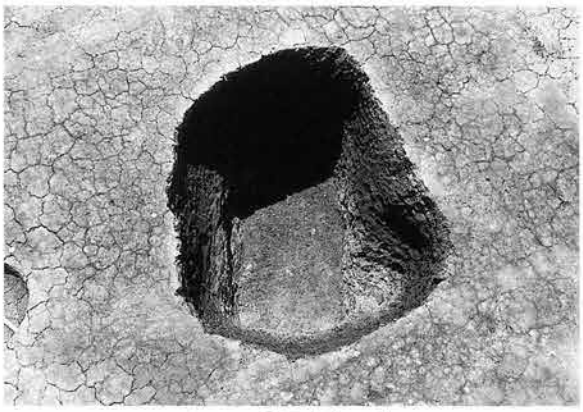


SK４　断面（南から）

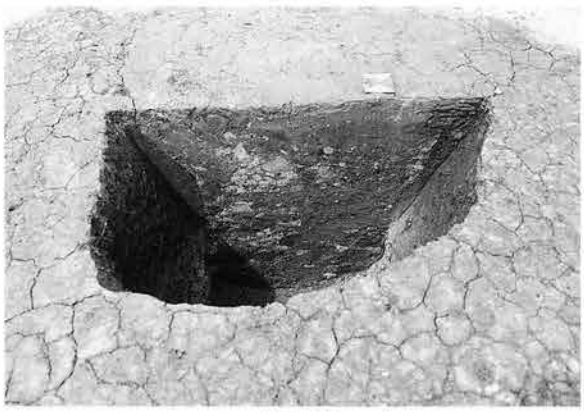
SK５　平面（北から）



SK５　断面（西から）

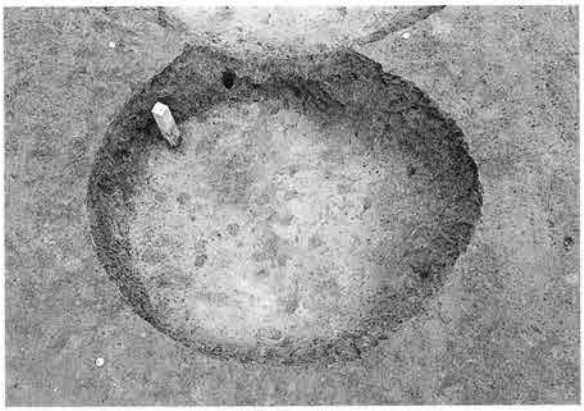


SK６　平面（南から）



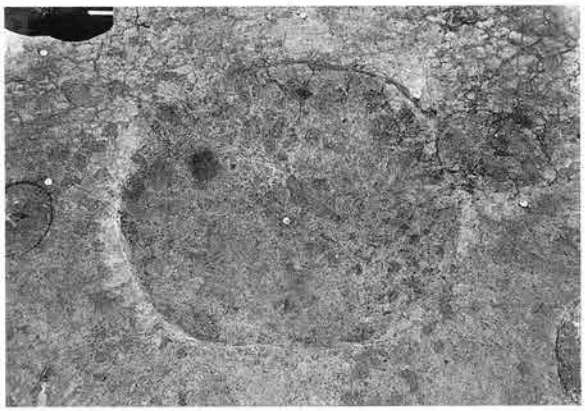
SK６　断面（南から）

写真図版39　土坑（１）



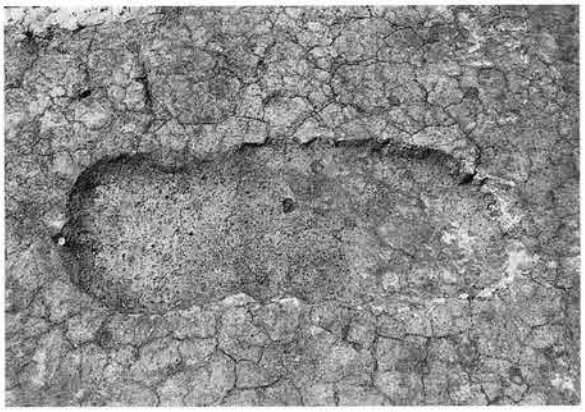
SK3　平面（南西から）

SK7　平面（東から）

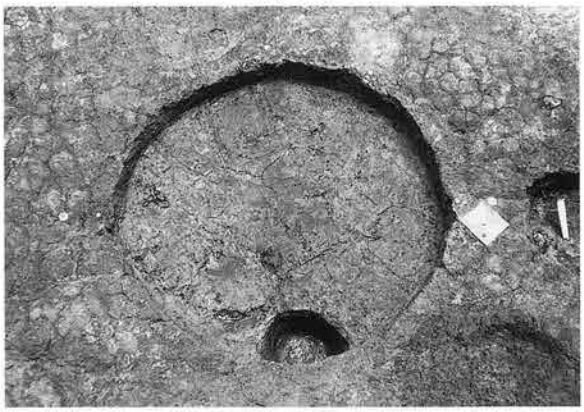


SK9　平面（南から）

SK8　断面（東から）

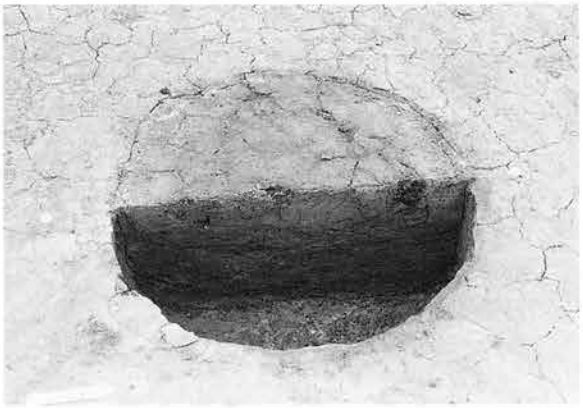


SK10　平面（北から）



SK11　断面（西から）

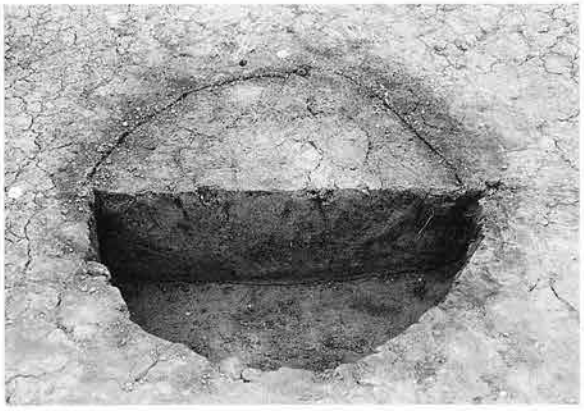
SK12　平面（南から）



SK12　断面（南から）

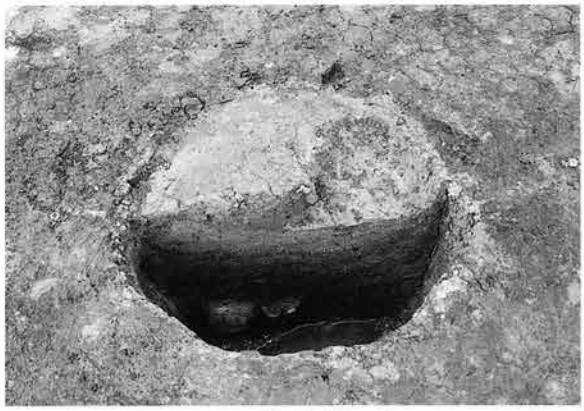
写真図版40　土坑（2）

SK13　平面（南から）



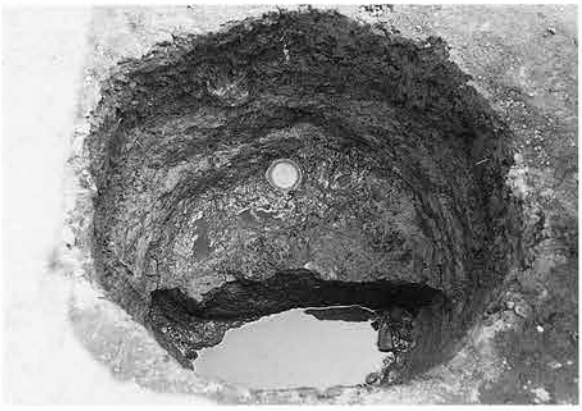
SK13　断面（南から）

SK14　平面（南から）

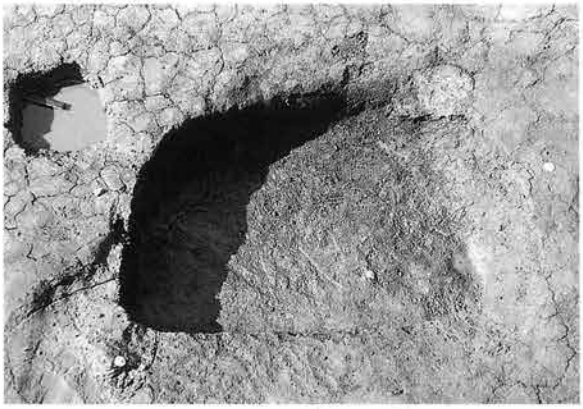


SK14　断面（南から）

SK14　遺物出土状況①（北から）



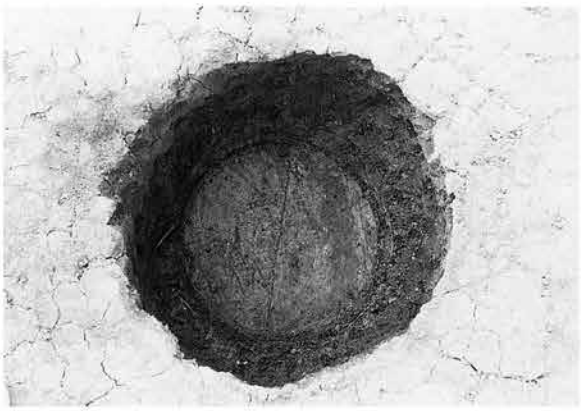
SK14　遺物出土状況②（南から）



SK15　平面（南西から）

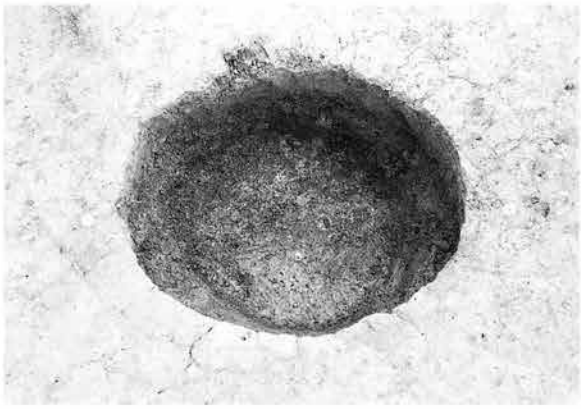
SK16　断面（南東から）

写真図版41　土坑（3）

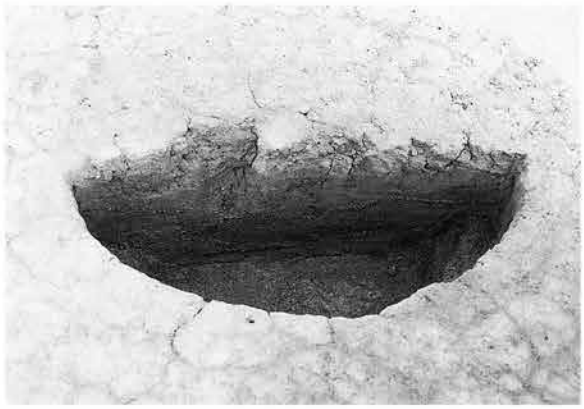


SK17　平面（南から）

SK17　断面（南から）

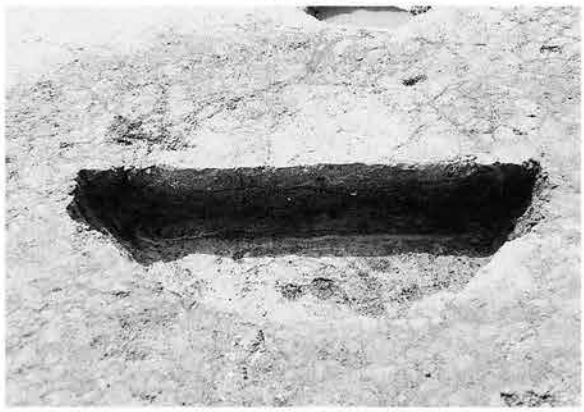


SK18　平面（南から）



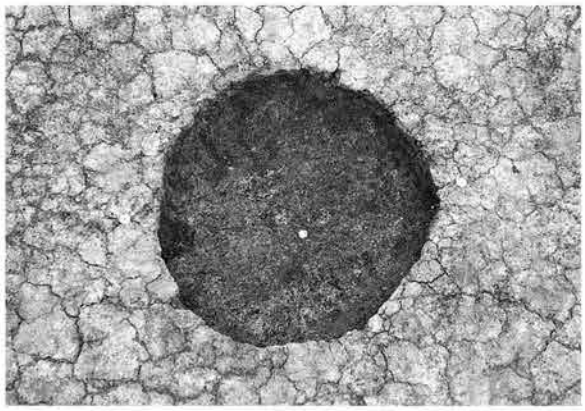
SK18　断面（南から）

SK19　平面（東から）



SK19　断面（東から）

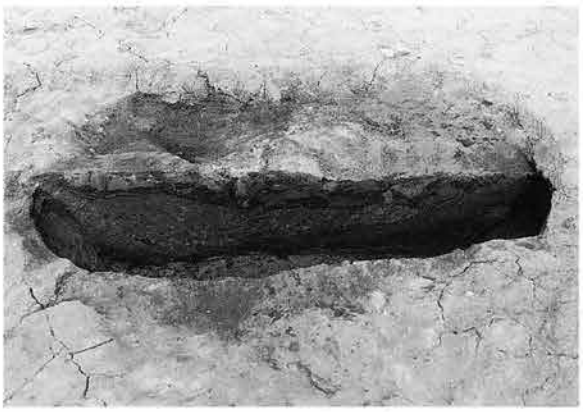
SK20　平面（東から）



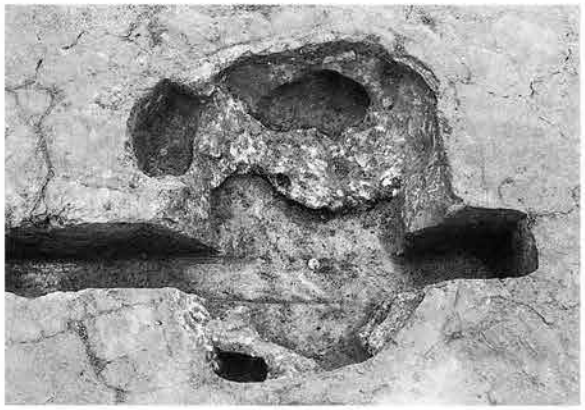
SK21　平面（南から）

写真図版42　土坑（4）

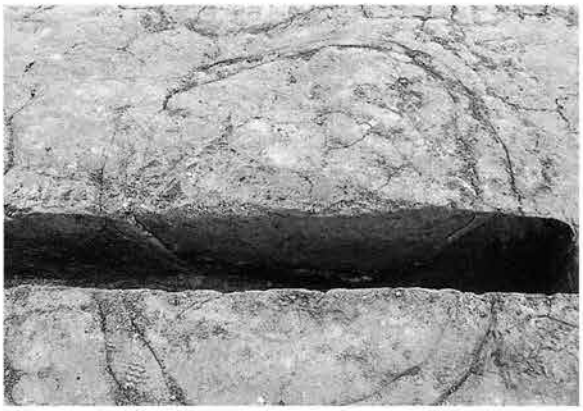
SK22　平面（西から）



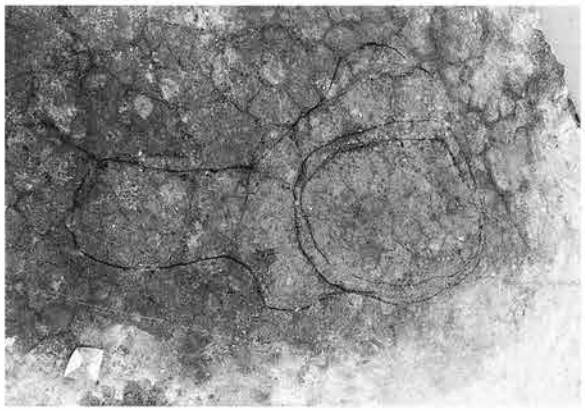
SK22　断面（西から）



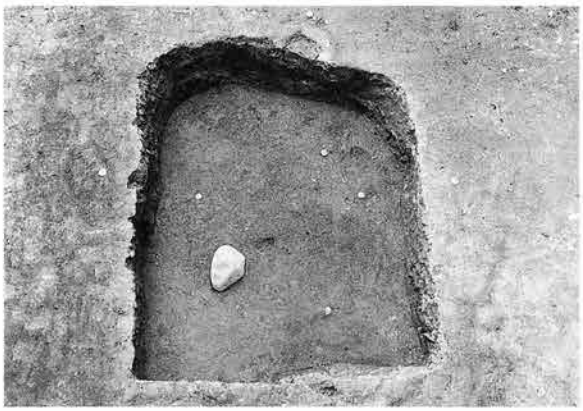
SK23　平面（東から）



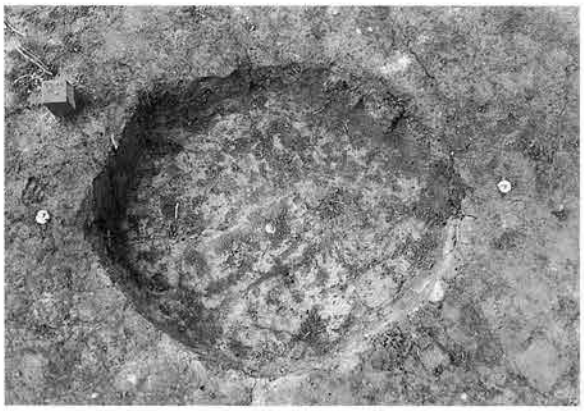
SK23　断面（東から）



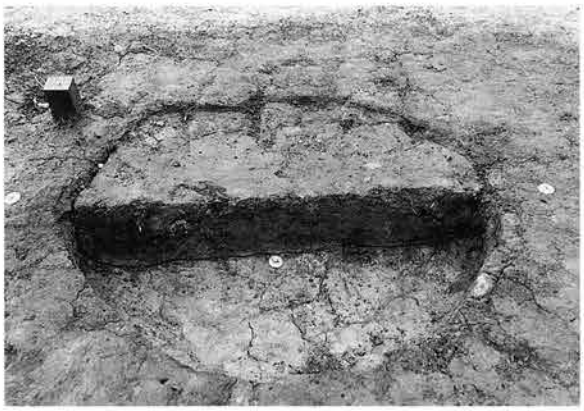
SK23　検出状況（東から）



SK24　平面（北から）

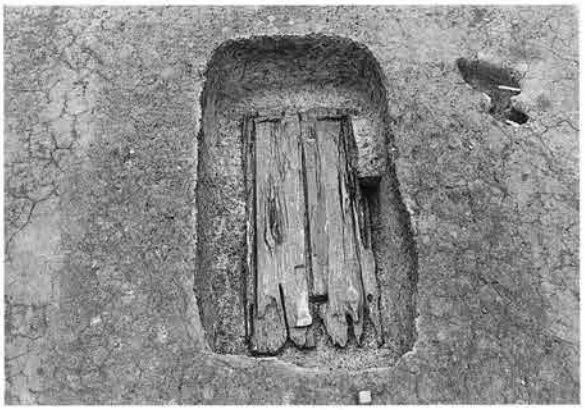


SK25　平面（南から）



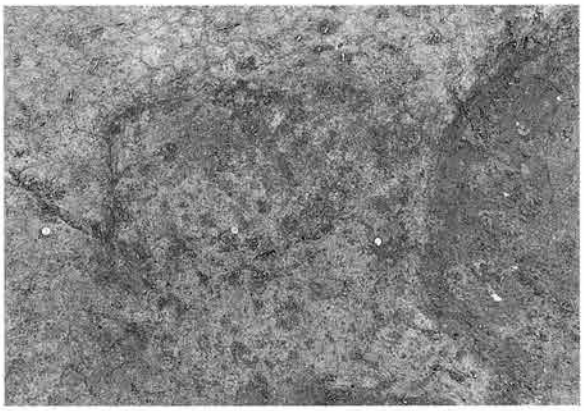
SK25　断面（南から）

写真図版43　土坑（5）



SK26　平面（東から）

SK26　断面（東から）



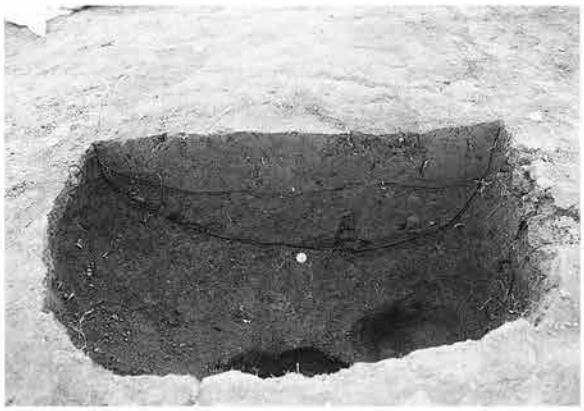
SK27　平面（北から）

SK30　断面（南から）

SK28　平面（北から）

SK28　断面（南から）

SK29　平面（東から）

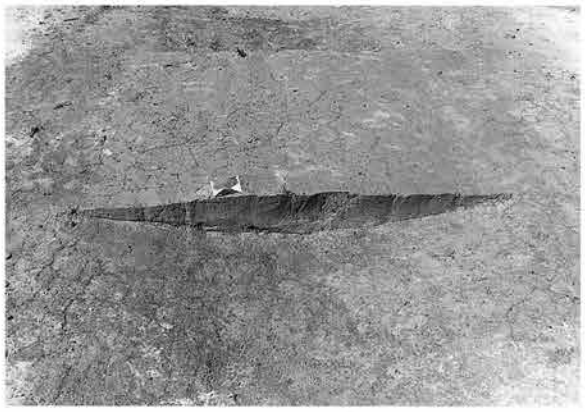


SK29　断面（東から）

写真図版44　土坑（6）

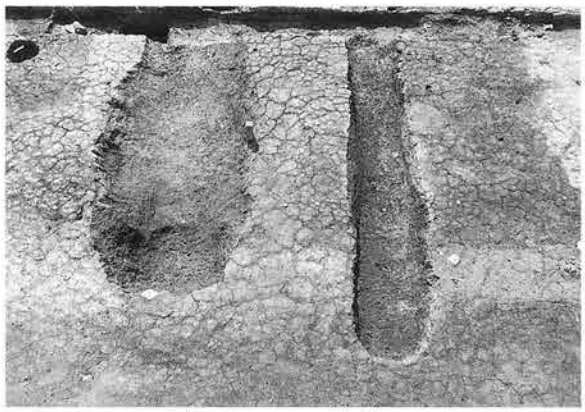
SD1　平面（南から）

SD1　断面（南から）

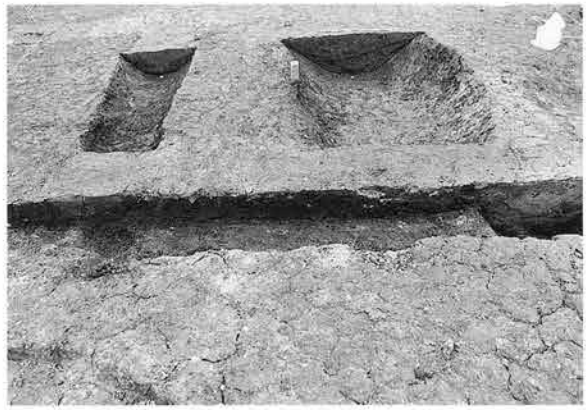


SD1　b−b'断面（南から）

SD1　c−c'断面（南から）

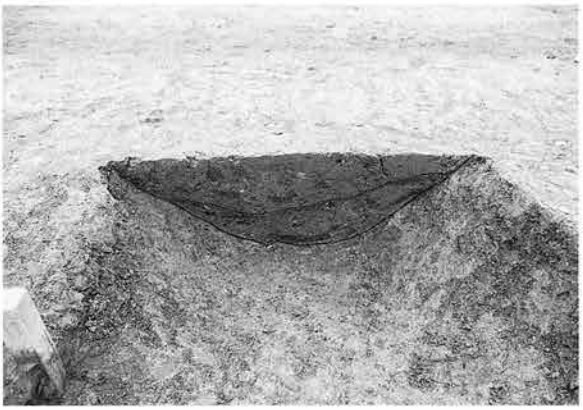


SD2（左）・3（右）　平面（東から）



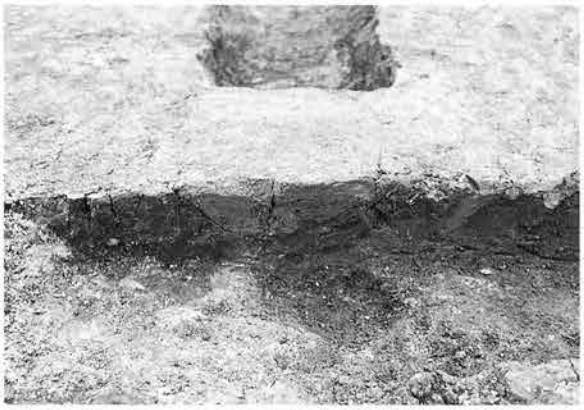
SD2・3　断面（西から）

SD2　a−a'断面（西から）



SD2　b−b'断面（西から）

写真図版45　溝跡（1）



SD３　a−a'断面（西から）

SD３　b−b'断面（西から）

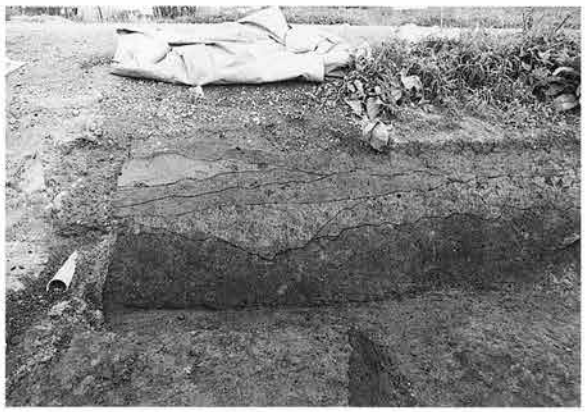
SD４　平面（南から）

SD４　遺物出土状況（南から）

SD４　a−a'断面（南から）

SD４　b−b'断面（南から）

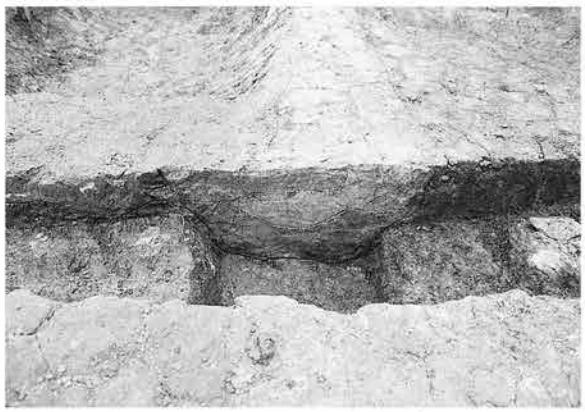
SD４　c−c'断面（南から）



SD４　村道下断面（南から）

写真図版46　溝跡（２）

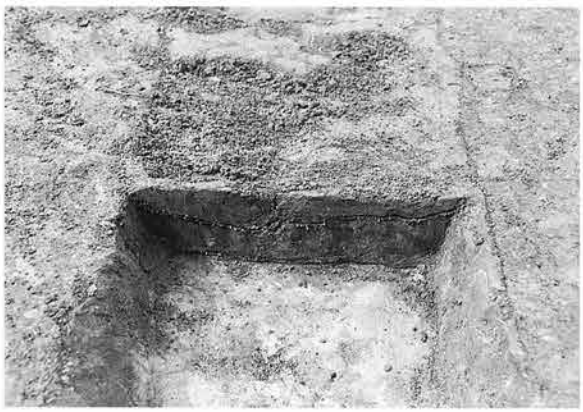
SD５　平面（西から）



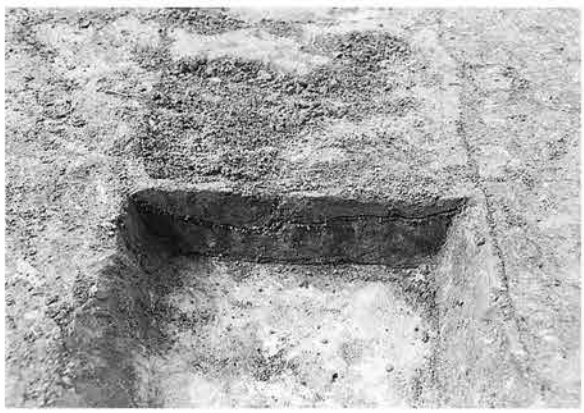
SD５　a−a'断面（西から）

SD６・7、SK30　平面（南から）

SD６　断面（南から）



SD７　a−a'断面（南から）



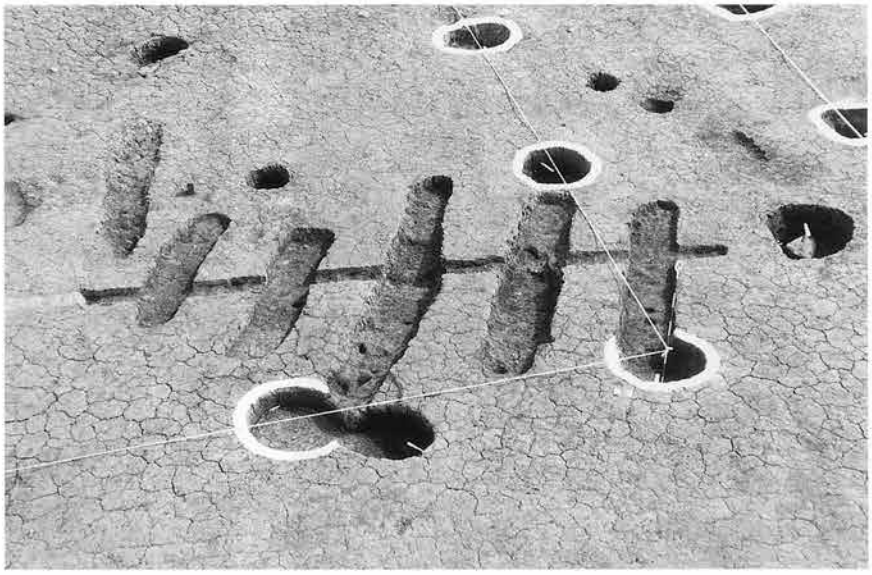
SD７　c−c'断面（南から）

SK30　b−b'断面（南から）

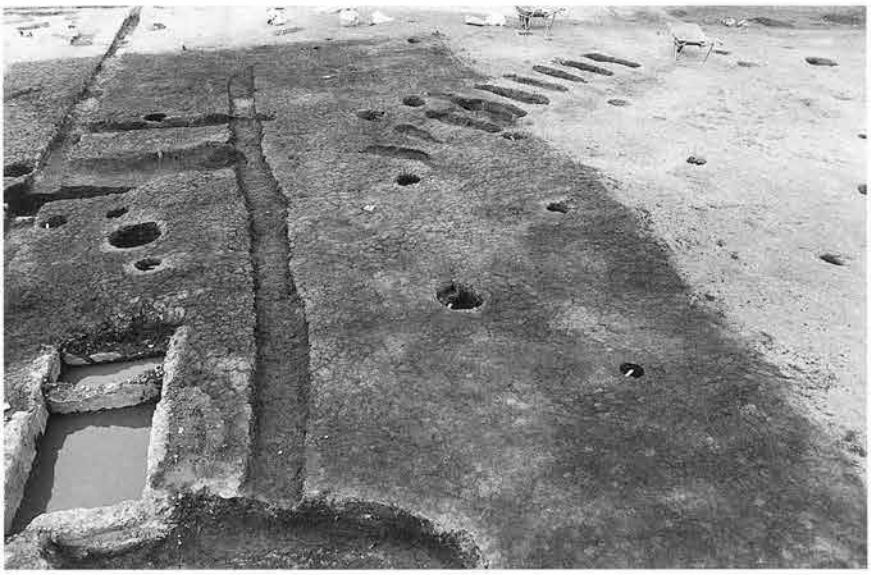
SD８　断面（東から）

写真図版47　溝跡（３）

SX１　平面（南東から）



SX２　平面（北東から）



SX１・SD４　平面（南から）

写真図版48　SX１・２平面

SX１　断面（南東から）

SX２　断面（南から）

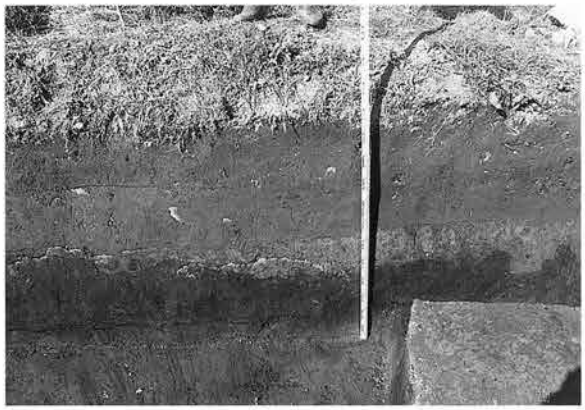
村道北Ⅶ N３c～３e付近（東から）

村道北Ⅶ N２g～２j付近（東から）

村道北Ⅶ O１h～Ⅶ P２b付近（東から）

基本土層　Ⅶ N２g付近

基本土層　Ⅶ N２e付近



基本土層　Ⅶ N２f付近

写真図版49　SX１・２、村道北平面、基本土層

P16（SB1）

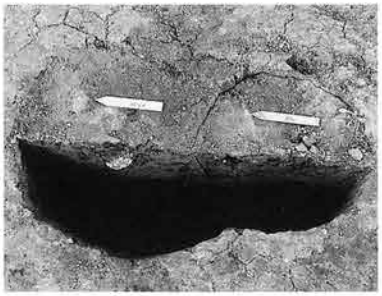
P17（SB1）

P18（SB1）

P571（SB2）

P572（SB2）

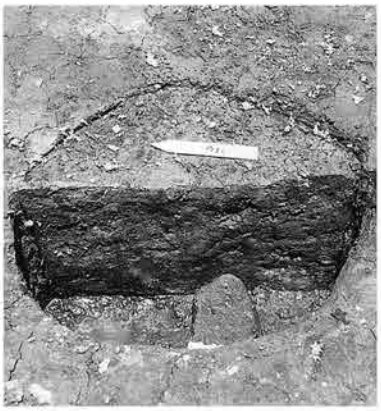
P574（SB2）


P26（SB3）・P127

P143（SB3）

P114（SB4）

P124（SB4）

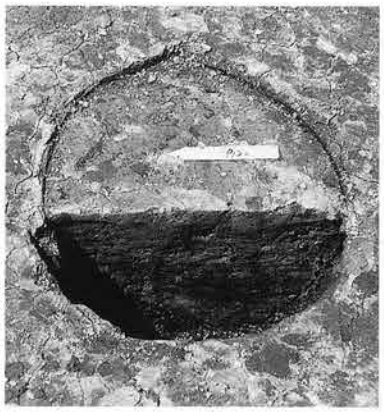

P138（SB4）

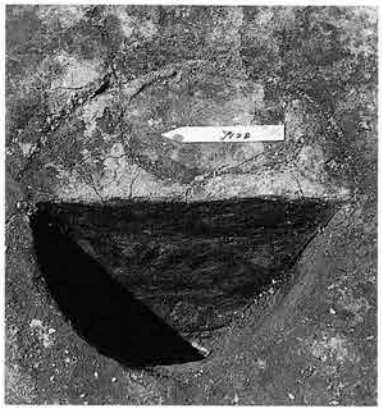
P576（SB4）

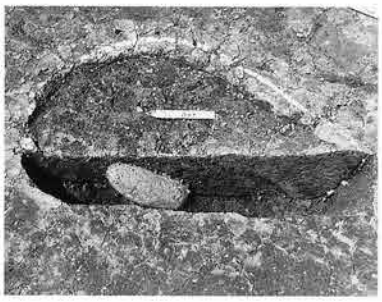
写真図版50　SB1～4柱穴

P113

P119


P120

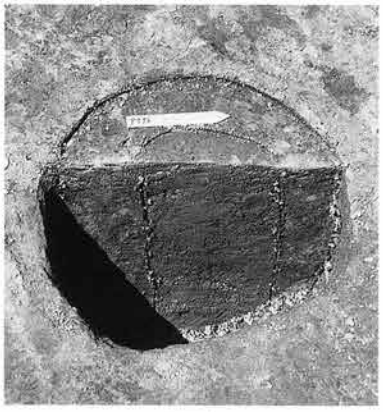

P128

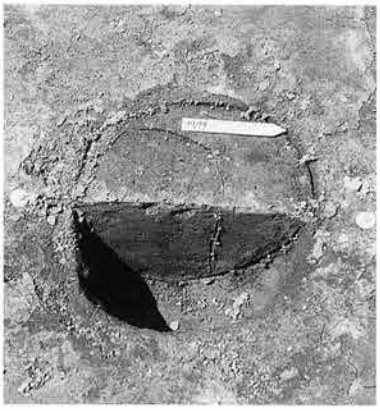

P141

P163

P165

P577

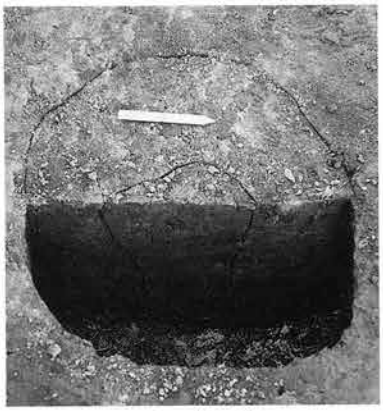

P578


P579

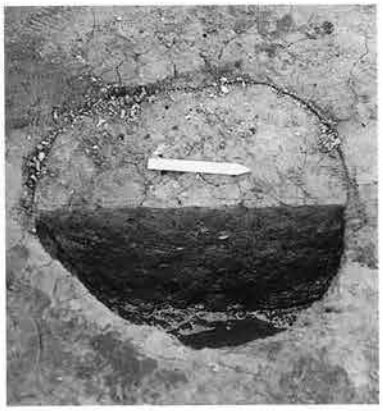
P581

写真図版51　SB５柱穴

P140（SB6）

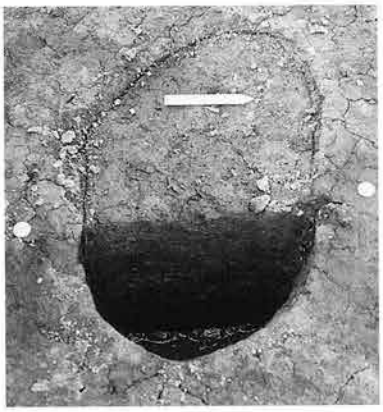


P187（SB6）



P193（SB6）

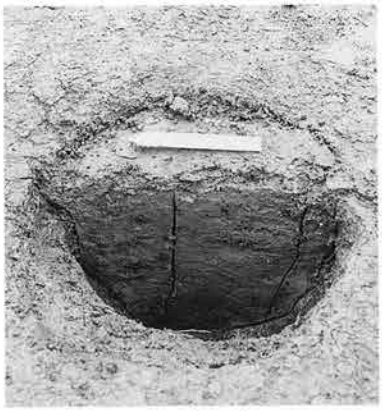
P198（SB6）



P207（SB6）

P582（SB6）

P583（SB6）



P11（SB7）

P324（SB7）

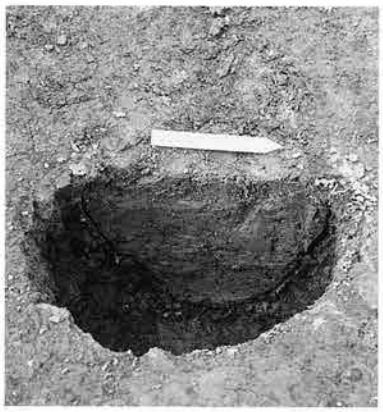
P325（SB7）

P343（SB7）

P587（SB7）

写真図版52　SB6・7柱穴

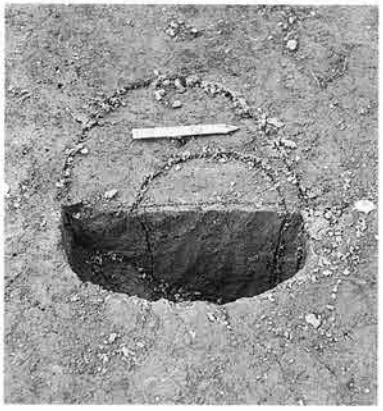
P252（SB8）


P254（SB8）

P266（SB8）

P303（SB8）

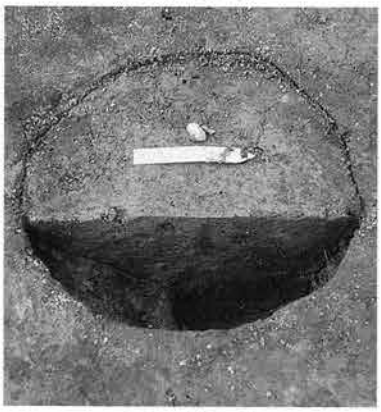
P305（SB8）


P314（SB8）

P321（SB8）

P587（SB8）

P581（SB8）


P267（SB9）

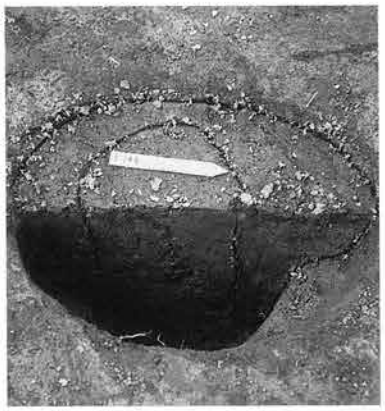
P302（SB9）

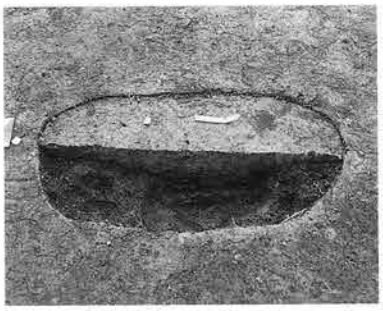
P307（SB9）

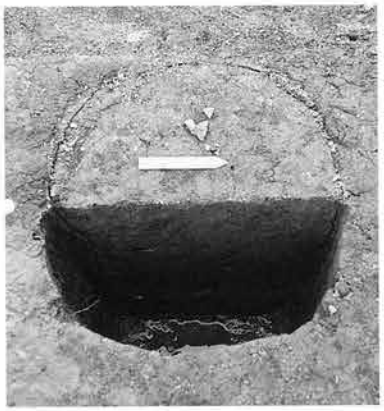
写真図版53　SB8・9柱穴

P332（SB9）

P333（SB9）


P344（SB9）


P224（SB10）


P272（SB10）

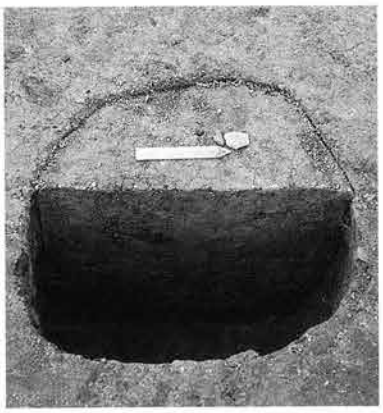
P275（SB10）

P287（SB10）

P594（SB10）

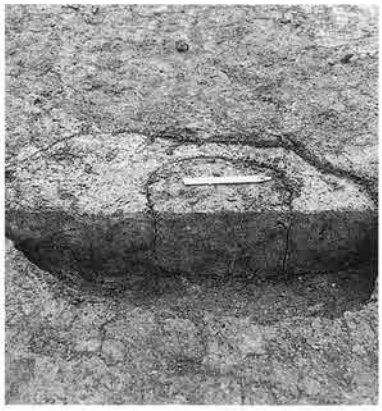
P595（SB10）

P596（SB10）


P249（SB11）

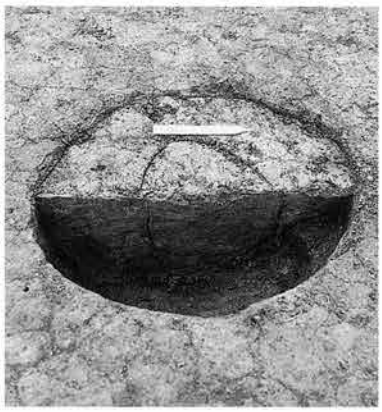
P260（SB11）

写真図版54　SB9・11柱穴


P442

P443

P444

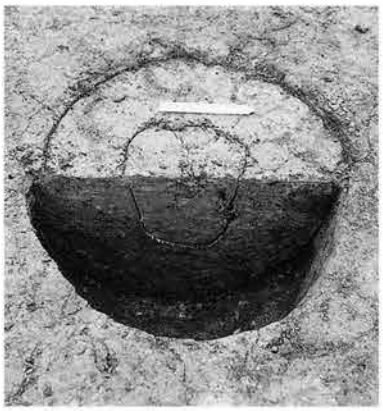

P497

P502

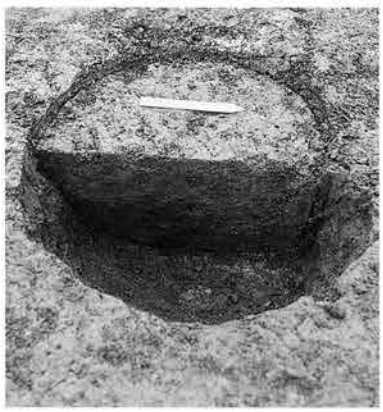
P505

P513

P514

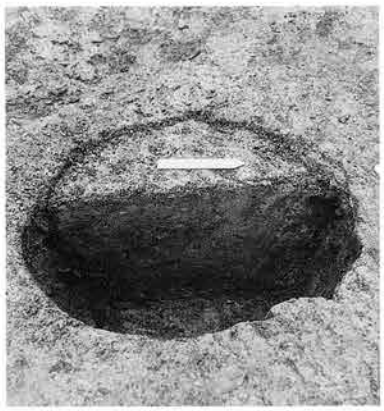

P575

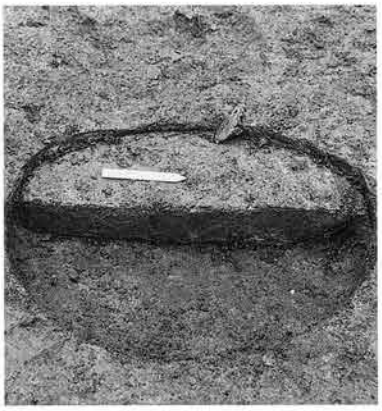
P598

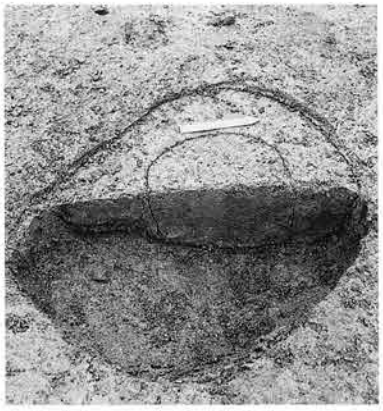

P599

P601

写真図版55　SB12柱穴


P602（SB12）


P603（SB12）


P604（SB12）

P605（SB12）

P387（SB13）

P388（SB13）

P603（SB13）

P607（SB13）

P608（SB13）

P609（SB13）

P610（SB13）

P611（SB13）

写真図版56　SB12・13柱穴

P218（SB14）

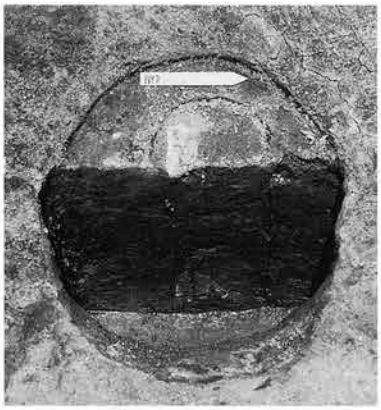
P223（SB14）

P226（SB14）

P614（SB14）

P615（SB14）

P107（SB15）


P192（SB15）

P618（SB15）

P619（SB15）

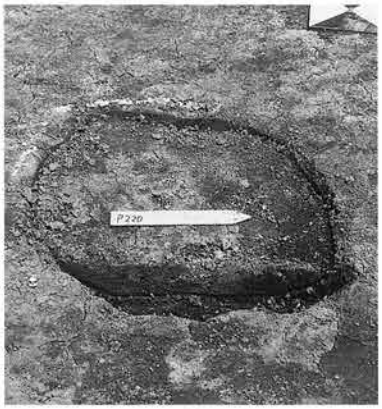
P68（SB16）

P69（SB16）

P92（SB16）

写真図版57　SB14～16柱穴

P182（SB16）


P220（SB16）

P98（SB17）

P99（SB17）

P622（SB17）

P38（SB18）

P155（SB18）

P225（SB18）

P232（SB18）

P238（SB18）

P245（SB18）

P623（SB18）

写真図版58　SB16～18柱穴

P154（SB19）

P231（SB19）

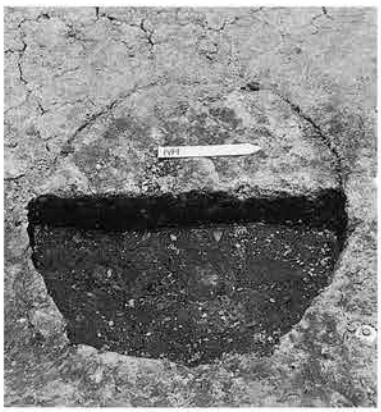
P241（SB19）

P624（SB19）

P625（SB19）

P151（SB20）

P191（SB20）


P194（SB20）

P206（SB20）

P630（SB20）

P196（SB21）

P201（SB21）

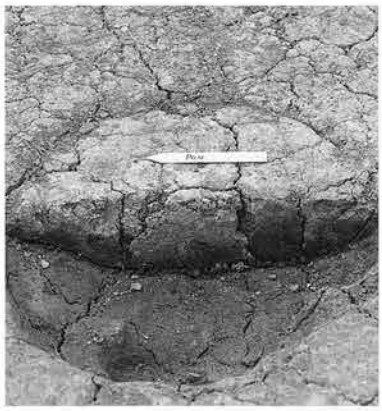
写真図版59　SB19～21柱穴

P202（SB21）

P632（SB21）

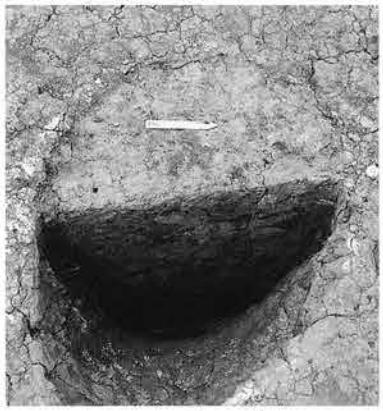
P452（SB23）

P458（SB23）


P44（SB24）

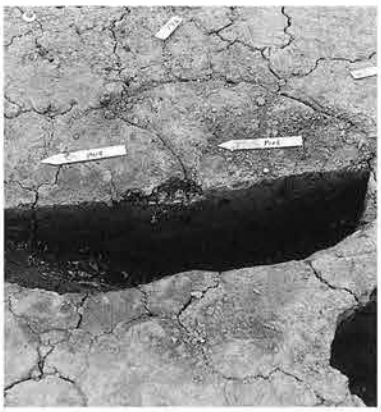
P90（SB24）

P102（SB24）


P160（SB24）

P113（SB25）

P274（SB25）


P116（SB26）

P174（SB26）

写真図版60　SB22～26柱穴

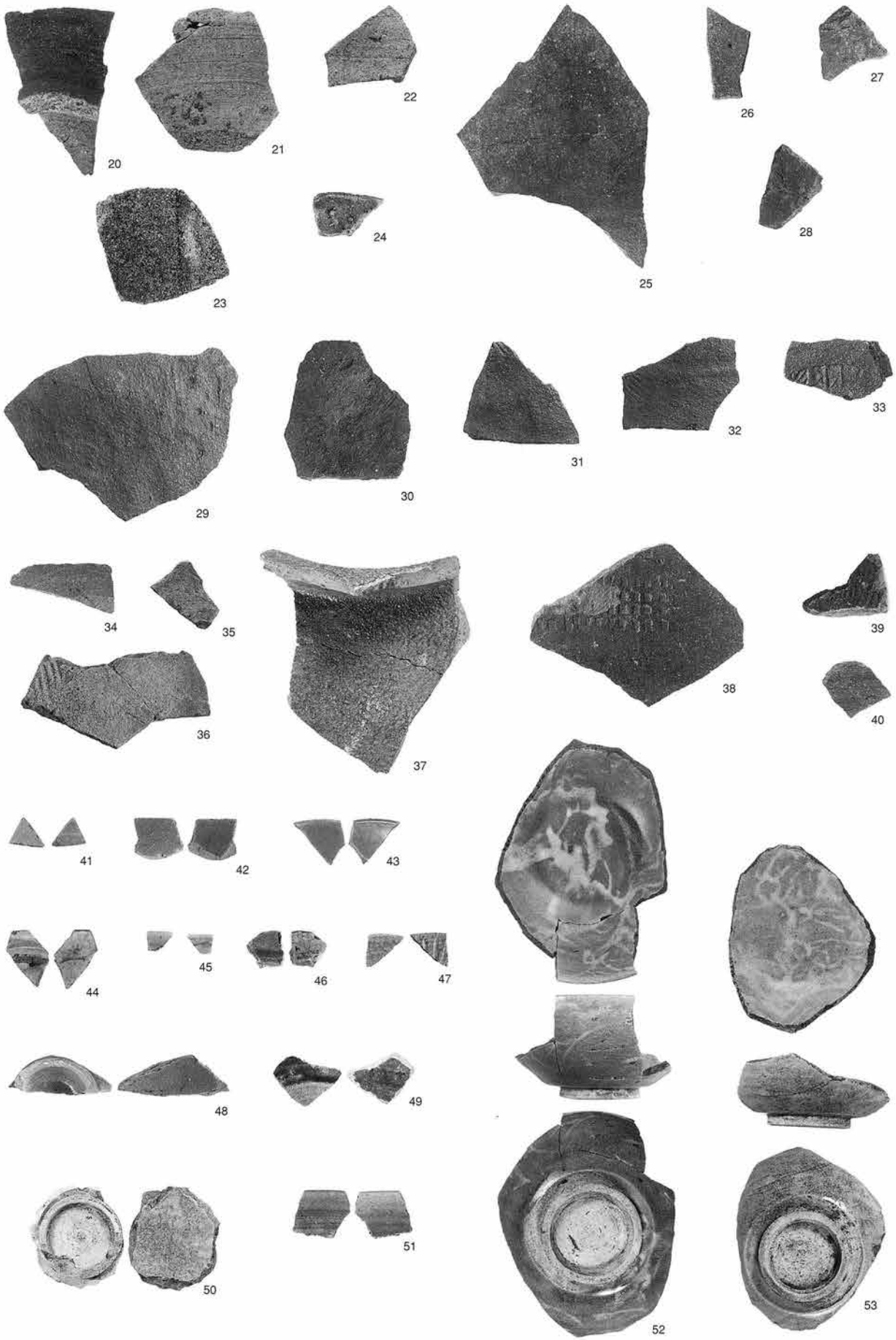
調査前風景（東から）

現地説明会１（衣の関道遺跡）

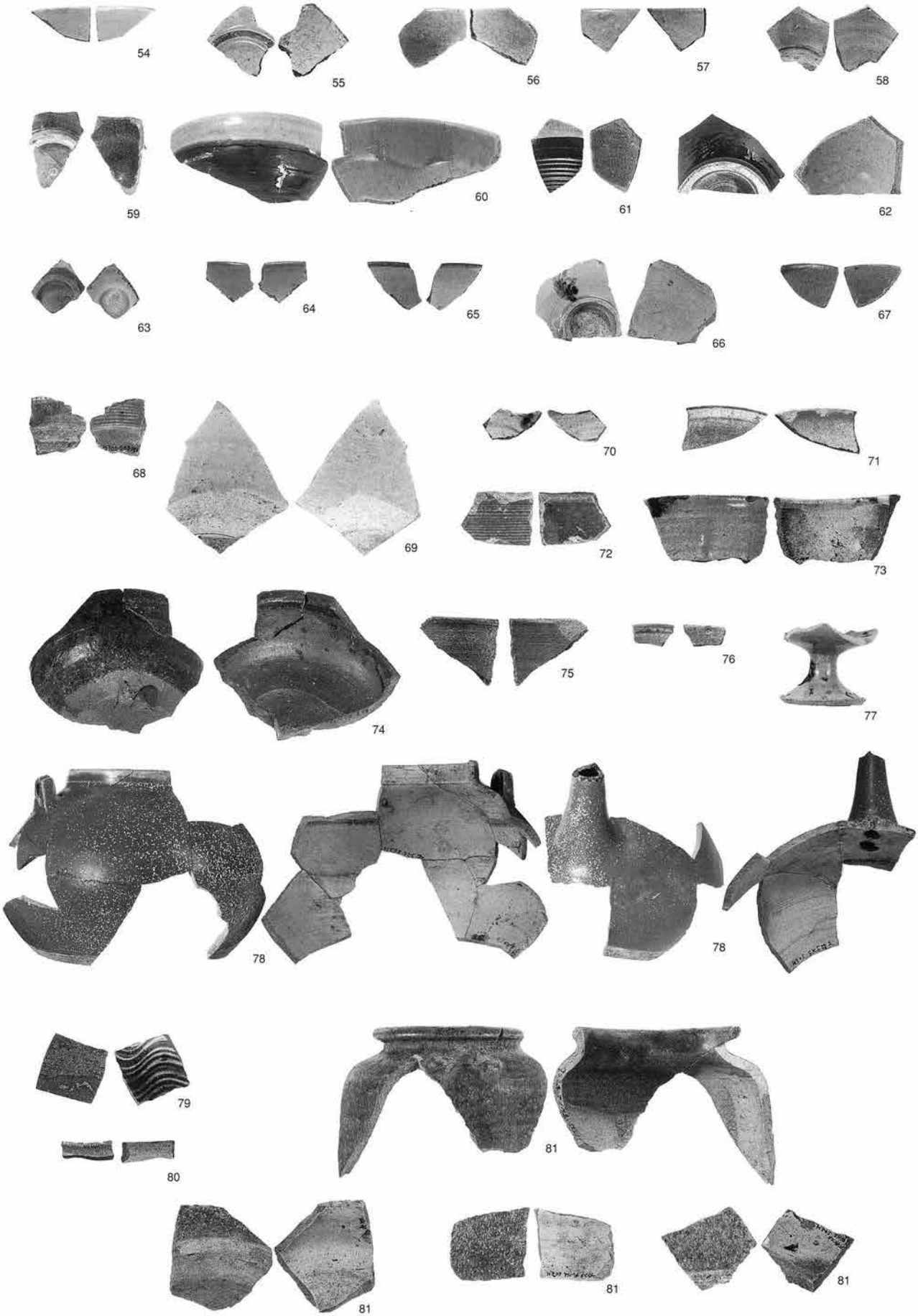
現地説明会２（衣の関道遺跡）

写真図版61　調査前風景・現地説明会

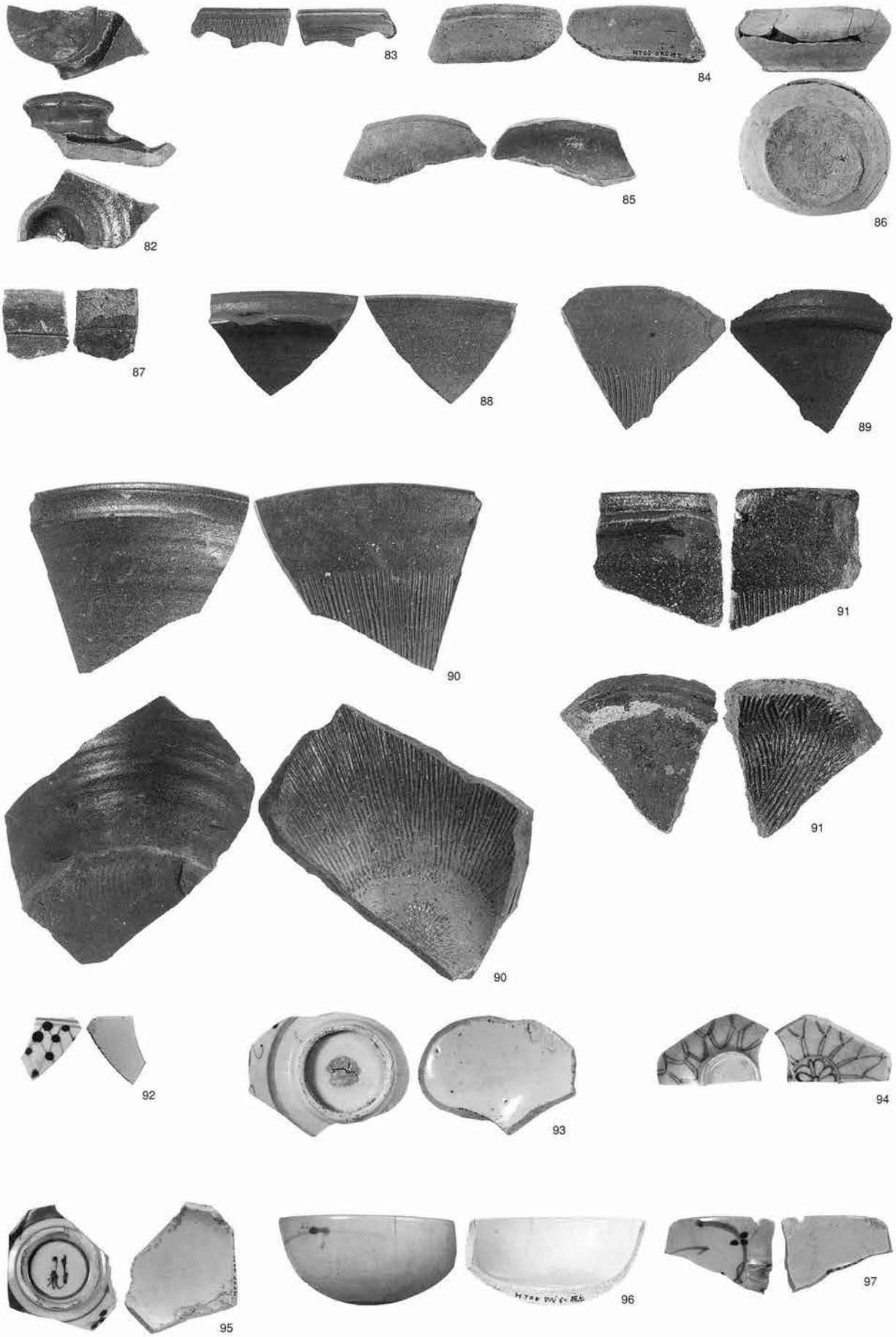
写真図版62　縄文土器・石器、かわらけ



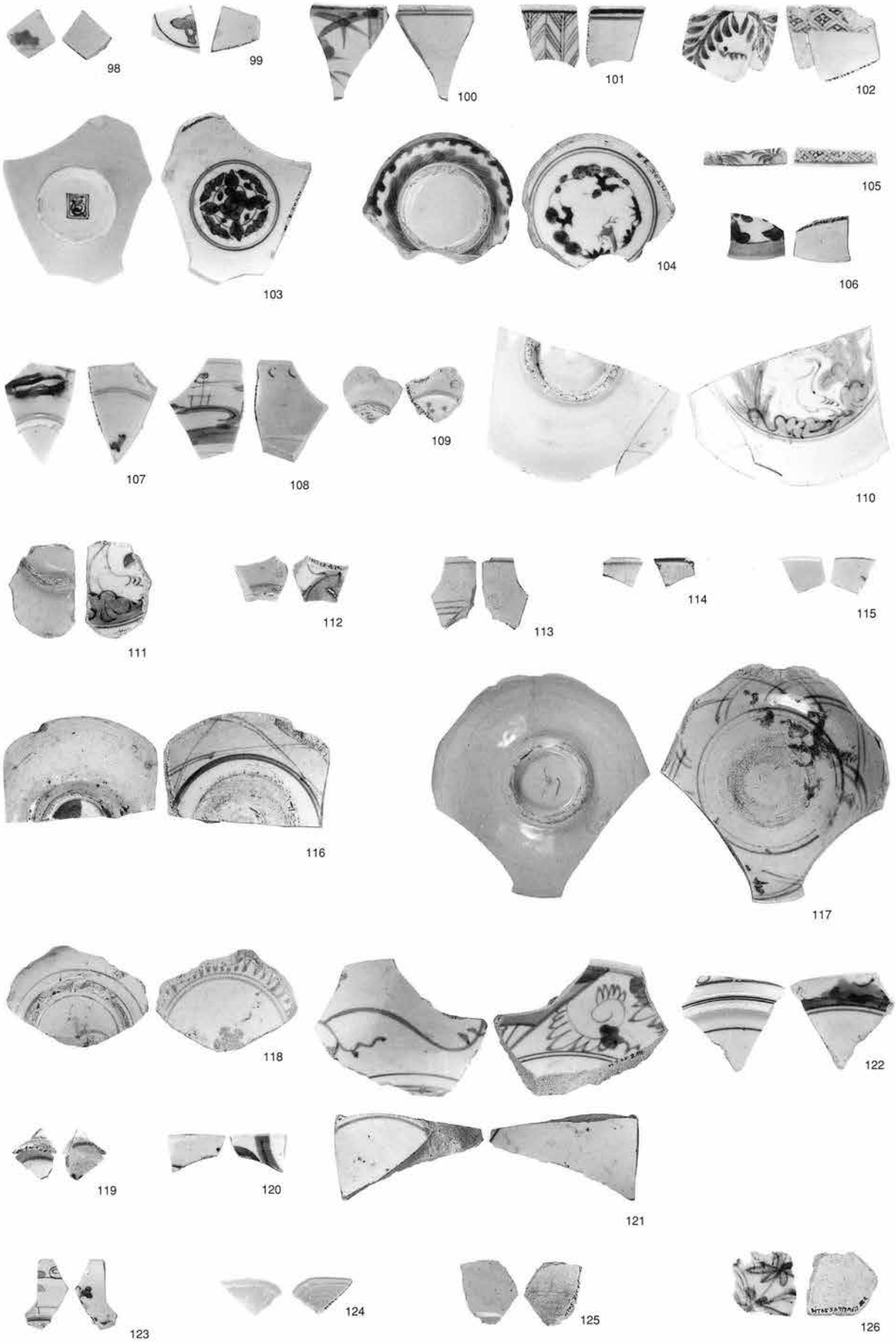
写真図版63　12世紀・中世の陶磁器　近世陶器①



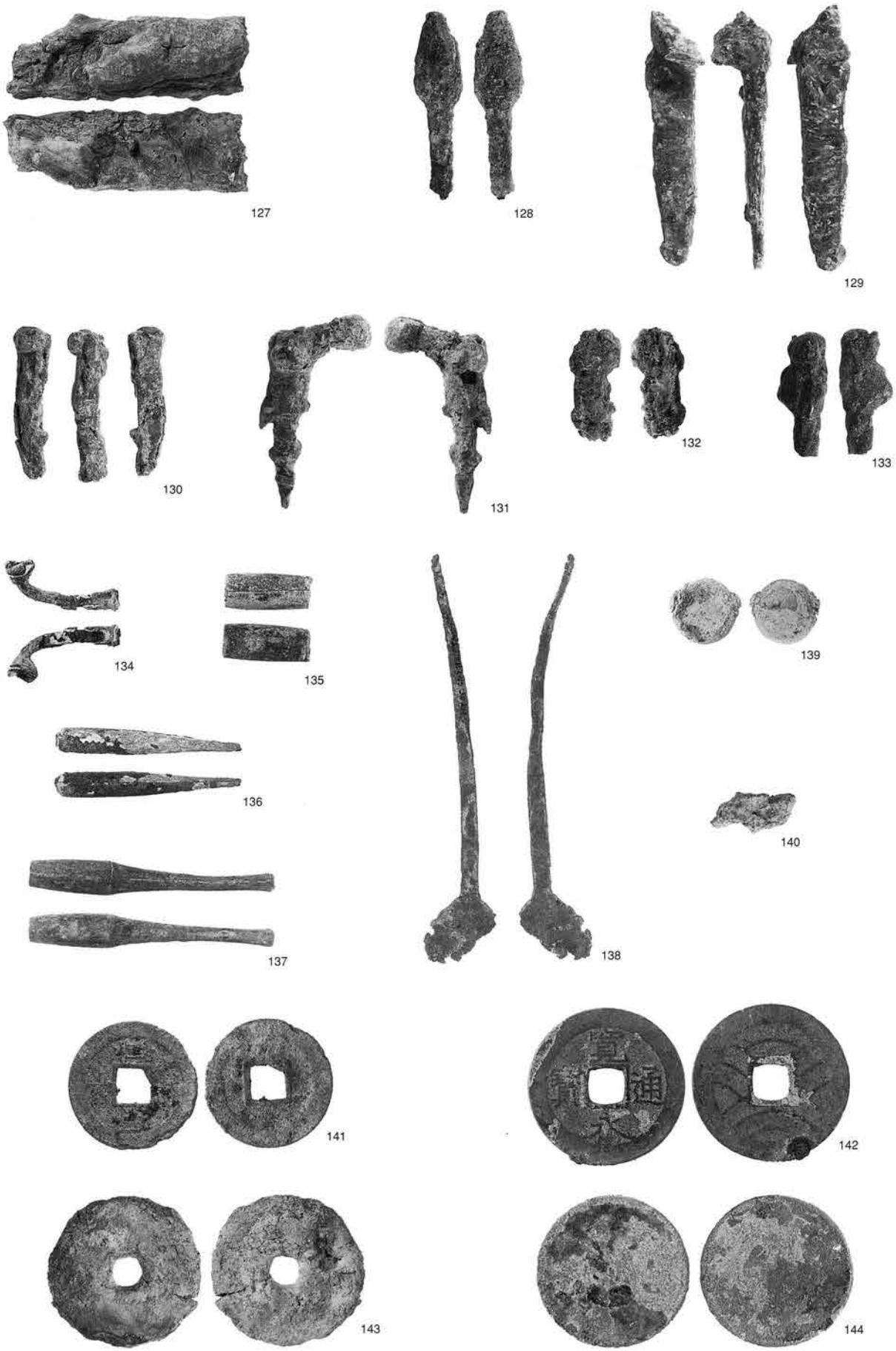
写真図版64　近世陶器②



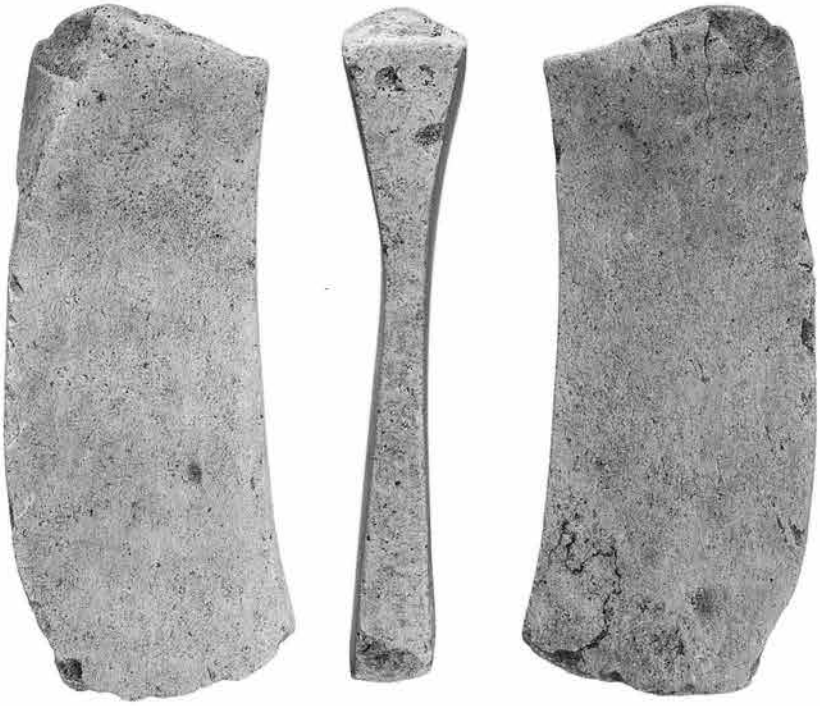
写真図版65　近世陶器③、近世磁器①



写真図版66　近世磁器②


127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144

写真図版67　金属製品



145

146

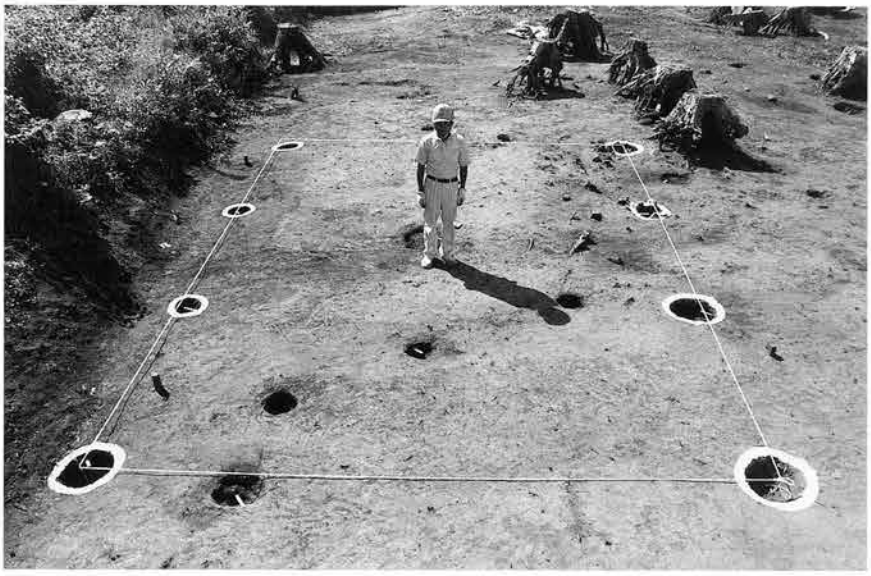
147

148

149

150

写真図版68　石製品

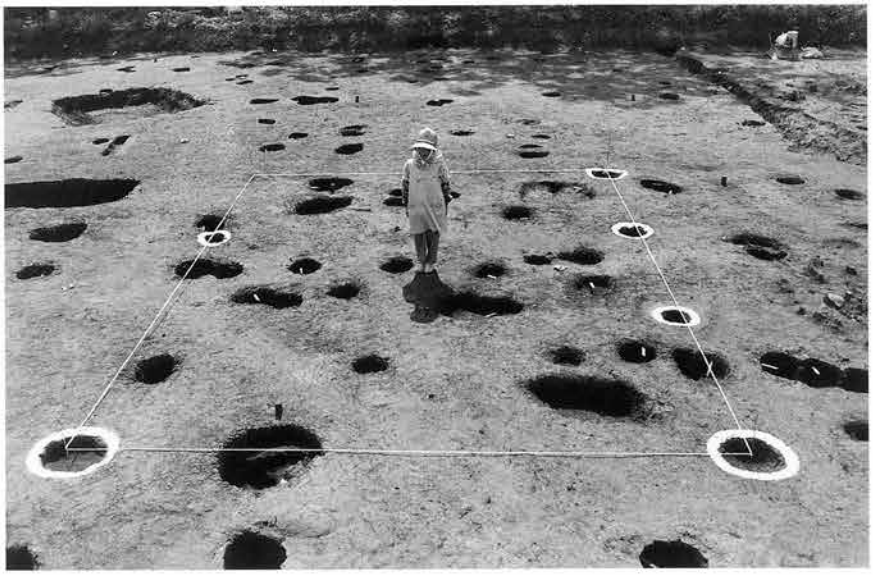


SB35　平面（東から）

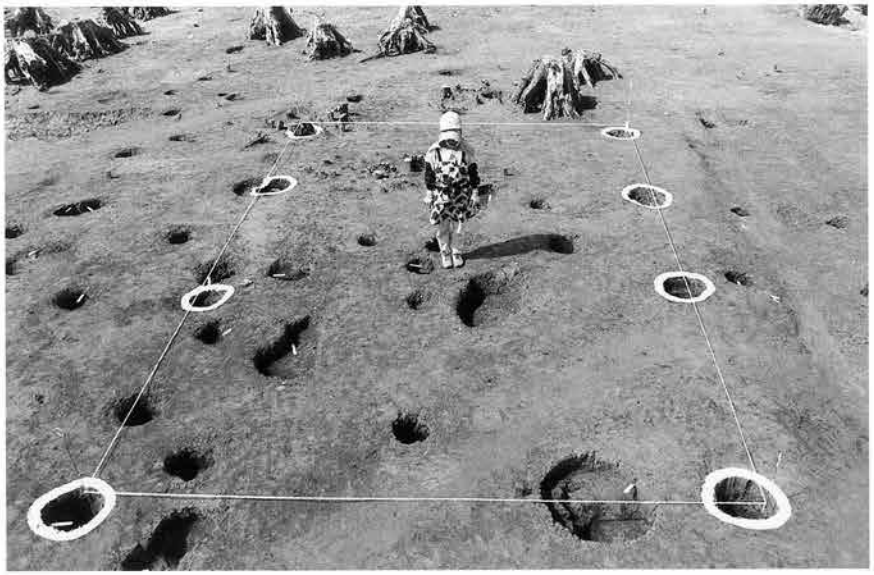
SB36　平面（南から）

SB37　平面（東から）

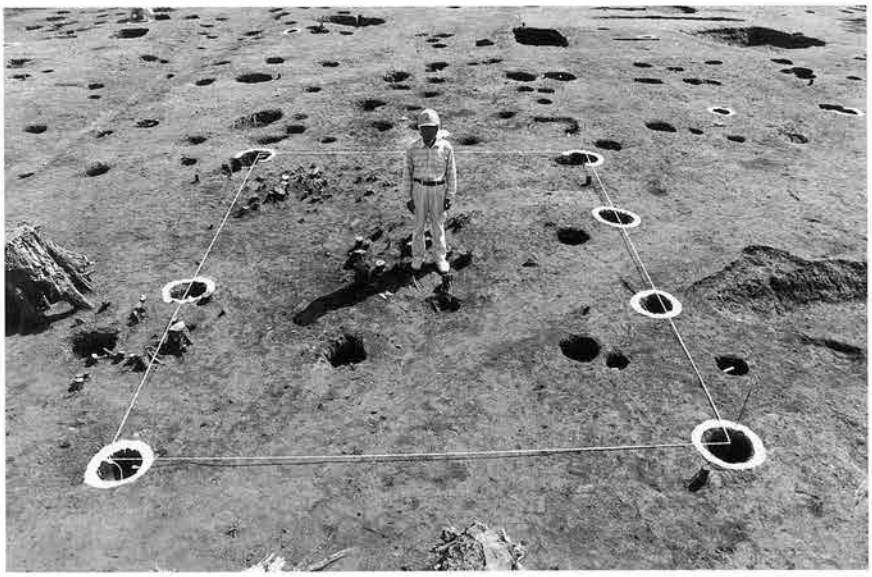
写真図版69　SB35～37平面



SB38　平面（北から）

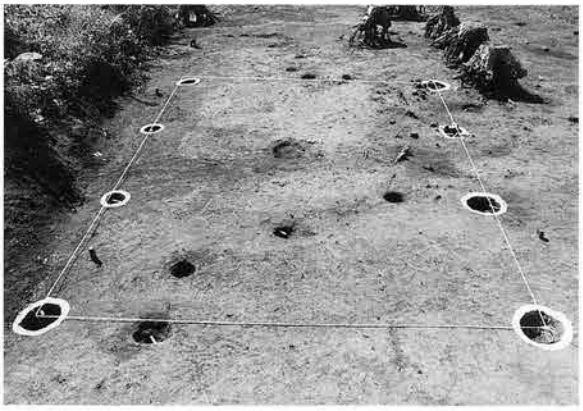


SB39　平面（東から）



SB41　平面（西から）

写真図版70　SB38・39・41平面



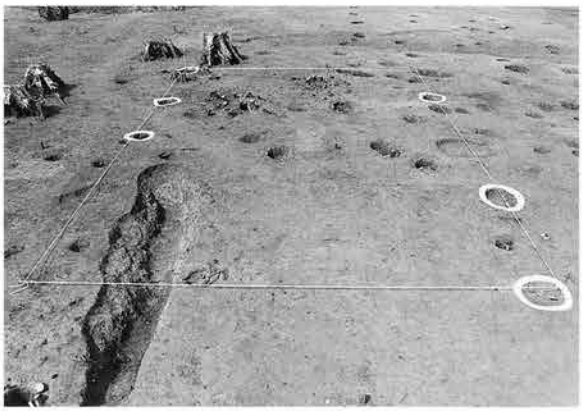
SB35　平面（東から）

SB36　平面（南から）

SB37　平面（東から）

SB38　平面（北から）

SB39　平面（東から）



SB40　平面（南から）

SB41　平面（西から）

SB40　平面（南から）

写真図版71　掘立柱建物平面（1）

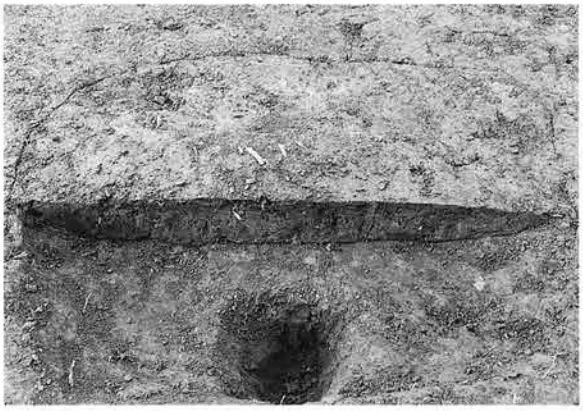
SK１　平面（北から）

SK１　断面（南から）

SK２　平面（北から）

SK２　断面（南から）

SK３　平面（南から）

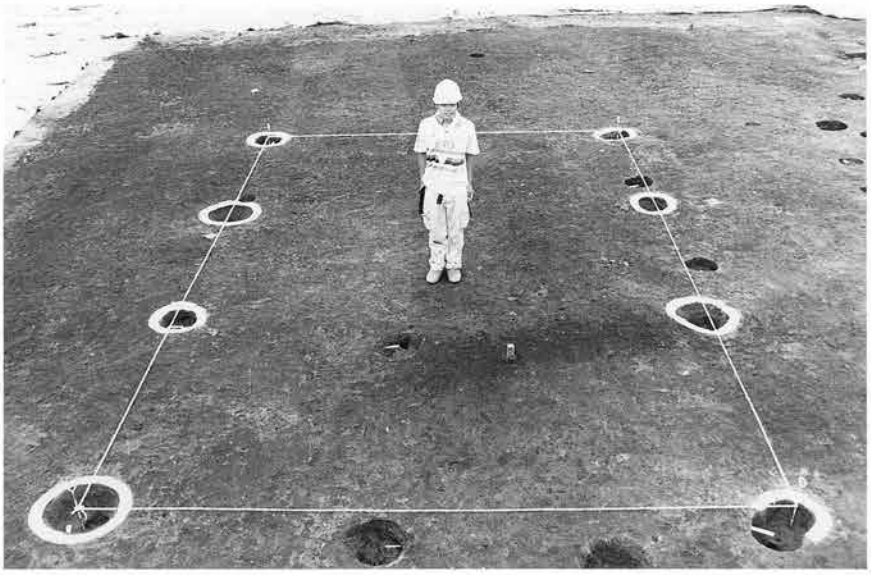


SK３　断面（南から）

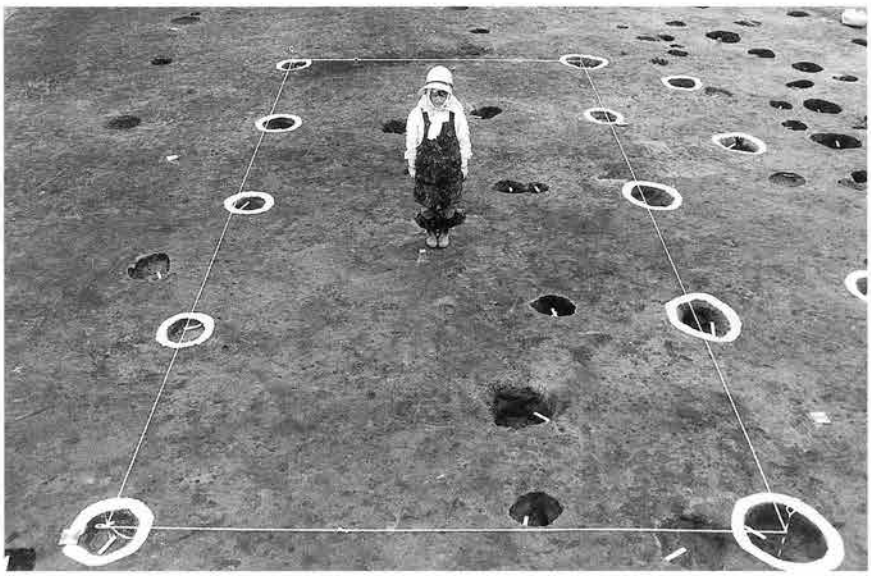
SK４　平面（南から）

SK４　断面（南から）

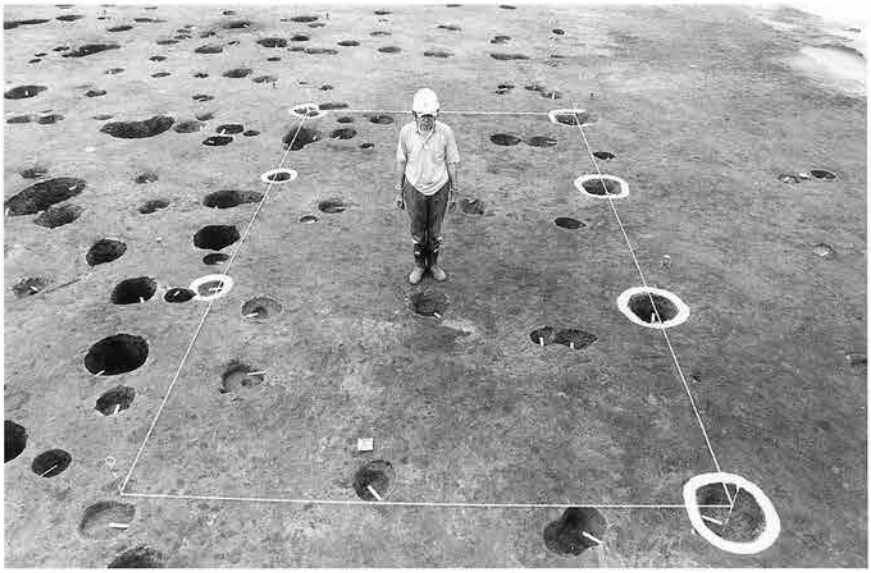
写真図版72　土坑（１）



SB１　平面（西から）



SB２　平面（西から）

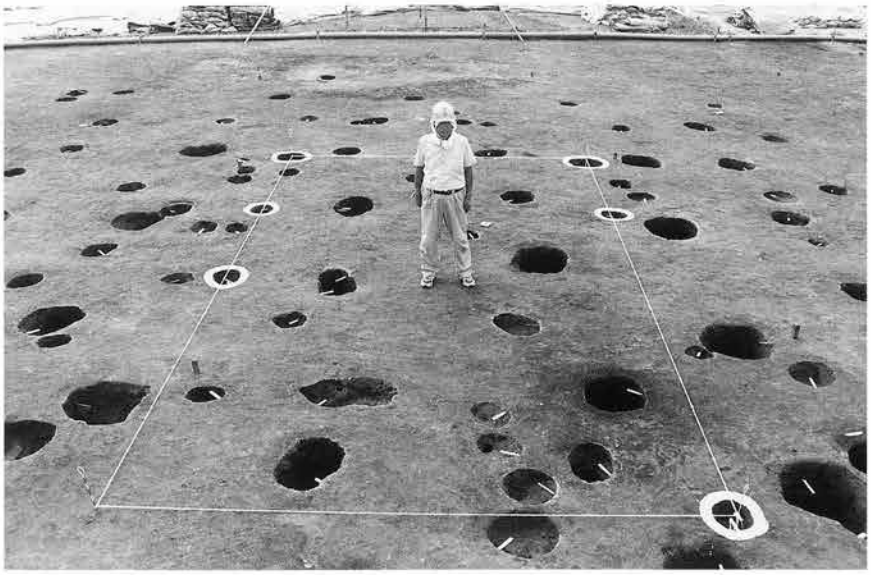


SB３　平面（西から）

写真図版73　SB１～３平面

SB４　平面（東から）

SB５　平面（西から）

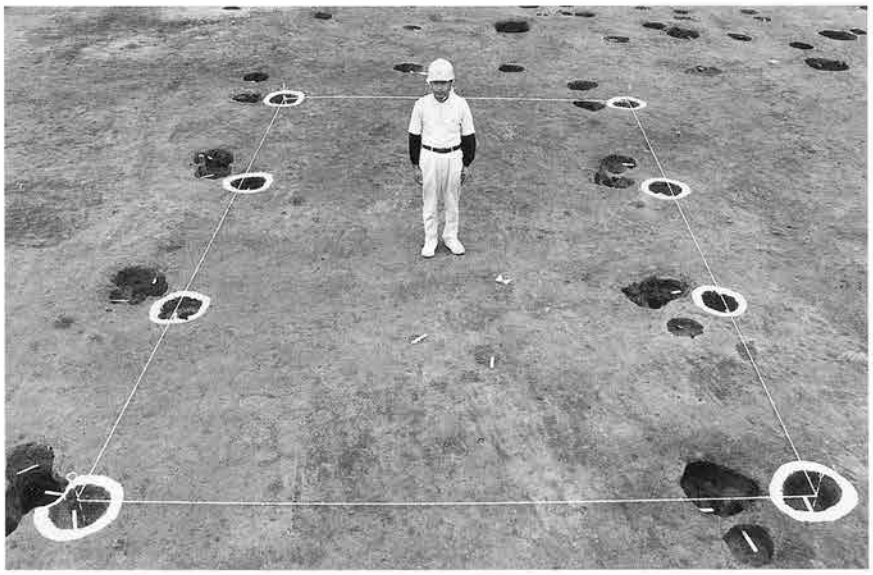


SB６　平面（東から）

写真図版74　SB４～６平面

SB９　平面（南から）

SB10　平面（南から）

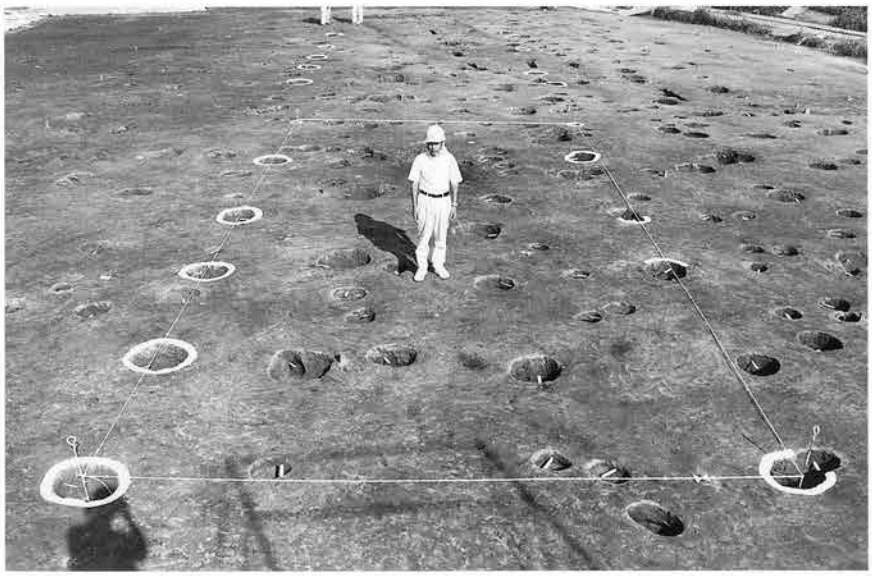


SB11　平面（南から）

写真図版75　SB９～11平面

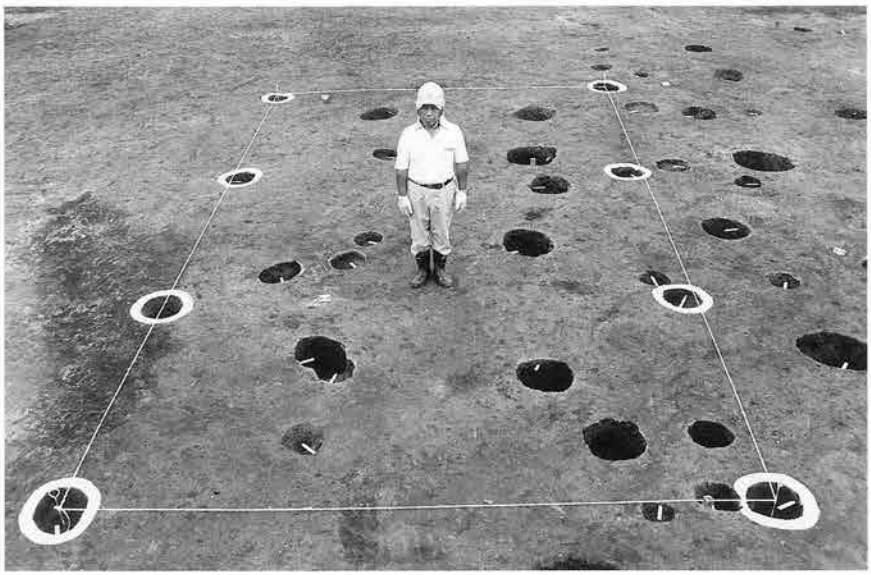
SB12　平面（東から）

SB13　平面（東から）



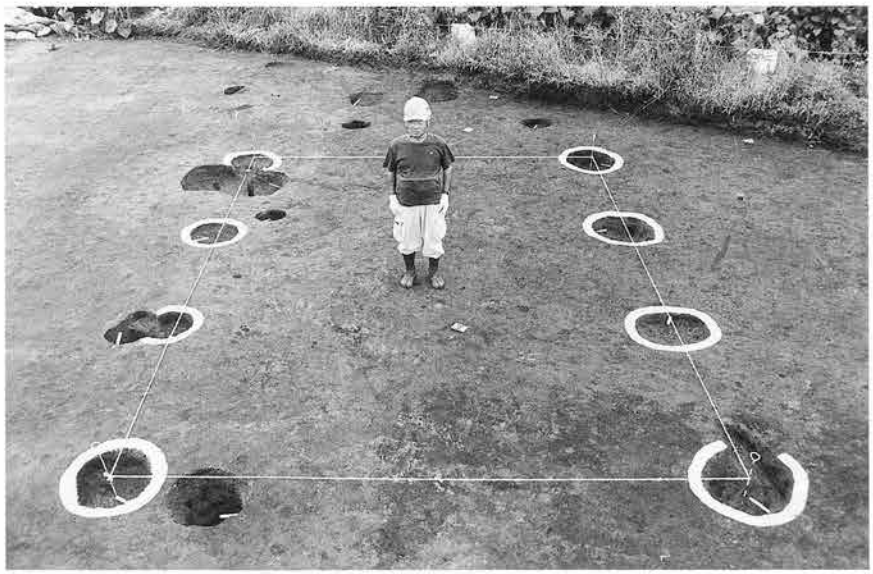
SB14　平面（西から）

写真図版76　SB12～14平面



SB15　平面（南から）

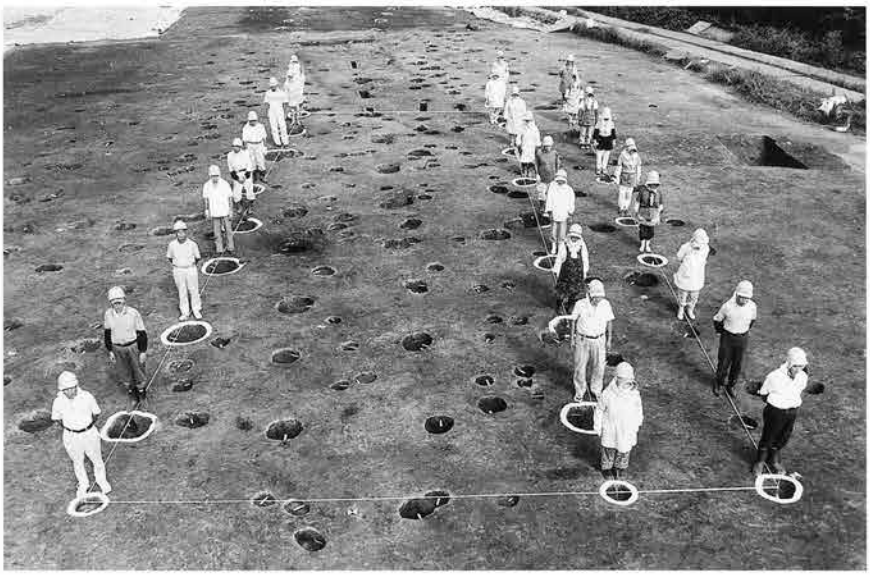
SB17　平面（東から）



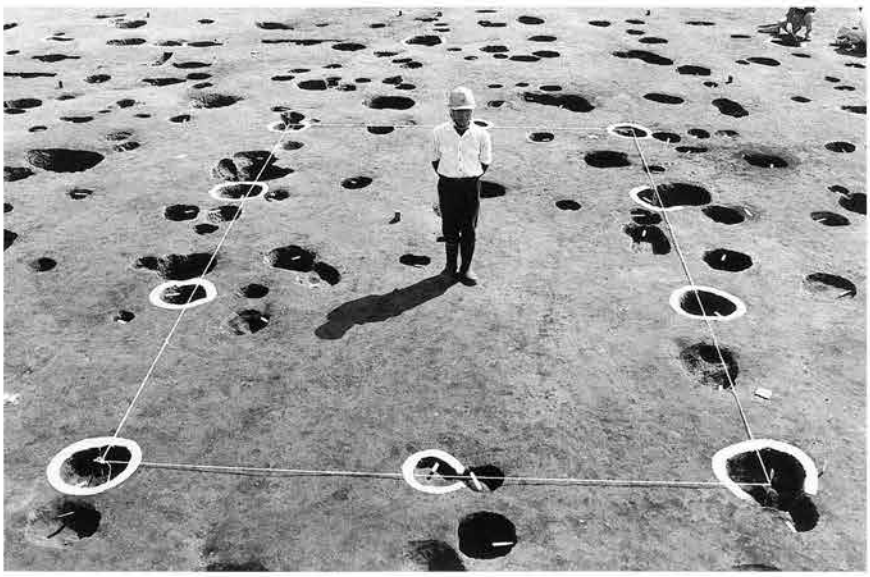
SB18　平面（東から）

写真図版77　SB15・17・18

SB19　平面（東から）



SB20　平面（西から）

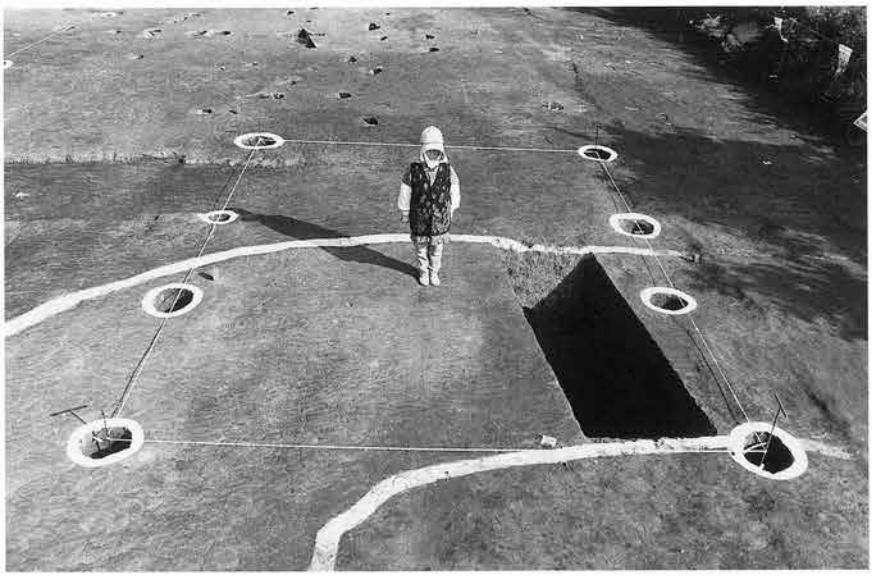


SB21　平面（北から）

写真図版78　SB19～21平面

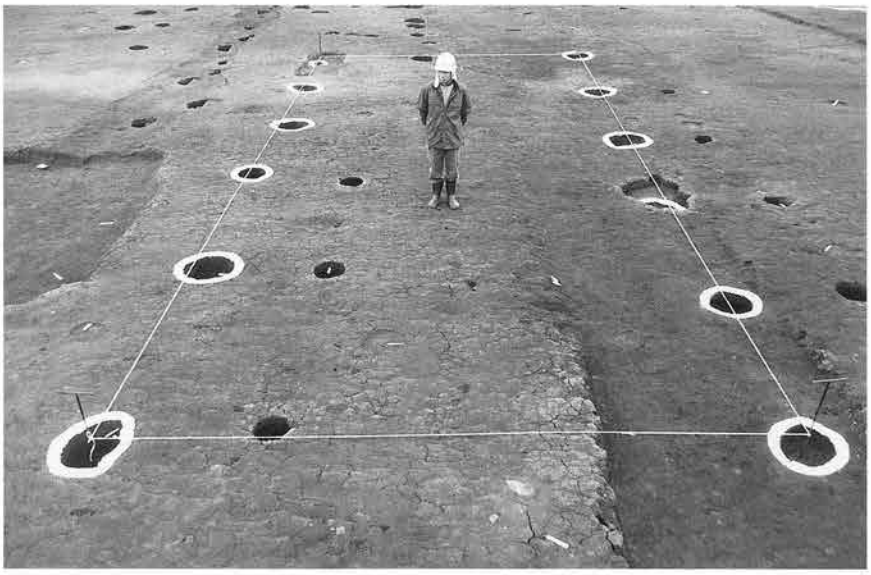
SB22　平面（西から）

SB24　平面（東から）



SB26　平面（西から）

写真図版79　SB22・24・26平面



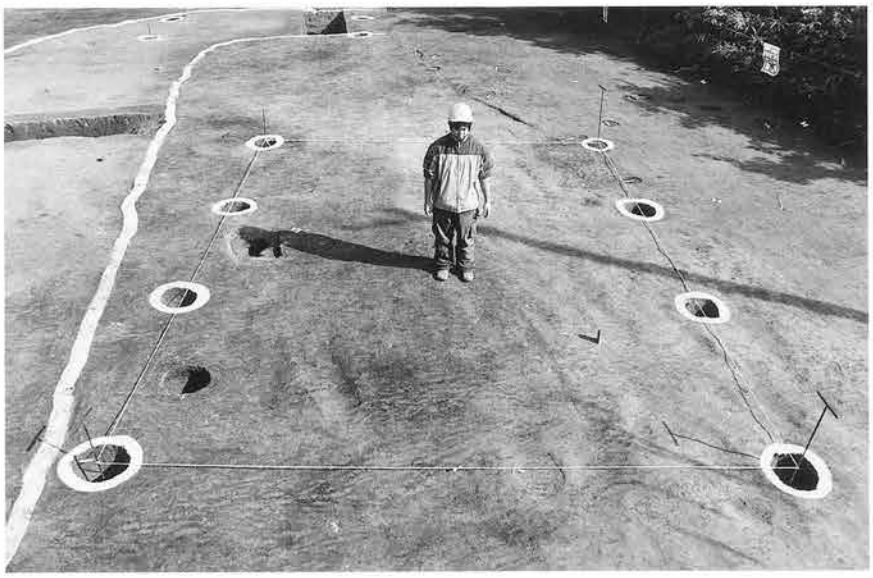
SB27　平面（北から）

SB29　平面（東から）

SB30　平面（南から）

写真図版80　SB27・29・30平面

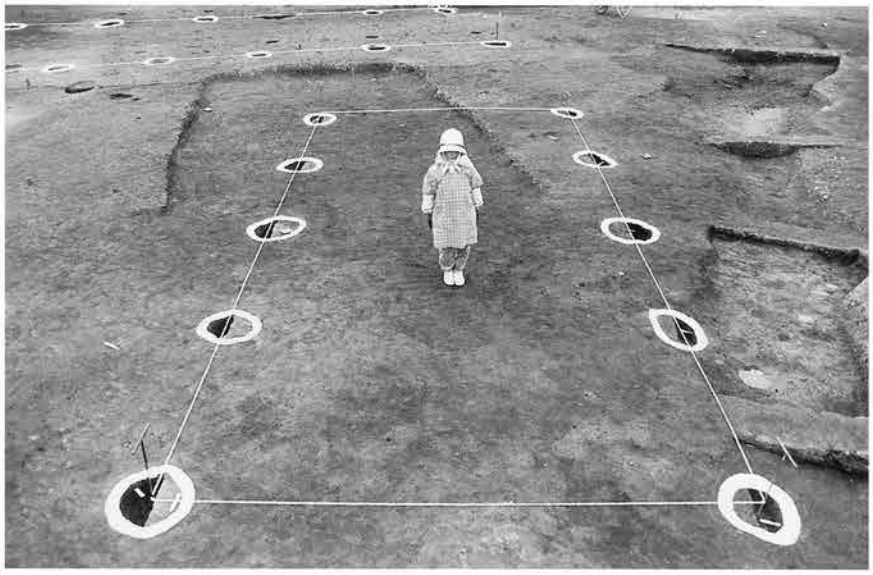
SB31　平面（西から）



SB32　平面（西から）

SB33　平面（西から）

写真図版81　SB31～33平面

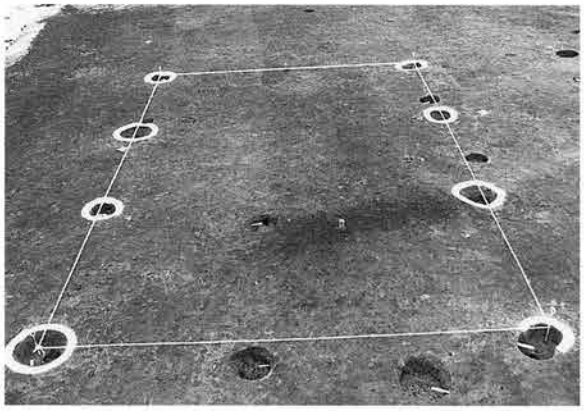


SB34　平面（西から）

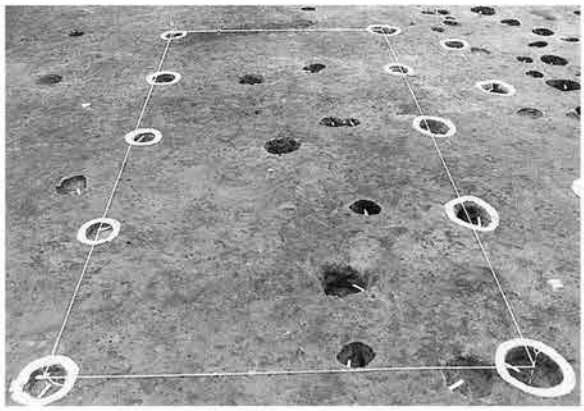
現地説明会風景３（六日市場遺跡）

現地説明会風景４（接待館遺跡）

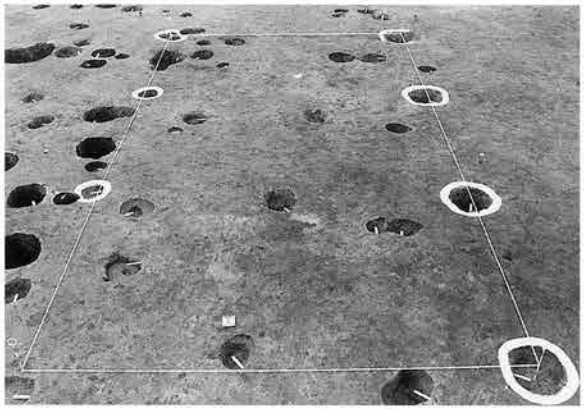
写真図版82　SB34・現地説明会



SB1　平面（西から）

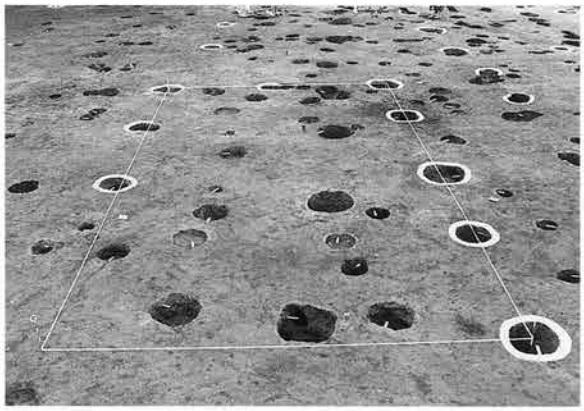


SB2　平面（西から）



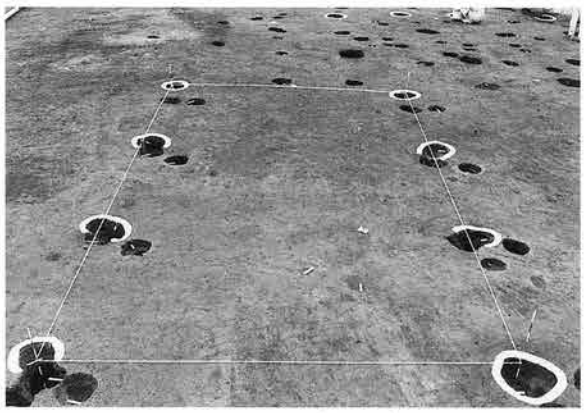
SB3　平面（東から）

SB4　平面（西から）



SB5　平面（西から）

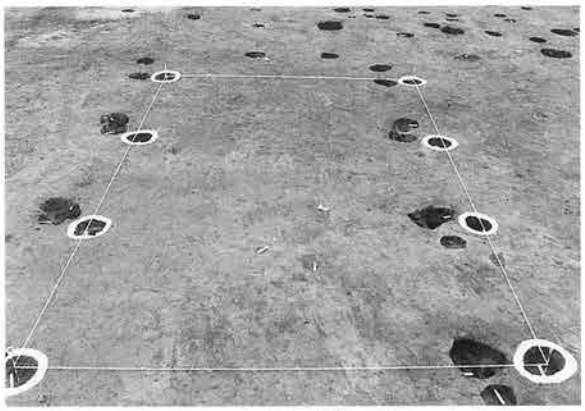
SB6　平面（東から）



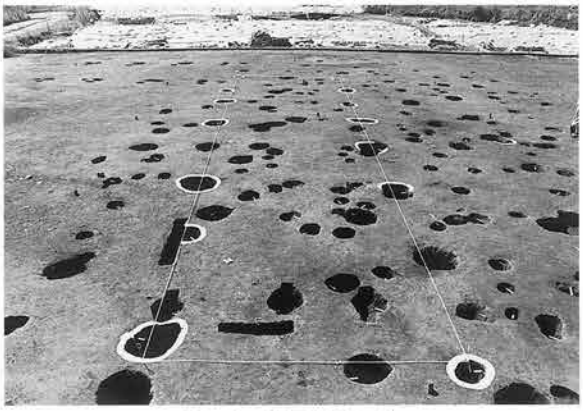
SB9　平面（南から）

SB10　平面（南から）

写真図版83　掘立柱建物平面（2）



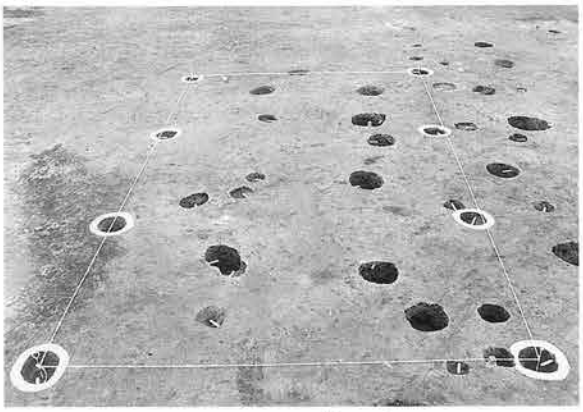
SB11　平面（南から）



SB12　平面（西から）

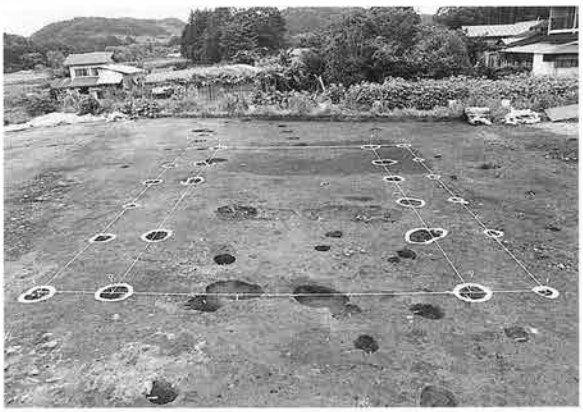
SB13　平面（東から）

SB14　平面（西から）

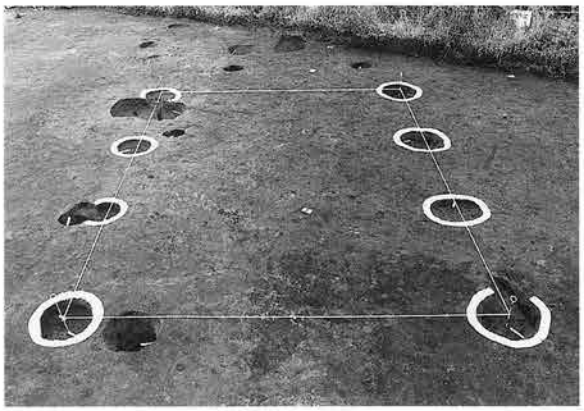


SB15　平面（南から）

SB14　平面（西から）

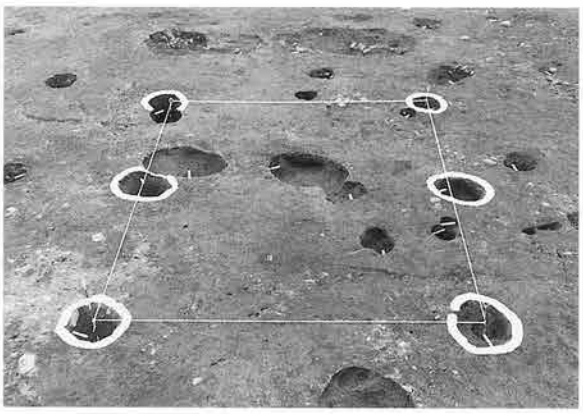


SB17　平面（西から）



SB18　平面（東から）

写真図版84　掘立柱建物平面（3）



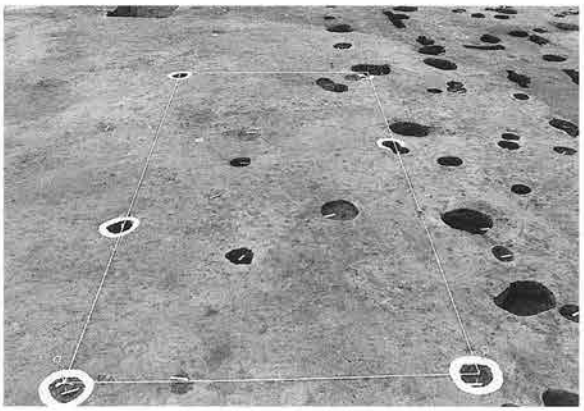
SB19　平面（南から）

SB20　平面（西から）

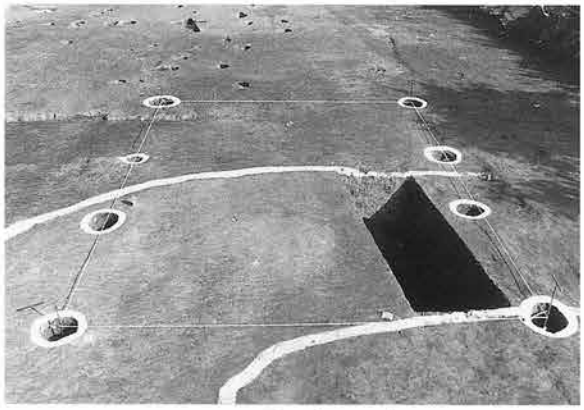
SB21　平面（北から）

SB20　平面（西から）

SB22　平面（西から）



SB24　平面（東から）



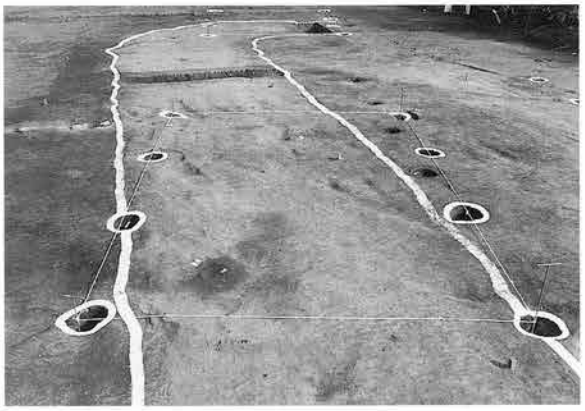
SB26　平面（西から）

SB27　平面（北から）

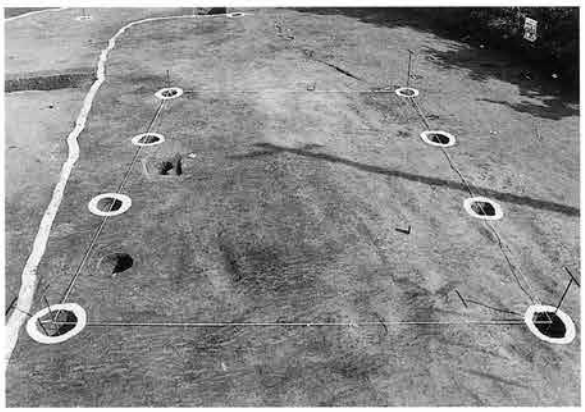
写真図版85　掘立柱建物平面（4）

SB29　平面（東から）

SB30　平面（南から）

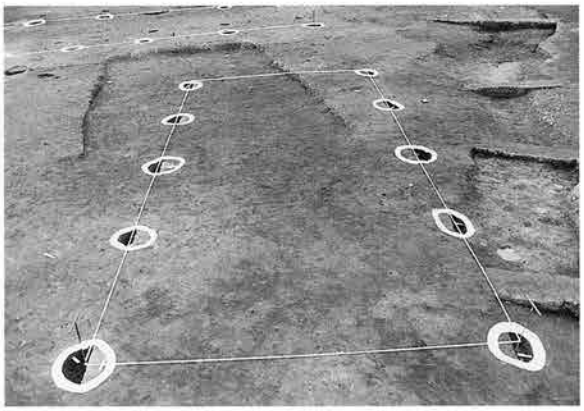


SB31　平面（西から）



SB32　平面（西から）

SB33　平面（西から）



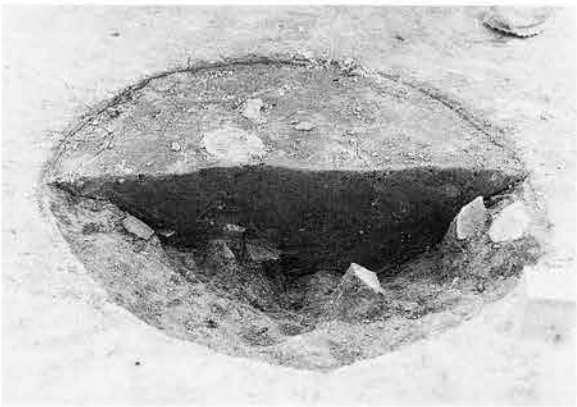
SB34　平面（東から）

遺物出土状況（SB３P111）

遺物出土状況（SB26P515）

写真図版86　掘立柱建物平面（５）

SK5　平面（西から）



SB5　断面（東から）

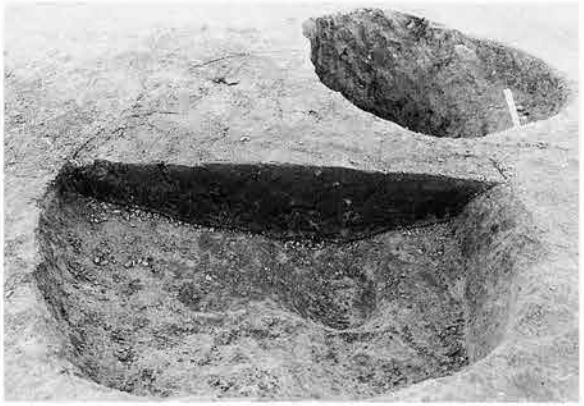
SK5　遺物出土状況（南から）

SK7　平面（北から）

SK6　平面（東から）

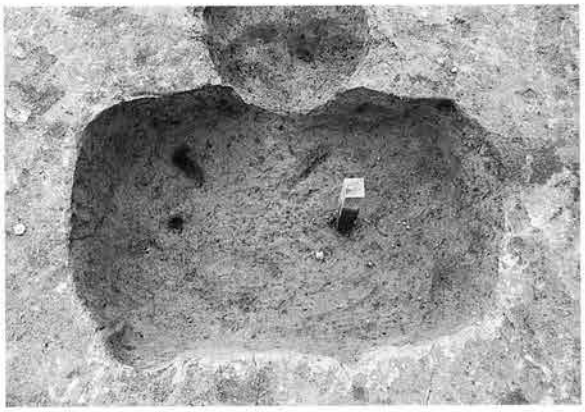
SK6　断面（西から）

SK8　平面（北から）

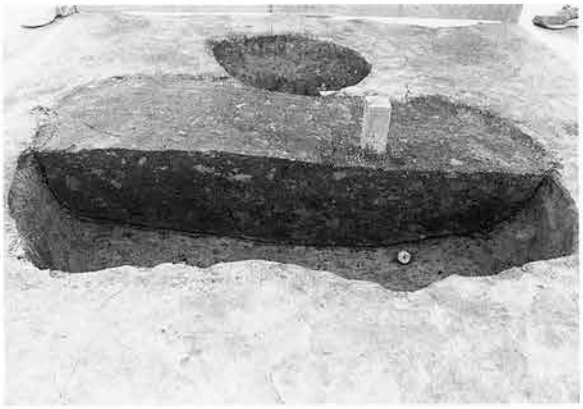


SK8　断面（西から）

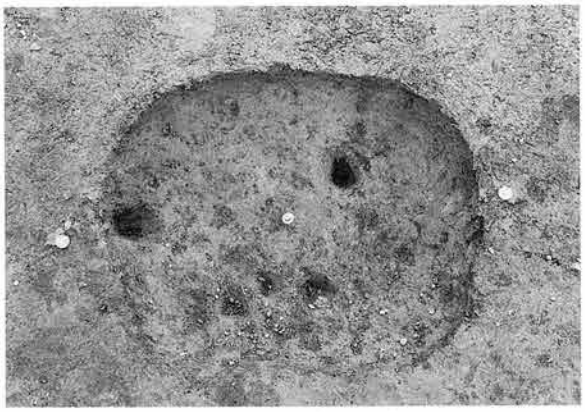
写真図版87　土坑（2）



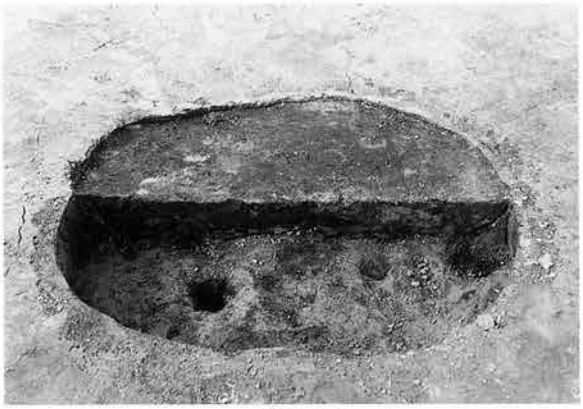
SK9　平面（東から）



SK9　断面（東から）



SK10　平面（北から）

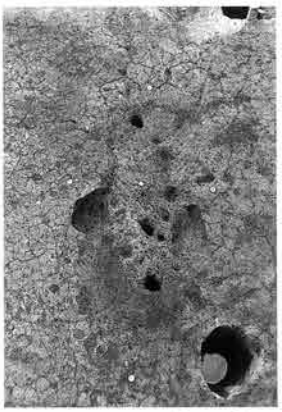


SK10　断面（南から）

SK11　平面（西から）

SK11　断面（西から）

SK12　平面（東から）



SK22　平面（東から）

写真図版88　土坑（3）

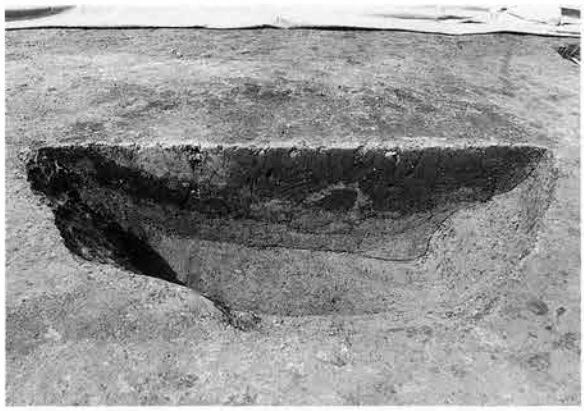
SK13　平面（東から）

SK13　断面（東から）

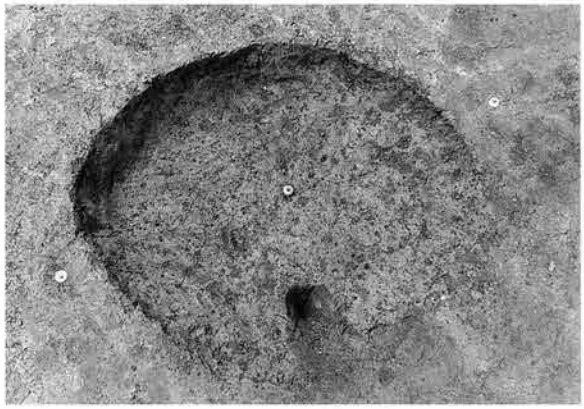
SK15　平面（西から）

SK15　平面（北から）

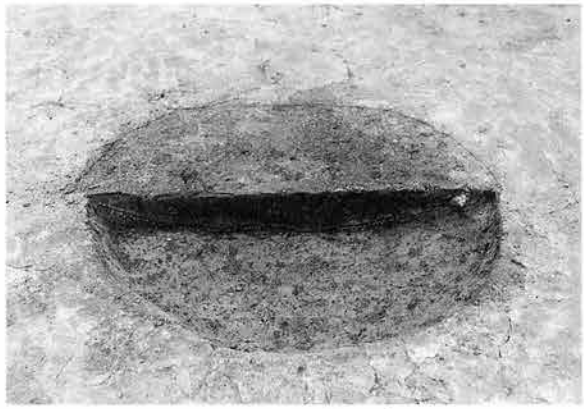
SK16　平面（北から）



SK16　断面（南から）



SK17　平面（北から）



SK17　断面（南から）

写真図版89　土坑（4）

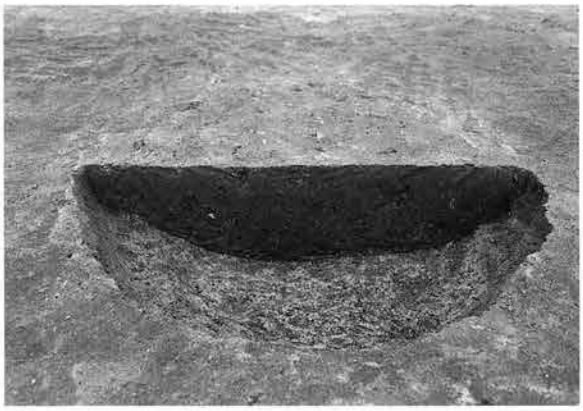
SK18　平面（北から）

SK18　断面（南から）

SK19　平面（南から）

SK19　断面（南から）

SK20　平面（北から）



SK20　断面（西から）

SK21　平面（南から）

SK21　断面（南から）

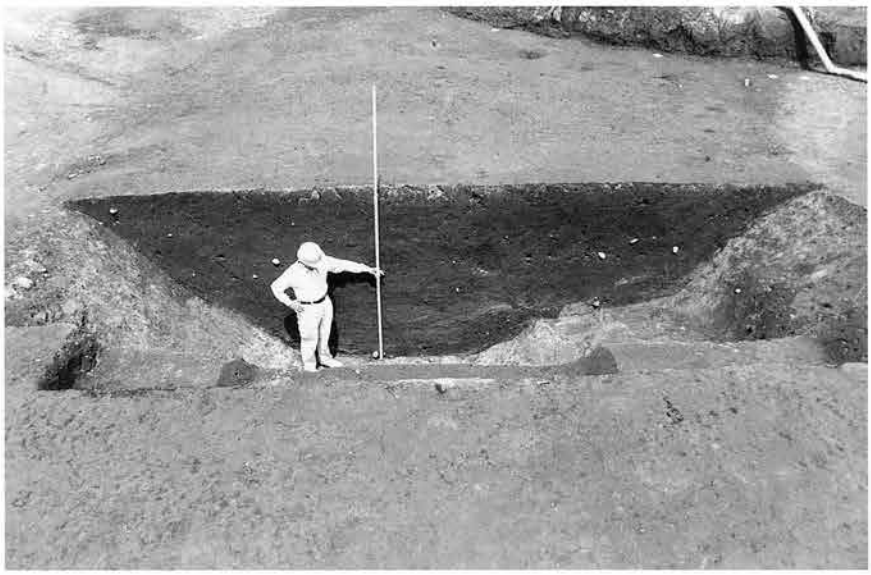
写真図版90　土坑（5）

SD１　西平面（南から）

SD１　東平面（南東から）

SD３　かわらけ出土状況
（ＶＫ３e付近）

写真図版91　SD１（１）・３（１）



a−a' 断面（南から）

b−b' 断面（南から）

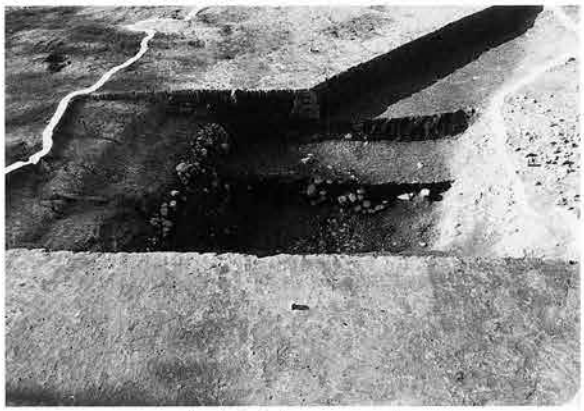
d−d' 断面（南から）

写真図版92　SD１（２）

SD１西　平面（VJ7e付近　南から）

SD１東　平面（VIL0i～1j　南から）

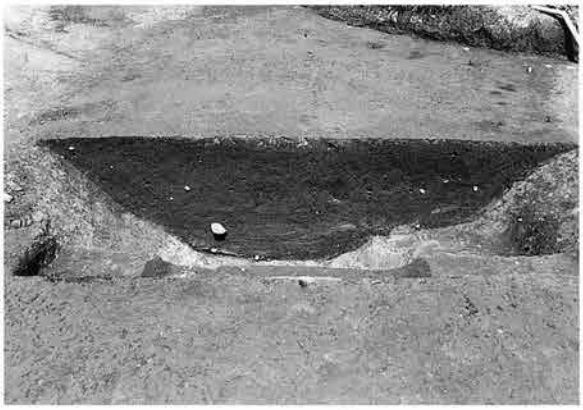
SD１西　平面（VJ2～5g　南から）



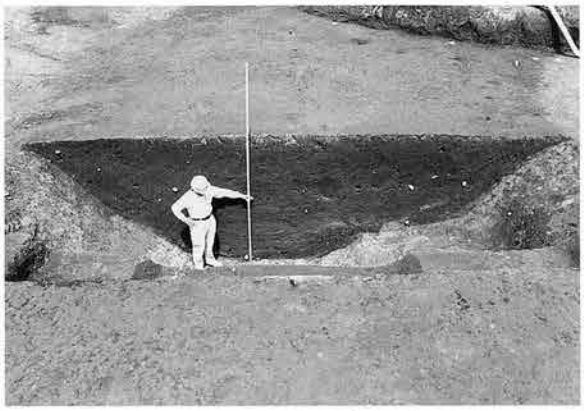
SD１東　平面（VM7b　南から）

SD１　b−b'断面

SD１東　平面（南東から）



SD１　a−a'断面



SD１　a−a'断面

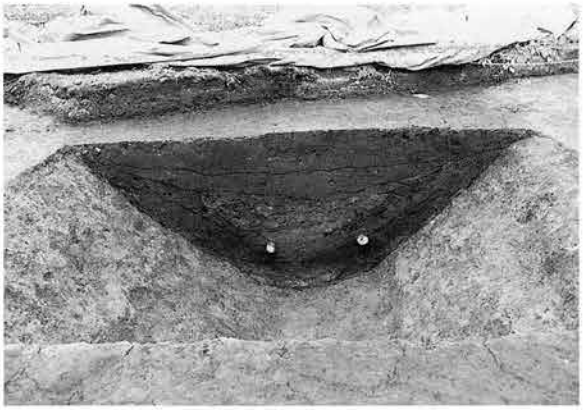
写真図版93　SD１（３）

SD１　d−d'断面

SD１　d−d'断面

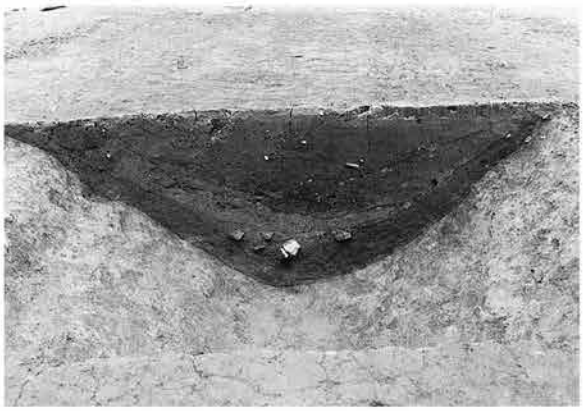
SD１　e−e'断面

SD１　かわらけ出土状況（VM7b）

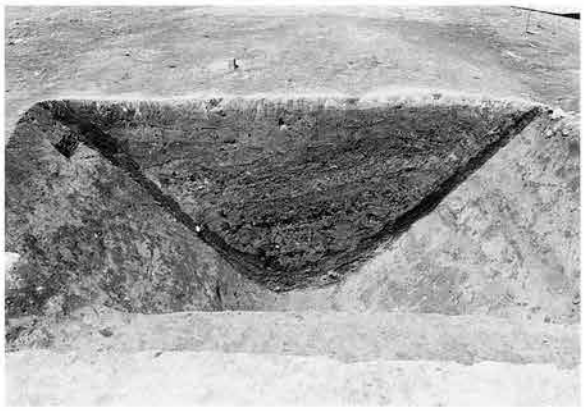


SD２　a−a'断面

SD１西　馬歯出土状況（VJ4g）



SD２　b−b'断面

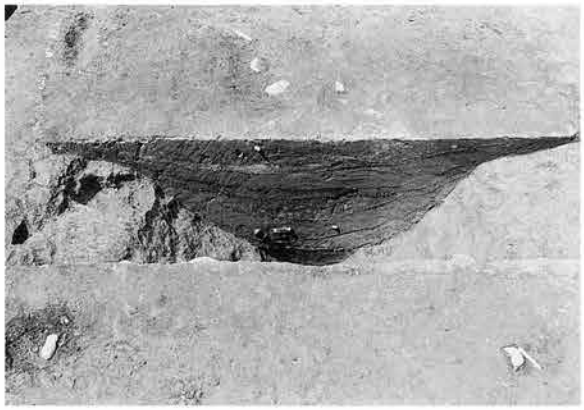


SD２　e−e'断面

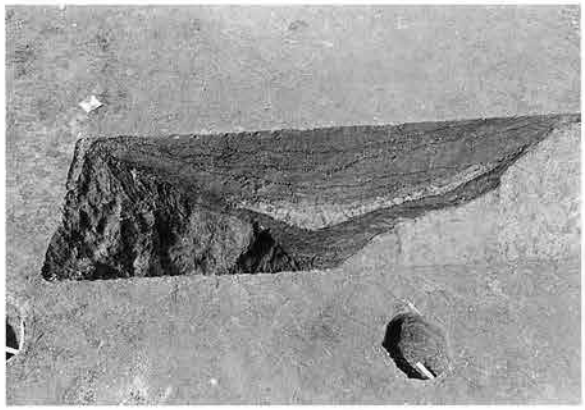
写真図版94　SD１（4）・2

SD３　a－a'断面

SD３　b－b'断面



SD３　c－c'断面



SD３　e－e'断面

SD３　かわらけ出土状況（VK３e）

SD３　かわらけ出土状況（VK３e）

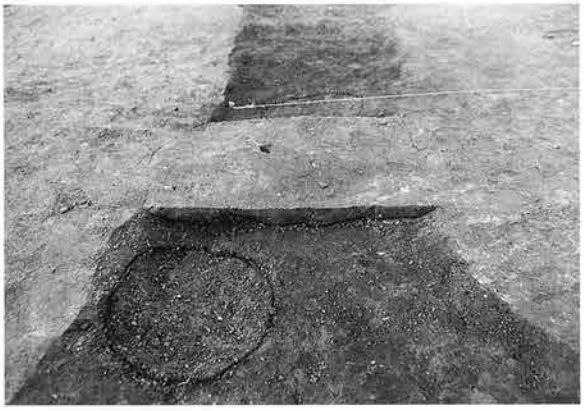
SD３　かわらけ出土状況（VK３e）

SD３　かわらけ出土状況（VK３e）

写真図版95　SD３（２）

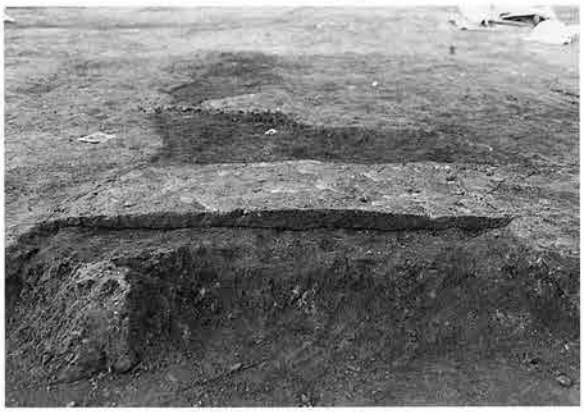
SD４　平面（南から）

SD４　平面（北から）



SD４　a－a'断面

SD４　b－b'断面



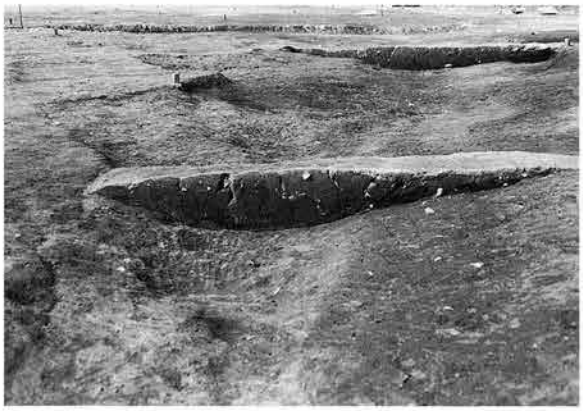
SD４　c－c'断面

SD６　平面（南東から）

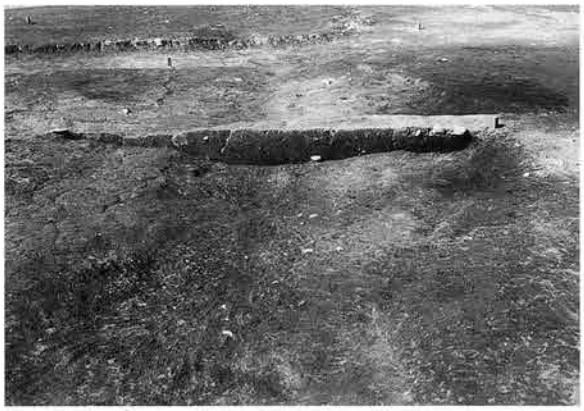
SD６　平面（東から）

SD６　平面（南東から）

写真図版96　SD４・６（１）



SD6　a−a'断面



SD6　b−b'断面

SD6　d−d'断面

SD6　e−e'断面

SD6　f−f'断面

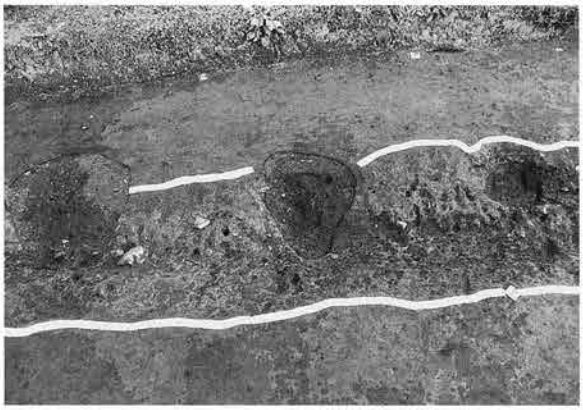
SD6　g−g'断面

SD6　h−h'断面

SD6　i−i'断面

写真図版97　SD6（2）

VKグリッド付近柱穴（南から）



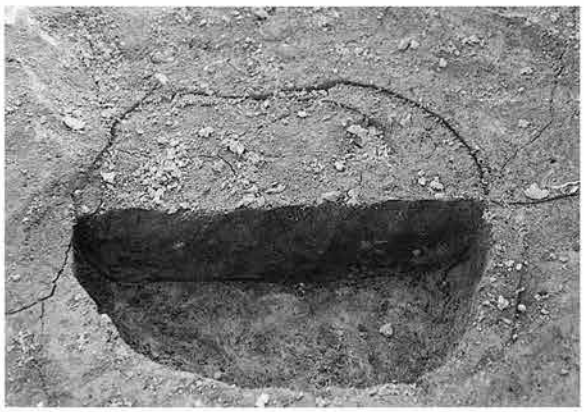
P1132・1133・1134検出状況（南から）

SB34　P681断面

SB34　P683断面

SB34　P750断面

SB34　P971



SB34　P972断面

衣川（北東から）

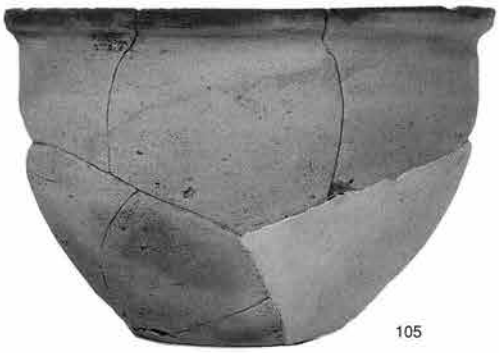
写真図版98　SB34柱穴他

1

2

101

102


105

103

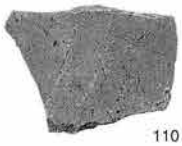
104

106

107

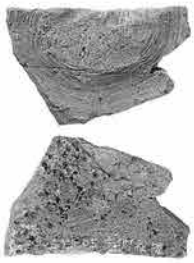
108

109


110

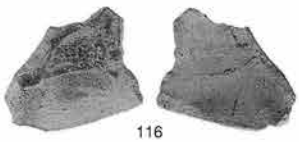
111

112


113

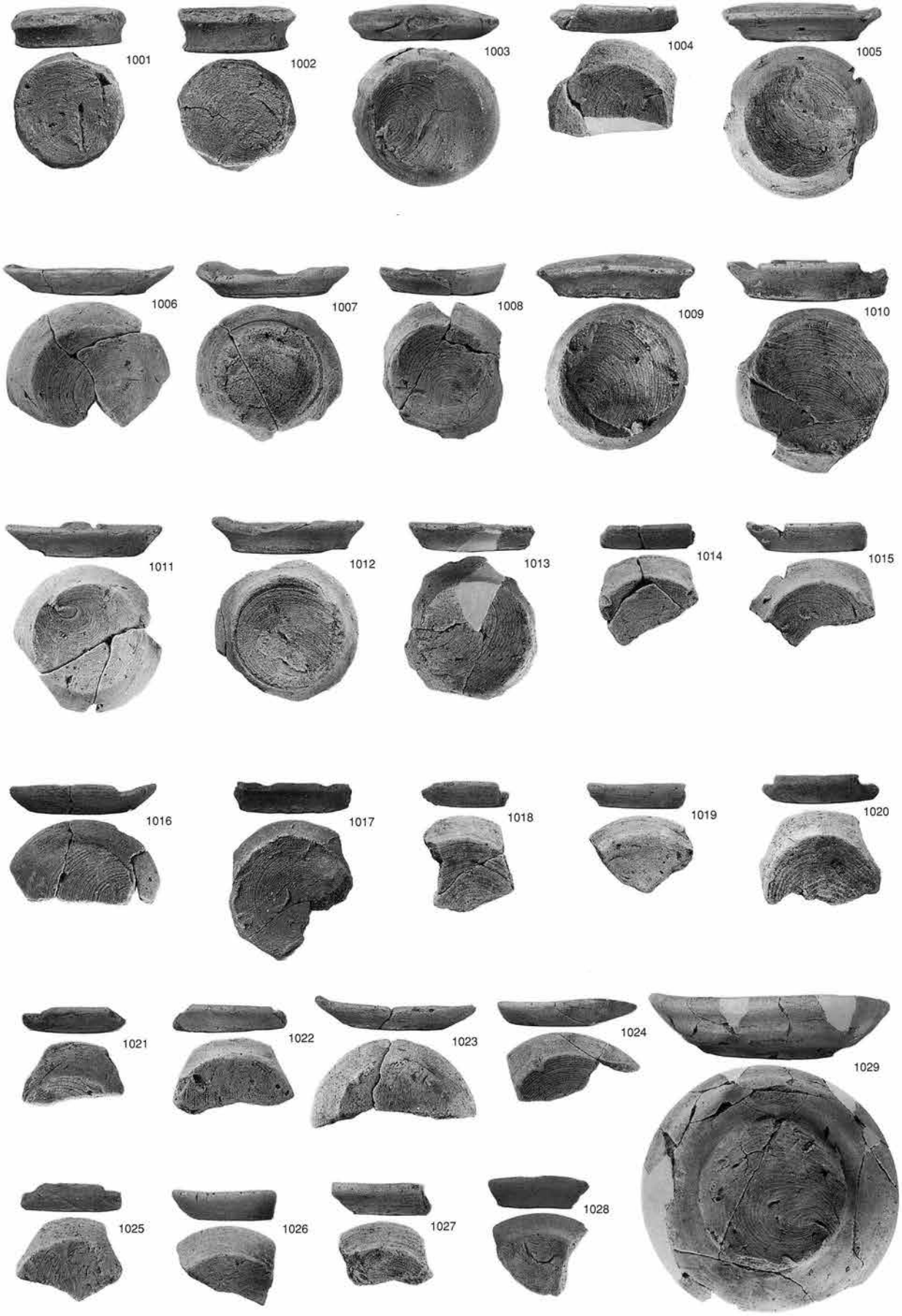
114

115

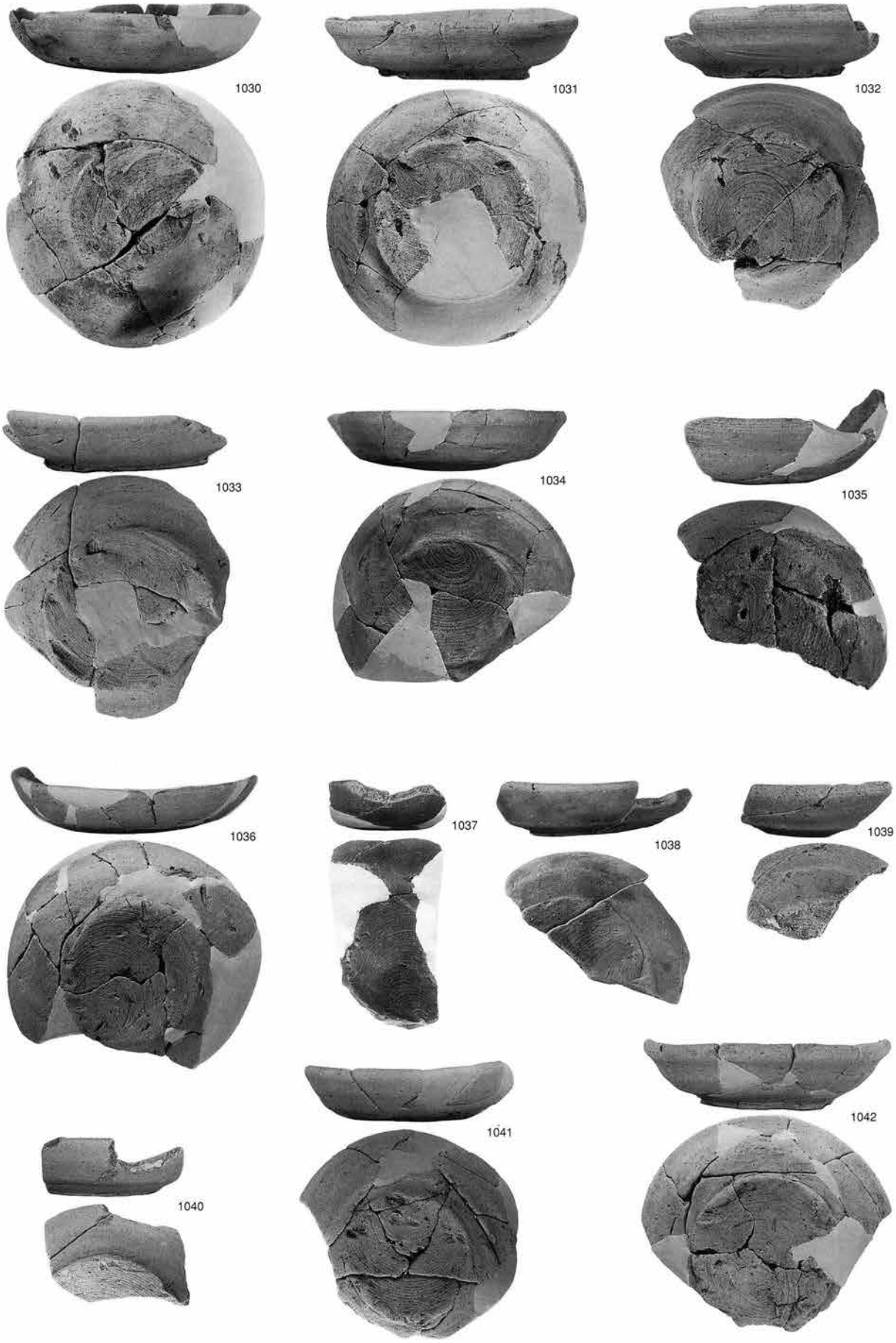

116

117

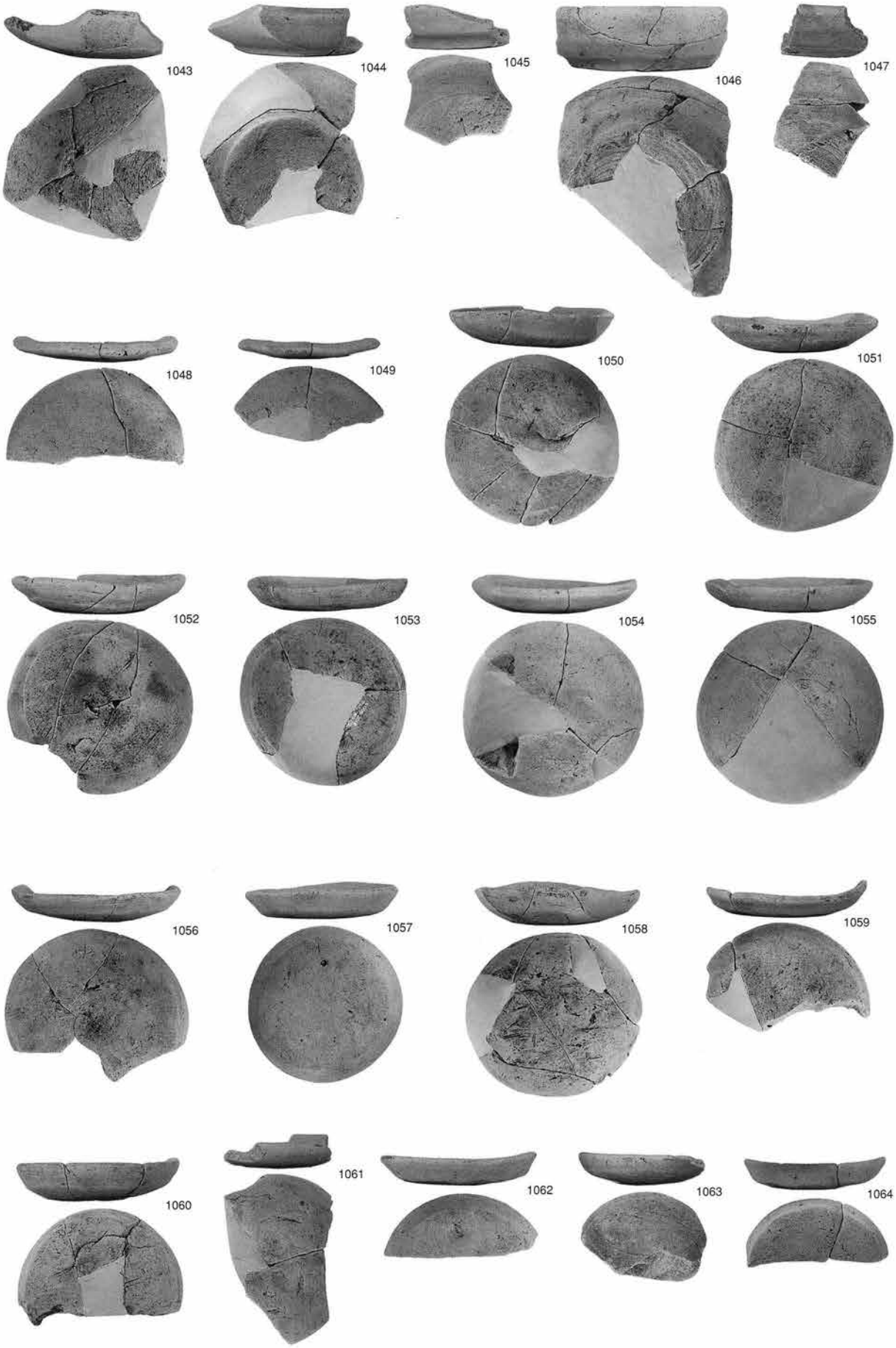
写真図版99　縄文土器・石器　土師器・須恵器



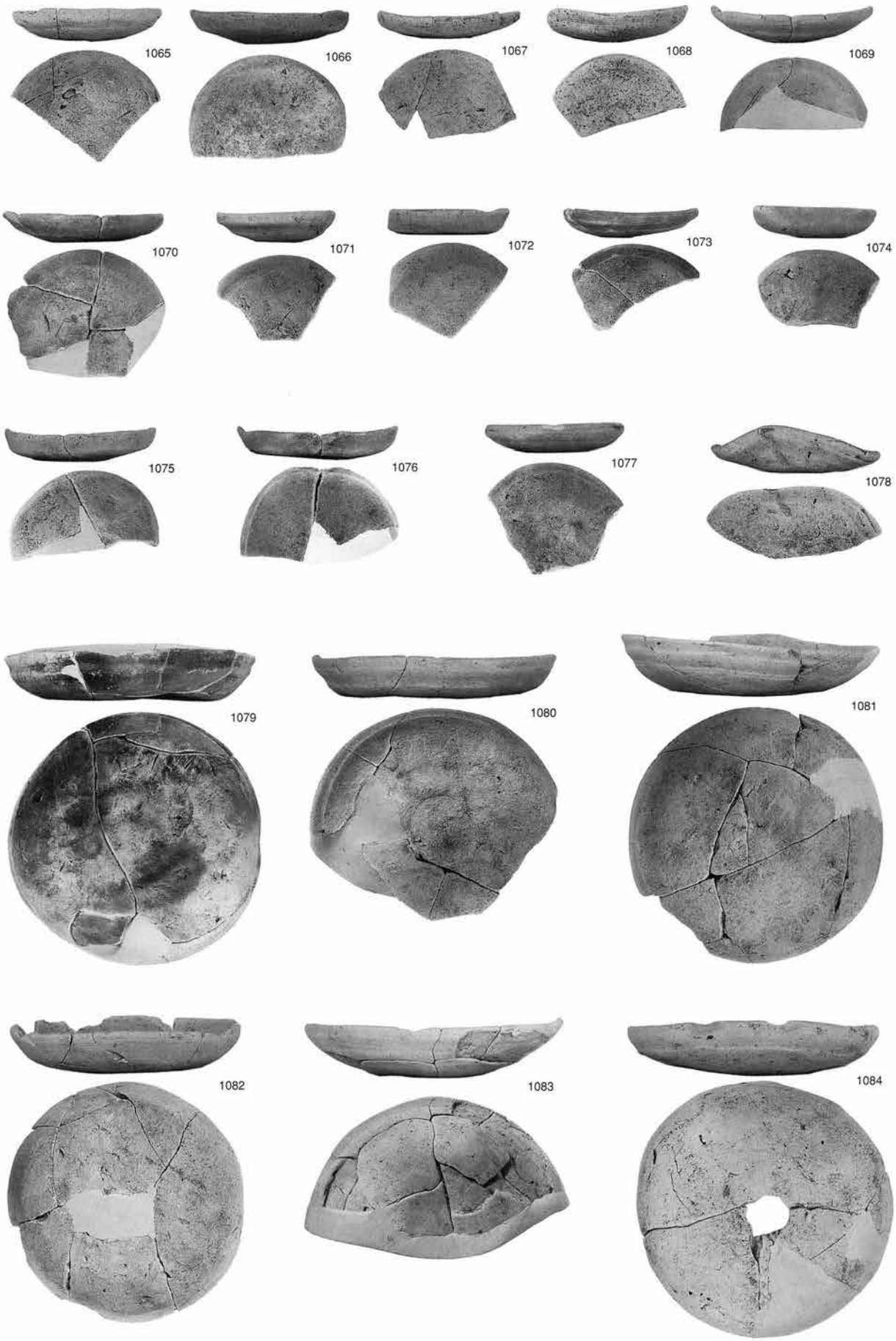
写真図版100　12世紀のかわらけ①



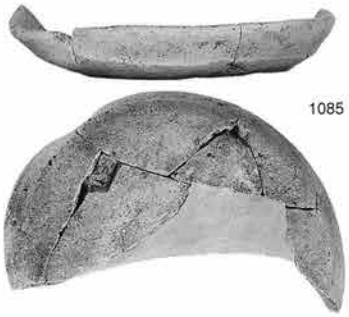
写真図版101　12世紀のかわらけ②

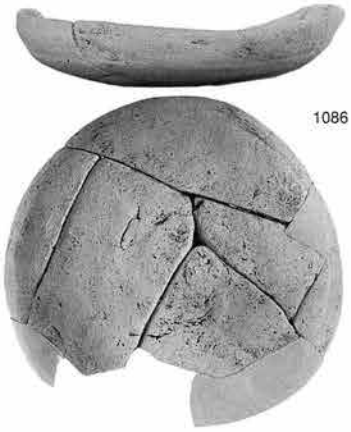


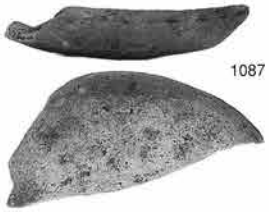
写真図版102　12世紀のかわらけ③



写真図版103　12世紀のかわらけ④


1085


1086

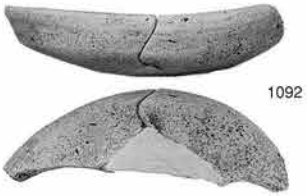

1087

1088

1089

1090

1091


1092

1093

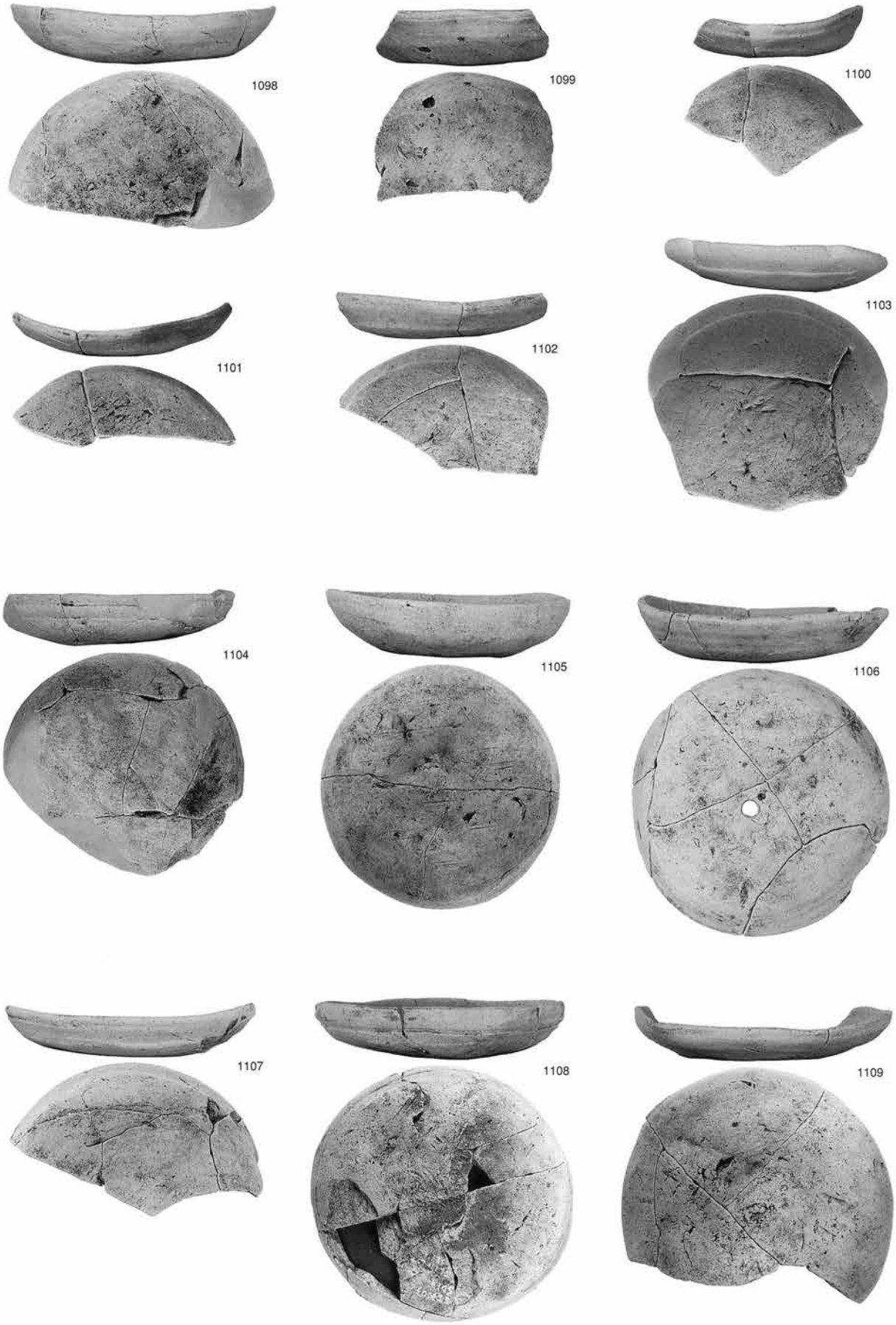
1094

1095

1096

1097

写真図版104　12世紀のかわらけ⑤

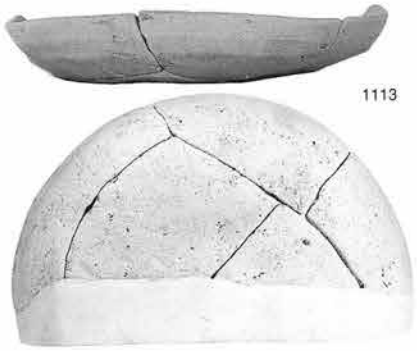


写真図版105　12世紀のかわらけ⑥

1110

1111

1112


1113

1114

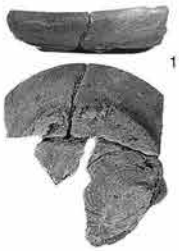
1115

1116

1117

1118

1119


1120

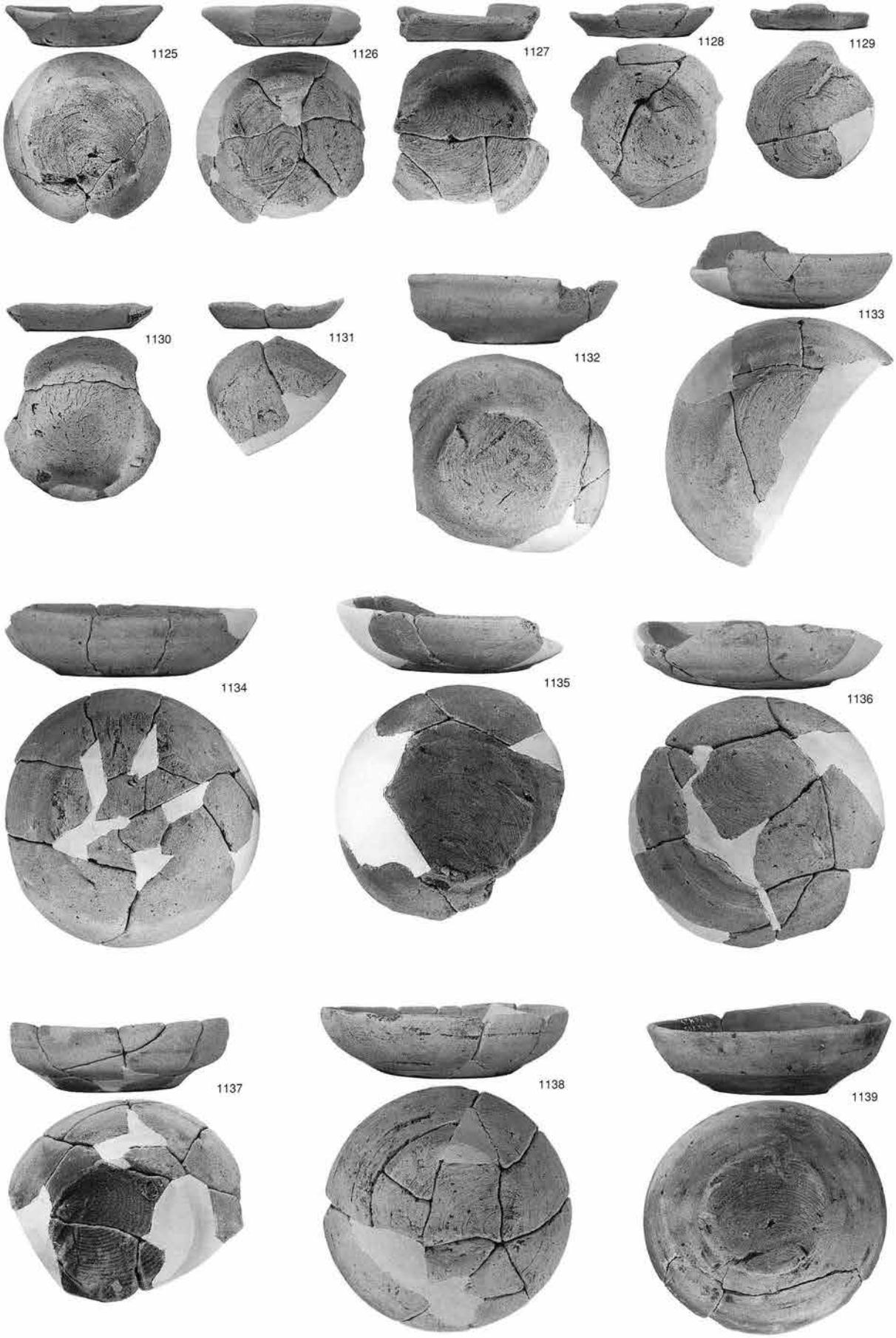
1121

1122

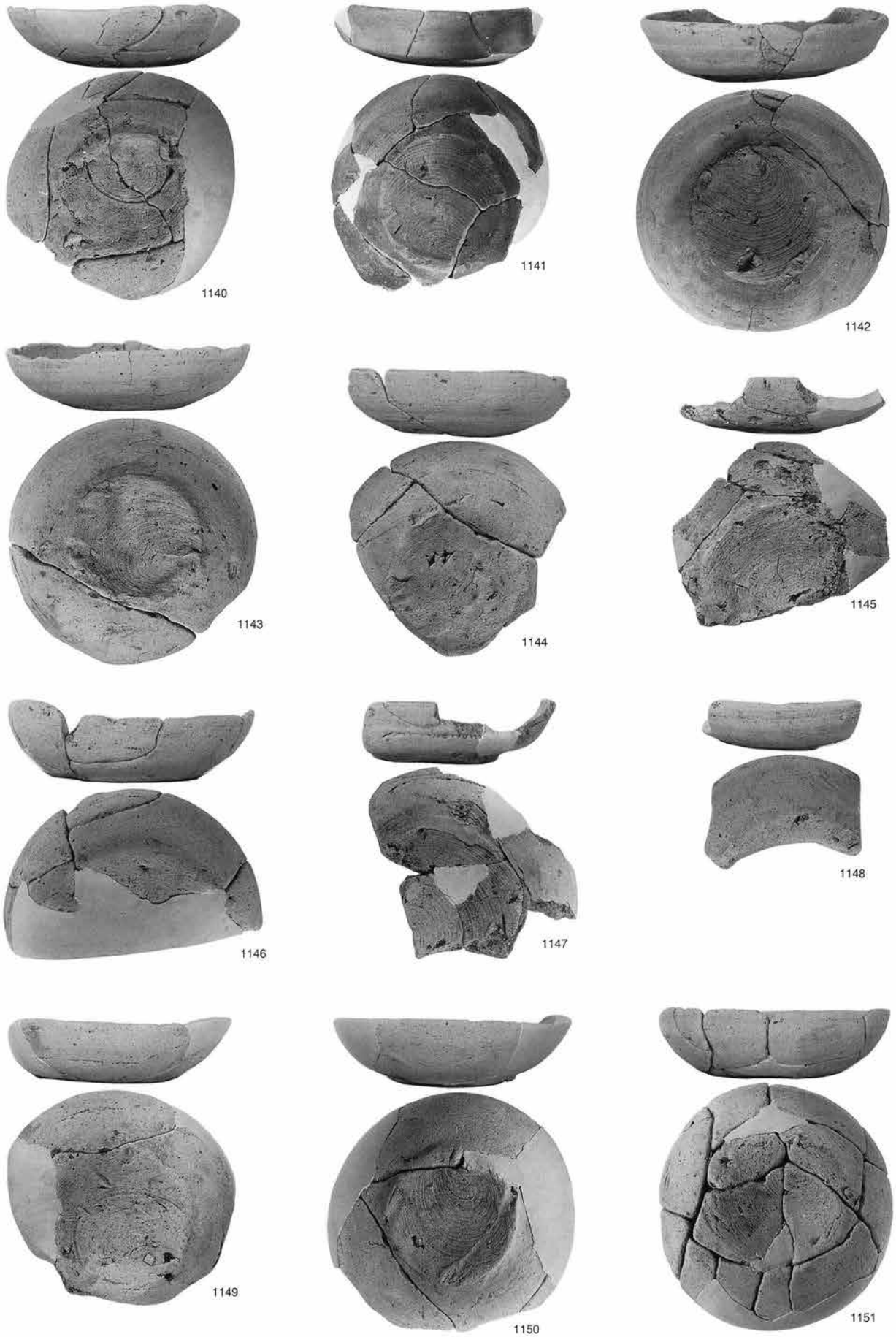
1123

1124

写真図版106　12世紀のかわらけ⑦



写真図版107　12世紀のかわらけ⑧



写真図版108　12世紀のかわらけ⑨

1152

1153

1154

1155

1156

1157

1158

1159

1160

1161

1162

1163

1164

1165

1166

写真図版109　12世紀のかわらけ⑩

1167

1168

1169

1170

1171

1172

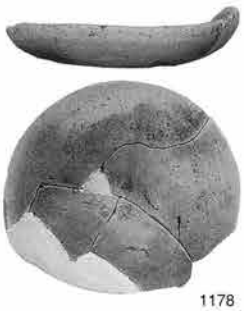
1173

1174

1175

1176

1177


1178

1179

1180

写真図版110　12世紀のかわらけ⑪

1181

1182

1183

1184

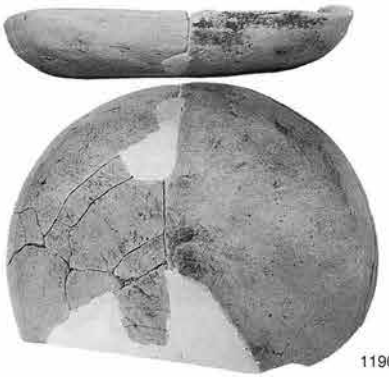
1185

1186

1187

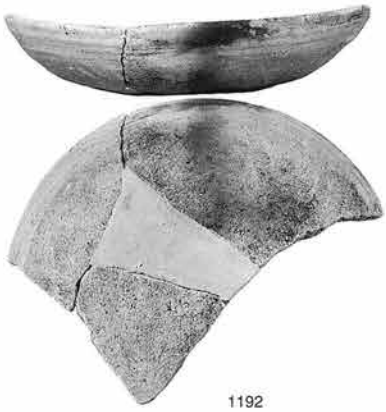
1188

1189


1190

1191

写真図版111　12世紀のかわらけ⑫


1192

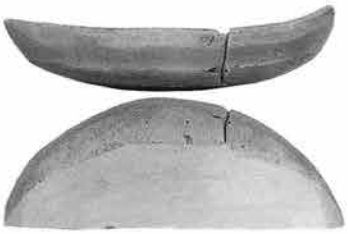
1193

1194

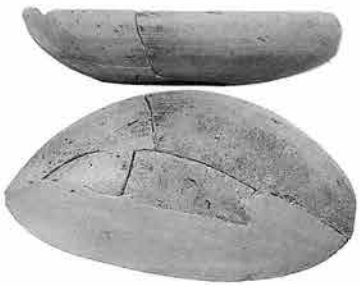
1195

1196

1197


1198

1199


1200

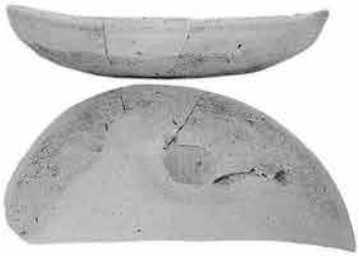
1201

1202

1203

写真図版112　12世紀のかわらけ⑬

1204


1205

1206

1207

1208

1209

1210

1211

1212

1213

1214

1215

写真図版113　12世紀のかわらけ⑭

1216

1217

1218

1219

1220

1221

1222

1223

1224

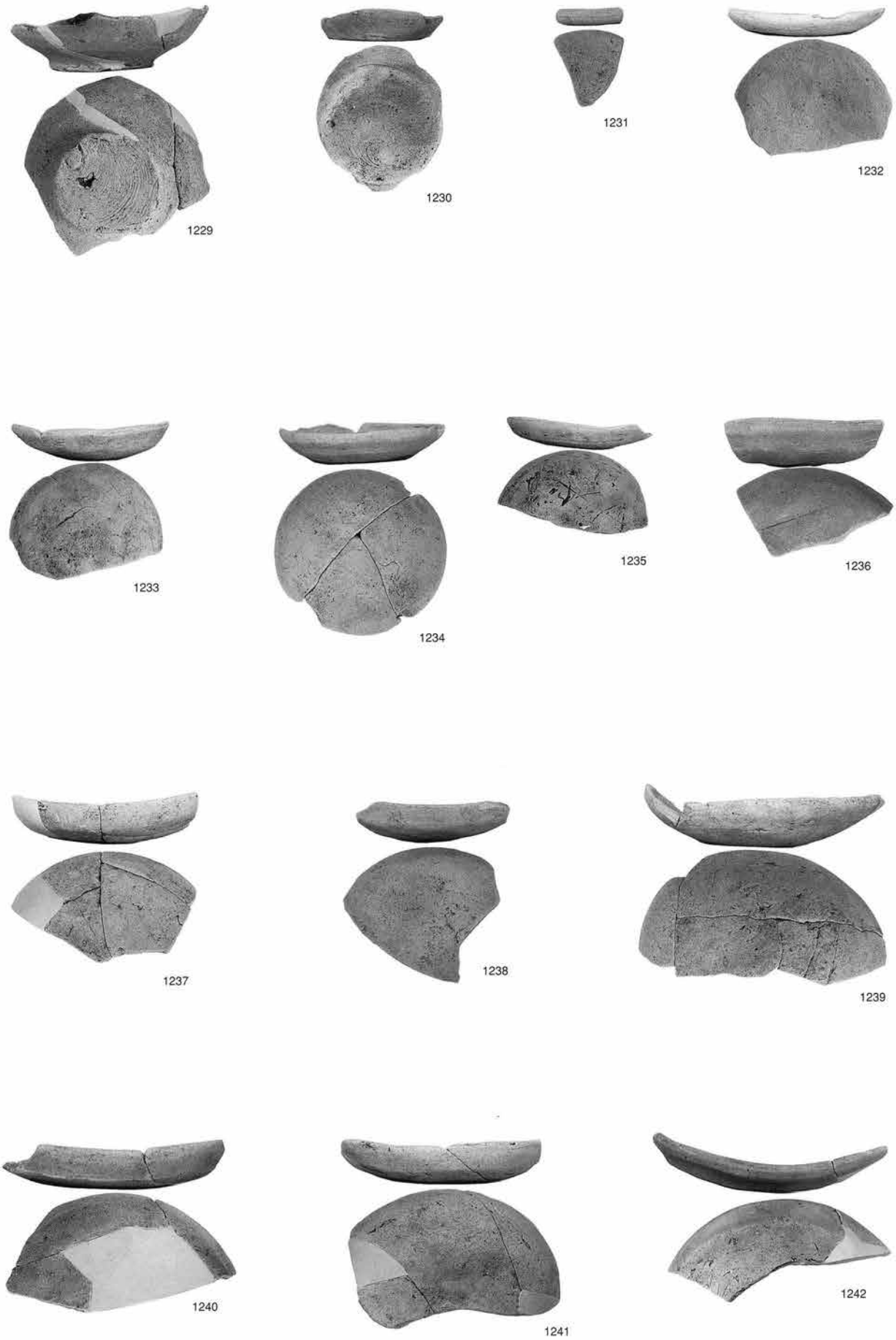
1225

1226

1227

1228

写真図版114　12世紀のかわらけ⑮



写真図版115　12世紀のかわらけ⑯

1243

1244

1245

1246

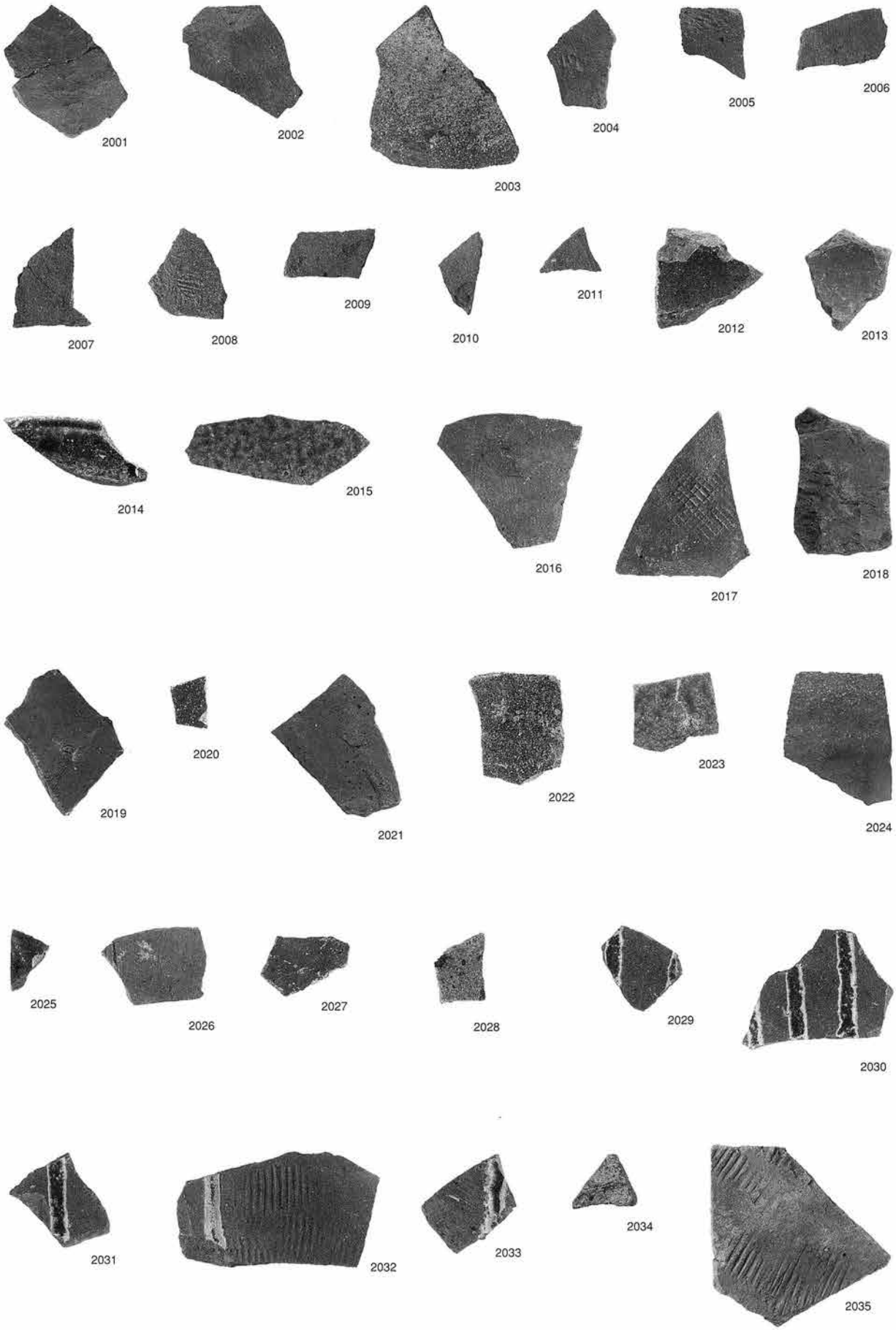
1247

1248

1249

1250

写真図版116　12世紀のかわらけ⑰



写真図版117　12世紀の国産陶器①

2036

2037

2038

2039

2040

2041

2042

2043

2044

2045

2046

3001

3002

3003

3004

3005

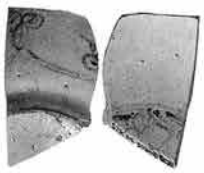
3006

3007

3008

3009

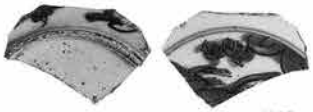
写真図版118　12世紀の国産陶器②　12世紀の中国産磁器


4001

4002

4003

4004


4005

4006

4007

4008

4009

4010

4011

4012

4013

写真図版119　中・近世の陶磁器

5001
5002
5003
5004
5005
5006
5007
5008
5009
5010
5011
5012
5013
5014
5015
5016
5017
5018
5019
5020
5021
5022
5023

写真図版120　鉄製品

6001

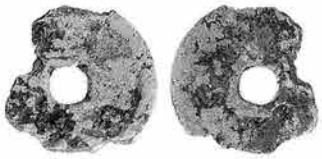
6002

6003

6004

6005

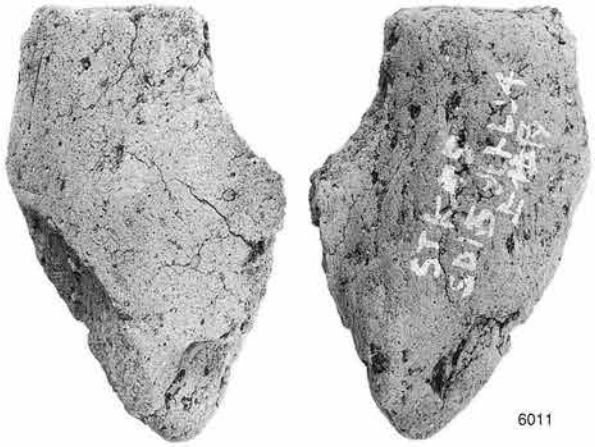
6006


6007

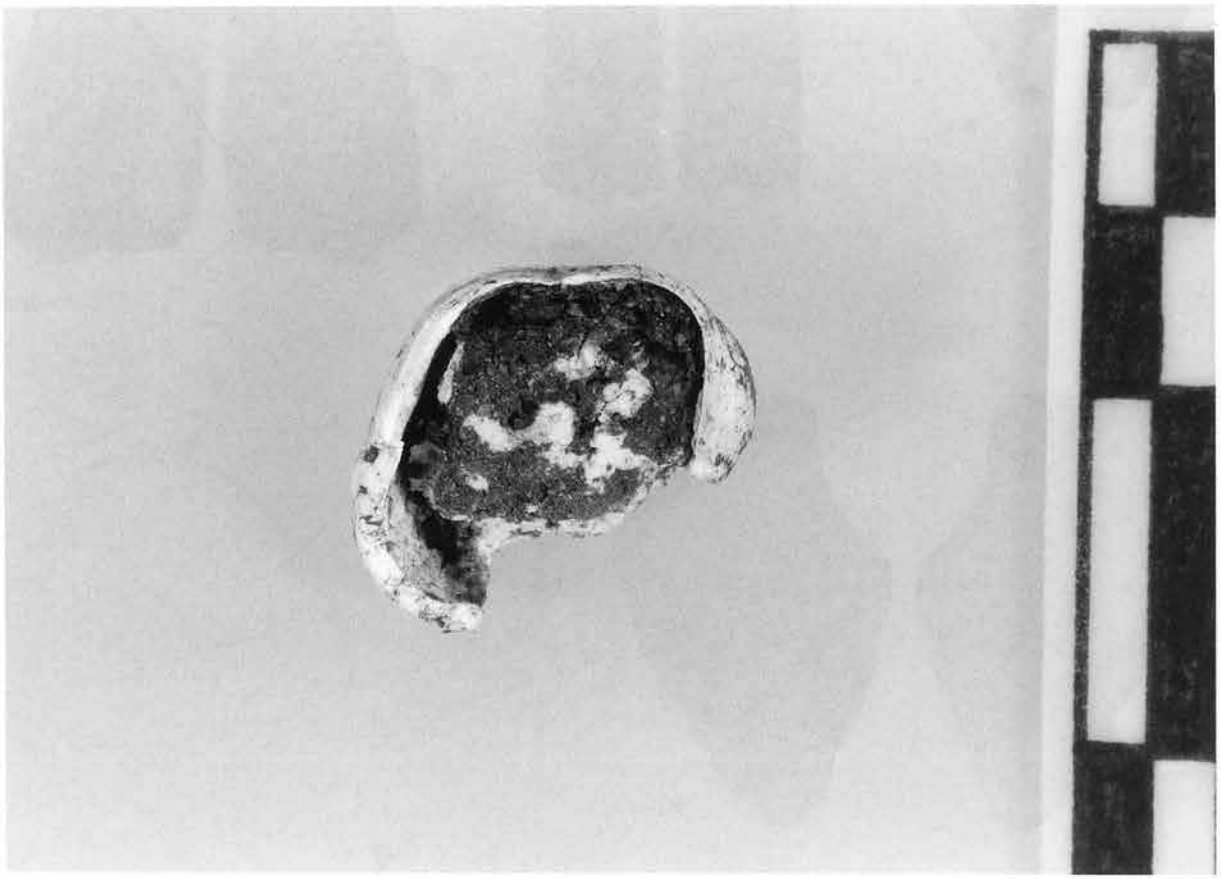
6008

6009

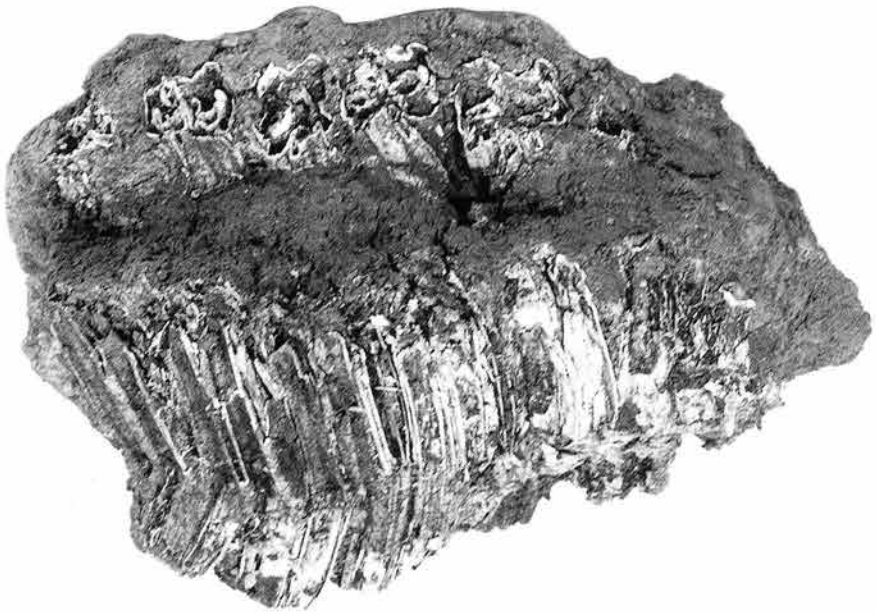
6010

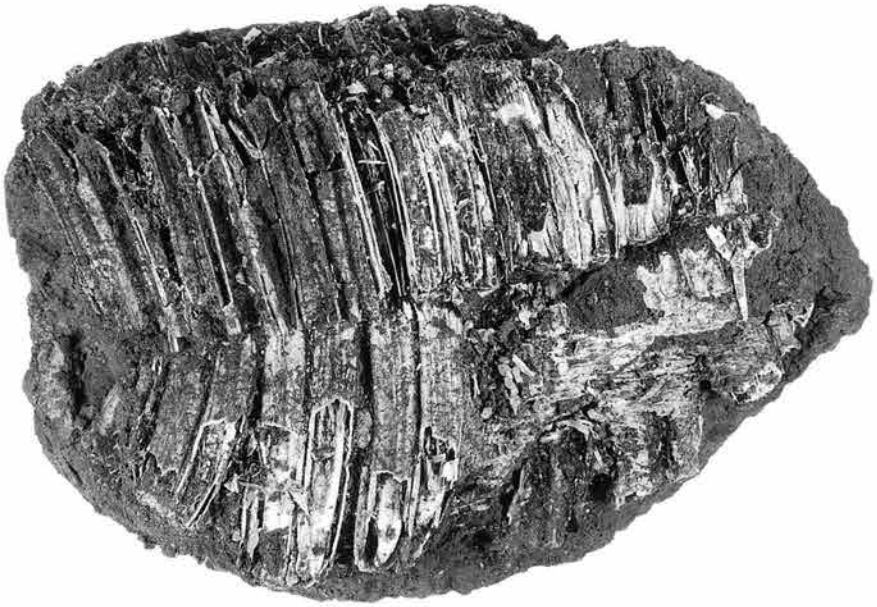

6011

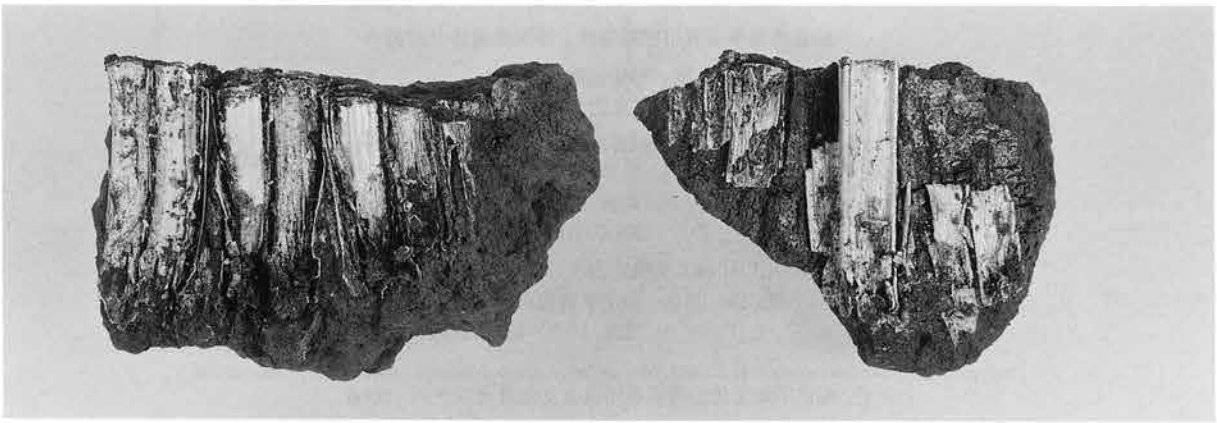
写真図版121　金属製品　土製品



写真図版122　SD１西出土人の歯







写真図版123　SD１西出土馬歯、骨

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第523集

六日市場・細田・接待館遺跡発掘調査報告書

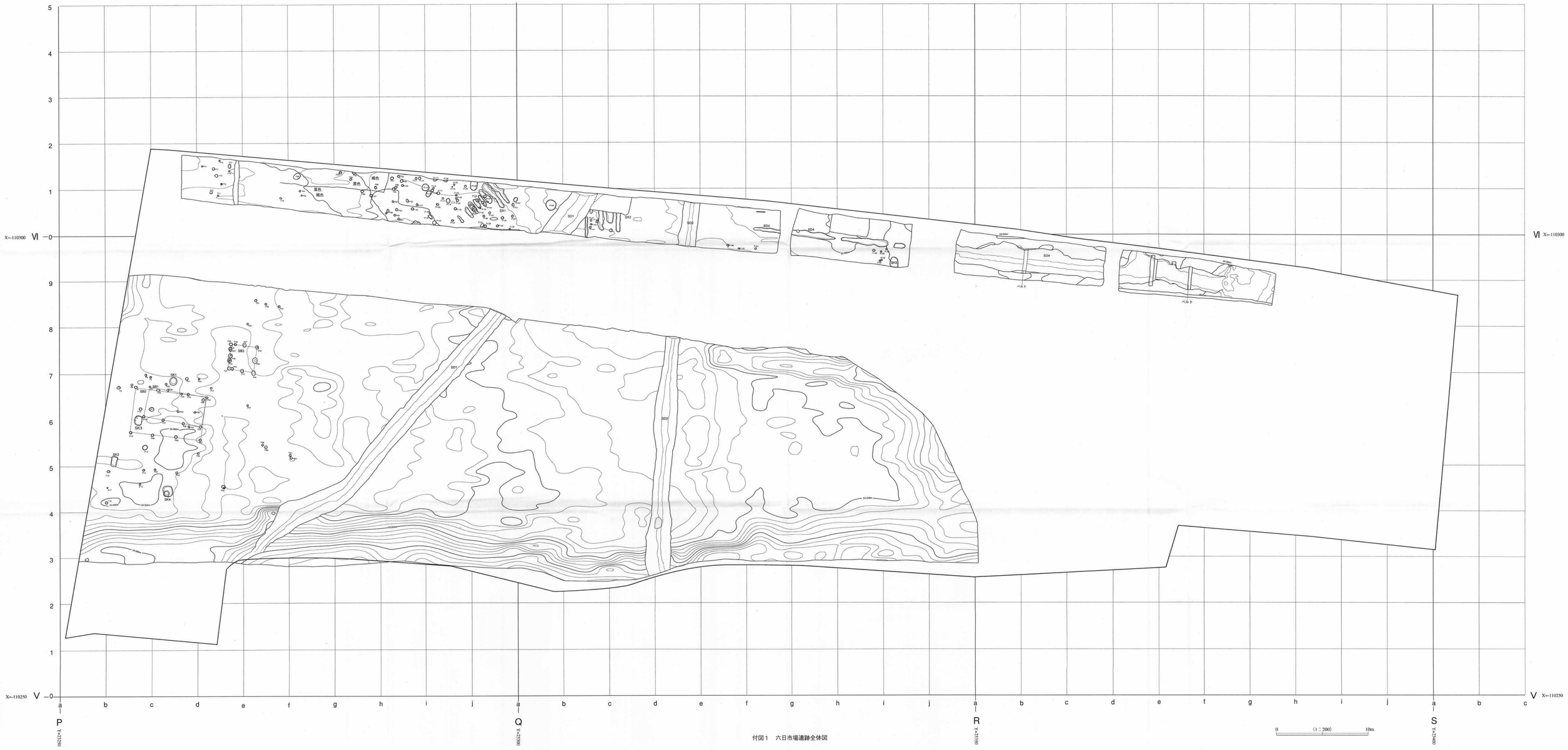
一関遊水地事業衣川左岸築堤工事関連遺跡発掘調査

印　刷　平成20年３月12日
発　行　平成20年３月17日

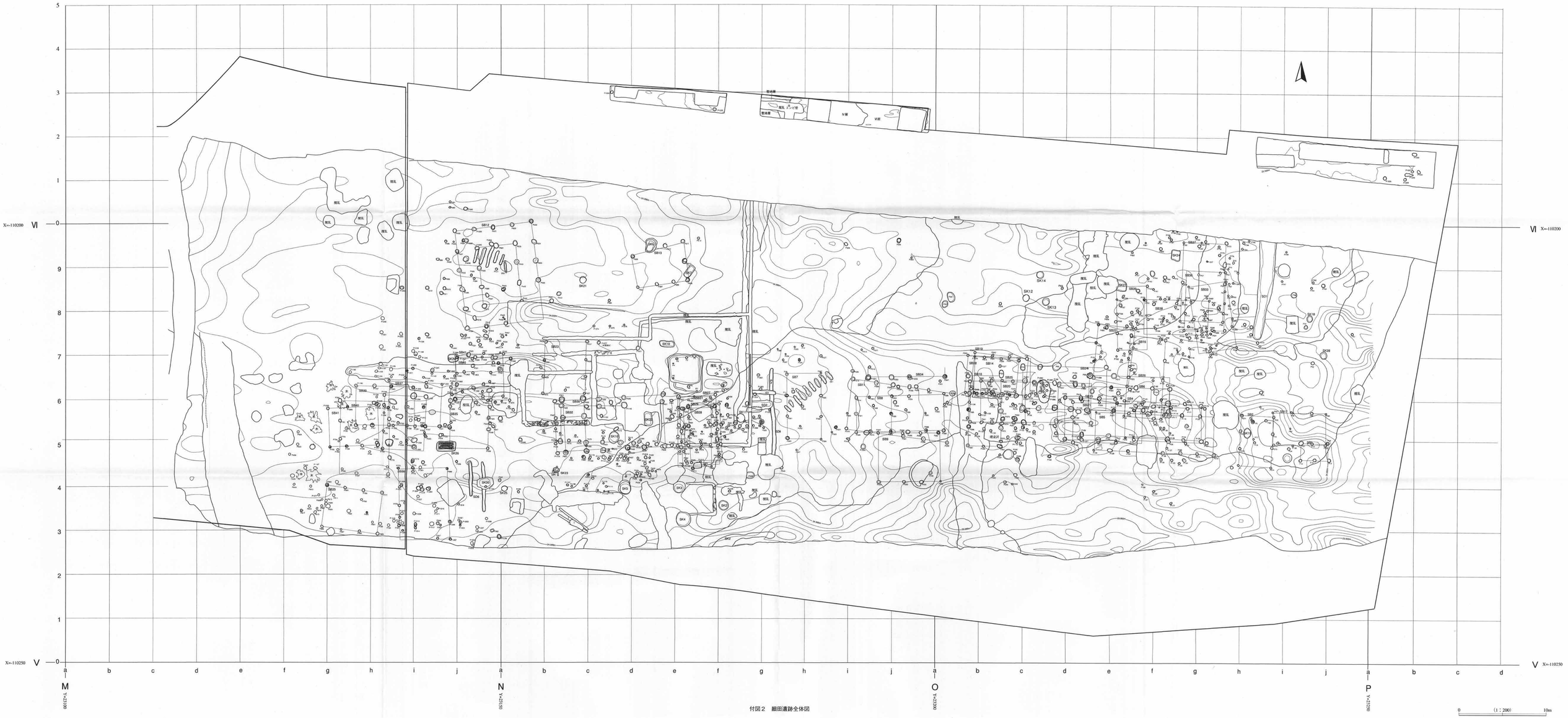
発　行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話（019）638－9001
FAX（019）638－8563

印　刷　川口印刷工業株式会社
〒020－0841　岩手県盛岡市羽場10－1－2
電話（019）632－2211

© ㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2008



付図1　六日市場遺跡全体図



X=-110200 VI
X=-110250 V
M Y=23100
N Y=23150
O Y=23200
P Y=23250
0 (1：200) 10m

付図２　細田遺跡全体図

付図３　接待館遺跡全体図